有島武郎全集　第七卷

一九二二年（大正十一年）七月
信州木崎にて撮影

第七巻目次

一九二一年

一九二二年

一九二三年

附錄

有島武郎全集 第七卷

評論・感想集（其三）

一九一二年

雜信一束

第一信

Ａ兄

正月の三日の午後に妹の所へ行つてゐたら嘗て覺えのない惡寒を感じたので家に歸つて床に就くと、夜になつて三十九度二分といふ熱になつてしまつた。で五日の日に藝術座の劇を有樂座で見ようとS君と約束したのも無駄になつて、切符を家のものにやつて見せにやつたら、六時頃にその男が慌てたやうな顏をして歸つて來た。座の前に大きな張札があつて、「松井須磨子死去につき」云々と書いてある、その周りにその日の觀覽者が集つて、わい／＼と騷いでゐたといふのだ。而して夕刊賣りの手には「須磨子の自殺」といふ文字を赤インキで大きく書いた紙がぶら下げられてゐたといふのだ。私の熱のある神經は可なりひどい衝動を受けた。意外のやうにも思つた。行きつく所に行つたなとも思つた。

その夜おそく私は又命尾壽六先生の訃音に接した。命尾先生といつては世間の人は知るまいが、先生は謠曲道の耆宿としてその道の人には敬畏を以て仰がれた老人だ。二日に病床を訪れた時早晚いけないなと思つたから、その訃報は須磨子のそれに對する程意外ではなかつたけれども、非常に名殘りが惜しまれた。病氣でさへなかつ

たら、臨終にも間に合つたらうにと思つた。

六日の日は少し曇つて風が寒かつたが、私は熱感を覺えながら、むさ苦しく生え延びた鬚をそのまゝに、頸のまはりに三角巾をまきつけて、十一時頃人力車で藝術倶樂部に出かけて行つた。藝術座が去年私の「死とその前後」を試演した時度々出入したので、その建物は可なり私に親しいものだつた。事務所には顏を知つた座方の人がゐて、外套と帽子とを預かつてくれた。觀覽席の戸を開けて中に入ると座員の二三が卓をひかへて椅子に腰かけてゐた。私の劇で醫師になつた人も、婆やになつた人も、影人になつた人もゐた。觀覽席には飛び〳〵に座布團が置いてあつて、その間に火のかん〳〵熾つた火鉢が据ゑてあつた。私はその座布團の一つに坐つて火鉢に手をかざした。

這入るとすぐ氣附いたのだが、舞臺は私の劇の夢幻の場面に用ゐた黑布で被はれてゐた。觀覽席から階段になつて昇つて行くと、そこに白布で包んだ寢棺が置いてあつて、その下には故人の寫眞が二枚飾つてあつた。その後ろの黑布の壁面には、ノルマン型のがつしりしたカンデラァブラが一對取り附けてあつて、それに四つの大蠟燭が、ほろ〳〵と黃色い焰をあげて搖ぎ燃えてゐた。その焰が私には一番美しい印象を與へた。しかつめらしい席に出ると妙に氣がおくれて、自然になり惛い私も、そこには思つた程人氣がなかつた爲め、極めて靜かな心で棺の前に坐る事が出來た。香を薰じようか、線香を上げようかと一寸迷つた末に、線香を上げる事にした。香爐には短い長い線香が七八本靜かに細い煙を立てゝゐた。私は心から頭を下げた。

私はそれから命尾先生の所に行つた。牛込の加賀町の或る路次を這入つて突き當つて右に曲るとさゝやかな門とさゝやかな格子戸造りの入口がある。そこに續いた六疊の部屋にはさゝやかな机が置いてあつて、袴をはいた門弟が受附をしてゐた。例の流れのやうな暗い茶の間を通りぬけた南向きの八疊には二三の弔問客がゐて、その

隣りの間に先生の遺骸は横へられてゐた。年老いた奥さんは老いの涙か悲しみの涙か、眼の縁をうるましながら、にこ〳〵して私に挨拶された。まだ準備が出來ないのだといふので、先生は布團の上に花茣蓙を敷いて、飛白の單衣を着て、羽二重の黒紋付を羽織つて仰向けに寢て居られた。合掌した手が板のやうに平べつたくなつた胸の上にによきんと持ち上つて、痩せたその顏は枯木のやうにすが〳〵しく嫌味なく、簡素な大きな凸凹の面が、名人の作に成る翁の面を思はせた。先生の側には長脇差が半分鞘を拂つて置いてあつた。死床の後方には、獵に使ふ隼をすつきりと描いた屛風が倒さにもせずに立て廻はしてあつた。白衣の看護婦が二人恭しく坐つてゐるのが不調和に見えた程、先生の周圍には江戸の能役者といふ影が濃く漂つてゐた。僕はそこでも三本の線香を上げて心から頭を下げた。

今日はこの位にしておかう。

（一九一九・一月十三日）

第二信

A兄

古くても新しくてもいゝ、眞劍の人は香ばしいものだ。凉しいものだ。

須磨子が私の劇の稽古をしてゐる時、急所々々に來ると何時でも言葉通りに涙を流してゐた。ある時つき合つてゐた座員の仕草の呼吸がしつくり行かないで、二三度同じ所を小返しゝた時、須磨子は例の癇を募らしてゐたが、强い言葉でいきなり「お前さん泣いてゐないぢやないか」ときめつけた。それを聞いた僕は「ふむ」と思はず會心の聲を脣から漏らさせられた。

開場の二日前の稽古の如きは激烈なものだつた。夕方から始めて翌朝の四時過ぎ五時近くまで休みなしに繰り返した。作者なる私でさへ少し草臥(くたび)れて來、座員の中にはへと〳〵になつた人もあつたが、須磨子は欠伸(あくび)一つしなかつた。體質の强さにも關係があるだらうが、私は彼女が自分の藝に對して、藝そのものに對して本氣な執着を持つてゐるのを看取した。その席にゐた芝居道の通人は、こんな猛烈な稽古は東京に劇場が始まつて以來の事だらうとさう云つてゐた。僕は泣きはらしたやうな眞赤な眼をして割引電車で家に歸つた。

命尾先生の家で、そこに列席してゐた人から思ひ出話として聞いた事だが、先生がまだ引退しない間の事、ある雜誌に論說が出て、そこに寶生流の謠ひ方が近來色々に變化するが、それは已むを得ないばかりでなく斯道の發展の爲めに慶賀すべき事だといふやうな事が云つてあつた。それを先生が見て非常に腹を立てた。元來文字のある人ではなかつたが、是非共駁論を書くと云つて、熟語字典を三冊も四冊も買つて苦心慘憺の末に一文を草した。その大體の趣意によれば、謠曲といふものは大成された藝術で、拔き差しの出來るやうなものではない。謠曲にたづさはるものゝ苦心と努力とは、旣定の表現法をいかに完全に練達するかにある。夢にも變易すべきものではない。若し異論があるなら何時でもお相手になる。その對決は謠曲道の神聖道場なる舞臺の上で屹度致さうといふのだつたさうだ。事は面倒になつた。こんな文が公けになる日になると、思ひも寄らぬ面倒が起るに違ひないといふので、仲に立つ人があつて、その論說を書いた人と先生とを支那料理の偕樂園に招(よ)んで、意志の疏通を計らうとした。先生は何も知らずにその席に出て來られた。やがて、論說を書いた人が自分の意見を布衍して謠曲なるものゝ意義を說明しにかゝると、先生は忽ち色を作(な)して、「謠曲の事についてはあなたより私の方が不肖ながらよく心得てゐる。あなたのお指圖を受ける謂(いは)れは御座らぬ」といふかと思ふと、自分の前に在る珍肴(ちんかう)を盛り上げたちやぶ臺をがらりと前に押しやつたまゝふいと座を立つてしまはれたさうだ。

先生の高弟に中野武營氏がゐた。中野氏は中々の駿足であつたのみならず、先生の財政の事まで親切に面倒を見て上げてゐたので、先生は中野氏のいふ事なら大抵の事は快く從つて居られた。所が中野氏は先生が高齢で前途の短いのに、斯道の奥義が誰にも傳へられずに滅びて仕舞ふのを非常に惜しいと思つて、ある時「あなたの百年の後には謠曲正流の奥義が滅びる恐れがあるから、お達者の中に然るべき人に口述しておかれたら後生を益する事が多いと思ふが如何だらう」といふ意味を云つて見たさうだ。先生はいつもの通りにこ〱とそれを聞いて居られたが、中野氏の言葉の終らぬ中に居住ひを直して、「口で傳へたり筆で述べたり出來るやうなものなら自分はこの年までこんな苦勞はしてゐない。これだけはあなたのお言葉だが御返却する」ときつぱり云はれたので、さすがに世慣れた中野氏も赤面して頓と二の句がつげなかつたさうだ。これは僕が中野岩太氏から親しく聞いた話だ。

先生が私の父に謠を教へられたのは始終側にゐて聞かされてゐた。むづかしい節廻しに來ると、顔をいがめ首を振り立てゝ四度でも五度でも丹念に繰り返して教へられる。それでも父の方で呑み込めないでゐると、ぐつと口をつぐんでしまふ。父がやり直すと「むゝ」と首を振る。何度でも何度でも眞赤な顔をして眼を光らしながら首を振られる。それから先きは決して教へられない。「先生にあれをやられると腋の下に冷汗が出る」と、この上もない負けじ魂の父も閉口し切つたやうに禿げた頭を撫で廻して述懐したものだつた。

死水を取つた人々の云ふ所によると、先生は死際まで唇を尖らして謠を歌つて居られたさうだ、勿論聲は出なかつたが。嗣子にあたる人は「おやぢが謠を歌ふ樣子をすると何んと堪へて見ても泣かずにはゐられなかつた」と云つてゐた。

今日はこの位にしておかう。

（一九一九・一月十四日）

第三信

A兄

須磨子の死は何んといつても彼女の性格が引き起した破産だ。一面識しかなかつたのだけれども、僕は須磨子の性格をすぐ呑み込む事が出來たやうに思つた。それ程須磨子の性格は露骨で特異だつた。露骨で特異である程強く固かつた。而してそれは歪んでもゐた。訓練のないものだつた。山野の氣に滿ちてゐた。大抵の力は彼女のこの特質を變へる事が出來なかつたに違ひない。島村氏の忍辱な愛の力でも如何する事も出來なかつた。須磨子自身それを如何する事も出來なかつた。恐らく一番よくその性格の缺陷を自覺し、その缺陷に苦しんだのは須磨子自身ではなかつたらうか。しかも彼女はそれを如何する事も出來なかつたのだ。須磨子はこの缺陷を彌縫する事が出來たら自分の有する物質的所有を殘らず抛り出しても悔いなかつたらうと思ふ。それさへ然し無益だつた。島村氏の死後、須磨子の性格は自分の周圍からどん〳〵味方を離れさせてしまつた。須磨子を守り育てるべき人人も、須磨子に或る割引を加へた上で、須磨子と交渉した。須磨子の性格を頭から改造し得る人もなく、ハンデキャップを附けずに須磨子と仕事を共にしようといふ人もなかつた。須磨子と人々との間には常にその性格が介在してゐた。これがどの位彼女を不幸にし絶望的にしたらう。而して最後に死のみが彼女の性格を撥無して彼女と堅く手を握つたのだ。

高い意味であれ、低い意味であれ、この消息は存分に悲劇的だと僕は思ふ。運命と個性とのつかみ合ひが僕には感ぜられる。

その意味に於いて須磨子は憫然な女だ。

A兄

然し僕は須磨子を惘然な女だとは云ひ得ない。僕自身は破産に導く性格でもいゝ、きつぱりした性格を持つてゐるだらうか。多くの人は持つてゐるだらうか。性格を持たないものが性格を持つたものを批判するのは、眼の無い人が眼のある人を批判するやうなものだ。眼の無い國で通用する標準は眼のある國では通用しないかも知れないのだ。その批判は畢竟無駄だ。

無性格者の群が造り出した倫理標準、道德批判――それは當然無性格者の群に向つてのみ適應さるべきものだ。

A兄

僕は知れ切つた事を注意しておきたい。性格とは主義を指すのではない、主張をいふのでもない。固より循習によつて築き上げられた日用的な習慣的な假皮的な屬性でもない。それでは何んだ。僕自身よく定義する事を知らない。然し僕にはそれが何であるかを感ずる事が出來る。それを云ふのだ。

今日はこの位にしておかう。

（一九一九・一月十五日）

第四信

A兄

もう少し云はないと承知が出來ない。

社會を安全にする爲めには過去から堆積して來た重い約束がある。これを踏み越えさへしなければ、社會の形勢が變化しない限り最も安全だ。

社會を變化させる爲めには個性の中に自ら生み出された性格がある。特異な性格は往々にして社會の約束を踏み躙る。而して社會の形勢を根本的に變化する。そこに甫めて社會が新境地を拓くのだ。ある時はそれが進歩であり、ある時はそれが不幸にして退歩でさへあり得る。唯如何なる場合にもそれは停止ではない、轉歩だ。社會の安全――それのみが僕等の唯一の願だらうか。動かない水は一番安全だ。然しその水は遂には腐る。私達は本能の如くに轉歩を要求する。轉歩を要求しない社會は老朽自ら滅び行く社會のみだ。

苟くも轉歩を要求する以上は、變化を要望する以上は、性格の尊嚴を認めなければならない。而してある性格が社會を進歩させ退歩させると見るのは畢竟、偶々その社會の現狀に好都合であるか否かから割り出された淺薄な功利的見地だ。新しく現はれた性格は既存社會の準繩を以て律する事は出來ぬ。その性格はそれ自身が價値であらねばならぬ。但しこの結果として、今まで成り立つて來た人間の生活なるものが根柢から臺なしになつて仕舞はないとも限らない。

だから問題は割合に簡單だ。社會の安全を第一にする者はその社會が蓄積した約束を以て性格を裁け。社會の進轉を庶幾するものは性格の尊嚴を認めてその眼で新しく生活を見よ。たゞ是れだけの事だ。

それは人の好き〲だ。どちらがより正しいといふ事は恐らくはあるまい。

私は私だけとして性格を社會的約束の上位に置いて見るものだ。何故なら私は人生の可能性を信ずるからだ。人生の本能は人間を進歩させる事を信ずるからだ。從つて人間の本能に根ざす性格はその consummation に於て人間をより善くする事を信ずるからだ。

今日はこの位にしておかう。

（一九一九・一月十六日）

第五信

A兄

僕は柄にもないいきまき方をしたやうだ。この通信では名人の洞察力について語らう。命尾先生は名人といつていゝ人だつたと思ふ。先生の謠に耳が慣れて見ると、習練のみでは到り得ない境地があるのを感ずる事が出來た。あの人の聲一つで座敷の空氣が四季を變へ、剛柔を更めた。

僕は先生とよく閑談をした。先生が乘り氣になつて話し込まれると、汲み盡せないやうな滋味が言葉と言葉の間に捕へられる事が往々あつた。それ等の中で僕の記憶から今浮び出た一挿話は先生の話された上野の戰爭のそれだ。

その時先生は三枚橋の近所に住まつて居られたさうだ。戰の噂で女子供は遠くに避難してしまつてゐたが、朝がけからぽん〳〵鐵砲を打ち出す音が聞こえて、やがて大雨になつたさうだ。切り合ふ刃物の音や矢叫びまで手に取るやうに聞こえるので、若盛りの先生は面白半分に屋根に上つて見物しようとすると、いきなり銃丸が風を切つて身近かを通り過ぎたので、一たまりもなく家の中に逃げ込まれたさうだ。家の前を擔架に乘せられた負傷者や戰死者が小休みなく通つたさうだ。その物音といふものは一體如何してあんな大きな音が出るかと思ふ程激しかつたさうだ。それが又そんなに騷々しい癖にしーんと思はれる程淋しく靜かにも聞かれたさうだ。先生がその譯を考へて云はれるには、尋常の騷動なら必ず女子供が混つてゐる——地震だとか、火事だとか——所が戰爭になると、女切れと子供切れは藥にしたくもない。その爲めに物音はすさまじいながらに、しーんとして淋しいのだと云はれた。僕はそれを聞いて思はず膝を打たんばかりになつた。先生の話を聞いてゐると、戰爭といふも

のゝ騷々しい淋しさが、眼に見るやうに描き出されたからだ。先生が筆を執る事が出來たら、そのまゝ立派な文學者になれると心竊かに感歎した。名人といふものにはこれ程の洞察力がちやんと備はつてゐるのだなと思つた。

この話はつまらないか知らん。

まだ書きたい事はあるが、夜が更けたから是れで打ち切る事にする。御機嫌よう。

（一九一九・一月十七日）

第六信

その時共にありし諸兄へ

去年の秋の半日の逍遙からの思ひ出を兄等に書き送る事を許せ。

それはどこを見ても雲の一片すら見出し得ぬ程晴れ渡つた闌はな秋だつた。私達四人は京阪電車内のいつも通りの雜閙から辛くのがれ出て男山八幡宮に詣つた。京都の近郊を歩く時殊に感ずる事だが、古蹟舊址といふやうな所に殘されてゐる石階は概ね踏み心地のいゝものだ。近頃建造される石階には人體の運動と安定といふ事を無視してゐると思はれるものが多い。あるものは幅が廣すぎる。あるものは高さが高過ぎる。段數が少し多くなると、かゝる微細な不均衡がひどく體に應へて感ぜられる。この男山などに來て見ると、ほと〳〵その理由を見出すに苦しむ位、石階の構成が足の揚げおろしに適つて出來てゐる。殊に本宮の正門からなだらかに流れ下つてゐるそれの如きは、人に石階を踏み登りつゝあると云ふ思ひを惹き起させない程完全だ。正確な建築數學を有する現代が、そんな事位で過去に蹴おとされると云ふのは私には不思議に思はれる。それは過去の人達の心の親切が現

代の建築師の數理的知識に打ち勝つてゐるのか、或は現代の人達の窮迫した生活がそんな點を考へて見る餘裕をさへ與へないのか。奈良の二月堂に登る石階に刻まれた波形や唐草形の紋様——それは誰の戯れにした業か知らないけれども、勿體ない程に思ひながら、そこを登つて行く時にも、私は昔の人の心の匂ひを嗅ぎ得たやうに思はずにはゐられなかつた。それ等の事を思つて見ると私達は可なり不幸な時節に生きてゐるもの達だと云はなければならないだらう。

八幡宮の廻廊と朱塗りの圓柱の列、それも私には感銘の深いものだつた。總ての造作がしめやかに顧み合つて、少しも出過ぎた所がない。而していぢけずにのび〳〵してゐる。それは長い傳統と克明な工夫とが一人の敬虔な工匠の個性を濾過して現はれ出たやうな姿だ。あれを建て上げた時のその工匠の滿足を私は美しく想像して見る事が出來る。この八幡宮の建築ばかりが特別に拔群だと私は云ふのではない。然し京畿の所在に、赤松や青竹に圍まれて寶玉のやうに散在してゐる寺社建築は、いづれもそれを建て上げた人の良心的な滿足を十分に裏書きして今に殘つてゐる。觀る者がそれを危げなく感ずると云ふ事は、卽ち不知不識にこの地方が人の心を牽き附ける原因となつてゐるのを知らなければならない。

正しい理解——それは結局心の問題であるが——のみが本當に生活には必要な事なのだ。凡てのものが過ぎ去る間に、正しい理解のみが人類の存在する限り、その內にあり、その外にあり、その過去を完成し、その未來を導いて行く。一列の石階、一棟の建築が私にそれを保證する。

兄等よ。私は更にこの事について思ひ出を辿つて見よう。

私達はそれから裏山傳ひに橋本の宿の方に山道を下つて行つた。白茶けた花崗岩質の山膚の處疎らに稚松や雜草の叢立つてゐるのを見つけると、T兄は生れ故郷の濃尾の地を思ひ出してゐた。而して、さう云ふ風物の忌む

べきを說いた。常綠の松の木立を見るとY兄は東北に在る家鄕の櫟林の落葉をなつかしんだ。そこにも兄等の性格の基調を見るやうに私は思つた。T兄の漂浪者らしく過去から離れ去らうとする曠爽(かうさう)な氣分。Y兄の長者らしく物を愛撫しようとする暖かい心。

橋本の宿はY兄からの噂で聞いてゐたやうに珍らしい所だつた。昔、京から大阪に上り下りした淀の河舟がここにこれだけの狹斜の地を作り出したのだらう。その當時の榮華の跡は運河に沿つて建て列ねられた幾棟かの靑樓に殘つてはゐるが、それはもう秋の草叢のやうにさびれ返つてゐる。私達は淀川の堤防傳ひにその軒なみを見やりながら步いた。右に淀川の本流が漾々(やう〳〵)として淸く流れて行くと、左には堤の下深く運河の死水が、冴え〴〵した秋の空の色をうけてもなほどす黑く澱んでゐた。その水の底からは、數種の水藻が、葉の表に沈澱した泥土を拂ひ落しもせず、靡き流れもせず、眞直にうざ〳〵と生ひ繁つてゐた。この僅かばかりな水にこそはさすがの自然も老いほうけて見えた。事もなげに唯じめ〳〵と朽ち果てゝ行くやうに見えるそのあたりの景色には、大きな自然が小さな叛逆者を唯一踏みに踏み躪つて行く無慈悲が漂ふやうに見やられた。さう云ふ事を平氣でして退けるの自然を、私達は如何(どう)思ふと云ふ事もなかつた、素直(すなほ)な傍觀者らしい心持で、私達は地の一隅に巢喰つた人の生活と大自然との葛藤を眺めながら堤防の上を行つたり來たりした。大演習の飛行機が京都から大阪の空へ幾臺も飛んで行くのが見やられた。私が何か、時代からも自分自身からも切り放されたやうな心持になつてゐたのを兄等は知らなかつたらう。

やがて河の右岸が私達の注意を牽き始めた。そちらの方には見たいと思ふ二三の寺と、業平及びその母が住んでゐたと云ふ長岡とがあつた。渡船のある所は、河の淺瀨に長く築き出したごろた石の小道で知る事が出來た。その小道の端れにかゝつてゐた船が丁度出ようとしてゐる所だつた。私達は渡し守の遠くから急げと呼び立てる聲

にせき立てられてひた走りに走つたお蔭でやうやくそれに乘ることが出來た。それに乘り遲れてゐたならば、私は船中のある一場面を見もし聞きもせず、過してしまつたのだ。而してその次ぎの船でどんな思ひもかけない場面に出遇つてゐたかも知れないのだ。

底の淺い幅の廣い可なりな大きな渡船は渡し守の棹に促されて徐かに上流の方へ上つて行つた。兄等は若い人達らしく一かたまりになつて、高らかな聲で笑ひ興じてゐた。私は上流の景色に見とれて、兄等には後ろを向けて、獨り舳首の所に蹲つてゐた。船は進むともなく動いてゐた。それはやゝ西の空に晝月がはつきりと描き出される程日の廻はつた時刻だつた。

ふと私は後ろの方で、兄等の談笑の聲が鎭まると共に、渡し守と話し合ふ他の乘客の上方辯に注意を牽かれて振り向いた。私達の相客と云ふのは――それまでは碌々氣も附かないでゐたが――一人は橋本宿の人らしい五十恰好の大きな聲で物を云ふ男で、一人は愼しやかに受け答へだけしてゐるやうな三十前後の若者だつた。その人は京都からやつて來たと云ふ事が後で分つた。上方同士が、しかも昂奮したやうな調子で話し合ふのだから大部分私には聞き取れなかつたけれども、兎に角その話の內容が容易ならざる事であるだけは、會話を取り交してゐる人達の顏を見たゞけでも知れた。齡のいつた方の男はその邊の文明批評家とでも云つたやうな人で、ずばずばと遠慮なく自分の意見を大聲で發表し、船頭にも若者にも首肯させずには置かなかつた。私はその三人の人達が餘りに無氣になつてゐるのに思はず釣り込まれてゐたので、話の分らない所と、それまで續けられてゐた會話の筋とを兄等に尋ねたのだつた。兄等が話の緖口を私に知らせてくれたので、私は始めてその人達の言葉を追ふ事が出來たが、それに依ると、若い方の男は飛んでもない凶報に接して京都の方の店から暇を貰つて實家に駈けつけようとする所なのだ。實家には兩親と、養女にあたる娘とがゐて、その娘はやがて船の中にゐる若者と結婚す

る筈になつてゐたに違ひないのだが、如何した原因か、その娘が養父を玄翁でなぐり殺して家に火をかけたと云ふ騷ぎなのだ。娘は勿論捕縛されて警察に牽かれてゐるらしい話振りだつた、村の文明批評家はなたまめ煙管をくゆらしもあへず、矢つぎ早にこの事件の批判に熱中した。私達まで何んだかその男に威壓されてしまつてゐた。「極道極まる大それた奴だ。あんな奴をお上でも生かしては置くまいが、二度とこの村に顏出しするやうな事があつたら、村の人達は一晩でも枕を高くして眠る事は出來ない。何んでもかんでもあんな方圖のない氣違ひは叩き殺してやらなければいけない」……さう云つたやうな事を滑らかな上方辯で力強く主張した。船頭は佛頂面をしながらも尤もと云ふやうに首肯くし、若者も控へ目に同じてゐた。五十男の文明批評家は船が彼岸に着くまで執念深く幾度も自分の意見を繰り返して聽手を說伏しなければやまなかつた。兄等も私もその話には輪廓を聞いただけで脅やかされてしまつたね。T兄やY兄は勿論の事、如何にも哲學者らしい冷靜なM兄までが、何んだかぢつとしてはゐられないやうな顏付になつた。

船が中洲に着いた。蘆が一面に細かい沙の上に茂つてゐた。T兄が飛び上る拍子に折角船頭が淺瀨に乘り上げさせた船が水の中に泳ぎ出てしまつたので、船頭はいきなり赫となつて、「船の乘り降りも知らない書生つぽだ」と云はないばかりに怒つたので、私等四人は恐縮してしまつたが、それでも私はまだ船頭にその話を詳しく聞き糺さうとする思ひを捨てる事が出來なかつた。私は恐る〳〵船頭に近寄つて質問して見た。船頭はさらぬだに私には解りにくい上方辯を怒りながら口の中でしやべるのだから、私には殆んど聞き取れなかつた。が、私はその判りにくい言葉の中からも、又心を驚かすやうな事を朧ろげながら知る事が出來た。それは矢張りこの渡場から程遠からぬ一つの村で、何か色戀の沙汰から弟が兄を慘たらしく撲殺したと云ふ一挿話だつた。中洲を横切つて又船に乘ると、例の文明批評家は、船頭の言葉尻を耳にはさんだものか、その噂に對しても嚴しい批判をやり出

した。「凡てこんな忌々しい事は女が蔭に潜んでゐる事だ。女一人のいきさつではゐるの殺すのと云ふ沙汰をするのは悪魔にでも魅られての仕業だらう。それ等の氣違ひ共は片端から嚴重に成敗をして貰はなければ、地道に生きて行かうとするものゝ立つ瀬がなくなる。何と云ふ業つく張りな奴等だらう」。さういつた意味の事を煽動的に云ひ募つた。自分に思ひも寄らぬ不幸の降りかゝつたかの青年は、興味なげに合槌を打つてゐた。船頭は五十男の言葉を無條件で肯定してゐるらしく見えた。

それ等の恐ろしい出來事の報告に耳を傾けてゐた私は、あまりにもかけ離れて閑寂な平和なその邊の秋の景色を不思議さうに眺め返さずにはゐられなかつた。恐らく眼のまはりに見え亙るそこらの村々の人達は、渡船の乘客と同じおびえた心持と激しい憎惡とを以て、この事件を眺めてゐるのだらう。謂はゞかの五十男はその邊の住民の心持を率直に云ひ現はしてゐるに違ひない。而してそれはさうあるべき事だ。

然し私にはそれだけでは如何しても滿足の出來ないあるものがあつた。あの大膽な文明批評家の宣告にそのまゝ同じさせない不思議な躊躇が私の心にあるのを見出した。

その時ふつと何の聯想もなく、私の頭には近松門左衞門と云ふ名前が浮び出た。さうすると私達の乘つてゐた渡船の中にかの大戲曲家も乘り合せてゐたと想像して見た。彼は必ずかの文明批評家からかの三十前後の無口な青年にその鋭犀な眼を注いでゐたらう。而してその青年に穩やかに話しかけながら、船を乘り捨てると、青年と一緒になつて、かの凶變の行はれた家の方に歩いて行つたらう。彼はあらゆる同情の眼を以てその無口な青年から收め得られるだけの事實を聞き取り、あらゆる同情の眼を以て、その燒け落ちた屋敷の隅から隅までを観察したらう。私は彼が何か思ひ入つたやうな顏付をしてその家を立ち去つて行く樣子までまざ〳〵と想像してしまつた。寂びれ切つた橋本の宿の旅籠屋に一夜を過す姿まで心に描いた。而してその翌日、彼は書き上げた一束の原

稿を持つてその地を大阪の方へ歸つて行くだらう。而して父を殺した上にも、住み慣れた故屋に火をかけた一人の女に關して、かの居丈け高な文明批評家の意見とは裏はらな仕組みの戯曲が發表されるだらう。而してそれがかの文明批評家によつて代表されてゐる輿論と立派に併立して、若しくはそれを壓倒して新しい輿論を世の中に植ゑつける結果になるだらう。

例へば門左衞門が小春治兵衞の心中を書き卸した時にも、上のやうな事情が實現されたのではなかつたらうか。私はそれを正しい理解のさせる業だと云ひたいのだ。

正しい理解は心の王國の勇ましい俠客だ、大膽な探見者だ。正しい理解が心の王國の生活を住みよくする。而してその王國の前途に廣やかな望界を創り上げる。

兄等よ。その時から思ひめぐらした私の考へを兄等は如何思つてくれるだらう。何はともあれ私は暫くはその事に考へ入つてしまつた。私は實際兄等と別れて、その青年の後を追ふ程の、熱意を持ち合はしてゐなかつたが……然し私達があの渡船に乘り遲れたとして、その次ぎの渡船にも恐らくは、更に異なつた人生の斷面を發見したかも知れないのだ。私達に心があるならば、見窮めなければならない事柄は餘りにあり過ぎる。一列の石階、一棟の建築、而して數限りのない諸の現象と事件は總て正しい理解によつて處理されるのを待ち望んでゐるやうだ。實際さう思つて見ると、凡てのものは踵を立てゝそれを待ち望んでゐるのを私達は感じないだらうか。

兎にも角にも私は門左衞門ではなかつた。私が長い間かゝつてこんな事を考へてゐる間に、かの若者の姿は私の眼界から消え失せて、私達は詩の問題を話し合ひながら、長岡の方に向いて歩いてゐた。

けれども兄等よ。私はこの事は無駄に考へはしなかつたと思ふ。それを私は試みにこゝに書きつゞつて兄等の餘暇の漫談に供して見た。この春は又兄等に伴はれて、今日のやうな理窟を考へずに靜かに京都の春を探りたい

と思つてゐます。祈健在。

第七信

（一九一九・二月十日）

M子へ

あなたの姉さんからあなたが去年出遇(であ)つた不幸な――不幸なといつていゝだらう――事件の經過をあらまし聞いた。あなたと知り合つてからいくらにもならないながら、あなたの處女性の餘り目立つてゐる爲めに、あなたにそんな事のあつたのが意外のやうにも思はれたが、同時にあなたの齡(とし)ではもうそんな事の起るのが當り前のやうにも思はれた。あなたの姉さんといふ方は大變にいゝ姉さんだ。妻になつても母になつても處女性を汚されずに持ち續けて居られ、はにかみ屋で內氣に見えるあなたの姉さんが、あなたを側に置いて親しみをこめた眼で眺めやりながら、ぽつ〳〵とその事件といふのを物語つて行かれるのを聞いてゐると、私はあなたを羨ましくさへ思つた。

私はまだあなたの口から直接何も聞かない。だから事件の眞相を私は摑んでゐないのかも知れない。然し兎に角あなたがある男の友達との交際が段々親密になつて行つた結果、戀愛といふ言葉で現はし得る交情にまで二人の關係が深まつて行つたのには相違なからう。その中にその友達の友人とあなたとの間に又親しい關係が成り立ちかけて、それが最初のあなたの友達に知れて、何もかも面白くない結果に破れてしまつた――それだけの事には大した間違ひはないと思ふ。

あなたの姉さんはあなたが輕々しく（姉さんはもつと同情のある言葉でそれを云ひ現はしてをられた）、男の心

に接して行つたのを、大變惜しい事に思つて居られた。私もそれには少しの異存もない。日本のやうに小さい時から異性が互ひ〳〵から全く切り放されてゐて、物事に過度な程敏感になる年頃にその接觸の機會が見出される場合、殊にあなたのやうに素直に恐れなく物事を見て行く質の人には、そこに逸早く友情以上の親しみが成り立たうとするのは已むを得ないとしても、あなたは餘りにおぼこ過ぎたと云はなければならない。あなたは自分を可愛がる事を天然によく知つてゐる人の一人だ。あなたはもつとしつかりそれに依賴してゐればよかつたのだ。本當に自分を可愛がる人は容易に自分の心を他人に許す事が出來ない筈だ。その代り許さないではゐられなくなつた場合には、そこには性格に根ざす執着が起きて來る。さういふ人の愛は作り上げる事が出來ない。湧き出して來るまではその人自身ですら自分の愛を如何する事も出來ない。あなたの心は少し逸り過ぎてゐたと見えて、あなたに似合はず表面的に動いてゐたのではないかと私は思ふ。若しさうならそれは大變いけない事だつた。そんな事が續くとあなたは仕舞には自分を見失つてしまふだらう。自分を見失つて平氣でゐる人が餘りに多い世の中に、あなたまでがその仲間入りをしては心細い。姉さんの云はれる事をあなたは身に沁みて考へて見るのが肝要だ。

この手紙は當然貞操といふ問題に觸れて來る。是れまで考へられてゐる貞操は私には少しぎごちなく考へられる。固定した概念のやうに考へられる。「節婦二夫に見えず」と云ふ格言がある。「節夫二婦に見えず」とも云はなければならない。これは然し現象を云つた言葉で、規約を云ふ言葉であつてはならないと思ふ。「見ゆる勿れ」ではない。「見えないのが通常行はれる現象だ」といふ程の言葉でなければならないと私は思つてゐる。この場合節婦とか節夫とか云ふのは自己に忠實な人といふだけの事だ。自己に忠實な人は一度戀をすると、二度戀をするといふのが可なりむづかしい事になる。前にも云つた通り本當に自分を可愛がつてゐる人の愛が動く時はそれ

は性格的だ。而して性格的な愛が湧き出るやうな對象を見出し、而してその對象に働きかけるのは容易な事ではない。それが何等かの原因で破れたとすると、第二の對象を見出すことが非常に難事になつて來る。そこで大抵の人は第二の戀を見出し得ずに死んで行くのだ。始めの戀よりも更に強い戀の成り立つ對象が現はれゝば、さういふ人は却つて二重の力を以て第二の戀に移つて行くだらう。然しさう云ふ場合が容易に起らないから「節婦二夫に見えず」といふ格言も生じて來るのだ。

所が世の中の人はさうは思はない。第二の戀をしないのが節婦なり節夫なりだから、苟くも節夫とか節婦とか云はれたいなら、眼をつぶつて耳をふさいで第二の戀をしてはならないとか云はうとするのだ。さうしてそんな虚名に詐かれて自分を見殺しにする様な人間が一人でも二人でも出來て來れば、淫らな犬のやうな人間達の擧動が牽制されるから、社會の安寧が幾分か保たれるといふ極めて淺薄な功利的な見地から頻りにそんな說を主張するのだ。その癖社會の中に本當の生き方をしさうな人間が一人なり二人なり只の機械になつてしまふのを惜しいとも思はず憚りもしないでゐるのだ。うつかり安價な道德家の口車に乘つたが最後、大概の人間は臺なしになつてしまふ。

貞操とはそんなものではないと私は思ふ。貞操とは自分の心を大切に培つて生長させて行く事だ。表面にはどれ程世の中で云ふ貞操らしい行ひをしてゐようとも、そのお蔭でその人の心がいぢけ、活力を失ひ、曲り、ひがんでしまつたら何とする。私はそんな質の人を見飽きる程見せつけられる。失敬ながら今の世の中ではそんなのが殊に婦人に多い。失敬ながらといふよりお氣の毒ながらと云つた方がいゝ。本當に今の日本の婦人は氣の毒な境涯にある。良人に別れてから獨身を守り通した婦人で、生きてゐながら死んだよりもつと醜くなつてしまつた人々の中には、淫らな野犬のやうな女達よりは遙かに勝れた素質を持つた人が多いに違ひない。周圍の人達が本

當に同情を以て迎へてさへやれぱどん〳〵生長して行く質の人が多いに違ひない。それなのに偶〻そんな人を見附けると掘り出し物でもしたやうに周圍の人はやい〳〵と所謂貞操の手桎足桎をかけてしまふ。女として餘程際立つた性格を持つた人でなければ、この壓迫を彈ね返す力はなく、ずる〳〵と周圍にまき込まれて、不滿を抱き抱き何時の間にか木の端くれのやうな、死人以上に鼻持ちのならぬ人間になつてしまふのだ。人間の生活といふ尊いものに對じて義理ばかりな交渉を繫ぎ、物を何でも橫からばかり觀察し、生命力から生れ出た所業と言葉とが皆無になり、文字になつた道德を引き寫して、若いものゝする事が一々癪にさはり、果ては理性といふ小さい機械すら思ふやうには使ひこなす事の出來ないまでに墮落する不幸な人達——そんな人達をあなたも恐らくは澤山見てゐるだらうと思ふ。私もそれは見飽きた。

あなたが若さから而して素直さから不幸にして陷りかゝつてゐた陷穽から今後のあなたを救ひ、同時にあなたを木の端くれのやうな硬ばつた死物になし遂せず、何處までも生きて何處までも生長して、生活に生命を寄與する爲めには、卽ち上に云つた二つの大きな谷底に落ち込まないやうに人間らしい道を步み切るには、あなたは何よりも自分を大切なもの可愛いゝものと知り拔いて、それを守り育てる事に本能的な欲求を感ずるのが第一だと私は思ふ。

私の讀んだ文學の中では、「戰爭と平和」のナタシヤが一番好きだと私が嘗て云つたので、あなたはこの間その本を私の書齋から持つて行つたね。その後あなたの姉さんからあなたの事を聞かされて私は一寸どきんとした。然しあなたはナタシヤの性格を思ひ違へるやうな事はすまいと思ふから、すぐ安心はした。唯この手紙の序に私が何故あの女が好きなのかそれを書いて見ようか。

もう大分以前に讀んだので細かい事は覺えてゐない。がナタシヤはあの小說の中でも少なくとも四度戀人を換

へてゐたと思ふ。戰死したアンドレイの看護が終るか終らない中にその親友のピエールに親しんで行く件などは、さすがの私も一寸氣持を惡くさへした。だが私は一の戀が終つたら他の戀へと勉强して移つて行くようにとあなたに云ふのではないのだよ。ナタシヤは謂はゞ幸な、惠まれた女だつたのだ。運命はナタシヤを人一倍可愛がつてゐたに違ひない。さうでなければあゝうまくよりよい戀が彼女をどん／＼生長さして行く筈がない。

　ナタシヤは自分を眞底から愛してゐた女だから私は好きなのだ。ナタシヤには外界の約束などが小さな時から少しも累ひをしてゐない。好意を罩めた大きな眼を見開いて世の中を見て通つた女だ。どんな虚僞が現はれて來ても、どんな陰謀が眼の前で持ち上つても、ナタシヤは鼻の先きの小細工でそれをあしらふやうな事は恥かしがつた。唯驚くだけだ、唯悲しむだけだ。私が六つばかりの時、父の所に知人が數人來て何か大事な相談に身を入れてゐた、そんな事とは夢にも知らない私は父や客人を笑はせたり喜ばせたりする積りで、緣側で障子を隔てゝ踊りを跳つた。灯は室内にともされてゐるのだから、私がどれ程巧みに踊つても影法師の障子に映る筈はなかつたが、それでも私は一生懸命に踊つた。父が大きな聲でうるさい、あつちに行けと呶鳴つた。私は大した事はないと思つて踊りつゞけてゐた。と、突然父はひどく癇癪にさへたと見えて、立ち上つて來て私を抱きすくめるが早いか、玄關先きから叢竹の根元にいやといふ程私をたゝきつけた。固より私は驚いて悲しんで大聲に泣き出した。ナタシヤには私の小さい時のやうな心が何處までも消えずにゐる。私は父を恨んだと覺えてゐるが、ナタシヤの私と違ふ所はそんな目に遇つても、もつと大きく自分を信じてゐた事だ。而してナタシヤはいつでも私より遙かにより親切により美しく踊るのだ。一生懸命に自分を信じて一生懸命に人生に依賴して。その强い性格を何と云はう。その生命力に滿ち溢れた、從つて本當に素直で大膽なその心を何と云はう。

　ナタシヤの蹉跌は大抵の女の人が經驗する蹉跌より遙かに大きな危險なものだつたと云へる。それでもナタシ

ヤは一度でも外界から義眼されてしまひはしなかつた。ナタシヤは――未經驗な、その道に這入れば一人坊ちな、極端に感じ易く傷み易い乙女心を持つたナタシヤは、どんなに踏み躙られても、泣きながら裳の塵を拂つて立ち上つた。大抵の女ならそこで木の端くれになつてしまふ所なのだ。けれどもナタシヤは泣いた後には屹度美しい自分の笑ひを笑つた。而して屹度一歩づゝ美しく生長してゐる。而して本當の意味の貞操――人間の生命を守るその貞操を損する事なしに、いゝえ反對に育てる爲めに、反抗心からではなく、本然の當然の要求から更に新しい戀人に近づいて行く。ナタシヤのやうな女なら幾度戀人を代へても私には不服はない。不服のないのは私ばかりではない。捨てられた戀人自身も、ナタシヤに對して不服を云ふ事が出來ないのだ。彼等はナタシヤの戀人たるべき資格も因緣もなかつた事を心の底ではちやんと知り拔いてゐるからだ。

私の云ふ貞操の心持があなたは解つてくれたか知らん。あなたは未だ本當に若い。而してあなたの心は餘りに感じ易い。だから姉さんが云はれる通り本當に用心しなければいけない。又姉さんが云はれる通り堅固な心でこれからあなたの前に現はれるべき戀人を自分の心の心、肉の肉にしなければいけない。あなたの姉さんの言葉には經驗と眞實との力强さ優しさが勿體ないまでに罩つてゐる。あなたは本當にいゝ姉さんを持つてゐる。

同時にあなたは用心する爲めにひねくれてはいけない。人が狡いからと云つて自分まで狡くなつてはいけない。何處までも何處までも處女性を失つてはいけない。人間は生きてゐるから人間なのだ。心の大道を生き〳〵と步いて行くから人間なのだ。あなたの正しいと思つた眼で何處までも正しく世の中を御覽。醜いものを見るのが惡いのぢやない。醜いものを見て自分の眼が汚されるのが惡いのだ。あなたには不思議に汚されない處女性がある。それを私は尊いものに思ふ。それを見捨てるやうではあなたは本當に貞操を踏みにじつた不倫な女になつてしまふ。

男にしろ女にしろ戀を重ねる重ねないに好い惡いはない。それは心の貞操が守られてゐるかゐないかによつて決する問題だ。本當に戀の出來る人は、而してそんな運命に置かれた人は、世の中の御規則に頓着なく二度でも三度でも戀するがいゝ。それの出來ない人は、而して運命にさう導かれてゐない人は、世の中の御規則に頓着なく、一つの戀の記憶の中に美しく育つて行くがいゝ。さうすると人間の關係がもつと生き〳〵として來る。而して屹度今よりも人間全體が幸福になる。

然し本當にいゝ事は人が本當の戀人にめぐり合つてその戀がしつかりと結ばれる事だ。そこには生長もある。而して同時に安定もある。それに越した事はない。未來の裕(ゆた)かなあなたがさうした戀を得るようにと私は姉さんと共に祈るものだ。

よくお育ち。左様なら。

（一九一九・二月十六日）

第八信

B兄

二月號の早稻田文學に「批評といふもの」といふ小さな感想を載せたら、同じ雜誌の三月號に藤朝氏が感想を書いて下さつた。あれは兄も讀んだ事と思ふ。

藤朝氏の云はれるには、批評家としていゝ作物に出遇つて禮讃するやうな氣分になりたいとは思ふが、下らないものばかり見せつけられると、その缺點や誤謬を指摘して、正しい道を指示したいと思ふ衝動を感ずるのは當然ではないか。作家が創作の中で人生批評をしてゐるのに、批評家だけにそれが許されない法はない。さう云ふ

やうに論じて居られたと思ふ。

それは至極同感だ。理ぜめで云ふとさうに違ひない。然し私はあの感想文では主に心持を感じて貰ひたかつたのだつた。私は一箇の作者と云ふ立場から云へば、作物の中で人の生活を批判するといふやうな心持はない。ただ出來るだけ忠實に凡ての生活のどん底を掘り下げ〳〵たその底にはどんなものが動いてゐるかを、私の性格を通して見窮めて、それをそのまゝ讀者のアプリシエーシヨンに提供しようといふ心だけしかない。然しある作家は始めから人生を批判する心持で作物をしてゐる人があるかも知れない。而してその態度も許さるべきものかも知れない。と云つて、作家が創作の中でそれをするから批評家もといふのは私はいけないと思ふ。作家にもそれぞれ見識があるやうに批評家にもそれ〳〵見識があつていゝかと思ふ。少なくとも禮讃の心持が起らなければ筆が取れないといふやうな批評家が一人や二人はゐても決して差支へないと私は信ずるものだ。その心持が解つて貰へないものだらうか。

こんな事を業々しく藤朝氏にあてゝ書くでもないから、書きはしない。唯一寸思ひついたから兄に書いて見た。

この間、人を送りに横濱に行つた。船はT汽船會社の大きな船だつた。一寸挨拶をして船を出るともう見送るべき人の姿は群集の中に入り交つて見えなかつた。細長く切つた五色の紙が見送人と見送られる人との間に握られて、舷側は祭禮の裝飾のやうに美しかつた。船が動き出すとそれがぷつりと名殘り惜しく切れる仕掛けだ。私はそんなロマンティックなものを持ち合してゐなかつたから、一人坊ちで持ち廻りの出來る櫓の上に乘つて、船の中を見てゐたら、三等船客の中に二人の支那の婦人を見出した。一人は黑い汚い支那服を着て人ごみを避けて、舷側の所で泣いてゐた。乘客に後ろを向けてゐるので淚は見えないつもりのやうだが、幾百人となく棧橋に立ち

連なつた見送人にはまともに見えてゐた。それを氣附かない位その少女は悲しんでゐるらしかつた。もう一人の婦人は少し年嵩で洋服をきてゐたが、これも堪らへ〳〵泣いてゐた。片方が痛く泣き出すと片方もつり込まれるやうにせき上げてゐた。殊更ひどかつたのは支那服の少女の方だつた。洋裝の人にたしなめられる度毎におづおづと隅つこに引つ込んで行つて、何の積りだか涙でぐつしよりになつたハンケチを丸で洗濯でもするやうな手付で揉みに揉んでは、また堪らなくなつて顏に持つて行くのだつた。容貌から見ても服裝から見てもいづれ無智な召使ひか何かだらうが、私は段々引き入れられて見送る人の事なんぞ忘れてしまつてゐた。赤坊でも犬でもだが、無智なものゝ泣くのを見てゐる位悲しいものはないね。本當に生といふものは悲しいものだとつく〴〵思はされてしまふね。本當に悲しいものなのだ。けれどもそれでいゝんだ。

小さな子供が何か獨語を自分に云ひながら、せつ〳〵と遊んでゐるのを見るのも悲しいものだ。何を云つてるんだらう私は。東京も春になつたよ。

（一九一九・二月十六日）

第九信

母上に

この春の圓覺寺滯在中の事を何くれとなく書いて見ます。

三月の三十一日に圓覺禪寺の山門の向つて左手にあたる松嶺院と云ふお寺の一隅を借りる事になりました。その寺は私が行くまでは誰も人が住んでゐなかつた爲めに、玄關には泥草鞋の跡が、庭には去年の落葉が、廊下や疊には細かい塵がありました。私が日頃行きつけてゐる休茶屋の人が來てまめ〳〵しく掃除をしてくれたので、

入口から二階の部屋までは兎に角足を踏み入れて差し支へないまでになりました。佛壇の間を除いて八つも大きな座敷のあるこの廣大な寺が、無住のまゝでゐると云ふのは何たる事でせう。そんな話をSにしたら、Sが云ふには、佛教傳來の當初には、寺院と云ふものは日本の文明的生活の中心だつた。凡ての新しい、而して最も進歩した生活の樣式は一つ殘らず寺院の中に備はつてゐてそこから民衆に分布されたものだ。實際生活の上に於てすら佛教は先驅者の役目を立派に勤めてゐた。所が今はそれが全くあべこべになつてしまつてゐる。古いもの不便なものなら寺に行けば何でもあると云ふ調子だ。早い話が君の部屋には電燈一つあるまい、との事でした。その通りだと云つて私も笑ひましたが、考へて見ると、これは唯笑つてばかり濟して置ける事ではないやうです。信仰でも知識でもそれが充實して活力を有つてゐる間は、そこから一つの特有な生活が導き出されなければなりません。而してその導き出された生活はそれ相當に合理的で、實質的で、且つ進歩的な內容を備へてゐると思ひます。是等の事を考へて見ると、佛教と云はず今の宗教と云ふものには何か根柢的なものが缺けてゐるのではないでせうか。佛教渡來の節には當時文明の最高潮にあつた支那の生活樣式、遡つては印度のそれが輸入された譯なので、佛教そのものゝ功過は多く與つてないと云ふ人があるかも知れませんが、印度とか支那とか、全く日本とは風俗習慣の異なつた文明を持ち込んで來ながら、それで日本人の實生活の指導者となり、それをどん／＼變革した所には如何しても信仰の力の偉大さを認めない譯には行かないと思ひます。基督教も亦西歐の文明を携へて日本に這入つて來ました。而して日本人の生活樣式に新味を加へつゝあります。然し佛教渡來當時の勢ひと較べて見ると、その相違は可なり大きくはありますまいか。

兎にも角にも私のゐたお寺にはまだ電燈が引いてありませんでした。私のやうな特別な目的を以てやつて來たものには、然しこれが却つて有難かつたかも知れません。私は他にお客のある場合を恐れて、わざと懸け離れた二

階に二間を借りる事にしました。東にずつと窓がついてゐますが、茅葺きの庇が長い爲めに朝の日もはか〳〵しくは這入りませんでした。然し書きものをする時わざと部屋を暗くする癖の私にはそれも却つて嬉しいものでした。机一つ、座布團一つ、行李一つ、ランプ一つ、火鉢一つ、小さな花瓶一つ、それで私の生活様式は整ひました。朝と晩との食事は門前の柳屋といふ昔からの旅籠屋で、中食は机の側でパンと牛乳を。

この寺の滯在がもう一つ私にいゝものを齎らしてくれました。それは靜かな心で自然の移り變りを見せてくれた事です。私は草や木を眺めてゐると如何かした拍子にそれらのものゝ一年の間の推移を心をこめて見詰めてゐたいやうな氣になります。けれどもその氣になつたゞけで嘗てそれを心ゆくまで試みた事はありませんでした。それがこの滯在中に許されたのでした。

窓から見ると眼の下に色々な木がありました。梅の花は散り盡さうとして蕚の黒赤い色が枝の上に目立つてゐました。一重櫻は美しく咲きほころびてゐました。桃も。楓は溶けるやうに紅い色の嫩葉を空に向けて少しの風にもちら〳〵と搖れてゐました。その若やかな春の淺い裝ひは、何もかも古い寺の姿を殊更に趣深く見せました。寺門に續く土塀の漆喰の崩れ迄が靜かにしめやかに春を語つてゐました。

次の日にはもう四月と云ふ月になつてゐました。若い一人の僧侶がその日からこの寺の留守をするやうになつて、庭の草などをせつせと掃除してくれました。この日門前の食事をする所に行つてゐたら、矢張り圓覺寺の塔頭に止宿してゐる學生の人が、昨夜海濱に遊びに行つて、そこで心中をした若い男女學生の遺族が波打ち際を死體を捜して歩いてゐるのに遇つた、その話をして聞かせました。心中をした人は二人とも鎌倉に近いある都會のものだつたさうです。捜してゐたのは一人は男の母、一人は女の姉だつたさうです。その姉といふ人は間もなく結婚しようと云ふ間際に妹に死なれたので、不思議な心持になつてゐるやうに見えたさうです。面白いものゝ

やうにその學生の話す噂を私は默つて聞きました。

今日から新聞を讀みません。これだけの事で私は地上から離れた處に移されたやうな氣がしました。頭が何となく澄むのを覺えました。毎朝何よりも先きに新聞を讀む……あれは考へて見ると文明人の病氣の一つのやうですね。

二日からは若い僧侶の勤行の聲で五時半には眼を覺まされました。夜おそくまで筆を執る私には多少迷惑でない事もないが、電車の齒ぎしりで眠りを妨げられるよりは遙かに氣持のよいものでした。私は草臥れると窓から樹木の梢を見おろして眼を休めながら仕事を續けました。仕事は割合に快く運んで行きました。うまく調子が乘つて來て、筆者の感情が熱しながら盲目とならずに、原稿紙の中にずん〳〵融け込んで行つてくれた時の氣持は、その經驗のない人には解らないと思ひます。鞍慣れのした駿馬に乘つた氣持、人を押し人に押されながら眞直な平坦な道を氣息のはずまない程度に駈けて行く氣持、何處までゞも際限なく走つて行けさうです。この三昧の心持を妨げられる程困りもし殘念にも思ふ事はありません。又調子がついて來るまでには色々な苦しい工夫が必要とせられますから。

この日は鎌倉に町制が布かれてから二十年目の祝日だとかで、寺内には少なからぬ人出がありました。五六人の人が山門の横に揭げてある鎌倉保勝會の寄附者名牌を讀み上げてゐましたが、私はふと父上の名が耳に這入つたので、その夕方散步の時にその下に立つて見ました。「金五圓」としてその下にお名がありました。その他の人は中々多額である中に父上のが五圓であるのを見ると、それは多分官途を捨てゝ鎌倉で浪人生活を送つて居られた頃のものではないかと思ひます。世にない人の名を不思議な所で見たものと思ひました。

この晩夜に這入つてから散步をして十時過ぎに小袋坂の切通しにかゝると、私の前を一人の泥醉者がひどい千

烏足で歩いて行きます。私はそれを一種の遠慮からすり抜けずに後に跟いて行きました。脚をむき出しにして絆纏一枚着た五十恰好の男でしたが、やがてその人が自分一人と思つたものか濁み聲を高く擧げて無月の夜氣を追ひ拂ふやうに歌ひ出しました。

「切れて別れりや他人と他人。他人に用はなけれども、赤の他人た他人がちがふ。」

確かにさういふ句でした。普通の都々逸とは字數が餘る、その餘る所をこの人は妙な調子で歌つてゐました。私はその男の人を夜目ながらまじ〳〵と見直さずにはゐられませんでした。その人の姿とその歌とをどう結びつけて考へて見たらいゝものだらうかと思つて。その人は然し私のゐるのに氣がつくとすぐ默つてしまつてよろよろと歩いて行きました。私は自分の存在が知られたので安心してその人の側をすり抜けて寺に歸りました。歸つてからもその人の事が何時までも氣になつてゐました。

五日の午後にAとTとが思ひもかけず遊びに來ましたので、連れ立つて鎌倉に行つて、ある料理屋で夜食をしました。行きがけに八幡の石段の上から見た若葉の景色は素晴らしいものでした。あゝ云ふものを見る度に、人間と云ふものは隨分不注意に生きてゐるものだと思はされます。私達はよく人生が如何のかうのと云ひます。母上などは隨分私達兄弟のさうした議論にあてられてお出でゞせう。然しよく考へて見ると私なんかは、この日若葉を見て始めてその美しさに驚いた程の程度にしか物を見てはゐないのかと思ふと、自分の思ひ昂り加減が馬鹿らしくもなります。本當に親切に物を見る人はどれ程祝福された人でせう。その人の眼にはこの地球は普通の人が考へるよりも十倍も二十倍も大きいに違ひありません。その人の一生は普通の人の一生よりも十倍も二十倍も長いに違ひありません。而してそこには普通の人には與へられない幾多の鍵が與へられてゐるのでせう。深い悲しみ、大きな喜びはさういふ人の上にこそ來るのでせうか。

Tは建長寺の山門の上に帽子を、Aは料理屋の階上に袴を置き忘れました。物忘れの强い私は二人のお蔭で警戒を嚴にした爲めか別に忘れ物もせずに寺に歸りました。その夜は氣持のいゝ雨が終夜降り續きました。雨と云へば茅葺きに降る雨はまたいゝものです。降る時には音がしません。降りやんでから屋根一面に沁みこんだ雨滴が間遠に落ちて板庇を打ちます。朝になつて忘れたやうに空が晴れてゐる時など、寺を出ようとすると屋根の端れから雨滴が落ちて襟を傳ふことがあります。寒からぬ春などにはその雫の持つ快い冷たさは無類です。

六日の朝には雨が美しく霽れて、春の日がその慈悲光を凡てのものゝ上に暖かく投げてくれてゐるのが嬉しく、思はず机を離れて、寺庭を行きつ戻りつしました。佛日庵といふ高かみにある塔頭を除いては、八重櫻がむせる樣に纍々と咲き揃つてゐました。啄木鳥が蟲を漁る音も、朗らかに杉森の間から聞こえて來ました。圓覺寺は鈴木大拙氏の屋敷の前にある石垣沿ひの道が一番いゝ所に思はれます。櫻と若楓の中をあすこを逍遙してゐると京都にでもゐるやうです。暫くすると子供達が三人東京から遊びに來ました。私はその一日を喜んで子供の爲に捧げました。子供達は飽くまで遊び廻つて夕方にパパを獨りこの古寺に殘して歸つてしまひました。

四月の七日には蜜蜂の飛ぶのを見ました。凡ての蟲達の活動がもう始まるのでせう。蚊も出ました。薄暗い私の部屋に人をいやがらせるやうなあの特有な羽音を立てゝ舞ひ込んで來ましたが、然しその刺針はまだ人の皮膚を突く力を得てゐませんでした。螢を見たと云つてる子供にも遇ひました。やまかゞしを見たと云ふ子供もゐました。ぶゆももや〳〵と飛び始めました。蠅はもう自分達の世界になつたやうに振舞つてゐます。私はこれらの小さな生物達の出現に對しても、都會で持つやうな考へは持つ事が出來ませんでした。境涯がさうさせるのか、或は又佛尊の靈跡といふ感じがさうさせるのかそれは知りませんが、兎に角私はそれらの蟲けらに對しても異常な興味を持ち、愛着をさへ拂ひました。ある時一匹の蚊が書きものをしてゐる眼の前をいくら拂つても〳〵五月

蝿く飛び廻つてゐるので、力強く拂ひ除けようとしましたから、とう〳〵可なりひどく疊の上に敲きつけてしまひました。白い原稿紙の上に仰向けになつて、細い鐵線のやうな脚をかたみがはりに延ばしたり縮めたりして、しかもその中の二本が自由を失してゐるのを見ました。人を刺すことをしない――しても蚊に取つては生存の必要からなのですが――罪のないものをこんなにしたかと思ふと、私は日頃にない心尤めを感じました。而してそつと一本の羽根をつまんで吸取紙の上に移してやつて良ゝ暫くその成行きを見つめてゐました。が、蚊に取つて呑氣極まる私は軈て自分の仕事にせき立てられて、又原稿紙に向ひました。吸取紙を使はうと思つてその方に眼をやつた時には蚊は既に死んでゐました。凡そかう云ふ境に身を措くと、かゝる生物が宿主であつて、自分が借手と云ふやうな關係を意識します。彼等の世界に私が割り込んで行つて臭い匂ひを立てたり、大きな聲を擧げたりするやうに思はれます。人間と自然との關係は本當に何處にあるのだか判りません。私達が勝手に決めてゐる關係なるものは一寸した機緣で崩れてしまふものらしく見えます。私は御承知のやうに猫が大嫌ひですが、鈴木大拙さんの所の外國種の猫が遊びに來るのをこゝでは私は厭はないのみか、喜んで迎へました。それは不思議な心の變化でした。猫は勝手に私の原稿紙の上に乘つて來て、ペンを控へて降りるのを待つてゐる私の顏をその長い毛深い尻尾で撫でたりしました。私は顏をしかめながらも默つてその惡戯を快く受けてゐるのでした。

八日には本堂で降誕會が行はれました。日頃黑い袖を肩にかゝげて、柴を擔いだり、薪を運んだりしてゐる所化まで打ち揃つて集まつて來ました。暗い石敷の堂内の須彌壇の前に別の壇が設けられて天上天下唯我獨尊の小釋尊を椿、山吹、八重櫻、こゞめ櫻などの花で裝つてありました。管長が座につくと非常に聲の美しい侍僧が一種異なつた音律を整へて經文を讀誦しました。それに應ずる衆僧の聲も春らしく堂内に籠りました。三拜九拜の嚴かな式の後に、列を造つて圓柱から圓柱の間を衆僧が偈を稱へながら漫歩する様は又印象の深いものでした。

殊にそれ等の珍らしい儀式が私をこめて七八人の觀衆の中に行はれたのも尊く思はれました。鐘樓の鐘は間を64いて鳴りました。その度毎に寺庭の櫻は算を亂して散りました。五千年も昔の一人の男の誕生がかくして記念されるーーそれは人類の歴史の悠久と整格とを形にして見せてくれます。

夕方には美しい夕べが來ました。空は隈なく晴れて月も美しく、蛙は靜かに何處からとなく歌を擧げ始めました。人を惱殺することはこんな時なのでせうか。石のやうに毎日の胡坐を續けてゐた私もつい誘ひ出されて、しめやかに軟かい夜の空氣を皮膚で呼吸しながら八幡宮の階段の方までさまよひました。

九日には春はその絶頂に達しました、八重櫻は散らぬ程に滿開して、一重櫻は大かたその薄い花瓣を落してしまひました。菜の花は散り際になつて、大根の花の白いのが新しい麥の綠の中に見えました。暗綠の厚い光つた葉蔭に散る血のやうな色の椿ーーそれは鎌倉を傳へる一つの象徴とも云つていゝーーも道側のあすこゝに見やられます。圓覺寺から建長寺に續く路傍の深溝の上にさし出た柳、ぼけ、無花果樹、檜、それらはその色に形に鄙びた可憐な華やかさを以て、建ち續く人家の春を裝ひました。畑の間を通ると麥の穗が五本に一本位の割合に挺き出してゐました。而してその凡ての上に惠み深い日の光。

十四日ーー今朝もその剽輕者は泰然自若としてゐました。

昨日の朝毎日のしきたり通り起きぬけに洗面盥をぶら下げて庫裏の後ろの崕の際にある井戸に行つて水を汲み上げると、釣瓶の緣につかまつたまゝ小さな青蛙が一匹上つて來ました。剽輕者と私の云ふのは其奴の事です。恐らくこの小さな剽輕者は井戸の水の中で卵から孵つたものでせう。言葉通り井底の蛙ではありますが痴蛙などとは云へないやうな顏をしてゐました。春の朝のきらびやかな陽の光にはさすがに驚いたでせう、眼の球をぐりぐりと廻すやうに動かしてはゐました。井戸の底の水の中と、井戸の上の空氣の中とでは氣壓に相當の相違があ

ると見えて、呼吸困難らしく大きな腹を波打たしてはゐました。けれどもこの二つの點を除けば如何にも悠々閑閑として物に動ぜぬ膽大さを持ち合はして居るやうに見えました。私は暫くの間は感心してその面魂を眺めやつてゐましたが、試みにそつと釣瓶を持ち上げて水を盥にあけて見ても、依然として動く樣子は見えませんでした。私は面白くなつて再び釣瓶をそつと井戸緣の上に安置してやりました。剽輕者は依然眼球をぱちくりして腹を波打たせたまゝ泰然自若としてゐました。

それが今朝まで泰然自若としてゐやうとはさすがの私も思ひがけませんでした。そのまゝにして置いて見たかつたのですが、それでは顏を淨める事が出來ませんから、已むを得ず釣瓶に手をかけますと、電氣でもかゝつたやうに青蛙は飛び上つて、身を飜へすと共に山の井の底深く落ちて行きました。それだけならまだいゝのに、飛び立つ際にぴつと溺りをして行きました。小さな剽輕者！　私は後で自分にきまりが惡くなつた程、思はず聲を立てゝ笑つてしまひました。而してその尿が確かに交つてゐるに違ひない水を汲み上げて快く口を漱ぎました。

この日久しぶりで東京に出て色々な事に驚かされました。電車の乘り降りにすらまごつく事がありました。最も不思議に思つたのは浪費の眼立つ事です。寺にゐると私のやうなづべらものですらひとりでに物を大切にする習慣を得てゐたのです。芥溜に紙片れの落ちてゐないのを見ると、私は紙一片でも丸めて屑籠に入れるのが勿體なくなります。私はそれを二重にも三重にも利用する事を學びました。それが國民の經濟狀態を向上させるからといふやうな意味ではなく、自分のしみつたれた根性から出る譯でもなく、さういふ風に物を大事に愛撫して使ふ事に一種のつゝましい喜ばしさを感ずるからです。「照顧脚下」と書いた紙が玄關の柱に貼りつけてあるのを見てから、寺にゐる間、私は一度でも履物をこつち向きに脫ぎつぱなしにした事はありませんでした。それは私に取つて自身を驚かすやうな日常生活の變態でした。

こんな生活をしてゐても時々思ひがけない人々の訪れを受けました。それが寺にゐて見ると、何等かの意味に於て生命への執着卽ち生活苦を持つてゐないものはありません。ある婦人は自分等の性を擁すべき雜誌の發行を企て、しかもそれに疑惑を持つてゐました。ある詩人は大部な詩集を世に出すに就いて私の強くない臂の力を用ひさせようとしてゐました。ある兄はその妹の隱れた戀の解決を相談して來ました。ある男は私の文章を斷りもなく改作して書物にしようとした友の爲めに私に詫びに來ました。ある青年は孤獨な旅から突然現はれて突然消えて行きました。而して消えて行つた後に、その父から徵兵忌避の恐れがあるからと云つて搜索を依賴して來ました。兄の不埒の爲めに結婚を斷念して空しく老いて行く女の人も來ました。豫め借りてゐた部屋が留守の僧侶に荒らされたと云つて、夜半近いのに暴言を吐き散らし、洋杖で壘を敲きながら私の部屋に侵入して來た男もありました。その人達の一人々々を取つて見ると、どれにもこれにも生活の完全な縮寫があります。而してそれらの人々と言葉を交はす私自身が矢張りそれです。私は苦笑を禁じ得ませんでした。

私の食事をしに行く旅籠屋に時ちやんといふ五つばかりの女の子がゐます。私はその子が可愛いと思つたから鎌倉に行つた序に人形を買つて行つてやりました。さうしたら碌々その人形を見もしないで、笑ひ顏もせずに手にさげたまゝいきなり戶外に駈け出してしまひました。氣に入らなかつたのかと私が思つてゐますと、女中の話に、時ちやんは往來に遊んでゐる朋輩にそれを見せたい一心で、自分は碌々見もしないで駈け出したのださうです。而して友達が、我れ勝ちにそれを手にかけようとすると、始めて氣が附いて自分でしげ〳〵と人形を見直してゐたさうです。

二十日――牡丹櫻ももう色があせて散り始めました。木いちごの花も七分がた散つてその蕚の中央に小なな實を見るまでになりました。梅の實は大豆の大さほど、牡丹の蕾が嬰兒の拳ほど。

毎日雨さへ降らなければ遊覽者は跡を絶ちません。それが大抵大釣鐘に登つて金を出してごーんごーんと鐘をつきました。毎日々々それが晩春のぬるい空氣を動かして私共の耳から頭に傳つて來ます。こゝに坐禪をしてゐる一人の青年はこの鐘の亂聲が五慾より何より修業の邪魔になるとこぼしてゐました。大鐘は大金に通ずるので、少しの御賽錢で大金を儲けようとする蟲のいゝ人があるやうです。何しろ仕事の暇々に遊覽客を觀察するのも面白いものでした。都會から來た若造といふやうな連中が一番いやな手合ひです。田舍の工場の職工連らしいのもいやです。鐵道院の下級官吏とでも云はれさうな人が若いおかみさんや年取つたお母さんを連れて、バスケットに辨當など用意して來るなぞは一番氣持がいゝと思ひました。さう云ふ人達が一番睦まじさうな笑聲をこの靈場に殘して行きます。

袷一枚で丁度いゝ時候――それはいゝ時候です。

私は散歩の時にはよく獨りで坐禪堂の奥にある藥師堂に行きました。これは圓覺寺内で一番古く一番よく保存された建物で國寶だか保護建築物だかになつてゐます。坐禪堂を右に、形のいゝ小さな鐘樓を左に見て突き當つた所に、簡素な塀に設けられた美しい小さな唐門があります。その欄間の彫刻は人の注意を牽かぬ程に古びてはゐますが、尊い工人の腕の冴えを見せてゐます。その唐門を這入ると小さな方形の庭があつてすぐ本堂になつてゐます。鎌倉時代の寺院建築に特有な茅葺き屋根の勾配からそれを受けるせりもちの簡古さ。正面を三つの開き扉にした、その扉や欄間の意匠、凡てがお互に顧み合つて完全な調和を支持してゐます。唐門の邊から一と眼にそれを見ると、建築物を見るといふより、地上に据ゑられた整つた床の置物を見るやうな感じがします。私は正面の入口の所で履物を脱いで、毎時でも薄く濕つてゐるやうな石疊に素足を踏み入れます。須彌壇の後ろに廻つて階段を登るとそこに奥殿があります。本堂に踏み入る時光から遮られた眼はこゝに來て更に一入(ひとしほ)の暗さに襲はれ

ます。そこにぢつと立つてゐると、堂の奥深い所に豆のやうにかすかな常燈明が點されてゐるのを發見するでせう。そこには私が住ひ慣れてゐるやうな世界はもうありません。

私の住み慣れてゐる世界は光の世界であり音の世界であります。その光の中に影が交る事によつて、又音の中に靜かさが交る事によつてその世界には綾と變化とが生じます。然るに佛者の世界は常暗の世界であり、沈默の世界であります。それがその世界の常態であります。その境界に幽かに光が生じ、音響が動く事によつて綾と變化とが生じます。私は佛者のこの見地が一小建築の中にさへ完全に象徵されてゐるのを見て感に打たれました。黑天鵞絨のやうな深甚な暗黑と沈默との中に神々しく點された常燈明——それは宛ら釋尊の肖像とは云へますまいか。世の凡ての人が見たとは全く反對に世を見て、それに安住した聖者の勇猛心を私は畏れの心を以て感じ知つたやうに思ひました。こゝにも考へて見なければならない大千世界がある事を思ひました。人の心といふものゝ豐富さをこの小堂に於て驚き眺めました。堂を出ると世界は眼前に別事を行じてゐます。春は駘蕩として夏に續かうとしてゐました。

二十一日——私は散步に出て、農閑を利用して名所巡りに出て來た一群の農人達と前後して步きました。彼等はしつとりとした會話をしながら草鞋ばきの脚を靜かに運んでゐましたが、別莊地にと誰かゞ買ひ入れてまだ建築を始めないらしい廣大な地面一杯に生ひ繁つた草叢の中から、一人が一本の草を拔き取つて連れの人に示しました。「これは『地獄のつりかぎ』といふ草だ。根が深いのでその先きに地獄が垂り下げられてゐるのだ」といふやうに說明してゐました。人々は手から手にそれを渡してその草を仇敵のやうに打ち眺めてゐました。私は全くこの農人達に深い親しみを感じてしまひました。

二十二日に私は暫くの間籠居した塔頭を去りました。私の仕事は思ふやうには運びませんでしたが、それでも全

く徒勞には終りませんでした。三百四五十頁の原稿を抱へて私は山門を出ました。私の持つて行つた小さな花瓶には椿、さつき、菜の花、海棠、山吹、薔薇が活けられました。妹が送つてくれたライラックは、私の手に落ちた時には半ば萎れてゐて、活ける事が出來ませんでした。私がどれだけの長さの春をそこで過したかは、活けかへられた花の名が時計の如く示してゐます。この二十日あまりの間三人の子達を保護し養育してゐて下さつた御心勞に感謝します。

（一九一九・九月十六日）

第十信

H兄

長く便りをさし上げなかつたことをお許し下さい。今日はあなたに單なる一つの報告を送ります。以下述べるやうな事實があなたに取つては報告を待つまでもない周知の事實として映るかも知れませんが、寡聞の私には始めて得た知識であつて、而してあなたに知つてほしいと思ふところのものです。

日本にも勞働問題として色々の問題があるだらうが、速かに解決してしまはなければならないのは、この公然と行はれてゐる土工人夫人身賣買の問題だと思ふ、と私に話をして聞かせた一人の土工人夫がいひました。私はこゝにその顚末を備忘的に書き記るして見るまでゞす。

大體日本には今四十五萬人の土工人夫がゐます。而してその中七萬人は、自分の勞働力ばかりでなく、自分の身を賣ることを餘儀なくされて生き恥をかゝされてゐるのです。さうその人は語りつゞけました。

七萬人の九分通りは人夫仲間からいふと、赤の素人で、學校生活を途中でやめた者とか、不首尾で投げ出され

たお店者とか、田舍から一攫千金を夢みて都會に出て來た百姓とか、怠惰の爲めに喰ひつめた世間知らずとか、さういふ人々から成り立つてゐます。それらの人の多數は、なすこともないまゝに都會の場末とか公園とかをうろついてゐる間に、惡募集屋の手先きに難なく乘ぜられるのです。旅費手當を支給して、方外に金の儲かる所に周旋すると廣告のしてある募集屋の暖簾を進んで潜るものはさう澤山はありません。大抵のものは募集屋が遠卷きに張つて置くいひるてんにまんまとかゝるのです。

所謂人夫募集屋は東京、大阪、神戶、名古屋、仙臺等に仕掛けの大きな根據を構へて盛んに商賣をやつてゐますが、東京で大規模にやつてゐるのは、下谷萬年町の山崎、豐住町の河口、淺草田島町の山口、淺草町の黑田、本所相生町の旭組、以上の五軒です。甘々と口車にひつかゝつた者がそれらの募集屋の暖簾をくゞると、帳場には口の上手な男がゐて、步合のいゝ契約を取り結びます。一體現在の所、職業的の土工人夫が一日に得る賃銀は辨當先方持ちで八十錢乃至一圓を相場としてゐますが、募集屋では最低一圓三十錢から最高二圓の外に酒手が渡るといふことになつてゐます。だから仕事の經驗のあるものはその法外な優遇に疑を懷いて逃げを張るのが自然なのですが、素人の人はうつかり甘言に乘つてしまふのです。契約期間は東京だと三ケ月、大阪方面だと四ケ月といふことになつてゐます。帳場の男は眼はしが早いから、人柄を見て甘いことをいひます。お前さんは字も讀めるし、算盤も取れるといふのなら行く〳〵は現場に這入つても帳場の方に廻つて、帳附けでもやるやうになると、力業はしないでいゝ金になるとか何んとか。而して働き次第で一圓三十錢から二圓までも支給するといふ證書に拇印を押すことになると、すぐ二階の溜りに追ひ上げられます。追ひ上げられたらもう最後です。便所一つ行くにも一見物凄い風體をした男の監視を受けなければならないのです。それでもその晩は相當の膳が出て酒が一本つきます。そこで二十人なり三十人なりの頭が揃ふと土工の現場の方に送り出されるのですが、かうした

人身賣買の行はれる地方は東京以北で、福島、仙臺あたりから始まつて、北海道から北は樺太まで及んでゐます。尤も樺太あたりは給料もいゝとしてあるが、何しろ歸りの旅費がかゝるからそつちを志望するものは自然尠い譯です。

汽車は大抵夜汽車で、目的地には朝早く着くやうな仕掛けになつてゐます。この頃は下谷の警察が或る程度の干渉をするといふので、上野から何時何分に發たせますからと屆出をしておく人夫の數は少くしておいて、大部分はその前に發たせて大宮で後發隊と落ち合ふ仕かけにしてあります。募集屋の二階で全く自由を束縛された人達は、迚も逃げることの出來ない程な多數の護送人に附き添はれて汽車に乘り込むのですが、乘り込むと護送人の數は減つて二人か三人になつてしまひます。その二三人といふ男は、殊に腕つこきな物凄い男で、客車の入口の所にがんばつてゐて、辨當から便所への立ち居にまで氣を配つて一寸の隙も見せません。この役目をする男は、一日に三圓の日當と酒代とを貰つてゐます。汽車が目的地に着くと停車場には、十人について四五人といふ割合に、得物を持つた荒くれ男が迎へに出てゐるので、大抵の應募者は度胸をぬかれて觀念の眼を閉ぢる外はありません。

さてこれから本當の人身賣買が始まるのですが、東北地方では募集屋は大抵直接土工組に賣り込みますし、北海道は函館眞砂町に引受所があつて、一旦その手に渡つてそれ／＼需要のある所に送り込まれることになつてゐます。福島地方は差別無しに一人三十圓、北海道は七十圓（但し關西地方からの賣り込みは旅費が嵩むから八十圓）、樺太は百二十圓といふ様な相場になつてゐます。募集屋はその金を受取るとさつさと引き上げてしまふのですから、それからの處置は全く土工組の勝手です。募集屋と取り交はした契約はよし一圓二十錢だらうが二圓だらうが、それは反古同然です。募集屋は警察からやかましく云はれる時の申譯にさうした契約をするまでゞあつ

て、土工組ではそんなことに頓着なく賃銀を定めるのです。尤も天から募集屋に一人につき三十圓とか七十圓とかいふ金を支拂ふのですから、人夫にいゝ賃銀を拂つて合ふ筈がありません。現場ではどれ位の賃銀かといふと先づ最上五十錢、北海道で一圓二十錢といふ位の相場です。尤も食事は先方持ちですが、世帶持ちで請求すると一圓六十錢位にはなります。これだけ聞くと兎に角少なくとも賃銀はくれるやうに見えませう。然しその底を割つてお話しすると、賃銀は一切現金ではくれないで、各組々で發行してゐる切符で支拂はれるのです。それは勿論現場以外では通用しない紙つきれです。福島縣では現在その發行を禁止してゐますが、實際には平氣でどの帳場でも使はれてゐます。

現場はといふと停車場から一里も二里も離れた山の中で、そこに厩舍のやうな細長い掘建て(ほつた)の荒小屋が出來てゐます。それが監獄部屋と呼びならされてゐる合宿所です。眞中が通路で、その兩側に一本の丸太がねかしてある、それが枕です。日がな一日働いて來た人夫達は、眞暗な所で干鮭と腐れ澤庵で飯を喰はされて、ずらつと列んでその丸太を枕にして寢るのです。入口は二ケ所だけよりなく、その二ケ所には嚴重な警戒がしてあります。勞働は朝の六時半からかゝつて夕方の六時まで、晝飯時の半時間の休憩を除けば、あとは引つきりなしです。八時間勞働だ何んだといつてゐるお人達がをかしくなる位のものです。私達職業的な土工人夫になると、日に少なくとも三度は休みます。十時と三時とに煙草、晝に食休みといふやうに。所が監獄部屋に寢起きする人夫にはそんな贅澤は夢にも見られはしません。中にはそんな仕打ちに遇ふと不平を起して帳場にがなり込むのがゐますが、帳場では冷然として、募集屋と話をするときにはかうした條件で話をして、こつちで受取つたのだから、帳場では何とも仕やうがない。小言を持つて行くなら募集屋に持つて行けといつて取り上げてくれません。所が募集屋は殆んど毎日現場に出入してゐますが、晝の中に限つてゐるので、働きに出てゐる人夫とは顏の合はない仕

掛けになつてゐるから、結局不平も泣寝入りです。中には又氣象の強いのがゐて、一つ破れかぶれに暴れような
ど〻考へるものもゐますが、それが少しでも穗に出ると、頭がすぐ見て取つて、寢る時には、その男の向三軒兩
隣りに、料理屋の出前持ちだとか、理髪の剃子だとか、寄席藝人の落ちぶれだとか、膽玉の小さい、腕つぷしの
利かない者ばかりすぐつてあてがつておきますから、臥ながら計略をしめし合ふ餘地がありません。晝間は監視
が烈しくつて迚も駄目です。

病人は隨分出來ます。その筈です。所が足腰が立つ間は打ちたゝいてもこき使つて、使ひ切れなくなると二度
分の辨當と五十錢をあてがつてお拂箱にするのです。そんな人は停車場のある所まで辿り着くのもやう〳〵とい
ふ位弱つてしまつてゐるのです。それから體力が勞働に適しないものになると、そんな手合ひはどうせ生れ落ち
ての勞働者でなく、親類に十や二十の端金を持つてゐるものがゐるにきまつてゐますから、帳場でその親類にあ
てゝ手紙を書かせて、病氣で難澁してゐるからといつて金を持つて迎へに來さして、缺損のないやうに追拂つて
やるのです。

手紙といつてはかういふ場合の外に、實況を世間に漏らすことの出來る手紙は書けない仕掛けになつてゐま
す。手紙を書いたら開封のまゝで帳場に出さなければならないのです。帳場ではよし〳〵といつて皆んな受取り
ますが、さしさはりのある手紙は、一つ殘らず紙屑籠に抛りこんでしまふんですから。

現場には必ず物品販賣部があつて、頭のお上さんとか何んとかいふ人がやつてゐます。山の中であつて見れ
ば、人夫はそこで用を達す外はないのですが、先づその値の高さを見て下さい。運搬費は多少かゝるとしてもこ
れではあまりひどすぎるでせう。(これは福島縣の或る現場のを調べたのです)

	町	監獄部屋	
足袋	同 一、六〇〇	同 二、七〇〇	
シャツ	一、二〇〇—一、三〇〇	一、七〇〇—二、〇〇〇	
酒一本（一合八勺）	〇、二五〇	〇、三三〇	
淺草紙	〇、〇二五	〇、〇五〇	
ライオン小袋	〇、〇五〇	〇、〇六〇	
竹楊枝	〇、〇三五	〇、〇五〇	
靴下	〇、五〇〇	〇、九〇〇	
手拭	〇、一八〇—〇、二〇〇	〇、二八〇	
腹掛	二、〇〇〇—二、二〇〇	三、三〇〇	
水無飴	〇、〇五〇	〇、一〇〇	
玉子	〇、〇七〇	〇、一二〇	
乾イカ	〇、〇四〇	〇、〇五〇	
鯣罐	〇、三三〇	〇、六〇〇	
鯨罐詰	〇、三五〇	〇、六〇〇	
石油（一升）	〇、五五〇	一、〇〇〇	世帯持等ノ用品
醬油（一升）	〇、六〇〇	一、二〇〇	
米（一升）	〇、二五〇	〇、六〇〇	
草鞋	〇、〇六〇	〇、〇八〇	

一日五十錢といふのが最高の賃銀で、こんな高いものを貰つてゐたら、喰ひ込みこそすれ、三月經つたつて、四月經つたつて溜りやうは先づありません。それでも三ヶ月辛抱して十圓なり十五圓なりの金を溜めたものがあるとします。それが解傭の日に帳場に行つて現金にして貰ひたいと請求すると、帳場は仕事が思ふやうに行かなかつたとか、手なほしをするまでは金が這入らないとか、內金だけの支拂は受けてゐるが、全部の支拂がまとまらないからとか、得手勝手な理窟をつけて、半分で我慢しろとか、三分の一でふせうしろとか云つてきかないのです。喧嘩をしたつて始まりません。切符を世の中に持つて出たつて三文にもなりはしません。仕方なしに泣寢入りになつて、先方のいふなり放題な端金を貰つて、死にそこなひの體でそこをさまよひ出る外はなくなるのです。

苦しまぎれに遁走を企てる者がないではありません。然し先方でもそれにはそれ相當の用意が出來てゐます。第一現場に通ずる道路の三叉四辻には、屹度一人屈强な男が叢に隱れて見張りをしてゐます。近所の二つ三つの停車場には氣の利いた小頭が山から下りて監視してゐます。逃げは逃げても逃げ遂せないと觀念した氣の弱い男などは自殺するのがあります。いつかなぞも猪苗代湖にはまつて死んだのがありました。新聞に出たから御承知でせう。考へのあるのになると、道に出ずに草深い所につぐんで二日か三日ぢつとしてゐます。それ逃げたといふんで搜索にかゝりますが、三日も知れないと手がゆるみます。その頃になつてそつと叢を出るのですが、何しろ饑じいから腹をふくらす爲めに、その近所の百姓家にでも飛び込んで、仕事を手傳はして貰ふ外はありません。所が百姓も此頃は暮しがせち辛くなつた爲めか、氣のいゝ人は先づありません。それは氣の毒なといふやうな事を口の先きではいひながら、濁酒でも宛がつておいて、裏から早速帳場に內通します。帳場では時を移さず人をやつてその男を取り返して、內通した百姓には大概三圓の手當に食事其他の實費を支拂ふのです。連れ歸つたが最後、一同への見せしめだといふので皆の見てゐる前で、小頭どもが寄つてたかつて息の根が止るやうな目に遭はせるのです。

契約期限を延ばす爲めにはこんな奸策を施すこともあります。期限になると二三日前に小頭が眼をつけてゐる人夫にいくら位切符が溜つたかと聞くのです。三圓なら三圓溜つたといふと、いよ〳〵こゝを出る日になると三圓が一圓五十錢にもならなくなる。お前は期間中私の手下でよく働いてくれたから、口を利いて今日現金に代へて貰つてやるから、折角こんな所まで來た序に札幌でも見物したらどうだ。暇も序に貰つてやるからといふ。その男は勿論大喜びで小頭にまかせます。而して二人で札幌に出かけます。まづいものばかり食つてゐた腹には、何でもまづいものはありません。酒もきゝがいゝ譯です。忽ち二人とも上機嫌になつて遊廓とか後家屋(賣淫宿)とかにしけ込んで、氣を大きくして騷ぎます。而してその翌日には小頭と自分との持金を合せても足りない程に勘定が嵩みます。小頭はわざと途方に暮れて、帳場の大將に救つてもらふより仕方がないといふ事になり帳場に電報を打つと、帳場では得たり賢しと金を持つて二人のゐる所に尋ねて來て、當り前ならよく働いてくれた事でもあるから、今度の喰ひ込みは見ないことにして解約してやつてもいゝのだが、何しろ不景氣で仕事も思ふやうに行かない所だから、一つ働いて使つたゞけは返してもらひたい。三月も仕事に慣れたのだからこれからはいくらか樂だし、又樂な方に廻してもやるから、と眞綿に針を包んだやうな事をいはれるので、一たまりもなく又三ケ月の苦役に服さねばならなくなるのです。この邊の呼吸は、苦界に身を沈めた女に對して女郎屋の亭主が施す仕掛けと瓜二つです。人身賣買といへば男女の區別こそあれ、しきたりは全く同じです。

私は根が勞働者ですから渡り言葉も心得て居るので、帳場に行つてかけ合ふと二つ返事で備つてくれます。而して三四日すると、小頭株に取り立てられて、五六人の人夫を見てやるやうになります。私はかうしてもう三度ほどこの境界にゐる人達の樣子を視察しました。そのことが一寸世の中に知られると、北海道の人で監獄部屋の不始末を實見して知つてゐる人から、痛切な手紙を貰ひました。或は自分の弟が北海道の炭鑛に稼ぎに行つて一

度手紙が來たつきり、更に手がかりがないが、その監獄部屋といふのにゐるに違ひないから、何んとかして目星をつけて貰ひたいと訴へて來た女の人もありました。かういふ心持で親しいもの丶行方を氣遣つてゐる人は幾人あるか知れないのです。

こんな忌々しい習慣に對する地方當局の態度は如何かといふと實に生ぬるいものです。第一駐在所は大抵買收されて土工組の味方です。かういふ大土工の經營者は大抵地方々々の有力な資產家ですから、警察の方もさはらぬ神に祟りなしといつたやうな態度を持つてゐて、私なんかゞ話に行つても、うろんな奴だといふやうな色眼鏡で見られる外はないのです。素人でも玄人でも土工人夫と名のつく以上は、人間並みの取扱ひを受けて暮したいといふのが私の腹です。土工人夫といふと人間の屑です。他の種類の勞働者達には、相手にされないやうな人間達です。けれども土工人夫だつて人間は人間です。その中に這入つて見ればお互の間に義理もあれば人情もあるのです。七萬人といふ人間が今いつたやうな境界にあるとして見れば、私共として默つて見過しには出來ないのです。

H兄

さうその人は熱心を面に表はして私にいつて聞かせました。これだけの話を聞くと私の想像力は色々な光景を私に見せます。以上の事實を骨子にして私は一つの創作を成就することが出來るやうにさへ思ひます。然し私はそれをするよりも、事實そのものを何等の取捨もなくあなたに報告して世の中の人に知つて貰ふ方が焦眉なことだと思つてこの手紙を書きました。この雜誌の讀者の中には、實際の勞働運動に十分の知識を有し、又それにたづさはつてゐる人も數多いと思ひます。これだけの事實がこの人達に取つて考慮の種になり、一般讀者に對して或る暗示を提供することが出來たなら、私の大幸とする所です。

（一九二一・一月十五日）

第十一信

中川一政兄

私はあなたの畫を愛するものです。愛するといへば失禮ながらあなたの人柄をも、人柄をこそ世に珍らしく愛するものです。愛するといへば子供とか、小さな美術品とか、花とかに對して最も適當にあてはまる言葉のやうに聞こえるかも知れません。高い所から低い所にあるものに對して使はれる言葉のやうに見えるかも知れません。然しこゝに私はさうした心持を云ひ現はさうとはしてゐないのです。あなたを尊敬するともいひたいのです。あなたを畏敬するともいひたいのです。けれどもそれらの言葉では私の心持の全部は含め得られません。だから私は矢張愛するといひたい。あなたがそれを受け入れて下さると否とに係らず、私としては大膽にこの言葉を主張したいのです。

あなたと初めて知つたのはあの晩でした。救世軍の京橋小隊で私が聖フランシスについて少しばかり持ち合はしてゐた知識（知識です、智慧ではありません）をそこに集まつた人々に取次ぎをした時、あなたは富田氏とそこに來てをられて、階上の雜談會にも列席されたのでした。會が果てゝ尾張町の停留所で乘換へを待つてゐたら、あなたもそこにゐて、煙草に火をつけてゐられました。私はあなたを認めるとこちらから話しかけたい氣持にさせられてゐました。元來人に對して氣の重い私は、一度遇つた位の人には滅多にこつちから話しかけるやうなことはしないのですが、その夜は不思議に例外の一つでした。私があなたに「どちらにお歸りです」と聞いたら、あなたはもう私の顏を見忘れてゐられるやうで、もじ〳〵して私の顏を眺めてゐられました。二人が電車に

乘り込んだ後、あなたは突然思ひ出したやうに、「あなたの『新潮』に描いた自畫像はあなたによく似てゐますね」と云はれました。私はほゝゑまずにはゐられませんでした。私の畫の方から私の顏が生れ出たやうな物の言ひ方をあなたはするのだから。

その後私はあなたに四度お目にかゝつたきりだと思ひます。顏を合はす度毎に段々疎くなつて行く人もあるし。

あなたが詩人であるといふことは人傳てに度々聞かされました。あなたの畫から考へても私は十分それを信ずることが出來ました。然し不幸にしてその一篇をも讀む機會を持ち得なかつた私は、少しずるい考へだつたかも知れませんが、友人の足助が出版をやつてゐるのにつけこんで、その詩を出版したらどうだと持ちかけて見ました。足助もそれは考へてゐたものと見えて、すぐあなたと交渉を始めました。而してすぐあなたが好きになつてしまひました。あなたの詩も好きになつてしまひました。私に遇ふ毎にそれを推賞して、あんなものなら初校といはず、二校三校までも喜んで引き受けていゝといひました。所があなたの詩集は用紙か何かの手ちがひから中中市場に現はれませんでした。それが待遠しい氣持を幾度か私に味はせました。

とう〳〵一冊の小さな集となつて、あなたの詩が私の手許にとゞいた時、私はあなたに初めて遇ふやうな、よく知つてゐて、少しも知らないあなたに初めて遇ふやうな、はにかみに近い心を以てそれを開き讀みました。第一頁の「春光」でおやと思ひました。然しそれはあなたの心の劇場の幕のやうなものでした。次の頁の「幼兒」に行つたらもう涙がこぼれました。それから涙がこぼれ續けました。私は半分も讀まない中に、誰にでも讀ませてやりたくなつて、それを妹の所にとゞけてしまひました。一寸讀んで見ろといふつもりだつたのですが、妹の方では貰つたつもりで返しませんでしたから、その後半は程たつて、足助の方からまた一冊を送つて貰つて讀ま

ねばなりませんでした。

何故私があなたの詩にそんなに感激せねばならなかつたのか、それを解くのは恐らく私の恥をさらけ出すことでもあるかも知れません、私は虚僞で一杯になつた人間です。生れてから今日まで育つて來た間に、境遇は私に色々なことを敎へ、それを私の本性に鍍金させ、合金にさせましたが、それらのものは私を飾つたよりも傷けました。私がこの結果に無自覺であることが出來ないだけに、私の虚僞は私に取つては――恐らく他人に取つても――忌はしい不愉快なものです。私は如何に私自身を粉飾すべきかを心得てゐます。心得てゐるばかりでなく、悲しいことには不知不識の間に實行してゐます。而してそれが私の唯一の仕事なる藝術の中にも隱見するやうなことを見出すと、この上なく自分が卑しめられます。けれどもあなたには少なくともそれがありませんね。而して他人の裏に虚僞のあるなしを詮索するに暇がない程、さういふものから自由ですね。あなたの心は自在に動きます。風がわたる時に草の花が自在に動くやうです。而してその花は緑の莖に連なり、大地にからみ附く絹絲のやうな根に續いてゐます。風がやむと、花は素直にその莖の上に立ちなほり、いさゝかのしなもせずに、靜かに青空に向つて似合はしい矜恃を示します。あなたの心は自在にとゞまります。その姿は虚僞に苦しむ私にも、何等の反感を起させません。虚僞を知れるものが、虚僞を持つてゐながら持たぬ振りする人に對する時ほど反感を催すことはありません。あなたは然しさういふ反感を絕えて私の心に喚び起さないのです。それは綺麗に呼び起さないのです。私はいひます、かういふ人を地上に持つことは、一人の詩人を地上に持つことです。

反感を呼び起さないどころではありません。私の心はあなたの詩によつて淨められます。我慢の角を惡意もなく好意もなく、自然のまゝに折られるのを感じます。あなたが自然を歌ふと私もあなたと同じ心で自然を見たくなります。あなたが切ない孝行の思ひを述べると、私もしめやかな心で同じ事がしたくなります。あなたが弟妹

に對して愛着を語ると、私はあなたの弟妹を妬ましいものにさへ考へます。それはあなたが譃をついてゐないことが私の胸にしつかりと響いて來るからでせう。言葉といふものは本當に不思議なものです。あれは死んだもののやうだが生きてゐますね。言葉には意志がありますね。擅まゝに逆用しようと企てる人には言葉はどこまでも不從順だが、言葉をその內在的な力に於て受取り、それを素直に用ひようとする人に對しては、實に拔け目のない、自動的な、忠實な友達となつてくれますね。どつちの人が用ひてもそれは他人見には同じ形同じ音の言葉ですが、何といふ違つた働きをそれが勤めるでせう。あなたは一見貧弱と見えるあなたの語彙の中から語つて居られるやうですが、考へて見るとさうではないのに相違ありません。あなたはあなたの獨自な感情を表現し得べき言葉を丹念に求められたのでせう。而してその言葉は、あなたが選んで用ひた言葉の外には無かつたのでせう。言葉を粗末にあつかひ、それを濫費して憚らない人ならば、あなたのに似た感情を表現する爲めにもつと澤山な、粉飾された言葉を惜しむことなく用ひたに相違ありません。それはあなたのに似た感情を表はすことは出來るかも知れないが、あなたの持つやうな感情は、遂に現はすことが出來ずにしまふでせう。その差は一步です。しかもそこには、無限な距離があらねばなりません。この一事が往々にして詩人を以て任ずる人によつて忘られ、詩を讀む人によつて見逃がされてゐるやうに私は思ひます。けれどもこの一事を見失つては、どこに詩があり詩人がありませう。

「人はなべてかなし」

とあなたが歌ひ出す時、私はもう涙を感じます。それはあなたの生活とあなたの人とを垣間見た私に罪があるのでせうか。

「人はなべてかなし

さ夜ふけし夜のみち
米何升を買ひてかへるもの
あにわが母のみならんや」

この一聯句を一度讀んで、もう一度「人はなべてかなし」といふ言葉に返つたならば、あなたの生活とあなたの人とを全く知らない人でも心を打たれずにはゐられないではないでせうか。これさへ私の最眞目の思ひ過ぎでせうか。それなら私は詩の全體をこゝに揭げねばなりません。詩集を讀めといはねばなりません、私を最眞の引き倒しだと考へる人は詩集の全體を讀んだ後でも、お前のいふ程のことはないではないかといふに違ひありますまい。その上は「左樣なら」をいふより外に道はありません。私は敢てその人を詩の分らない人だと云ひ切らうと思ひます。

あなたは多分この手紙を讀んで、これ程いきり立つ私の態度に迷惑の苦笑を漏らされるかも知れない。全く私は少し馬鹿でした。私はもつとおだやかに話しかけませう。然しもう少し云はせて下さい。私の云はうとするのはあなたの言葉で凡ての詩が書かれねばならぬといふのではありません。又あなたの感情が詩を生むべき感情の凡てだといふのではありません。私は去年「槐多の歌へる」によつて近頃になく驚かされました。而して强く感じさせられました。然し「槐多の歌へる」とあなたの「見なれざる人」との間には何んといふコントラストがあるでせう。しかも私は村山氏に於いても一人の詩人を十分に感得することが出來ました。そこには一つの虛僞もない、獨自な感情があります。而してその感情が誤ることなくそれ自身の言葉を語つてゐます。輪廓のはつきりした感情が言葉を貫いて私の朦朧とした感情に肉迫し、私の胸の中に根本的な衝動を異象の如く築き上げます。だから、私は强ち(あながち)あなたの所有にのみ溺れて物をいつてゐるのだとは自分を思ひたくはありません。村山氏なりあ

なたなりの純化された感情が、火の洗禮のやうに、私の眠りこけようとする感情を眠さましてくれるのです。これだけをいひ添へるのを許して下さい。

偖てこれからあなたにのみ靜かに話しかけませう。あなたがあなた自身をさう純粋に保ち得る祕密を私に教へて下さい。「大なる思想が詩人の天職だ」とホヰットマンがいつた時、詩の領域に於て大なる思想とは何んであるかをあなたによつて知つたやうに思ひます。それは大きな哲學の系統を編み出す基本となる思想だとか、世界の表面を政治的や道德的に變革させ得る思想だとかいふのではないのですね。大なる思想とは悪びれない獨自な感情の深さを云ふのですね。私が今まで輕視して省みないやうな心持をあなたは決して輕蔑せず、あなたの暖かい抱擁の中に育てあげて行かれます。而してそれが育ち上ると、私は自分の無情と浪費とに氣附かされます。こんなものがこんな所にあつたのだらうか。こんな立派なものを私は如何して今まで塵芥同様に見て過してゐたのだらう。而してあなたの拾ひ上げたものは美しい。遠い丘の上に立つて、聞こえもせぬのに懸命に話しかける一人の小兒の赤い唇は花です。粗食に慣れよとあなたに頭撫でられる犬は頼み甲斐ある働き仲間です。「ときはぎはむらがり、ゆく春はなやみあり」單純な崇高さはこの言葉の中に鳴り響いてゐます。

「三郎(犬)よよくふとりたりな
たま〳〵に逢ふよろこびは
尾がちぎれるぞよ」……(三郎といふびつこの犬と僕)

「あはれ父はゆくよ
外套一枚にて
寒くはなきかと

われ心がゝりに云へば
さむくなし
この絹ばりを借りてゆくぞと
わが傘を手にもてゆけり」……(父の出發)
「畫を描き來りて
ひるすぎ
われはかけたる茶碗もて
麥めしをくらふ
秋なれや
日の光うら〳〵
木のかげはまどろむ」……(ひるすぎ)
「いとをしめ汝が兒を
おのがじし
わが兒を負へる
ちまたの母は涙ぐましきかな」……(貧しき母)

あなたは涙ぐんでから「涙ぐましきかな」と書くのです。「涙ぐましきかな」と書いてから誘はれて涙ぐむのではないのですね。若しあなたが私の僭越を許すなら、私を涙ぐませた詩をこゝに數へて見ませうか。「野の娘」、「まづしき母子」、「ある秋」、「ぼくのうち」、「靜物」。その外に私が前に拔句した數篇の詩は共に私を涙ぐませま

した。私のやうにねぢくれた心をも素直にして涙の流れ出る道を開いてくれました。私はあなたに感謝します。あなたの詩に感謝します。あなたの詩人に感謝します。

世の中にあなたの愼み深い聲に耳傾けるものゝ數は尠いかも知れません。然しあなたを愛するものは正しく愛することをあなたから敎へられずにはゐられないでせう。苟もあなたを知るものは、凡て正しくあなたを知ることが出來るのです。それに增していゝことが何處にありませうか。吃者のやうに大きな聲で粗雜な表現しか出來ない私は、聲が大きいために、謬つて數多くの人の耳を聳かしはしますが、私の表現の粗雜さに、私の心を心のまゝに受取ることの出來ない人の數は尠くないやうです。それを思ふと私は淋しさを感じます。然しあなたを羨ましくさへ思ひます。

けれども私はあなたを愛することが出來ます。私はそこに自分の賴母しさを感じ得ます。あなたの仕事が益々榮えるやう心から祈ります。

（一九二一・三月十五日）

（一九一九年二月—一九二一年四月「我等」所載）

自己の要求

他人が私を見たら何と評するかを私は知らない。然しながら、私は自分の生の最大なる滿足のために藝術を選んで自分の生活とした。私は今の時勢に如何なる仕事が最も多く、最も深く要求せられてゐるかといふ問題には考へ及ばなかつた。私は單に私の欲する所に從つたのみだ。私の力量が私の欲する所と一致して働き得るかといふことすらも考へなかつた。實際私がこの道に分け入るに至つた以前は勿論のこと、既に分け入つた現在でも、私の平生をよく知つてゐる筈の周圍の人々の間には、無益な力を効果のない分野に注ぎつゝあると信じ、且つ適當の機會が來たら、公然とそれを主張しようと身構へてゐる者がないではないことを私は知つてゐる。それだから私を遠くから見守り、私のなしつゝある仕事が古來の天才達に比べて如何に慘めなものであるかを知つてゐる人々が、——若しそんな事をする好奇心があつたとしたら——私を非難し、輕蔑し、折角の一生を時勢に適せぬ、道樂氣一遍な、暇潰しをしてゐると見るのは無理のないことだ。それにもかゝはらず、私は時勢の要求といふことも、自分の適所といふことも省みる暇もなく、自分の欲する所に從つて藝術を私の生活としようとしてゐる。どう考へて見ても私にはその外に進んで行く道がない。だからこの一事は私に取つては是非の問題でなく、單純なる必要に過ぎない。

以上の理由から私は私の生活によつて私の住む社會に何等かの要求を持つことが出來ない。ある時までは私はある要求を持たうとした。私の仕事に對し、それ相當の報酬を社會がしてくれるのは當然だと思ひ且つ言明したことすらあつた。それは然し今から考へると、自分の心持を十分に徹底した考へ方ではなかつた。社會の實情に

何等の顧慮を拂はず、自分だけの要求通りに導いて行かうとする生活であつて見れば、社會がその生活に對して風馬牛の態度を取つた所が、それは仕方のないことであるよりも寧ろ當然なことであらねばならない。私は今、自分の要求だけで社會に生きてゐようとする人間であることを明かにした以上、社會に對して何等かの報酬を期待するさもしい要求だけはしてはならないと觀念するやうになつた。

言ひ換へれば私は徹底的に自己本位の人間であらうとしてゐる。この立場が徹底的に實現されるやうに自分の生活を導いて行かうとしてゐる。それが社會にどんな益を與へるか損を與へるかといふやうなことは考へる事が出來ない。但し私が欲する所の生活を組立てゝ行くためには、已むを得ず、環境に働きかけて行かねばならぬ場合が生ずるかも知れない。而してその場合は過去に於ても生じた事であるから、未來に於ては恐らく過去にも增して多く生ずるだらうと思つてゐる。縱令、然しかゝる場合が生じても、それは私が社會をいくらかでも善くしようといふ誓願なり野心なりから生れ出た事ではなく、私が現在の私自分を住みよくしよう爲めの必要から惹き起された事柄に過ぎないのだ。

私は嘗てもつと妥協的な生活を考へたことがないではなかつた。環境と自己とを對立させて、環境のためには自己の生活を無視してかゝるのが人たるの道だと敎へられもし、さうしようと考へたこともあつた。又かく對立した二つの對象の何れにも稍〻平均した重さを置いて、兩者の利害正邪が矛盾し撞着しない所に自己の位置を定めるのを最上の道と思つたこともあつた。然しながら第一の場合に於て、私は明かに私自身の叛逆に遇つた。如何に理をもつて說き聽かしても頑として承服しようとしない自分といふものゝあるのを發見した。私自身の全存在が地上からこそぎ取られるのでなければ、私はこの境界に安住することが出來ない。然し私がこの地上からこそぎ取られてしまつたら、安住すべき私もないのだ。さうした不服によつて私は私自身によつて反抗された。そ

れは勿論私が環境を信用し得ないところから來てゐるには相違ない。嬰兒が母を信頼するやうに信頼することさへ出來たなら、私も亦環境に私の全存在を投下して自ら怪しむやうなことはしなかつたらう。然しながら不幸にして私の持つて生れた性格は、私にそれをさせなかつた。私は環境と私とを秤の兩端に置いて見る時、私の方にも環境に對して或る重さを有することを感じた。而してそれは環境から獨立したところの重さである。それを感ずる以上、私は私自身を無いに等しいものとして環境の犧牲にすることが出來なかつた。その僞瞞だけは私として忍ぶことが出來なかつた。

それならば環境と自己との兩者に稍ゝ平均した重さを置いて、兩者の利害正邪が矛盾し撞着しない所に自己の位置を定めたなら如何だつたかといふに、それすら私には出來なかつた。環境と自己とを同じ程の重さのものと見ることは出來るとしても、利害正邪の矛盾撞着しない位置に自分を置くといふ輕業は、私の小手先には仕遂すことの出來ない所だつたのみならず、私の存在が環境に對して何等か爲めになるやうな働きをなし得るとは思はなかつた。責任を回避する譯ではないけれども、私の生活が環境に對して、善惡共に何等かの影響を及ぼしてゐると意識するのは、私の堪へ得る所ではなかつた。或る人はいふかも知れない。お前が縱令そのことを意識しようが意識しまいが、お前の生活が環境を多少の程度に於て動かしてゐるといふ事實は拒むことが出來ないと。さうだ、さういふ見方はこれまで人間が社會的生活を營む場合互に約束してゐたことだ。その約束が習慣となり、習慣が常識となり、常識がかゝる見方を否むべからざる事實としてしまつた。私なる個性の生活はその一瞬々々に於て環境に働きかけてゐるが故に、私は私の生活に於て環境に對し絶大の義務と責任とを感ぜねばならぬ。それは或はさうかも知れない。然しながらかく約束する以上は、その反對の場合も同時に約束されなければならない筈だ。卽ち環境も亦已む時なく個性に働きかけてゐるが故に、環境はその凡ての狀態にあつて個性に對し常に絶大

の義務と責任とを感ぜねばならぬ筈だ。然るに私は環境――それが如何なる種類のものであれ――からかゝる責任感を以て迎へられたことがあるだらうか。私は環境それ自身からかゝる仕向けを受けた經驗を一度も持つことがなかつたと言はなければならない。私と同樣な環境の中に生活する個人からは、その環境が私に對して作つてゐる善惡正邪の關係に就いて批評し、或は訂正を行はうとするやうな試みを受けた覺えはある。然しながら環境それ自身からは未だ曾て受けたことがない。環境そのものは冷然として或は私を向上せしめ、或は私を墮落せしめてゐる。かゝる場合、縱令私がその影響によつて向上してゐようとも、それが私の生活の上に働きかける具合からいふと何時でも壓迫といふ形としてより感ぜられない。何故ならばそれは何時でも私の內部的要求に準備が出來てゐると然らざるとに頓着なく行はれるからだ。こゝに於てか、環境と個性とに同じ重さを置くといふ前提があるにもかゝはらず、私の個性は環境に對して片務的な義務と責任とを負はねばならぬ結果に實際はなつてゐるのだ。私の堪へ得ないといつた苦痛は恐らくこの點に胚胎してゐるものらしい。單に片務的であるのは損だから堪へ得ざる苦痛だといふのではない。私のやうな十分磨かれない性格のものには勿論さうした苦痛もあることはある。片手落ちな約束を取り結んで個性をまんまと手なづけようとするのは怪しからぬといふ不服もあることはある。然しながら先祖以來かゝる約束を常識とするまでに慣らされた私は、單にそれだけの理由では、この桎梏を堪へ得ぬほどの苦痛だとは感じないだらうと思ふ。そんな人爲的な若しくは倫理的な、正しいとか正しくないとかいふことよりも、もつと自然的な若しくは物理的な物の不均衡からひとりでに結果される不合理が堪へ得ぬほどの苦痛として何となく私に感ぜられるものであるに違ひない。强ひてかゝる考へ方に自分自身を當て篏めようとすればする程、私の內部には苦痛といふ感じのみで表現せらるべき毒々しい沈澱物が生じて來て、段々私の生活力が萎靡して行く。それに對して私は反抗せずにはゐられなくなるのだ。それは酸素なり窒素なりが、私の生體の要求

に頓着なく供給される時、私が常に生命を脅かす不安に襲はれ續けねばならぬのと同様な狀況だといふことが出來る。

そこで私は已むを得ず私の見方を變へて見ねばならなくなつたのだ。環境の前には一つの個性は無であると考へる事もなく、環境と個性とは等分に近い重さを以つて對立すべきものだといふ風に考へることもなく、個性は環境に頓着なくその內部的要求を以て生活すべきものだといふ考へ方である。個性は絕對の自由を捕へ得るために生きるがいゝ。その代り個性以外のものには亦絕對の自由を許さねばならぬ。環境が一つの個性に對して如何なる暴威を振舞はうとも、それは環境の自由である。その爲めに個性の存在が粉微塵にされ終らうとも、個性は環境に對して嗟嘆不平を叫ぶべき謂れはない。又個性がその生活によつて、どれ程環境に霑惠的な結果を將來しようとも、環境は個性に對して感謝せねばならぬといふ理由はない。而してその反對も亦眞である。即ち個性が環境を如何やうに動かさうとも、環境は個性に對して不平若しくは感謝を云爲すべき義理はない。

こゝまで理窟をつけなければ、私が藝術を私の生活として選んだ譯が私には分らなくなる。何故なら私が藝術を選んだのは前にも云つた通り、全く私の內部的な欲求からのみ選んだのであつて、環境に對する顧慮は毛頭も行はれてゐないからである。私は普通にいふ最も我儘な氣持でこゝまで步いて來たのだ。自由といふならば私がかく選んだ凡ての自由は私にある。責任といふならば私がかく選んだ凡ての責任は私にある。私の生活が生き甲斐のあるものであつても、全く無價値なものであつても、その悲喜は全然私のみによつて感ぜられなければならないものだ。

そこで私は自分の生活に對してひたむきにならずにゐられなくなる。他の力が自分をどうかしてくれると思つてゐればこそ、私は自分の生活に對してもある暢氣さを感ずるけれども、何から何まで自分の仕業だとなると、

さすがに愚圖々々してはゐられない。そこから私の個性に對する建設が始まり出す。これ程自分の所有を明かに自分の所有にしてしまへば、もう不平も嗟嘆もありやうはない。

兎も角も私は私が稟け得た衝動(卽ち內部的要求)と力量との凡てを盡して、私の生活を最上に生活すべき自由の天地に立つた。私は最上に私の選んだ藝術の生活を愛する。次の瞬間は知らず、かく筆を執りつゝある現在に於て、私自身の藝術に勝つて私を喜ばしめるものは外にはない。だから私は、私の藝術を私の力の及ぶ限りに於て間然する所なく美しく尊いものに仕上げたいと思ふ。それを成就するには如何したらいゝのか。それは私の個性を美しく尊くする外に道がない。誰でも自分の仕事を少しでも眞面目に仕上げようと目論んだものが見出すであらうやうに、仕事は結局仕事をする人の生活に外ならない。その生活が美しく尊くされるための熱意と要求とがそのまゝ表現される時、そこに一つの仕事は生れ出るのである。仕事も亦個性に還元する。

然らば如何にして衝動と力量との凡てを盡して私の生活を最上に築き上げるのか。私は環境の要求に從ふことなく、內部の要求に忠實に從ふことを必至的に欲望せずにはゐられない。然しかくせんとする私の道は常に平夷であることがない。そこには必ず何等かの障害が起つて來て、私は自分の持ち合はした力量を盡してこれを乘り越えて行くことを餘儀なくされる。何が私の行く道にかゝる障害を提供するか。それは私の接觸する廣義に於ける環境である。私は私に障害を提供する環境を私の生活內に攝取する爲めに、私自身の姿に從つてそれを創り直さなければならないことになるだらう。

或る人はまたいふかも知れない。お前は自分の個性を唯一のお前の對象とするといつたではないか、然るにもうお前の自己建設の道程には環境が轉がり出るのかと。私は答へる。私が「個性は環境に頓着なく、その內部的要求を凡て生活すべきものだ」と言つたのは、環境を無視せよといつたのでもなければ、頓着する必要がない程環

境は無力なものだといつたのでもない。私には遁世者たるべき意志がないから環境を無視する謂れがない。私の前には、儼然として環境は實在してゐる。又それが無力だなどゝは思ひも設けない。私のやうな器量の小さな人間に取つては、環境は實に容易に動かし難い絕大な力としてのみ感ぜられてゐる。私の言はうとするのは以上の事情あるにも係らず、私の內部の要求に從つて私の力量の許す限り環境を切り開いて私の生活を建設しようといふだけのことだ。だから私が自己本位の生活を徹底しようとすればするほど、環境との交渉は深く廣くなつて行くべき筈であるのだ。個性が明確となればなる程その要求も亦强靱となり、要求が强靱となればなる程、環境との間に障碍の形に於て起り來る交渉が緊密となつて來るのは當り前のことだ。

一つの例として私の性的要求を取つて述べて見ようか。私の性的要求の事には靈の交渉のみならず肉の交渉が明かに豫想されてゐる。私はそれを正しいよいことだと思つてゐる。又私は一人以上の異性に對して同時に愛着を感じ得る豫想を持つてゐる。而してその實感をすら有してゐる。同時に私を愛する異性が、私に對すると同じやうな關係に於て私以外のものを愛することには、十分に深い嫌惡を感ずる。この奇怪な矛盾は私の性的要求の本質的に調つてゐるか否かを私に疑はせる。又肉の交渉に至るべき靈の契合なくして、異性から肉を要求しようとする欲求によつて虐まれる瞬間を屢ゝ經驗する。然しながらかゝる欲求は、若しそれを實行に移すならば、私の生活をこの上なく慘めにするものであることを知り拔いてゐる。この醜惡なる撞着はまた私の性的要求の本質的に調つてゐるか否かを疑はせるに十分だ。

現象の客觀的觀察を以て能事とする自然科學者は、生物の生活の內奥に潜む矛盾撞着には十分の注意を拂ふことなく、人間以外の生物の生活現象に於ける觀察を押し進めて人間界にも及ぼし、蓄妾者あるが故に人類には多妻的の傾向もあれば、又放縱に肉に赴く傾向もある。これが人類に存在する性的本能だといつてゐる。自然科學者

の立場からいへば或はこの觀察は正しいかも知れない。然るに世の警世者とか道德家とかいふ人々は、直ちにこの自然科學者の所說を採用して、本能は危險なものである、その赴く所に放置して置いたならば人間の墮落は目睫の間のことだ。それ故に人間は人爲の法則若しくは規約なる道德律を以てこの奔馬の如き本能に轡しなければならないと說く。

けれども私自身の經驗からいふならば、自然科學者が人間の性的生活において觀察した所は私（人間の一員なる）の性的生活の一面であつて、客觀的觀察を許さないやうな內奧には、それと反馳する他の性的本能が働いてゐるのを發見するのだ。だから私に取つては自然科學者の謂ふ所の性的本能なるものは私の本能の全部ではない。私は道德的規約から全然切り放されても、外面的衝動に對して反抗する內面的なる性の衝動を持つてゐる。この根柢的な矛盾は何處から來てゐるものだらう。これも外面的の觀察であるから正鵠を穿つてゐるか如何かは判らないけれども、鳥獸の性的生活には私の中にあるやうな奇妙な矛盾は無いらしく見える。彼等の生殖期間は一年の中に、或る短い時間に限られてゐて、私のやうに不定時に發作することがない。多妻の種族と、一夫一婦の種族と、多夫の種族とは嚴別されてゐて、それらの諸形式が交雜して行はれてはゐない（恐らくある極めて明白な理由のある場合を除くの外）。然るに私には如何にしてそれがあるのだらう。而してそれに苦しまねばならぬのだらう。

この忌々しい疑惑は私の性的生活のみならず、私の生活全體の脅威となつた。私は或る執拗さを以てその根源に觸れ、出來得るならばその禍根を絕ちたいと希つた。何故ならばかゝる疑惑に苦しめられてゐる間は、私の生活は最上の生活であることが出來ないからだ。私の生活は統一のない不愉快なものに墮してしまふからだ。この不安定の狀態から私自身を救ひ出す爲めに遂に發見した所のものは、私の肉慾が必要以上に强過ぎるといふこと

だつた。少くとも一面に於て私はこの病的に過剩な力によつて苦しんでゐることを知つた。尋いで私は社會に公娼制度のあることに氣附いた。公娼の制度が存在するといふことは性慾が商品として取扱はれてゐるのだといふことを意味する。言ひ換へれば、女性が何等かの必要から、本能の要求に背いた目的を以て己れの性慾を犧牲に供してゐるといふことを意味する。動物界にはあり得ぬかゝる現象がどうして人間に發生したかについては、專門的研究家によつて意見を異にするものがあるであらう。然しながら如上の現象が人間の生活の中に儼存するその事實だけは誰も拒むことが出來ないのだ。この事實が許されゝば何故に私に肉慾が必要以上に働いてゐるかゞすぐ理解出來る。女性が性慾を商品とする爲めには成るべく多くの顧客に成るべく多く需要されるやうに自分の性的誘惑力を訓練せねばならぬ。男性は女性のこの誘惑によつて知らず識らず本然的な貞操から自分の性的生活を墮落させ、益〻多淫の傾向を助長する。若し後天的性質は遺傳しないものと假定するも、かゝる傾向は人間が生れてから成熟期までの間に培はれるには十分だ。私も思へばその因果には漏れ得なかつたのだ。

然しながら私も亦救はれ得ない程に墮落し終つてはゐない。私の全存在は私の本能の逆用的傾向に對して苦痛の呻き聲を擧げてゐる。私はこの不自然な位置から自分を救ひ上げたい爲めに、遂に環境に對して訴への聲を擧げるのを餘儀なくされる。女性をその悲慘な現狀から解放してくれ。女性がその性慾を衣食の具として用ひねばならぬ社會生活の現狀を打破してくれ。さう私は訴へねばゐられなくなる。

然しさう私が訴へる時、人は私を以て志士仁人の一人であると看做すことはなからうか。少くとも自ら志士仁人を以て任じ、若しくは志士仁人を假裝して得たりとなすものと思惟することはなからうか。若し萬一にもさうした斷定が下されるなら、それは私に對する思ひもよらない謬見だといはなければならない。私がかく訴へるの

は、私の生活がそれによつてより多く可能的になるからである。それは全く私一箇の生活をより多く統合的としたい要求から持ち出されたことだ。社會とか人類とかを向上發展せしむる爲めに、自己の問題などは棚に擧げて置いて努力する。さういふ大望によりも色づけられる動機は更に私の衷には働いてゐないのだ。この點を私は極めて明瞭にして置きたいのだ。

(私が一人以上の異性に對し同時に愛着を感ずる傾向を有つてゐるといふ事實も、他面において私を愛する異性が、私に與へる愛と同樣の愛を私以外の人に與へることに對して深い嫌惡を感ずるやうなことさへなかつたならば、私は安んじてその傾向に從つて生活してゐるだらう。然し現在においてはそれに附隨する矛盾あるが故にかかる傾向に身を任かすことが出來ないでゐる。この矛盾が如何に解決さるべきかを私はまだ把握することが出來ない。私の朦朧たる直感からいふならば、戀愛の偏一性は、或は社會生活の便宜主義が生み出した後天的な狂ひではないかと疑はれる。戀愛の多角性が本來の本能的要求ではないかとさへ思はれる。何故なら、私の根柢的な要求には何となくこの傾向が力强く動いてゐるやうに感ぜられるから。然しながらこれは肉慾過剩の事實のやうにまだ明瞭には私に感知されない故に、私は暫くこの問題を不問に附して置く。然しこれは私にとつてはいつか當然解決されねばならぬ重要な要求である。そのことだけを私はこゝに明言して置く必要を感ずる。)

私は今一つの例を申し出る爲めに饒舌を費やし過ぎたかも知れない。然しこの例は私が環境に對して取らうとする視角をいくらか明かにしてゐると信ずる。繰り返していふ、私は環境を無視するものでもなく、又それを無力であると考へるものでもない。その反對である。然しながら私は如何なる場合でも私の生活を、環境の要求によつてゞはなく、内部からの要求によつて導き出さうとする。而して内部の要求が統一的に滿足されない場合には、その缺陷を環境と自己との撞着に歸して、環境を私の要求通りに更正しようと試みる。環境が畢竟私を壓迫し終

るものであらうが無からうが、それは問題とはならない。結果の如何を問はず私に取つてはさうするより外には殘された道がないのだ。

それ故に私は結局孤獨でなければならない。私といふものが二人以上存在し得ない限りは、私に同盟者があつてはならない。私は何處までも獨りで歩いて行つて見よう。私のやうな人間を人間の社會的生活に於て必要とするか如何かは知らないけれども、私にさういふ要求が働く以上、私はそれが何かの役に立つたのではないかと思つてゐる。少くとも實際の社會的生活にあつては、私のやうな人間は、何等かの意味に於て、被迫害者の位置に立ち通さなければならないことを私は知つてゐる。私は心ならずもその迫害に打ち負けて、外面的に社會生活の要求に妥協することがあるかも知れない。然しさうした場合でも、私は必ずその服從を屈辱的なものだと感じないではゐられないだらう。

何等かの意味においてある團體を作り、その綜合的な力によつて、內容を更新しようとするやうな企圖からは、私は私の力の及ぶ限り除外されることを試みよう。同じ道理によつて私は過去の外部的附纏物からも自由にならなければならない。私の生命の中に織り込まれた過去を如何することも出來ないのは勿論のことだ。それは然し過去と見えながら實は過去ではないのだ。生命に同化した過去は生命である、現在である。過去の外部的附纏物といへば、それが爲めに私の最上の生活が阻まれるところのものだ。それは私の實感が明かに生命としての過去から擇び別けることの出來るものである。內部的要求の强度に應じて、私はそれらのものをかなぐり捨てるだらう。實際自己に卽した生活は窄き門だ。その門に入らんとするものは身外の凡てを捨て去らねばならぬやうだ。

お前がさう哲學者じみた物の言ひ方をするなら、と或る人はいふかも知れない。お前はカントの所謂普遍妥當

性とか、絶對命令とかいふものをどう考へる。さういふものを考へて見たことすらないのか。それならお前の內部經驗は餘りといへば餘りに淺薄貧弱なものだといはなければならない。私はそれに答へていふ。理論的にカントの提唱するやうな想定を首肯するとしよう。然しながら理論的でない、現在の生活において、人間の生命を自律し、人に共通して渝らざる超我的我の實在を實證感得すべき道は何處にあるのか。それは各人が各人の內部的要求に忠實に服從して生活して見た時にのみ成就され得るものではないか。その時になつて凡ての人の要求が拒むべからざる共通點を持つてゐたならば私達はその時にカントの想定を具體化することが出來るのだ。各人が純粹なる自己內部の要求によつて動かない間は縱令各人の要求と見えるものが一致してゐても、それを以て直ちに我の普遍擴充と見ることは出來ないではないか。そんな境地ではカントのあの莊嚴な結論は到底實證されるべくもないと私は思ふのだ。

　私の態度を更に非難する人はかういふかも知れない。お前は何故に自己といふものにそんなにいぢけかじかんで小さく執着するのか。お前は自己を擴充して環境と混流することが出來ないのか。或は環境をお前の生活の中に攝取して自他の區別を絕した存在に到達しようとは試みないのかと。私はそれに答へる。それは私に取つても美しい夢であり希望である。然しながらその境界と私が今立つ所の位置との間には莫大な隔りがある。私は尊敬し思慕する聖者達の生活の中にかくの如き廣大無邊の我の擴充を感じて、それを有難いものだと思ふ。然し凡下な私はかゝる高所からは慘めな程低い所にさまよつてゐる。而してかゝる聖者達のレヴェルにまで飛躍を試みるには餘りに低い所に立つてゐるのを十分に知つてゐて、如何に無恥な私でもそれを試みる勇氣がない。私の思ひ定めてゐることはそんな高い標準から量らるべき種類のものではないのだ。

　或は自己に對する諦觀的な謙抑、それも私にはない。私は生きてゐたい。自己に對して何者かでありたい。私

はこの欲求から全く退き去ることが出來ない。私のこの妄執はある人々の憐れみを買ふに十分であるだらう。然しながら否むべからざる事實として、私は自分といふものを常に所縁として生きてゐる。自己なしには價値としての環境對象はない。私はこの妄執をつきつめて行くの外はないのだ。

地上の大多數の人々が焦眉の生活問題に出頭沒頭し、如何にしてこの不幸不遇から遁れ出ようかと焦慮してゐる時かゝる閑問題に類した言葉を弄し、他人の辛苦と悲慘とを顧みないとは人間の風上にも置けぬ奴だと私を警める人もあるかも知れない。私は謙遜に答へたい。さういふ實情を少しでも知れば知る程私は私の今立つ所から立ち直つて出かけなければならないと感ずる。それよりも進んだ所を私が歩いたら、私は自己を滅ぼし、從つて環境に累を及ぼすことを明かに感ぜざるを得ないのだ。

今の私に取つては凡ての前に個性の要求、然る後に個性の建設、然る後に社會の改造がある。今の私からいふと、自己の內部的要求を徹底しようとすることなしには、問題は半片たりとも私の眼の前に現はれて來ない。

だから私は自分の生活として選んだ藝術の爲めに、先づ問題をそれに提供する爲めに、如上の態度に出ねばならぬのだ。

（一九二一年一月、「改造」所載）

霜にうたれたポプラの葉が、しほたれながらもなほ枝を離れずに、あるかないかの風にも臆病らしくそよいでゐる。刈入れを終つた燕麥畑の畦に沿うて、すく／＼と丈け高く立ちならんでゐるその木並みは、ニセコアン岳に沈んで行かうとする眞紅(しんく)な夕陽の光を受けて、ねぼけたやうな綠色で深い空の色から自分自身をかぼそく區切る。その向うの荒れ果てた小さな果樹園、そこには果(み)ばかりになつた林檎の樹が十本ばかり淋しく離れ合つて立つてゐる。眞赤に熟した十九號(林檎の種類)の果(み)が、紅い夕暮の光に浸つて、乾いた血のやうな黑さに見える。秋になつてから、山から里の方に下つて來たかけすが、百舌鳥よりも鈍い、然し或る似よりを持つた途切れ／＼の啼き聲を立てゝ、その黑い枝から枝へと飛び移りながら、人眼に遠い物蔭に隱れてゆく。

見渡す限りの畑には雜草が茫々と茂つてゐる。澱粉の材料となる馬鈴薯は澱粉の市價が下つたゝめに、而して薯掘りの工賃が稀有(けう)に高いために、掘り起されもせずにあるので、作物は粗剛な莖ばかりに霜枯れたけれども、生ひ茂る雜草は畑を宛ら荒野のやうにしてしまつたのだ。馬鈴薯ばかりではない、亞麻の跡地でも、燕麥(からすむぎ)のそれでも、凡てがまだ耡(す)き返してはないのだ。雜草の種子は纖毛に運ばれて、地面に近い所をおほわたと一所になつて飛びまはつてゐる。蝦夷富士の山には、いつも晴れた夕暮にあるやうに、なだらかな山頂の輪廓そのまゝに一むらの雲が綿帽子を被せてゐる。始めはそれが積み立ての雪のやうに白いが、見るまに夕日を照り返して、有らん限りの纖微な紅と藍との色階を採る。紅に富んだその色はやうやくにして藍に豐かになる。而して眞紅(しんく)に爛れた陽が、ニセコアン岳のなめらかな山背に沈み終ると、雲は急に死色を呈して動搖を始める。而して瞬(またゝ)く中に、

その無縫の綿帽子はほころびて來る。かくて大空の果から果まで、陽の光もなく夜の闇もないたそがれ時になると、その雲は一ひらの影もとゞめず、濃い一色の空氣の中に吸ひ失はれてしまふ。もう何處を見ても雲はない。虛ろなものゝやうに、大空はたゞ透明に碧い。

その時東には蝦夷富士、西にはニセコアン、北には昆布の山なみが、或は急な、或はなだらかな傾斜をなして、高く低く、私が眺め廻す地平線に單調な變化を與へる。既に身に沁む寒さを感じて心まで引きしまつた私には、空と地とを限るこの一つらの曲線の魅力は世の常のものではない。莊嚴な音律のやうなこの一線を界にして、透明と不透明と、光と闇と、輕さと重みとの明かな對象が見出される。私は而してその暗にひたつてゆく地面の眞中に、獨り物も思はず佇立してゐるのだ。

蟲の音は既に絕えてゐる。私は、足許のさだかでない、凸凹の小逕を傳うて家の裏の方に行つて見る。そこにはもうそこはかとなく夜の闇がたゞよひはじめてゐる。玉蜀黍は穗も葉も枯れ切つて十坪程の地面に立つてゐたが、その穗先きは少し吹きはじめて來た夜風に逆つて、小ぶるひにふるへてゐるのが空に透いて見えた。空に透いて見えるのにはその外に色豆の支柱があつた。根まがり竹の細い幹に、枯れ果てた蔓がしだらなくまつはりついたまゝで、逆茂木のやうに鋭く眼を射る。地面の上にはトマトの茂りがあつて、採り殘された實の熟したのが、こゝに一つかしこに一つ、赤々と小さな色を殘してゐる。それ以外には南瓜の畑も、豌豆の畑も、玉葱の畑も、カイベツ（甘藍）の畑も、一樣にくすんだ夜の色になつてゐる。一匹の猫が私のそこに佇んでゐるのを眼がけて何處から來たのか、ふと足許に現はれた。私はこゞんで、平手をその腹の下に與へて猫を私の胸の所まで持ち上げて見た。猫は喉も鳴らさず、いやがりもしない。腹の方はさすがに暖い手ざはりを覺えさすけれども、私の顎に觸れた背の毛なみは霜のやうに冷えてゐた。

私はその猫を抱いたまゝで裏口から家に這入つた。内井戸の傍をぬけて臺所の土間まで來ると、猫は今までの柔和さに似ず、沒義道にも私の抱擁を飛びぬけて、眞赤な焔を吐いて燃えてゐる圍爐裡の根粗朶の近くに駈けて行つた。まだ點けたてゞ、心を上げ切らない釣ランプは、小さく黄色い光を狐色の疊の上に落して、輕い石油の油煙の匂ひが、味噌汁の匂ひと一緒にほのかに私の鼻に觸れる。

六つになつた惡太郎の松も、默つたまゝ爐の向座に足を投げ出して、皮を剝いだ大きな大根の輪切りをむしむしと齧つてゐる。私も別に聲もかけずにそつと下駄を脫いで自分の部屋へと這入つて行つた。かん〳〵起してある火鉢の炭からは青い焔が立つてゐる。而してえがらつぽい炭酸瓦斯が部屋の空氣を暖かく濁してゐる。

夜おそく、私は寢つかうとして雨戶のガラス越しに戶外を見た。何物をも地の心深く吸ひ盡すやうな靜かさが天と地とを領し盡してゐる。その中に遠くでせゝらぎの音だけがする。兎にも角にも死の如き寂寞の中に物音を聞くのは珍らしい。晴れ渡つた大空一めんに忙はしく瞬きする星くづに眼をやりながら、ぢつと水音を聞きすましてゐると、それは私の聞き慣れたものであるやうには思へない。遠い凹地の間を大小色々の銀の鈴が、數限りもなく押しころがされて行くかと疑はれる。

雨戶のガラスはやがて裂けはしまいかと思はれるほど張り切つて見える。私はそれに手を觸れるのをさへ恐れた。私は急いで再び寢床に歸つた。寢床の中のぬくみは安火よりも更に暖かく私の足先に觸れた。

朝寒が私に咳を强ひた。咳が私をあるべきよりも早く眼ざめさせた。少しでも垢じみた所には霜が結んでゐるかと思はれるやうな下着の肌ざはりは、こゝの秋の寒く更けたのを存分に敎へてくれる。私はそつと家を出て畑の方へ行つて見た。結ばれたばかりの霜、それは英語で Hoarfrost といはるべき種類の霜が、しん〳〵として雪のやうに草の上にも土の上にもあつた。殊更にその輪廓の大きさと重々しさとを増した蝦夷富士は、鋼鐵のやう

な空を立ち割つて日の出る方の空間にそゝり立つてゐる。私が身を倚せてゐる若木の楡（にれ）の梢からは、秋の野葡萄のやうに色づいて卷きちゞれた葉が、そよとの風もないのに、果てしもなく散りつゞいて、寒さのために重くなつた空氣の中を靜かに舞ひ漂つて、やがて霜の上にかさこそと微かな音をたてゝ落ち着くのだつた。

今日も亦、寒い雨と荒い風とが見舞つて來る前の、なごやかな小春日和が續くのだらう。私が朝餉をする頃には、今にも雨になるかとばかり空は曇り果てるだらう。而してそれが西南から來るかすかな風に追はれると、陽の光で織りなされたやうな青空が、黄色い光を地上に投げて、ぽか〳〵と暖かく短い日脚をも心長く思はせるだらう。而してあの靜かな淋しい夕方が又來るのだ。

かうして北國の聖なる秋は更けて行く。

（一九二一年一月、「婦女界」所載）

一人の人の爲めに

現代位一人の人の爲めにといふことの忘れられた時代はない。社會奉仕といふ言葉が漫然と天降り的に空中から塵埃と共に降つて來る。銘々が他人の爲めに奉仕してくれゝば、理窟の上からこれ以上結構なことはない。けれども銘々が奉仕ばかりするやうになつたら一體誰がその奉仕を受けるのだ。人間以外の神様がか、人間以外の獸物がか。

一人の人が社會に奉仕する、それはそれでいゝとしよう。所が社會は一人の人に奉仕する必要は絶對にないといふのか。社會の個人へ對する奉仕、こんな言葉は現代の辭書にはないやうだ。

成程社會は私達一人々々の集合から出來上つてゐるものには相違ない。形に於ては確かにさうである。然しながら社會といふものは蒟蒻のやうなもので、心棒がないと立つては行けないらしい。イブセンはその心棒のことを社會の柱石と云つた。現代では或る少數の人若しくは階級がこの柱石たるべき大任を引き受けてゐる。頼まれもしないのに自分の方から進んで引き受けてゐる。

その引き受けてゐる人が、柱石となるべき最上の適任者であるかないかといふ事は、人々によつて見地がおのづから異るには違ひないが、兎に角その人なり階級なりが、社會人たる私達全體の委任を受けて、柱や石となつたのでないといふだけは明かなことだ。即ち前にいつたやうに彼等は、有難いことには、若しくは御苦勞なことには、若しくは厄介なことには（こゝは見る人によつて意見が違ふと思ふからかういふ風に副詞句を三段にならべておく）自ら薦めてその任に當つてゐるのだ。

所が柱石は柱石だけあつて、かゝる社會人に對しては、他の社會人に對してよりも、餘程立ちまさつた仕向けをする必要があるらしい。さういふ人達が所謂天下を双肩に擔つてくれてゐる以上はさうあるのが尤ものやうにも考へられる。だから漫然と社會奉仕といへば、如何にも私達お互ひがお互ひを助け合ふやうには聞こえもし、見えもするけれども、よく〳〵考へて見るまでもなく、私達は社會の中でもその心棒となつてゐる柱石に對して、他の部分に對してよりも遙かに多く奉仕をなさねばならぬことになつてゐるのだ。だから私達が要求されてゐる社會奉仕の結果は、私達が何の氣なしに考へてゐるやうに、萬遍なく社會全體に行き亙る譯のものではなくして、ある部分には恐ろしく手厚く、ある部分にはひどく手薄に影響するのだと考へる外はない。

縱し私達全體の委任は受けてはゐなくとも、實力で以て柱石たるの位置に上り、私達がさうしたことに對して格別の抗議も申し出ない以上、その人なり階級なりが社界を切り廻して私達全體から多分の奉仕を受けるのは當然のことだと考へる人もあるだらうし、それは間違つた考へで、現在社會の柱石でありながら、蒟蒻以上にへや〳〵な、何一つ社會の御用に立つことをしてゐない、どうかすると社會全體の幸福を阻碍するやうな連中がゐるではないか。實力があるのではなく圖々しいだけのものだと考へてゐる人もあるやうだが、そのどちらであるにせよ、私が劈頭に申し出た杞憂は杞憂で終る譯だ。卽ち一人殘らず社會奉仕者になつたら誰がその奉仕を受けるのかといふその杞憂である。それは大體に於て社會の柱石が受けるのだつた。

で社會生活の凡てのからくりはこの旨意を徹底するやうに出來上つてゐるやうだ。社會奉仕といふ道德が頻りに高唱されるのも無理のないことだ。社會奉仕――これは成程一點非難の餘地もない道德的命題だ。それを概念に於て受取る時には、それを輕蔑するのは人類全體を輕蔑するのと同じことになるだらう。忠孝仁義禮智信これらの德も實際の場合を一々考察しさへしなければ、どれもこれも立派な人倫の道であるに違ひない如く、社會奉

仕といふことも、先づ漫然と考へて、凡ての人に等しなみに科せられてゐる德義だと思つてゐれば安全なのだつた。けれども困つたことには道德といふものは實際から離れてしまつては紙屑同樣なものになるのだから始末が惡い。その始末の惡い破綻が私が子供を持つてゐる所から起つて來た。

この事は何處かでも書いたことだが、私の子供の通つてゐる學校で進級式があつた時、父兄の一人として私もその席に列なつたが、校長の生徒に向つての訓辭に、あなた方は如何して今日出度く進級が出來たか知つてゐるか。それは四つのものゝお蔭を被つたからだ。第一には君主の恩で、君主が教育の事を軫念せられるからだ。第二には兩親の恩で、その方達があなた方の將來を思ひ、十分の教育を授ける爲めに苦心せられてゐられるからだ。第三は師の恩で、先生が日夜苦心して訓育を怠らないからだ。第四には境遇の恩で、あなた方が健康に生れ相當の生活が出來るからだ。だから進級に際しても、この四つのお蔭はよく頭に入れて、それに報ゆるだけの人間にならなければいけません、といふのだつた。私はそれを聞いてゐると子供達が可哀さうになつた。子供達はあの小つぽけな肩に四つの重荷を背負はされてよろ〳〵して家に歸つて行くのかと思ふと可哀さうになつた。私はこの一つの例で校長さんを責めようとするのでは決してない。私は個人的には校長さんを知り、極めて眞面目な、謙抑な、忠實な人柄であることに敬意をさへ表してゐる。然しながら、さうだからといつてこの訓辭の内容をそのまゝ完全なものだと思ふことが出來ない。校長さんはこゝで社會奉仕の精神を說かれたのであらうが、それはいゝとして、社會がこの子供達に感謝せねばならぬ何物かゞあるといふ一事を頓と見遁して居られたやうに私には思へる。子供達が勉强が出來て行くのは成程一面から云へば、校長さんの云はれるとほり、色々な力のお蔭には相違ないが、同時にその色々な力は、子供達を教育すべき重大な務めを擔つてゐる筈だ。その一方のみを極言して他方に及ばないのは片手落ちの云ひ分である。子供達を勵ます一つの方策とは私は見たくない。さういふ方

策は子供達が生長するとすぐ看破して、いやな思ひをしなければならぬところのものだ。知らないと思つて子供に軍略を用ひるのは大人が子供を見くびり過ぎた惡い癖の一つだ。それは巧妙な方法で子供に虚僞を教へこむやうなものだ。恐らく校長さんはそんな氣持であの言を吐かれたのではあるまい。校長さんはもつと眞面目な方であるらしい。實際自分でも事實そのものを語つてゐると信じてをられたに違ひない。然しながら悲しいことには、それは半面の事實ではなかつたらうか。

けれどもこれはこの校長さん一人を尤め立てすべき事柄ではない。現代の教育そのものがかゝる概念によつて貫かれてゐるのである。卽ち誰が考へ出したものだか知らないけれども、漫然たる社會奉仕といふ觀念が上から下まで行き亙つてゐるのだ。大學の目的は先づ第一に國家有用の人物を造るのにあるといふことになつてゐる。小學校では如何にしてより多くの生徒を中學校に轉入せしむべきかと苦心する。中學校では如何にしてより多くの生徒を高等學校に轉入せしむべきかと苦心する。高等學校では如何に多くの學生を大學の課程に適應せしむべきかと苦心する。大學では如何に多くの學生を國家有用の人物に仕立て上げようかと苦心する。結局漫然たる社會奉仕的人物を造り出す爲めに下は小學校から上は大學に至るまで苦慮腐心してゐるのだ。

而して國家有用の人物とは、要するに社會の柱石の支柱となつて忠實に立ち働き、その柱石を堅固にする爲めに犬馬の勞を惜まず、あはよくば將來の柱石の候補者になつて、一般人の社會奉仕を享樂しようと心がける人物を稱するのだ。つまり人間になるのは二の次にして、始めから石や柱になりたがるものになる稽古をするのだ。國家に有用なものでなければ學問でも學問でないのだ。柱石のお役に立つものでなければ技術でも技術ではないのだ。僻見なしに物を正視しようといふ人間や、自分の天分を思ふ存分伸ばして見ようといふやうな人間は、謂はゞ我が教育當事者に取つては繼子である。さういふ傾向のある者を矯正しようといふのが劃一教育である。段

段育て上げて行くには行くが、一段毎に埒が造つてあつて中々その外には逸することが出來ないやうに仕向けてある。偶〻その埒外に逸したものが社會に出ると、社會を代表してゐる柱石の寄合世帶なる國家は、ある程度の迫害を加へるか、鬼子でも生れたやうに振り向きもしない。

小學校は中學校の爲め、中學校は高等學校の爲め、高等學校は大學の爲め、大學は社會の幸福の爲め、社會の幸福はその社會に生存する個人々々の幸福の爲め、さう考へるのが合理的なことではないだらうか。それが若し合理的なことなら小學校は小學校生徒の爲め、中學校は中學校生徒の爲め、高等學校はその學生の爲め、大學はその學生の爲め、大學卒業生は自己の幸福の爲めと手取り早い方針を選ばないのだらうと私は怪しんで見たのだ。所がさう行かない理由が前の樣な私の考へ方からひとりでに歸納されるのだ。「社會の幸福の爲め」といふ所にぺてんがあるのだ。社會の幸福の爲めと漫然といへば何でもないのだが、委しくいふと「社會の柱石の幸福の爲め」といふことになるのだ。それで小學校はその生徒の爲め云々といふ方程式ではいけなくなつて、小學校は中學校の爲め云々といふ方程式を用ひる必要が生じて來るのだ。人間、學術、技藝といふことの代りに、國家に有用なる人間、國家に有用なる學術、國家に有用なる技藝といふことになるのだ。

人間が皮を被るのだ。二重生活をするのだ。これが結構なことであるか、さうでないかは人によつて意見を異にするのだから、いづれとも斷定は下し難いが、さういふ組立てゞは、人は直接な社會奉仕が非常にしにくゝなつて來るといふことだけは明かだ。人と人とが愛し合はうと思つても憎み合はうと思つても、その間には社會の柱石といふ檢視役がひかへてゐるのだから。自分が仕事を選ばうとする前に、仕事を選ばせられるのだから。社會奉仕をする人は、心でもないのに奉仕ばかりさせられてゐて、それを受取る人は、受取つた上でそれを奉仕に用ひようが用ひまいが、相當に融通がきくといふことになるのだから。

かういふ齒車の中に喰ひ込まれてゐては、校長さんがあゝいふ訓辭をされたのも無理のないことだといはなければならない。

この雜誌が主張する自由教育なるものも、それには反對する人も贊成する人もあらうが、兎に角それを實行に移すには少からざる困難を伴ふと私は考へる。それは現代に於て、社會生活の內容が以上申し出たやうな狀態にあつて、一人の人といふものが無視されてゐるに近いからだ。

一人の爲めに、各ゝの人の爲めに。凡ての人が社會に對して義務を感ずるのみでなく、社會がどんなに、小さな人に對しても、人である以上(柱や石でなく)、それに義務を感ずる時、その時自由教育は苦もなく實行されるだらう。

私は元來個性の自由を極端に有難がる趣味を有つてゐる。だから現代のやうな社會奉仕といふ合言葉は如何なる言葉よりも嫌ひだ。從つて自分の子供達にも自由教育を受け得るやうな境界を早く備へてやりたい。これは同じ趣味の人が、方面々々で、その器量に從つて、せつせと働いて行くより外に仕樣があるまい。

社會の爲めではなく、一人の人の爲めに、一人の人の本性の爲めに、要求の爲めに、幸福の爲めに、自由の爲めに。

（一九二一年三月、「自由教育」所載）

地方の青年諸君に

一

私は地方で農業の研究をして學生生活を過したものではありますが、生れが都會であり、學生時代の外は主に都會で暮した關係から、地方の生活の眞相には觸れてゐないといつていゝのです。それ故、私如きがあなた方に對して物を云はうとするのは僭越の至りだと思ひます。單に私が理窟の上で考へたことを茲に少しばかり述べて見ますが、それが少しでもあなた方の生活に觸れることが出來れば寧ろ望外のことです。

英國で十八世紀から十九世紀の初頭にかけてのある時期は近代的の都會の發達に對して、地方の人々が色々な意味で反抗の聲を擧げた時でした。その頃に出た詩人で最も猛烈にこの思想を云ひ現はしたものには、ゴールドスミスや、ロバート・バーンスや、ウォヅウォースなどがゐた。殊にゴールドスミスは、近代的産業制度の發達が漸次に田園を荒らして行き、地方の人口がどん〳〵都會に吸收せられ、田園で積み集められた富が都會に流れ込むのを浩歎して、あの有名な「荒村行」を書いてゐます。又ウォーヅウォースは地方の美しい自然が所謂文明なるものによつて濁らされ、汚されて行くのを憤り、自分の幽棲してゐるライダル山の近傍を汽車が通ずるやうになるのを知ると、これを防止すべき獻言書を當時の議會に提出したと稱せられてゐます。

日本にも田園詩人ともいはるべき詩人がゐて、都會の文明に對して反抗の聲を擧げた人はその數少くはありません。彼等は皆口を揃へて田園の自然や人情を賞揚讃美し、都會の生活を一々呪詛するやうな態度に出てゐるや

うです。都會人そのものすら、どうかすると田園に對して同樣の心持を有し、自分等の生活を意義の薄いつまらぬものであるかの如く考へてゐます。

二

併し私はさうは考へません。これまで田園といふものは單に空想的に考へられてゐたと云つていゝと思ひます。同じく人間の生活のある所です。都會にもいゝものがある通り、田園にもいゝ所はありませう。併しながらいゝものばかりが田園にあると考へるのは、明かに都會人の飛んでもない空想であらねばなりません。田園の生活が樂しいことばかりに滿ちてゐるといふのも譃ならば、田園の自然が素晴らしい要素からばかり出來てゐるといふのも譃です。兎に角都會人も地方の人も地方を見るのに、十八世紀傳來のロマンティシズムの氣分でばかり見るのは間違つてゐます。もつと眞實に、その當體に觸れて、實際あるがまゝを見徹さなければならぬのです。そこから地方の眞價値は始めて生れ出て來ると思ひます。單にロマンティックな見地から、如何に地方が讃美され賞揚されても、それは地方に取つて迷惑なことであるばかりでなく、有害なことだと思ひます。

さうです。地方の生活には忌はしい多くのものが存在してゐます。固陋な習慣や思想が根深く植ゑ込まれてゐることゝか、都會生活に於てのみ享樂せらるべき種々な所謂文化的要素の缺けてゐることゝか、生活が自然の威力によつて常に脅かされねばならぬことゝか、地方人を支配するものは地方人の意志ではなくして、その地方とは直接の利害關係のない都會人であることゝか、その他多くの缺點があつて、地方人の生活を壓迫してゐます。私も都會には住んではゐますが、ある關係から多少地方的生活の輪廓をも見てゐます。而して今は內的外的の生活問題が漸く都會から地方に移り行くべき機運にあることを感じます。而して私の見る所が誤つてゐなければ、

地方に於て一番深く感ぜられてゐる問題は、凡ての點に於て都會からの壓迫であるのを知ることが出來ます。殊に地方青年の心の中に釀される種々な問題は、多くは都會生活からの示唆によつて惹き起されるものであるのを知ることが出來ます。地方の青年は謂はゞ都會といふものがある爲めに常に心の動搖を促がされてゐるのではないでせうか。

三

それ程地方的生活に影響してゐる都會とは何でせうか。都會といふものは實に近代の産業制度が生んだ怪物だといふことが出來ます。資本主義によつて動かされる産業が發達すると共に、大規模の製作が結果せられ、物資の集積が企圖せられ、從つて中央集權が結果せられて、所謂文化的要素の中心がそこに据ゑられるやうになりました。而して國家の運用は凡てこゝで行はれて、地方は單にその運用の材料を提供する處となつてしまつた觀があります。地方の生産が如何に自然によつて惠まれた年でも、都會に於ける加工的生産の都合によつて、その價格は勝手次第に左右せられ、凶年の時と同樣な結果を見るのは普通なことです。かくして地方の物質的生活は殆んど全く都會の手によつて思ふまゝに支配されます。これが地方の內生活に響いて來ない譯はありません。段々都會の壓力によつて手慣らされて、因循な人達は何の反撥力もない奴隷のやうな、無智に晏如たる生活を導きますし、活氣のある人達は、謂はゞ人を踏みつけにした都會生活の威壓に反抗して不平不滿の人になるか、或はこちらから進んで田園を捨て、都會に馳せ入つて、自ら都會人に同化し、都會の有する優越權を享樂しようとするに至ります。かくて地方生活の不安動搖が捲き起ります。あなた方地方の青年諸君は恐らくはかゝる動搖を經驗し實感してゐられるに相違ありません。而してその根本的の解決を如何にすればいゝかと苦慮してゐられるに相違

ないと思ひます。

四

そこで私は云はうとします。敵を斃すには先づ敵を知らねばならぬといふことです。あなた方の敵なる都會は敵ながら天晴れといふべき敵でありませうか。その城壘を攻め落したら、あなた方がそこに地上の樂園を築くことが出來るやうな所でせうか。私は私一箇としてそれに否と答へることを餘儀なくされます。都會は所謂文明の發祥地だと云はれてゐます。併しながら所謂文明なるものは私達が無條件的に肯定し得べきものでせうか。英國の一豫言者カーペンターはその著の中に、文明とは人類がその進化の過程に於て誤つて陥り易い疫病であつて、一度その病に犯されると犯された民族の殆んど總ては斃死するに至らねばならぬ程恐ろしい疫病だと論じてゐます。それは多少矯激な言であるとしても多大の眞理を含んでゐます。都會生活の外貌にあざむかれることなく、多くの人が田園をローマンティックに見るやうに、都會をローマンティックに見ることなく、都會をそのありのまゝの姿で深く檢察して御覽なさい。都會は謂はゞ片輪の寄合ひ世帶のやうな所です。資本家は資本ばかり持つてゐます。勞働者は勞働力しか持ちません。餘裕のある人は餘裕に中毒し、餘裕のない人は無い爲めに中毒してゐます。知識は專門的にのみ發達して、それを所有する人自身すら、その專門の分野以外には、自分の知識が何に役立つかを知つてはゐません。人々は無性に勤勞し、勤勞することによつて漸く生命をつないでゐますが、その勤勞が生み出すものは如何なる幸福であるかを考へたことすら無いやうに見えます。唯都會人であるといふ內容のない誇りの爲めに、彼等は自己と子孫との健康をすら犧牲にして勤勞してゐるかに見えます。都會といふ怪物は日々夜々無數の人身御供を呑噬して肥つて行きます。都會には充實した人口があるやうですけれども、それは常

に地方から供給してゐるからです。若し地方が一度供給を止めたなら、見る間に都會の人口は減じて行つて、そこは廢墟となつてしまふでせう。それ程かの怪物都會は飽くことなき貪食者です。かくの如き生活が人類に取つて祝福であるといふことが出來ませうか。私は斷じてさうは思ひません。この都會の呪詛は單に都會自身を毒してゐるのみならず、その損害を絕えず地方に送り出してゐるのです。地方は先づこの害毒から免れねばならぬのです。都會生活に降參するが如きは以ての外の心得ちがひだと思ひます。

五

これからのがれる爲めには、先づあなた方が自身の周圍を冷靜に考察することから始めねばならぬと思ひます。あなた方を滿足させる唯一のものは、あなた方を內部的にも外部的にも獨立させ自由にさせる所の境涯でなければならぬ筈です。所がそれがあなた方に與へられてゐますか。あなた方は卽座に否と答へられるでせう。それは何故ですか。その最も重い原因はあなた方が都會の桎梏にかゝつてゐるからです。都會から强制的に或る要求をさせられてゐるからです。あなた方は先づかの要求から獨立しなければなりますまい。獨立する爲めには都會が存立し得る所以のものから解放されねばなりません。都會が存立し得る所以のものは中央集權です。中央集權を成立させてゐるものは權力者と生產者と結び付いた產業制度です。否一步進んで考へるならば、凡て外部的に强制し來るあらゆる制度そのものです。制度を以て人間を律して行かうといふのが都會卽ち現代を代表する文明生活の要訣です。これを合理的に打破是正することなしにはあなた方の生活の根ざしは徹底的には改まることがないのです。この一事を無視して、他の萬事に狂奔した處がそれは結局無駄事です。この點をあなた方は生れて以來の經驗を以て實感的に考察されねばならぬと私は信じます。その考察にはむづかしい理窟も學問も必要で

はありません。あなた方が正直であり、自分自身を本當の意味でよくしようとし、人間として享有すべき正しい幸福を憧憬し、自分を生きよくする爲めに、周圍を凡てそれに適したものにする心懸けさへあれば、誰にでも自ら考へ極めることの出來る問題です。私は地方からかくの如き心懸けの靑年が一人でも多く生れ出ることを切望します。而してその人達が單に自身を救ふばかりでなく、自分の周圍をよくするばかりでなく、地方全體を向上せしむるばかりでなく、都會そのものゝ持つ幾多の難題をも解決して、私達の生活を都會萬能の悲境から救ひ出す力になつて下さることを望むものです。來るべき時代はよき女性とよき農人によつて新たな面目を發揮すると私は堅く信ずるものです。

（一九二一年五月、「寸鐵」所載）

餘裕と文化

藝術が實生活の餘裕から生れ出るといふのは尤もなことである。然しながら餘裕さへあれば、必ず藝術が生れ出るかといへば、一概にさう斷定することは出來ない。一個人の生活で考へて見てもそれは明かなことだ。或る人はその實生活の中に、殆んど餘裕ともいへないやうな餘裕を掴み得ても、そこから立派な藝術を創り出して來るし、他の或る人はあり餘る程の餘裕を惠まれてゐても、その生活全體に何等の色彩をも發揮し得ないことがある。この事實が一個人の生活の上に起るとすると、一個人の集團である社會の中にも起らないでゐる譯がない。社會的生活に如何程餘裕が出來ても、その餘裕の出來る狀態が惡ければ、決して藝術は榮える筈のものではない。それに反して、實生活の餘裕といふものがどれ程不足してゐても、その生活の狀態がよければ、その社會は立派な藝術によつて潤ふことが出來るのだ。

それなら藝術とは何んだらう。私の考へてゐる所が誤つてゐなかつたなら、藝術とは人の持つてゐる力の美しい綜合であり和鳴である。だから人の力が萎え果てた所には藝術の萠芽はない。人は借り物でない自分自身の力を持つてゐる以上は、その力を出來るだけ純粹に發揮しようとする要求を持つものである。その人の働く分野が縱令どの方面であらうとその要求に變りはない。科學の分野でも、宗教の分野でも、政治の分野でも、その外如何なる他の分野に於てゞも、この拒むべからざる事實は看取される。例へば科學の分野でいつて見ようなら、一概に科學者といふと、何か深遠な眞理の探求者の集りのやうに門外漢には見えるけれども、科學者にも種々な種類が存在してゐる。自分の持つてゐる內部的な力の不足してゐる人は、どれ程懸命に勉强してゐるやうに見えて

もその人の仕事は畢竟極めて外面的なもので、素人には分らないから深遠な仕事をしてゐるやうに見えるかも知れないけれども、腦力の足らない圖書館員が機械的にカードのＡＢＣ順を整理してゐると同樣な仕事しかしてゐないのが相當に多數にゐるのだ。たゞ取扱つてゐる事物が圖書館のカード程に通俗的なものでないといふ相違があるばかりだ。それらの人は名は科學者といふかも知れないけれども、實は科學者の仕事に供せらるべき材料の供給を役目とするものに過ぎない。然し本當に內部的の力を持つた科學者はそれでは滿足してゐない。彼はそれらの材料から一つの獨得の系統を創り出すことを努める。彼の力は眼前に供給された材料を如何に意味付くべきかの鋭い觸角として働く。他が整理する間に彼は生命を與へる。他が機械的の配列をしてゐる間に彼は有機的な統合を成就する。他が平面化する間に彼は立體化する。他がその研究の對象をいつまでも生活なるものと結び付けることが出來ないでゐる間に、彼はその研究の結果が何等かの意味に於て生活と緊迫したかゝはりを持つやうにする。私達が科學者として尊敬せずにはゐられない科學者は、科學者自身は全く一人の學究として、人間の生活とはかゝはりのない事柄を研究してゐると思つてゐる場合があつたとしても、私達から考へるならば、私達の生活にはなくて叶はぬ一人の人であり、その研究はなくて叶はぬ研究であるといふ結果になつてゐる。それは何故であるかといふに、その人の人間的な力が知らず識らずの間に、その研究の對象を人間に役立つやうに表現してゐるからだ。換言するならば、その學者は自分の學問の分野に於て一個の立派な創作をしてゐるのだ。卽ちその學者は創作者であるといふ點に於て立派な藝術家なのだ。

普通藝術と稱せられる分野に於ても矢張りこの事はいはれなければならない。藝術は藝術であつてそれは如何なる生活の他の分野にも隸屬すべきものではない。それはそれ自身に於て獨立してゐるものでなければならぬ。だから人生の爲めの藝術などゝいふ標語は大體に於て否定されなければならぬもので、藝術は當然藝術の爲めの

藝術でなければならぬ。大藝術を生み出した藝術家の多くは大抵かゝる崇高な評價を以て自分の仕事なる藝術に對してゐたし、又現在でも對してゐることが知れる。しかもかゝる態度が嚴肅に守られ、それが忠實に徹底されゝばされる程、その結果に於て藝術品は私達の生活と密接に相關はるものになつて來るのが不思議な位だ。それはその藝術品が小さな主觀の爲めに煩はされずに、藝術家が人として持つてゐる純粹な力の表現としてのみ創り出されるからだと私は思ふ。その力が時代の表面に浮沈する小さな流れや渦の爲めに昧まされることなく、その力自身の赤裸々な端的な表はれとして人々に迫るからだと私は思ふ。だからかういふ藝術品に接すると、私達は自分が棲息してゐる時代を忘れ、境遇を超越して、私達の生の奥底に儼存する力が知らず識らず搖り動かされるのを如何することも出來なくなる。

所が同じ藝術家と自分は稱してゐながら、自分の持つ人間としての力が十分强くない人になるとその力を思ふまゝに高調することが出來ない故に、それを彌縫するために已むを得ず、自分の所有以外のものに援助を求めて、その藝術品を創り上げる必要に迫られる。そこで自分が住んでゐる時代の傳統とか、習俗とか、思想とかいふものを自分とは有機的な連絡もない辭に借りて來て、それで自分の不足な力につぎはぎをする。かゝる作品は一見直接に人生と痛切に相關はるやうに見えながら、實際は何處かに熱が缺けてゐて、それを鑑賞する人に不滿を抱かせたり、不愉快を感じさせたりする。而して人の本當の生活とはかけ離れたやうな概念だけを收穫として鑑賞者に殘すことになる。前に私が科學者の場合にいつた第二流以下の科學者と、その藝術的でないといふ點に於て極めて類似したものがあるといはなければならない。

以上申し出た二つの例で、讀者は、私が藝術家とさうでない人との間の差異を如何見てゐるかを略ゝ推察して下さつたことゝ思ふ。更に玆に簡單に繰り返すなら、藝術家とは如何なる問題若しくは仕事に對しても、自己内部

の本然的な力を以て當つて行く人で、その力の働きの中に自己の表現を求むる人で、藝術家でない人といふのは、自己内部の力が不足してゐるか、若しくは不足してゐないでも、それを探り出して自分のものとすることが出來ない爲めに、本當には自分に屬しない外界のものを以てそれを彌縫する人のことである。

たしかに世の中にはこの二種類の人がある。最初の種類の人は僅かな餘裕の中からも藝術品を創り出すし、第二の種類の人は如何に潤澤な餘裕が提供されても到底藝術品を創り出すことが出來ないので、單に藝術家に材料を提供する役目を果すのみであらう。

そこで考へて見る。文化的要素として、藝術と、藝術の材料となるべきものと何れが重要なものであらねばならぬだらうか。文化といふ言葉の考察に就いては諸說が區々であつて、一言にして歸する所を求め出しがたいものがあるが、要するに人類共存上の、有機的であるが故に、從つて進步的な狀態であるといつたならば、誰もがそれに反對することはあるまいと思ふ。有機的であるといふことは、人間の有する生活力とその外界と切つても切れぬ關係を持して働き合ふといふことだと私は解する。かゝる關係にあつて力と外界とが働き合ふならば、そこに必ず進步とか發達とかいふものが結果せられねばならぬ。丁度植物に活力がある時には、その根は外界からその植物に必要缺くべからざる養分を吸收して發達を遂げるのに等しい。然しこの場合は植物に十分の活力がある時に限る。縱令植物は活きてゐても、若し十分の活力がなかつたならば、その植物の根と、根の滋養分となるべき外界の要素とは縱令密接して存してゐても、その關係は機械的であつて、有機的であることが出來ないから、その根は外界からの恩惠を受けることが出來ず、從つてそこには植物にとつてどれ程都合のよい條件が用意されてゐても、その植物は遂に發達生長することが出來ないだらう。卽ち文化とは前にもいつたやうに人類共存の有機的な狀態を指すので、その結果はひとりでに人類生活の進步を將來することになるのだ。

所で內部の力と外界の要素との有機的關係とは、內部の力が外界の要素を同化(assimilate)してそこに一つの特殊な獨存的な所産を生み出すことである。さうすることを私達は創造といふ。創造とは藝術が司るところの使命である。即ち人間が新たな方面を開拓し、そこに進み出る爲めには、常にこの藝術的な衝動に從つてのみ達成せられるのだ。若しこのことがなかつたならば、人間は現狀のまゝで自然に適應して行くだけのことは辛うじて出來るかも知れないけれども、自然を克服して新しい存在へ〳〵と乘り越え移り變つて行くことは出來ない。

だから一個の人間なり社會なりを本當に尊からしむるものは、その生活に齎らせられる餘裕ではなくして、その餘裕の中に働く所の內部の力如何によつて決定される。若しこの力が缺けてゐたならば、如何に人類の外部狀態が改良せられても、到底所望の彼岸に達することは出來ない。

先づ人類の生活を合理的に改善し、凡ての人が十分の餘裕を以て生活することの出來る狀態を來らすことはいいことだ。それは萬難を排しても是非遂げられねばならぬことだ。近時大洪水の如く世界の表面に漲り流れてゐる社會改造の要求と實行とは確かにあらねばならぬ機運の到來である。私達は全く奇怪至極な生活の中に永い間の惰眠を貪つてゐた。その永い惰眠の間に恐るべき墮落の徵候は社會の凡ての分野に瀰漫し出した。この奇怪至極な生活の寵兒として生れた人も、繼子として生ひ立つた人も、共に悲しむべき墮落の淵に沈まうとしてゐる。殊に寵兒として甘やかされた人達は病が膏肓に入つて、新たな人類の生活を夢想するだけでも、瞑眩を感ずるほどやくざな心根になつてしまつてゐる。かういふ狀態は決して永續せしむべきことではない。藝術が生れ出るべき餘裕の分配に就いて考へて見ても、現在に於て、その餘裕を有り餘る程惠まれてゐる人々の多數は、その餘裕を以て藝術を生み出すべき內部の力を全然缺いてゐるし、虐げられながらも內部の力を持ちつゞけてゐる人々の多數はそれを用ひて藝術を生み出すべき餘裕を奪ひ去られてゐる。かくの如き狀態は決してあらしむべきことで

はない。かくの如き狀態は出來るだけ早く私達の生活から除去されねばならぬ。一日遲れることは一日不幸を增すことだ。人は革命の悲慘を云ふ。然しながら每日々々の悲慘の堆積に比べて見たら、革命の悲慘は却つて輕いものであるのを發見するだらう。

然しながら餘裕分配の調節が完全に人々の間に行はれる曉が來たとしても、その人間なり社會なりが直ちに文化的生活を遂げ得るか否かは容易に判斷さるべきものでないと思ふ。或る人には、また或る社會には、それが文化的意義を持つだらうし、他の或る人には、また或る社會には、單に外部的な生活樣式の變革としてのみ終ることがないとはいへない。

若し人間が絕大の努力を盡して行つた社會改造の結果が單に外部的な生活樣式の變革のみに終るやうだつたなら、その努力は畢竟空費であるといはなければなるまい。何故ならそれは一つの植物を或る瘠地から掘り起して、他の同樣の瘠地に移植したのと同じ結果になるからである。

それ故私達は社會改造を企てるに當つて、その要求が那邊から來てゐるかを檢察する必要が生じて來る。その要求が如何なるものであれ、外面に現はれる叫び聲は「我等に至當なる餘裕を與へよ」といふことになるのではあるけれども、私達は何が故に餘裕を要求するのであるかを考へて見なければならない。こゝに至つて私達は餘裕が要求せられてゐるその奧に存在する生の衝動に逢着するだらう。少くともそこに逢着せねばならぬ筈だ。その生の衝動とは私達は創造せんとする要求を多少にかゝはらず持つてゐるといふ見遁すべからざる事實である。この事實に人が十分に氣付いて、その事實の促進を存分に受けて、而して社會改造の要求を叫び、それを實行する時に、そこには文化的の意義のある革命が成就されるだらう。かくの如き要求を心に感ずる人なり社會なりは、內部の力を十分に持ち續けてゐるものである證據だ。而してその力こそはこの世の中を更に押し進める原動力とな

り得べき所のものだ。
餘裕といふものが殆ど許されてゐない、さういふ人を無數に持つてゐる現代にあつて、餘裕を要求する意味なぞが何だ。瀕死の人に食物を攝取するにつけての意味なぞが何の足しになるか。先づ食物を與へよ生活を與へよ。自餘の事はさうした上でのことだといふやうに煽動的な革命家はいふかも知れない。不幸な人々に對する彼の熱意が彼をしてかく叫ばしめるのを私は無理とはいはない。然しながら私の推察がこゝに許されるなら、かく叫ぶ革命家自身は自分の叫喚の背後に或る意味を持つてゐるに違ひないと思ふ。換言すれば、彼は或る改造された文化的な人間生活を心に描いて、その上で以上の主張を申し出してゐるに違ひないと思ふ。よく考へて見たならば、さうであるのではなからうか。若し幸にして私の推察が見當ちがひでないならば、民衆全體の中に彼自身の投影を見ることを拒まうとするのは、ひいきのひき倒しになりはしないか。民衆全體の求願の中に彼自身の求願のある事を信じ、民衆の自覺をそこに導き、そこに革命の基礎をおくことによつてその革命は空費に終らないといふ結果を生ずるのではないか。
私達は無餘裕者をあまりに見くびることをしたくないものだ。創造を生命とする藝術的要求を凡ての人の中に拒みたくないものだ。而して餘裕の正當な分配がこの人間の要求の遂行を成就するための方法として見られたいものだ。
この一事が徹せられるならば、私達は文化が何物であるかを事々しく穿鑿する必要はない。正しい文化はひとりでにそこに榮え始めるであらう。

（一九二二年六月、「文化生活」所載）

紅海を離れて

節は三月でした。然し氣候からいふと日本などにはあり得ない暑さでした。私は印度洋を小さな郵船會社の船で旅しました。紅海を離れてからセイロン島に着いた、その間の數日は長く忘れることが出來ません。

同じ地球の上に、これほどかゞやかしい世界もあるのかと驚くばかりでした。毎日、空は底の見えぬまで青く、海は底の見えぬまで青う御座いました。而してその海と空とを透明な火のやうな太陽の光線が思ふまゝに照りつけてゐました。雪のやうに白く輝いた雲が現はれたかと思ふと、忽ち青空の中に融けこみました。白波一つ立てないで、海は暑さの爲めに大きな寢がへりを打ちました。風は凪ぎ切つてゐました。たゞ船足の速さで起されるさゝやかな大氣の動搖が、汗ばんだ膚にあるかなきかの涼しさを以て觸れて來るだけでした。汽罐部から這ひ上つて來た火夫が、死骸のやうになつて濃藍の物蔭を慕ひ寄つてまろびました。

それが夕方の或る時刻になると、驟雨に見舞はれます。必ず見舞はれます。瀧そのものを浴せかけるやうな驟雨。海全體が小躍りします。而して晴れ渡つた赤道下の夜につながる素晴らしい夕陽と、思ふさまな涼風とをそのあとに殘してゆきます。

（一九二一年七月、「週刊朝日」所載）

北海道に就いての印象

私は前後約十二年北海道で過（すご）した。しかも私の生活としては一番大事と思はれる時期を、最初の時は十九から二十三までゐた。二度目の時は三十から三十七までゐた。それだから私の生活は北海道に於ける自然や生活から影響された點が中々多いに違ひないといふことを思ふのだ。けれども今までに取りとめてこれこそ北海道で受けた影響だと自覺するやうなものは持つてゐない。自分が放慢なためにそんなことを考へて見たこともないのに依るかも知れないが、一つは十二年も北海道で過（すご）しながら、碌々旅行もせず、そこの生活とも深い交渉を持たないで暮して來たのが原因であるかも知れないと思ふ。

然し兎に角あの土地は矢張り私に忘られないものとなつてしまつてゐる。この間も長く北海道にゐたといふ人に會つて話した時、あすこにゐる間はいやな處だと思ふことが度々あつたが、離れて見ると何となくなつかしみの感ぜられる處だなといつたら、その人も思つてゐたことを言ひ現はしてくれたといふやうに、心から同意してゐた。長く住んでゐた處はどんな處でもさういふ氣持を起させるものではあらうが、北海道といふ土地は特にさうした感じを與へるのではないかと私は思つてゐる。

北海道といつてもさういふことを考へる時、主（おも）に私の心の對象となるのは住み慣れた札幌とその附近だ。長い冬の有る處は變化に乏しくてつまらないと人は一概にいふけれども、それは決してさうではない。變化は却つてその方に多い。雪に埋もれる六ケ月は成程短いといふことは出來ない。もう雪も解け出しさうなものだといらいらしながら思ふ頃に、又空が雪を止度（とめど）なく降らす時などは、心の腐るやうな氣持になることがないではないけれ

ど、一度春が訪れ出すと、その素晴らしい變化は今までの退屈を補ひ盡してなほ餘りがある。冬の短い地方ではどんな嚴冬でも草もあれば花もある。人の生活にも或る華やかさがついてまはつてゐる。けれども北海道の冬となると徹底的に冬だ。凡ての生命が不可能の少し手前まで追ひこめられる程の冬だ。それが春に變ると一時に春になる。草のなかつた處に青い草が生える。花のなかつた處にあらん限りの花が開く。人は言葉通りに新たに甦つて來る。あの變化、あの心の中にうづ〳〵と捲き起る生の喜び、それは恐らく熱帶地方に住む人などの夢にも想ひ見ることの出來ない境だらう。それから水々しく青葉に埋もれてゆく夏、東京あたりと變らない晝間の暑さ、眼を細めたい程涼しく暮れて行く夜、晴れ日の長い華やかな小春、樹は一つ〳〵に自分自身の色彩を以てその枝を裝ふ小春。それは山といはず野といはず北國の天地を悲壯な熱情の舞臺にする。

或る冴えた晩秋の朝であつた。霜の上には薄い牛乳のやうな色の靄が青白く澱んでゐた。私は早起きをして表戸の野に新聞紙を拾ひに出ると、東にあつた二個の太陽を見出した。私は顔も洗はずに天文學に委しい教授の處に駈けつけた。教授も始めて實物を見るといつて、私を二階窓に案内してくれた。やがて太陽は縱に三つになつた。而してその左右にも又二つの光體をかすかながら發見した。それは或る氣溫の關係で太陽の周圍に白虹が出來、なほ太陽を中心として十字形の虹が現はれるのだが、その交叉點が殊に光度を增すので、眞の太陽の周圍四ヶ所に光體に似たものを現はす現象で、北極圈內には屢〻見られるのだがこの邊では珍らしいことだといつて聞かせてくれた。又私の處で夜おそくまで科學上の議論をしてゐた一人の若い科學者は、歸途晴れ切つた冬の夜空に、探海燈の光輝のやうなものが或は消え或は現はれて美しい現象を呈したのを見た。彼は好奇心の餘り、小樽港に碇泊してゐる船について調べて見たが、一隻の軍艦もゐないことを發見した。而してその不思議な光は北極光の餘翳であるのを略〻確めることが出來た。北海道といふ處はさうした處だ。

私が學生々活をしてゐた頃には、米國風な廣々とした札幌の道路のこゝかしこに林檎園があつた。そこには屹度小さな小屋があつて、誰でも五六錢を手にしてゆくと、二三人では喰ひ切れない程の林檎を、枝からもぎつて盥に入れて持つて來て喰べさせてくれた。白い粉の吹いたまゝな皮を衣物で押し拭つて、丸かじりにしたその味は忘れられない。春になつてそれらの園に林檎の花が一時に開くそのしみ〴〵とした感じも忘れることが出來ない。

何處となく荒凉とした粗野な自由な感じ、それは生面の人を威脅するものではあるかも知れないけれども、住み慣れたものには捨て難い蠱惑だ。あすこに住まつてゐると自分といふものがはつきりして來るかに思はれる。艱難に對しての或る勇氣が生れ出て來る。銘々が銘々の仕事を獨力でやつて行くのに或る促進を受ける。これは確かに北海道の住民の特異な氣質となつて現はれてゐるやうだ。若しあすこの土地に人爲上にもつと自由が許されてゐたならば、北海道の移住民は日本人といふ在來の典型に或る新しい寄與をしてゐたかも知れない。歐洲文明に於けるスカンディナヴィヤのやうな、又は北米の文明に於けるニュー・イングランドのやうな役目を果たすことが出來てゐたかも知れない。然しそれは歷代の爲政者の中央政府に阿附するやうな施設によつて全く踏みにじられてしまつた。而して現在の北海道は、その土地が持つ自然の特色を段々こそぎ取られて、內地の在來の形式と選む所のない生活の維持者たるに終らうとしつゝあるやうだ。あの特異な自然を活かして働かすやうな詩人的な徹視力を持つ政治家は遂にあの土地には來てくれないのだらうか。

最初の北海道の長官の黑田といふ人は、そこに行くと何といつても面白いものを持つてゐたやうだ。あの必要以上に大規模と見える札幌市街の設計でも一斑を知ることが出來るが、米國風の大農具を用ひて片つ端からあの未開の土地を開いて行かうとした跡は、私の學生時分にさへ所在に窺ひ知ることが出來た。例へば大木の根を一

氣に抜き取る蒸氣拔根機が、その成效力の餘りに偉大な爲めに、使ひ處がなくて、鏽びたまゝ捨てゝあるのを旅行の途次に見たこともある。少女の何人かを逸早く米國に送つてそれを北海道の開拓者の內助者たらしめようとしたこともある。當時米國の公使として令名のあつた森有禮氏に是非米國の婦人を細君として迎へろと勸めたといふのもその人だ。然し黑田氏のかゝる氣持は次代の長官以下には全く忘れられてしまつた。惜しいことだつたと私は思ふ。

私は北海道についてはもつと具體的なことが書きたい。然し今は病人をひかへてゐてそれが出來ない、雜誌社の督促に打ちまけて單にこれだけを記して責をふさいでおく。

（一九二一年八月、「解放」所載）

自然と人

人は自然を美しいといふ。然しそれよりも自然は美しい。人は自然を莊嚴だといふ。然しそれよりも自然は莊嚴だ。如何なる人が味到し色讀したよりも以上に自然は美しく莊嚴だ。議論としてそれを拒む人はあるかも知れないが、何等かの機會に於てそれを感じない人はない。

その時或る人は、かくばかり自然が美しく莊嚴であるのにどうして人間はかくばかり醜く卑劣なのだと歎じ、そこに人類の救ひ得べからざる墮落を痛感するだらう。或る人はかくばかり美しく莊嚴な自然の伴侶となるために、人類には如何に希望多き悠久な未來が殘されてゐるかを痛感するだらう。而してそこに深い喜悅と勇氣とを湧き立たせるだらう。

老いるものは前の立場に立ち、若き者は後の立場に立つ。而して私は若き者であり、若き者の道件れでありたい。

（一九二一年八月、「文化生活」所載）

筆頭語

Y氏が來てからたづねられた。

「お前は本能といふやうなことをいふ。動向の純一、一元を主張する。自分もその心持には贊成出來る。而して能ふならばさうした生き方をしたいと思ふ。所が實際は却々さうは行かない。先日京都のN氏がわざ〳〵訪ねて來て四五時間話して行かれたが、結局凡ての葛藤の解決は一度無一物になるにある。思ひ切つて凡てを敢然と抛擲するにある。それをしなければ、どれ程藻搔いても一筋に筋の通つた生活、即ち一元の生活に這入ることは出來ない。私はそれを實行したが故に僅かに今日の自分であることが出來るのだとかう強く說かれた。その言葉には強い權威があつた。人を動かさずにはおかないものがあつた。若し自分が家庭を持たない、而して分別といふものに餘り煩はされない幾年か前の自分であつたなら、卽時に單身で座を立つて、N氏と一緒に家を出てゐたかも知れない。然し今の自分はさうはしなかつた。しなかつたがN氏が去つて後、考へれば考へるほど自分は苦しくなつて來た。自分は或る深刻な經驗をしてから筆の上で自分の煩悶と解脫とを廣言して信仰生活の純一性を主張した。それにも拘はらず自分自身の生活は如何かといふと妻あり子あり家庭がある故に、身後の計も考へて、貯金もしてゐれば、他人の不幸に恐る〳〵眼をつぶつて、自分の家庭の安全と幸福とを考へてもゐる。一方から考へるとそれをしないことは、妻子ある以上無責任極まることのやうにも考へられるが、又一方から考へると天道を信じ天道に賴つて唯一無二の道を進まんとする身が、明日を疑つてそれに備へてゐるといふのは信念の薄弱さを存分に裏書きしてゐるものだとよりいへない。それを考へると空恐ろしくなつて來る。お前は一元的の生活を主

張しながらお前自身の態度について何の疚しさを感じないか。自分の苦しい立場についてそれを解決すべき何等かの意見を申し出ることが出來るか。」と。

私はそれに對して大體下のやうに答へた。Y氏の立場を考へて見ると、Y氏は今自分の立場について理智的な見斷を下してをられる。その問題がY氏にあつてはまだ本能の働きにまで還元されてはゐない。無一物にならねばならぬといふ要求は理智的には存分に働いてゐるが、無一物になつてはならぬといふ要求も情的に働いてゐる。元來一元的に働くべき心が、同じ問題に對して智と情とに分裂してゐる。心が既に多元に働いてゐる。この心に對して如何に緊張した問題が提起されようとも、それは遂に心によつて分解され終るに過ぎないだらう。さういふ場合に、表面だけでも一元の生活をやらうとするのは危險だ。N氏は先づ外面からでもいゝ、一元に還つて見ろ。さうすれば心も自然に一元になるとのやうに說かれたらしいが、私としては全然不贊成だ。心が二元的である間は、卽ち或る機緣によつて煮つまつて一元的にならない間は、どこまでも二元なり多元なりの生活を押し通して行くがいゝと思ふ。

心が一元的になる時が來る。屹度來る。大抵の人にはそれは死ぬ間際に來るらしい。それでも遲いと云ふことは出來ない。兎にも角にも心が一元になるともうそこには迷ひはなくなる。例へばあなたが私のやうなものゝ處に來てそれを尋ねて見ようとするやうな心持は全くなくなつてしまふ。誰が何といはうが、妻子がどんなに不自由をしようと、そんなことは天から問題にはならなくなつてしまふ。そこには必至の一路が殘されるばかりだ。善からうが惡からうが、それをどう折り曲げようもなくなる。その時には這入れといつても、這入るなといつても、行く處に行くより外に道はなくなつてしまふ。一元の生活とは、さういふ心の境地に達した時始めて不可抗的に出來上るものと私は信じてゐる。それを私は本能の生活と名づけるのだ。この生活を外面から、努力を以て

成り立たせようとするのは極めて危險なことで、うつかりするとそこから一生腐れが萠して來るのではないだらうか。だからあなたが私のやうなものにまでもかゝる一大事を相談しようといふ氣持がどこかに潜んでゐる以上は、決してそこにかゝりそめに足を踏みこんではならぬと思ふ、とかう答へた。

Y氏は私のいふことを一應首肯してくれた。然しとY氏は更に反問を續けられた。

「然しそれはそれでいゝと假りにして見ても、自分としては矢張り努力といふことに或る重さをおきたいやうな氣がする。まだ達し得ない境遇ではあるが、不自然なりにもそこに跳ね上つて行かう爲めに或る手段を講ずることが必要とされるのではないかと思ふ。一元的な心の構へは出來てゐないが、外面的の生活だけでも一元的にすれば、そこにはおのづからそれに適應した心境が開けて來るものではあるまいか。これは矢張り因襲的な倫理思想に捉はれた上の物の考へ方だとお前は思ふか。」

さう思ふと云はうと私は敢へて答へた。さらぬだに人は安きに居らむとする。若し生死一大事の問題に對して努力の力を無視したならば人類は相率ゐて見る〳〵あと戻りをして、古人の言葉を使つていへば禽獸の境界に墮落するに決つてゐる。かう見るのがこれまでの倫理學者や道德家の見方に違ひないと私は思ふ。然し私はこゝに一つの信念を持つてゐる。信念といふのが出過ぎたことならば迷信を持つてゐる。それは或る生物が進化の過程にある間は、その生物がどれ程じたばたしても矢張り進化するし、若し退化の過程にあるならば、又どれ程じたばたした所が矢張り退化する外はないといふことだ。この見方が若し許されるならば、これまでの倫理學者や道德家の立場は如何いふ所にあるかといふと、人類といふ生物は、既に退化の過程中にあるらしい。これをそのまま抛擲しておけば禽獸の境界に墮落して行つてしまふ。そこで人間的な努力が必要になる。本能的な要求にのみ任かせておけば屹度退步するから、その不幸から人類を救ひ出す爲めには本能的な要求の上に理智的な要求をお

いて、それによつて本能を指導して行かなければならぬ。かくすることによつて人類は甫めて退化的傾向から救ひ出されて進化の道程に入ることが出來る。かう見てゐる譯なのだ。

さうではないと倫理學者や道德家はいふかも知れない。人類は矢張り進化的過程にあるのだ。理智の力を一番大事な力と見て、それに依賴して行くところが、他の生物と違つた點で、この特殊な能力が人類を益〻進化向上せしむることになるのだ。意識的な努力をするといふことが卽ち人類進化の左券であつて、お前がいふやうに努力を最上の力として許さなくなつたなら、人類全體は進化的であるが、お前だけは、人類進化の武器を否定せんとするが故に、誤つて進化の大道から岐路に分け入らうとしてゐるのだ。危いといはなければならないと。

さう云はれても私は努力を大事なものだと考へることは如何しても出來ない。如何に理智が（而して努力といふ觀念は人間の理智的動向が生み出すものだと私は考へるものだが）現在の人間生活の整理に便利なものだからといつて、それを以て人間の内奥に潛む本能の指導者たらしめんとするのは、本末顚倒の間違ひである。

我々の生活に於て、一瞬間でも煮つまつた場合に立つた經驗のある人は誰でも知つてゐるが如く、人は本心から動いてかゝる時には、そこにはもう努力の必要なぞはなくなつてしまふ。卽ち理智分別の境界は失はれてしまつて、たゞ一筋の道のみが殘される。而してかゝる瞬間が我々にとつて一番大きな飛躍の出來る瞬間である。過去から未來への階段を一足飛びに飛び越えることの出來る瞬間である。考へても見るがいゝ、昔から優れた人間が優れた生活を成就したその過程を見ると、決して努力などからそれが成就されてゐるやうなことはない。もつと深い所から湧き起る力が不可抗的に動いてその人を引き廻してゐることを發見するだらう。强ひて或る目的に達せんとする手段である所の努力といふやうなものでその人の生の力は導かれてはゐない。その人に於ては目的と手段とは一致してしまつてゐる。生きることがそのまゝ成就することだ。かうした境地が生れ出て來なけれ

ば、人類の進化を促進するやうな生命は燃え立つことはない。

そんなら努力なしでどんな生活が人類に出來上つて行くか。さう尋ねる人もあるかも知れない。こゝで私は再び前にいつた私の迷信を申し出る。恐れることなく、我々は努力を無視した生活を試みて見ようではないか。世の中は外界から努力を強ひられなければ死んだ者同然になつてしまふやうな人間からばかりで成り立つてはゐない。煮つまつた生活をしないでは生きてゐられない人がある。そんな人は自分の內部からの促進に從つてどしどし自分の生活を向上擴大して行くだらう。而してそれが他人への敎訓となつて、他人をしてその人と同樣な生活を眞似させる結果にはならないかも知れない。何故といへば、既に努力といふことは捨て去られたのだから。然しながらその人の生活はたしかに暗示となる。而して他の人の生命に內部的に働きかけるに違ひない。人類が進化的過程にあるならば、その暗示となつて働きかける力は強く、それを吸收する力も亦强いに違ひない。そこに人生の可能性が成立する。これに反して人類が既に下り坂にあり、退化的過程にあるならば、煮つまつた生活をする人も自然少なくなり、それが暗示となつて働く力も弱く、又それを吸收する力も減じて來て、段々と生命力が崩れて行くに違ひない。然しそれを如何することが出來ようぞ、そこに行けば總ては實際人力以上である。私達は默して運命の指呼に從ふより外はあるまい。既に運命が人類を退化的方面に押し向けた時、人類はいかにじたばたした所が、それは畢竟喧嘩過ぎての棒ちぎりだ。

それなら努力を必要として强說せねばならぬ生活が如何して生じたかを、私達は手を胸にあてゝ考へて見るがいゝと思ふ。こんな言葉の後には警戒すべき澤山の政略が含まれてゐることを知らねばならぬ。その政略だけは綺麗に隱してしまつて、努力といふ一寸見の體裁のいゝ所だけが私達の眼の前にさらされてゐることに注意せねばならぬ。努力といふことも宗教的や倫理的の意味にまで持つて來ると人聞きがいゝが、蔓から蔓をたどつて、

段々根の方に掘り下げて行くと、恐らく私達が夢想もしなかつたやうな、醜い卑しい奴隷道德、奴隷制度の主根にぶつかることはないか。

けれども現在の生活に於てはそれも仕方がないではないかといふ人があるかもしれない。それは見やう一つのことだ。現在の生活に於てはそれは仕方がないと見るのも一つの見方だ。そんなものが必要でないやうに現在の生活を變へようではないかと考へるのも一つの見方だ。而して私は本能の有難さを感ずるが故に後者の見方を守らうとするものだ。

それではお前はお前の見方に徹底してゐるか。といふY氏の始めの質問が最後に考へられねばならぬ。私は恥かしながら答へる。徹底してはゐない。それなら徹底もしないのに何故そんなことを主張するか。私は答へる。私は徹底はしないが私の主張するところのものを或る瞬間には確かに經驗し、それが最上のものであるのを知つてゐる。而して私の生活は段々その方向に成長してゐる。だから私はそれをそのまゝに述べたに過ぎない。若し私の述べた所に力がなければ、それは私の經驗が不十分なためである。若し私の述べた所に少しでも力があるならば、その力のあるだけの經驗を私が持つてゐるといふ證據である。

（一九二一年八月、「新文學」所載）

「御柱」上演に就いて

里見氏を通じて吉右衞門氏から一幕劇を書くやうにとの依賴があつた時、元來、劇道に暗い私は、二つの點に於て考へねばならなかつた。一つは吉右衞門氏の眞の藝風といふものが、どんなものであるかといふこと、一つは一幕劇は如何書いたら好いものかといふこと。その中で第一の點はたやすく解決がついた。それは吉右衞門氏の藝風など﹅云ふ事を念頭において書く必要がないとの申し出を受けたからだ。然し第二の點には私は餘程迷つた。これまでたつた四つだけより脚本は書かないのに、その最初の試みだけが一幕劇で、この形式の脚本については自信を持つてゐないからだ。その效果は額面にはめ込まれた一つの繪のやうであらねばならぬ。しかもその繪の周圍をかぎつた額面の外に、繪に於ては空間的にだが、戲曲に於ては時間的に或る遠い展望が開けてゐねばならぬ。それが私の力に出來る事だらうかと私は迷つた。

兎に角私は試みた。題材に選んだのはいつかこの紙上で紹介された情景である。この夏信州へ旅行をした時にも、遇ひ得た人に諏訪の事をなるべく丹念に尋ねたつもりだつた。而して歸京してから筆をとつて略〻出來上つた頃、偶然藤森成吉氏をお訪ねしたら、同氏が諏訪出身である事に氣がついた。同氏のいはれる所によれば千葉神社の木彫を請け合つた立川和四郎と云ふ彫物大工は、現在でも諏訪では評判の殘つてゐる程の名工で、その製作品も少なからずその邊には散在してゐるとの事だつた。それ程の人とは思はなかつたので私はその點を十分調べてなかつたので、實錄的に和四郎なる人を舞臺に出す事が出來ないのを知つて名前も龍川平四郎と變へて架空の人物にした。

用語に就いても純粹な現代の標準語にしようかとも思つたが、彫物師(ほりものし)は諏訪の老人、それに歯向ふ大工は江戸の職人といふ約束があるので、其の氣分を出す爲めには、いや味になる嫌ひがあるにもかゝはらず、地方語を用ゐることが必要とせられた。これについては、或る夜、私の處に友人が會合した時、私が脚本の素讀(すよみ)をすると、座にゐた藤森成吉、吹田順助、中川一政、里見弴其の他の諸氏が、信州及び江戸の言葉遣ひに就いて熱心に十二時過ぎまで訂正をして下さつた。これで私の脚本は非常に體裁を整頓された譯だ。此の點に於いては一種の合作と云つても宜い位である。私はこの機會に於いて右の諸氏に感謝の意を表する。

「御柱」といふ題は諏訪明神の御柱の祭といふ七年目毎に行はれる祭事から來て居る。寅の年と申の年と、七年毎に太い柱を諏訪明神の拜殿（諏訪明神には神殿はなく拜殿の向うには唯鬱蒼たる一叢の深林があるだけださうだ）の四方に立てるのだが、その意味は色々に解釋されてゐるらしい。生殖器崇拜に因緣があるやうに考へられるふしもあるし、昔は七年毎に拜殿を改築する習慣があつたのを、入費やその他の關係から柱を立てるだけで間に合はしたのだとも考へられるし、タケミカヅチの尊に追はれて遁げて來た大國主の尊の子タケミナカタの尊が、信州まで來た時に降服的な和睦を申し出た結果、信州を所領に與へられたけれども、その境以外には足を踏み出さない條件で、自分の居城の周圍に柵をめぐらした。その柵の心を今日まで傳へたのだと云ふ解釋もあるらしい。どれが考古學的に正しい解釋であるかは知らないが、最後の考へ方が一番傳奇的でもあり、都合もよかつたので私はその解釋を採用した。信州といふ國、信州の人といふ人達を考へると、この傳說は生きて來るやうだ。平四郎が畢世の仕事として仕上げたものが一夜の中に灰燼になつた時丁度その翌日故鄕で執行さるべき御柱の祭を感慨深く聯想すると云ふのは、傳統的な、而して緊迫した心の姿を繪にして見せ得ると私は考へた。それ故それを題材にした。

内容については、この一幕劇の中に私が何を盛らうとしたかについては、玆にくだ〳〵しくいふ必要はない。成功してゐるにせよ、失敗してゐるにせよ、それは舞臺上の藝術が說服すべき筈のものだから。

舞臺監督は吉右衛門氏の後援會なる皐月會にお任せすることにした。皐月會はそのために土方與志氏と里見弴氏とを推薦した。私は兩氏が私の未熟な脚本に對して最善の努力を與へて下さるのを感謝する。

稽古が開始される時、俳優諸氏に私としての意見を述べろとの事だつた。私は云つた。あまりに明白なことだが、新劇といふのは現代人が出て來て、現代語で、現代的な思想や感情を表現するから新劇といふのではない。脚本にもよることだが、主にそれを演ずる俳優が、在來の演伎の習俗から自分自身を解放して、銘々の氣質に應じた獨白の解釋をもつて、脚本中の人物を活すことだ。默阿彌のものであらうが、近松のものであらうが、それを在來通りのお座なり芝居にするか、全く面目を改めた新劇にするかは、俳優の心がけ一つで出來る事だ。一人の田舍の老人が出て來れば、「あゝ、あれはあの調子でやればいゝのだ」と昔からきまつて出來てゐる舊い型をそのまゝ當て嵌めて、そこに何等獨自の工夫思案を用ひなかつたなら、どんな立派な脚本が新たに書きおろされた所が、それは到底新劇になり得るものではない。この用意を實現する爲めには俳優は小さい時から受けついで來てゐた傳來の寶を先づ思ひ切つて捨てなければならない。少なくともその寶に更に一と磨き二た磨きをかけるぞとの勇猛心がなければならない。大體こんなことをいつた。

と同時に私は自分の作品に對しても自分自身で考へねばならない多くのものゝあるのを見出してゐる。此の脚本及びその上演に對して、私はこんな披露をするのを恥かしくさへ思つてゐる。然し今度の試みは私に可なり豐かな敎訓を與へてくれたやうだ。

（一九二一年十月廿一日、「讀賣新聞日曜附錄」所載）

生活といふこと

私は自分の氣に入つた仕事を發見した。今の所この點に於て私は世界中で一番幸福な者の一人だと思つてゐる。私の友達が來て、自分のしてゐる仕事が、少しも自分の本性にそぐはない不愉快なものであるといふやうな嗟嘆を漏らすのを聞くと、その人は嘸ぞ苦しいだらうと思ふ。日々の生命、それは二度とその人に歸つて來ない生命を、自分にも慊(あきた)らず、從つて他の人には猶更慊らなく見えるに違ひない生活のために、磨り減らして行きつつある、さう痛感せねばならぬその人の心を思ふと全く悲しいことだ。而して私は自分が餘りに自分の仕事に滿足してゐるのを濟まないとさへ思ふ。

斷わるまでもなく、こゝで自分の仕事に滿足してゐるといふのは、自分の仕事の出來榮えに滿足してゐるといふ意味ではない。文藝のことにたづさはるといふその事が私を存分に滿足させるといふに過ぎない。私が利害の顧慮や打算やを忘れて沒頭し得る瞬間を見出す仕事といへば、創作に從事する時の外にはないといふ意味だ。斯程までに私は自分の仕事に滿足してゐる。

それ程滿足してゐながら、悲しいことには私の生活が仕事と分離してゐないかと考へさせられる瞬間を幾度も持たねばならぬ苦痛はある。一體をいふと生活は即ち仕事であり、仕事は即ち生活であらねばならぬ。本當に仕事に滿足してゐる以上は、生活にも滿足してゐねばならぬ筈だし、生活に滿足してゐる以上は、仕事にも滿足してゐねばならぬ筈だ。肯定的な生活のある所にのみ積極的な仕事は生れる。而して又立派な仕事は生活にゆるがない安定を與へる。

所が私にはまだそれ程な立派な仕事は出來てゐない。この仕事なら滿足は出來るなとの確信はついてゐるが、その仕事の內容は貧弱を極めてゐる。そこから私の生活は屢〻脅かされる。こんな仕事より出來ないのに、生活は今のまゝでやつてゐて申し譯が立つかといふ內部の響を聞く。その聲は極めて痛く響く。

然しそれよりも强く且つ痛く響く聲は、今のやうな生活から本當によい仕事が生れ出る餘地があるかといふ聲だ。私の衷に仕事を善美にすべき十だけの力があるとしても、今のやうな生活ではその五分のものは愚か、仕事そのものが生活の不安定なために歪められてゐて、假令表面的にどれ程量に於て澤山仕事はしてゐても、その實質に於て到底積極的な仕事は出來てゐない結果になつてゐるのではないか。さういふ氣持が絕えず私の心に動いてゐる。今してゐる仕事がかけがへのない程自分に喜ばれる種類の仕事だと思へば思ふ程、その感じは激しく動く。

これは然し私に限つたことではないかと私は思ふ。誰でも仕事を見出した人は、生活が自由であるにつけ、不自由であるにつけ、餘裕があるにつけ、餘裕がないにつけ、考へないではゐられないことであると思ふ。固より生活にも積極的な意味のものと消極的な意味のものとの二つがあるだらう。消極的なものといふのは、例へば、淨瑠璃を語る人が、煙草、酒、酸味を絕つとか、樂器を奏する人が手の運動を避けるとかいふ類ひのもので、心懸け一つによつてそれを正しく導くことが出來るものである。この消極的な生活ですら、本當をいふと仕事としつくり合はせて行くやうにするのは中々容易なことではない。仕事に對して際立つた熱意と愛着とのない以上は容易に出來ることではない。而して大抵の人はかゝる種類の生活態度にすら無頓着である。然し私のやうな自分の選んだ仕事にこの上ない滿足を感じてゐる者にとつては、それをし遂げることは左程の障りにはならないやうだ。

然し積極的な意味の生活となつて來ると、それは眞に容易ならざる問題になつて來る。何故ならそれは自分自身だけの事ではなくなつて來るからだ。こゝで私の意味する積極的の生活といふのは、他の人の生活と聯關して

考へられねばならぬ生活をいふのだ。多くの人が苦しんで生活してゐるのに、自分だけが樂な生活が出來るといふのは一つの矛盾だ。或る人々が樂な生活をしてゐるのに、自分の生活が切りつまつてゐて、これと思ひ定めた仕事に沒頭出來ないといふのも一つの矛盾だ。さうした生活の中から本當の仕事が生み出され得ないのは恐らく誰にも考へられることだらう。勿論、人の心には微妙な働きがあつて、心の持ちやう一つで、陋巷にゐても玉樓に住む氣持を持つことの出來る人もあらうし、玉樓にゐても陋巷に餓ゑるやうな苦痛を嘗めねばならぬ人もあらう。然し事實に卽して現實を囘避しまいとする人に取つては、そのどちらの生活にあつても必ず滿足はしてゐられない筈だ。而してこれが現代の社會生活が思慮ある人に與へる大なる苦痛であらねばならぬ。

この矛盾は敢へて現代に限られたことではないかも知れない。人類の生存する限り續いて行く矛盾であるかも知れない。而して畢竟この矛盾に對する苦悶から美しい仕事の芽は萠え出るのかも知れない。然しそれだといつて矛盾は矛盾である。矛盾を自覺した以上はそれを無くしようと勉めるのは人間が持つて生れた本性だ。本當をいふと私が今「矛盾に對する苦悶から美しい仕事の芽は萠え出るかも知れない」といつた言葉は、單に苦悶ではなく、その苦悶によつて惹き起される正義の心から美しい仕事の芽は萠え出るといつた方が正しい言ひ方だ。

仕事を見出さない人にはこの矛盾は明かに現はれない。仕事を見出した人にはこの矛盾は非常な威壓となつて日々迫つて來る。而してそれを解決しようためにその人は自分の生活を見直し、他人の生活に觸れて見る必要を感ぜずにはゐられなくなつて來る。これは私一人の問題ではないと思ふ。仕事を見出さうとし、又は見出した凡ての人々と合力して解決を試むべき問題だと思ふ。それ故に私は敢へてこれだけのことを披瀝した。銘々が銘々の方向に就いて考へていたゞきたい爲めに。

（一九二一年十一月、「文化生活」所載）

藝術家の生活に就いて

どの職業であれ、それに携はる人が自分の仕事を最上に爲し遂げるためには、どうしても、その生活と仕事との交渉する點に就いて、深い考察を巡らさなければならない。

この事は極く平凡な事實のやうに思はれるけれども、それが實際どれほどの程度まで實現されてゐるかは、極めて疑はしく考へられる。藝術家の生活といふやうなことに關して考察して見るに、それは熟慮を必要とする問題であるやうに見える。概念的に考へられた藝術家といふものは、何か一般人とは異なつた種類の特別な天惠を蒙つた人々であつて、その人たちは一般人とは共通點の少ない生活を導くのが相當で、一般人からもそれは許さるべきことであるといふやうに斷定してかゝる傾向がありはしないか。衆俗を習ひ、衆俗を破る――それはいゝことであるにしても、その破り樣が、我儘一點張の、無反省な、必然的な必要もない破り方を平凡でしてゐて、一廉の藝術家であるらしい顏をする人が、或はないでもないやうに思はれる。一種の氣取りである。極めて不愉快な氣取りやうである。

それが單に、氣取りであるといふだけで濟めばまだいゝ。然しながら、その無反省な日常生活に煩はされて、その人の藝術が墮落したり、荒(すさ)んだりするやうなことがあつたらどうだらう。しかも、それは決して絕無とは思はれないことなのである。

私の知つてゐる友達の一人に、謠曲の先生をしてゐる人がある。それは私の幼な友達であるが、若い頃にはあらゆる種類の冒險的な生活を營み、女色にも近づき、酒にも溺れ、その外色々な無反省な生活をしてゐたが、自

分の性格にかなつたものと見えて、謠曲道に身をはめ込んでからといふものは、その人の生活は見違へるやうに變つて來た。今、彼は酒は勿論のこと、煙草も喫まず、醬油つぽい辛味の強いものも口にせず、果實は一切用ひないでゐる。その人の生活の變化を觀察した私は、或る强い暗示を受けたやうに感ずる。私ども藝術家は、一體自分の日常生活に對して、果してこの友達程の綿密な注意を拂つてゐるだらうか。少なくとも私には、それほどの用意は出來てゐない。これは藝術家としては恥づべきことだと思ふ。若し、本當に自分の藝術を愛するならば、その人の生活は、日常の極く些細な事柄からして變つていかなければならない筈だ。そんなことに無頓着で、自分には天惠的な才能があるらしいといふこと位に依賴して、勝手氣儘な生活を導いたならば、その才能がどれだけ秀れてゐたものであらうとも、それはむざ〳〵と、塵芥同樣のものになつてしまふに違ひない。

　天才とは勉强をする人であると云つた人さへあると聞いてゐる。私はもつと綿密に日常生活の微細な部分にまで注意を拂ひ、自分の製作と、その生活との間に密接な關係を作ることに注意を拂はなければならないと思つてゐる。

　藝術家は、なるほど衆俗的な生活態度から常に解放されてゐなければならないだらう。しかし、その特權を混用させるやうな藝術家はたちどころに罰せられる。それが正用されるところに、始めてよい藝術は成り立つ。この一事を私たちは絶えて忘れてはならないと思ふ。

（一九二一年十一月、「文章俱樂部」所載）

「小さき灯」書後

私はこの春は一篇の小説を創作して發表したいものと目論んでゐました。然しこの目論見は全く水泡に歸しました。創作のテーマはいくつも私の胸の中にあるのですが、どうしても形を成してくれません。私はかういふ不自由な心になつたのを始めの中は十分の不安を以て眺めましたが、今ではそれ程にも思はなくなりました。私がさうなつた原因を見出したからです。この原因さへ取除かれゝば、前よりは少しは自分にだけは氣に入つたものを產み出すことが出來るとの自信を持つことが出來るやうになつたからです。さうなるには二年かゝるか五年かゝるか知れないけれども、兎に角いつかはそこに行きつくことが出來るでせう。

この前の輯を出してからこの輯を出すに至るまでの間、私は寧ろ爲すこと尠なく暮してしまひました。然しながら何にもしてゐなかつたのではありません。母を迎へに熱海まで行つて一、二日間何にもしないでゐたら、全く堪へ切れない程の退屈に襲はれてしまひました。だからそれまでは不滿足に思ひながらも私は何かにかやつてゐたものと思ひます。

そのやつたことの中の一つとして、私はホヰットマンの詩の譯を二三企てました。私は元來詩はその書かれた國語によつてのみ讀まるべきものだといふ意見を持つてゐるもので、飜譯は不可能だとするものです。從つてあの仕事には自己矛盾があります。その上ホヰットマンの詩はある大きな量を以て富田、白鳥の兩氏によつて企てられてゐます。然し以上の兩氏は共に詩人を以て任ずる方々であります。詩人が他人の詩を譯すといふことは、素人がするよりも一層困難なことではないかと私は思ひます。何故なら詩人は各ゝ自己獨特の風格を持つてゐる

のですから。この性來の風格の獨自性を無視しようといふことは、縦令企てたところで出來る筈のものではありません。それが勝手に出來るやうならその人はその瞬間に詩人たるの資格を失ひ去る外はないことになるからです。だから詩人が他の詩人の詩を譯す場合には、單に逐語的に他の詩人の詩を異つた言葉に排列するか、自己獨特の風格のものに改造するかの二途があるばかりです。

所が私のやうな詩に對する素人になると、自分の方にぬきさしの出來ないやうな詩的特殊性が發達してゐませんから、案外素直にある詩人の風格に這入りこむことが出來ると私は思ふやうになつたのです。それで私は私の力の及ぶかぎり、ホヰットマンの氣持を滲み出させることが出來るようにと心懸けて筆を取つて見ました。それが何所まで成功してゐるかは讀者の判斷に任す外はありません。又ある人は私の譯文がぎごちなくて殆んど日本語の體をなしてゐないといふかも知れません。然しこれはホヰットマンの原詩が當時の批評壇から蒙つたと略〻同じ彈劾で、當時の批評家のあるものは、「あれが若し詩として理解出來るなら、老豚が數學を理解することも出來るだらう」とさへいひました。それ程當時の英語若くは詩形とは緣遠いものであつたのです。而してそこにホヰットマンの極めて獨創的な所も亦潜んでゐたのだといはなければなりません。その調子をいくらかでも出さうとした企てが私の譯詩を可なり晦澁なものにしてしまつたやうです。同時にあれは原詩に較べて見るとあまり自由な飜譯のしかたゞといふ非難もあるかも知れません。例へば富田砕花氏の譯文などに較べて見るとその批評はたしかに當つてゐます。こゝには然し私としては自分の譯詩が兎に角讀者に了解し得られるだけにはしておきたいといふ目論見が潜んでゐることを察して貰はねばなりません。英語の讀めない讀者に、ホヰットマンの詩がいかなる内容を持つてゐるかを朧げながらでも傳へることが出來れば、私の仕事の使命は果されてゐるのです。私の譯詩を省みて下さる人があつたら、その位の要求だけは省みて下さることを私は望むものです。これからも機

會があつたら私の力の及ぶ範圍に於てこの詩人の詩を日本語になほして見たいと考へてゐます。

文化生活研究會でした私の講演の筆記が警醒社から、新人會でした講演の筆記が聚英閣から出版されることになつてゐます。どちらも筆記を讀み返して見ると不滿足な點の多いものですが、著作集と併せて讀んで下されば幸ひです。尤もそれらの筆記も早晩著作集の中に取り入れることになるかも知れませんが、當分はさうする氣はありません。

今度の輯は極めて雜多な小品の輯になりました。然し私の輯の中には二年に一度か三年に一度、かうした輯が出ることを承知しておいていたゞかなければなりません。折々雜誌や新聞などに書かされるものをそのまゝ捨ててしまふのは少し殘念に思ひますから、小品ではありますけれども、私はあれらのものを調子を下げて書いた積りは更にありません。鷄肋を捨て惜んで佳肴らしく食膳に供することだけはしないつもりです。

今度はこれ以外にいふことは全くないやうです。

廣告文

小さな灯

これは私が時にふれ折に從つて書きためた小品の堆積だ。創作に於てよりも、ある要求を叫ぶものとしての私がこれらの小品の中に現はれてゐるかも知れない。創作に於て私は支配者であらうとする。然しこれらの小品に於て私は自分自身を少しゆるめて飛びまはらしてゐる。

ホヰットマン詩集　第一輯

彼は恐らく完成者ではない。然し彼は確かに創始者だ。健全な胚子、自由な泉源、それは彼だ。彼を識り、彼を味へ。

講演・談話筆記

藝術の不變性

安倍さんの演說に、謠曲の本質として エヴォルヴするよりもインヴォルヴするものが あるといふ言葉を提へまして、私は其のお話を裏書きするやうなことになるのであります。それだから恐らくは重複する點が澤山にあるだらうと思ひますが、それはどうぞお宥しを願ひたい。

變つて行かないものは私共の生活の中には如何なる方面にも一つもないのです。凡ての物は流動して居りますが、私共はどうかして其の流動して變化の極まりない姿の中に、何か永く留まる姿を見出したいといふ欲求を持つて居ると思ふのです。此の事は私共の實際の生活の内にも、亦私共が實際の生活に慊らないでさうして築き上げようとして居る藝術の世界の内にも、同樣に行はれると思ふのです。併し此の流動の世界の内に、何か不動なものを求めようといふ其の氣持は、藝術の世界とそれから實人生の世界に於ては多少異つた姿を現はしはしないか。私共の生活は凡て觀念と其の表現、私共の頭の内に描いて居る所の一つの象と、それに何かの衣を着せて表はす所の現れ、此の觀念と表現といふ二つが絡み合つて成り立つて居るといふことが云へると思ひますが、私共の此の日常の生活に於きましては、此の觀念といふものと其の實行若しくは表現といふものとの關係が、斯うなつて居るのではないかと思ふのです。

それは觀念は割合に永久な姿を取つて私共に現はれる間に、私共の實際生活は恒に常に遷り變つてゐる。若し例を以て言ひますならば、親と子との間の感情、又は子が親に對する感情――孝行なら孝行といふ一つの觀念は、私共の此の實際の生活に於ては割合に變りませぬ。けれども親と子との關係、實際生活に入つて來た孝道の姿というものは、人々に依つて非常に變つてをりますし、一人々々の關係に於ても恒に常に變化して止まないと思ふのです。

所が藝術の世界に入ると、それが丁度反對になる傾きがありはしないか。卽ち藝術といふ一つの觀念です。藝術とは如何なるものであるかといふ一つの觀念は、時代々々に依つて常に變つて居りますけれども、其の藝術の觀念に依つて生み出された所の藝術卽ち藝術的作品といふものは、それは非常に固い動かない姿を以て停つてゐる。これが實人生とそれから藝術といふものゝ相違の一つの大なる點でないかと私は思ふ。もう一遍繰り返して言ふならば、觀念と表現との關係に於て、實人生に於ては觀念が割合に恒久的傾向を持つ。さうして其の表現が常に流動變化して止まない間に、藝術の世界に於ては觀念が屢々變化し、さうして却つて其の產物である所の藝術的作品は、實人生の觀念にも增した恒久的な性質を持つて居るといふことが言へると思ふ。一人の藝術家が製作をしますときに、誰でもこの製作が二度三度と變へることが出來ると思つてする藝術家は一人も無いと思ふ。その藝術家が良心的であればある程、自分の作品が出來上つたときには、自分でどうすることも出來ないやうな獨立の存在であつて、さうしてその存在は永久的に動かないものである。少くとも永久に動かないで欲しいといふ欲求の下に、藝術家が自分の製作に從事すると思ふ。

私の聞き及んだ或る作家は、自分が原稿紙に向つて作をしますときに、能く自分の考へを纏めて、一たび筆を紙の上に下しましたときに、其の瞬間の後に自分の心持が變つて、それを抹殺して新しい言葉を以て變へようとい

ふ誘惑を感じた時でも、決してそれをしない。何故ならば、其の藝術家が自分が心を籠めてこれならばと云つて筆を下したときに、其の藝術家の生活が一番强く深くそれに現はれて居らねばならぬ。さうして其の次の瞬間の心持は既に一番眞劍な心持からは離れてゐる――外見にはそれがもつと理窟好く見えても、離れてゐる。さういふ考へからして、抹殺訂正といふことをしないといふ風な態度を執つてゐる藝術家のあることを聞き及んで居ります。さういふ風な心持は藝術家には可なり强いのです。例へばホヰットマンが自分の詩集を出したときに、其の詩集に『アダムの子等』といふ詩がありますが、其の詩には男女の性慾觀念を可成り露骨に描き出してある。其のホヰットマンの詩集をエマアソンが見て感心したが、これだけは餘りに露骨だと云つて、さうして詩集の中からそれを抹殺させようとして大變に論じたことがあつた。エマアソンは其の當時四十を過ぎた堂々たる大家でありましたが、ホヰットマンは僅かに一冊の『草の葉』といふ小册子を出して居つた、若い無名の詩人に過ぎなかつた。兩人が其の事を論じて二時間程に及んだ。ホヰットマンが最後にエマアソンに言つた言葉が何だといふと私は貴方の仰しやることが能く解つたし、貴方の心持も能く感ずることが出來たけれども、併しながら若し私の詩集からこれを除くくらゐなら、私は此の詩集全部を燒き棄てゝしまふと言つて別れたといふことでありますが、今日の藝術家の心持にもさういふ突き止めた心持があるのであらうと思ふ。これは實人生にもさういふことはありますけれども、一面に於て藝術に恒久的な內容を與へるものであると思ふのです。

實人生の表現といふものが始終遷り變つて行くといふことに就いて、もう一つの事は實人生の凡ての交涉は對人的です。詰り一人では行はれない事が多い。凡ての交涉が對人的になつて來ますと、おのづから其の間に感情や思想や意志といふものに上り下りが出來まして、さうして其の上り下りの間に色々なる變化が生じて來る。これに反して藝術の世界は、それが藝術的であればある程、個性的になつて來ます。段々對人的の關係から離れて

行きまして、さうして、其の最も深い處に這入つたときには、其處には世界も無く人も無く、唯熱し切つた藝術家が一人ゐるといふ姿になつて來ます。そこで其處に生み出された所の作品はおのづから變へることの出來ないものになつてしまふのだと私は思ひます。藝術家が作品を生むのは丁度産婦が子を産むやうなものだと思ふのです。子を産むといふと、もう其の子供は一つの獨立した存在であつて、母が如何にそれを造り變へようとしても造り變へることが出來ない。又それを仕立て上げる上にも、若し母が不理解な人で、子供といふものゝ力を知らない母でありましたならば、子供の行動に一々干渉して、子供を自分の思ふやうに曲げて見ようとしませうけれども、若し其の母が理解のある良い母であればある程、其の子供の個性を尊重せずには置くまいと思ふ。

さういふ風に藝術は藝術家其のものから獨立して、更に非常に良い藝術になつて來ますと、丁度希臘の昔噺のハーキュリスが母の胎内から出ると、直ぐに其處に居つた所の大きな蛇を裂いて、さうして自分の力を示したやうに、良き藝術品は藝術家の胎内から出ると直ぐに實に力強いものとなつて現はれる。斯くの如くにして藝術は藝術といふ一つの觀念から獨立して、さうして動かすべからざる永續的な存在になるのだと思ふのです。それだからして私が茲に演題を出しました所の『藝術の不變性』といふ言葉は、本當を云ふと少し私の言ひ方が間違つて居ります。『藝術品の不變性』或は『藝術作品の不變性』とでも言つた方が適當して居るかも知れませぬ。藝術に對する觀念は始終變つて行きますけれども、藝術其のものは、それが良い藝術であればある程、永く續く所の力を持つて、さうして變へることの出來ない姿を以て現はれて來るものだと思ひます。

所が其の藝術的製作品は、必ず其の內の生命と云ひますか中心と云ひますか、其の內部に働いて居る所の一つの力と、それを衣して居る所の表現或は技巧といふものがあります。よく人は此の關係を思ひ誤りまして、內部的の生命のない技巧のみが成り立つたり、或は技巧の全くない所の生命のみが藝術品として現はれたりすることが、

あり得べきことであるかの如く考へる人があるやうに思ひますけれども、私にはさうは考へられない。內部的の生命とそれからそれを衣して居る所の表現若しくは技巧といふものは、私共の假りに類別して名づけた所の名であつて、それは渾然として離るべからざるものである。丁度、私共の此の內臟を包むのに、私共に皮膚があると同樣なもので、皮膚と內臟とは違ひますけれども、皮膚を剝離して私は存在することが出來ず、又內臟を取つてしまつて、皮膚のみで私が存在することが出來ないと同樣の關係であつて、それくらゐ緊密な關係を、此の中心思想とそれから技巧といふものが持つてゐるのです。

所が今申しましたやうな譯で、一人の藝術家が藝術品を作りますときには、其の藝術家の生活が其の中心の力となつて居りますけれども、其の中心の力が他人に訴へるためには着物を被なければならぬ。私共の生活に於て着物が必要であるやうに、藝術家も着物を必要とするのです。其の着物は何處から來るかといふと、其の時代を待つ外にはない。それだから如何なる大きな藝術家が出來、其の心が萬代に亙つて人の心に訴へることの出來るやうな心を持つた所の藝術家であつても、其の藝術家が自分の衷心を表現する時分には、矢張り時代々々に依つて支配されるといふことは禁じ得ない。これは御記憶を願ひたい。それだから藝術的作品は如何なる藝術的作品であつても、多少時代といふものが反映して居ります。若しそれが其の藝術的作品の中心力に反映して居らなかつたとしても、少くとも其の皮膚即ち衣には反映して居るといふことは否むことが出來ないのです。

で此の時代の反映といふものは、單獨な――何と云ひますか能く私は言葉を知りませぬが、唯一人の人が作り出した藝術とそれから先刻の安倍さんの言葉を借りて言へば綜合藝術、これに依つて叉差が生じて來ます。純藝術的の方に向いた、例へば詩を作る人とか或は音樂を組立てる人とかは、さういふ事は段々少くなつて行きますけれども、それが衣を被る必要が段々多くなればなる程、此の時代の反映が强くなる。さうして個人が一人で以て

生み出す藝術でなく、只今申した綜合的の藝術になつて來ますと――二人以上の藝術家が相寄つて作り上げなければならぬ藝術になつて來ますと、時代の反映が益々大きくなつて來ます。

爰に例へば能樂の如きは、これは一つの綜合的藝術であります。先程安倍さんが仰しやつた通りに縱令綜合的藝術であつても、其處に中心になつて働く個性の力といふものを否むことが出來ませぬけれども、併しそれが綜合藝術である以上は、其の時代の周圍の影響といふものが、個人的の藝術よりも遙かに多いと認めなければならぬ。又實際多いのであります。さうしてさういふ風な綜合藝術卽ち外界の影響、周圍の影響を被る所の藝術が發達して行くときには、如何いふ風に發達して行くかといふと、其處に影響して居る所の外界卽ち時勢です。其の時勢が或る方向を以て續いて居る間に、さういふ風な藝術が發達して行く。併しながら其の時勢が方向を轉じて他の方向に向いたときには、此の綜合的藝術が固定するのです。それだから謂はゞ綜合藝術といふものは、其の發達の時代に於ては母の胎内に在ると看て差支へない。それで愈々十月の月が滿ちた時、卽ち其の時代が或る他の方向に轉化したときには、それが完全なものとして生れ出る。完全なものとして生れ出る場合には、もうそれが純藝術の約束に依つて不變なものとなつて來る。

私の考へに依るならば此の謠曲といふものは、詰り足利時代から德川時代に亙つて起つた所の綜合的藝術の一つでありますから、足利時代から德川時代に亙つた所の政治上若しくは經濟上若しくは道德上、宗敎上といふやうなものゝ概念、思想といふものが一つの方向を以て續いて居る間は、それが發達して行つたに違ひないと思ふ。併しながら時勢が急に角度を變へて、さうして私共が現在住んで居る此の時勢になつた。此の時勢になつて來ますと、如何に徐々に發達して來た謠曲と雖も――個人の藝術とは違つた徐々に發達して來た謠曲と雖も、歩みを停めなければならぬ。さうして其の謠曲といふ藝術が退歩するか固定するか、此の二つの問題が殘されて來ると

思ふ。それで退歩する場合には、其の藝術に何等の內部的の價値が無い場合、それからそれが固定してさうして恒久性を持つ場合には、其の內部的の價値がある場合だと思ひます。若し私の考へが間違つて居りませぬければ、謠曲といふものは確かに固定しましたが、併しながら其の固定が無益に潰れてしまふ固定の仕方ではなくして、さうして其の固定した儘で以て後に遺つて行くべき所の藝術の一つではないかと私は思ふのです。丁度希臘の芝居がもう遠い昔に一度は亡びてしまつて、誰もこれを忘れてしまつた頃になつて、それが再び拾ひ上げられて世の中に出て、シエークスピアを出し、ラシーヌを出し、其の他イプセンを出し、或はトルストイを出した現在に於ても、立派なクラシックな藝術として認められるやうに、謠曲も私共には緣の遠い感情を表はしてゐるやうだけれども、それでゐて釣合ひの取れた美しい感情と發想とが、立派な藝術として賞翫されるだけの價値を持つてゐるといふことは、先程安倍さんが懇々と述べられた所であります。で私は謠曲は私達のそれとは一つの違つた世界ではあるけれども、私共が十分に享樂することの出來る內容を持つて存續するであらうと思ふのです。

併し斯ういふ風な種類の藝術といふものは、兎角ゼネレーションに忘れられ易いのです。殊に私共は此の多種多樣の生活の內に沒頭せしめられまして、何が本當に良いものであるか、何が惡いものであるかといふことを選擇する標準を殆んど失つてゐるのであります。これを鑑別することの出來る人は、此の藝術的の直覺力が鈍つてゐない、其の直覺力の銳い人に俟つの外はないと思ひます。私の考へに依れば、例へば昔から日本にあつた所の歌舞伎劇或は大阪の人形劇、斯ういふものは私共の生活には是非取つて置かなければならぬと思ふ。或は雅樂の如きものもさうです。併しながら私共はさういふものを如何に輕々しく忘れ果てゝしまつたでせう。丁度誰でも知つて居る話ですが、廢藩置縣の際に、奈良縣の知事に鹿兒島出身の餘り藝術的直覺力の銳くない人が居つたことがあるさうですが、彼の興福寺の五重塔が少し曲りかけて危いと云つたときに其の知事が、それを取り毀すといふ

と金が掛るから燒き棄てゝしまふことにして、金目のものだけ後に殘るのを入札に附した。多分五十圓位の値打があるだらうといふので落した者がある。五十圓になれば結構だと云つて愈々燒き棄てようとするときに、或る西洋人が來て塔の價値を說いたので、始めて其の知事が覺つて燒くことを止めたのださうです。其の爲めに彼の美しい塔が今でも猿澤池の側に聳えてゐるのだといふことを、誰か本當か聞いて居りますが、日本には此の尊い藝術に對して拂ふ注意が足りないために、往々にして斯ういふ事があると思ふのです。

歌舞伎劇の如きも、私共が例へば帝劇に行きまして、さうして金の飾りのしてある枠の內に舞臺が嵌められてゐるのを見るのは可なり不愉快です。さうして其處に時代風な服裝をした立派な俳優のゐる間に、其の背景に油繪のあるといふことを見るときに極めて不愉快を感ずるのです。どうして日本では此の大切な寶として居る藝術を、あのやうな無殘な取扱ひをしてゐるのかといふことを感ぜずには居られぬ。又大阪に往つて人形芝居を見ても、彼處の芝居小屋を持つてゐる人が損をして人形の爲めにやつて下さるさうですが、それは實に有難い心持だと思ふのですが、矢張り油繪の背景がやつてある。さうして其の油繪の背景がパノラマ式と云ふか何と云ふか、例へば役者が步いて行くと――役者が步くのではありませぬ、一つ處で足を動かして居ると、後の背景が動いて役者が步いて行くやうに見えるやうな、非常に懸け違つた考へから出來た所の裝置をして、さうして彼の極めて古典的な人形を扱はうとしてゐるのです。私は敢へて鋭感を誇る譯ではないが、誰が見てもかゝる裝置は人形劇といふ藝術に對して鈍感なやり方と見ざるを得ぬと思ふ。

さういふやうな遣り方をして、さうして日本の今迄尊い寶であつた藝術を惡くしてしまふならばそれは全然遣さずに取つてしまつた方が宜いと思ふ。あゝいふ半殺しの目に逢はして藝術を遺して置くことは、實に殘酷だと思ひます。若し玆にレンブラントの畫いた美しい肖像畫があるとして、さうして和蘭の民衆がそれを見て、これ

は着物の着方と云ひ顏の表情と云ひ十七世紀のものであるからこれをどうしても近代化しなければならぬと云つて、それにカイゼルの髭をくつ附けたり、亞米利加の軍帽を冠らせたならば、これを人が何と云ふでせう。所がさういふ風な繪だとか何だとか單獨な藝術に於ては變易するのは極めてやり惡いから人がつツ突き壞すことをやりませぬが、例へば謠曲だとか歌舞伎劇などの綜合藝術になると、人が其處に這入つてつツ突き壞しをやる。つツ突き壞しの出來ないものを無理につツ突き壞さうとする。一つの油繪にしても一つの藝術的作品と考へて見ればそれはどうしても變へることの出來ないものだといふことが、明白に判つて居ることであるに拘はらず、同じ完成した所の藝術的作品が玆にあるのに、それが唯勝手に手が着け易いからと云つて、それを變へるといふことは全く心得違ひであらうと思ふ。或る人が歌舞伎劇の近代の墮落を痛嘆して、歌舞伎劇があんなに墮落したのは、福地櫻痴居士と市川團十郎の罪であると云つた人がありますが、私は非常に賛成です。あの人等が活歷だとか言つて、舊い時代のものに新しいものをくつ附けたのは、丁度レムブラントの繪にカイゼルの髭を附けたのと同じことです。是等は全く藝術の不理解から來てゐると思ふのです。私共は謠曲といふものは藝術として後に遺すべき必要があると思つて居りますが、若しさうでしたならば、私の謠曲に對する註文は、今申し上げた所でお解りになると思ふのです。

謠曲は實に時代の展開を經た所の一つの綜合藝術である。其の謠曲といふ藝術は再び進步發達する餘地が無い。卽ち安倍さんのお言葉に從つて、エヴォルヴする餘地は無いがインヴォルヴする可能性を持つてゐる。若しそれが良い藝術であるならば、私共は此の謠曲といふ藝術に望む所は、此の內面を進化すること、此の外には無いと思ふ。さうすると玆に問題が出て來ますが、そんなに時代と全く懸絕した謠曲が存在して、それを演ずる人はどうするか。遂に足利時代の人間を呼び戾して演じさせるといふ心持で、演じさせることが出來るであらうか。

明治、大正の人間は時代の曲折を經た後の時代の人間である。其の人間をして前時代の人間其の儘に活かさせるといふことは、可能であるか可能でないか。それは迚も言ふべくして行はれないことではないか。それならば如何しても謠曲といふものは或る意味に於て、現代化させるといふ必要がある。必要があるといふよりも已むを得ないことであると斯う言ふ人があるかも知れませぬが、併しながら私はそれにも一つの抗議が言ひ得ると思ふ。如何しても本當に此の謠曲道に沒頭しようとなさる方があるならば、其の人は少くとも謠曲といふものを取扱ふのに對しては、前時代の人であつて欲しいと思ふ。

これは非常に殘酷なことに聞こえるかも知れませぬけれども、私の知つて居る或る一人の謠曲のお師匠さんがありましたが、其の人は八十九の長壽を保つて死にました。其の人が近頃まで生きて居て私共と能く話をして居つたのですが、其の人の心持が前代的なんです。併しながら新しい話が能く解るのです。それで大變新しい事を聽きたがる。其の點に於ては、どうも年寄に似合はない進取的な人でした。其の人に養子がありまして、其の養子の方がなか〳〵聲も美し、それから其の養子の方のお父さんが謠曲の名人でありましたから、屹度質も良いと思ふのですが謠を教へない。或る人が如何して貴方は教へないか折角の謠曲の家系が絕えてしまふではないかと云つて忠告した所が、彼は迚も物になりませぬ、彼は小學校で勉强したからと言ふ。それで其の謠曲の先生に言はせれば、現代のやうな小學校の教育を受けた者は、謠曲を謠ふべき資格が無いと言ふ。それから其の養子の方に謠曲を教へてはどうかと勸めた時分は、其の人が十一二歲であつた。それで年齡から云つてもいけない、五つか六つの頃から教へたら物になるかも知らぬが、もう駄目だと言つて斷然教へない。そこで其の人が死ぬと同時にその人の謠曲の系統といふものは絕えてしまつた。其のくらゐ藝術家として氣持がしつかりとして居らなかつたならば、此の謠曲といふものは恐らく極く惡く現代化してしまつて、さうして先刻安倍さんが仰しやつたやうに、

實に慘めな最期を遂げなければならぬと思ふ。或る學者が已れの專攻する學問の研究に沒頭して、日清戰爭が如何いふ譯で起つたか、日露戰爭が如何いふ譯で起つたか知らずに居つたといふことでありますが、さういふ覺悟がなければ到底物になることが出來ぬと思ふのです。そこで私は謠曲道にもさういふ方が出て下さることを希望する。謠曲は或る時代に非常に衰微しまして、さうして立派な名師匠が三味線絲を賣つたり何んぞするやうな、內職をして纔かに暮して居つた時代があつたのです。其の後繼ぎになるべき人が絕えて居つて、謂はゞ孫弟子といふやうな人が今謠曲道に關係してゐると思ひます。それですから私の考へでは、從來私共は、とんでもない失態を謠曲に對して加へて居つたと言はなければならぬ、其の爲めに謠曲道の本當の研究がどれ程遲れ走せになつて居るか知らぬと思ふのです。若し謠曲に本當の價値があるとしたならば、再びこんな失態を與へないやうに、眞に藝術を尊重して正しい發達をさせて上げたいものだと思ふのです。

甚だ雜駁な話になりましたがこれで御免を蒙ります。（一九二〇年七月能樂文藝講演會にて）

（一九二一年一月、「謠曲」所載）

美を護るもの

ラヘルの傳をお讀みになつた方は、私の今日お話しする所から、何も新しいのを得られないのでありますけれど、此の本をお讀みにならない方、或はお聽きにならない方の爲めに、私の考へ合はせたことからしてそれを御紹介して見たいと思ひます。

此の書物は一九一三年であるから、今から八年前にエレン・ケーの書いたものであります。此のラヘル・バルンハーゲンといふ人の評傳或は其の人の手紙を集めたものは、既に澤山出て居るのでありますけれども、私はそれを一つも讀みませぬ。從つてラヘルに關する私の知識は全部エレン・ケーの此の評傳から受けてゐる譯であります。御承知の通りエレン・ケーは近代の女性思想家として勝れた特色を有つてゐる人であります。ラヘルとは一味の共通點を有つて居りますから、其の評論は非常に興味のある且つ有益のものでありますが、私は敢てエレン・ケーの意見を其の儘に御紹介するのではない。此の書物の內容にある事實からして、私のみの考へを申し述べて見たいと思ひます。

有名な佛國の女流革命家マダム・ド・スタールといふ人は、ラヘルから見ると丁度十五の姉に當つて居ります。ラヘルは、一七七一年の五月十九日に生れた人であるから、日本の暦でいふと、明和八年、後桃園天皇の卽位の年で、又露西亞軍がクリミヤを占領した時に當つて居ります。生れた處は多分ベルリンだと思ひます。一七八九年ラヘルが十七歲の時に、父が死んで居ります。一七九五年二十三の時に、カルルス・バアドで始めてゲーテに會つて居ります。此の時ゲーテは四十五歲。ゲーテに對するラヘルの親愛と崇敬は生涯のことであるが、ゲーテに面

接したのはこれが初めであります。一七九六年二十四の時に、カルル・フォン・フィンケンスタインといふ伯爵と知合ひになつて結婚の約束をしました。それから其の約束が四年間續いて、一八〇〇年二十八の時に其の婚約が破れ、それから一八〇二年三十歲の時に、西班牙の公使館附になつて居たドーン・ラファエル・ダルキーオといふ人と戀愛關係が起り、而して其の關係が一八〇七年卽ちラヘルが三十五歲の時まで五年間續いたけれども、不幸にして此の關係も破れることになりました。而して其の後に他日自分の夫となつた所のバルンハーゲンといふ人との交際が始まり、而して此の交際は一八一四年ラヘルが四十二歲の時まで續いて其の年に愈〻結婚しました。バルンハーゲンといふ人も外交官であつたから、任務の爲め彼處此處に往つたり來たりして居つたが、ラヘルは頻りに生れ故鄕であるベルリンに歸りたがつて居つた。一八一五年四十三の時に、フランクフォルトに往つて、ゲーテに會つて居ります。一八一九年四十七の時にベルリンに歸ることが出來て、其處にサロンを開いて、而してベルリンの知識階級の人々の社交上の一つの中心點を造りました。一八二五年五十三の時に又旅行して、ワイマーでゲーテに會つて居る。其の時ゲーテは七十五歲であつた。それから一八三三年六十一歲の時に健康を損じ、段々衰弱して遂に三月七日夫に先立つて死にました。それは結婚後十九年目のことであります。

ラヘルの生涯は割合に外面的に單調で、ざつと今申し上げたやうな次第であります。ラヘルの死んだ年は一八三三年であるから、今から見るとざつと百年程前に當ります。此の百年程前に生きて居つた一女性のラヘルが、人生或は自分の生活といふものに對して如何(どう)いふ風に生活をして居つたかといふことを考へて見ると、これは現今のやうに婦人問題或はもつと適切に云へば人生問題といふやうなものを色々に考へて居られる人々の爲めに、非常に意味深い參考にならうと思ふのであります。

前に申した通りに、マダム・ド・スタールはラヘルよりも十五歲の姉さんであり、又佛蘭西の有名な小說家であ

るジョージ・サンドはラヘルよりも二十四歳の妹であり、それから英國の女流創作家であるジョージ・エリオットは三十三の妹、それからエリザベス・ブラウニングは二十八の妹に當つて居ります。マダム・ド・スタールを除くの外の當時の女流思想家の凡ては、ラヘルよりも年が若いのであるから、ラヘルといふ人が可なり古い時代に屬する婦人であつたといふことが考へられるのに拘はらず、此の人の生活なり思想なりに新しき時代に刺戟を與ふべき多くのものが含まれて居ります。此の點は非常に注意せらるべき點であらうと思ひます。

先づ生ひ立ちからいふと、ラヘルは不幸にして猶太人の家庭に生れました。御承知の通りに猶太人は日本で云つて見ると、先づ新平民とでもいふべきものであつて、十八世紀時代の歐羅巴に於ては、色々壓迫を以て見舞はれて居つた所の種族である。フレデリック大王や、猶太人であるメンデルゾーオンといふやうな人々が、猶太人に對する歐洲人の僻見を破る爲めに色々努力をしたけれども、矢張り一般人の此の人種に對して有つて居つた所の輕蔑と憎惡といふものを打ち消すことが出來なかつた。ラヘルはさういふ境遇に生れたのであります。併しながら由來猶太人は凡ての方面に於て非常に能力の發達した人種であるからして、ラヘルの父の仕事も相當に榮えて居つたやうであつて、ラヘルは先づ中流以上の家庭の第一番目の娘として生れました。所が身體が非常に虛弱で、生れた時に箱の中に入れて、これに綿を詰めて溫めてやつて、漸く育て上げた位であります。而して段々生長して物心つく頃になつて、自分の種族が歐羅巴人の僻見の爲めに非常に惱まされて居るのを見、此の先天的の逆境を痛切に身に感じて居つたらしい。ラヘルは自分自身の境遇を顧みて、斯ういつて居ります。「私は此の世の中に生れた時から、天外の神からして身に鋭い刃を刺し透されて來てゐる。而して神は次のやうな言葉を私に言ひ聞かせた。お前は今僅かの人しか見えない程に深く世の中を見よ。又私はお前が有つて居る偉大なる尊貴なる休むことなき思想を奪ふこともしまい。併しながらお前が猶太人の女であるといふ其の一事だけは、私は取り除

くことをしないぞ」と斯ういふ言葉を受けて、而して身に鋭い刄を刺されて生れて來たやうなものだといふことをラヘルは云つて居ります。さういふ風にラヘル自身が苦しんでゐるやうに、此の境遇はラヘルの快活な精神に一片の雲翳を投じて居つた。

それにラヘルは餘り容貌の美しくない人であつた。男としては容貌は大した問題ではないが、女に取つては我我男子に一寸考へられないやうな一つの重大な問題と見えます。ラヘルのやうな人でも、此の問題の爲めに可なり惱んだ。「私は美しい心、軟かな心臟を有つて生れて來たけれども、私の容貌が勝れない爲めに、新しい世に顯はれることが出來ない」と歎じてゐる。併し公平に見て、この書物に載せられてゐるラヘルの肖像から見ると、決して自分で悲觀して居つた程美しくない女ではなかつたやうであります。ある人の言葉に據ると、ラヘルは非常に身柄の小さい細々とした、併し如何にも確りと出來た體格であつて、而して顏の周圍には黃色いつやつやした髮の毛が潤澤に生え、而して非常に小さい美しい手と足とを有つてゐる女である。而して驚くべきことは其の人の目である。其の人の目は一種の光を以て輝いて、人を見詰める時にその人の肺腑を貫くやうに見える。又同時に驚くべきは其の人の聲であつて、張りのある而して響きのこもつた實に何んとも云へない聲で、其の人の話を聞いて居ると何時までも聽かなければ氣が濟まないやうな感じがする。其の話す言葉は優しい立派な床しさを有つたものであるけれども、其の中には鋼鐵の如き力があつて、假りに人がそれを動かさうとしても、思ひも寄らぬといふ感じを與へた。さういふ風に……と容貌態度を書いてゐるが、それで見ても決して醜いといふやうな婦人ではなかつたやうに思はれる。併しラヘル自分自身の心持では、決して美しいものとは思つてゐなかつた。自分の有つて生れて來た其の內容から考へるならば、自分はもつと〳〵美しい女でなければならぬと思つたに違ひない。少なくともラヘル自身が感じて居つたやうな美しい心を蔽ふ所の器として、決して完全の器でなか

つた、かうラヘルの深く思ひ込んだ結果が、ラヘルの精神に多大の影響を與へてゐたやうに見える。實際、上に擧げたラヘルの容貌の記述にしても、外形的な容貌よりも、内部から漲り出たものによつてその外形が美しく活かされてゐたことだけは思はされます。

それからもう一つラヘルの若い時に苦しめられたものは、其の父と母及び兄弟がラヘルに對する態度でありまず。彼等はラヘルの本當の精神の傾向を理解することが出來なかつた。殊に父は猶太人に通有なる極く外面的の政策的見地からして、自分の娘の生ひ立ちを見守つて、自分の思つてゐる鑄型通りに娘の性質を嵌め込まうとした。併しながら強い性格を有つて生れて來たラヘルに取つては、それが殆んど許すことの出來ない程の壓迫として感ぜられた。父はラヘルが十七の時に死んだけれども、それまでラヘルは父の爲めにどれ位苦しめられたか知れない。ラヘルは殆んど死ぬまで父から受けた所の傷が癒えなかつた。母は父程の人ではなかつたけれども、矢張りラヘルの理解者としては甚だ無識の理解者であつた。其の爲めラヘルは母から別居して住むことを餘儀なくせざるを得ない程になつた。所が母が病氣をしてそれが段々重くなり、而して自分の娘に對して何となく戀しがつて來たといふことをラヘルが感ずると、ラヘルは隔たつた所に居て忙しいにも拘はらず、萬事を打ち棄てゝ毎日母を見舞ひ、有らん限りの力を盡して心から母を慰めました。其の親切の樣子は實に隣人を動かすに十分であつたといふことです。ラヘルが母に對する記憶は實に美しいものであつた。ラヘルは一體大變優しい心を有つてゐたけれども、其の心が非常に誠實である爲め、自分の感じたことを僞つて濟ますことが出來なかつた。それであるから此の人の親に對する感情、兄弟に對する感情は皆非常に優しいに拘はらず、父の仕向けに因つて生涯癒やすことの出來ない傷を殘してしまつたものと見えます。

兎に角、此の人種的僻見と、容貌の美しくないこと、父母の自分に對する不理解と、此の三つのものがラヘル

の性格に對して非常に强い打擊を與へました。ラヘルは自分自身で云つてゐる通り、自分は生れ出でゝ生といふものを十分に樂しみ且つそれに信賴することの出來る傾向を有つてゐたに拘はらず、此の三つの壓迫の爲めにそれが打ち碎かれて、單に平和にこの世を過して行かうといふ消極的態度で、生活に向はなければならなくなつたと。それであるからラヘルが初めて夢想したやうな華々しい生活は、遂に一度もラヘルの上には來なくなつてしまつたのであります。卽ちラヘルの本來の明るい性情が虐げられ踏み蹂られ、而してどつちかといふと東洋的な、內部生活にのみ重きをおく、沈んだ靜かな生活になつてしまつたのであります。ラヘルは斯う云うて居る、「自分はパラドックスのやうだ。丁度根こぎにされた木が、過つて根からでなく梢から先きに地に埋められたやうだ」と。而して自分の性格の曲つたのを歎いて居ります。而して若い時に受けた此の癒やすべからざる心の傷は、機會ある每に、心の底から現はれて來る。ラヘルはさういふものに虐げられるには、餘りに多くの誠實を有ち、餘りに多くの生命力を有つて居りました。其の虐げられた傷は何時までも癒やされないけれども、其の傷の爲めにラヘルの人格は美しい光彩を添へるに至りました。ラヘルといふと、エレン・ケーも云つて居る通りに、ブリーディング・パーソンといふ言葉があつて、それは一遍傷を受けると、幾ら治つても動もすると傷口が破れて其處から血が出る體質を有つた人のことであるさうだが、丁度ラヘルはさういふ人でありました。一遍受けた傷はどうしても癒えない。折があれば其の傷から始終痛みが來て、生涯忘れることが出來ない。ラヘルが「天才といふのは、卽ち記憶力の强い人である。忘れることの出來ない人のことである」といつてゐますが、ラヘルを若し天才でないとしても、少なくとも忘れることの出來ない人であつたのは確かです。ラヘル自身で戀人にやつた手紙に、「私は物を受取らない時には忘れもしよう。併し一度受取つた上は決して忘れない。此の事實を貴君はどうぞ蔑視しないで貰ひたい」といつて居るが、ラヘルには他人に取つては何でもないと思はれることも、非常に深い

印象となつて其の胸に殘つたのです。我々には少し誇大のやうに思はれるけれどもラヘル其の人に取つてはそれが自然であつたに相違ありません。

ラヘルはかゝる事情の下に特種な性情を養成しました。ラヘル自分自身で私は一人のハムレットである。併しハムレットよりも、もつと生き〳〵した、而して華やかな、而してもつと髮の毛の黑いハムレットであるといつてゐる。ラヘルには本當にさういふ所があります。此のやうにしてラヘルは外面的に働き掛ける力を遮ぎられた結果、其の生活は何處までも內面的になつて行きました。隨つて前に申した通り、外面的に際立つた生活もせずに一生を終つたけれども、其の內部に起つた色々の思想の發露は、却つて深味を加へ廣さを增してゐる感があります。

ラヘルは又何物にも增して誠實を尊んだ人であります。誠實を尊んだ故に又獨創を何物よりも尊んだ。而して獨創のある所には殆んど凡てのものを許さうとした。誠實は人格を造り上げる所のものである。人格は單に能力或は洞察力だけのものではない。天才は能力或は洞察力のみで許すことが出來るけれども人格はそれだけでは足りない。人格は簡單に云へば、凡て自分自身の發明した所を一つの統一の下に置き、而して其の統一した所からして全く自分自身の思想を作り出し、其の思想に依つて生活する所のものが卽ち人格である。

それで此の人格に依つて能力或は洞察力が更に統一せられた時に、始めて其處に獨創力が起つて來る。人間の唯一の獨創力の起る所は、人格的誠實でなければならぬといふことを、非常に强く自分で考へて且つ實行して居つた。而して「誠實に自分で尋ねて自分でそれに答へようとする所のものは、常に實在に心を着けて物事を自分で發明せねばならぬ。望むものを求むるには、誠實といふことが凡てに向つて必要なものである。誠實で且つ親切で、横しまたらぬ心を持つといふことは、藝術家に取つても、又人間としても、一の友達としても、家庭の一

人としても、公人としても、事業家としても、或は支配者としても、最大に必要のことである。若しこれが無ければそれ等の人々たることが出來ない。我々に必要なことは、何よりもまさつて眞理を愛することである。所がこれをしないのは我々の今の社會の風潮である。我々の魂の萎縮するのはそれが原因である。若し誠實といふことがあるならば、決して我々の社會にさういふ病氣が入つて來る筈がない。併し此の眞理を愛せんが爲めには、無限の勇氣が必要である。若し人が自分で斯うならうと願ふ所のものになることが出來なかつたならば、其の人がどんな人であらうとも、どんな力があらうとも、それは何の役にも立たないではないか」といふやうなこともいつてゐる。誠實であれ、さうすれば人は必ず本當の眞理を取つ摑まへることが出來る。つまりラヘルがゲーテを批評して、凡ての人は多くの眞理を有つてゐる、併しゲーテは眞理そのものを有つてゐるといつて、深くゲーテを尊敬したのは其の故であります。又斯ういふことを云つてゐる。「人が誠實であると、其の誠實であることが人に健康を與へる。それであるから眞理を有つて居ないものは老ゆる。人を老いしむるものは顏の皺ばかりでない」と。此の心持がラヘルの生活の根柢にあつたことは云ふまでもありません。此のやうにしてラヘルは外面的の色々の約束に依つて自分を縛りつけることの代りに、自分の心の中に本來動いてゐる誠實といふものを何よりの便りにして、自分の生活を導いて行かうとした。其の爲めに彼女の生活は屢〻普通の意味でいふ見榮の宜い體裁の整つた形から見ると、道を踏み外したやうに見える場合が非常に多いけれども、少しく立ち入つて考へて見ると彼女の行爲が常に誠實を以て裏附けられてゐることを發見するのです。

其の次に、ラヘルの人物を造つた第二の特色は、個人主義といはうか、個性主義といはうか、それが重きをなしてゐるのであります。此の個性の尊重といふことは、我々が見る所の新しい時代を生み出した一つの大きな源動であると思ふ。エレン・ケーに依ると、此の考へを最も具體的に現はしたのはゲーテであるといふ。兎に角ゲー

テを始めとして當時のロマンティストの考への根柢には此の個性尊重といふものが力強く働いてゐたのであります。生活といふものを考へて見ると、我々はちやんと此に一つの存在があり、我々の周りには又社會といふ存在がある。此の我と社會とを如何いふ關係に於て結びつけて生活しなければならぬか。世の中を眞面目に誠實に考へるものは、これが直ぐ問題になつて來ると思ふ。近世の唯物史觀から出發した所の社會觀人生觀に據ると、我我の生活は社會生活或は環境といふものが綜合されて出來上つたもので、個性の本然的內容といふやうなものはない。個性は結局社會或は環境の生じたものだといふ風に考へられるけれども、併し能く考へて見ると、唯物史觀の立場からいつてもそれは正しい觀察でないと思ふ。例へばマルクスは唯物史觀を作つたけれども、彼が當時の資本主義制度から解放されてゐなかつたなら、あの人の社會主義卽ち無資產階級の爲めに社會を改造しようといふ心持が起つて來ないだらうと思ふ。成程マルクスの時代に無資產者に對する同情ある思想があつたから、さういふ思想が一つの根據となつてあゝいふことになつたと考へられないことも無いけれども、併しマルクスの時代にあつては何といつても資本主義が社會生活の主潮をなしてゐた。卽ち資本主義の思潮若しくは反響といふものが一番力強く働いてゐた時代であつたに相違ない。マルクスが若し社會生活の主潮にのみ動かされた人であつたら、資本主義的生活の改善を心懸けるのが然るべき成行きである。然るにマルクスがあゝいふ思想を生み出したといふことには、私は矢張りマルクスの個性的の力、個性的の要求が時代の思潮を打ち破つて働いてゐたと考へざるを得ません。マルクス自らはその成行きを環境から起つた外部的影響のみから來たといふやうに或は考へてゐたかも知れぬが、マルクスの內部的情操が外部の壓迫を打ち破つて働かなかつたなら、決してあの思想を生み出さなかつたと私は思ふのであります。生物學にも突發的變生の事實があつて、或る生物が境遇の如何によつて變化して行き、色々種類が分れ形體が變つて行く……人間にもさういふことがあらうと思ふ。要するに個性の

情操といふものが非常に重きをなすといふことは、決して否むことが出來ない。此のマルクスの唯物史觀的な環境說がまるで行はれない時代、即ち個性の要求が尊重されて然るべき時代に於て、却つて個性といふものが蔑視されて居つた。所が十八世紀の終り頃から、個性に對する要求が非常に强くなつて來た、而して其の要求はゲーテを始め若いロマンティシズムの人々に依つて固く主張せられたが、ラヘルも其の一人であつた。ラヘルの要求は何であるかといふと、外界の羈絆から自分を救ふことであるから、彼女は何よりも自然といふものを尊んだ。ラヘルは言つて居る、「私は子供の時代から、自分の內部生活は眞理に應じて豐かなものであつた、自然は私の心といふ銳いオルガンの上に親切に其の指を動かした」と。ラヘルは自然を尊んだ結果、誠實なる考へ方から人間の作つた約束を破つて、豐かに動いてゐる所の自然の邊に行かねばならぬといふことが、其の考への根柢になつて居つた。

ラヘルはさういふ風に世の中に在る所の僻見或は傳說といふやうなものには非常に自由であつて、少しも束縛される所が無かつたから、一般に受取られて居る道德に關する考へも、亦人と異なる所があつた。今は段々さういふ考へを有つて居る人もあるやうであるけれども、少なくとも其の時代に於て、さういふ考へは餘り澤山無かつたのである。ラヘルの考へでは、人間の生活は常に變つて居る所の生活である。常に變つて常に發達して行く所の生活である。我々は此の發達して行く力を少しでも途中で阻礙するやうなことがあつてはならない。此の生命力を澤山有つてゐれば、凡ての變化と發達は容易なものである。然るに普通にいふ道德の世界に於ては、此の發達といふことが非常に狹く局限せられてゐる。道德は一つの標的を作つて、其の標的を不動の眞理であるとして、それに向つて我々の生活を結びつけようとするものである。さういふ風に作り上げられたる道德は、人間の內部的の力の發達を阻礙する傾向のあるものである。「生命といふものは、決して死んだ所を繰り返してはならない。

洞察を透して洞察にまでの發達である。此等が人間の生命である」と、ラヘルは主張して居ります。此の觀念から、例へば自殺といふ問題に就いても、ラヘルは決してそれを否定してゐない。詩人のクライストが自殺した時に、周圍の人々は其の行爲に對して大抵非難を加へた。其の中にラヘルだけは毅然として、クライストの自殺を肯定した。而して云ふには、「私共は或は飛んで來た所の石、或は偶然に逸れて來た弓の矢、さういふ我々とは直接内部的の關係の無い出來事に由つて死ぬことがあるではないか。それすら人は已むを得ないことゝして許してゐるではないか。然るに我々は自分自身で選んだ力を以て、自殺を遂行する時に、それが自己内部と必然的の關係ある力を以て行はれる時何故惡いか。それは石や矢に中つて偶然に死ぬのと違ひ、もつと根柢のある行爲である」と云つて、クライストを辯護してゐる。又虚僞といふことに對しても、普通人の考へるやうな考へ方はしなかつた。「虚僞は自分自身にこれを選んだ時は正當なものである。それは我々が有つて居る所の自由の一つの條件である。併しながら外部から强ひられて虚僞をした時には、我々は始めて墮落するのである」と。自分から進んでやつた虚僞は虚僞ではない。自殺もそれと同じく、自分から進んで生命を抛つのは非難すべからざる行爲である。他から强ひられて自殺するのは恥づべき自殺である。斯ういふ風に自殺や虚僞の問題に對しても、ラヘルの考へは極めて自由であつた。それから正しいといふことに就いては、「凡てのことに就いて正當であることは自分共のものを失ひ去つた時である、自分自身を失はない時は凡ての點に遵合するように行爲を仕向けることは出來ぬ」といつてゐる。

　それからラヘルは心の問題に非常に重きを置いた。彼女は女としては珍らしい程理智的な人である。如何なるものでも道理に據つて裁いて行かなければ氣が濟まないやうた銳さを有つて居つた。人を見ることに就いて、自分自身如何なる人でも一度面會すれば、此のことは如何いふ風に行くかと見拔くことが出來た。其の位理智的な

働きを有つてゐる人であつたけれども、それにも增してラヘルの尊重したものは心臓卽ち心である。或る女がラヘルの所に來て、自分が或る男に戀をして、而して其の戀を打ち明けた時にそれが退けられた。自分は退けられることを知りながら、それを打ち明けなければならなかつたといふことは、何といふ馬鹿々々しい不名譽であつたらうと告白した時に、ラヘルは如何にも馬鹿々々しいことかも知れぬが、如何して不名譽であるか、ちつとも不名譽でないと色を正して云つたことがあります。ラヘルは云つてゐる、「心が動かされる場合に、我々は其の心を支配する所の力を有たない、心臓は柔かい肉と血で出來上つて居る、それを如何して人間の力で鋼鐵に變へることが出來ようか」と。其の位心の問題に對して纖微な思ひやりを持つてゐたのであります。

　ラヘルは女の友達が如何にも澤山あつたけれどもどつちかといふと妙な友達が多かつた。卽ち世の中から非難を受けるやうな戀愛關係を作つて居る人が多かつた。例へば伯爵夫人ジョセフィン・パクタの如きは、其の夫を棄てゝメーノーといふ地位も無い男と結婚した爲めに、自分の高い地位と名譽とを捨てゝ、而して世の中からは淫らな慢心した女といふ誹りを受けた。これはラヘルの一番親しい友達である。何故ならば此の人は自然の一番深い要求に應じて、社會的地位よりも心を重んじたことを知つたからである。それからドラ・メンデルゾンといふ人は、夫と長い間別れてをつて、遂にシュレーゲルといふ人と自由に同棲した人である。此の人もラヘルと大變親しく交際した。それからオーガスタ・ブレーデルといふ女優は、ベンタイムといふ伯爵とこれも自由に同棲して、公けの結婚をしないで過した人である。此の女優も始終ラヘルの許に出入りして大變歡待されてゐた。ラヘルの交際して居つた人は、斯ういふ種類の人が多かつた。つまりラヘルの考へは、斯ういふ人達が本當の心の要求する誠實に忠實であるといふこと、それがラヘルに取つては何よりも有難かつたからであります。ラヘルは親しく此の人達の相談に與かつて、メンデルゾンが外國に逃げることまで悉皆世話してやりました。それから男の友

達にも隨分面倒を見て色々のことをやつて居つた。隨つてさういふ人々は、ラヘルの所を自分の行ひに對する懺悔所のやうに思つて居り、ラヘルも非常にこれを可愛がり同情しました。ラヘルの言葉に、「愛といふことは我々の生活を豐富にし光明的にし、意味を深からしむるものである。愛を通じてのみ人は自分の存在を知ることが出來る。愛は人生の中核なるが故に、其の類似も亦我々の同情を惹き起すに足るものである」といつて居る。其の意味でさういふ人を受け入れたものと思ひます。

ラヘルは又年老つた連中が若い人に對して、單に自分の經て來た經驗を以て其の行爲を束縛しようとすることに、或る不快を感じて居つたやうに見えます。

「若い人は迂つかりすると間違ひがある、思慮分別といふものが要ると年寄りはいふが、人は生命の源卽ち愛を味ひ盡さない內は、思慮分別はどうして出來ようか。年寄りは頻りに經驗々々といふけれども經驗だけでは決して尊いものでない。其の經驗に依つて本當の思慮分別が叩き上げられた時に、始めてそれが尊いのである。單に思慮分別といひ合理性といふものは、大抵の場合それはウヰズドムでなくして、勇氣の缺乏である場合が多い」といつてゐる。ラヘルはさういふ風に若い人の心持に能く共鳴して居つた。けれどもラヘルは何時もいふ通り、誠實を決して忘れたことはない。强い誠實は生活の根柢でなければならぬといつて居ります。それであるからラヘルは隨つて戀愛の自由といふものを一個の道德として主張し、我々は力を盡しこれを擁護しなければならぬといひ、愛なき性的關係を不貞操として極端に非難し、力を極めてこれを叩き壞さなければならぬと云つた。隨つて現在の社會に行はれて居るやうな結婚制度に對しては、何等の意味をも見出さなかつた。「これは惡制度である。我々人間は段々に墮落して、我々自身の愛を互に告白する時に、坊さんと役人の前でしなければ安全でないと感ずるやうになつてゐる。彼等は自分自身の心に其の墮落を知つてゐる、自分の愛は非常に怪しいのである、つま

り愛なき性的の關係を結ぶ不安を有つてゐる。であるから誰か證人を得て證據立てないと、破綻が起るやうになる。そこで坊さんと役人を賴んで豫防的にさういふことをするのである。さういふ結婚は何等の意味もない、怪しからぬ習慣である。其の墻壁を除けよ。此の有害な習慣を地面が平らになるまで踏み蹂れよ。其の後に始めて本當に生命のあるものが榮えるに至るだらう。今の世の中は、奴隷制度と戰爭と結婚制度と此の三つのものが社會の下底を彷徨ひ步いて、色々彌縫しつぎはぎしてゐるのである。結婚制度は是非自由に理想的にしなければならぬ、さうすれば坊さんや役人を證人として、不安の關係を結ぶ必要がない」といつてゐる。

此の次に起つて來る問題は子供の問題であります。ラヘルは法律的に正當と認められ或は不正當と認められる所の子供に對する觀念を全然除かなければならぬと主張した。つまり正式に結婚をしない間に生れる私生兒のことであるが、ラヘルは生れて來る子供には兩親の有つて居つた所の失策が傳へられてはならない。法定の結婚式を擧げない子供を私生兒として、社會から虐遇せられるやうな憐れは、如何してもあるべき筈がない。斯ういふ考へ方は一日も早く社會から除かなければならぬといつてゐる。それから其の子供はラヘルの說に從へば父の姓を繼ぐよりも母の姓を繼ぐべきものである。而して母は其の子供の爲めに生みの親でなくても良き父を選んでそれを養ひ親とするのが正當である。さういふ風にして子供を育てるのが一番好いことであるとラヘルは云つて居ります。

それから宗敎といふものに對しては、私は思ふにラヘルは宗敎的であつたと思ふ。凡そ心の最も誠實な人であつて、宗敎的といふことが出來なかつたならば、渴仰的でない人はない。ラヘルが眞實の人であつたといふことを若し人が許すならば、ラヘルが同時に渴仰的の人であつたといふことも許さなければならぬ。併しながら彼女は普通稱せられてゐる所の宗敎といふものに對しては、全く超然たる態度を取つて居つた。シラーが自分は宗敎

的の動機から宗教の信仰といふものを公言しないと云つたのと同じ意味で、彼女は宗教に對して超然として居つた。又ゲーテのやうに、基督の人と爲りには非常に尊敬を有つて居つたが、併し其の名に依つて立てられた宗教には非常に冷淡であつた。ラヘルは斯ういふことを云つてゐる。「基督教は人の心靈の發達の間に殆んど偶然に出來上つた所の一つの制度であつて、其の制度が既に餘り長く續き過ぎて、もう餘程前に絶滅してしまはなければならぬ筈のものである」と。これは私の考へですが、一體宗教が一つの制度と結び附いて、而して人に認められるといふことには、明かに區別しなければならぬ二つの要素があります。一つは信仰其のものであつて、一つは其の信仰を取り守らうとする所の制度であります。

併しながら此の信仰といふ生きたものと、制度といふ死んだものとの間には、迚も結び合はすことの出來ない深い限界がある。制度といふものは必ず固定した物質的の形を取つてゐる。併しながら信仰といふものは、何時でも動いた生きた精神的の形に於て存在してゐる。此の二つのものを強ひて結びつけようとするならば、信仰が或る程度まで物質化されなければ決して成り立つものではない。併しながら聊かでも物質化された信仰は、もう信仰そのものゝ性質を失つてゐる。此の意味に於て宗教が制度化されるといふことは、實際に於て不可能であらねばならぬ。此の點は世の宗教に從事する人が十分に考へて見なければならぬ點ではないかと思ひます。ラヘルが基督教に對して此の如き言葉を吐いたといふことは、しかも百年以前に於て言つたといふことは、私共に取つて決して價値の少ないことではなからうと思ひます。

それからラヘルが其の同胞――隣人に對する所の觀念である。ラヘル自分自身は猶太人であるから、人から大變蔑視されたけれども、他に對しては非常に優しい非常に廣い考へを有つてをつた。第十八世紀から十九世紀にかけては歐羅巴の革命時代である。佛蘭西に共和國としての憲法が制定されたり、亞米利加に獨立戰爭が起つた

りした時機であるから、歐羅巴諸國は實に混亂の限りを盡して居つたといつて宜いのである。丁度一七九三年巴里に大革命が起つた時に、獨逸の人々はこれで以て獨逸と佛蘭西との爭ひが多少緩和されるであらう、佛蘭西があんなに酷くやられたのは、獨逸の力が與かつて多いといふやうな褊狹な愛國的の考へを有つてゐる者が大多數であつたが、ラヘルは佛蘭西革命の徹底的な信者であつた。どうしても此の革命に依つて自由平等といふやうな法則が生れて來て、人類を色々の不幸から救ひ出すに違ひないと固く信じて居つた。其の內不幸にして革命に因つて作られた佛蘭西の共和制は、ナポレオンの手で顚覆せられると、獨逸の若いロマンティストの人々すらも、其の勢に引き込まれてナポレオンを崇拜し、帝王主義的の傾向に向つて謳歌するやうな場合になつたが、ラヘルだけは昂然として其の風潮に抗し、自分の有つて居る根本的の思想を變へるやうなことが無かつた。而して佛蘭西が革命を起した精神は決して一ナポレオン位によつて倒すことの出來るものでない、佛蘭西が一人に依つて治められるよりも、共同に依つて治められたいといふ思想は、根から拔くことの出來るものでないといつて、飽くまでナポレオンに反抗して、佛蘭西人の有つて居る人類間の自由平等の精神を少しも疑はなかつた。而してゲーテのいふことは常に何でも信じて居つたに拘はらず、ナポレオンに對するゲーテの同情だけは信じなかつた。それだけラヘルは人類に對して信念が强かつた。尤もナポレオンが獨逸に攻め込んで來て、獨逸の獨立が大分怪しくなつた時に、ラヘルは正當の意味に於ての愛國者であつた。而して獨逸を危險の地より救ふといふことには大いに盡力し、自ら進んで赤十字社の看護婦となつて、自分がどれだけ所謂新しい女として實際のことにも力量を持ち得るか、どれだけ優しく人を愛することが出來るかを實證した。併しながら戰爭が終ると、國民が戰捷に醉つて盛んに國粹主義を叫んでゐる間に、ラヘルは人類の幸福といふ見地からこれに反對し、戰爭を非常に厭がつて且つおそれて居つた。

それから憲法といふものに對しても、ラヘルは大變疑ひを有つて居つた。どうも我々が憲法を得られるやうになつても、本當の自由が果して得られるであらうか。丁度子供に親が飴を與へたけれども、疾うの昔に中味が無くなつてしまつて、子供は皮だけを得たといふやうに、憲法其のものをさういふ風に考へて居つた。又其の當時既に行はれかゝつて居つた所の社會奉仕の考へ、それにもラヘルは條件附きで反對であつた。先づ自分に對して忠實に奉仕することの出來ないやうな人が。どうして社會に奉仕することが出來るかといふのがラヘルの考へである。從つてラヘルはサン・シモンの信者であつた。教育された有產階級の人の中には何等の美德といふものが無くて、却つて美德は常に民衆の中にある――教育されない所の無資產階級の中にあるとの考へなどにはラヘルは一概に同意しなかつた。隨つてラヘルの信頼する所の人は貴族であると云つた。但し貴族とは Nobility を指すのではなく Noble-man を指していふのだ。決して概念的に階級を分けて彼れ是れいふやうなことはなかつた。さういふ風な考へであつた。又ラヘルは常に人を愛して、自分の死ぬ暫く前に友達に逢つて、私は好いことを思ひついた。私が死んだなら私の墓の面に斯ういふことを書いて貰ひたい。それは「善き人々よ、若しも此の人類の上に、何か知ら善いことが起つたなら、あなたは其の喜びにつけて、どうぞ私の喜びをも顧みてやつて下さい。」斯ういふことを墓に彫りつけて貰ひたいといつて死にました。それでラヘルが常に隣人に對してどんなことを考へて居つたかといふことは、略〻想像がつくと思ひます。

それからラヘルは自分自身としては一つの大きな纏まつた思想も現はさなかつたし、又創作的の仕事もしなかつたけれども、彼女は其の當時の天才の間に火を與へ力を與へ、而して生命を與へて居つた。ラヘルは女性といふものに能く斯ういふ力があるといふことを感じて、而してこれは女性の一つの仕事であるといふ風に感じて居つたやうに見える。斯ういふ女性として、十八世紀から十九世紀の初めに掛けて出て來た婦人の中に、ラヘルは

殆んど隨一といつて宜いと思ふ。ラヘルは又特にゲーテに對して殆んど無制限の尊敬を有つて居つた。ゲーテも亦ラヘルに二三度逢つた所からして、直ちにラヘルが異常の力を有つて居る女性であることを看取して、力强い所の賞讃の言葉をラヘルに捧げて居ます。

ラヘルには澤山立派な友達があつた。例へばフィヒテの如き、シュレーゲルの如き、クライストの如き、シュライエルマッヘルの如き、フムボルトの如き、ハイネの如き、皆當時の思想を導いた有名な人々であります。其の外或は詩人或は創作家或は藝術家等、種々の實力ある人がラヘルのサロンに出入して親しく交際し、皆ラヘルに對して非常に重きを置いて居つた。ラヘルは斯ういふ人々を、自分の美しい人格の力を以て其のサロンに引きつけた。而して每日夕方になるとサロンに近い音樂會や何かの會が濟むと、斯ういふ勝れた色々の人が皆ラヘルのサロンに集まつて來て、ラヘルを中心にして、色々の話をして夜を過したのである。ラヘルは極く淑やかな能く氣の利いた一人の女主人として、皆んなの云ふことを興味を以て聽き、それに對する自分の意見を述べて批評することも屢〻あつた。それが爲めに集まつて來る人々は皆ラヘルから少なからざる感化を被つた、其のことを銘銘が明かに公言してゐます。

ラヘルは又家庭內の生活に於ても、極めて立派なワイフであつた。自分の身體は弱かつたが、世の中に生れ出た上は働く人でなければならぬといふ意味で、常に働くといふことが一つの特色であつた。而して働くといふと、如何なるものに對しても有らん限りの力を以て働くといふ風で、家庭上の瑣末なことには餘り注意しなかつたが、一たび必要が生じて來ると、最も規則立つた敏活なる家庭の整理者であつた。バルンハーゲンが十九年間ラヘルと同棲した後に過去を顧みて云つて居ることに、自分の結婚生活は、一日々々に新たなる結婚生活を繰り返したやうであつた。彼女の傍に居ると、自分は常に新たなる愛の燃え出るのを感じた。さういつて居る所か

ら考へて見ても、ラヘルの家庭を整へる力が、どの位美しく働いて居たかといふことが想像される。母の病氣の時でも、臺所のことから寢床のことまで、殆んどラヘルの手一つで片附けて、少しも滯りを見せなかつた。彼女は實に社交上に立派なことをした許りでなく、家庭內の生活に於ても立派な細君であつた。又子供を非常に愛し、殊に教會などで子供に神學を授けるやうな不自然なことには反感を持つてゐた。ラヘルは、子供を育てるなら、自分は子供に何も與へない、子供自身で見出す所を母が手傳ふやうにする。其の外に子供に對して優しい愛と尊敬とを捧ぐべき道はないと考へてゐました。晩年には女の子を貰つて、それを非常に可愛がつて育てました。さういふ風にラヘルは母らしい有難い力を潤澤に胸の中に有つて居つた。併しラヘルは云つて居ります、人間といふものは家庭の勤めをする爲めに生れたものでないと。だから奥さんなどが女中の惡口をいふと非常に腹を立てる。女中と雖も一人の女性だ、內のことをのみするだけで滿足し得るものではない。そんなことの出來る筈がない、譃だと思ふなら細君自身でやつて見るがいゝ。女中のやるだけもやれやしない。……そんな譯でラヘルは一つの家を整へる爲めに生れて來たのでないといふことを非常に強く云つて居ります。併しながら普通の細君よりも餘程偉い働きをやつて居つたことは、前に述べた通りであります。

唯生活の外面からいふとさうであるが、ラヘルの生活に就いて考へて見ると、最も大切なのは此の人に起つた戀愛問題である。私は何かにも書いたことがあるけれども、貞婦二夫に見えず――貞節の女は二人の夫に仕へない。それを引つ繰り返して其の貞節を男に持つて來て、貞節の男は二人の女を愛しないとも云へますが、どつちから云つても宜いけれども、日本では女の方で貞婦は二夫に見えずといふことを昔から云つて居る。兎に角一たび戀愛を經驗したものは、再び經驗してはならないといふ教へであるけれども、私は何も經驗してはいけないといふことはあるまいと思ふ。經驗することが出來ないといふのと經驗してはいけないといふのと、其の間に大きな

差がある。再び經驗することが困難だといふのは、これは事實として否むことは出來ないが、經驗してはいけないといふ道理は決して無い。舊い道德から見れば色々理窟もあらうが、人間の生活力といふ大切な力を無視するものであつて、これ程馬鹿らしい無理なことは無い。それは一遍戀愛を經驗した人は、中々再び經驗することが出來なくなる。けれども初めて戀愛を經驗した時の相手といふものは世界中に一番理想的の人間であるかといへば、これは疑問である。廣く人に接する內に更に理想的の人が見當つたなら、其處に又新しい戀愛を經驗するのは自然であると思ふ。けれども舊道德の敎へる所では、さういふ心の起るのが罪惡だといはぬばかりの態度である。此の世の中に受けて來た一番大切な人間の生命力、これより大切なものが無いのに、それを自分で押し潰して、まるで自分の子供を殺してしまふやうなことをする。而して木の端くれ見たやうな人間が其處ら中に出來上る。さういふ人は品行方正かも知れない。然し品行方正位が關の山位な人間になり終るのだ。深い强い生命力を有つたものは、そんなに極限せられた外部によつて左右されてはならない。もつと高い强い意義に於て働いて行かねばならぬ。一旦戀愛が破れたからといつて、何も外面に束縛されて死灰同樣の餘生を送るには及ばない。人間としてはもつと本能的の力に忠實でなければならぬ。ラヘルはそんなことが出來なかつた。それであるから生涯の間に三度戀愛を經驗して居ります。私は此のラヘルのやり方を非難すべき理由を見出しませぬ。

近代に於て性的感情の上に一つの特殊の現はれがある。それは何であるかといふと、男が自分よりも年老つた女を愛すること、これは今日日本に於ても少しづゝ起つて居るやうであるが、此の現象は歐羅巴に於ては餘程以前から既に起つて居つた。それはどうしてさうなつて來たかといふと、今まで男性が女性に對する要求は、主に外面的に女性の有つて居る特長に置いてあつたのであるが、さういふ男性の要求に對しては、若い女が一番好い。併しながら近代人の要求はそんな肉的外面的の女性でなくして、もつと內面的な個性の人としての要求が段々發

達して來た。精しく云へば、女性が特有する一つの美しき性格、男性には迚も求めることの出來ない女性特有の情調を男性が求め出して來た。それを求めるには成熟期の前に在る肉體のみの豐麗なる女性では不可能で、全く一個の人として成熟した女性に於て始めてそれが發見せられる。若い男が女の肉體的美を追はずして、其の肉體の内に成熟した婦人の特殊性を求める結果からして、自分よりも年上の女性を求むるやうになつたのではないか。エレン・ケーが云つて居るが、或はそれが一つの理由かも知れぬ。兎に角斯ういふ傾向は、歐羅巴の文明國に起つて來た所の著しい現象である。ラヘルの戀愛も其の通りであつて、前に申した通り三つの戀愛を經驗したが、それは女性の有つて居る性的感情の三つの階級を遺憾なく現はして居るやうに見える。第一の戀愛の場合は、ラヘルは彼女自身の愛情に對する戀であつた。即ち戀を戀したのです。第二の場合に於いては、ラヘルが男性に對して有つて居る愛であつた。第三の場合には男性の愛情に對して反應した愛であつた。此の三つは女性に通有に起る三階級であつて、ラヘルは皆それを經驗して居ります。

ラヘルが一番初めに經驗した戀は、一七九六年ラヘルが二十四歳の時にカール・フォン・フィンケンスタインといふ人と婚約したそれである。カール・フォン・フィンケンスタインといふ人は、年が十八九の若い青年であつたが、ラヘルは父を喪つて始めて自分の感情生活が拘束されないものとなつて、一種の華やいだ若々しい血が自分の心臟を巡り初めたことを感じた。而して社會に顏を出せるやうになり始めて、人生の明るい方面を見ることが出來るやうになつた。其の時芝居でカール・フォン・フィンケンスタインに逢つたのである。所が此の人は非常に美しい男であり、又凡ての修養も立派に出來て居つて、何處から見ても拔け目が無く、話の筋も非常に面白く、能く人を惹きつけるやうな話振りであつた。此の人に逢つてラヘルは今までぢつとして居つた感情が始めて動き出した。而して本當に此の人を愛したいと思つて、自分の心のたけを告げて遂に婚約を結ぶに至つた。けれども

ラヘルは猶太人のことではあるし、財産も社會的地位もさう高いものではなかつた。これに反してカール・フォン・フィンケンスタインは非常な金持で、社會的地位も高く、美しい容貌の持主であつたから、母や姉妹は理想的細君を持たせようと思つて居る所へ、其處へやつて來たのがラヘルといふ地位も金もなく、しかも伯爵よりも年の進んだ猶太人の娘であつた。母や姉妹は無論これに不服で色々低級の壓迫を加へた。ラヘルは初めての戀の經驗に熱中して居つて、身も心も打ちまけて居つたけれども、段々カール・フォン・フィンケンスタインの態度が怪しくなつて來て、色々口實を設けてラヘルから自分の身を逃れようとした。ラヘルは其の人の如何にも輕薄なのを知つたけれども、實に困ることは戀であつて、其の男がそんな馬鹿らしい人であつたと知りながら、それを愛さないといふ譯には行かない。ラヘルは大變苦しんだけれども、遂にそれが成り立たないで二人は離れなければならなくなつた。斯の如くにしても二十四の時から二十八の時まで五年に亙つた婚約が到頭破れてしまつた。併し此の時の戀愛は言はゞ林檎の木に花が咲いたやうなものであつて、まだ實が結ばれるには程が遠いのであつたから、ラヘルの心にあつた力は其處から纔かに回復されて、苦しんだことは非常に苦しんだが、再び新しい力を働かせることが出來た。而して或る友人に連れられて巴里の方から白耳義に行き、和蘭の方に廻つて暫く胸中の悶悶を忘れて居た。巴里に居つた時に、或る若い人と友情が出來たけれども、それは戀にならないで、親しい兄弟のやうな友情を續けて居つた。而して伯林に歸つて來たが、其の時西班牙の公使館附であつたドーン・ラファエル・ダルキーオといふ人と懇意になつた。これはラヘルが三十歲の時である。女の三十歲は第二の女性の危機に際する頃で、心の動き方に依つてもう實を結ばねばならぬ時機である。實を結ぶかどうかといふことは、女性に取つては致命的の重大のことである。この時に起つて來る戀愛は、殆んど全身を投じて猶ほ足りない程の深いものでなければならぬ。其處へドーン・ラファエル　ダルキーオが現はれたのである。此の人は西班牙人に特有な非常

に強い熱情の持主であつて、ラヘルも亦此の人に對して渾身の愛を捧げたのであつた。所が此のドーン・ラファエル・ダルキーオは、ラヘル程の才能も無く、ラヘル程の識見も無い人であつたので、常にラヘルに對して自分は下手になつて居るといふ心持を拭ひ去ることが出來なかつた。ラヘルは愛した男に對しては、子供のやうに純潔な濁りの無い愛を捧げたに拘はらず、此の男は常に自分が引け身になつて居る弱みからして、ラヘルに對して疑の目をもつて嫉妬するやうになつた。而して其の不思議な心と心との葛藤が嵩じた結果、此の男は病的の嫉妬からラヘルを怒らせるやうになつた。ラヘルは此の不幸から自分を救ひたさの爲めに有らゆる犧牲を拂ひ、有らゆる困難と闘つて自分の眞情を其の男に知らせようとした。ラヘルがドーン・ラファエル・ダルキーオに贈つた手紙の中の言葉に、「愛は最大の自信である。目、耳、感じ、心、其の凡てが強く說伏せられるのだ。若し人が此の力に抵抗することが出來るやうなら、其の人は實際愛しては居ないのだ。自信を意識することの出來る崇高なる存在物である所の人間のみが、本當の愛をすることが出來るといふのは、つまり愛が最大の自信である所の證據である」さういふことを云つて居る。此の位の深い心持でラヘルはドーン・ラファエル・ダルキーオに對したにも拘はらず、此の戀も長き試錬の後に遂に破綻に歸し、ダルキーオからお前は決して私を愛するものでないといふ疑ひの宣言を受けて離れてしまふことになつた。

ラヘルの最初の戀も致命的であつた、二度目の戀も斯の如く傷を受けた。彼女はもう殆んど起つことも出來ないやうな境遇にあつたと謂はねばならぬ。併しラヘルの心の中には、もつと強い所の生命が動いて居つた。誰かが云つたやうに、まだ壞れたことの無いヴァイオリンは非常に高い強い音を出すけれども一たび壞れて美しく修繕せられたヴァイオリンは其の音こそ低いけれども調子が更に美しいものになるといつたやうに、ラヘルの性格の中にも、大きな傷を受けた後には更に超絕した性格が動いて居つたものと見える。其處へ一八一四年に第三番

目の戀人なるバルンハーゲン・フォン・エンセといふ人が現はれたのである。此の人はラヘルよりも十六の年下であつた。而して此の人は聰明な生れつきを有つて居つた。又極めて批判力の强い人であつた。容易に物に動かない性質の人であつたけれどもラヘルのやうな獨創力を有つて居つた人ではなかつた。此の人はラヘルに逢つて暫く交つて居る內に、段々ラヘルの內部に動いて居る所の素晴らしい力に動かされたのである。彼はゲーテをも驚かしたやうな强い批判力を有つて居つた人であつたけれども、其の批判力で批判して見ても、ラヘルの心には到底自分の及びもつかない美しいものが藏されて居ることを發見して、而して遂にラヘルに對して深い愛情を持つやうになつた。ラヘルも二度まで非常に苦しんだ經驗があるから、容易に動かなかつたけれども、段々バルンハーゲンの熱の加はるのに動かされて、再び此の正しい强い愛情に對して働き始めた。所が此の二人の間に又妙ないきさつが起つて來た。それはラヘルが非常に立派な女であり、バルンハーゲンそれ自身よりも遙かに勝れた人格者であつたから、此の人と一緖に棲むことが出來まいと感じて、バルンハーゲンは常に煩悶した。ラヘルはそれに氣がついて、色々話し合つた末、二人の間に十分の理解が出來て愈々結婚することになつた。此の時のラヘルは四十二、バルンハーゲンは十六年下の二十六。斯くして十分に落ち着きのある深味のある道理に叶つた愛情が目醒めて來て、以後十九年の長い間、美しい結婚生活を續けて行つたのであります。此の結婚の成り立つた時にラヘルは自分の夫と約束して、自分達はどんなことがあつても、二人の生活に於ては全く自由である。自由を愛せよ。どんな生活に對しても決して自由を妨げまいと堅く約束した。併しながらバルンハーゲンの手紙を見ると、前にも述べたやうに愛情の日に新たなるを覺え、年が經つ程二人の間の愛は酒の如く熟して行つて、二人の間は實に美しい關係が死に至るまで續けられたのです。さういふ風にして六十一の時にラヘルは死んだ。ラヘルはこれ程生命力に强く、六十近い五十幾つの頃にも、全く子供のやうに物を愛することが出來るといつたやうな

狀態であつた。此の人の死に對する心持には諦めのいゝ人に見るやうな平安さはなかつたらう。然しながらラヘルは、ゲーテが持つてゐたやうな死生觀に安住することを得て、大きなより高い存在にまでの個性の飛躍を實感しつゝ、靜かに死の來るのを待つたに相違ない。

お話は大變詰らなかつたけれども、結局そんなに間違つたことは申さなかつたと思ふ。ラヘルが新しい女として、十八世紀から十九世紀に掛けて斯ういふ考へを有つて居つたことは、私には一つの驚異であるので、御紹介をして見たのです。私はラヘルの生活は私達の生活に對する大きな暗示だと思ひます。二十世紀の今日女性といはず男性の間にも、ラヘルの水準まで達して考へ且つ活きてゐる人が果してどれ程あるでせう。兎に角我々は外面に束縛せられた所の弱い考へに依らず、もつと本能的の力に忠實でありたいと思ふ。忠實であるといふことゝ單に外面的の動機に因つて動くといふことの間に、非常に差のあることは能く念頭に置いて頂きたいと思ふ。もう少し人間が內部の力から動くやうになつて來た時に、我々の社會生活の上に始めて眞實の力が動くのであつて、社會はもつと自由な、もつと力強い、もつと合理的な動き方をすることが出來るものと思ふ。私のラヘルに就いて知つて居ること又感じて居ることは、大體此の位であります。

「美を護るもの」の速記は、全然役に立たなかつた。所がその講演の內容が、以前に東京の新人社で講演した「ラヘル・バルンハーゲンの事」といふ題のそれと大差のないのを便りにして、その講演の梗概を「新人」から轉載する許しを吉野君から受けて、僅かばかりの訂正を加へて發表することにした。

（一九二一年五月、文化生活講演集「私共の主張」所載）

泉

今、餘り口のよくない木村君（司會者）から、よくないことを云ふかも知れないと、紹介を得て、此の演壇に立ちますが、實際私は色々よくない事を云ひさうな氣がします。併し、心持はそんなに惡い人間ではない積りです。昨日、大阪の講演會でも前置きで申したのですが、兎に角、人の云ふことを是非となく受け入れて、鵜呑みにするやうな人はその人が惡いのだといふことに私はきめて居ます。そんな方は此の會場には居られない事だとは思ひますが、萬一居られたとしても、私はその方の受けられた損害の賠償には任じませんから、念の爲め申し上げておきます。

丁度、私が旅をしまして羅馬に弟と一緒に滯在して居りました時に、それは或る秋の夕方でしたが、知合ひの伊太利の一人の青年が、アックワ・アチェトーザといふ泉のある所に連れて行つてくれました。それは羅馬の郊外でタイバー河の左岸にあるのです。皇帝オーレリヤスが造つて遺したと云はれる古い城壁がありますが、その城壁に沿うて一つの門を潜りぬけると、もう羅馬の郊外に出ます。郊外といふと何處でもさうですが、人間と自然とが、互に手を延べあつて溫かい握手をして居るやうに見えます。その姿は何時でも人の心をなごやかにします。私達三人は西に傾いた太陽の光の下を快い足どりで進みました。その行手にはタイバー河が大きな蜿紆を描いて居る。その水隈に、殊更にしつらへたやうな、恰好のいゝ村があります。夕方の事ですから、そこに行きついた時には、一日の勞役を終つた勞働者だとか、或は夕餉の支度をする女の人等が、その泉のある處に集まつて來て、思ひ〳〵に水を汲んで居る時でありました。これと云つて特に騷々しいこともなく、彼等は一日の仕事を終

へて、さうして夜の休みに入る前に、各〻自分の欲するだけの水を瓶になりコップになり汲み取つて、そこでその儘飮む人もあり、肩にのせて歸つていく人もありました。思へば、この村にも様々な事が日々起りまして、或は喜びも妬みも愛も憎しみもあるのでせうけれども、初秋の夕暮の靜けさに、それ等のものは溶け流れ、忘れ果てられたやうに、その泉の傍はしめやかに平和でありました。私共もその泉から少し酸味をもつた清い水を飲んで、再び歸路についた時には、已に夕暮の光も消え果てゝ、月が木立を越えて東の空の稍〻高くに輝き出して居りました。私達は夜道を辿つて羅馬の城門へと歸るのでしたが、歩きながら私は泉といふものゝ美しい神祕的な感じに浸つたことを今に思ひ出します。

その泉は、人々の汲まない時には、地の深い底の方から湧き出して來まして地面に流れ、小さなせゝらぎとなつて落ちて行くのでありますが、その泉の水の流れ落ちたタイバー河は、ゆるやかに平野の間を紆(うね)り流れて、彼の羅馬――世界の古い歴史の中心とも云はれるところの羅馬といふ大きな都會の眞中をよぎつて、やがての果(はて)には地中海に注いで行きます。

その泉が何處から湧き出して來るか、恐らくは私共の想像も及ばない暗い底深い地の下を經廻つて、やがて地上に現はれて來る。さうして私共の眼に見えるやうな姿になつて、さゝやかな音を立てゝ、タイバー河に流れ込むのです。タイバー河の兩岸には、このアックワ・アチェトーザと云はず、數限りもない泉があつて、それ等から流れ出る地下の水が合流して、あの大きな一流れをなして流れ下ります。それは羅馬の市街に這入ります時には、忙しい人間の生活の爲めにつくり出された溝の汚水や、小川の濁水やがそこに入り交つて、緑色の美しい水が、冬枯の草のやうな濁つた黄色になつてしまひます。それが地中海に這入つた後には、太陽の光で蒸發して雲となつて風に乘り乍ら又想像も及ばない遙かな地方に送られていくのでせう。或は又ロミュラス兄弟の確執が行はれた

時、その河邊は激しい戰をみたかもしれません。ポムペイやシーザーが凱旋をした時には、外國の捕虜や鹵獲品やが續々とその河をよこぎつて行つた事もありませう。シーザーの殺される前の夜には、赤い物凄い星が現はれて、その光が河水に映つた事もありませう。野蠻人がアルプスの嶮を越えて入寇して來た時には、無數の死骸が流れて漂うた事もありませう。ペストが羅馬に蔓延した時には、病者の汚物がこの河を毒のやうに汚した事もありませう。かくこの河の水は色々なものによつて或はよごされ、或は彩られ、或は淨められましたでせうけれども、川上のアックワ・アチェトーザや、その他無數の泉はそれ等の外界の變化にはかはりもなく、絶えず湧き流れてタイバー河の水量に貢ぎして居たのでせう。

私共の生活を單に概念的に省みる時には、木村君がいつたやうに、表面的に觀察する時には、どうして見分けをつけていゝか判らない色々な相が雜駁に現はれて居まして、どれを本當の生活とみればいゝのか判らないとさへ思へます。それはタイバー河の河水に絶えず色々な變化が現はれて、絶えず新陳代謝して、どれをこの河の本當の姿と見ればいゝのか判らないのと似て居ます。しかし乍らその河水の水源をなす所の泉は、縱令雨が降らうが、風が吹かうが、いさゝかの變化も受けない、深い地下にその誕生の場所をもつて居て、タイバー河の流れる限り、決して變る事のない分量と性質との水を供給して居るやうに、私共の生活もその亂雜な層をくゞりぬけて、もう一つその奧に這入り込んでみたならば、永久に亙つて變る事のない、一つの層に出會ふ事がないでせうか。私共の心の要求を、內部的に徹底して行けば行く程、その要求は純粹となり、遂に要求が要求から湧き出る所、要求が要求を生み出す所に行き着く事が出來るでせう。實際をいふと私共は、意識して居るにせよ、無意識にせよ、その生活の根柢を此處に持つて居て、出來る事ならこの內部の純粹な要求に從つて生きようとして居るのです。この要求が、とりも直さず藝術的要求だと私は思ひます。藝術的要求といひますと、甚だしく範圍が狹

めらるやうに思ふ人があるかも知れませんが、藝術的と私の云ふ意味は、必ずしも詩を作つたり、畫をかいたりする事許りではありません。工場で鐵槌を振つて居る人でも、店頭で算盤を彈いて居る人でも、その人達の日常生活が、どうかした拍子にふとその姿を變へる事があります。單に外面的の姿からではなく、鐵槌を握り、算盤を彈いて居るその儘で、藝術的であり、それをする人が藝術家であり得ると思ひます。それならば、何が人を藝術家にするのでせう。それはアックワ・アチェトーザの泉の水が、地の深い底から何等の力もかりず、水それ自身の壓力に依つて地球の表面に湧き出て來るやうに、その人々の仕事が內部の深い要求から現はれ出る場合に、彼は藝術家となるのです。かく緊張した狀態の生活の前には、此の地上に定められた所謂道德の制裁もうけず、我々が生れて以來敎へ込まれた敎育束縛にも煩はされず、又我々の持つて居る欲求の外部的約束にも累らはされずして、その內部の力は外界に働きかけるのです。この力を私は假りに本能と名づけます。

木村君が今詳說されたので、私の說明の手數が大變省かれるのですが、原生動物の中に見られるやうな、單純な一つの細胞の獨存、その細胞の一つが長い進化の過程を經て、人類といふ位置に達した、さういふ驚異にあまる働きをしたその力を、私共は考へてみたい。此の力こそは私達の生命の根柢をなすもので、ニイチエが自我といふ言葉で表はさうとしたのも、即ちこの力を指すのでありませう。私達の生活の大部分は、生命の內部から溢れ出て來るこの力と、外部との化合でありますが、どうかするとこの化合物が分解されずに殘つてゐて、それを私達が手本にして、それと同じ姿の生活を機械的に繰り返さうとするやうな事があります。かうなるとその生活はさう純粹な藝術的だといふことは出來ません。そんな氣持で居るなら、算盤、鍬は勿論のこと、縱令詩をかき音樂を奏でゝ居ても、そこには藝術は成り立たないのであります。泉の水は一度河に流れ入ると、もうそこでは種々雜多な他の要素と結びついて、あの泉の傍で見るやうな淸さも、冷たさも、快い酸味も、求め得られなくな

るのと同樣です。

しかしながら、それで泉の水はその本質を全然なくなしてしまつたかといふに、さうではなく、縱令その水が雲となつて天に昇つた後でも、猶ほ泉の水は泉の水であるに相違ありません。そのやうに私達の生活が、どれ程固定化し習俗化しても、藝術的な力がその中にかすか乍ら動いて居ればこそ、この地上生活は腐敗しきらずに殘つていくのです。この藝術的衝動卽ち創造の能力となる本能の力が、固定化し死灰化した既成道德を破壞し、信仰そのものゝ威力を失つた宗敎を破壞し、ある時には政治を破壞し、社會制度を破壞して、新しいものを始終注入していくので、私共の生活は有機的に生長しますが、この藝術的衝動を純粹に現はしたいといふ欲求は、誰の心にもおのづから植ゑつけられて居るのです。唯人によつてその要求が割合にかすかであるか、周圍の事情がそれに適しない爲めに、思ひ切つてその方面に這入り込まないだけであります。

所が、こゝに萬事を抛つても、この要求を滿たさずには居られない一群の人があります。それが狹義に於ける藝術家、卽ち普通稱せられる美術家なり、文學者なりであります。

そこで私共或る時代或は或る地方の生活が、どれ程よく生活されて居るかを計るには、藝術的衝動卽ち本能の純粹な表現を目指す所の、狹い意味の藝術をとつて目安にするのが一番手近い方法であります。若し私共の間に行はれて居る藝術が本當に値打ちの高い藝術であるならば、私共の導いて居る生活も亦、麗しいよい生活であるといふ事が出來ます。卽ち、その時代々々の藝術は云はゞ民衆の心臟ともいひ、良心とも云ふ事が出來ます。だから、若し藝術の質の惡い時代があつたなら、民衆の生活が一見如何によく見えて居つても、それは甚だ疑はるべき生活で、その將來には壞敗とか、破綻とか、何か不吉な兆しがあると見ても、さし支へないと思ふのでありﾞます。然るに世の中には往々にして、美術とか、文學とかいふものは何の役にも立たない有害無益な贅澤物であ

るといふ風に非難する人のあるのを聞かされます。私はその非難の的になる所の人間であります。吉野君の昨夜の講演によると、私などは國家無用の長物として見られて居る。私みたいな者が生きて居ても、國家にとつては、何の痛痒にもならない程の人間共だといふ風にみられて居るといふ事です。それも一應御尤もです。御尤もだけれどよく考へると、藝術を要求せざる所の、さうした民衆の生活が、どんなだと考へてみると、少なくとも生命の本質をなす本能と殆んど無關係に外部的な約束や習慣にのみ從つて生活されて居るものではないかと思ひます。さうでなかつたならば、本能のおのづからの流露であるべき藝術をかく許り輕視する理由は不可解になりますから。或は又、今の藝術は惡い、よき藝術をと要求するのを相當な權利と心得て居る人々もあるやうですが、よき藝術を要求する前に、その人々の生活が果してどんな狀態にあるかといふ事を省みる必要がある。若し民衆の生活が墮落して居るなら、卽ち本能の要求といふことが無視されて居るなら、如何によき藝術が要求されても、結局僞りの藝術（本當の意味で藝術とは云へない）が供給される許りでありませう。惡い民衆の生活は、地表を流れて河に注ぎ込む泥水のやうなもので、それが積り積つて泉の出口を塞いでさへしまひます。泉を塞いでおいて、清い水を河に求めようとしても、どうしてそれを得る事が出來ませう。清水が要求される爲めには、先づ泉の口が開けられなければなりません。泉の口が開けられゝば、要求されないでも清い水は流れ出る。さうして濁らう／＼とする河の水に、常に一脈の清さをおくる事が出來る筈です。だから、よき藝術を要求する前に、自分達の生活が如何に生活されて居るかを省みる必要があるのではないでせうか。

尤も、これは片手落ちに論じ捨てらるべき問題ではないと、いふ事を私もよく心得て居ます。縱令、地表を流れる濁つた雨水がどれ程激しくあつても、若し、泉の噴出が力强いものであつたならば、それ等の濁水に口を塞がれる事もなく、絕えず湧き流れて、河水に清い分子を供給する必要が出來る筈です。民衆の生活がどれ程惡くと

も、若し本當に力ある藝術家が生れ出たならば、そのよき藝術によつて、濁つた生活を淨め、高めていく事が出來るのは考へられる事柄です。實際それは自然の中にも、時々見られるやうに、人間の生活にも亦見られます。藝術家がよき藝術の生れない理由を、民衆の生活にのみ嫁して恬然たることは、それは餘りに自己の價値を見下げた態度でありまして、藝術家の一人であらうとする私自身も、それを愧ぢねばならないのです。私はそれに氣付かない事はない積りです。しかし乍ら、概していふならば、如何なる天才も、客觀的にのみ多少なり境遇の力を蒙らないものはありません。キリストだとか、釋迦だとか云はれるやうな、稀有な天才者ですら、幾分その當時の環境によつて彩られて居るといふことは、如何なる人も見逃し得ないでせう。それ故に、私は敢へて此處に民衆の生活狀態が、藝術の要求にどれ程の影響を持つかを申し出たのであります。

思ふに、今の時代は世界を通じて、生活の相が甚しい更新を經驗しつゝある時であります。この機運は、勢ひ私共の生活の根據をなす生命そのものゝ檢察にまで赴かねば止みません。この事柄は、一見甚だ空疎なものゝやうに思はれませうが、如何なる革命の時代にも、この生命の本質の檢察が凡ての改革の源となつて居るのです。私達の生命を、新たなる自覺によつて認識するといふ事は、これは如何なる世にも凡ての事の始まりです。若しこれが正鵠を得て居なかつたならば、我々の文化生活の進路は、狂ひを生じ、歪み、杜絕されるに相違ありません。我々の時代の一つ前の時代にあつては、科學の精神が生活を指導して居りました。その前のロマンティシズムの時代をうけて、單に空想的な地上生活を無視したやうな人生の見方から、もつと着實な、地上に足を踏みしめた見方に歸らうとする要求が、民衆の間に動いて、生命の本質に對する一つの解釋が、そこから生み出されました。卽ち、私共の感覺に觸れ得る現象、それは誰もが等しく感じて、等しい印象をうけるやうな現象を基礎として、綜合的な、歸納的な研究を始め、凡てのそれ等の現象が、自然率といふ物理的な一定の法則によつて律せ

られて居るといふ事を發見しました。さうして、それが單に感覺に觸れ得る現象のみならず、精神界と稱せられて來た物質以外の現象にも働いて居るといふ事を見出しました。のみならず、精神的現象といはるべきものも、實は物質から分離して獨存し得るものではなく、物質に働きかけたエネルギーの作用の現はれに過ぎないとまで考へるやうになりました。從つて物質界の現象を規定する法則はその儘所謂精神界の現象をも規定して居る譯になります。所が物質の世界は、自然律といふ機械的な、一律な法則によつて動かされて居るので、他の力がどうすることも出來ないのでありますが、その同じ力によつて支配される精神界も亦、明かに定まつた道に進むのだと結論される外はなかつたのです。卽ち、人間の生活といふものも、衣食住の事から愛憎の問題に至るまで、宿命的な或る力によつて動かされて居るのであつて、それをどう變更する事も出來ないと見るに至つたのです。この見方は、唯一つの見方で、一見實際の生活には、何等の關係もないやうではありますが、それが歐羅巴の文明に絕大な影響を及ぼしたといふ事は、周知の事實です。卽ち人は此の地上によき生活を來さんが爲めには、物質を自分の周りに一番よい關係に置くの外はないと考へるに至りました。さうして、物質のよき配列のみが人生を幸福にする唯一の道だと信ずるに至りました。さうして、そこに道德上に功利主義が起り、哲學上に宿命論と實際論とが起り、歷史學上に唯物史觀が起り、社會生活の上に社會主義的傾向が起りました。かゝる樣式の生活に於ては、環境の力が如何なる場合にも絕大な威力です。

個人は社會の前には無に等しい存在であり、その意志は大きな宿命の力の投影に過ぎません。さうした傾向が民衆全體の生活意識を支配するに至つたのです。

かゝる傾向が人の生活を質實にし、地上生活に十分の重みを置いて、そこに生活の凡ての動機と目的とを置くに至らしめた事は、見逃すべからざる功績であります。人は盲目な飛躍を試みようとはしなくなりました。可な

り意地の惡い人間を、その儘尨大したやうな、奇怪な偶像神を葬り終りました。人間に人間以上の權力や意志を許すやうな迷夢から目醒めました。民衆全體の實際生活の幸福が、より多く考へられました。是等の自覺と其の實行によつて、人々の生活は前の如何なる時代にも無かつたやうな、絶大な進歩を遂げました。その業績を我々は決して忘れることは出來ません。

此の狀態が直ちに當時の藝術にもさし響いた事は云ふまでもありません。自然主義的傾向の發生がそれであります。この自然主義的傾向といひますのは、とりも直さず生活に對する純客觀的觀照をさすのでありまして、藝術家は人生を如實に寫し出す所の明鏡であるべきであるといふ主張であります。卽ち、自然律そのものゝやうな人間的の意志や感情から解放された、一つの力となつて、人間生活をあるが儘に再現するのが、藝術家の能事であると考へられるに至りました。かくして人の生活は、何等の加減用捨もなく、赤裸々に描き出されました。それはこれ迄に現はれなかつた新しい姿の藝術品を生み出すに至りました。私共は初めて自分自身の姿がどういふものであるかといふ事を、目の前にまざ〳〵と見せつけられて、驚きの目を見張らずには居られない强い刺戟をうけたのです。さうして私共の實際生活がそれによつてどれ程啓發され訂正されたかは量り知る事が出來ません。今まで、高い道德であるかの如くに、公々然と行はれて居た諸々の僞瞞や、虛飾や、陋習やが散々に引き裂かれて、一味の淸新な凉氣が送り込まれました。破壞さるべき多くのものは、惜しげもなく破壞されるに至りました。

併し乍ら、人間的の意志が否定されて、自然の力が極度に尊重され、生活現象そのものが自然の意志の獨斷的な表現として取扱はれるに至つた結果は、人生に對しての宿命的な約束が、おのづから成り立ちました。或る情け容赦のない大きな力、その力が人間の生活を勝手氣儘に導いて、人間は如何に努力しても、もがいても、結局

その圏外に脱逸する事は出來ず、その大きな力なる運命の傀儡として存立するの外はないといふのが、自然主義の藝術からひとりでに歸納され得べき結論であります。その結果として、私共の生活には、自主的な能動的な力が段々と失はれて行き、一種の諦めが人々を壓倒するに至りました。さうして、人間の精神活動はひとりでに鈍くなり、弛んで來ました。その結果、人生は何等の感激もない、灰色な世界の中に成り立つて居るといふやうな勢ひを現はすに至つたのです。

若し、自然主義の認める所が眞であつたならば、縱令、その藝術及びその藝術によつて影響される所の人間の生活が、如何に灰色になつても仕方のない事ではありますが、どうしても、その境地に滿足の出來ないやうな衝動が、人間の中には潜んで居るのです。それのみならず、人間が自然の意志をその儘歪める事なく表現しようといふのは、云ふべくして行はれる事ではありません。そこにはどうしても個性の各々が持つて居る持ち味といふやうなものが、滲み出て來るものです。自然主義の藝術がもつこの缺點と、人の心の中にある、自然の意志にのみ絶對的に服從し得ぬ心持とが一緒になつて、此處に新しい展開が行はれるやうになりました。

物を見、知り、覺るのは結局、人の各々がその人の有する腦力に從つて企てる所である。これは動かすべからざる事實であります。そこから新しい出發點を求め出さうといふのが、卽ち、新しい展開なのであります。此の事は、藝術方面に起つたのみでなく、他の方面にも同時に起つて來たのであります。例へば哲學の方面で、マックス・スティルネルや、ニイチエや、キヤアケゴールドや、ある意味に於てショウペンハウエルの如き人達が企てた所のものは、卽ちこれでありまして、輓近にはプラグマティズムの人達や、ベルグソンなどの所説が實にその代表的なものになつて居ります。それ等の人は、概念的な或るアイディヤによつて人生を律しようとする事なしに、人生から出發して、ある概念に到達しようとしたのであります。といふよりは、個性の見性から出發したと

いつた方が、より當然であるかもしれません。ベルグソンの如きは、人間を研究する上にも、延いては存在の本質を研究する上にも、科學がどうする事も出來ない領土（それが哲學の本當の領土であるのだ）が有るといふ事を主張し、極めて鮮明な微妙な論理をもつて、それを結論したやうに見えます。かくて科學的の唯一の論理學であつた歸納法は、新しい意味の演繹法によつて置き換へられるに至りました。社會科學の方面にも、同じやうな試みはどん〳〵發展されました。歷史學、政治學、法律學等の如きでさへ、その論理の基礎にも個性といふものの要素が著しく、色濃く加へられる事になりました。又宗教の方面に於ても、ドグマよりも、個性が持つて居る信仰の內容そのものに、重い價値をおくやうになつたのは周知の事實であります。固より、かゝる運動に對して反對の運動が起り、それが現代に於て或る力强い反抗をなしつゝあるのは、もとより免れませんから、凡ての人間生活の現象は、私が今申し述べたやうに、明瞭に區別されて居る譯ではありませんけれども、個性に立脚した考へ方が、漸次地步を占めつゝあるのは、疑ひのない事柄であると信じます。

さて、此の氣勢が藝術の上に如何なる働きをなしたかといふと、前にも申した通り、それは藝術制作の對象を全く顚倒した事です。自然主義に於ては、自然が人間を見るようにと企てられましたが、新しい運動に於ては、人間が自然を見るようにと、企てられて居るのです。固より、人間と云へども自然の廣義なる自然の一部であるのに相違ありません。しかし、藝術制作の主體は廣義なる自然ではなくして、人間そのものです。犬でもなければ、羊でもありません。その主體が人間である以上、人間はそれ〴〵、自己獨得の主觀によつて、藝術を創作する外はありません。卽ち、主觀的なる個性の中から、湧き出て來る純粹な衝動が働く處に藝術は成り立つのです。この約束は、どうしても變へる事の出來ない約束であります。若し、これが變へる事の出來ないものであるなら、いつそ、そこに固く立脚して、藝術を作り出さうではないかといふのが、新しい態度なのであります。そ

れ故に、自己の内部に對する考察が、前にも勝つて重んぜられなければなりません。そこに深く食ひ入り、強く把握した人が、力強き藝術を生み出すのです。卽ち、人間の意志がこゝに再び復活するに至つたのです。卽ち、タイバーの河水が漫然として汲み上げられるのではなく、その河水をつくり出す泉の各々が、その水の湧き出る一番の深みから探り出されるやうになつたのです。換言すれば、人間の持つて居る藝術的衝動、卽ち本能が人間の生活延いては人間を取り圍む大自然に對して、如何に働きかけ、如何にそれを變化するかを、見極めようとする努力が始まつたのです。

凡てのものは一つの處に止まつては居ません。それは常に流動し流轉して居ます。人間も亦、現在の境遇にのみ止まつては居ません。何等かの方向を目指して、進化にしろ、退化にしろ、動きつゝあります。さうさせるものが、縱令、廣義の自然の持つて居る力であるにせよ、それが人間といふ生命の中に流れ込んで働く時には、人間といふ立場から見た場合、それは獨存的に、人間の中にあつて働いて居る唯一の力であります。人はそれに凡ての依頼をかけて生きて行く外はありません。この力こそは、私が前々から繰り返して申し述べた本能そのものであります。これが、生命の泉であり源頭であります。各個が一つの泉であり、その泉から流れ出る水が、各々違つた性質を持ち乍ら合流して一つの河をなします。その河こそは、我々が形造つて居る社會であります。この外にこの河の本質を作り出す要素は本當はありません。雨や雪が地表に溜つて水の量を增す事があるとしても、それは、長い日和の後には當然失はるべき水量であつて、河の本質的な水量はいつでも、常住不變な泉の水によつてのみ供給されるのです。だから、私共はこの泉を尊び重んぜねばなりません。此處から恐らくは、未來に於て新しい人間生活の力が湧き上るでせう。

羅馬の郊外なる靜かな村の傍に湧くアックワ・アチェトーザ、たゞ一度、假初めに訪づれた泉ではありますけれ

ども、それは一人の人の心に觸れ得たやうな溫かい忘れ難い記憶を私に刻みつけます。あの泉は、今日も今のこの瞬間にも、少し許り酸味を持つた淸い水を湧き立たせる事を止めては居ないでせう。

「泉」は講演の速記錄では滿足が出來ないので、殆んど全部書きなほした。

（一九二一年五月、文化生活講演集「私共の主張」所載）

「聖餐」に就いて

今度太陽座が來る四日から有樂座に旗上げ興行の上演脚本として私の「聖餐」を選んだが、其の興行に就いての演出法の一切は、太陽座に任して了つて、其の稽古には自分は殆んど關係してゐないから、演出上の事に就いては一切關係がなく又責任も負ふ事が出來ない。只私はあの劇そのものに關してこの場合自分の考へてゐる事をいふに止める。

あれは聖書を題材とした、私の三部曲の最後のものであつて、この三つの戲曲の間には、私として或る觀念上の連絡を與へてゐるつもりである。「大洪水の前」で、エホバと人とに對する或る調和する事の出來ない心の苦しみが、「サムソンとデリラ」に於ては一種の、然し、不滿足な解決が與へられ、第三の「聖餐」に於てそれが圓滿の解決に持ち來されてゐるといふのが構想の一つ。又、第一の戲曲に於ける男女關係が、第二のそれに於て激しき破綻を起し、第三に於て或る正しい調和を得たといふことを云ひ表はしたかつたのだ。

それは兎に角として、「聖餐」に於いては、私は聖書の解釋に或る新しい考へ方を試みようとした。それは誰にも意外であつたキリストの突然の捕縛と死刑とが、一人の女子に豫めキリスト自身に由つて告げ知らされてゐたに違ひないといふ事實である。キリストは周圍の凡ての人から受けてゐた誤解の中にあつて、只一人の理解者を求め出し得たやうに思はれる。それはその前半生に石で打ち殺さるべき惡い賣色の行ひをしてゐた、マグダラのマリヤといふ特別な教養もなければ品位もない一人の女である。が、彼女は强い愛の持主であつた。イエスが「彼女は救はるべし、彼女は凡てに優りて愛したが故である」と云つたその女である。このマリヤのみがキリスト

の心を朧げながら感じてゐて、キリストの死後、弟子達が絶望の餘り一人殘らずキリストを離れ去つた時にも一人もとの信仰に踏み止まつてキリストの信仰をこの地上に繋ぎ止めたと思はれるのだ。

私はこの劇に於て、この事を微かながら云ひ表はし、この稀有な女性の美しい代表者を讚美しようとした。若しそれが少しでも表はされてゐるならば私の仕事は無駄ではなかつたのだ。猶云ひ添へるが、私はこの作物に於て自分の思想を宣傳しようなどゝしたものではない。只聖書から捉へ得たキリスト達の生活の或る一角を精神的に表現しようと試みたまでゞある。（談話筆記）

（一九二一年二月、「讀賣新聞」所載）

「御柱」劇餘談

「御柱」と云ふあの芝居は、前から書いて見たいと思つてゐました所に、恰度吉右衞門から、何か脚本を書いて貰ひたいと賴まれたので書いたのです。扨て舞臺にのるとなると、何や彼やで隨分時間をとられました。

最初交渉を受けた時、私は、吉右衞門の芝居はそれまでに二三度しか見てゐませんし、その藝風もよくは知らず、又劇道にも暗い方なので、それでもよいかと云つたら、何でもよいからと云ふので書く事にしました。尤も、その芝居の中に、女形の時藏と子役の又五郎とを使つて貰ひたいと云ふ註文はありました。それから吉右衞門自身は、餘り年寄には扮れない、まづ五十位まで、時藏の方は二十六七まで、と云ふ事でした。併し、實際は吉右衞門の役の龍川平四郎は六十一にしたのですが、却つてそれ以上にも、大變老けて見えた樣です。吉右衞門の話では、どうしても中々年寄になれない。昨日漸く出來上つたお爺さんと云ふ具合だと云ふので、中風にでも罹つて足をひきずる樣にでもしたらと云つたのですがその故だつたかもしれません。吉右衞門と云ふ役者ですか、私は今迄數多く見てゐませんが、大變いゝ役者だと思ひます。本當の意味の喜劇を是非やつて貰ひたいとは、同人を知つてゐる人達が集つた時云ひ合つてゐたことですが、私も吉右衞門はそれが出來る人だと思ひます。それ程あの人は、既に到つた藝の力を持つてゐるやうに見えます。さうですね、喜劇のいゝのが日本には無いやうですが、私は、武者小路君などが、いゝ喜劇の書ける人だと思ふ。「或日の一休」だの「三和尙」だのと云ふものなどは、少しも巧まない純なユーモアが漲つた、大變面白いもので、他人には眞似が出來ないものです。——武者小路君の有つてゐるユーモアは大變いゝと思ふのです。

勘彌と吉右衛門ですか、實は、勘彌もよく知らないのです。が、まあ私の素人考へで云へば、勘彌は如何にも器用に他人の心に這入ることの出來る人で、それ〴〵の役を過ちなく仕活かす事の出來る優れた才分のある人ですが、素質では吉右衛門の方が大成する天分を有つてゐはしないか、と云ふ樣な氣がします。何分熱心な人です。小手先の器用に落ちる事を避け通したら、大きな味の益〻現はれる人ではないでせうか。

舞臺の上の出來榮えは、先づあれで私は滿足してい〻と思ひます。殊に中日からは、吉右衛門が自分の工夫でやつた事が、或る點では失敗してゐたにせよ、い〻所が澤山出てよかつたと思ふ。初日頃はどうしてもまだ臺辭が入つてゐない、黑ん坊が傍から臺辭をつける、――これは舊劇一般の習慣ですけれど――それが爲めにどうも甘くゆかない。此の事は吉右衛門にも話したのですが、吉右衛門もどうかしたいと云つて居ました。それでも、初日はまだ、臺辭も仕草も、どちらもついてゐなかつたから、まだい〻のですが、三日目位になると、いつどうすると云ふ振りの方は解つて來てゐるのに、臺辭が入つてゐないものですから、大變變なものでした。これは多分、昔の芝居と云ふものに舞臺監督と云ふものがなくて、只立役の演り方にしたがつてやると云ふ習慣が祟つてゐるのだと思ひます。是非もつと稽古を積む樣に改めたいもので、今の儘では、初日から三四日の間は舞臺稽古を見せられてゐる樣な譯です。

舞臺稽古は、二度行つて見て、作者としての注意をしたのですが、吉右衛門はあの通りの神經質な優ですから少し註文をすると、如何したらばさう云ふ氣持が表はせるものでせうと、大變考へ込んで了つたりしました。

『御柱』が上演されてから、大變方々、殊に信州の人から手紙を頂いてゐます。史實と違つてゐると云ふ事を云つて來られた方もありますし、諏訪言葉についての注意もありました。え〻、諏訪言葉は、態〻藤森成吉君から敎へて頂いたのですが、同君も若い時に國を離れてゐられるので、多少異つた所もあつたやうです。

私は實は、あの立川和四郎（芝居では龍川平四郎としましたが）と云ふ老匠の事蹟が、それ程信州で有名なのだとは知らなかつたのです。諏訪へは吉右衛門達と是非行つて見たい心算だつたのですけれど、到頭忙しくて、それに今行つても調べが屆かないだらうと思つたものですから行かなかつたのですが、——段々聞いて見ると、思つた以上に大變有名な人で、立派に事蹟が殘つてゐるのださうです。そして、あの平四郎と云ふ人の一家は、諏訪侯の引き立を蒙つて、苗字帶刀御免位の家柄ではなかつたかと思はれます。さうすれば、普通の大工とあんな風に口を利く事もない譯でせうから、史實とは違つてくる譯ですけれど、これは仕方ありません。

何でも平四郎の祖父さんと云ふ人が立川家を興したものらしいが、大變山師的な人で、鰹節で鼠を作つたりして、盛に名を賣る事に努めたらしいのです。こんな話もあります。秋葉山可睡齋の山門の造營を引き受けた時、出來上つた虹梁を、愈々棟に上げると云ふ日になつて、その先きの所を誰かに切りとられて五寸短いのださうです。すると、平四郎の祖父さんは、自分の念ひ一つで、これを引き延ばして五寸長くして見せると云ふのださうです。そして綱でそれを吊り上げる時虹梁に跨つて木槌でたゝいてゐたさうですが、ちやんと長くなつてぴたりとはまつたので、みんな大變に感心したのですが、實は、豫め五寸だけ長く拵へて置いて、自分で夜中に五寸切りとつたのだと云ふことです。

今は、平四郎の孫娘に當る立川松代と云ふ人がゐて、立派に上諏訪に家が殘つてゐるのです。これは、小石川の立川氏の緣家に當る或る女の方に知らせて貰つて、始めて知つたのでした。この松代女史が、私の芝居を見に來ると云ふ事でしたが、見えなかつたやうです。

それから千葉神社の燒跡ですが、あれはちやんと殘つてゐます。最初私が千葉へ行つた時、偶然此の境內へ來て、掛小屋の中に燒殘りの木彫などが散らばつてゐるのを見たものですから興味を起して其處にゐたお爺さんに

話をきいたのが、「御柱」を書く動機になりました。あれは、實際は大分後の明治十五六年頃再炎の時の事なのですが、
例の、宮司が火の中に飛び込むと云ふ話。あれは、實際は大分後の明治十五六年頃再炎の時の事なのですが、これについてこんな事があるのです。私の妹があの芝居に行つた時、妹の家の女中がこれを見て大變驚いて、自分は現にその時を知つてゐると云つたさうです。

「御柱」については、いづれいろ〳〵と書き直したい所があります。――兎に角いろ〳〵と參考になることを聽きました。どうも私は、餘り平四郞にばかり力を入れ過ぎたやうなので、今度は、大工の方の氣持をもう少し出したいと思つてゐます。それには、何も大工それ自身に多く口を利かす必要はありません。あれ以上口を利かせるのは噓です、平四郞の言葉で、もつと大工の氣持が動く樣に出したいと思ふのです。――作品としてはともかく、上演しては、「死とその前後」よりも「御柱」の方がよかつたかも知れませんね。

舞臺監督と役者との問題も、中々難しい事ですね、監督と主役との意見の違つた場合、まづ、舞臺監督の專制にするか、役者々々の interpretation に從つて、監督は唯その間の聯絡をとるに止まるか。此の二つになつてゐますが、日本などでは昔からの習慣上、よく、主役の意見はきいても、素人の監督に何が解ると云ふ樣な考へをもつ役者もある樣です。まあ、いゝ監督ならばその意見をきくし、頭のある役者ならばその方に任して間違ないのでせうな。作者との關係、これは勿論普通の場合は一旦書いた物が芝居の人の手に渡つて上演される以上、その人々の解釋に從ふのが當然でせう。第一作者の死んでゐる場合などを考へたら、作者の意見を入れるといふのは無理でせう。

それからどうしても改善して欲しいと思ふことは、見物人の態度です。幕が開いて了つてから、ぞろ〳〵と座席に這入つて來る、あのふしだらな習慣は、是非とも改めて欲しいと思ひます。それから先は、氣に喰はなかつ

たら騷ぐなり怒鳴るなり勝手ですが、始から演劇といふものを輕蔑してかゝる樣な、禮儀を無視した態度は是非改めたいものだと思ひます。（談話）

（一九二二年十一月「中央文學」所載）

一九二二年

宣言一つ

思想と實生活とが融合した、そこから生ずる現象――その現象はいつでも人間生活の統一を最も純粹な形に持ち來たすものであるが――として最近に日本に於て、最も注意せらるべきものは、社會問題の、問題として又解決としての運動が、所謂學者若しくは思想家の手を離れて、勞働者そのものゝ手に移らうとしつゝある事だ。こで私のいふ勞働者とは、社會問題の最も重要な位置を占むべき勞働問題の對象たる第四階級と稱せられる人々をいふのだ。第四階級の中特に都會に生活してゐる人々をいふのだ。

若し私の考へる所が間違つてゐなかつたら、私が前述した意味の勞働者は、從來學者若しくは思想家に自分達を支配すべき或る特權を許してゐた。學者若しくは思想家の學說なり思想なりが勞働者の運命を向上的方向に導いて行つてくれるものであるとの、謂はゞ迷信を持つてゐた。而してそれは一見さう見えたに違ひない。何故ならば、實行に先き立つて議論が戰はされねばならぬ時期にあつては、勞働者は極端に口下手(べた)であつたからである。彼等は知らず識らず代辯者にたよることを餘儀なくされた。單に餘儀なくされたばかりでなく、それにたよることを最上無二の方法であるとさへ信じてゐた。學者も思想家も、勞働者の先達であり、指導者であるとの誇らしげな無內容な態度から、多少の覺醒はし出して來て、代辯者に過ぎないとの自覺にまでは達しても、なほ勞働問

題の根柢的解決は自分等の手で成就さるべきものだとの覺悟を持つてゐないではない。勞働者はこの覺悟に或る魔術的暗示を受けてゐた。然しながらこの迷信からの解放は今成就されんとしつゝあるやうに見える。

勞働者は人間の生活の改造が、生活に根ざしを持つた實行の外でしかないことを知りはじめた。その生活といひ、實行といひ、それは學者や思想家には全く缺けたものであつて、問題解決の當體たる自分達のみが持つてゐるのだと氣付きはじめた。自分達の現在目前の生活そのまゝが唯一の思想であるといへばいへるし、又唯一の力であるといへばいへると氣付きはじめた。かくして思慮深い勞働者は、自分達の運命を、自分達の生活とは異なつた生活をしながら、しかも自分達の身の上について彼れ是れいふ所の人々の手に託する習慣を破らうとしてゐる。彼等は所謂社會運動家、社會學者の動く所には猜疑の眼を向ける。公けにそれをしないまでも、その心の奥にはかゝる態度が動くやうになつてゐる。その動き方はまだ幽かだ。それ故世人一般は固よりのこと、一番早くその事實に氣付かねばならぬ學者思想家達自身すら、心付かずにゐるやうに見える。然し心付かなかつたら、これは大きな誤謬だといはなければならない。その動き方は未だ幽かであらうとも、その方向に勞働者の動きはじめたといふことは、それは日本に取つては最近に勃發した如何なる事實よりも重大な事實だ。何故なら、それは當然起らねばならなかつたことが起りはじめたからだ。如何なる詭辯も拒むことの出來ない事實の成り行きがそのあるべき道筋を辿りはじめたからだ。國家の權威も學問の威光もこれを遮り停めることは出來ないだらう。在來の生活様式がこの事實によつてどれ程の混亂に陷らうとも、それだといつて、當然現はるべくして現はれ出たこの事實をもみ消すことはもう出來ないだらう。

嘗て河上肇氏と始めて對面した時（これから述べる話柄は個人的なものだから、こゝに公言するのは或は失當かも知れないが、こゝでは普通の禮儀をしばらく顧みないことにする）、氏の言葉の中に「現代に於て哲學とか藝

術とかにかゝはりを持ち、殊に自分が哲學者であるとか、藝術家であるとかいふことに誇りをさへ持つてゐる人に對しては自分は侮蔑を感じないではゐられない。彼等は現代が如何なる時代であるかを知らないでゐる。知つてゐながら哲學や藝術に沒頭してゐるとすれば、彼等は現代から取り殘された、過去に屬する無能者である。彼等が若し『自分達は何事も出來ないから哲學や藝術をいぢくつてゐる。どうかそつと邪魔にならない所に自分達をゐさしてくれ』といふのなら、それは許されない限りでもない。然しながら、彼等が十分の自覺と自信を以て哲學なり、藝術なりにたづさはつてゐると主張するなら、彼等は全く自分の立場を知らないものだ」といふ意味を云はれたのを記憶する。私はその時、素直に氏の言葉を受け取ることが出來なかつた。而してかういふ意味の言葉を以て答へた。「若し哲學者なり藝術家なりが、過去に屬する低能者なら、勞働者の生活をしてゐない學者思想家も亦同樣だ。それは要するに五十歩百歩の差に過ぎない」。この私の言葉に對して河上氏はいつた、「それはさうだ。だから私は社會問題研究者として敢へて最上の生活にあるとは思はない。私は矢張り何者にか申譯をしながら、自分の仕事に從事してゐるのだ。……私は元來藝術に對しては深い愛着を持つてゐる。藝術上の仕事をしたら自分としては嘸ぞ愉快だらうと思ふことさへある。然しながら自分の內部的要求は私をして違つた道を採らしてゐる」と。これでこゝに必要な二人の會話の大體はほゞ盡きてゐるのだが、その後又河上氏に對面した時、氏は笑ひながら「或る人は私が炬燵にあたりながら物をいつてゐると評するさうだが、全くそれに違ひない。あなたもストーヴにあたりながら物をいつてる方だらう」と云はれたので、私もそれを全く首肯した。河上氏にはこの會話の當時既に私とは違つた考へを持つてゐられたのだらうが、その時頃の私の考へは今の私の考へとは大分相違したものだつた。今若し河上氏があの言葉を發せられたら、私はやはり首肯したではあらうけれども、或る異なつた意味に於て首肯したに違ひない。今なら私は河上氏の言葉をかう解する、「河上氏も私も程度の差こそあ

れ、第四階級とは全く異なつた圏内に生きてゐる人間だといふ點に於ては全く同一だ。河上氏がさうである如く、殊に私は第四階級とは何等の接觸點をも持ち得ぬのだ。私が第四階級の人々に對して何等かの暗示を與へ得たと考へたら、それは私の謬見であるし、第四階級の人が私の言葉から何等かの影響を被つたと想感したら、それは第四階級の人の誤算である。第四階級者以外の生活と思想とによつて育ち上つた私達は、要するに第四階級以外の人々に對してのみ交渉を持つことが出來るのだ。ストーヴにあたりながら物をいつてゐるどころではない。全く物などはいつてゐないのだ」と。

私自身などは物の數にも足らない。例へばクロポトキンのやうな立ち優れた人の言說を考へて見てもさうだ。縱令クロポトキンの所說が勞働者の覺醒と第四階級の世界的勃興とにどれ程の力があつたにせよ、クロポトキンが勞働者そのものでない以上、彼は勞働者を活き、勞働者を考へ、勞働者を働くことは出來なかつたのだ。彼が第四階級に與へたと思はれるものは第四階級が與へることなしに始めから持つてゐたものに過ぎなかつた。いつかは第四階級はそれを發揮すべきであつたのだ、それが未熟の中にクロポトキンによつて發揮せられたとすれば、それは却つて悪い結果であるかも知れないのだ。第四階級者はクロポトキンなしにもいつかは動き行くべき所に動いて行くであらうから。而してその動き方の方が遙かに堅實で自然であらうから。勞働者はクロポトキン、マルクスのやうな思想家をすら必要とはしてゐないのだ。却つてそれらのものなしに行くことが彼等の獨自性と本能力とをより完全に發揮することになるかも知れないのだ。

それなら例へばクロポトキン、マルクス達の主な功績は何處にあるかといへば、私の信ずるところによれば、クロポトキンが屬してゐた(クロポトキン自身はさうであることを厭つたであらうけれども、彼が誕生の必然として屬せずにゐられなかつた)。第四階級以外の階級者に對して、或る觀念と覺悟とを與へたといふ點にある。マ

ルクスの資本論でもさうだ。勞働者と資本論との間に何のかゝはりがあらうか。思想家としてのマルクスの功績は、マルクス同樣資本王國の建設に成る大學でも卒業した階級の人々が翫味して自分達の立場に對して觀念の眼を閉ぢる爲めであるといふ點に於て最も著しいものだ。第四階級者はかゝるものゝ存在なしにでも進むところに進んで行きつゝあるのだ。

今後第四階級者にも資本王國の餘慶が均霑されて、勞働者がクロポトキン、マルクス其の他の深奥な生活原理を理解して來るかも知れない。而してそこから一つの革命が成就されるかも知れない。然しそんなものが起つたら、私はその革命の本質を疑はずにはゐられない。佛國革命が民衆のための革命として勃發したにもかゝはらず、ルーソーやヴォルテールなどの思想が緣になつて起つた革命であつたゞけに、その結果は第三階級者の利益に歸して、實際の民衆卽ち第四階級は以前のまゝの狀態で今日まで取り殘されてしまつた。現在の露西亞の現狀を見てもこの憾みはあるやうに見える。

彼等は民衆を基礎として最後の革命を起したと稱してゐるけれども、露西亞に於ける民衆の大多數なる農民は、その恩惠から除外され、若しくはその恩惠に對して風馬牛であるか、敵意を持つてさへゐるやうに報告されてゐる。眞個の第四階級から發しない思想若しくは動機によつて成就された改造運動は、當初の目的以外の所に行つて停止する外はないだらう。それと同じやうに、現在の思想家や學者の所說に刺戟された一つの運動が起つたとしても、而してその運動を起す人が自ら第四階級に屬すると主張した所が、その人は實際に於て、第四階級と現在の支配階級との私生子に過ぎないだらう。

兎も角も第四階級が自分自身の間に於て考へ、動かうとし出して來たといふ現象は、思想家や學者に熟慮すべき一つの大きな問題を提供してゐる。それを十分に考へて見ることなしに、自ら指導者、啓發者、煽動家、頭領

を以て任ずる人々は多少笑止な立場に身を置かねばなるまい。第四階級は他階級からの憐憫、同情、好意を返却し始めた。かゝる態度を拒否するのも促進するのも一に繫つて第四階級自身の意志にある。

私は第四階級以外の階級に生れ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に對しては無緣の衆生の一人である。私は新興階級者になることが絕對に出來ないから、ならして貰はうとも思はない。第四階級の爲めに辯解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切つた虛僞も出來ない。今後私の生活が如何樣に變らうとも、私は結局在來の支配階級者の所產であるに相違ないことは、黑人種がいくら石鹼で洗ひ立てられても、黑人種たるを失はないのと同樣であるだらう。從つて私の仕事は第四階級者以外の人々に訴へる仕事として始終する外はあるまい。世に勞働文藝といふやうなものが主張されてゐる。又それを辯護し、力說する評論家がある。彼等は第四階級以外の階級者が發明した文字と、構想と、表現法とを以て、漫然と勞働者の生活なるものを描く。彼等は第四階級以外の階級者が發明した論理と、思想と、檢察法とを以て、文藝的作品に臨み、勞働文藝と然らざるものとを選り分ける。私はさうした態度を採ることは斷じて出來ない。

若し階級爭鬪といふものが現代生活の核心をなすものであつて、それがそのアルファでありオメガであるならば、私の以上の言說は正當になされた言說であると信じてゐる。どんな偉い學者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭領であれ、第四階級的な勞働者たることなしに、第四階級に何物をか寄與すると思つたら、それは明らかに僭上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によつてかき亂されるの外はあるまい。

（一九二二年一月、「改造」所載）

廣津氏に答ふ

私が正月號の改造に發表した「宣言一つ」について、廣津和郎氏が時事紙上に意見を發表された。それについて、お答へする。

廣津氏は、藝術は超階級的超時代的な要素を持つてゐるもので、よい藝術は、如何なる階級の人にも訴へる力を持つてゐる。それ故私が藝術家としての立場を、ブルジョア階級に定め、その作品はブルジョアに訴へる爲めに書かれるものだと、宣言したに對して、あまりに窮屈な平面的な申し出であると云つてゐられる。藝術に超階級的超時代的の要素があるのは、廣津氏を待たないでも知れきつた事實である。その事實は藝術に限られた事でもない。政治の上にも、宗教の上にも、その他人間生活の凡ての諸相の上にかゝる普遍的な要素は、多いか少いかの程度に於て存在してゐる。それを私は無視してゐるものではない。それはあまりに明白な事實であるが故に、問題にしなかつただけの事だ。

私の考へる所によれば、自ら藝術家と稱するものを大體三つに分ける事が出來る。第一の種類に屬する人は、その人の生活全部が純粹な藝術境に沒入してゐる人で、その人の實生活は、周圍とどんな間隔があらうと、一向それを氣にしない。さうして自己獨得の藝術的感興を表現する事に全精力を傾倒する所の人だ。もし、現在の作家の中に、例を引いて見るならば、泉鏡花氏の如きがその人ではないだらうか。第二の人は、藝術と自分の實生活との間に、思ひをさまよはせずにはゐられないたちの人である。自分の藝術に沒入することは、第一の人のやうにある事はどうしても出來ない。自分の實生活と周圍の實生活との間に或る合理的な關係をつくらなければ、

その藝術すら生み出す事が出來ないと感ずる種類の人である。第三の種類に屬する人は、自分の藝術を實生活の便宜に用ゐようとする人である。その人の實生活は周圍の實生活と必ずしも合理的な關係にある必要はない。とにかく自分の現在の生活が都合よくはこび得るならば、ブルジョアの爲めに、氣焔も吐かうし、プロレタリアの爲めに、提灯も持たうと云ふ種類の人である。そしてその人の藝術は、當代で云へば、その人をプティ・ブルジョアにでも仕上げてくれゝば、それで目的をはたしたと言つてもいゝやうな藝術である。藝術家と云ふものゝ立場より言ふならば第一の種類の人は最も敬ふべき純粹な藝術家であり、第二の種類の人は、藝術家としては、所謂素人藝術家を以て目さるべきものであり、第三の種類の人は悪い意味の大道藝人とえらぶ所がない人である。

所で、私自身は第一の種類に屬する藝術家であり得るかと云ふのに、不幸にしてさうではない。私は常に自分の實生活の狀態に就いてくよ／＼してゐる。そして、その生活と藝術との間に、正しい關係を持ちきたしたいと苦慮してゐる、これが私の心の實狀である。かういふ心事を以て、私は自らを第一の種類の藝術家らしく裝ふ事は出來ない。裝ふ事が出來ないとすれば、勢ひ「宣言一つ」で發表した樣な事を言はねばならぬのは自然な事である。「宣言一つ」には、出來るだけ平面的にものを云つたつもりだが、それでもわからない人にはわからない樣だから、なほ一層平面的に云ふならば、第一、私は來るべき文化がプロレタリアによつて築き上げらるべきであり、又築き上げられるであらうと信ずるものである。ブルジョアジーの生活圏内に生活したものは、誰でも少し考へるならば、そこの生活が、自壞作用を惹き起しつゝある事を、感じないものはなからう。その自壞作用の後に、活力ある生活を將來するものは、もとよりアリストクラシーでもなければ、富豪階級でもあり得ぬ。これらの階級はブルジョアジー以前に勢力を逞しうした過去の所産であつて、それが來る可き生活の上に復歸しようとは、誰しも考へぬ所であらう。文藝の上に階級意識がさう顯著に働くものではないといふ理窟は、概念的には成り立つ

けれども、實際の歷史的事實を觀察するものは、事實として、階級意識がどれ程强く、文藝の上にも影響するかを驚かずにはゐられまい。それを事實に意識したものが文藝にたづさはらうとする以上は、如何なる階級に自分が屬してゐるかを嚴密に考察せずにはゐられなくなる筈だ。

しからば、來るべき時代に於てプロレタリアの中から新しい文化が勃興するだらうと信じてゐる私は、なぜプロレタリアの藝術家として、プロレタリアに訴へるべき作品を產まうとしないのか。出來るならば私はそれがしたい。しかしながら、私の生れ且つ育つた境遇と、私の素養とは、それをさせないことを十分意識するが故に、私は、敢へて越ゆべからざる埒を越えようとは思はないのだ。私のこんな氣持に對する反證として、よくロシアの啓蒙運動が例を引かれる樣だ。ロシアの民衆が無智の惰眠をむさぼつてゐた頃に、所謂、ブルジョアの知識階級の靑年男女が、あらゆる困難を排して、民衆の蒙を啓くにつとめた。これが大事な胚子となつて、あのすばらしい世界革命が惹き起されたのだ。この場合ブルジョアは、そのまゝプロレタリアの人になることが出來るのだ。さう、想像も及ばないものがある。悔い改めたブルジョアジーの人々が、どれだけ民衆の爲めに貢獻したかは、ある人は云ふかも知れない。しかし、この場合に於ける私の觀察は多少一般世人と異なつてゐる。ロシアの民衆はその國の事情が、そのまゝ進んでいつたならば、何時かは革命を起すに、ちがひなかつたのだ。

インテリゲンチヤの啓蒙運動はたゞいくらかそれを早めたにすぎない。そして、それを早めた事が、實際ロシアの民衆にとつて、よい事であつたか、惡い事であつたかは、遽かに斷定さるべきではないと私は思ふものだ。もし、私の零細な知識が、私をいつはらぬならば、ロシアの最近の革命の結果から云ふと、ロシアの啓蒙運動は、むしろ民衆の眞の勃興にさまたげをなしてゐると云つても差し支へない樣だ。始めは露國のプロレタリアの爲めに如何にも希望多く見えた革命も、現在までに收穫された結果から見るならば、大多數の民衆よりも、ブルジョア文

化によつて洗禮を受けた歸化的民衆によつて收穫されてゐる。そして大多數のプロレタリアは、帝政時代のそれと、あまり異ならぬ不自由な狀態にある。もし、ブルジョアとプロレタリアとの間に、はじめから渡る可き橋が絕えてゐて、プロレタリア自身の內發的な力が、今度の革命を惹き起してゐたのならば、その結果は、はるかに異なつたものである事は、誰でも想像するに難くないだらう。

然しかうはいつたとて、實際の歷史上の事實として、ロシアには前述したやうな事件の經路が起り來たつたのだから、私はその事實をも否定しようとするものではない。ブルショアジーを無くする爲めには、この階級が自己防衞の爲めに永年に亙つて築き上げた有らゆる制度及び機關（殊に政治機關）をプロレタリアの手中に收め、矛を逆にしてブルジョアジーを亡滅に導かねばならぬ。ブルジョアジーが亡滅すれば、その所產なる凡ての制度及び機關はおのづから亡滅して、新たなる制度及び機關が起生するであらうとは、レニン自身が主張する所で、實際に於て、歷史的事實としては、かくの如き經路が今行はれつゝあるやうだ。無產者の獨裁政治とは、恐らくかゝるものを意味するのであらう。洵に一つの生活樣式が他の生活樣式に變遷する場合に於て、前代の生活樣式が一時に跡を絕つて、全く異なつた生活樣式が突發するといふ事實はない。二つの生活樣式の中間色をなす、過渡期の生活が起滅する間に、新しい生活樣式が甫めて成就されるであらう。歷史的に人類の生活を考察するとかくある事が至當なことである。

然しながら思想的にかゝる問題を取扱ふ場合には必ずしもかくある必要はない。人間の思想はその一特色として飛躍的な傾向をもつてゐる。事實の障礙を乘り越して或る要求を具體化しようとする。若し思想からこの特色を控除したら、恐らく思想の生命は半ば失はれてしまふであらう。思想は事實を藝術化することである。歷史をその純粹な現はれにまで還元することである。蛇行して達し得る人間の實際の方向を、直線によつて描き直すこ

とである。若し社會主義の思想が眞理であつたとしても、若し實行と云ふ視角からのみ論ずるならば、その思想の實現に先だつて、多くの中間的施設が無數に行はれねばならぬ。所謂社會政策と稱せられる施設、溫情主義、妥協主義の實施などはすべてそれである。これらの修正策が施された後に、社會主義的思想は始めて實現される譯になるのだ。それならば社會政策的の施設すら未だ行はれようとはしなかつた時代に、何を苦しんで社會主義の思想は說かれねばならなかつたか。私はそれに答へて、社會主義はその背景に思想的要素を多分に含んでゐたからだといはねばならぬ。而してこの思想がかくばかり早く唱へ出されたと云ふ事は、決して無益でも徒勞でもないと云ひたい。何故ならば、かくばかり純粹な人の心の趨向がなかつたならば、社會政策も溫情主義も人間の心には起り得なかつたであらうから。

以上の立場からして私は思想的に云ひたい。「來る可き文化がプロレタリアによつて築かれるものならば、それは純粹にプロレタリア自身が有する思想と活力とによつて築かれねばならぬ。少くともさう云ふ覺悟を以て其の文化を築かうといふ人は立ち上がらねばならぬ。同時に、その文化の出現を信ずる者にして、躬自らがその文化と異なつた生活をしてゐる事を發見した者は、縱令どれ程自分が據つて以て生活した生活の利點に沐浴してゐるとしても、新しい文化の建立に對する指導者、教育者を以て自ら任ずべきではなく、自分の思想的立場を納得して、謹んでその立場にあることを以て滿足しなければならない。若し誤つて無思慮にも自分の埒を越えて、差し出た事をするならば、その人は純粹なるべき思想の世界を、不必要なる差し出口をもつて混濁し、何等かの意味に於て實際上の事の進捗をも阻礙するの結果になるだらう」と。この立場からして私は何と云つても、自分がブルジョアジーの生活に浸潤しきつた人間である以上、濫りに他の階級の人に訴へるやうな藝術を心がける事の危險を感じ、自分の立場を明かにしておく必要を見るに至つたものだ。さう考へるのが窮屈だと云ふなら、私は自

分の態度の窮屈に甘んじようとする者だ。

私のいつた第一の種類に屬する藝術家は階級意識に超越してゐるから、私の提起した問題などは固より念頭にあらう筈がない。その人達に取つては、私の提議は半顧の價値もなかるべき筈のものだ。私はそれ程までに眞に純粹に藝術に沒頭し得る藝術家を尊まう。私は或る主義者達のやうに、さう云ふ人達を頭から愚物視する事は出來ない。かゝる人は如何なる時代にも人間全體によつていたはられねばならぬ特種の人である。然し第二の種類に屬する藝術家である以上は、私の如く考へるのは不當ではなく、傲慢なことでもなく、謙遜なことでもなく、爾かあるべきことだと私は信じてゐる。廣津氏は私の所言に對して容喙された。容喙された以上は私の所言に對して關心を持たれたに相違ない。關心を持たれる以上は、氏の評論家としての素質は私のいふ第一の種類に屬する藝術家のやうであることは出來ないのだ。氏は明かに私のいふ第二か第三かの藝術家的素質の中の何れかに屬する事を自ら證明してゐられるのだ。而もその所說は、私の見る所が誤つてゐないなら、第一の種類に屬する藝術家でも主張しさうなことを主張してゐられる。若し第一の種類に屬する藝術家がそれを主張するやうな事を假想したら、(その藝術家はそんなことを主張する筈はないけれども) 或はそれは實感として私の頭に響くかも知れない。然しながら廣津氏の筆によつて敎へられることになると、私にはお座なりの概念論としてより響かなくなる。何故ならば、それは主張さるべからざる人によつて主張された議論だからである。

更に私の藝術家として作品を生かさうとする意味は何處にあるかといふことについては、「改造」誌上で一通り申し出ておいたから、こゝには再言しない。何しろ私は私の實情から出發する。私が若し第一の藝術家にでもなり切り得る時節が來たならば、この縷說は鷄肋にも値せぬものとして屑籠にでも投じ終らう。

(一九二二年一月十九日、「東京朝日新聞」所載)

藝術について思ふこと

表現派、未來派、立體派といふやうな形で現はれ出た藝術上の運動には色々な意味が考へられると私は思ふ。それについて私の考へてゐる所を述べて見る。

＊

未來派といひ、立體派といひ、表現派といひ、それには各〻の主張があつて、細部に亙つていふならば、一括して論ずることの出來ない衝突點さへあるといふことが出來る。然しながらこれらの各流派が在來の藝術上の立脚點に滿足しないで、新しい出發點を建立しようといふ意氣込みから擡頭し出した點に就いては等しく一致してゐるといつていゝ。

然らば在來の藝術上の立脚點とはどんなものであつたかといふのに、一言にしていふならば、印象主義で言ひ現はすことが出來る。印象主義とはどういふものかといふと、近代の思想樣式に一大變化を與へた科學的精神の藝術界へまでの延長と考へることが出來る。科學的精神とは、空想的軌範の設定に代へるのに實證的軌範の設定を以てすることだ。言を換へていへば、前代の理想主義的な考察法を打破して、現實主義的な考察法を採用することだ。卽ち更に言を換へていへば、論理法の首尾顚倒を成就することだつた。前代にあつては、或る抽象的な前提が樹立されて、そこから論理過程が生れ出で、その結論が人間生活の現狀に軌範として働いた。然るに近代にあつては全くそれを逆倒して、現在の人間生活の實狀から、論理は出發して、歸納的結論としての軌範を生み出した。かゝる內部生活の變化が、實生活の上にも、思想生活の上にも大きな影響となつたことは疑ひもない。

それがどう影響したか。これは誰でもいふやうに、前代の神――人力以上の或る不可思議な實在或は力――が滅びて、人間生活を支配すべき人間的な軌範が揭示されることになつたのだ。人は最早人間以上の力、換言すれば、人間に取つては、偶然若しくは超自然とより見ることの出來ない力によつて支配されることなく、一見偶然とは見えても徹底した考察の下には自然であり必然であるところの力によつて支配されるやうになつた、卽ち奇蹟は形を沒した。而して原因結果の理法が取り除くべからざる實在として人間の上に臨むやうになつた。最早そこには恐怖と信仰と祈念とがなくなつて、諦觀と推理と方法とが勝を占めた。人は自然外の不可思議な力が何時彼の上に臨むかも知れないといふ恐怖を持つべき必要から釋放され、又かゝる威力に對して無條件的に盲目的に臣從すべき要求を心の中から棄却し、從つてそれに祈願を籠めて自分の運命を僥倖しようとする衝動から獨立した。その代り人間も神も如何ともし得ない自然律に對しては、思ひ切りよく自分を投げ出して、その力のなすがまゝに任せねばならぬといふ諦觀を生じ、然しながら自然律を推理的に最もよく理解して、自分をそれに適應して行かうとする手段方法を講ずるやうになつた。これが卽ち科學的精神なるものである。

これは人間生活史の一つの大きな飛躍であつたに相違ない。人間が所謂野蠻蒙昧な時代から持ち續けてゐた謂れなき一つの迷信が根柢的に破却されたからである。前代の人が自然の背後に或る存在を假定し、彼等の空想と、經驗の不公平な取捨とによつて、その假定を裏書きすべき材料を蒐集し堆積しつゝあつた間に、現代人が、自然の背後を望見する代りに自然そのものを凝視するに至つたといふのは、人類に取つては誠に雄々しい一つの廻旋運動であつた。

この大きな變化は直ちに藝術家の本能と直觀とに攝取されて自然主義となつた。理想主義（卽ち超自然主義）から自然主義となつた。自然の相を直觀するといふことの外に、人間の運命を安固に導く道はない。縱令安固に

導くことが出來ぬとしても、さうした態度にゐるより外に居ようがない、さう自然主義の藝術觀は自分自身に結論を與へた。先づ自然の當體をあるがまゝに看取しようではないかといふのが、藝術家の態度だつた。自然の當體をあるがまゝに看取するとは、卽ち人間に對して自然の與へる印象をそのまゝ表現しようといふことである。この意味に於て自然主義と印象主義とは異語同意であるといひ得る。

然るに印象主義はそれ自身の中に破綻の芽を持つてゐた。それはその主義の客體たるべき自然なるものは、一見人間と對峙して不變の相を持つてゐるやうに見えながら、實は人間そのものゝ投影に過ぎないからである。神が人を造つたのではなくして、人が神を造つたのだと誰かゞいつたやうに、自然が人間に印象を與へるのではなくして、人が自然から印象を切り取るからである。自然が複雜で見窮めにくい以上に、人の心は複雜で見窮めにくいといふことが出來る。實に人は自然と對峙してゐるのではない。人と自然とは不離無二の狀態にある。人は自然の一角を切り取つてその上に跨がる。その中に自分を見出だす。その中にのみ自分がある。その外に人といふものはない。彼の人は彼の一角を切り取り、此の人は此の一角を切り取る。それ故、人間全體に共通して自然の印象といふやうなものは、實に何處にも存在するのではなくして、これも亦前代人の超越的實在の如くに一つの槪念に過ぎないのだ。而して槪念は、それが槪念と悟られた時には、決して藝術の對象とはなり得ない。此に於て現代人は槪念ならざる藝術の對象を他に求めねばならぬはめに陷つた。

その對象として現代人が尋ねあてたものは自然の中に人自身を見出すことであつた。自然卽ち自己であるところの當體そのものを表はすことであつた。藝術家が自分の眼の前に据ゑて眺むべき對象（それが神であらうと自然であらうと）はない。若し强ひて對象といひ得べくば、自然そのものである藝術家自身があるばかりである。自己解剖があるばかりである。然しながら自己が自己を解剖する時の態度は、醫者が病體を解剖するのと同じ形

には行かない。自己が自己を自己から離さうとしたら、その瞬間に自己は滅び亡せて、自然といふ概念ばかりがあとに殘るのみだ。さういふ態度は印象主義の繰り返しに過ぎなくなる。それ故藝術家が自己の印象を語らんとするには、自己を解剖することなく表現する外はない。即ち自己によつて生きられたる自己がそのまゝ藝術であらねばならぬ。自然とはかく人を笑はすものだと見るのが印象主義ならば、自然はかく笑ふといふのが求められつゝある藝術主義である。即ち求められつゝある藝術とは表現の外ではない。固より印象主義の藝術にあつても、表現なしには藝術は成り立たない。然しながらその場合にあつては、表現は印象を與へる爲めの一つの手段であつた、象徵であつた。然しながら表現主義の藝術にあつては表現の外に何者もない。表現がそれ自身に於て藝術を成すのである。

この立場が理解されゝば、未來派といひ、立體派といひ、表現派といはれるものゝ立場が理解さるべき筈である。未來派の藝術は敢へて印象藝術に逆行するものとはいはない。印象主義がその力の盛りに於て成し遂げんとしつゝあつたものを繼承して、その進境を徹底しようとするものだと主張する。然しながら印象派の藝術が「現實の一部に捕はれた奴隷として、純化に達せず、限りある客觀性から脫し得ずに、飜譯の役目許り勤めねばならなかつた」といふことに對しては極力反對し、色彩の解剖を形體の解剖にまで押し及ぼしたばかりではなく、色彩、形態の內部的統合を成就し、しかもその上に、心熱の燃燒をそのまゝ作品の全部に亙つて表現する所に使命を見出してゐる。立體派に至つては所謂印象派の藝術とは根本的に相容れないことを主張し、化學者によつて同一なりとせられる一杯の葡萄酒が、如何(どう)して酒を好む者の舌の上には種々に異つた味の葡萄酒として感ぜられるのを拒み得るかと叫んでゐる。而して科學的精神から割り出して、概念的に定められた呪ふべき空間や色彩の觀念が、徒らに物の現象を示すに過ぎないかを痛擊し、物の本質はそれらの概念を全然放棄した、主觀による色彩及

び空間の端的な表現によつてのみ實現されるかを力説してゐる。かく未來派は流動をその表現の神髓とし、立體派は本質をその表現の神髓とする所に相違點を有つてゐるにもかゝはらず、兩者とも近代の科學的精神に反抗して、主觀の深刻なる徹底によつて、物の生命を端的に捕捉しようと勉めることに於ては互に符合した共通點を持つてゐる。而して表現派が如上の傾向を最も力強く代表してゐるのはこゝに縷説するまでもない。その流派の名が的確に表はしてゐるやうに、それは外部的な印象によつて物に生命を與へようとする代りに、生命そのものゝ物を通しての直接の表現であらうとするのだ。

誰でもたやすく察することが出來るやうに、これらの凡ての流派の目指す所は、在來のあらゆる軌範に對する個性の反逆である。長い間現象の一分子と見做されてゐた個性が、獨立した存在として、一個の有機的な統合の中に嚴存し得ることを主張するその叫びである。個性に君臨しつゝあつた軌範に對して、逆に個性が君臨せんと企てた反逆である。

この大きな現代の精神的運動がどれだけの發達を遂げ、どれだけの成就を齎らし、どれだけの功績を贏ち得るかは誰も知らない。然しながら少なくともその根の深さが、人々の假初めに思ひ設けてゐるやうな淺はかなものでないことだけは、私が信じて疑はない所である。何故ならば、藝術の世界に現はれた如上の現象が、單に藝術界のことのみに止つてゐないのを知ることが出來るからである。既に科學自身が――科學的精神なるものを醱釀した所の科學自身が、この傾向によつて動かされてゐる。哲學がこの傾向によつて動かされてゐる。國家と個人との關係がこの傾向によつて動かされてゐる。傳統と生活との關係がこの傾向によつて動かされてゐる。原理の相對性がそれだ。現象の流動觀がそれだ。無政府的傾向がそれだ。虛無的傾向がそれだ。これ等の諸傾向を單に一時的な偶然の現象と見ようとするものは、現代の人間が持つてゐる惱みと憬れとに對して淺薄な誤算をしてゐ

るものであるとより私には現はれない。

＊

表現主義の勃興を私は更に他の一面から眺めることが出來るやうに思ふ。それは新興階級（私はこの言葉によつて所謂第四階級と稱せられるものを指す）の中に芽生ゆべき藝術を暗示するものとして眺めることだ。人は新興階級の勃興と共に藝術が破產すべきを憂へてゐるらしい。私は然しそれを愚かしい杞憂と考へる。かくの如きことを憂へる人は藝術といふ言葉を全く皮相な見斷に於て受取つてゐる人であるに違ひない。私は藝術といふ言葉をもつと本質的な意味に考へる。私に從へば人の在る所には藝術が在るのだ。それ故に如何なる人が生活の基調を形成しようとも、――その人が生命力を殆んど耗失した人でない限り――そこには必ずその人にそぐつた藝術が生活と共に生れ出て來ねばならぬ。

若し私の臆測が誤つてゐなかつたとするならば、表現主義の藝術は在來藝術から能ふ限り乖離しようとしてゐる點に於て、現代の支配階級の生活とはかけ離れた藝術である。かゝる藝術を生み出した藝術家自身は、自分では意識してゐないかは知らないが、知らず識らず來るべき時代に對して或る準備をしてゐるやうに見える。前述したやうに、彼等は從前の藝術の凡ての約束に對し、凡ての點から能ふだけ自分自身を解放することによつてのみ、自身の藝術を玉成し得るものと信じて居り又實際に於てさういふ結果を齎らしてゐる。今まで嘗て用ひられなかつた視角からのみ彼等は物を見ようとしてゐる。かゝる視角は一體誰が實際に於て持つてゐる視角だらう。それは明かに希臘人の持つてゐたそれでもなく、羅馬人の持つてゐたそれでもなく、基督教徒の持つてゐたそれでもなく、中世の諸侯や騎士が持つてゐたそれでもなく、近世の王侯や貴族が持つてゐたそれでもなく、現代の資本家やディレッタントが持つ所のそれでもない。それらのものは既に各々自分自身の藝術を持つてゐるが、そ

れらは悉く私達の眼の前にあるけれども、どれを取つて見ても表現派の藝術と等しいものではない。表現派の藝術は恐らくそれらの人々に取つては異邦の所產であるであらう。

然らば表現主義はどこにその存在の根をおろしてゐるのだらう。私としては新興の第四階級を豫想する外に見出すべきものがない。新興階級がやがて產出するであらう藝術の先驅として表現主義を見る時、私にはそれが色色な深い意味を以て迫つて來るやうに見える。そこには新しい力がある、新しい感覺がある、新しい方向がある。それが將來如何に發達して、いかなる仕事を成就するかは張目に値するといはねばならぬ。

然し私は一步を進める。現在あるところの表現主義の藝術が將來果して世界的な藝術の基礎をなすであらうか如何だらう。こゝまで來ると私は疑ひをさしはさまずにはゐられない。私には今の表現主義は、丁度學說宣傳時代の社會主義のやうな感じがする。ユートピヤ的な社會主義から哲學的のそれになり、遂に科學的の社會主義が成就せられたとはいへ、學說としての社會主義は遂に第四階級自身の社會主義であることは出來ない。(「宣言一つ」を併讀されたし)それがどれほど科學的になつたとはいへ、實際の第四階級者に取つては全く一つのユートピヤに過ぎないであらう。それは新興階級に對する單なる摸索の試みに過ぎない。それと同樣にわが表現主義も第四階級ならざる畑に、人工的に作り上げられた一本の庭樹である。少くともさういふやうに私には見える。クロポトキンやマルクスの學說が、第四階級に取つて――或る場合には害にさへもなりかねない――暗示となることがあるかも知れないが、實際の第四階級の生活はさうしたものに頓着なく、徐ろにではあるけれども、行くべき所に向いて行つてゐるやうに、表現主義の藝術も或る所まで行くと、全く姿の變つた藝術の出現によつて逆襲を受けるのではないかと危まれる。僞ることの出來ないのは人間の心だ。その人でなければその人のものは生まない。

(一九二二年一月、「大觀」所載)

自由は與へられず

文化生活とは氣高い絕對自由の中に人が生きることだ。とさう私は信じてゐる。若し私のこの考へが肯定さるべきものならば、文化生活の源頭は一個の個性の中にのみ存在せねばならぬ。二人以上の人が共生する所には、かゝる自由は不自由な制限を被る。友人の間に於て既に爾りである。家庭生活に於て固より爾りである。國家生活に於て餘りに爾りである。

然しながら人間は實際に於て、集團的生活を營むことによつてのみ人間生活を可能ならしめ得る。集團生活の組織方法が不合理であればある程、自由は不必要な制限を蒙るが故に、これを訂正することは焦眉の急務である。そこに疑ひを挾むべき餘地はない。泉源から湧き出す水を、それが當然流れゆくべき水路に導くことは至當な手段である。けれども最も大事なことは湧出する水量の增大であらねばならぬ。即ち個性が氣高い絕對自由に入らんとする要求を憚る所なく持つことである。組織方法の變革に期待すると同時に、否期待する前に、自己の自由を眞に要求すべきである。若し徹底的なこの要求なくして集團生活の形式が改善されたとしても、それは人間生活の表面的な修正としてのみ終るだらう。

氣高い絕對自由は決して與へらるべきではない。それは獲得さるべきだ。如何なる學者も革命家もそれを與へる事は出來ない。それを與へ得ると信ずる學者と革命家とは自己僞瞞にあらずんば本末顚倒の業病に罹つたものだ。

私は自由を獲得しようとするものと步調を共にし得たいと思ふ。

（一九二二年一月、「文化生活」所載）

驚異

嘗てカアライルは驚異（wonder）の念こそは智慧のはじめだといつた。この考にはすべての人が想像する以上の意味か含まれてゐるやうに見える。

齢を重ねるにつれて驚異する力が人の心から衰へて行く。この力が衰へてゆくにつれて、人は詩から散文の世界へと墮落する。物を美しさと、深さと、偉大さとに於て受け入れることの代りに、人は世界を醜小に感じ、平らべつたく見、平凡に思ふ。實の所、世界は五年や、十年や、五十年やでさう變るものではないが、人の心の中では驚くべきかゝる變化が起生する。變化しない世界が變化する。而して非常に惡く變化する。少年の感覺には、地球はゴム毬のやうに彈力に富んでゐるが、老人の指頭に觸れられると、それは一旦凍結した林檎のやうに物憂い。

嘆息すべきこの驚異の念の退縮……これから健全に救はれない限り、人間の生活は言ひやうなく慘めだ。その人の生活は生の倦怠によつて埋められる。彼の眼には見るもの凡てが古く見え、凡ての人の行爲が馬鹿らしく見え、子供つぽく見え、無駄なことに見える。新しい力が來て働くことがない故に、その思想も生活も固定して、それが動きの取れない尺度となり、用捨なくそれを以て外界を忖度する。こゝにひとりよがりの哲學と人生觀とが生れ出る。思ひやりのない獨斷が結果される。かゝる態度になつた彼に對して外界が暖かく酬いて來る譯はない。縱令暖かく酬いたとて、其の人は恐らく暖かく酬いられたとは感ずることが出來ないで、却つてそれを皮肉と思ふやうにさへなるだらう。安らかな心でゐることが出來ない。取り殘されてゐるやうな焦慮が段々と燃え立つて來る。彼はいら〳〵し始める。而して遂には彼と外界との脈絡は全く絕えてしまつて、しかつめらしい、無

同情な、孤獨な魂として、悲しくも彼は生ける屍を人生の途上に横たへねばならなくなる。

然しながら少年は永久にこの立往生から救はれる。少年のあの輝かしい眼には世界が如何に生きたものとして映ることよ。實に世界は無限の流動と音樂との中にあるのだ。そこには何等の制約もなければ、何等の先入見もない。一つの花を摘んで來て彼に示せば、彼は思ふまゝに、僞りのない心で、その花を大なる世界にし、戀人にし、神とする。世は奇蹟と美との堆積である。アラディンのラムプは常に彼の手に握られてゐる。彼は凡ての物を新しく受け入れる。受け入れたものを凡て新しくする。如何なる時、如何なる處にも倦怠はない。躓いても彼は希望を摑んで立ち上る。神の六日目のやうな世界が彼の面を向ける所には用意されてゐる。死ぬまで少年の心でゐることの出來る人は實に幸である。

私達は驚異の感情を失ふまい。生活の途上に出遇ふ凡ての事物を常に始めて見るものゝやうに感じよう。先入の見斷を尺度としてそれを速斷する愚を避けよう。凡てのものに新しい意味と目的とを見出さう。驚異の念から派生する想像力を以て、一塊の石をも生きたものとして取り扱ふことに慣れよう。かゝる態度によつて、世界は眼前に美しい變化を遂げることが出來るのだ。世界が單に美しく見えるばかりではない。單なる幻影が描き出されるばかりではない。實に私達は彈力性ある心によつてのみ世界を眞に實質的に美しくすることが出來るのだ。既存のものを變じて在るべき尊さに將來することが出來るのだ。ホヰットマンは其の詩の中に、一步踏み出したが最後、自分の眼前に展き亙つた驚異に有頂天になつて、第二步を踏み出すこともせずに、よろこびの歌を歌ひ續けたといつてゐる。かゝる生き／＼とした若い心が生命の唯一の左券である。私達は生命の有るかぎりこの若い心を虐使してはならぬ。如何なる不幸にも、災厄にも、失望にも、私達は眼を擧げて、人間の自由の隱れ家なる驚異の感情を振り仰がうではないか。

（一九二二年一月、「文化生活」所載）

滿韓旅行と個人雜誌

——本年の計畫と希望とに答へて——

今年は特に創作の方を一生懸命にやつて見ようと思つてゐます。それも細々したものは一切やめて、纏まつた大きいものを書いて見たいと思つてゐます。

×

それから、自分の實際生活の上に、一つのくぎりをつけたいと思つてゐます。

×

今年中には、是非滿韓の方を旅行して見るつもりです。

×

それから、個人雜誌を出したいと思つてゐます。それは、毎月色々な物を書かせられます。頼まれるとお斷りすることが出來ず、どうしても中途半端なものを出すことになるので、それをふせぎたいために出さうと思つたのです。その雜誌が出れば、書く方でもそれにばかり力を注ぐことが出來ますし、また讀者の方でも、あちこちの雜誌を見なくとも私のものはその雜誌一つを見ればいゝからです。

そんなことから計畫してゐるのですが、さて、何日から實現されるか、今のところはつきりはわかりません。三ケ月に一回にでもすれば樂でせうが、やつぱり最後の月に行けば周章てるのです。ですから、少しづゝでも毎月一回發刊して行きたいと思つてゐます。若し、私が書けなかつた時には、他の方にその號を提供して、何か載せて行くか、或は又休刊するか、とにかく、是非とも實現させたいと思つてゐます。（一九二二年一月、「新潮」所載）

生活よりジァーナリズムを排せよ

近頃惡い意味のジァーナリズムなるものが跋扈してゐる。新聞にも雜誌にも世間の噂が充滿してゐる。事實が正確に報道されないで、事實の影ともいふべき聞き書の類ひが頻りに流布される。世界的な事件から巷間の出來事に至るまで、事實の眞相は極めて曖昧に葬られてしまつて、それにまつはる第三者の揣摩臆測が、形容澤山な表現によつて、刺戟的に羅列されてゐるのを見る。廣告文の末に至るまでかゝる傾向に毒せられてゐるのは誰でも看取することが出來るだらう。かうなつて來ると、質の問題は多く顧慮されないで、量の問題が決定的なものになる。雜誌類が極めて厖大な形を取るに至つたのも、その原因はこゝにあるらしい。所謂井戸ばた會議と稱せられる心理が、私達の生活のあらゆる方面に浸みわたらうとしてゐるのだ。かくの如き忌むべき傾向が起るには色々の原因があらうけれども、私の考へる所によれば、その最大な原因の少なくとも一つは、各人が自分に對して不忠實な生活をしてゐるのでさうなるのだと思ふ。

若し一人の人が本當に自分に忠實な生活をしようと思へば、他のことなど考へてゐる暇はない筈だ。これは一見餘りに自己本位な言ひ分のやうに思はれるかも知れないが、而して確かに一面にはさうした危險を伴ふかも知れないが、自分といふものに忠實でない人が、假りにも他人に忠實であり得よう筈がないではないか。自分の立場が確立しないで、他人の立場に助勢することも批評することも如何して出來ようぞ。これは餘りに見易い道理である。餘りに見易い道理である爲めか、それは實際に於て屢〻忘られてゐる。而して自分の生活を本當に考へ、自分の生活を自分自身の所有を以て、確實に築き上げようとしない人程、他人のこと、他の事件に對して、必要

もない興味を向け、見當違ひな批判を下して喜んでゐる。それは正しく井戸ばた會議の心理である。かのお内儀さん達は、その家庭の中に、しておかねばならぬ用事の多くを實際は有ちながら、亭主と子供とを勤め場と學校とに送り出してしまへば、洗濯盥と汚れ物とを持つて井戸ばたに集まるのだ。而して集まつた人々の話題は、初めの中こそは、多少自分達の身邊の事情に關係の深いものであらうが、それが段々と飛火をしだして、彼等の生活とは何の緣故もない人々又は事件に對する無責任な批判か、然らざれば自分達の周圍にゐる人々のあら探しに移つて行つて縷々として盡きることがない。而して彼等が氣が附いて銘々の家に走り歸らればならぬ時になつて見ると、家の中には火一つなく、亭主と子供とは暖かい茶一杯をすらすゝることが出來ない始末になつてゐるのだ。若しかのお内儀さん達がもう少し自分の身邊を考へてゐたら、かゝる時間の空費と人柄の墮落とから免がれることが出來たであらう。

然しながら私達はこのお内儀さん達を尤め立てしてゐることは出來ないやうだ。近頃の新聞を見て見るがいゝ。又殊に婦人によつて愛顧される雜誌の類を見て見るがいゝ。知りもしない人や家庭のいさくさが如何に重要な記事となつて、紙面を埋め盡してゐることよ。而して如何にその人々や事件と何等の關係も有しない人達が、物知り顏に堂々と名前を列してその批判に當つてゐることよ。かくの如き記事や批判が新聞や雜誌に滿載されねばならぬといふのは、取りもなほさず人々がかゝる事柄に興味を持つてゐるのを裏書きしてゐるのだ。人々は自分の生活の內容の空虛さに厭き果てゝゐる。而してせめては他人の噂によつてゞもその空虛を滿たさうとしてゐるのだ。無邪氣といへば無邪氣と考へられないこともないが、この場合さうのみは考へてゐられない氣がするではないか。

かゝる傾向の押しつまつた所には何が起るだらう。一つの極端にはこの傾向は、要もない英雄崇拜、偶像崇拜

の惡風を作り、他の極端には無內容な僞善的傍觀主義を釀すに至るのだ。人聞きのよい事件が勃發し、これに對する種々なる空想的な噂が流布すれば、その事件を生み出した人間は、忽ちに彼が固有する以外若しくは以上の色彩を以て塗りまくられる。而して自分の生活を固有しない人々は無批判にもその手品的な色に眩惑されて、ひたすらにその人間を崇拜し憧憬する。こゝに奴隷的な盲從の道德が生れ出で、生活の足並みは知らず〳〵浮き立つて、徒らなお祭騷ぎが地道な生活の代りに流行する。人々はかくの如くしてカイゼルに行ぎ、ウィルソンに行き、ロイド・ジョージに行き、英國の皇太子に行くのだ。而してそれらの人間の本質が或る時期の經過と共に現はれ出ると、人々は自分等が勝手に手品的な彩色でそれらの人間を塗りたくつておいた辯に、それらの人間が今まで人々をあざむいてゐたかのやうに、自分勝手に幻滅の悲哀を高調し始める。何といふさもしさだ。何といふ不徹底な英雄崇拜だ。これは人々が自分の生活を有せず、從つて自分の見地を有せず、ジァーナリズム卽ち噂と聞書きとによつてのみ自分の生活を塗抹する所から惹起する錯誤である。反對に、人聞きのよくない事件が勃發し、これに對する些細な報道が世間に流布すると、人々は得たり賢しとその周圍に蝟集する。而してその中からあらん限りの醜い汁を吸ひ取らうとする。その事件なり事件の當事者なりが醜ければ醜い程人々の興味と感激とは高調するのだ。人々はこゝに自分の無內容な生活すらが晏如として君臨することの出來る一領土を見出すのだ。他人の失脚と不幸とを人々は更に色濃く、醜く、いびつに空想し始める。俺達にもこんなことはあるが、あの人間達の墮落には惘れ果てるといふ意識が、その人々の心を幾分か安逸にし、而してその心に優越を感じさせる。同じ人間である辯に、その仲間の間に出來た狂ひに對して、無頓着であるなら未だしも、大きな喜びと勇みとを感ずるとは何事ぞや。人の死を眼の前に見る人は――それが獸のやうな心を持つた人でない限り――思はず、心を寒くして沈默するではないか。人がその生活に躓くのはその人に取つて幾分の死である。人は肉體的に

ばかり死ぬものではない。然るに自分の仲間が、多かれ少なかれ死の手によつて脅かされてゐる時、人々はその周圍にあつて沈默の禮儀をすら守らうとはしないのだ。而してかゝる人々は、臺灣の生蕃に食人の習慣があると聞くと、惘れたやうな顏をしてその野蠻と不人情とを痛罵するだらう。他人の失錯によつて自分の生活の空虛を滿たさうとする人々は、生蕃以上の野蠻と不人情とを敢へてして平然たる輩ではないか。

自分の研究に沒頭したあまり、日露戰役が始まつたのも終つたのも知らずに過した學者が日本にあつたと私は聞いてゐる。人々はこれを腐儒の輩といつて笑ふかも知れない。然し私は、人々の生活にかくばかりジァーナリズムが跋扈する現在にあつては、かゝる人の生活を尊いと感ぜずにはゐられない。實際自分に本當に忠實であらうとするものに取つては、明かな事實でないもの――噂や聞書きは問題とはなり得ない。各人が確かな事實にのみ卽して己れの生活を支持する時にのみ、人の生活は誠の意味に於て可能である、人はその時に始めて獨立する。彼は奴隸の如く空想の英雄を崇拜しない。彼は暴君の如く他人の弱點の上に自分の立場を作ることはしない。彼は傲らない、阿ねらない。かくの如き人こそは人である。

生活より呪ふべきジァーナリズムを排せよ。

（一九二二年二月、「文化生活」所載）

野尻湖

去年の晩夏、信州の讀者達の親切な招きを受けて野尻湖に四日程滯在した。柏原といつて、一茶が生れて死んだ町のある停車場から下車して一里弱の所に、芙蓉湖とも稱せられるその湖水はある。黑姬、妙高、飯綱などいふ美しい山にかこまれた眺望は全く畫いたやうだ。野尻といふ小さな驛は昔のまゝの純朴な姿を以て湖岸に立ち連らなり、湖心には辨財天を祀つた琵琶島といふ島がある。小さな島だけれども、そこに生えてゐる樹木には、斧鉞があてられないので、太古の面影を持つてゐる。ベックリンの「死の島」を見た人はすぐこの島を聯想するだらう。水は淸くして暖かい。何處でもそのまゝを掬して飮むことが出來る。凉し過ぎる風のある時でも水にひたれば寒さを知らない。五六日を過すにはこの上ない仙境だ。信濃尻村野尻、……信濃の尻の野の尻。その名が旣にこの湖邊の姿を物語る。

信濃尻の野尻うみよ遠見れば刃の如し秋さびしかな

（一九二二年二月、「婦女界」所載）

雪の日の思ひ出

ある年の冬のこと、私は一人の友達と、登別温泉場で自炊生活をしてゐたが、汽車賃だけの嚢中になつたので、札幌へと引きかへさねばならなかつた。それはひどい吹雪の日だつた。夜に入つて、汽車がある小さな驛まで來ると積雪のために動かなくなつてしまつた。驛夫が來て客車毎にそれを言ひ觸れて歩いた。客車の中で一夜を明かしても差支へないが、食物の支給も出來ないからその積りでといふのであつた。今から思ふと二十年も昔のことなので、列車の中にスティームが通じてある譯でもないし、乘客は途方に暮れながらも車を降りた。

人々はすぐ眞白な雲のやうなものが、酷烈な寒さを伴つて荒れすさんでゐるのを見出しだ。氣息も出來ないで汽車を出た人は改札口を踏み越えるやうに停車場の中にころげこんだけれども、隙間といふ隙間からは、烈しいいぶきと共に、粉雪が所きらはず吹き入つて來た。小さな停車場は風にきしむで恐ろしい音をたてた。人々は大きく口を開いて何かいひ合ふけれども、それが少しも聞く人の耳には傳はつて來ない。驛員は四五人づゝの人に腕を押へられて、兩方の耳に口を押しつけるいくつもの顏に襲はれて當惑してゐた。その間を宿屋の客引きが懷ろの暖かさうな客を捜して爭ひ合つてゐた。

驛員の態度が强硬に冷淡だと觀念すると、多數の乘客は已むを得ず客引きに連れられて、宿屋の方に去つて行つた。而してそのあとには二十人ばかりの人が淋しさうに殘つた。金をつかひ果たした私達も固よりそこに居殘る仲間であらねばならなかつた。一かたまりの人は驛員の火鉢の周りに、一かたまりの人は待合室のストーヴの周りにかじりついて、もう碌々口もきかずに慄へてゐるばかりだつた。夜が更け進んで、寒さの爲めに空腹は一

人に覺えられるけれども、そこには食物の供給は全くなかつた。
寒むげな或る一隅からふと絶望的な泣き聲が起つた。子供のだと思つてゐたら、よく聞くとそれは成長した女の聲だつた。暗いランプの光では幾人ゐるとも知れないが、兎に角一かたまりになつた人間の塊りの中からその泣き聲は聞こえて來るのだ。妙に一本調子な泣き聲、無表情な泣き聲、戶外では、家を搖り動かして、けたゝましく吹きぬけて行く吹雪の風。私達は妙にその聲に引きつけられた。引きつけられたのは然し私達ばかりではない。そこにゐた人の大部分は、誰れ彼れとなく痛ましい心になつて、その泣き聲のする方を顧みた。
よく見ると一人の母――背に乳吞子を負うた母――が三人ほどの子供を自分の胸のまはりに集めて、それを抱きかゝへるやうにしながら、一人の子の肩に自分の顏を埋めて泣いてゐるのだ。子供達はかくばかり泣く母を見てきよとんとして默つてゐた。極端に貧しさうな親子の身なりだつた。
突然その母の傍にゐた一人の男が粗末な毛皮の帽子を脫ぎながら人々の方にやつて來た。而して慇懃な言葉で、その親子は北見の方に內地から移住して來たものだが、旅用のない所にこんな難儀に遭つて途方に暮れてゐるのださうだから、その人達が一飯でもありつくことが出來るやうに合力をしようではないかといひ出した。
そこにゐる人は皆んな謂はゞ貧しい人だつた。宿屋には行けない人だつた。しかもその人達がどれ程たやすく懷ろの有金を取り出したことぞ。その老人の毛皮の帽子は見る間に重くなつて見えた。
富んだ人達は宿屋に行つてゐた。貧しい人達ばかりが停車場には殘つてゐた。吹雪は停車場に殊に情なく見えた。人々は寒さに慄へ上つてゐた。母は泣いてゐた。子達は泣くことも出來ないでゐた。然しそこにゐる人々は默つたまゝ苦い顏もせずに、その毛皮の帽子を思ひ〳〵の小錢で滿たしてゐた。
北海道の雪の日の思ひ出の一つとして、こんな印象が私の頭には殘つてゐる。（一九二二年二月、「母の友」所載）

片信

A兄

近來出遇はなかつたひどい寒さもやはらぎはじめたので、兄の蟄伏期も長いことなく終るだらう。然し今年の冬はたんと健康を痛めないで結構だつた。兄のやうな健康には、春の來るのがどの位祝福であるかをお察しする。

僕の生活の長い蟄眠期もやうやく終りを告げようとしてゐるかに見える。十年も昔僕等がまだ札幌にゐた頃、打明け話に兄にいつておいた事を、この頃になつてやつと實行しようといふのだ。自分ながら持つて生れた怯懦と牛のやうな鈍重さとに惘れずにはゐられない。けれども考へて見ると、僕がこゝまで辿り着くのには、矢張りこれだけの長い年月を費やす必要があつたのだ。今から考へると、ようこそ中途半端で柄にもない飛び上り方をしないで濟んだと思ふ。あの頃には僕には何處かに無理があつた。あの頃といはずつい昨今まで僕には自分で自分を鞭つやうな不自然さがあつた。然し今はもうそんなものだけは無くなつた。僕の心は水が低いところに流れて行くやうな自然さを以て僕のしようとするところを肯んじてゐる。全く僕は蟄蟲が春光に遇つて徐ろに眼を開くやうな悅ばしい氣持でゐることが出來る。僕は今不眠症にも犯されてゐず、特別に神經質にもなつてゐない。これだけは自分に滿足が出來る。

但し蟄眠期を終つた僕がどれだけ新しい生活に對してゆくことが出來るか、或は或る豫期を以て進められる生活が、その豫期を思つたとほりに成就してくれるか、それらの點に行くと更に見當がつかない。これらについて

も十分の研究なり覺悟なりをしておくのが、事の順序であり、必要であるかも知れないけれども、僕は實にさういふ段になると合理的になり得ない男だ。未來は未來の手の中にあるとしておかう。來るべきものをして來るべきものを處置させよう。

結局僕の今度の生活の展開なり退縮なりは、全く僕一個に係つた問題で、これが周圍に對していゝ事になるか、惡いことになるかはよく解らない。だけれども僕の人生哲學としては、僕は僕自身を至當に處理して行く外に、周圍に對しての本當に親切なやり方といふものを見出すことが出來ない。僕自身を離れた處に何事かを成就し得ると考へる輕業のやうな仕事は出來ない。僕の從來の經驗から割り出されたこの人生哲學がどこまで立證されるかは、僕の經驗を更に續行することによつてのみ立證されることで、その外には立證のしやうがないのだから仕方がない。

偖て僕の最近の消息を兄に報じた序でに、もう一つお知らせするのは、僕がこの一月の「改造」に投じた小さな感想についてゞある。兄は讀まなかつたことゝ思ふが「宣言一つ」といふものを投書した。所がこの論理の不徹底な、矛盾に滿ちた、而して啞者の言葉のやうに、云ふべきものを云ひ殘したり、云ふべからざるものを云ひ加へたりした一文が、存外に人々の注意を牽いて、色々の批評や駁擊に遇ふことになつた。その僕の感想文といふのは、階級意識の確在を肯定し、その意識が單に相異なつた二階級間の反目的意識に止らず、かゝる傾向を生じた根柢に、各階級に特異な動向が働いてゐるのを認め、而してその動向は永年に亙る生活と習慣とが馴致したもので、兩階級の間には、生活樣式の上にも、それから醸される思想の上にも、容易に融通しがたい懸隔のあることを感じ、現在に於てはそれがブルジョアとプロレタリアの二階級に於て顯著に現はれてゐるのを見るといふ前提を頭に描いて筆を執つたものだ。而して僕の感ずるところが間違つてゐなければ、プロタリアの人々は、在

來ブルジョアの或るものを自分等の指導者として仰いでゐる習慣を打破しようとしてゐる。これは最近に生活の表面に現はれ出た事實の中最も注意すべきことだ。所がが藝術にたづさはつてゐるものとしての僕は、ブルジョアの生活に孕まれ、そこに學び、そこに行ひ、そこに考へるやうな境遇にあつて今日まで過して來たので不幸にもプロレタリアの生活思想に同化することに殆んど絶望的な困難を感ずる。生活や思想には或る程度まで近づくことが出來るとしても、その感情にまで自分をし向けて行くことは不可能といつて差し支へない。しかも僕はブルジョアは必ず消滅して、プロレタリアの生活、從つて文化が新たに起らねばならぬと考へてゐるものだ。こゝに至つて僕は何處に立つべきであるかといふことを定める立場を選ばねばならぬ。僕は藝術家としてプロレタリアを代表する作品を製作するに適してゐない。だから當然消滅せねばならぬブルジョアの一人として、さうした覺悟を以てブルジョアに訴へることに自分を用ゐねばならぬ。これが大體僕の主張なのである。僕にとつては、これ程明白な簡單な宣言はないのだ。本當をいふと、僕がもう少し謙遜らしい言葉遣ひであの宣言をしたならば、而して殊更宣言などいふ大層な表現を用ひなかつたら、あの一文はもう少し人の同情を牽いたかも知れない。然し僕の氣持としては、あれ以上謙遜にも、あれ以上大膽にも物をいふことが出來なかつたのだ。この點に於ては反感を買はうとも、憐れみを受けようとも、そこは僕がまだ至らないのだとして沈默してゐるより致し方がない。

僕の感想文に對して眞先きに抗議を與へられたのは廣津和郞氏と中村星湖氏とであつたと記憶する。中村氏に對しては格別答辯はしなかつたが、廣津氏に對しては直ぐに答へておいた(東京朝日新聞)。その後になつて現はれた批評には堺利彥氏と片上伸氏とのがある。又三上於菟吉氏も書いて居られたが僕はその一部分より讀まなかつた。平林初之輔氏も簡單ながら感想を發表した。その外西宮藤朝氏も意見を示したとのことだつたが、僕は遂

にそれを見る機會を持たなかつた。

そこでこれらの數氏の所說に對する僕の感じを兄に報ずることになるのだが、それは兄には大して興味のある問題ではないかも知れない。僕自身もこんな事は一度云つておけばいゝことで、こんなことが議論になつて反覆應酬されては、卽ち單なる議論としての議論になつては、問題が問題だけに、鼻持ちのならないものになると思つてゐる。然し兄に僕の近況を報ずるとなると、先づこんなことを報ずるより外に事件らしい事件を持ち合はさない僕のことだから、兄の方で忍耐してそれを讀む外に策はあるまい。

僕の云つたことに對して兎に角親切な批評を與へたのは堺氏と片上氏とだつた。堺氏は社會主義者としての立場から、片上氏は文明批評家としての立場から、大體に於て立論してゐる。この二氏の內の意見についての僕の考へを兄に報ずるに先き立つて、しつこいやうだけれども、もう一度繰り返しておかなければならないのは、あの宣言なるものは僕一個の藝術家としての立場を決めるための宣言であつて、それを凡ての他の人にまであてはめて云はうとしてゐるのではない、といふことだ。それなら、何故クロポトキンやマルクスや露國の革命をまで引き合ひに出して物をいふかとの詰問もあらうけれども、それは僕自身の氣持からいふならば、前揭の人々又は事件をあゝ考へねばならなくなるといふ例を示したに過ぎない。氣持で議論をするのはけしからんといはれゝば、僕も理窟だけで議論するのはけしからんと答へる外はない。

堺氏は「凡そ社會の中堅を以て自ら任じ、社會救濟の原動力、社會矯正の規矩標準を以て自ら任じてゐた中流知識階級の人道主義者」を三種類に分け、その第三の範圍に、僕を繰り入れてゐる。その第三の範圍といふのは「勞働階級の立場を是認するけれども、自分としては中流階級の自分、知識階級の自分としては、勞働階級の立場に立つて、其の運動に參加するわけには行かない。そこで彼等は、別に自分の中流階級的立場から、自分の出

來るだけのことをする」人達であるといふのだ。こゝで問題になるのは「立場に立つ」といふ言葉だ。立場に立つとは單に思ひやりだけで勞働者の立場に立つてゐればいゝのか、それとも自分が勞働者になるといふことなのか。若し前者だとすると堺氏は如何にも勞働者の立場に立つてゐるのであり、後者だとすると堺氏といへども勞働者の立場に立つてゐるとは僕には思はれない（僕に思はれないばかりでなく、堺氏自身後者にあるものでないと僕に言明した）。今度は「運動に參加する」といふ言葉だ。堺氏はこれまで長い間運動に參加した人である。誰でもその眞劍な努力に對しての功績を疑ふ人はなからう。然しながら以前と違つて、勞働階級が純粹に自分自身の力を以て動かうとし出して來た現在及び將來に於て、思ひやりだけの生活態度で、勞働者の運動に參加しようとすることが、果して勞働階級の承認するところとなるであらうか。僕はこゝに疑問を挿むものである。結局堺氏は、末座ながら氏が「中流階級の人道主義者」と或る輕侮なしにではなく呼びかけたところの人々の中に繰り入れられることになるのではなからうか。即ち、「自分の中流階級的立場から、自分の出來るだけのことをする」人々の一人となるのではなからうか。若し僕の堺氏に就いて考へてゐるところが誤つてゐないとしたら、而して僕が堺氏の立場にゐたら、勞働者の勞働運動は勞働者の手に委ねて、僕は自分の運動の範圍を中流階級に向け、そこに全力を盡さうとするだらうといふまでだ。さういふ覺悟を取ることが却つて經過の純粹性を保ち、事件の推移の自然を助けるだらうと信ずるのだ。かゝる態度が直接に萬が一にも勞働階級の爲めになることがあるかも知れない。中流階級に訴へる僕の仕事が勞働階級によつて利用される結果になるかも知れない。然しそれは僕が甫めから期待してゐたものではないので、結果が偶然にさうなつたのに過ぎないのだ。或る人が部屋の中を照らさうとして電燈を買つて來た時、路上の人がそれを奪つて往來安全の街燈に用ひて更に便利を得たとしても、電燈を買つた人はそれを自分の功績とすることは出來ない。その「することは出來ない」といふ覺悟を以て自分の態度

にしたいものだと僕は思ふのだ。こゝが客觀的に物を見る人(片上氏の如きはその一人だと思ふ)と、前提しておいたやうに、僕自身の問題として物を見ようとする人との相違である。こゝに來ると議論ではない、氣持だ。兄はこの氣持を推察してくれることが出來るとおもふ。こゝまでいふと「有島氏が階級爭鬪を是認し、新興階級を尊重し、自ら『無緣の衆生』と稱し、或は『新興階級者に……ならして貰はうとも思はない』といつたりする……女性的な厭味」と堺氏の云つた言葉を僕自身としては返上したくなる。

次ぎに堺氏が「ルソーとレーニン」及び「勞働者と知識階級」と題した二節の論旨を讀むと、正直の所、僕は自分の中分が奇矯に過ぎてゐたのを感ずる。

然しながら僕はもう一度自分自身の心持を考へて見たい。僕が卽今あらん限りの物を抛(なげう)つて、無一文の無産者たる境遇に身を置いたとしても、なほ僕には非常に有利な環境のもとに永年かゝつて植ゑ込まれた知識と思想とがある。外見はいかにも無一文の無産者であらうけれども、僕の內部には現在の生活手段として頗る都合のよい武器が潜んでゐる。これは僕が失はうとしても到底失ふことの出來ないものだ。かゝる優越的な賴みを持つてゐながら、僕は果して內外共に無產に等しい第四階級の多分の人々の感情にまでは入りこむことが出來るだらうか。それを實感的にひし〳〵と誤りなく感ずることが出來るだらうか。而して私の思ふ所によれば、生命ある思想若しくは知識はその根を感情にまでおろしてゐなければならない。科學のやうな極く客觀的に見える知識でさへが、それを組み上げた學者の感情によつて多少なり影響されてゐるのを見ることがあるではないか。況んやそれが人事に密接な關係を有つ思想知識になつて來ると、なほのことであるといはなければならない。この事實が肯定されるなら、私がクロポトキンやレーニンやについて云つたことは、奇矯に過ぎた云ひ分を除去して考へるならば、當然また肯定さるべきものであらねばならない。是等の偉大な學者や實際運動家は、その稀有な想像力

と統合力とを以て、資本主義生活の經緯の那邊にあるかを、力強く推定した點に於ては、實に驚嘆に堪へないものがある。然しながら彼等の育ち上つた環境は明かに第四階級のそれではない。ブルジョアの勢が失墜して、第四階級者が人間生活の責任者として自覺して來た場合に、クロポトキン、マルクス、レーニン等の思想が、その自覺の發展に對して決して障碍にならないばかりでなく、唯一の指南車であり得ると誰がいひ切ることが出來るか。今は所有者階級が倒れようとしつゝある時代である。第四階級の人々は文化的に或る程度までブルジョアジーに妥協し、その妥協の收穫物を武器としてブルジョアジーに當つてゐる時である。僕の言葉でいふならば第四階級と現在の支配階級との私生子が、一方の親を倒さうとしてゐる時代である。而して一方の親が倒された時には、第四階級といふ他方の親は、血統の正しからぬ子としてその私生兒を倒すであらう。その時になつて文化ははじめて眞に更新されるのだ。兩階級の私生兒が逸早く眞の第四階級によつて倒されるためには、即ち眞の無階級の世界が闢かれるためには、私生兒の數及び實質が支配階級といふ親を倒すに必要なだけを限度としなければならない。若しその數なり實質なりが裕かに過ぎたならば、こゝに再び新たな容易ならざる階級爭鬪が牽き起される憂が十分に生じて來る。何故ならば私生兒の數が多きに過ぎたならば、こゝにこれを代表する生活と思想とが生れ出て、第四階級なる生みの親に對して反駁の勢ひを示すであらうから。

而して實際私生兒の希望者は續々として現はれ出はじめた。第四階級者の自覺が高まるに從つてこの傾向は益々增大するだらう。今の所ではまだ〳〵供給が需要に充たない恨みがある。然しながら同時に一面には勞働運動を純粹に勞働者の生活と感情とに基く純一なものにしようとする氣勢が揚りつゝあるのも亦疑ふべからざる事實である。人は或はいふかも知れない。その氣勢とても多少の程度に於ける私生兒等がより濃厚な支配階級の血を交へた私生兒に對する反抗の氣勢に過ぎないのだと。それは恐らくはさうだらう。それにしてもより稀薄に支

配階級の血を傳へた私生兒中にかゝる氣勢が見えはじめたことは、大勢の赴くところを豫想せしめるではないか。卽ち私生兒の供給が稍〻邪魔になりかゝりつゝあるのを語つてゐるのではないか。この實狀を眼前にしながら、クロポトキン、マルクス、レーニン等の思想が、第四階級の自覺の發展に對して決して障礙にならないばかりでなく、唯一の指南車であり得ると誰が言ひ切ることが出來るだらう。だから私は第四階級の思想が「未熟の中にクロポトキンによつて發揮せられたとすれば、それは却つて惡い結果であるかも知れない」といつたのだつた。而して「クロポトキン、マルクス達の主な功績は何處にあるかといへば……第四階級以外の階級者に對して、或る觀念と覺悟とを與へた點にある……資本王國の大學でも卒業した階級の人々が翫味して自分達の立場に對して觀念の眼を閉ぢる爲めであるといふ點に於て最も若しいものだ」といつたのだ。

そこで私生兒志願者が續々と輩出しさうな今後の形勢に鑑みて、僕のやうにとても碌な私生兒にはなれさうもないものは、先づ觀念の眼を閉ぢて、私の屬するブルジョアの人々にもいゝ加減觀念の眼を閉ぢたらどうだと訴へようといふのだ。絕望の宣言と堺氏がいつたのはその點に於て中つてゐる。兄は堺氏の考へに對する僕の考へを如何思ふだらう。

この手紙も今までに旣に長くなり過ぎたやうだ。然しもう少し我慢してくれ給へ。今度は片上氏の考へについてだ。「いかに『ブルジョアジーの生活に浸潤し切つた人間である』にしても、そのために心の髓まで硬化してゐない限り、狐の如き怜悧な本能で自分を救はうとすることにのみ急でないかぎり、自分の心の興奮をまで、一定の埒内に愼ませて置けるものであらうか。……この邊の有島氏の考へかたはあまりに論理的、理智的であつて、それ等の考察を自己の情感の底に溫めてゐない憾みがある。少なくとも、進んで新生活に參加する力なしとて、退いて舊生活を守らうとする場合、新生活を否定しないものである限り、そこに自己の心情の矛盾に對して、平

かなり得ない心持ちの動くべきではないか」と片上氏は或る處で云つてゐる。兄よ、前に述べた所から兄も察するであらう如く、若し僕に狐のやうな怜悧な本能があつたならば、恐らく第四階級的作品を製造し、第四階級的論文を發表して、自ら第四階級の同情者、理解者を以て任じてゐたらうと思ふよ。相當に贅澤の出來る生活をして、かういふ態度に出るほど今の世に居心地のよい座席は一寸あるまいと思はれるから。自己の心情の矛盾に對して、平かなり得ない心持の動くべきではないかとの氏の詰問には一言もない。僕は氏が希望する程にさうした心持を動かしてはゐなかつたやうだ。こゝで僕は氏に「己れは敢へて舊生活を守りながら、進んで新生活の思想に參加せんとする場合、新生活を否定しないものである限り、そこに自己の心情に對して、平かなり得ない心持の動くべきではないか」と尋ねて見たいとも思ふが、それは少し僭越過ぎることだらうか。

次に氏は社會主義的思想が第四階級から生れたものゝみでないことを云つてゐるが、今までに出た社會主義思想家と第四階級との關係は僕が前述した通りだから、重複を厭ふことにする。唯一言いつておきたいのは僕達は第四階級といふと素朴的に一つの同質な集團だと極める傾向があるが、これは餘りに素朴過ぎると思ふ。ブルジョア階級と擬稱せられる集團の中にも、よく檢察して見るとブルジョア風のプロレタリアもゐれば、プロレタリア風のブルジョアもゐるといふ樣に、第四階級も決して全部同質なものでないと僕は信ずるのだ。第四階級をいふならば、ブルジョアジーとの私生兒でない第四階級に重心をおいて考へなければ間違ふと僕は考へるものだ。而して在來の社會主義的思想は、私生兒的第四階級と主に交渉を持つもので、純粹の第四階級に取つては、或は邪魔になる者ではないかと考へ得るといふことを附言しておく。そんな區別をするのは取越し苦勞だ。現在の問題だけを(既に起りかゝりつゝある將來の事實などは度外視して)考へてゐれば、それでいゝのだといはれゝば、僕はさういつた人と、考への基礎になる氣持が違ふから仕方がないと答へる外はない。

それから露西亞に於けるプロレタリアの藝術に關する考察が擧げてあるが、これは格別僕の「宣言一つ」と直接關係のあるものではない。これは氏の露西亞文學に對する博識を裏書きするだけのものだ。僕が「大觀」の一月號に書いた表現主義の藝術に對する感想の方が暗示の點からいふと、或は少し立ち勝つてゐはしないかと思つてゐる。

兎に角片上氏の論文も親切なものだと思つてその時は讀んだが、それについて何か書いて見ようとすると、僕のいはんとする所は案外少ない。尤も表題が「階級藝術の問題」といふので、强ち僕を敎へようとする目的からのみ書かれたものでないからであらう。これを要するに氏の僕に云はんとする所は、第四階級者でなくとも、その階級に同情と理解さへあれば、何等かの意味に於て貢獻が出來るであらうに、それを拒む態度を示すのは、臆病な、安全を庶幾する心がけを暴露するものだといふことに歸着する樣だ。僕は臆病でもある。安全も庶幾してゐる。然し僕自身としては持つて生れた奇妙な潔癖がそれをさせてゐるのだと思ふ。僕は第四階級が階級一掃の仕事の爲めに立ちつゝあるのに深い同情を持たないではゐられない。その爲めには僕は成るべくその運動が純粋に行はれんことを希望する。その希望が僕を柄にもない處に出しやばらせるのを拒むのだ。露西亞でインテリゲンチヤが偉い働きをしたから、日本でもインテリゲンチヤが働くのに何が惡いなどの議論も聞くが、そんな事をいふ人があつたら現在の日本では大抵は自ら恥づべきだと僕は思ふのだ。露西亞の人達は凡ての所有を賭し、生命を賭して働いたのださうだ。日本にもさういふ人がゐたら、その人のみがインテリゲンチヤの貢獻のいかによきかを說くがいゝ。それ程の覺悟なしに口の先きだけで物をいつてゐる位なら、おとなしく私はブルジョアの氣分が拔けないから、ブルジョアに對して自分の仕事をしますといつてゐるのが望ましい事に私には見えるのだ。近頃少し或る事に感じさせられたからついあんな宣言をする氣になつたのだ。

三上氏が、僕のいつたやうなことをいふ以上は、先づ自分の生活を綺麗に始末してからいふべきだと說いたのは御尤もで、僕は三上氏の問に對してへこたれざるを得ない。同時に三上氏もその詰問を他人に對して與へた以上は自分の立場についても立つべき所を求めなければならぬともおもふ。既に求め終つてゐるのなら幸甚である。

Ａ兄

くたびれたらうな。もう僕も饒舌はいゝ加減にする。兄は僕が創作が出來ないのをどうしたといふが、あの「宣言一つ」一つを吐き出すまでにもいゝ加減胸がつかへてゐたので出來なかつたのだ。僕の生活にも春が來たら或は何か出來るかも知れない。反對に出來ないかも知れない。春が來たら花位は咲きさうなものだとは思つてゐるが。

（一九二二年三月、「我等」所載）

謠曲「綾鼓」

最近松本長氏の演じた「綾鼓」といふ能を見て非常に面白いと思ひました。それは九州の或る御所にゐた女御が大變美人で、庭掃除をする老人が一と目見るなり懸想してしまふのです。すると、この事が宮中に聞こえて長夜の徒然話になり、只單に庭番をからかつてやらうといふ戯れからしたことか、それとも身分不相應な望みは遂せられないものだといふことを教へるつもりか、それはよくわかりませんけれども近侍の人達が老いたる庭番にかう傳へるのです。それは御所の池の畔の桂に鼓をかけておくから夜來てこれを叩け、その音が聞こえれば女御が姿を見せて下さると。庭番はそれをまことに思ひこみ喜び勇んで、早速その夜池へ來て桂にかゝつてゐた鼓を打つのです。手で一つ叩いてぢつと耳を澄して聽き入るところは中々いゝものでした。ところがいくら叩いても音がしないのです。若しや年老つて耳が聞こえなくなつたせゐではあるまいかとも思ふのですが、しかしそれにしては池の波の音や窓打つ雨の音も聞こえるのはどうしたのだらう。氣がついて見ると、鼓には革の代りに綾が張つてあるのです。そこで庭番はさん〴〵惱んだ果、女御を恨みおのれの老いを悲しみ、因果の苦しさを歎いて、とう〳〵池に身を投げて死んでしまひます。後段になると、庭掃きの老人が死んだのが哀れだから池の所まで出て御覽なさいといふ臣下の奏請に女御が始めて座を立つて前正面に飾つてある桂のつくりものゝ近くに來て鼓の音の聞こえる由を謠ひ、「あの鼓の音は何か」と訊ねます。すると近侍の臣が「何の音もしない、きつと空耳だらう、お氣が狂つてゞもおいでゞすか」と言ひます。女御は「老人に夜來て鼓を叩けと言つた時から思へば私はもう氣が狂つてゐるのです」と云ふのです。女御は氣が狂つてゐるのです。やがて女御の幻覺の中に庭番が現は

れて來て、女御を桂の所まで連れて行き、「鳴るものか鳴らぬものか、この鼓を打て」と女御を惱ますのです。而して遂に恨みの限りを言ひ盡して又池の中に姿を消します。

これは謠曲には珍らしい、中々深刻なものです。これを材料にして野上彌生子氏が戲曲を書かれたやうでした。私はまだ讀まずにゐます。實は私も以前から是非書かうと思つてゐたのです。二幕にして、前の場面では庭番の狂ふ所を、後の場面では女御の惱む所を主にしたいと思ひました。しかし今度能を見て、後シテで女御が凝乎と立つたなり一と口も言はず一所を凝視めてゐる工夫がたまらなくよく、凡ての動作に勝つて女御の氣持を遺憾なく現はしてゐたので、女御をして狂氣じみた所作をさせたのでは全體を壞してしまひますから改めて考へ直さなければならないと思ひました。あの女御の取扱ひ方などは能樂の勝れた特長でせうか。

能といふものをあまり人が研究しないやうですが、この中には大變洗練された藝術が潜んでゐると思ひます。舞臺藝術に關係のある人達は眞面目に研究して十分酬いられるものだと信じます。

（一九二二年三月、「新潮」所載）

主義はない

主義がないといつて、主義を持つことを否定すれば、それは主義を持つまいといふ主義を主張してゐるのではないかと人はいふだらう。論理學的にこの結論は正しい。但しこの非難は論理學的にどれ程正しくつても私の抱いてゐる心持を些かも動かすことは出來ない。この場合、論理學と私の心持とどつちが間違つてゐるかといへば、私に云はせれば勿論前者た。論理學があつて人の心持が出來たのではない。人の心持があつて論理學が生れ出たのだ。

私は生長しつゝある人には主義といふべきものはないと信じてゐる。何故ならその人の生命の內容は絕えず變化發達してゐるが故に、自分でこれが自分の主義だと定めたその者に對しても、その人の働きだけ力は絕えず變化發達してゐるに相違ないからだ。第三者からその人の主義と稱するものを見たら、變つてゐるやうには見えないかも知れないが、或る主義を主張するその人自身から見るならば、その人が變化發達してゐる限り、その主義なるものゝ內容は絕えず變化しつゝあるに相違ないのだ。それならむづかしく主義だなどゝいふ必要は何處の隅にもないではないか。

主義といふものは毎時でもおせつかいな第三者によつて固定される。而して固定した主義ほど世に無用なものはない。何主義かに主義といつて固定した主義を主張する世界が無くなつたらどんなに居心地のいゝ世界が出來上がるだらう。草木の育つのに主義はない。水の流れるのに主義はない。

（一九二二年三月、「野依雜誌」所載）

私の態度

「有島武郎氏と二人の青年」といふ前々號の記事を讀んで、訂正といふ程のことでもないけれども　言ひたいと思ひます。

あの記事が出てから第二番目の事件の當事者なる人から手紙をうけました。その手紙にはその人の話した通りが書かれてゐずに、多少の想像や蛇足が加へられてゐるので、私が不快に思ひはしなかつたかといふ意味のことが書いてありました。それに對して私は「ジャーナリズムには仕方なくあきらめをつけてゐますから屁とも思つてゐません」と、簡單に端書で返事をして置きました。

ジャーナリズムならずとも噂から噂にとんでゆくと一つの事件が思ひもよらぬ形になるものです、私のことについてのこの記事にも大分その趣があります。

第一、標題の「隱れたる文壇の佳話」などは全くあてはまらない言ひぐさです。第一の事件の時に成る程あの記事にあるやうに、その當時の私はしかつめらしい人道主義者で、何でも自分の心持を押しつけないではゐられない風がありましたけれども、藝妓に面會を求めて「よき道を歩んで下さい、一日も早く善に向つて下さい」云云といふやうなことだけは流石に言ひませんでした。懷中から一封の金をとり出したなども譃です。その學生に對しては周圍の壓迫がなかなか强かつたためにこちらまでが、多少反抗的に寛大になつた氣味もありますが、然しその寛大のうしろにはもつと卑劣な根性がひそんでゐたのを告白せねばならぬと思ひます。それは心の不安定さで、自分自身も何時その學生のしたやうなことをしでかさないとも限らないと思つたのに大きな原因がありま

す。それでもその時には職業が職業であり、年齢が年齢であつたためか、大分意氣捲いたやうな氣分でゐたのはいなみ得ません。

第二の場合では、前の青年とちがつて、第二の青年は大分年長でもあり、いろ〳〵な境遇をくゞりぬけた巧者でもあり、ひとりでしやべりまくる雄辯家であつたので、壓迫を感じたのは却つて此方の方でした。その頃私は大阪毎日に「生れ出づる惱み」を書いてゐましたが、どういふものか分らない發熱があるので困つてゐると、その青年はよくやつて來て、議論を吹きかけたものです。或る晩などは頭痛鉢卷をして一回分の原稿を漸く書き上げてしまつた所にやつて來て、例の議論を吹きかけるので、私もつい自分の健康などを忘れて了ひ床の上に起きかへつて、十一時頃迄どなり合ひをしました。それでどつと熱を出して入院しなければならなくなつたのです。その位その青年は野方圖に壓迫力の强い青年でした。それが到頭あすこに書いてあるやうなことをしでかしたゞです。私はそれに對して默つてゐました。何だか弟に對してひどくすまないやうに思ひましたが、その青年に對しては、私として一言も言ふべき氣持が動かなかつたのです。その氣持の中には前の場合に述べたやうな氣持が動いてゐたのも勿論ですが、その青年が餘りに自分について確信がありすぎるので、(尤もその人は、始終自分は弱いものであるとは言ひつゞけてゐましたが、然しその弱いといふ言葉の背後には確かに自尊的な强味を見せてゐると私は感じたのです)此方からものを言ひかける心が動かうとはしなかつたのです。唯私はその青年に弟にだけは何等かの形でものを言つて貰ひたいと思つてゐましたが、遂にそのことはなくて終りました。その後程經てその青年から手紙をうけたことがあります。その時に私はかなりひどくその青年に紙の上でものを言ひました。

前の場合には全くその人を投げだして見てゐることができず、後の場合にはその人に對してどこまでも突きて

んで世話をやくこともできず、どちらの場合にもいはゞ中途半端な態度をとつてゐる私です。とても文壇の佳話などゝ銘うたれる事件でもなければ、首尾でもありません。そこから何等の倫理も哲學も生れさうな事件でもありません。それだけをこの場合言つておきたいのです。

（一九二二年四月、「文章俱樂部」所載）

小兒の寢顏

小兒の寢顏は無邪氣で可憐だと人はいふ。

私もさう思つてそれに眺め入つたことがあつた。然し今はさうは思はない。夜おそくなど、獨り眼をさまして、熟睡した小兒を見守つてゐると、見守るに從つて私の心は淋しくされる。彼の頰は健康と血氣とを以て赤い。彼の皮膚は苦慮によつて刻まれたる一條の皺をも持つてゐない。然しその何事をも知らぬげな尊い顏全體の後に、恐ろしい眞暗らな運命が、それが冷やかに、底氣味惡く覗いてゐるではないか。

一人の小兒、彼は如何に生き、如何に死んで行くであらうか。どんな人間もそれを知ることは出來ない。しかも人間は互ひに相憎むことによつて、知らず〳〵、一人の小兒のために住みにくい世界を準備しつゝあるのだ。

不可知の運命、さういふ重荷を小兒は既に重く、そのいたいけな肩に背負つてゐる。それだけで十分ではないか。その上に人間は、互ひの憎惡によつて、更に堪ふべからざる重荷を、かの一人の小兒に投げかけねばならぬか。

（一九二二年四月、「文化生活」所載）

想片

私が改造の正月號に「宣言一つ」を書いてから、諸家が盛んにあの問題について論議した。それは恐らくあの問題が論議せらるべく空中に漂つてゐたのだらう。而して私の短文が僅かにその口火をなしたのに過ぎない。それ故始めの間の論駁には多くの私の言説の不備な點を指摘する批評家が多いやうだつたが、この頃あれを機縁にして自己の見地を發表する論者が多くなつて來た。それは非常によいことだと思ふ。何故ならばあの問題はもつと徹底的に講究されなければならないものであつて、他人の言説のあら探しで終るべき筈のものではないからである。

本當をいふと、私は諸家の批評に對して一々答辯をすべきであるかも知れない。然し私は議論といふものは到底議論に終り易くつて互ひの論點が益々主要な處から外れて行くのを、少しばかりの議論の末に痛切に感じたから、私は單に自分の云ひ足らなかつた所を補足するのに止めておかうと思ふ。而して出來るなら、諸家にも、單なる私の言説に對する批評でなしに――勿論批評にはいつでも批評家自身の立場が多少の程度に於て現はれ出るものではあるが――この問題に對する自分自身の正面からの立場を見せていたゞきたいと思ふ。それを知りたいと望む多數の人の一人として私もそれから多分の示唆を受け得るであらうから。

從來の言説に於ては私の個性の内的衝動に殆んど凡ての重點をおいて物をいつてゐた。各自が自己をこの上なく愛し、それを眞の自由と尊貴とに導き行くべき道によつて、突き進んで行く外に、人間の正しい生活といふものはあり得ないと私自身を發表して來た。今でも私はこの立場を聊かも枉げてゐるものではない。人間には誰にも

この本能が大事に心の中に隱されてゐると私は信じてゐる。この本能が環境の不調和によつて伸び切らない時、即ちこの本能の欲求が物質的換算法によつて取扱はれようとする時、そこに所謂社會問題なるものが生じて來るのだ。「共產黨宣言」は暗默の中にこの氣持を十分に表現してゐるやうに見える。マルクスは唯物史觀に立脚したと稱せられてゐるけれども、若し私の理解が誤つてゐなかつたならば、その唯物史觀の背後には、力强い精神的要求が潜んでゐたやうに見える。彼はその宣言の中に人々間の精神交涉（それを彼はやさしいなつかしさを以つて望見してゐる）を根柢的に打ち崩したものは實にブルジョア文化を釀成した資本主義の經濟生活だと斷言してゐる。而してかゝる經濟生活を打却することによつてのみ、正しい文化即ち人間の交涉が精神的に成り立ち得る世界を成就するだらうことを豫想してゐるやうに見える。結局彼は人間の精神的要求が完全し滿足される環境を、物質價値の內容、配當、及び使用の更正によつて準備し得ると固く信じてゐた人であつて、精神的生活は唯物的變化の所產であるに過ぎないから、價値的に見て餘り重きをおくべき性質のものではないと觀じてゐたとは考へることが出來ない。一つの種子の生命は土壤と肥料其の他唯物的の援助がなければ、一つの植物に成育することが出來ないけれども、さうだからといつて、その種子の生命は、それが置かれた環境より價値的に見て劣つたものだといふことが出來ないのと同じ事だ。

然るに空想的理想主義者は、誤つて如何なる境界におかれても、人間の精神的欲求はそれ自身に於て滿たされ得ると考へる傾きがある。それ故にその人達は現在の環境が過去にどう結び付けられてゐ、未來にどう繫がれようとも、それを聊かも念とはしない。これは一見極めて英雄的な態度のやうに見える。然しながら本當に考へて見ると、その人の生活に十分の醇化を經てゐないで、過去から注ぎ入れられた生命力に漫然と依賴してゐるのが發見されるだらう。彼が現在に本當に立ち上つて、その生命に充實感を得ようとするならば、物的環境はこばみ

得ざる內容となつてその人の生命の中に攝受されて來なければならぬ。その時その人に取つて物的環境は單なる物ではなく、實に生命の一要素である。物的環境が正しく調節されることは、生命が正しく生長することである。唯物史觀は單なる精神外の一現象ではなくして、實に生命觀そのものである。種子を取りまいてその生長にかゝはる凡ての物質は、種子に取つて異邦物ではなく、種子そのものゝ一部分となつて來るのと同樣であらう。人は大地を踏むことに於て生命に觸れてゐるのだ。日光に浴してゐることに於て精神に接してゐるのだ。

それ故に大地を生命として踏むことが妨げられ、日光を精神として浴びることが出來なければ、それはその人の生命のゆゝしい退縮である。マルクスはその生命觀に於て、物心の區別を知らない程に全的要求を持つた人であつたと云ふことが出來ると私は思ふ。私はマルクスの唯物史觀をかくの如く解するものである。

所が資本主義の經濟生活は、漸次に種子をその土壤から切り放すやうな傾向を馴致した。マルクスがその「宣言」にいつてゐるやうに、「從來現存してゐたところの人々間の美しい精神的交渉は、漸次に廢棄されて、精神を除外した單なる物的交渉によつておきかへられるに至つた。」卽ち物心といふ二要素が强ひて生活の中に建立されて、凡ての生活が物によつてのみ評定されるに至つた。その原因は前にもいつたやうに物的價値の內容、配當、使用が正しからぬ組み立のもとに置かれるやうになつたからである。その結果として起つて來た文化なるものは、あるべき季節に咲き出ない花のやうなものであるから、まことの美しさを持たず、結實ののぞみのないものになつてしまつた。人々は今日々々の生活に脅かされねばならなくなつた。

種子は動くことすら出來ない。然しながら人は動くことゝ、動くべく意志することが出來る。こゝに於てマルクスは「萬國の勞働者よ、合同せよ」といつた。唯物史觀に立脚するマルクスは、そのまゝに放置しておいても、資本主義的經濟生活は自分で醸した內分泌の毒素によつて、早晩崩壞すべきを豫定してゐたにしても、その崩壞

作用を或る階級の自覺的な努力によつて早めようとした事は爭はれない（一面に、それを大きく見て、かゝる努力そのものが既に崩壞作用の一現象といふことが出來るにしても）。而して彼はその生活革命の後に何を期待したか。確かにそれは人間の文化の再建である。人々間の精神的交渉の復活である。何故なら、彼は精神生活が、物的環境の變化の後に更生するのを主張する人であるから。結局唯物史觀の源頭たるマルクス自身の始めの要求にして最後の期待は、唯物の桎梏から人間性への解放であることを知るに難くないであらう。

マルクスの主張が詮じつめるとこゝにありとすれば、私が彼のこの點の主張に同意するのは不思議のないことであつて、私の自己衝動の考へ方と何等矛盾するものではない。生活から環境に働きかけて行く場合、凡ての人は意識的であると、無意識的であるとを問はなかつたら、悉くこの衝動によつて動かされてゐると感ずるものである。

私は嘗て、この衝動の醇化された表現が藝術だといつた。この立場からいふならば、凡ての人はこの衝動を持つてゐるが故にブルジョアジーとかプロレタリアートとかを超越したところに藝術は存在すべきである。けれども私は衝動がそのまゝ藝術の萠芽であるといつたことはない。その衝動の醇化が實現された場合のみが藝術の萠芽となり得るのだ。然らば現在に於て如何すればその衝動は醇化され得るであらうか。知識階級の人が長く養はれたブルジョア文化教養を以て、その境界に到達することが出來るであらうか。これを私は深く疑問とするのである。單なる理知の問題として考へずに、感情にまで潛り入つて、從來の文化的教養を受け、兎にも角にもそれを受けるだけの社會的境遇に育つて來たものが、果して本當に醇化された衝動にたやすく達することが出來るものであらうか。それを私は疑ふものである。私は自分自身の內部生活を反省して見るごとにこの感を深くするのを告白せざるを得ない。

かゝる場合私の取り得る立場は二つよりない。一つは第三階級に踏みとゞまつて、その生活者たるか、一つは第四階級に投じて融け込まうと勉めるか。衝動の醇化といふ事が不可能であるを以て、この二つに一つのいづれかを選ぶ外はない。私はブルジョア階級の崩壞を信ずるもので、それが第四階級に融合されて無階級の社會（經濟的）の現出されるであらうことを考へるものであるけれども、而してさういふ立場にあるものに取つては、第四階級者として立つことが極めて合理的で且つ都合のよいことではあらうけれども、私としては、それが到底不可能事であるのを感ずるのだ。或る種の人々は割合に簡單にさうなり切つたと信じてゐるやうに見える。而して實際なり切つてゐる人もあるのかも知れない。然し私は決してそれが出來ないのを私自身がよく知つてゐる。これは理窟の問題ではなく實際さうであるのだから仕方ない。

然らば第三階級に踏みとゞまつてゐることに疚しさを感じないか。感ずるにしても感じないにしてもさうであるのだから、私には疚しさとすらいふことは出來ない。或る時まではそれに疚しさを感ずるやうに思つて多少苦しんだことはある。然しそれは一個の自己陶醉、自己慰藉に過ぎないことを知つた。

但し第三階級に踏みとゞまらざるを得ないにしても、そこには自ら又二つの態度が考へられる。踏みとゞまる以上は、極力その階級を擁護する爲めに力を盡すか、又はさうはしないかといふそれである。私は後者を選ばねばならないものだ。何故といふなら、私は自分が屬するところの階級の可能性を信ずることが出來ないからである。私は自己の階級に對して自ら挽歌を歌ふものでしかあり得ない。このことについては「我等」の三月號にのせた「雜信一束」（この全集には「片信」と改題）にもいつてあるので、こゝには多言を費やすことを避けよう。

私の目前の落ち着きどころは畢竟これに過ぎない。こゝに至つて私は反省して見る。私のこの態度は、全く第三

階級に寄與するところがないだらうか。私が何等かの意味で第三階級の崩壞を助けてゐるとすれば、それは取りもなほさず、第四階級に何者をか與へてゐるのではないかと。

こゝに來て私はホヰットマンの言葉を思ひ出す。彼が詩人としての自覺を得たのは、エマソンの著書を讀んだのが與つて力があると彼自身でいつてゐる。同時に彼は、「私はエマソンを讀んで、詩人になつたのではない。私は始めから詩人だつた。私は始めから煮えてゐたが、エマソンによつて沸きこぼれたまでの話だ」といつてゐる。私はこのホヰットマンの言葉を驕慢な言葉とは思はない。この時エマソンはホヰットマンに向つて恩惠の主たることを自負し得るものだらうか。ホヰットマンに詩人がゐなかつたならば、百のエマソンがあつたとしても、一人のホヰットマンを創り上げることは出來なかつたのだ。ホヰットマンは單に自分の內部にある詩人の本能に從つてたま〳〵エマソンを自分の都合の爲めに使用したに過ぎないのだ。ホヰットマンは或はエマソンに感謝すべき何物をか持つことが出來るかも知れない。然しながらエマソンがホヰットマンに感謝を要求すべき何物かゞあらうとは私には考へられない。

第三階級にのみ主に役立つてゐた敎養の所產を、第四階級が採用しようとも破棄し了らうともそれは第四階級の任意である。それを第四階級者が取り上げたといつたところが、第四階級の賢さであるとはいへても、第三階級の功績とはいひ得ないではないか。この意味に於て私は第四階級に對して異邦人であると主張したのである。

明日になつて私のこの考へ、この感じは如何變つて行くか、それは自分でも知ることが出來ない。然しながら「宣言一つ」を書いて以來今日までに於ては、諸家の批判があつたにかゝはらず、他の見方に移ることが出來ないでゐる。私はこの心持を謙遜な心持だとも高慢な心持だとも思つてゐない。私には如何してもさうあらねばな

らぬ當然な心持に過ぎないと思つてゐる。
既にいゝ加減閑文字を羅列したことを恥ぢる。私は當分この問題に關しては物をいふまいと思つてゐる。

（一九二二年五月、「新潮」所載）

互ひの立場を認めよ

危險思想法案といふものが議會に提出され、會期の盡きた爲めに決議に至らないで、その變態として、緊急勅令として同樣の精神のものが現はれるといふ噂がある。

危險思想法案はその當時盛んに論議せられて、最早それに就いて更に物を言ふべき餘地はない。果してそれに代はるべき緊急勅令が公布せられるか否かは勿論分らない。私は又この雜誌がかゝる政治問題を論ずる資格を得てゐないと思ふから、その問題をこゝでは論じない積りである。然しながら此の如き運動が爲政者の間に行はれるに至つた、その心理的傾向に對して一言を費やして見たい。

爲政者はその國家の國是及び歷史に背く傾向を持つたものを取締るべき權能と義務とを有する如く信じてゐるやうに見える。假りにそれを當然なことゝして置かう。その爲めには外國が自國を何等かの手段に於て壓伏する思想の宣傳若しくは實行を敢へてし、自國民がそれに呼應した場合には、その國民を危險なものとして取締らなければならない。それが如何なる階級に屬するものであらうと差別を設けるべきではない筈だ。

例へば或る外國に社會革命が起つて、その國の國是が自國のそれと反する場合、その國から自國民が精神的にせよ、物質的にせよ、或る意味の補助を受けて、活動するのを發見した場合、それを嚴重に取締るのは爲政者に取つて義務であり必要であるかも知れない。然しながら國是といふものゝ中には、云ふまでもなくその國の人民全般の福祉厚生に就いての十分な顧慮が含まれてゐなければならない。若しこれが不幸にして脅かされるやうなことがあつたならば、爲政者は卽座にその取締りについて及ぶべきだけの努力を拂ふのが當然であらう。

然るに現代いづれの國に於ても、資本を擁してゐる生産者と、海外貿易者とは如何なることをなしてゐるか。彼等は遠い過去の時代から外國と綿密な連絡を造つてゐる。しかもその連絡は爲政者の理解と保護との下にさへそれを造つてゐる。此の如くして彼等は諸外國と有無を相通じ、利潤の壟斷をなしてゐる。而して國民の大多數なる勞働に據る生産者は、その頤使のもとに營々として働きながら、常に〳〵生活の不安定に脅かされてゐる。資本家は國家の隆盛といふ美名の下に、自己の利益を增進する爲めには國民全般の福祉厚生を犧牲に供しても、あらゆる手段方法を講じて少しもそれに疚しさを感じてはゐないやうに見える。或る物質の價格が自國に於てよりも外國に於て高い場合には、自國への供給をおろそかにしても、それを外國に輸出して憚らない。自國民が如何に要求してゐる資料であつても、生産過剩によつて價格の低落する恐れがあれば、すぐその生産額をさしひかへる。外國の生産品にして自國民が使用するに便利なものがどれ程あつても、その需要が切であればある程、貿易商は法外な利益を自己に收めてゞなければ、それを自國民の手には渡さない。その爲めに國民全般がどれ程の不便と損失とを被らうと、それは彼等の多く關知する所ではない。唯彼等に取つて最大の打擊は、自國民が疲弊し切つて、購買力を全然失ふことだけである。これを防ぐためには、生殺しといふ程度に於て、國民に些かの餘裕を許しておくのだ。加之、資本を擁してゐる生産者は直接間接に政府と結託してゐる。といふよりも政府といふ機關は、その勢力範圍に屬する人々によつて運轉されてゐる。それ故に彼等が諸外國と氣脈を通ぜんとする時には、常に強大な權力の後楯を借りてそれをなすのである。國民一般が如何に不平の聲を擧げようとしても、手もなくそれは爲政者の力によつて壓伏させられてしまふ。かくて國民は、自分が働いたゞけの勞力の報酬では、容易に追ひつくことの出來ない高價な物質によつて、常に脅かしを受けながら生活せねばならぬのだ。若し國家を以てその國是を遂行するものとし、その國是の中には如何なる場合にも、國民一般の福祉厚生が重く考慮され

ねばならぬとするならば、資本を擁する生產者と海外貿易商とのなす所は、明かに、しかもそれは永い間、放任されてゐたばかりでなく、或る場合には奬勵さへされたのだ。

此の如き生產者や海外貿易商のなす所は、外國の或る者共と結託して惡事を遂行する點に於て、明かなる無政府的國賊である。しかも各國の政府は、國內に澤山の正貨が流入するから國家の利益を計るものだとの申譯の下に、彼等に對して制裁を加へるやうなことをしたことがない。

所が國民の或る階級のものが自分達の自由と生活の安定の爲めに、外國から思想若しくは物資を取り入れようとすると、その政府は狂暴極まる制裁手段を講じて、その壓伏を是れ事とする。その階級のものが謂はゞその政府の繼子であつて、その健全な生長はその政府が擁するところの階級者に取つて危險であるに相違ないから、それを壓伏しようとするのは理の當然であつて、怪しむには足らないけれども、國民全體の福祉厚生に取つて危險な思想や物資を取り入れてゐるものが、その外にもあるといふことを、私達がはつきり知つておくのは大切なことだ。この雜誌の讀者の中にはやゝもするとこの點を見落してゐる人があるのではないかと思ふ。若しこれを見落してゐたら危險思想は露西亞からばかり來ると思ふやうな結果になるかも知れない。それは明かにさうではない。危險思想と國民の生活を脅かす物資とはとうの昔から日本には公々然として輸入されてゐたのだ。そのお蔭で極めて少數な國民の一部分だけが、國民全體の步調とはまるつきりかけ離れた利益を被つて、國民の思想と生活とを險惡ならしめてゐるのだ。しかも爲政者はこの叛逆者に對して極めて寬大であつた。政府といふものを神の代辯者のやうに思ひ慣れてゐる國民は、爲政者が奬勵さへするものを惡いとは思つてゐなかつたのだ。

私達は危險思想とその宣傳がどんなものを包むべきであるかを、もつと合理的に考へて見なければなるまい。これは爲政者の判斷にばかり任せて安心してゐられる事柄ではない。

政府は或る種の思想と運動とを危險なものと認めるなら認めても差支しへない。然しながら國民全般は政府が危險と認めないのみならず、保護をさへ必要とする思想と運動とを危險と認めねばならぬやうに餘儀なくされつつある。爲政者が自分の立場を認めさせようとするならば、國民全般も亦自分の立場を認めさせなければならない。若し爲政者が片手落ちな態度を以て、權力を以て自分の立場だけを認めさせ他の立場を排除しようとするならば、結局爲政者自身が危險思想の涵養とその宣傳とに最も熱心なものだとして國民大多數の彈劾を蒙る日の來ることを覺悟せねばならぬ。

（一九二二年五月、「文化生活」所載）

子供の世界

私の父が亡くなる少し前に（お前これから重要な問題となるものはどんな問題だと思ふ？）と一種の眞面目さを以て私に尋ねたことがある。それは父にとつて或る種の謎であつた私の將來を、私の返答によつて察しようとしたものであつたらしい。その時私は父に答へて、勞働問題と婦人問題と小兒問題とが、最も重要な問題になるであらうと答へたのを記憶する。

勞働問題と婦人問題とは、前から既に問題となりつゝあつたけれども、小兒の問題はまだほんたうに問題として論議せられてゐないかに考へられる。しかしながら、この問題は前の二問題と同じ程の重さを以て考へられねばならぬ問題だと私は考へる。

私たちは生長するに從つて、子供の心から次第に遠ざかつてゆく。これは止むを得ないことである、しかしながら、今迄この止むを得ないといふことにすら、注意を拂はないで、そのまゝの心で子供に臨んでゐた。子供の世界が獨立した一つの世界であるとして考へられずに大人の世界の極く小さな一部分として考へられてゐたが故に、我々が子供の世界の處理をする場合にも、全く大人の立場から天降り的に、その處理をしてゐたやうに見える。この誤つた方針が、子供の世界の隅々にまで行き渡つた。家庭の間に於ける親子の關係に於ても、學校に於ける師弟の關係に於ても、社會生活に於ける成員としての關係に於ても、この僻見は容赦なく採用された。すべてが大人の世界に都合がいゝ樣に仕向けられた。さうして子供たちはその異邦の中にあつて、不自然なぎごちない生長を遂げねばならなかつた。かくして子供は、自分より一代前の大人たちが抱いてゐる習慣や觀念や思想を、

そのまゝ鵜呑みにさせられた。かくの如き不自然な生活の結果が、どうなつたかといふことは、ちよつと目立つて表はれてはゐないやうにも見える。なぜならば、かくの如き子供虐待の歴史は、非常に長く續いたのであるから、人々はその結果に對して、殆んど無頓着になつてしまつてゐるのだ。

しかしながら、誰でも自分の幼年時代を回顧するならば、そこに生長してまでも、消えずに殘つてゐるさまざまな忌まはしい記憶をとり出すことが出來るだらう。若しあの時代にあゝいふ事がなかつたならば、現在の自分は現在のやうな自分ではなく、もつと自分であり得たかも知れないといふやうな記憶がよみがへつて來るだらう。

もとより、この地上生活は、大體に於て、大人殊に成人した男子によつて導かれてゐるものだから、他の世界の人々が或る程度まで、それに適應して行くのは止むを得ない事ではなる。しかしながら、從來の大人の專横は餘りに際限がなさすぎた。そのために、もつと姿を變へて進んで行くべきであつた人類の歷史は、思ひの外に停滯せねばならなかつた。一つの小さな例をとつて見ると、キリスト敎會の日曜學校の教育の如きがそれである。子供の心には大人が感ずるやうな禱りの氣分は、まだ生れてはゐない。然るに學校の敎師は、子供がそれを理解すると否とに拘はらず、外面的に禱りの形式を敎へ込む。子供は一種の苦痛を以て、機械的にそれに自分を適應させる。

しかも、敎師は大人の立場からのみ見て、かくすることが、子供を彼等の持つやうな信仰に導くべき一番の近道だと心得たが、しかしその結果は、子供の本然性を根柢的に覆へしてゐるのだ。ロバアト・インガソールといふ人が、日曜學校に行つてゐた時のことを回想して、每日曜日に彼は敎會の椅子に坐らされて、一時間餘りも敎師から、自分には理解し得ない事柄を聞かされるのだつたが、その間大人にふさはしい椅子に腰掛けて居らねばならなかつたので、兩足は宙に浮いたまゝになつてゐてその苦しさは一通りではなかつた。しかし神の惠みを說

きまくつてゐる教師の心には、子供のこの苦痛は、聊かも通じてゐるやうにも見えなかつた。その時、彼は沁々と、どういふ惡いことをしたお蔭で、日曜毎に自分はこんな苦しい苛責を受けねばならぬのかと情けなく思つた。彼のキリスト敎に對する反感は、實にこの日曜學校の椅子から始まつたといつてゐる。日曜學校の椅子――これは小さなことに過ぎない、しかしながら、そこには大人が子供の生活に對して、どれほど倨傲な態度をとつてゐるかを、明かに語るものがある。かくの如き事實は、家庭の生活の中にも、學校の敎育の間にも、日常見られるところのものではあるまいか。

子供は自らを訴へるために、大きな聲を用意してゐない。彼等は多くの場合に於て、大人に限りない信頼を捧げてゐる。然るに大人はその從順と無邪氣とを踏み躙らうとする。大人は抵抗力がないといふだけの理由で、勝手放題な仕向けを子供の世界に對して投げつける。かゝる暴虐はどうしても改められなければならない。大人は及ばずながらにも、子供の私語に同情ある耳を傾けなければならない。かくすることによつて、人間の生活には一轉機が劃せられるであらう。

私は、初めに、大人は小兒の心持から離れてしまふといつた。それはさうに違ひない。私たちは明かに子供と同じ考へ方感じ方をすることは出來ない。しかしながら、この事實を自覺すると否とは、子供の世界に臨む場合に於て、必ずや千里の差を生ずると信ずる。若し私たちがそれを自覺するならば、子供の世界に敎訓を與へることが出來ないとしても、自由を與へることが出來る、また子供の本然的な發育を保護することが出來ると思ふ。良心的に子供を取扱つた學校の敎師は、恐らく子供の世界の中に驚くべき不思議を見出すだらう。大人の僻見によつて、穢されない彼等の頭腦と感覺の中から、かつて發見されなかつたやうな幾多の思想や感情が湧き出るのに遭遇するだらう。從來の立場にある人は、かくの如き場合に何時でも、彼等自身の思想と感情とを以て、無理

強ひにそれを强制しようとする。このやうなことは許すべからざることだ。子供をして子供の求むるものを得せしめる、それはやがて大人の世界に或る新しいものを寄與するだらう。さうして、歴史は今まであつたよりも、もつと創造的な姿をとるに至るだらう。子供に子供自身の領土を許す上に、さま〲な方面から研究が遂げられねばならぬといふことは、私たちの眼の前に横たはる大きな事業の一つだと信ずる。

（一九二二年五月、「報知新聞」所載）

ホヰットマンに對する一英國婦人の批評

左に紹介するのは、アン・ギルクリスト夫人がホヰットマンの詩集を讀んで、一八六九年即ち詩人が五十歳の時に、感想としてウヰリアム・ロセッティに送つた書簡であります。ギルクリスト夫人はブレーク傳の著者なるアレキサンダア・ギルクリストの未亡人で、その時年齢が四十三年でありました。そしてホヰットマンを尊敬愛慕するの餘り、一時英國よりフィラデルフィヤに移住して來たことのある人であります。

この感想文は英國の或る雜誌に發表されたもので、詩人がこれを讀んで、女性の書いた自分に關する批評中最も高貴なものであり、また恐らく凡べての批評の中でも、最高位にある一つであらうと稱讃したものでありま す。今その中から大體を茲に紹介しませう。

……………………………………私は言葉といふものが、言葉でなくなり、電氣のやうな力強い流れに變り得るものだといふ事を、この詩集を讀んで初めて發見しました。一體、私は强健な人間ですが、この詩集中の或る詩は、讀み應へる力さへないと感じた位でした。例へば“Calamus“の中に含まれた種々の詩。例へば「別れの歌」「大海からの聲」「涙」等には、重々しい感情と緊張した心の働きとがあつて、私の情緒はそれに堪へ得られない心持がします。暫くは心が全く働かなくなるので、書物をそのまゝ目から遠ざけるのを餘儀なくされます。

また「自己の歌」その他そのタイプに屬する詩を讀むと、或は荒れ狂ふ嵐の海原を乘り廻はされ、高い山の峯から峯へと連れ廻はされるやうに感じられ、或は太陽の光に目も眩み、顏の集りと聲の群りとに氣も亂れて前後

を忘れ、忘我の狀態にさへ誘はれます。かと思ふと、他の種類の詩には、深い落ち着きを持つた智慧と、根深い思想とが籠められて居て、そこには樂しくなごやかな太陽の光があり、新しくされ、力づけられた魂は、その光の中に柔かく抱かれるのを經驗します。生々した脈搏が、それ等の詩の中から流れ出て、生命の勇み跳る思ひをさせられます。そして懷しくも、莊嚴な死の遠景を眺めさせられます。

この詩集を讀んで稱讃し、また共鳴しない者はないが、その形式の整はないのと、音律の缺けて居るのを非難する人はあります。けれどそれは非難する人がまだこの詩集の純粹の承認に達し得ないからであります。

素よりこの詩集中の凡べての詩が、力と美とに於て、同樣な素晴らしさを持つて居るとは謂へますまいが、少なくともその凡べては確かに生きてゐるのです。決して製造されたものではありません。

人は宮殿や寺院を批評することは出來ませうが、一つの森林を批評したところが、それが何になりませう。これまで人口に膾炙した傑作は、寧ろ氣高い建築物に比較さるべきものでせうか。丹靑を凝らした爲めに價値を生じた材料を以て建て上げられ、法則と尺度との美に平行せしめ得る老練な手腕に依つて設計され、そして最初の石が置かれる前に、最後の石が何處に置かるべきかといふことまで打算せられた上に、出來上つた高尙な建築物の如きものだと謂へます。その結果は如何にも堂々として、不可變です。しかもそこには、あるべかりしものが在り得なかつたやうな恨みがあつて、「こゝに批評の餘地が存在し得るのです」。そしてそれは、それ自身のシンボルに對する息苦しい執着を以て、誇りがに建つて、自然が獨り手に持つて居るあの無頓着な自由さの向うに廻はらうとします。

然しホヰットマンの詩はさうしたものではありません。東から、西から、南から、北から、風によつて運ばれて來た種子が、永く地の下に横だはり、そして軈て地の上に「堂々たる建築物の如くに建ち上らずに」、大地の下

に隱れて大地と同化し、大氣と光線と雨露とに依つて養はれて、地上に芽をふくに至るのです。
凡べての枝、凡べての葉は、それ自身の生命に依つて力と美とに生長します。しかもそこには、自然な生長と自由さがありますから、その結果は、何としても變化さへなし得ないだけに自然です「それ故、批評の餘地は、そこには生じ得ません」。それは生長に充たされて居ます。卽ち後から後からと生長して行くべき生命力で、その源を藏して居ます。
更にそこにはおのづからなる音律が生じて來ます。それが生じないでは居られないやうに、恰もそこに或る大きな音律的な思想、或る時は嵐の如く荒々しく、或る時は探り得ざる程優しく、穩かな感情、——さうしたものが言葉に影響して、その言葉をも音樂的なものにして居ます。私はシラブルを計算することが、音樂の組立てを明かにし得る手段とは思ひません。この詩中に表現されて居る勢ひ強い自然さは、諧調の軛に繫ぎ止められる爲めには餘りに自然だと思ひます。しかも私は、そこに或る種の音樂があることを確認します。それを聽き取り得ない耳と私の耳とを交換することは、代償を拂はれてもうべなふ氣にはなれません。
詩の女神は次の二つの中、その一つをこの詩人に對して決定せねばならなくなつて居ます。卽ちこの人を彼女の最高の完全な闡明者として許すか、彼女自身よりも更に神聖な何物かゞこの詩人の中にあることを認めて、この人のなすがまゝに任せ、嘗て現はれ出なかつた或るものをこの人によつて發見せしむべきか、この兩者の一を許す外にないと思ひます。
火を注いだやうな生命力に充たされた此の詩が、造り出された一つの偉大な源は、詩人が現在といふものゝ上に置いた強い破壞の力だと信じます。現實に對して恐れなく行き渡つた交渉を持つ所にあつたと信じます。從來の思想の先驅者は、「科學を除いては」殘らずその目を思ひ切つて、過去にのみ注いだ人々です。過去を以て自

分達の主君たらしめ。現在を賤しみ退け、既に大地の内に埋り去つた過去の中にのみ偉大を見、偶〻現在を語る中には、過去に對しての賤しむべき對象としてのみ現在を語り、そして現在に對して憐むべき不信を抱くが故に、彼等自身が頻りに嘆いて居る無生命の狀態を、生活の上に釀してゐます。何百年も過去の人間の目に燃え絶えて了つた火で暖まれと私に命じます。死んだ人間の目を通じて物を見るか、さもなければ行き詰まつた暗黑の中で、目を閉ぢて居ろと命じます。そしてその詩人達は、薄暈けて了つた過去の美を喜んでゐますが、それはもう私を幸福にしてはくれません。

然しながらこの詩人、「豐富な言葉と喜びに滿たされた力の人」なるこの詩人は、人の手を取つて眞直に前方に振り向かせてくれます。現在は彼にとつて十分に偉大です。何故なら、彼は現在にとつて十分に偉大だから。現在はこの詩人を通して大きな聲をあげつゝ、「宏大な大洋の潮」となつて流れます。この大地は既に老いて、彼女の生々としたチャームを失ひ去つたものではありません。その神々しい意味もなくなつては居ません。今でも素晴らしい男をも女をも産み出します。若し人が自分自身を信じ、その存在權を捨てないならば、その人はそのまま素晴らしい男であり、女であります。今迄現はれた如何なる人々よりも更に豐かなる天賦を得たものです。何故なら、永い年月がその人の生れ出るまでに容易ならざる準備をなし、過去から徐ろに現はれ來りつゝあつた、永遠の目的は、この人に於て更に新しく展かれて來て居るからです。私達にこの事實を明示し得る人が、終にワルト・ホヰットマンに於て現はれました。その人の歌は喜ばしく、強く、美しい生命の呼吸であり、その生命は現在といふものゝ賜ものに依つて、嘗て見られない程に高潮されて居ます。

私は嘗て幸福を無視するのは偉大な仕事だと考へ馴らされて居ました。幸福を輕んじ賤しめて、或る高い目的に向つて往進するのを偉大な事だと考へ馴らされて居ました。しかし私は今、幸福であり得る程偉大なものはど

こにも無いといふことを知りました。「如何なることが湧き起らうとも、凡べての瞬間に」幸福を摑み取ること、輝かしい大空の下にあつて、寄せ返す波の穂に乘るやうに怒り狂ひ、脅やかし、荒れすさむ生活の波の中にありながら、快活に、心廣く、それを泳ぎ凌ぐ自分を見出すこと、凡べての不遇、失望の嵐の中から力強く跳り出ることは、悲慘でもなければ、不幸でもなく、實に力を確得することであり、心の落ち着きを得ることであり、かかる幸福を得るに勝つて偉大な何物もないのを知るに至りました。

或はカラマスの題下に集められた詩篇その他に於て、男と男とが友情の戀に陷る。それは何を意味するでせう。人は嘗てそれを夢みるだにしたでせうか。これ等の Comradeship の福音の詩は、豫言的な洞察深い力をもつて、「崇高な、新しい友情」卽ちデモクラシーを語つて居ます。それは氣持の落ち着いた時に考へて見ると、實現し難い夢想として退けられねばならぬやうな、そんな空虛なものではありません。それは詩人の胸の中に現在疼いてゐる呼吸であつて、彼の周圍の男達に對して實行として、實現されて居る所のものです。

米國の民衆が奴隷の存續を主張して、母國の悲しみと憤りとを惹き起した時、その悲憤がこの詩人によつて如何に强烈に表現されたか。また彼の國の寵兒なるこの詩人が力强い個性を投げ出して、國是の危機の犧牲となつた、何百何千何萬人に對して、夜となく晝となく、幾週も、幾ケ月も、幾年も、看護と慰藉とのやさしい手を差し延ばしたかを知るものは、私の言ふ所を首肯するでありませう。

然しながら、現在は、容易に看取し得る偉大さと美との外に、種々なる他のものを私達の前に現はします。もしも詩人がこれ等のものに觸れないで、その解決を私達自身の力にのみ委ねて居るとしたら、彼は人生の解決者として不眞實であると謂はなければなりませんが、詩人は「偉大なる攝受や選擇や排斥を斥ける敎」を高唱するのを忘れませんでした。もし彼が、墮落、犯罪、無恥を見下すやうな憐愍を以て見るばかりで、仲間づきあひの

手を差し延べることをおそれて居たら如何(どう)でしたらう。然し彼は、墮落した人、罪を犯した人、愚かな人、輕蔑される人が、「宇宙といふ人道の行進」に少しく步み遲れた人々であり、「遲れながらも、彼等の道を軈(やが)ては步み來る」人達であり、性急な人間の思はくと違つて、時には豐かな備へがあつて、その力の下には凡べてのものがやがて完全に整へられるべきを信じてゐたが故に、彼は侮蔑の感じを完全にその心から除き得て、同胞に對する不幸な考へ方から、自ら自身を見事に投げ出して居ます。

若し彼が大膽に忠實に、自分の中にも光の絲と共に暗の絲が織り込まれて居るのを表明し、最惡のものゝ中にも最善の芽が含まれ、最善のものゝ中にも最惡の芽が潛んで居るのを申し出さなかつたならば、人類に對する同胞觀念は單なる美辭に過ぎなかつたでせう。若し詩人の心が、「限りない愛の大洋」でなかつたならば、彼は私達が永く待ち望んで居たその人ではなかつたでせう。若しこの一事が缺けて居たなら、種々な不純な考へで汚されて居るデモクラシーといふ言葉に、正しい意味を裏づけることは出來ますまい。

現在に對する非難から懷疑主義は生れ出る。そして現在に對する博大な愛と承認とから信仰は生れ出る。もし現在がそれ程偉大で、眞であるならば、過去の現在は偉大であつたし、未來の現在も亦偉大で、眞であらうと信ずるのは決して至難なことではないと思ひます。

（一九二二年五月、「學藝」所載）

マルクス女史の「女」に就いて

去年私が讀んだ少し許りの書物の中に、山田わか子氏が譯した「女」と云ふのがある。これは佛蘭西人なるマグダレン・マルクスといふ人の原著で、アンリー・バルビュスの序文が附せられてゐる。此の書物は實際に特異である。女子通有のセンチメンタリズムに少しも囚はれることなく、實感に卽した用捨ない、然し、洞察と同情とのある筆で、一人の若い女が自分の愛の出發點を見、その愛の對象を求め、見出し、結び付き、更に愛の他の對象に移つてゆく、それ等の徑路を極めて智慧深い印象的な表現をもつて書きつらねてゐる。

文體として見ても、その點からだけでも極めて面白いものであるし、その內容は到る處に、今迄認められなかつた樣な暗示（サゼッション）を閃めかしてゐる。これは男子が誤り考へ、女子が僞り匿してゐた女自身の赤裸々な當體に近いものであつて、いかに樣々な混亂の奥底に、女性にのみ隱れてゐる熱い強い力の生活よりの憧憬が流れてゐるかを示してゐる。

私はまだ一度も、かくの如き女性の姿に接したことがなかつた。或は今迄かくの如き女性は、絕えて描寫されなかつたのではなからうか。或はかくの如き女性は、現代から未來にかけて、現はれ來るべきそれの面影ではなからうかとさへ思つた。

バルビュスが云つてゐる樣に、この書物は普通の道德家や宗教家には喜ばるべきものではないであらうが、然しその中には新しい道德及び宗教への一路が幽（かす）かながらにしろ示されてゐる。

山田女史の此の飜譯は、日本の女子に向つての誠によき贈り物であると私は信ずるのである。（一九二二年五月）

教育者の藝術的態度

私の經驗が、若したいして間違つてないものだとすれば、私が受けて來た教育には、ある不滿足な點が見出されるのを感ずる。それを其のまゝ申し出して、それが教育家の參考の一端となるならば甚だ幸ひである。

學問と教育とは、元より其の根柢に於て相違がある。世の中では往々にして此の二つを混同して考へて居るのではないかと思はれる。研究卽ち學問をするといふことも教育の敎へるところではあらうが、教育といふものにはそれ以外に多くの使命があるやうに考へられる。私の考へてゐる教育なるものは、一人の人に方向を示すことである。それが研究の上に於てゞあれ、觀念の養成の上に於てゞあれ、叉性格の構成の上に於てゞあれ、それ等の者がその人の本性に對していかなる方向に發達すべきかを認め、その適確な方向を示すところのものが教育であらねばならぬと信じてゐる。それ故に、單に機械的に知識を注入するといふやうなことは、教育の本旨とすべきものではない。たとへば近頃、所在に行はれる職業教育と稱せらるゝもの、卽ち講師が生徒を集めて自分の專門的知識をどん／＼講じていくといふやうな致し方は、正しい意味に於ての教育といふことは出來ないやうに思ふ。教育者は常に被教育者に對する性格的理解者であらねばならぬ。これが教育家に要求される第一の要件である。この要件を充たし得る教育家は其の理解を被教育者に正しく傳へ得る力量を持たねばならぬ。これが第二の必要な要件である。此の二つの要件が十分に滿足される所に初めて本當の意味の教育といふものが成り立つのである。

然るに私の受けて來た教育なるものは、如何も此の點に於て多くの缺陷が見出されねばならなかつた。自分と

いふものに對して無自覺であつた時期から漸く自覺的になつて行つた時に、私は自分の本來の性格、傾向がかなり強くあらぬ方へ枉げられてることを發見せねばならなかつた。そこで私は自分自身の性格を發展させる前に、先づ歪められた方向から自分を正しい方向に持ち返すことに夥しい努力をする必要を餘儀なくされた。即ち自分は所謂教育なるものゝ誤られた力によつて僞善者になつてゐることを發見した。僞善者とは本來自分のものでない者を、外面的に自分のものらしく持つてゐ、また自分の持つてゐるべきものを無理に押し隱してゐる、さういふ人を云ふのだと私は思ふ。私は自分の性格に對して自覺せねばならぬ日の來た時に、持つべからざるものを夥しく蔑ろにしてゐる自分を發見せねばならなかつた。そのかりそめに持たせられたものが、一見いかによいものであるらしく思へても、畢竟それは私にとつて無用の長物であるのみならず、私の生活を純一に導くためには有害な故障となるものであつた。本來私のものでないそれ等の邪魔物を取り去る爲めに私の拂つた努力は決して容易なものではなかつた。私は今でもその重荷を投げ捨てる爲めに苦しんでゐる。元よりかくの如き失態は、その全部が教育者の罪だとはいへない。それは第一に私の性格の弱さが馴致した結果である。第二に一般的の意味でいふ社會生活其の物が惹起した過ちでもある。また、家庭生活の止むを得ざる不完全さも、かゝる結果を生じさせてゐるに相違ない。私の性格がもつと鞏固なものであつたなら、かゝる外面の惡影響に對して抵抗するだけの力を持つてゐたでもあらう。併しながら同時に私は私の幼年時代の教育者に向つても、多少の責任を分擔させることが出來ると信ずる。その人たちは元より善意を以て私に臨んだには相違ないけれども、不幸にして私自身の方向を與へる代りに、其の人自身の方向を與へてくれようとした。すべての人が切り開いて往く道が必ずあるといふことを無視して、その人自身の歩いて來た道がたゞ一つの道であるかの如く振舞つた。さうして未だ十分に自分の性格に對する自覺をもち得なかつた私は尊敬する先生の指導に信賴して、その人の敎へ込むところに從つた

のであつた。考へて見るとその當時でも、その指導に從はうとしながら、私には何か十分に得心のいかない物のあるのを朧げながら感じてゐたらしい。私は幼いながら、時々教室にあつて不滿と反抗とを感じたのを記憶する。しかもその不滿と反抗とを感じながらも、何とかしてそれを征服しようと努力した。此處に私の性格の弱さがあつたには相違ない。併しながら自覺の時代が來るころに、その不滿反抗を全然征服し終るには私の性格は少し弱過ぎたらしい。それ故に其の時機になつて、私は苦しみ初めねばならなかつた。而して其の時になつて私の受けた所謂教育なる者が單に知識的の注入であつて、本當の意味の教育ではなかつた。尠くも本當の意味の教育が、決して全體的には働いてゐなかつたのを感じたのである。

此の經驗から、私は教育家が單なる知識の所有者であることの外に、自分自身が自分の性格を作り上げるについての深い經驗をもつた人であらねばならぬことを發見する。自分の欲まり込む立場を綿密に考察した人のみが、いかに凡べての人には其の各〻の人が持つべき特有の立場と方向とがあるかを實感することが出來る。此の實感が彼自身を本當に活かし、他人の立場と方向とに對して正しい理解をもち自由を許す心を起さしめる。此の態度が教育家として根本的に所持されねばならぬ態度である。その他のいろ〳〵の要件は、結局此の態度を築き上げる材料として役立つべきものであつて、決して此の態度から獨立して働くべきものではない。たとへば大學程度の教育を極く皮相的に考へて、單に知識を授受すれば足りる所として見ても、よい教師はその學生の一人一人の傾向についてその學生がいかなる方向にその研究の目的を選ばねばならぬかを見究めてやる必要はどうしても起つてくる。それを見究めることは、豐富なる知識の單なる所有だけでは決して出來得べきことではない。その教授は自分の知識的方向が、いかに綿密に選ばれたかを十分に實驗した人でなければならぬ。單なる知識の受授といふ場合でも左樣である。況んやその人の性格全體の方向を定むることに、いくらなりとも教育家が貢獻し

ようといふ場合には尙更のことである。

すべての人に正しい立場と、而して方向とを指し示せよ。さうしたならば、彼等は喜んで彼等自身を教育して行くであらう。これが教育なるものゝ根本的任務ではないかと私は考へる。

（一九二二年五月、「帝國教育」所載）

繰り返しの生活を憎む

一

繰り返しの生活、それを私たちは極端に憎む。それは人間の有つてゐる本然の傾向が然らしめるところである。生は創造である、常に新しい世界への突進である。若しこの動向が阻まれると生は苦しむ、さうしてそれが續くと自らの排出した毒素の爲めに、枯れて萎むやうな不幸をさへ結果する。生は不斷に新しい環境に、それ自身を見出すことによつてのみ、その存在を完うし且つ向上する。然るに、若し生活が常に繰り返されなければならぬとするならば、そこにはもう生の働く餘地はなくなつてしまふ。自然は容赦なく不必要なものを攝み出す、それは恐ろしいことだ。

現在私たちの大部分の生活は、進展なき繰り返しをすることを餘儀なくせられてはゐないか。私の關係する文藝の方面に闘して考へて見ても、日々發表される創作の內容が、いかに烈しい繰り返しの連絡であるかに惘れんとするばかりである。その文體に於ても、調子に於ても、取材に於ても、構想に於ても、千篇一律といふことが出來なければ、聊かの配列を違へた繰り返しに過ぎないといふことは確かに出來る。それは私たちの生活が既に業に進化の生活をなさずして、繰り返しのみの生活を長い間して來たことを證據だてるものではないか。私たちの生活の對象となるものは古い昔から與へられてゐたところの或る概念であつて、私たちは、或る時はその概念の名前を變へ、或る時はおき場をかへ、或る時はそれを見る方角をかへ、その概念から眼をそむけることなしにい

つまでも姑息な執着をして來てゐるのだ。それ故に神といふ名が自然といふ名でおきかへられようとも、英雄といふものがデモクラシーといふ位置に移されようとも、攝理が人道といふ見方にかへられようとも、當初の概念が變らない以上は、結局同じことを考へてゐるのに過ぎないのだ。國家組織でも社會生活でも恐くかくの如き概念の化物に煩されてゐる。しかも私たちは、姑息にもその概念を何とか修正して、住み心地のいゝ環境を作らうとしてゐるのだ。この永い繰り返しの生活の間に、私たちの周圍には有害無用な蓄積物が山の如くに堆積されてしまつてゐる。さうして現在藝術家はこの堆積物を掘りくりかへして其の中から彼の作品をこねあげてゐるのだ。それ故に其の結果が創造ではなくして繰り返しに終るのは當然なことだ。私も藝術家のはしくれとして創造の欲求をもつものであるが、それにも拘らず自分の作品に對すると、舊い殼を脫け出ることが出來ないで、姑息な繰り返しをしてゐるのを痛切に感ずる。

二

これは如何(どう)しても生活が惡いのだ。生命力の强いものは如何(どう)してもその中に安住してゐることが出來ない程に生活が惡いのだ。私たちは何とかして山と積まれた永年の堆積物の中から脫れ出て、新しい光線と大氣とに觸れなければならない。これにはそれをさせるだけの强い生命力が必要である。かなり强い生命力を持つた人でも、往々にして中途で挫け易い。ロマン・ロオランやベルトランド・ラッセルのやうな人たちですらが、私たちの眼の前で、既にその退嬰を示さうとしてゐるではないか。それを思ふと、私たちは自らを省みて、深く恐れなければならない。一時の血氣にはやつてなどはゐられない。年齡の進みと共に衰へがちな生命力の火を益〻燃やす爲めに、深い强い準備が日夜に必要とされる。それが爲めには、正しい方向に自分をおくこと、眞に內容の要求にす

べてを讓步すること、はつきりと目指す目的物を定めること、これが最も必要とせられるだらう。自分の性情にしつくり合つた目的物と方向とが見出されるならば、そこに私たちの生命力は燃えたつて來るに違ひない。年齒を重ねるに從つて、益ゝ高く擴がつて行く創造の世界が開かれるに相違ない。これこそその人の喜びであり、同時に人類の喜びであらう。繰り返しを憎む生活に最大の喜びを與へることに飽くまでつとめよう。

（一九二二年六月、「報知新聞」所載）

己れを主とするもの

私は如何なる場合にも己れを主としようとするものである。さうする外に自分といふものゝおきどころを考へて見ることが出來ない。

*

他人のことは兎に角、自分だけでもせめては、生來の力が成就する最上のものでありたい。自分が如何すれば本當に滿足が出來るか、それを探り求めて、その境地に進んで行きたい。その爲めには自分に許された最大の欲求を踏みにじるやうなことをしまい。如何なる環境の中におかれても、どれ程苦しめられても、この欲求の續く限り活きて見よう。

*

我れを蔑ろにして隣人の爲めに骨を折る、そんな出來ない相談を絕對に退けよう。自己が弱小な爲めに自分の力が隣人にまで及び得ないでも、それは已むを得ないことだと觀念しよう。及び得ないのに强ひて及ぼさうといふやうな柄にもない出しやばりを惡まう。

*

己れを主とする以上、他人にも同じ心持のあるのに注意しよう。自分の自由を守ると同樣な氣持で、他人の自由をも守らう。然しながら、自分の欲求の强さから隣人に働きかけねばならぬ時が來たら、その時は確信を以て、躊躇なく隣人に働きかけよう。

自己に阿ねるまい。自己を輕蔑しまい。自己をそれがあるべき相當の位置におかう。若しその位置が與へられてなかつたら、それを發見し、創立することに骨を折らう。

＊

凡ての事業とその報償とを自己の中に求めよう。自己を成就すること、それがそのまゝ報償であつて、その他には一つの報償もあり得ないことを十分に體得しよう。

＊

自己は獨りぼつちである。同時に自己は全人類である。この理解と實感とに到達した自分を、發見せねばならぬ。

＊

全人類にまでの自己の確實な生長、それを明かに自分の中に感得する以上の喜びが又と他にあらうか。

＊

飛び上りをしないで、輕はずみをしないで、慌てないで。然しながら休むことなく、力強く、活き〳〵として。

＊

自然は到るところに陷穽を用意してゐる。それだから蹉き倒れるのはありがちなことだ。それを恐れたり恥ぢたりする要はない。唯傍見した爲めに蹉き倒れる時、私は回復し難い恥辱によつて顏赤らめねばならぬだらう。傍見を愼しまう。

＊

自分にないものを他人が持つてゐるとて、それをそねみ又は憎むことをしまい。自分にあるものを他人が持つてゐないとて、それを悲しみ又は笑ふことをしまい。

＊

一人の人には必ず一人だけの立場のあることを信じよう。それを發見しよう。

（一九二二年六月、「文化生活」所載）

生活の歐化と文化生活

文化といふものに永遠不易な形はない。或る時代に文化とせられたものが、必ずしも他の時代の文化であるといふことは出來ない。或る地方に發達した文化の形が、必ずしも他の地方に取つての文化の形とはなり得ない。文化の形といふものは此の如く時と處とによつて變化する。それならば文化そのものとは何を指すか。人間衷心の欲求から出た思想と行爲とが自由に表現されて、しかもそれが社會全體の福祉となり得るやうな狀態をいふのである。而してかくの如き狀態が可能であり得る生活を文化生活といふのである。

歐洲の生活は東洋のそれと同樣に正しい意味に於て文化生活ではない。何故ならば、歐洲の文明は今その大切な過渡期にあつて、現在その地方に一般的に認められてゐる文化なるものは、前時代（若しくは改造されんとしつゝある時代）の所產に過ぎず。從つてそれは來るべき時代によつて存分の訂正を餘儀なくせられねばならぬ所のものである。かくの如き種類の文化が、日本の有識家と稱せらるゝ人々によつて、歐洲文化として頻りに採用されんとしつゝあるのである。何故ならば歐洲に於ては、新しい時代はまだ文化を完全に生み出し得るやうな安定な狀態には達しては居らぬ。新しい文化は今暗い槽の中にあつて醱酵しつゝあるに過ぎぬ。まだ一つの形にはなつてゐない。從つて歐洲の文化を採用せんとする以上は、日本は勢ひ既成の文化を採用する結果になつてしまふ。所謂生活の歐化といふのが概していへばそれである。

歐洲に於て過ぎ去らんとする時代が創り上げた生活樣式が、明治以來、日本には大々的な規模を以て輸入された。それが卽ち歐化なるものである。而して今でもその惰性は依然として繼續されてゐる。資本主義的生產方

法、機械力、去勢されたる基督教、ブルジョアジー全盛期の所産なる概念的哲學、及び民衆から切り放された奢侈、及び其の奢侈が造り出した藝術、これらのものは實に日本が開國以來孜々として歐洲から誘ひ込んだところのものであり、今もなほ誘ひ込みつゝあるところのものである。

然しながらこれらのものは新時代の自覺の前に何の意味を持つものであらう。それがどれ程きらびやかな、便利な、一見巍峨たる姿を備へてゐるとも、それが既に社會全體の福祉に加へるところがない以上、何の役に立たう。

私の仕事の範圍内に於て考へて見る。藝術家はそのたづさはる範圍に於て尋常人以上の敏感さを持つてゐなければならないといふ。この提言には疑ふべき餘地がない。所が現在一般に日本に於て通用する藝術家の敏感さといへば、既に概念化された美の標準に對する敏感さのことである。卽ち既成の文化が創り上げた美に對して鋭敏に働く感覺のみが指されてゐるのである。開拓されて行かねばならない世界に對する觸手が如何に鋭敏に働いても、それは粗硬な感覺の故だとしてのみ評價されてゐる。既に精細に分析されたものを、更に必要もない程に細かく微かに分析すべく餘儀なくされてゐる既成文化の藝術家には、新しい世界にさぐり寄らうとする觸手のほしいまゝな働きが、如何にも無鐵砲な、動きの不自由な、細微の點に行き亙らぬ鈍感さに見えるのは無理のないことであるとしても、新しいものに對して觸手を働かせ始めようとするその敏感さを忘れてゐるのは迂愚だと云はれても仕方があるまい。

私は歐化を恐れるものでもなく呪ふものでもない。如何なる歐化が現在眞に要求されてゐるかを見分けて、そこに力強い視力を送ることが必要とされてゐると云はんとするものだ。生活の歐化といふ言葉は漠然とし過ぎてゐる。何故ならば、歐洲には相反した二種の生活が存在してゐるからである。而して文化生活なるものゝ基調が

何者であるかを考へずに、從來の慣習によつて定義された文明生活なるものを直ちに文化生活そのものと混同することがないやうにと欲するものである。civilization は直ちに culture を意味するものでもなく、progress を意味するものでもないといふ事に氣付かねばならぬ。

（一九二二年六月、「婦人公論」所載）

言葉と文字

近頃私は英語の詩を少しばかり譯して見たが、その經驗によつて、前から考へて居た一つの事實が益々確かめられたやうに思ふ。それは私達の使つて居る言葉が單に耳にうつたへたばかりでは通用せずに、眼に訴へねばならぬ場合が甚だ多いと云ふ事であります。

これは確かに漢字が輸入せられてから起つた一つの弊であると云へませう。在來の大和言葉は口から耳に傳へ得るやうに出來て居て、たゞ聞いてゐるだけではつきり言葉の持つて居る意味と感情とを知る事が出來ますが、漢字によつてゞなければ表はされ得ない言葉になると、どうしても耳のみでは思ふやうに行きません。

例へば、私の譯し試みた詩の內に、かう云ふ節があります。

無礙な愛着的な性格に向つて老少の差なく愛の汗は流れ出る。

かゝる性格から美や修練を憫殺すべきチャームが蒸溜されて滴り落ちる。

かゝる性格の方に戰慄し熱欲する接觸の悶えが高まる。

この譯文は既に生硬であるかも知れませんが、それにしても無礙とか修練とか憫殺とか熱欲とか云ふ言葉は可なり一般に使ひならされて居る言葉で、人が眼でそれを見る時ではさして不思議とも思はずにその意味を諒解し得る筈ですが、假りにこの節を朗讀して見るとその意味をはつきり捉へ得る人が幾人あるでせう。このやうな事は一つの言葉の價値から考へて見て非常に心細い事だと思ひます。日本の詩歌が在來の表現法によつては如何しても實意を發揮し得ないと云ふことも、その他內容までが表現の不滿足によつて束縛を受けるといふ事も、確かに

眼に訴へなければ諒解し難い漢字の混雜によつて結果されてゐるものだと思ひます。將來に於ては如何しても此の不便から日本の言葉は救はれなければなりません、さうして耳にうつたへる事のみによつて完全に意味を通じ得る事の出來る言葉を造り出さなければならないと思ひます。

この缺點から日本語を救ひ出す一つの手がゝりとして地方の方言を研究することが唱道され、又職業語を研究することが唱道されてゐます。これは大いに大切なことで是非我々が勉めなければならぬことですが、子供を家庭に持つて居られる方々は漢字の束縛を受けて居ない子供達の言葉使ひを研究なさる事によつて私の今の申し出た方向にむかつての端緒を見出す便りを得られると信じます。

（一九二二年六月、「オヒサマ」所載）

描かれた花

＊

色彩について纎細極まる感覺を持つた一人の青年が現はれた。彼は普通の寫眞を見て、黑白の濃淡を凝視することによつて、寫された物體の色彩が何であつたかを易々と見分けるといふことである。この天賦の敏感によつて彼は一つの大きな發明をしたが、私のこゝに彼について語らうとするのはそのことではない。彼がいつたと稱せられる言葉の中に、私に取つて暗示の深い一つの言葉があつた、それを語らうとするのである。

その言葉といふのは、彼によれば、普通に云はれる意味に於て、自然の色は繪畫の色より遙かに美しくない、これである。

この言葉は逆說の如く、又誤謬の如く感ぜられるかも知れないと思ふ。何故ならば昔から今に至るまで、畫家その人の殆んど凡てが、自然の美を驚嘆してやまなかつたから。而してその自然を端的に表現することの如何に難事であるかを力說してやまなかつたから。それ故私達は色彩の專門家なる人々の所說の一致をそのまゝ受け入れて、自然は凡ての人工の美の總和よりも更に遙かに美しいとうなづいてゐた。而してそれがさう見えねばやまなかつた。如何に精巧なる繪具も、如何に精巧に配置されたその繪具によつての構圖も、到底自然が專有する色彩の美を摩して聳ゆることは出來ない。さう私達は信じさせられると思つてそれを信じた。而して實際にさう見え始めた。

＊

然しながら、暫く私達の持つ先入主觀から離れ、私達の持つかすかな實感をたよりにして、私はかの青年の直覺について考へて見たい。

巧妙な花の畫を見せられたものは大抵自然の花の如く美しいと嘆美する。同時に、新鮮な自然の花を見せられたものは、思はず畫の花の如く美しいと嘆美するではないか。

前の場合に於て、人は畫家から授けられた先入主觀によつて物をいつてゐるのだ。それは確かだ。後の場合に於て、彼は明かに自己の所信とするところのものを裏切つてゐる。彼は平常の所信と相反した意見を發表して、そこに聊かの怪訝をも感じてはゐないやうに見える。これは果して何によるのだらう。單に一時の思索的錯誤に過ぎないのか。

それともその言葉の後には、或る氣付かれなかつた意味が隱されてゐるのか。

＊

人間とは誇大する動物である。器具を使用する動物であるといふよりも、笑ふといふことをなし得る動物であるといふよりも、自覺の機能を有する動物であるといふよりも、この私のドグマは更に眞相を穿つに近い。若し何々する動物であるといふ提言を以て人間を定義しようとすることが必要であるならば。

彼の爲すところは、凡て自然の生活からの誇大である。彼が人間たり得た凡ての力とその作用とは、悉く自然が巧妙な均衡のもとに所有してゐたところのものではないか。人間が人間たり得た唯一の力は、自然が持つ均衡を打ち破つて、その或る點を無限に誇大するところに成り立つ。人類の歴史とは、畢竟この誇大的傾向の發現の歴史である。或る時代にあつては、自然生活の或る特殊な點が誇大された。他の時代にあつては他の點が誇大される。或る地方にあつてはこの點が、而して他の地方にあつてはかの點が誇大された。このやうにして文化が成

り立ち、個人の生活が成り立ち、而してそれがいつの間にか人間の他の生物に對する優越を結果した。智慧とは誇大する力の外の何者であらう。

*

暫く私のドグマを許せ。畫家も亦畫家としての道に於て誇大する。

畫家をして自然の生活をそのまゝに受け入れしめよ。彼は一個の描き能はざる蠻人に過ぎないであらう。彼には描くべき自然は何處にもあり得ないだらう。自然はそれ自らにしてユニークだから。而して勿論ユニークなものは一つ以上あることが許されないから。

だから一個の蠻人が畫家となるためには、自然を誇大することから始めねばならぬ。彼は擅まゝに自然を切斷する。自然を抄略する——抄略も亦誇大を成就する一つの手段だ——。自然を强調する。蠻人が畫家となつて、一つの風景を色彩に於て表現しようとすると假定しようか。彼は先づ自然に存する色彩の無限の階段的配列を切斷して、强い色彩のみを繼ぎ合はすだらう。又色彩を强く表はす爲めに、その隣りにある似寄りの色彩を抄略するだらう。又自然に存する各〻の色を、それに類似した更に强い色彩によつて强調するだらう。かくの如くして一つの風景畫は始めて成り立つのだ。それは明かに自然の再現ではない。自然は再現され得ない。それは自然の誇大だ。その仲間の一人によつて製作された繪畫を見た蠻人は、恐らくその一人が發狂したと思つたであらう。何故ならば、それは彼等が素朴に眺めてゐる自然とは餘り遠くかけ隔つてゐるから。

然しながら、本然に人間が持つてゐる誇大性は、直ちに誇大せられた表現に親しみ慣れる。而してその表現が自然の再現であるかの如く感じ始められる。かくて巧妙なる畫の花は自然の花の如く美しく鑑賞されるに至るのだ。

この時に當つて畫家はいふ「自然の美は極まりない。その美を悉く現はすことは人間に取つて、天才に取つてさへ不可能である」と。いふ心は、私達が普通に考へてゐるそのやうにあるのではないのだ。その畫家の言葉を聞いた私達は恐らくかう考へてはゐないか。自然の有する色彩は、如何に精緻に製造された繪具の中にも發見され得ない。又その繪具の如何なる配列の中にも發見され得ない。又如何なる天才の徹視の下にも端倪されない。それだから自然の持つ色彩は、常に繪畫の持つ色彩よりも極まりなく麗しいと。

私は考へる。その言葉を吐いた畫家自身はさう考へて言つたのではないにしても、私はかう考へる。畫家のその言葉は普通に考へられてゐる、前のやうな意味に於てゞはなくいはれたのだ。自然の美は極まりないといつた時、畫家は既に誇大して眺められた自然について云つてゐるのだ。彼の言葉の以前に、畫家の誇大された色感が既に自然に投入されてゐたのだ。誇大された繪具の色彩によつて義眼された彼の眼は、知らず識らずその色彩を以て自然を上塗りしてゐたのだ。而して自然には――繪具の色の如く美しくないにしても――色の無限の階段的駢列がある。その駢列の凡てを誇大された繪具によつて表現しようとするのは、それは確かに不可能事を企てようとすることであらねばならぬ。それは謂はゞ、一段調子を高くした自然を再現することである。誇大によつてのみ自己の存在自由を確保されてゐる人間に出來得べきことではない。天才たりとも爲すなきの境地だ。それ故に畫家のその嘆聲。

＊

然るにかの青年は、色彩に敏感ではあつたけれども畫家ではなかつた。彼は色彩に對する誇大性を所有してゐない。謂はゞ彼は科學的精神の持主であつた。それ故彼は畫家の凡てが陥つてゐる色彩上の自己暗示に襲はれることなしに、自然の色と繪具の色とを比較することが出來た。而してその結果を彼は平然として報告したの

だ。

それをいふのは單に彼の青年ばかりでない。畫家の無意識な僞瞞に煩はされないで、素朴に色彩を感ずる俗人は、新鮮な自然の花を見た場合に、嘆じていふ「おゝこの野の花は畫の花の如く美しい」と。

*

畫家は彼を呼んで濟度すべからざる俗物といふだらう、それが畫家に取つての最上の compliment であるのを忘れつゝ。

「おゝこの野の花は畫の花の如く美しい」

自然の一部だけを誇大したその結果を自然の全部に投げかけて、自然の前に己れの無力を痛感する畫家に取つて、神の如き野の花が、一片の畫の花に比較されるのを見るのは、許すべからざる冒瀆と感じられよう。かゝる比較を敢てして、したり顏するその男が、人間たる資格を缺くものとさへ思はれよう。

然し、畫家よ、暫く待て。彼は君の最上の批評家ではなかつたか。公平な、而して公平な結果の賞讚をためらひなく君に捧げるところの。

その理由をいふのは容易だ。彼は君が發見した色彩の美が自然の有する色彩の美よりも、更に美しいと證明したに過ぎないのだから。しかも彼はそれを阿諛なしにいつてゐるのだ。畫家の仕事に對するこれ程な承認が何處にあらう。

*

私は既にいふべきものゝ全部をいつてしまつたのを感ずる。青年の言葉によつて與へられた暗示は私にこれだけのことを考へさせた。而してそれを携へて私は私自身の分野に歸つて行く。

藝術家は創造するといはれてゐる。全くの創造は藝術家にも許されてはゐない。藝術家は自然の或る斷面を誇大するに過ぎない。僞りの藝術家は意識的にそれをする，本當の藝術家は知らずしてそれを僞し遂げる。而してそれを彼に個有な力と樣式とをもつて僞し遂げる。彼は他の人が見なかつたやうに自然を見る。而してその見方を以て他の人々を義眼する。かくて自然は嘗てありしところの相を變へる。創造とはそれをいふのだ。自然が創造されたのではない。謂はゞ自然の幻覺が創造されたのだ。

然しながらこの幻覺創造が如何に人間生活の內容を豐富にすることよ。何故ならば人間は幻覺によつてのみ本當に生きることが出來るのだから。

*

自然をそのまゝに客觀するものは科學者である。少なくともさうしようと企てるものが科學者である。彼は自然の或る面に對して敏感でなければならない。而して同時にそれを誇大する習癖から救はれてゐなければならない。

彼は常に藝術の誇大から自然を解放する。その所謂美しくない姿に於ての自然を露出せしめる。人間性の約束として彼も亦何等かの方面に於て自然を誇大してゐるであらう。然しながら彼のかゝはる學に於ては，人間の本性なる誇大的傾向から去勢されてゐなければならないのだ。

幻覺の持つ有頂天を無殘にも踏み躪る冷やかな徹視。彼科學者こそは、謂ひ得べくは、まことの自然を創造するものだ。人間を裏切つて自然への降伏を敢てするものは彼だ。

水に於ては死水を、大氣に於ては赤道直下を、大地に於ては細菌なき土壤を、而して人生に於ては感激なき生活を。

古人が惡魔と名づけたところのものは、卽ち近代が科學者と呼ぶところのものだ。人間が自覺の初期に於て、誇大した自己を自然に向つて投寫したのが、神だつた。又その誇大性から人間を自然に還元しようとする精神を具體化したのが惡魔だつた。それ故に人間は神を崇び惡魔を避けた。然しながら自覺の成熟と共に、神は人間の中に融けこんで藝術的衝動となり、惡魔も亦人間の中に融けこんで批評的精神となつたのだ。

*

然らば科學者は畢竟人間的進軍の中に紛れこんだ敵の間諜に過ぎないのか。さうだ。而してさうではない。人間は既に誇大されたものを自然そのものであるかの如く思ひこんで、それを更に誇大することはないか。無いどころではない。餘りにそれはあり過ぎる。人間は屢〻彼の特權を濫用することによつて、特權のために濫用される。大地に根をおろして、梢を空にもたげるものは榮える。梢に大地をつぎ木して、そこに世界を作らうとするものは危い。而してこの奇怪な輕業が、如何に屢〻わが藝術家によつて好んで演出されることよ。

科學の冷やかな三十棒は、大地に倚つて立つ木の上にも加へられるだらう。けれども、その木はその三十棒を膏雨として受け取ることが出來る。然しながらその三十棒が、梢につぎ木された大地の上にふり降(おろ)される時、それは天地を暗くする頽嵐となつて働くのだ。

人はこの頽嵐を必要としないか。

人は土まみれになつたその梢の洗ひ淨(きよ)められるのを、首を延べて待ち望んでゐるではないか。

嵐よ、吹きまくれ。

科學者への警告。

*

君は人間の存在理由を無視するところから出發するものだ。その企ては勇ましい。
然しながら君は人間の夢を全くさまし切ることは出來ないだらう。何故ならば、人間の夢をさまし切つた時、そこにはもう人間はゐないから。

*

一つの強い繩となる爲めには、少くとも二つの小索の合力が必要だ。
自然と接觸する所には、人間特有の誇大性を。人間特有の誇大性によつて誇大された産物と接觸する所には、冷厳無比な科學的精神を。
これが人間の保持すべき唯一無二の道德である。

（一九二二年七月、「改造」所載）

生命によつて書かれた文章

世界の三聖といはれる釋迦、基督及びソクラテスの一生を考へて見ると、そこには不思議な一つの一致が發見される。それはその三人が一人として、自ら筆を取つて書いたものを後世に遺してゐないことだ。而してその人達が後世に遺した說教と稱せられるものが、今日私達によつて意味される說教とは相違してゐるといふことだ。あの人達は自分の身近かに起つた事件とか、或る人の質問とかに應じて、その場その場の意見を述べたに過ぎないので、決してその人の大哲學を組織的に申し出たのではないらしく見える。日常茶飯的な談話が卽ちその人達の私達に殘した大說教だつたのだ。

啫合といはんにはその現象はあまりに特殊だ。これは私達の生活の芝居らしさを十分に反省させる。殊に私のやうに文筆を生活の大部分とするものの。

（一九二二年七月、「文化生活」所載）

子供の素樸さ

近頃は繪のいたづら書きも全くしなくなつた。しかし、繪を見ることはいつでも樂しみだ。それにつけても考へるのは少年や少女が繪に對して持つてゐる趣味である。

これは畫家の弟が注意したことであるが、小さい人たちが未來派や立體派の繪に對して、大人が思ひもよらない理解を持つてゐるさうだ。私のところの子供などもさういふ繪を見せると、强い興味を以てそれに臨み、しかも思ひがけない理解を示す。

一體、あのやうな動的の感じや、物を面に於て觀察する見方が子供には元來發達してゐるのか、或はさういふ近來の傾向が何となく空中に漂つてゐて、子供の感情にも自づから移入されてゐるのか、それは私にはよくわからない。併し乍ら、從來固定してゐた繪の約束が旣にあまりに固定されすぎた爲めに、自然から遠ざかつて、子供の素樸な心情には大人に對しての程訴へては來ないのではないか。さうして、そこに固定した流派を破壞して起つた流派が却つて子供の心を捕へるのではないかとおもふ。これはよく硏究して見ると餘程意味のある事實のやうだ。

一體、自然といふものに固定した相はないので、それを或る形になほすのがみんな藝術家のなしとげたところで、謂はゞ藝術家は自然に對する一種の手品師であるといふことが出來る。その手品があんまり、際立つて不自然になると、子供のやうな直覺力のすりきれてゐない神經にはその手品のたねがすぐ見えすくのかとも思はれる。

それにつけても藝術が如何に自然に密接してゐなければならないかゞ思ひやられる。

（一九二二年七月、「新潮」所載）

心に沁みる人々

A

Aは落ちて行く。上の方に落ちて行く。今の代の人はものゝ墜落に一定の方向を定めた。物體の墜ちるのにも、心の墜ちるのにも。Aは然し人の定めた方向に向つては墜ちない。彼はその反對の方向に墜ちて行く。彼は段々聖者になつてゆく。彼は燕返しの名人だ。彼は先づ人の定めた墜落の方向に向つて、手に汗を握らせるまでに落ちてゆく。而して再びその反對の方向に向きなほつて、前よりも更に遠く墜ちてゆく。

然し人は前者を認めて後者を認めない。だから彼は日々に人から忌まれ、退けられ、忘れられる。

Aは嘗て一人の友を失つて始めて藝術に來た。大抵の人は友人を失ふといつの間にか忘れてしまふ。Aは友人を失つたが故に藝術に來た。彼は友人から剝落することが出來ない。友人を亡くして詠歎するものはある。けれども失はれた友人と心中したのはAだつた。だから人はAの轉身を無意味な氣まぐれとして罵つた。彼の墜落の方向が人の定めた原則とは違つてゐたからだ。

Aは藝術を鑑賞する代りにそれを生きた。藝術を生きるといひながら實際はそれを鑑賞してゐるのが人の定めた落伍だ。だからAは馬鹿の骨頂だつた。彼は酒を飲むのに金の缺乏を感じて、身近かなものゝ實印を僞造した。身近かなものが火のやうに怒つて監獄にたゝき込むといつた。Aはそれが恐ろしさに平あやまりにあやまつた。そこで彼は人なみになつたか。人なみ以上になつた。人なみ以上になるのは紫外光線になるのに等しい。それは人

の網膜には感じて來ない。

Aは言葉どほりの聖徒にならうとした。然しその瞬間に、彼は魂を消すやうな崩壞の大音響に遇つた。絕對的に神がゐなくなつてしまつた。神がゐないと主張する人にも微細には神がゐる。けれどもAに於ては、神がゐないと知つた彼自身の外には神がゐなかつた。神がゐない——從つて森羅萬象はなかつた。

Aは孤獨な、然し神をすら撥無する力と抱き合つた。Aはその力に震はされて五體そのものまでが激しく震へた。彼は眞直には步けなかつた。醉どれのやうに千鳥に步いた。實際土の上をさう步いた。而して彼は妻と子とがゐない所からゐる所へと歸つて來た。

不幸なる超人よ。Aは餘りに烈しく淚もろかつた。彼は淚もろいが故にその一人の友から剝脫することが出來なかつた。それをAは氣付くべきであつたかも知れない。然しながら、人てふ人にしてその最大の弱點に氣付き得る人があるだらうか。

この一つの點に間違ひはないことが必要である。それは彼の淚もろさが センティメンタル程度のものではなかつたといふことだ。又自分が好んで淚もろいといふのを知り拔き得るそんなものでもなかつたことだ。さういふAがその妻と子とを自分の中に全く取り入れることが出來たであらうか。若しくは神を撥無せねばならなかつた彼である故に、その妻と子とを撥無し得たであらうか。西行法師の淚もろさならそれが出來たかも知れない。撥無した妻子を詠歎の的として、不卽不離に保存し得る人にはそれが出來よう。然しながらAの淚もろさは愚かしきまでに頑固なのだ。Aはその妻子の故に自殺を思ひ立つことすら出來た。Aにあつては骨肉の執着は骨肉を越えてゐた。Aは妻子に於て彼に背敎する彼自身を見た。或る時は彼は妻子の方に落ちて行つた。而して或る時は反噬して彼自身の方へと際どく攻め寄せていつた。それは聖なる地獄だ。そこには一つの品詞もあり得ない。名は

或るものゝ質と量とを限る。名のないもの、それは渾沌に過ぎない。Aは酒と女とに行つた。妻であり得ぬところの凡てのものへと走つた。さうかと思ふと、敵の胸に吸ひ寄せられる征矢のやうに妻に歸つた。その間にあつて、Aはたゞ一つの活路を詩に求めた。然しながら彼は人の知るやうな日本語を知らない。又文人が專用する表現を知らない。なほ又、彼には詩の要素とせられる詠歎がない。その詩は呪文のやうだつた。醉漢の囈言のやうだつた。ぽき〳〵とその詩は枯枝のやうに、どこでゞも折れた。その枯枝のやうな詩の一片は、その一言一句は、嘗てまがふかたなき水々しい枝であつて、根から養分を吸ひ取り、太陽と空氣とに親しい挨拶を送られたものであることを語るにしても、人は固より見も返らなかつた。制作が生きた幹から落ちた枯枝でないといひ得るものが何處にあらう。人は悉くそれを承知してゐる。然しながらそれが言の葉によつて生きたものゝ如く飾られなければ、即ち人が知りつゝその詐術にあざむかれなければ、人はそれを取り上げようとはしないのだ。Aは人間なみに詩を作らうとした。併しいつの間にか詩の女神を眞裸かにしてしまつた。恐らく女神はそれを恥ぢはしまい。然しながら人々は笑ひ切れないやうにAの迂愚を笑つた。彼は詩に於ても上に向つて眞倒さまに落ちて行つたのだ。

詩もまた重過ぎるとAはいひ出した。あらゆる方面に對しての價値の置きなほしが全く徒勞に終つた時、彼は或る勇氣を以て、無價値の世界をかすかに垣間見た。陶醉者の視野。苦しからぬ程度に醉つたものゝ涙と、笑ひと怒り。その世界にはありとあらゆる情景がある。それは醉はないものゝ經驗するところよりも更に靈活だ。けれどもそこに價値はない。前と後とがない。原因と結果とがない。計畫がない、報償がない。tangible mirage! Aにあつては詩もまた重すぎた。

彼は遂に妻と子との奴隷になり下つた。——これを讀む人は私の詐術に注意せねばならぬ。彼は眞になり下つ

たらうか――。Aは知邊から妻子のために合力を求めた。而して彼は帳場に坐つてゐる妻の爲めに、朝から晩まで市中を歩き賣りをする。夜、Aは妻から惠まれる酒をその胸の奥へ流しこむ。彼は丸太のやうに寢る。

彼は落ちた。妻と子の丁稚になるまでに落ちた。人はAのかくまでの落ち方に滿足してほくそ笑んでいゝ。彼は然し同時に上の方へと落ちてゆく。どこまでも〳〵落ちて行かうとするその神經の圖太さよ。

A、彼は私の心に沁みて來る。

B

Bは愛することを知らなかつた時に愛された。彼女に取つてのこよない幸福な不幸。

愛したものはBの理想通りに優れ秀でた異國の人だつた。愛することを知らなかつたBは、それ故にその人を退けた。何故ならその人を捕へることは、彼女の理想を捕へることだから。而して理想を現實に於て捕へる程自己を醜くする行爲は復とないだらうもの。

Bを愛したものは、斷末魔の叫びと、珍らしく大きな一顆の金剛石とをBに殘して、生死の程も覺束ない時間と空間との彼方へ消え失せた。無限を有限にかぎる不思議な魔術の輪がその時からBの身邊に投げられたのをBは知らなかつた。

Bには何事もなく凡てが過ぎ去つた。さう少なくとも彼女には思へた。

やがてBが愛することを知る時が來た。言葉を換へれば、牢獄の門がBの爲めに廣く開かれた。始めて見たものには、地獄さへが天國かと思はれ得る。殊に女は巧みな網を張る蜘蛛であつて、同時に、その網に陷る盲目な胡蝶である。Bも亦危くも身自らに催眠術を行つた。而して彼女を引き止めようとする手をさへ振り拂つて、そ

の門を潜つた。

誰がそれを過ちであるといひ得よう。縦令過ちであつたにしても、それは凡ての人が犯すところの過ちにしか過ぎない。それ故にそれは畢竟過ちではない。それ故にBは人なみに幸福だつた。

幸福だつた。然しBはその幸福の中に不幸を見出さねばならなかつた。最上の運命――さういふものは空想に等しい程この地上に罕れではあるが――を捕へたとしてもそれは不幸だらう。然しながらその不幸の中にこそ空虚のない幸福はある。最上の運命を捕へることは、前にもいつた通りに、自分の醜さを思ひ知ることだ。それは何んといつても人間としての最大の不幸だ。而して、それだからそれは幸福だ、捕へることを敢てする勇氣ある人にとつては。最上の運命を退けて、その一つ手前の運命に身を委ねるものは、現世の幸福の夥多を受け納めるだらう。而してそれ故にこそ不幸が芽ざす。

愛することを知る前に、愛すべかりしものに邂逅した、その奇怪な自然の惡戯によつて、Bは其の後彼女が甘んじて受け入れた生活からはみ出した。その自然の惡戯がBを永遠の處女にした。彼女は處女そのものゝ無邪氣さを以て、謂はゞ前世に於て失つたやうな寶を求めて歩く。地上は彼女の眼に百貨店の混雜を以てひしめいてゐる。凡ての人の眼は狂亂して火花を散らし、山と積み上げ、海とひろげられた商品の間から、最も敏速に、最も安價に、最も悧巧に、掘出しものを食つてゐる。商品棚に沿うて流れ行く貪慾の洪水。Bも亦その洪水の水となつて漂ひ流れる。百貨店の入口に脱がれた履物は、出口からその主人を乗せて、何處にともなく走り去る。

けれどもBの履物は恐らく永遠に出口にあつてBを待たねばならぬだらう。その履物はBが出口に姿を現はす前に朽ち果てるだらう。何故ならBは、出口に押し流されると、忽ち眼に涙をためて、再び入口の方へと流れを溯るから。見よ、Bの手には、大きな金剛石の唯一つ輝くその手には、虚ろが淋しく抱かれてゐるではないか。

入口を潛る間もなく、力に餘るほどの荷物をかゝへて出口の端近く誇らしげに立つ顧客のいかに多いことよ。Bは處女らしい羞恥ともどかしさとを以てその人々を羨み眺める。けれどもそれらの人の購ひ得たものは不幸にしてBの購はうとするものではない。

Bは屢ゝ人波の間に巖の如く立ちすくむ。人々は奇怪な邪魔物に眦を反へして、彼女の袖をひきちぎらんばかりに擦過する。百貨店に傭はれた黑眼鏡の探偵は、こゝに去りもやらぬ美しい空手の顧客に對して、見ぬふりする鋭い瞳を射込む。Bは然しそれらの惡意にも注意せぬほどに命がけなのだが。

事業、劇場、良人と母とへの奉仕、美しい弟、冒險、誘惑、密會、慈惠、徹夜の舞踏、獨身者への接近、活動、若作、强ひて自ら陷れる疾病、而して、而して、而してそれらの凡て、……永遠の處女を讃美するものはこれを見よ。それが呪詛ではないか、苦難ではないか、地獄ではないか。Bは瀆れをさへ我がものとして摑まうとする。然しそれさへが彼女の手に乘ると、なまぬるい淸さに早變りするのだ。永遠の處女を讃美するものは、女の本能を冒瀆するものだ。描かれたセンティメンタリズムを剝ぎ去る勞を惜しみさへしなかつたら、人は女が處女から如何にして完全にのがれ出づべきかに悶えてゐるのを發見するだらうから。

然しながら、Bの場合にあつては殊にさうであるとしても、女が處女から完全にのがれ出る道は、なべての女自身が想像する程そんなに容易なことではない。

而して遂に魔の環の働く時が來た。Bは有限を目がけて無限に對して矢を放つた。彼女が愛することを知らなかつた時、彼女を愛した異邦の男に對して、心あてに一片の火のやうな戀文を書いた。

世界は音を絕える。闃爾として死のやうだ。眼かくしされたBは、發矢と放たれた矢弦の音を聞くと共に、思はず地にひれ伏して、遠鳴りする矢ひゞきに耳傾ける。それのみに心のたけを集める。兎も角も矢は飛ぶ。何處

に。萬には空しい空間に、一つにはその人の胸板に。彼女は地にひれ伏して耳傾ける。

B、彼女は私の心に沁みて來る。

（一九二二年八月、「中央公論定期増刊號」所載）

木曾山中

　私は未だその境に臨んだことはありません。然し私の友が話して聞かせてくれたことを永く忘れずにゐて、身自らその境にあるやうな氣がします。木曾の山奥の夏の夜をその友はたゞ一人旅しました。幕府時代から伐採禁斷の五種の材樹は大正の御代にも昔の面影を殘して、繁り返つて、欝蒼と夏らしい夜氣に浸つて立つてゐます。山道は割合に廣く布かれてはゐるけれども、うざ／＼と物凄いまでに繁り合つた綠葉の爲めに、一歩一歩を踏み出すさへ恐ろしい程黑み亙つてゐます。無聲の境とはこゝでせうか。草鞋の音さへがすぐ打ち消されるやうな靜かさです。寒いまでの山氣が、全くおびえ果てたやうな旅人の心の奥へと沁み通つて來て、地球の上にゐるやうな思ひをさせません。行けども／＼同じところです。眞黑な森林、かすかに白く走る道、一人の旅人、死そのものゝやうなしゞま。突然森の一方が燐光を放つてかすかに明るくなりました。それは旅人の幻覺とも思はれるやうな明るさです。同時に、どこからともなく、この世のものとも思はれぬやうな歌聲が靜かに聞こえ出します。旅人の脚は我れ知らずすくみ上ります。而して明るくなつた森の一方に眼をさだめます。それは夏の夜のおそい月の出です。檜や杉の大樹の幹に立ち割られて、凉しい月が地平線近く……歌聲は急にかまびすしいまでになります。それは枝といふ枝に假りの宿りを求めて眠つてゐた小鳥たちが、眼を覺して月の光を迎へる歌なのです。今まで死そのものゝやうであつた大森林が、一つの不思議な樂器に變ります。誰でもその境に立つと眼に涙のこみ上げて來るのを拒み得ないでせう。

　さうその友は私に語つて聞かせました。

（一九二二年八月、「婦女界」所載）

小作人への告別

八月十七日私は自分の農場の小作人に集會所に集まつてもらひ、左の告別の言葉を述べた。これは謂はゞ私の私事ではあるけれども、その當時の新聞紙が、それについて多少の報道を公けにしたのであるが、又聞きのことでもあるから全く誤謬がないとはいへない。かうなる以上は、私の所言を發表して、讀者にお知らせしておくのが便利と考へられる。

農繁の時節にわざ〳〵集まつて下さつて有難く思ひます。然し今日は是非諸君に聞いていたゞかねばならぬ用事があつたことですから惡しからず許して下さい。

私がこの農場を何とか處分するとの事は新聞にも出たから、諸君もどうすることかと色々考へて居られたらうし、又先頃は農場監督の吉川氏から、氏としての考へを述べられた筈だから、私の處分についての、大體の樣子はわかつて居られたかとも思ひます。けれどもこの事柄は私の口づから申し出ないと落ち着かない種類のものと信じますから、私は東京から出て來ました。

第一、第二の農場を合して、約四百五十町歩の地積に、諸君は小作人として七十戸に近い戸數を有つてゐます。今日になつて見ると、開墾し得べきところは大抵開墾されて、立派に生產に役立つ土地になつてゐますが、開墾當初のことを考へると、一時代時代が隔たつてゐるやうな感じがします。こゝから見渡すことの出來る一面の土地は、丈け高い熊笹と雜草の生ひ茂つた密林でした。それが私の父がこの土地の貸し下げを北海道廳から受けた當時のこの邊の有樣だつたのです。食料品は固より凡ての物資は東倶知安から馬の背で運んで來ねばならぬ交通不便のところでした。それが明治三十三年頃のことです。爾來諸君はこの農場を貫通する川の沿岸に掘立小屋を

營み、あらゆる艱難と戰つて、この土地を開拓し、遂に今日のやうな美しい農作地を見るに至りました。固より開墾の初期に草分けとして這入つた數人の人は、今は一人も殘つてはゐませんが、その後毎年這入つてくれた人人は、草分けの人々のあとを嗣いで、遂にこの土地の無償附與を道廳から許可されるまでの成績を擧げてくれられたのです。

この土地の開墾については資金を必要とした事に疑ひはありません。父は道廳への交渉と資金の供給とに當りました。その外父はその老軀を度々こゝに運んで、成墾に盡力しました。父は、私が農學を研究してゐたものだから、私の發展させて行くべき仕事の緒口をこゝに定めておく積りであり、又私達兄弟の中に、不幸に遭遇して身動きの出來なくなつたものが出來たら、この農場にころがり込む事によつて、兎に角餓死だけは免れることが出來ようとの、親の慈悲心から、この農場の經營を決心したらしく見えます。親心としてこれは有難い親心だと私は今でも考へてゐます。けれども、私は親から讓られたこの農場を持ち續けて行く氣持が無くなつてしまつたのです。で、私は母や弟妹に私の心持を打ち明けた上、その了解を得て、この土地全部を無償で諸君の所有に移すことになつたのです。

かう申し出たとて、誤解をして貰ひたくないのは、この土地を諸君の頭數に分割して、諸君の私有にするといふ意味ではないのです。諸君が合同してこの土地全體を共有するやうにお願ひするのです。誰でも少し物を考へる力のある人ならすぐ分ることだと思ひますが、生産の大本となる自然物、即ち空氣、水、土の如き類のものは、人間全體で使用すべきもので、或はその使用の結果が人間全體に役立つやう仕向けられなければならないもので、一個人の利益ばかりの爲めに、個人によつて私有さるべきものではありません。然るに今の世の中では、土地は役に立つやうなところは大部分個人によつて私有されてゐる有樣です。そこから人類に大害をなすやうな事

柄が數へ切れない程生れてゐます。それ故この農場も、諸君全體の共有にして、諸君全體がこの土地に責任を感じ、助け合つて、その生産を計るやう仕向けていつて貰ひたいと願ふのです。

單に利害勘定からいつても、私の父がこの土地に投入した資金と、その後の維持、改良、納稅の爲めに支拂つた金とを合算して見ても、今日までの間毎年諸君から徵集してゐた小作料金に比べれば誠に僅かなものです。私がこれ以上諸君から收めるのは、さすがに私としても忍び難いところです。それから開墾當時の地價と、今日の地價との大きな相違は如何して起つて來たかと考へて見ると、それは勿論私の父の勤勞や投入資金の利子やが計上された結果として、價格の高まつたことになつたには違ひありませんが、それぱかりが唯一の原因と考へるのは大きな間違ひであつて、外界の事情が進むに從つて、こちらでは手を束ねてゐる中に、いつか知らず地價が高まつた結果を來してゐるのです。かく高まつた地價といふものは、謂はゞ社會が生み出してくれたもので、私の功績でないばかりでなく、諸君の功績だともいひ兼ねる性質のものです。このことを考へて見れば、土地を私有する理窟は益ゝ立たない譯になるのです。

然しながら、若し私が外に何の仕事も出來ない人間で、諸君に依賴しなければ、今日々々を食つて行けないやうでしたら、現在のやうな仕組みの世の中では、或は非を知りながらも諸君に依賴して、パンを食ふやうな道に從つて生きようとしたかも知れません。ところが私には一つの仕事があつて、他の人は如何いはうと、私としてはこの上なく樂しく思ふ仕事ですし、又その仕事から、兎に角親子四人が食つて行くだけの收入は得られてゐます。明日は如何なるか知らず、今日は得られてゐます。かゝる保證を有ちながら、私が所有地解放を斷行しなかつたのは、私として甚だ怠慢であつたので、諸君に對し殊更面目ない次第です。

大體以上の理由のもとに、私はこの土地の全體を諸君全體に無償で讓り渡します。但し正確にいふと、私の徵

集した小作料の中過剩の分をも諸君に返濟せねば無償といふことが出來ぬのですが、それはこの際勘辨していただくことにしたいと思ひます。

なほこの土地に住んで居る人の中にも、永く住んでゐる人、極めて短い人、勤勉であつた人、勤勉であることの出來なかつた人等の差別がある譯ですが、それらを多少斟酌して、この際私からお禮をする積りでゐます。但し、一旦この土地を共有した以上は、かゝる差別は消滅して、共に平等の立場に立つのだといふことを覺悟して貰はねばなりません。

又私に對して負債をして居られる向きもあつて、その高は相當の額に達してゐます。これは適當の方法を以て必ず皆濟していたゞかねばなりません。私はそれを諸君全體に寄附して、向後の費途に充てるやう取計らふ積りでゐます。

つまり今後の諸君のこの土地に於ける生活は、諸君が組織する自由な組合といふやうな形になると思ひますが、その運用には相當の習練が必要です。それには、從來永年この農場の差配を擔任してゐた監督の吉川氏が、諸君の境遇も知悉し、周圍の事情にも明かなことですから、幾年かの間氏を累はして（固より一組合員の資格を以て）實務に當つて貰ふのが一番いゝかと私は思つてゐます。永年の交際に於て、私は氏がその任務を辱しめるやうな人ではないと信じますから一言します。

けれども是等巨細に亙つた施設に關しては、札幌農科大學經濟部に依賴し、具體案を作製して貰ふことになつてゐますから、それが出來上つた時、諸君がそれを研究して、適當だと思つたらそれを採用されたなら、少なからず實際の上に便利でせう。

具體案が出來上つたら、私は全然この農場から手を引くことにします。私も今後は經濟的には自分の力だけの

範圍で生活する覺悟でゐますが、從來親讓りの遺產に依つて衣食して來た關係上、思ふやうに行かない境遇に追ひつめられるかも知れません。そんな時が來ても、私がこの農場を解放したのを悔いるやうなことは斷じてない積りです。昔なつかしさに、偶(たま)に遊びにでもやつて來た時、諸君が私に數日の宿を惜しまれなかつたら、それは私に取つて望外の喜びとするところです。

この上いふことはないやうに思ひます。終りに臨んで諸君の將來が、協力一致と相互扶助との觀念によつて導かれ、現代の惡制度の中にあつても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、諸君の精神と生活とが、自然に周圍に働いて、周圍の狀況をも變化する結果になるようにと祈ります。(一九二二年八月十七日)

(一九二二年十月、「泉」所載)

「靜思」を讀んで倉田氏に

——同時に自分の立場を明かにするために——

一、提言

批評家若しくは紹介者といふやうな立場にある思想家は別として、自分の中から或る主張を生み出して、人に訴へようとする思想家に取つて、主張せんとする思想の內容を嚴格な統一の下におくといふのは望ましい事に相違ありませんが、實際には至難中の至難なことです。多くの場合に、かゝる人の主張の中には必ず何等かの矛盾撞着が含まれてゐないとしても、少なくとも表現の混雜があります。一つ〳〵の言葉をそのまゝ受け入れては却つてその主張者の本旨を誤り、暗示として受け取つた時に、寧ろそれを正しく理解し得るやうな形に於て、思想の表現される場合が極めて多いのを見ます。これはさもあるべきことです。何故なら、嚴密な意味に於ける思想の創造者は、その思想を自分の體驗から搾り出さねばならぬのだから、自分の生活と言葉との間には到底完全な分離作用が行はれ難く、從つて言葉ばかりを通してはその人の表現しようとする思想の全體が十分に第三者には觀望し得られないからです。

私の思ふところが間違つてゐなければ、あなたも亦思想家として、批評家若しくは紹介者に屬する思想家ではなく、或る主張を自分の生活の中から抽出せんとする思想家であります。あなたの思想の强味は實にこの點にあると信じます。あなたの思想に接する人は、自分の生活がそれによつて如何影響されるだらうとの豫感なしにはゐ

られますまい。同時にあなたがさういふ種類の思想家であるが故に、あなたの思想が論理學で割り出したやうに正確で首尾一貫したものであり得ないのも勿論です。あなたの氣持にまで潜り入らなければ、あなたを正當に理解し得ないのは勿論です。あなたの言論に對して物をいふ批評家の中には、この點を全く閑却してゐる人もあるやうです。それでは駄目だと私だけは信じてゐます。あなたに或る申し出をしようとする私は、自分の力の及ぶ限りこの事實に心して行く積りですが、自分の洞察力と經驗との不足のために、却つてあなたの氣持を曲解しないとも限らない危險を覺悟せねばなりません。若し私に曲解があつたら十分に訂正して下さい。

この夏あなたにお會ひした時、あなたの思想に對して思ふことを書いてもいゝかと私がお聞きしたら、あなたは快諾を與へられました。友人としては恐らく私はあなたにだけ私の疑問をお尋ねして置けばいゝやうでもありますが、これは私達二人だけの間の問題とするよりも、あなたと私とに多少なり關心を持つ人々にも披露して考へて貰ふ方が都合のいゝことだと考へたので、こゝに發表して見ることにしたのです。恐らく二人が如何に激しく論じても、口汚ない漫罵を放ちあつて終結にするやうな結果からは、お互ひの友情が救つてくれるだらうと信じて、私は安心してこの仕事に向ひます。

最後にお會ひした時、最近起つた或る事件によつて、あなたは思想的にも屈折點に來てをられるやうだといはれました。それ故「靜思」はあなたに取つて既に過去の產物としてのみ役立つものになるかも知れないと思ひますが、あなたがその全部を抹殺されることはよもやないものと信じ、それによつて私の所感を申し出ることにします。「靜思」といつても私は自分の必要に從つて、その中の「序文」と「勞働運動の道德的根據に就いて」と「積極道」との三篇を選ぶ自由を得たいと思ひます。

最近の會談の時あなたは私に就いて、「あなたは一種の謙抑といふやうなものから、自分の所有するものにつ

いて過酷に近く、自分の所有しないものについて寛大であるのみならず、その中に何か素晴らしくよいものが潜んでゐるやうな期待を持つ傾向があると思ふ。それは自分もさうだが」といふ意味の言葉を申し出されました。それが謙抑から來るのか、或は自分の自信が足りないところから來るのか、それは知らないけれども、兎に角さうした傾向は私にはありさうに考へられます。然しこの論文を草するに當つては、出來るだけ自分をかゝる束縛から解放したいと思つてゐます。見知らぬ人に話しかける場合と、一人の友に話しかける場合に於て、私の態度はおのづから異ならねばなりません。私は十分にくつろぎます。

二、「序文」について

「序文」に於てあなたは思想家なるものゝ立場に就いて、明確な主張を與へられてゐます。人間が「何事かを反省し得る限りは、そして反省せざるを得ない限りは、我々の前に思想の世界が嚴存する」[1]。この言葉の中に思想家の存在理由が出發點として掲げられてゐます。而して思想の世界が嚴存する以上、之れに臨む態度として「眞理そのものを求めなければならない。他の如何なる功利的目的をも求めてはならない」[2]といつて居られます。而してあなたに從へば、眞理そのものとは價値であつて、價値は功利を超越するものでなければなりません。何故なら現實の實際問題に關していつても、それは「現に追求し得たる眞理・價値を理想として、現實の事情に於て、最高可能の所に於て解決すべきである。最高可能の實質的尺度を以て、眞理・價値を測つてはならない」[3]からであります。隨つて、「思想家は時代を超越しなければならない」[4]のです。

私があなたの文章の書き抜きを斯く順序立てたのが、間違つてゐないとしたら……私はそれを主題として私の考へを申し出て見ます。

私が反省する以上、思想の世界の存在を許すのは至當の事であります。唯私の實感からいふならば、私の反省の動因には必ず目前現實の世界が含まれてゐるのを發見します。即ち私が私の各々の現在を如何にして生き甲斐あるものになし得るかといふことが含まれてゐます。眞理のために眞理を探究するのだと主張し、そのために他の欲望若しくは功利的目的を全然捨て去ることが出來たとしても、それをすることによつて私が生き甲斐を感じなかつたならば、私は即座にその企てを抛擲せねばならぬでせう。何故なら生命の否定は死を結果する外に道がないからです。而して眞理探究の途上に於ては全部的な生き甲斐は感じられないにしても、眞理が發見された場合、それが達成されるといふ豫望が現在なる現實世界に繋がれてゐなかつたならば、私の生命には暗い絶望があるばかりです。それ故、私の心中に建立される思想の世界は如何に幽玄永遠な問題に亙つてゐたとしても、それは必ず現在の現實世界に住する私と密に結ばれてゐるので、若し假初にこの事實を忘れてゐるなら、私はその報いを受けて思想的にも墮落せねばならぬと信じてゐます。即ち私の反省と思索とは、概念から概念を拈出する遊戯に陷つて、その結論は、如何なる時代にも通用する眞理の如く見えながら、如何なる時代にも致命的な力となつて働き得ない不可思議的であるに過ぎない結果を生ずると信じます。

　單に生き甲斐といふと、その人の住んでゐる現在なる現實世界とは何等の交渉もなく成り立ち得るものゝやうにも思はれないではありません。例へば、永遠絶對の眞理のみを追求することに生き甲斐を感じてゐる人があるとすれば、その人の生き甲斐は、彼の住む現實世界の相が如何あらうと、少しも關係なく成立するやうに思はれないではありません。然しそれは空想的にさう思へるといふだけの事であつて、その人が實際つきつめた心で眞理を探求してゐる人であればある程、自分の生き甲斐が、現實世界と如何に密接して成り立ち得るものであるかを發見せずにはゐられないでせう。何故なら、現實世界に於てのみその存立が可能なる人間に取つて、彼の世界

を徹視することなしには、些かの思索だになし得ないことをその人は發見するでせうから。その人が確かに永遠の眞理を握らうとすればする程、彼の存在を（少なくとも感覺的世界の存在を）可能ならしめてゐる現實世界を確かに握るの要求を感じないではゐられないでせうから。それを私自身の貧しい經驗が證據立て得るのみならず、實に歷史そのものが證據立てゝゐます。釋迦であらうが、基督であらうが、ソクラテスであらうが、孔子であらうが、凡そその思想が現代までも何等かの影響を持つて、私達が全く無視することの出來ないやうな人達は、一人として現實世界を無視した思想家ではありませんでした。彼等は存分に、私達が時代を隔てゝ想像してゐるよりは遙かに存分に、彼等の住んだ現實の世界と緊密な交渉を持つてゐました。彼等の思想はかゝる交渉なしには絕對に生れては來なかつたと私は信じてゐます。あなたは[5]「思想家に取つては、價値の探究が正業であつて、實際問題の方法的硏究は副業であることを忘れてはならない」といつて居られますが、さう決めることに、私は躊躇するものです。價値の探究とは實在の本質を見通すことであると同時に、その實在が現相的に働く場合、その働きの價値をも探究することであらねばなりません。さうならば思想家が實際問題に當面した場合、その方法的硏究をなしたりとて、副業として貶しむる理由はないと思ひます。釋迦のことは餘りに傳說的でよく解りませんが、彼が平等正覺の權威の爲めに、現今まで續いてなほ滅し難い程根深い職級制度を打破してかゝつたことなどは、方法的に實際問題に觸れたものではなかつたのですか。基督、ソクラテス、孔子などに至つては、文獻の中からさういふ例を取り出さうとするならば甚だ容易なことだと云はなければなりますまい。この場合、彼等が現實世界に働きかけた事蹟を副業的だつたとはいひたくありません。何故なら、前にもいつたやうに、彼等の生活から現實界に交渉して行つた生活を控除するならば、その生活は空しくなるからです。而して思想とは、結局生活の理知的表現に過ぎないからです。彼等は永遠の眞理を思索したでありませう。然しながらそれは、各瞬間の

現實世界と不離の關係にあつてなされたことを、私達は忘れてはならぬと思ひます。現在にあつては、彼等の時代にあつたやうな社會問題は、同じ姿では存在してゐません。それ故その方面に働いた彼等の業績は等閑視されて、抽象的な純粹思想のみが傳はつて來てゐます。思想を純粹化しようとするのは如何なる時代にも通有な人間の欲求ですから。然しながら永く傳はつたから大切なものだ、傳はらなかつたから無視すべきだといふのは、極めて功利的な見方だと私は思ひます。私達は未來とか現在とかいふ物理學上の時間的葛藤を離れ、凡ての瞬間を永遠化して渾一的に働いた彼等の生活に深い注意を拂ふべきではありますまいか。「思想とは叫ぶところの實行」だとカーライルもいつてゐると覺えてゐます。

謂はゞ職業的思想家とでもいふべき種類の人もゐます。その人達は思想を時代から全然遊離することによつてのみその永遠化が成り立つと考へてゐるやうに見えます。さうすることによつて思索の時間が潤澤になり、僻見がなくなり、より恒久的になると思ふらしく見えます。哲學者と稱せられる人々の中にはこの傾向が著しいやうです。私は彼等を疑ひます。自然科學的精神の勃興と共にかゝる態度は益々學者の恃むところとなりました。自然科學者の研究の對象は自然であつて、その研究の結果は現象の純理知的整頓であり、批評家若しくは紹介者といふべき位置を守る人々の態度であつて、自分の中から或る主張を生み出して人に訴へようとする思想家とは純粹にいふことが出來ないのですが、この自然科學者の研究的態度が、一方に於て現實に徹底してゐるところから、その態度が自然の研究のみならず、人間生活の研究にも取り入れられるやうになり、遂に哲學の領域にまで侵入して來ました。哲學者と稱せられる思想家は、人間を靜學的に考察し始めました。それ故生活しつゝある人間の當體を考察の對象とすることの代りに、生活の殘滓(さんさい)ともいふべき思想の排列と統合とのみに苦心し、それを以て人間としての最上至高の生活だと自負するに至りました。然しながらかういふ生活から、私達は生命力のある

思想の生れたのを見たでせうか。有閑階級の一部のものには、それが直接生命の問題とは緣遠い思索の對象として使用されることはあるにしても、一大事因緣の問題には常に間接の補助動力としてより役立たない結果にはなつてゐなかつたでせうか。「思想家は時代を超越しなければならない」とあなたの提唱された言葉は、動もすると、人を誤解せしめる言葉ではないかと私は思ひます。思想家は時代を超越すべきではなく、實に時代を包含しなければならない。時代を超越する（さう云ふことは如何なる超人にあつても實際は出來ることではありませんが）ところには、空想的概念の世界が存立し得るばかりで、具象的な實質的思想は生れては來ることが出來ません。正しい思想はその時代を中核として發想されねばなりません。その思想の飛翔力が逞しいに從つて、それはその時代からあふれ出て、次の時代、更に次の時代にも役立つやうになり得るでせうが、さうなり得たのは、始めから時代を超越し無視してゐた爲めだからではなく、堅く時代に足場を置いて、そこから出發した爲めだと私は信ずるものです。しかもその出發するや、始めからその時代を超越しようなどいふ目論見はなく、もつと彼自身に切實な問題が動因として働いてゐたのだと信ずるものです。而してその結果、彼の思想の擴がりが、時間的にもその時代からはみ出るに至つたものだと信じます。

お前は釋迦だとか基督だとかいふ人を强ひて一人の思想家としてのみ見るから、そんな結論が生れて來るのだ。彼等には明かに二面があつたのだ。一は時代を超越した思想家としての彼等、一は現實世界の指導者としての彼等である。それを混同するところからお前の考への間違ひは生じて來るのだ、といふ反駁が出るかも知れません。これに對する私の答へは旣に申し出てあるのですが、この點が私に取つては大切ですから、重複を厭はず、もう一度答へておきます。私の考へるところによれば、眞正の意味の思想家とは批評家でもなく紹介者でもなく、自分の生活態度そのものを言葉を借りて表現する人であらねばなりません。自分の生活とは生活全體の一部分若

しくは一斷面なる反省生活をその生活全體から遊離したそれを指すのではなく、實にその人の渾一的生活を指すのです。卽ちその人の反省が據つて生ずる所の生活をも背景として含まねばならぬものです。換言すれば、その背景からその思想は生れ出て來ねばならぬのです。もつと具體的にいへば、釋迦とか基督とかいふ人の一面なる指導者としての立場を、その思想から分離して見ようとするならば、彼等の思想は無意味なものになるであらうし、第一彼等が思想を構成しようとした時、それを分離してゐたならば、あんな思想は決して生れては來なかつたに違ひありません。さう私は信じてゐます。

更に論を進めます。あなたは思想家が時代を超越せねばならぬ所以を說いて、思想家は「眞理そのものを求めなければならない。他の如何なる功利的目的をも求めてはならない」といひ、現實の實際問題に關しても、「現に追求し得たる眞理・價値を理想として、現實の事情に於て、最高可能の處に於て解決すべきである。最高可能の實行的尺度を以て、眞理・價値を測つてはならないが故に」といつて居られます。

「功利的目的」といふ言葉、それを私は考へて見たいと思ひます。この言葉は言葉それ自身が既に先入的に不快な意味を有するらしく私達の耳に響きます。それ故に、不快な背眞的な意味を持つといふ效果を擧げれば、その言葉の使命は果されてゐるかに見えないではありません。然し冷靜に功利といふ意味を考へて見ると、「他の如何なる目的にも適さないが、唯必ず實際生活の役には立つ」といふことになるのではないでせうか。若しそれでよければ、眞理と功利との關係にいひ進みます。眞理といふものを假りにそれ自身の中にのみ目的を有するものだとしませう。けれども眞理が人間に働きかける場合には、それが人間の抱いてゐる種々な目的の達成に役立つといふのは明かなことです。若し眞理にこの作用がなく、全く他と交り合はない一つの抽象的實在であつたとするなら、それを見出す可能性が人間の力の中に存在し得る筈がありません。眞理は常にあなたが云はれるやうに

人間の尺度となつて働きます。卽ち價値の本體として人間生活の評價をします。その評價は人間生活の全體に働き、どの部門にも働きます。卽ち實際生活と云ふ部門にも働きます。實際生活は何處に重點を置いた時に最上の價値を發揮し得るかを評定することに働きます。卽ち眞理が實際生活に働きかけるその範圍に於て功利的に働いてゐるのです。何故なら、それは人間の實際生活に最上に役立つからです。

思想家はこの事實を見逃してはならないと私は思ひます。この事實を見逃したら、その思想家はその思索に於いて、謬つて一つの落度をなしたと云はなければなりません。

思想家が眞理を探究する場合、眞理そのものを求めなければならぬのは當然です。爲めにするところがあつて、自分の眞理だとして發見したものを、隱し立てをしたり、故意に歪めたりして結論を作るやうなことがあつてはなりません。然しながら眞理そのものを求める場合、それによつて人間生活の或る目的が達成せられるといふことを意識に入れて求めることが何故惡いでせう。それはいゝ惡いの問題ではなく、その意識を全く除去して眞理の探究をなし得るか否かゞ問題です。その意識を全く除去するなどいふことは全然不可能だと私は思ひます。基督が神を求めた時、人間の存在を無視して、卽ち人間が彼と彼の周圍に存在してゐるといふ事實を度外視して神を求めたでせうか。又釋迦が涅槃の境地を求めた時、輪廻に浮沈する、彼自身及び周圍の人間の諸相を頭に置くことなしにそれを求めたでせうか。私はさうは考へません。何故なら彼等は、眞理が如何なる瞬間にも人間の生活と不離に關はつてゐるといふ事實を知らずにゐるやうな人達ではなかつたからです。彼等の求願の中には、求め出された眞理が密接適確に人間生命の價値となり得るようにとの一事があつたに違ひないのです。而して實際生活も亦正しく人間生命の一大分野である以上、彼等が眞理を求める目的の中には功利的目的も共存してゐたに違ひないのは爭はれない事實だと思ひます。單に功利的目的のみを以て眞理を求めたのでないことは事實でせ

うけれども、眞理探求の目的の中に功利的目的が求められてゐたことは爭はれません。而して私からいはせると、それは單に惡いことでないのみならず、さうあらねばならぬことです。唯功利的目的を求めることが眞理探究の全部である場合に、その企ては兩方の目的とも失敗に終るのはいふまでもないことです。

　私はあなたのあの言葉の意味を、あの言葉を發したあなたの氣持を多少は理解してゐる積りです。あなたのあの言葉の中には時勢の或る潮流に憤激された氣分が十分に看取されると思ひます。然しその事には後段に於ていひ及ぶ積りですから、茲には委しく述べません。

　兎まれ角まれ、あなたは眞理の探究に功利的目的を求めることの非を主張されます。而してその當然の歸結として、實際問題については、「現に追求し得たる眞理・價値を理想として、實現の事情に於て、最高可能の處に於て解決すべきである。最高可能の實行的尺度を以て、眞理・價値を測つてはならない」と、思想家の實際問題に對する思想的態度を表明されます。思ふにこれは極めて大事な言說であつて、少なくとも私に取つてはさうであつて、この點を具象的に解決することによつて、理想派的思想家（idealistic thinker）と卽實派的思想家（realistic thinker）とのけぢめが判明する譯です。私は凡ての人間活動に流派を樹てることを嫌ふ者ですから、上述の差別も、實は無用と思ふものですけれども、大體の傾向が比較的明瞭になると考へますから、暫くそんな差別的用語を用ひたに過ぎません。これはあなたの了解を願つておきます。

　思想家はまづ現實に堅く立脚せねばならぬといふことを私は主張しました。現實に關はる範圍に於て明確な思想、卽ち價値なるところの眞理を求め出すことに力を盡さねばならない。而してそこに求め出された眞理こそは、やがてその思想家が關はる現實の要望する唯一不二の眞理であり、價値であります。その眞理は、その思想家と生活的に關はりのない他の時代又は他の場所の現實界には、眞理としてそのまゝあてはまることが出來ませ

ん。思想家たるものは、先づこの點を徹底的に納得してゐなければならぬと思ひます。この事實が無視されてゐて、生み出された或る眞理は、直に時間と空間とを超越し、如何なる時如何なる處にも同一の價値を以て働き得ると妄信するやうなことがあつたら、それは由々しい誤謬であらねばならぬと思ひます。然るに理想派的思想家は、一般にこのやうな眞理の實在を信じます。それを信ずるのは或は差し支へないかも知れません。然るにかゝる思想家は、このやうな絕對無限の眞理が、人間の思索によつて發見し得られると信じてゐるものです。こゝに私は大きな危險が萠して來ると思ひます。いかなる形に於てゞあれ、果して私達人間に、絕對といふ境地が明確に把握し得られるでせうか。有限なる私達人間の感覺と、意識と、反省とを通じて、永遠に亙つて不變不動に實在する眞理の當體を指摘することが出來るでせうか。多くの理想派的思想家はそれが出來たと平明に答へてはくれません。既に先行者の中にそれの出來た人があるのだから、或る狀態の下には、出來得べき筈だと答へるのを常とします。此の如き回避的な答解に對して私は如何して滿足することが出來ませう。又彼等の或る者はかうもいひます。成程自分にはそれが出來てゐない。然しそれを成就しようとする憧憬は如何なる障碍の下にも捨てることが出來ない。而して憧憬はいつでも成就の階級である。憧憬のあるところには憧憬の當體があらねばならぬ。その當體が憧憬欲求の報酬として攫得される時が來ねばならぬと。それはさうであるとしてもよろしい。然しかゝる假定から出發して、絕對の眞理が既に發見せられたものゝ如く振舞ふのは、如何なる事情の下にも許さるべきことではありません。さう振舞ふのは思想家に取つての恥辱です。

又或る理想派的思想家は、自分はまだ自身絕對的眞理を求め出したとは思はない。然しながら、先哲の或る者はそれを宣言して、敎へを後人に垂れてゐる。自分はその人達の權威によつて眞理を主張するものだともいひます。かゝる態度は、こゝに事新しくいふまでもなく不誠實です。他人におぶさりかゝつて、若し絕對の眞理が體

達出來るものなら、絶對の眞理といふものは、今日私達にもつと遙かに普遍的に行き亙つてゐねばならない筈です。それ故あなたも「現に追求し得たる眞理價値をもつて」と眞理の內容を限定されてゐます。あなたも私と同樣に、永遠に亙つて增減變易することの絶對にない眞理の發見を、少くとも現在までのあなた自身には認めて居られないのを察知することが出來ます。

この事が判明されると、「現に追求し得たる眞理・價値」といふことが次の問題にされねばなりません。現に追求し得たものが眞理價値として絶對のものでないのを認めた以上、その眞理の照明の範圍もおのづから限定されてゐるのを認めねばならなくなります。それは或る時代若しくは或る場所に起りつゝある實際問題を最高可能の處に於て解決することが出來たとしても、他の時代若しくは他の場所でのそれを正しく解決し得ないかも知れません。玆に實際問題に對する眞理の作用の不確實さが芽ぐんで來ます。然らば、或る思想家の現に追求し得たる眞理・價値が、彼の解決しようとする一定の實際問題に正しく役立つか役立ち能はざるかを識別するには如何なる方法に據るべきでありませうか。

是れに對してあなたが如何なる答解を與へられるか、それは未だ知ることが出來ませんが、私自身の考察からいふならば、それを識別すべき方法は全くないやうに思はれます。その思想家が現に追求し得たる眞理・價値といふものは、彼が當面に解決せんとする實際問題が生起する以前の生活の各瞬間が生み出した思想の所產の全量であつて、それが當面の實際問題と如何なる角度に於て關はりを持つてゐるかは極めて複雜な關係に亙り、人間の反省力のみでは到底その筋立てをする事が出來ないものと考へられます。或る重量器があつて、その尺度はAからYまでの價値秤定に役立ち得たとするも、それがZの秤定にも役立つか否かは、秤量を終つて、その秤定に從つてAからYまでの價値と色々に比較し、その相互の關係に何等の矛盾も見出されなかつた後でなければ眞に決

定する譯には行きません。但しAからYまでの各價値とZの價値とが全く同質であることが確定してゐる場合は別です。然しながら實際問題の種々相に於て、その悉くが同質であることは却つて稀れなのです。例へばブルジョア階級に於て美と認められたものが、プロレタリア階級に於ては必ずしも美でないのみならず、その階級が眞に要望する所の美を創出するには却つて害になるといふやうなことがあります。その場合、ブルジョア階級の美を肯定する眞理は、その儘プロレタリア階級の美を秤定する眞理・價値とはなりかねる次第です。その場合、ブルジョア階級の美を肯定したところの眞理が正しいか、プロレタリア階級の要望する美を肯定する眞理が正しいかは、更により高い眞理のみが決定し得るところで、二者のみの對立では決して最後の決定を見ることの出來ないものであるに相違ありません。それ故一つの實際問題を、現實の事情に於て、解決しようとする場合、その實際問題に當面するまでに追求し得たる眞理價値を思想家が理想的標準として用ひようとするのですから、その眞理はその實際問題に始めて接觸するのです。而してその眞理が普遍絶對の眞理でないとしたならば、その實際問題は私が前に述べたところのZに相當するものであらねばなりません。その解決の正否は思想家自身が先づ疑はねばならぬところのものです。

そこでその思想家に取つて殘され得る唯一つの餘地は、自分が現に追求し得たる眞理・價値に盲目的に依賴する外にはありません。その秤定力は既にAからY迄も役立つたのだからZにも役立たない事はよもあるまいとの依賴心若しくは僥倖心を眞理に對して堅く抱く外ありません。換言すれば理想派的思想家は、思想家としての自分の優越を堅く信じて動かないか、放膽なる冒險者の態度を以て死地に乘り込んで行くかの二途があるばかりです。

この二途の何れをか選び得た時、彼は始めてあなたと共に、「現に追求し得たる眞理・價値を理想として、最高可能の處に於て」實際問題を「解決」するといひ切ることが出來るのだと思ひます。

然るに卽實派的なる私は、理想派的の思想家が持つやうな優越感をも冒險心をも持つことが出來ません。私には優越感が自己陶醉のやうに感ぜられ、冒險心が無責任過ぎるやうに感ぜられます。私は縱令絶對的眞理の實在を假定し得るにしても、私自身が眞理として體得してゐるものは、有限相對の世界のものであつて、それは思想家の內生活と共に生長もし、場合によつてはそれ自身を改訂もするものだと感じてゐます。それ故、私があなたの命名法によつて眞理と名づけたそのものは、理想派的思想家から云ふならば、眞理とは名付け難いものであるのかも知れません。理想派的思想家が眞理とは名付け難いと思ふならば、私もその標名を變へた方が心易いと考へます。然しこゝでは便宜上眞理といつて置きます。然らば眞理の內容が、若しくは生長し、若しくはそれ自身を改訂するのは如何なる經路に依るかといふに、それは思想家の生活が(內的といはず、外的といはず)或る曲折を經驗するが故です。思想家の生活が全く靜止の狀態に置かれたならば、その人が構出するところの眞理は、或る程度にあつて恒久不變であるでせう。然し實際に於て人間の生活にはさういふ狀態は全くないといつてゐゝのですから、或る思想家の追求し得た眞理卽ち價値は、常に何等かの變化を經驗しつゝあるといはねばなりません。而してその如何なる變化が、一人の思想家に取つて望ましいことであるかといへば、その思索が如何に高翔しても、彼の接觸しつゝある現實と密に相關はつてゐなければならぬといふことは既に縷說しましたから、こゝには繰り返しません。

思想家が時代からはみ出ることはいゝ。然しながら、斷じて時代から超越すべきではないと前にいひました。思想家が時代からはみ出た場合、その人の追求し得た眞理は、如何なる時代の到來に對しても眞理であることが出來るか。人間性に絶對的境地が許されてゐない以上、それは不可能なことです。卽ち時代から全然超越して何の關係もないといふやうな眞理は、實は存在しないのです。何故なら、その眞理を發見するところの思想家自身

が、如何に「時代を超越しなければならぬ」と覺悟して見たところが、單純なる哲學的道學者に墮落しない限りは、實際に於て時代から超越することが出來ないからです。それ故こゝに「時代を超越しなければならぬ」といふのは、實際の意味に於て、「思想家は時代に對して切實な同感を持つと共に、出來得る限り多くの時代に對して價値として働き得る眞理——思想家が現在生活してゐる或る時代に對して價値として働き得るは勿論のこと、他の時代に對しても同樣の價値として能ふ丈け廣く、遠く、深く働き得る眞理——の發見に努めねばならぬ」といふことに歸するのでありませう。結局超時代的な思想家は嘗てあつたことがなく、超時代的な眞理は嘗てあつたことがありません。斷るまでもないことですが、自然科學的な眞理といふやうなものは、この場合除外して考へられることを便利とします。普通眞理といはれても、それは「事實」若しくは「法則」と呼ばれる方が遙かに適切な事柄ですから。

偖て私が、自分が經て來た生活全體の統合として一つの眞理を追求し得たとします。その眞理は私に取つてはその場合絕對の價値卽ち理想であります。それは私が與へられたる環境にあつて自分を最高可能の處に於て處置した賜物ではありませんか。卽ち私と環境とが接觸した結果として、私に對して自分が形造つたところの理想的法則であるでせう。私がそれに倚ることによつて、與へられたる環境に於ては、最も理想的な生活をなし得るところの標準價値です。卽ちこれが思想家たる私に取つての價値です。換言すれば、私は自分の眞理を發見する經路に於て、絕對的ではあり得ぬ人間、全的自由から或る距りに置かれてゐる人間、卽ち廣い意味の環境に圍繞され、多かれ少なかれその束縛の下にある人間として、さういふ豫件の下に最高可能の所に於て眞理を追求しつゝあるのです。私の追求する眞理は、かく始めから條件づけられてゐます。卽ち私は「最高可能の實行的尺度を以て」眞理・價値を追求し得ようとしてゐるのです。

眞理を實際問題の解決に役立たせようとする時、卽ち歸納された眞理が演繹されようとする時、「最高可能の實行的尺度を以て眞理を測つてはならない」とあなたはいはれます。私はかういひたく思ひます。實際問題に於て、本當に困難なのは「最高可能の實行的尺度」を求め出すことであつて、それを以て眞理を測ることが惡いのではないのだと。私の考へるところに依れば、若し最高可能の實行的尺度が眞に求め得られたならば、その尺度こそはその實際問題に就いては眞理となるべきものであつて、その外に眞理はなく、その外に本當の標準價値となるべきものはないと信じます。何故なら、實際問題にあつての最も大切な點は、それが實行的に實現せられ得るか否かにかゝつてゐます。若し實行し得ざるものならば、如何に綿密崇高な解決法を示されたとしても、それには三文の價値もありません。而して第二に大切な點は、その解決法が、その問題のかゝはる限りに於て最高のものであるといふことです。若し最高に解決されなかつたなら、その問題は正當に解決されてゐるといふことが出來ません。ところでこの最高可能の實行的尺度が見出されるといふのは、不可能といひ得る程な難事です。何故ならそれは絶對と直接に繫がつてゐる事柄ですから。若し幸ひにして見出されたらそれこそは眞理です。測るも測らぬもない。その實行的尺度そのものがそのまゝ眞理であつて、價値そのものです。

或はいふかも知れません。成程その實行的尺度はその實際問題に關する範圍に於ての眞理であるかも知れないが、それは斷じて眞理そのものではないと。私はさう主張する人があるとしたらもう口を噤む外はないのです。私としてはその言葉は詭辯としてより響いて來ないからです。ピラトが「眞理とは何ぞや」と尋ねた時、基督は呆れて答をしなかつたと聞かされてゐます。私が若しこの場合「眞理そのものとは何ぞや」と反問したら、私も亦呆れられるかも知れません。然し私はピラトではありません。而して呆れる人も基督でないのは確かです。

かくの如く言つて來ると、あなたの「現に追求し得たる眞理・價値を理想として、現實の事情に於て、最高可

能の處に於て解決すべきである」といはれた言葉と「最高可能の實行的尺度を以て、眞理・價値を測つてはならない」といはれた言葉とは、肯定と否定の兩極を現はした言葉のやうではありますが、よく考へて見ると左程距り合つた言葉ではなく、自己の驗證なしには眞理を受け取るまいとする人、觀念化された眞理といふ言葉そのまゝを納受しない人、即ち卽實的な態度を取る人に取つては、異語同意として響いて來るものであつて、「現に追求し得たる眞理・價値」といふ言葉と「最高可能の實行的尺度」といふ言葉との間に、明確な差別を挾むことは具體的には不可能に近いと思ひます。

以上の意見によつて、「序文」に關する私の考へてゐるところをあなたは了察して下さつたでせうか。あなたは序文に於て思想家としての態度を宣明されました。思想家は何事を措いても眞理の探究に專らでなければならないといはれました。然しながら眞理なる言葉によつて何が意味されるかをあなたは明かに說くことなく、それを自明のものゝ如くに用ゐられました。私はこの序文の前後の言葉によつて、あなたの考へて居られる眞理と私の考へてゐるそれとを朧ろげながら探り出して見たつもりです。「靜思」中の他の論文中に、あなたの唱道せらるる眞理のもつと具體的な內容を知ることが出來るかと思ひます。そこに來たら私の意味するところも更に明確になり得るかと思ひます。

三、「勞働運動の道德的根據に就いて」について

この論文に於て、あなたは最も實際的な目前の問題を銳く強く論じて居られます。この論文に於て、あなたの提唱される眞理若しくは理想が著しく具體的に表明され、それが現下の實際問題と對照されてゐます。

あなたは第一に勞働問題の根柢は「恐らくは勞働を以て人間が衣食住を得る權利を獲得する資格となすところ

あるであらう」と云つて居られます。現在取られつゝある勞働問題の徹底的原理としての、あなたのこの提言は、既に誤謬の上に立つてゐると思ひます。私の考へる所によれば、人間は人間として生きんとする深い要求を持つてゐる。それが自覺されてゐるか否かは問題にはならない。この要求が滿足され、人間らしい交渉が人々間に行はれ得るためには、精神的生活が保證されるのみならず、物質的生活卽ち衣食住が保證されなければならない。精神的生活については各自に自由が許されてゐる（許されない部分は經濟的階級の壓迫によつて許されないだけだ。それ故その壓迫が取り除かれゝば、精神的生活の自由はやがて實現される）。然しながら衣食住の自由は全然否定されて、それが勞働といふ形で僅かに整理されてゐる。この不合理から人間の生活を解放しなければならない。勞働の量によつて一人の人の生活を立てゝ行かねばならぬといふこの矛盾を無くせねばならぬ。これが勞働問題の根柢になるものです。勞働は權利どころか不合理な義務として人類の大多數に課せられてゐるのです。この不合理を解決しようといふのが勞働問題です。さう私は信じます。

かく勞働が衣食住と直接の關係あるところから、勞働問題は第一次的にパンの問題となるのです。あなたの所謂「如何なるパンの得方が最も正しいか」といふ問題になります。あなたの正しいとするパンの得方は、

「[9]我等に生を與ふるもの――我等を創つたものから養はれて生きるといふ心持が一番正しく合理的な氣がする。」

「[10]自分等は權利としてパンを要求することは出來ない。たゞ許されて與へられるのだ。」

「[11]勞働は報酬を求めずして一つの奉仕としてなされ、パンはその勞働の報いではなく、神が我々の生存を許して、その生存に必要なるものとして與へて下さるといふ風に考へたい。」

「[12]道德原理として勞働する人もまた病人と同じくパンを『儲ける』のでなく與へられるのであるといふ心持で生

きなくてはならない。」

といつて居られます。これは勞働運動の主張と全く反對の主張若しくは理想として掲げられて居られるところのものですが、それは全く反對で、勞働運動の眞精神は、あなたの唱道されたところの外には一歩も出てはゐないと私には感ぜられます。唯あなたは宗教的信仰に生きる思想家としての言葉づかひでこれをいひ、勞働運動者は誰にでも解り易い言葉でいひ現はしてゐるのに過ぎません。即ち、

「資本家に養はれてゐるのではなく、我等に生を與ふるもの卽ち自然から養はれて生きるといふ心持が一番合理的である。」

「資本制度の維持者は權利としてパンを與へた。故に勞働者も權利としてパンを要求する外はなかつた。然し實際パンは人類の全體によつて作られてゐる社會によつて與へられるのだ。」

「勞働が報酬を求めねばならなかつた資本主義社會が亡くなれば、それは一つの奉仕としてなされ、パンはその勞働の報いではなく、社會が我々の生存を許してその生存に必要なるものとして與へるのだ。」

「道德原理としては勞働する人もまた病人と同じくパンを『儲ける』のではなく、人類に對する奉仕として行はれ、パンは病人も勞働する人と同じく必要に應じて與へられるのであるといふ氣持で生きなくてはならぬ。」

とかうパラフレーズすることが出來ると思ひます。二者の相違は恐らく單なる言葉の綾の相違であつて、あなたが勞働問題といふ實際問題を解決するために提言された「眞理・價値なる理想」は、取りもなほさず、勞働運動の「最高可能の實行的尺度」と一致してゐるのです。それ故この尺度によつて眞理を測るとしても、その結果には何等の弊害もなく、あなたの提唱された眞理・價値に到達することになります。從つて最高可能の尺度を以て理想を測るのがいゝか惡いかといふ問題はこの場合不必要になつてしまひます。唯あなたの提唱された理想はあな

たの思索の結果として生れ出で、勞働運動の主張する運動の原理は長い間の實際生活の歸結として生れたので、一は理想的であり、一は卽實的であるとの差別があるだけに見えます。固よりそれを提唱する氣持には多少の差別があつて、神を奉仕の客體とし、勞働運動に於ては人類若しくは社會をその客體としてゐるのですが、信仰の自由を許す以上は、この態度に於ては、どちらも一方を非難することは出來得ないものだと私は思ひます。

あなたは更に「[13]上述の如き根據から考へるならば、勞働問題は人類の集團若しくは階級間の問題ではなく、個人對人類の關係、若しくは被造物と造物主との間の問題である。」と提唱して居られます。議論が卽座にそこまで突き拔けることが出來れば、恐らく勞働問題は現在のやうな形では存在しなくなるでせうが、そこには容易に突き拔け得られない大きな障碍物が横たはつてゐることに注意せずにはゐられません。それは勞働問題を提げて立ち向ふと、人類といふものが同質な一つの集團としては迎へて來ないといふことです。勞働問題に對しては、人類は明かに相反噬する二箇の集團に分離してゐるのを發見せねばならぬといふことです。それはいふまでもなく勞資の二階級です。而して資本階級は、人類全體の所有物であるべき衣食住の資源を壟斷して、單に勞働の自由だけを勞働階級に許してゐます。然し勞働階級に許されたる自由は名ばかりの自由で少しも自由ではありません。勞働階級は働かないでゐてもいゝ自由を許されてゐます。然し働かなければ餓ゑて死ぬばかりです。さういふ自由です。神は恐らく人類の凡てには、働くも働かざるも無くて叶はぬものを與へ給ふでせう。然し現在目下の實情としては、働かないものは死を自身に宣告することに外ありません。かゝる不合理は一體何處にその根を持つてゐるのでせうか。それはあなたの云はれる神のものであつて、人類全體に均霑さるべき賜物を資本階級といふ一つの集團が獨占してゐるからではありませんか。資本階級は意識的にせよ、無意識的にせよ、神の權能を自分に奪ひ取つて、自分の權能としてゐるのです。そこに權利の觀念が彼等に發生します。而して彼等はその權利の名

によつて、勞働階級に對して義務を强要します。「働かざるものは食ふべからず」とは、實に資本階級自身が創出したところの造語であつて、それを偏務的に勞働階級のモットーとしたものです。資本階級にはパンの關はる範圍に於てあらゆる權利、而して勞働階級にはあらゆる義務、かゝる二つの分野が劃然と出來上つてゐる時、個人對人類の關係、被造物と造物主との間の問題が一體何處に成立し、何處に考へ得られませう。その個人は二つの集團の何れを人類として採用すればいゝのですか。又その個人が被造物として、如何すれば資本階級に妨げられずに造物主に直面することが出來るのですか。この事實についてのあなたの御意見を知る事が出來れば幸ひです。個人對人類の關係、若しくは被造物と造物主との間の問題は、この事實が解決されての上で究明されるより道のないことですから。

あなたはこの論文の中に上の問題は自明に成り立つものとして、「實際に數千年の昔より聖人と言はるゝ程の人は、皆自己の一身に於て此の問題を解決してゐなかつたものはない。釋迦、基督、その使徒達、フランシス、又支那や日本の高僧達は皆此の問題を解決してゐた。彼等は悉く上述の如き廣義の神本主義の立場に立つて、パンを人天の供養に仰いでゐる」[14]と云はれます。私は强ちさうは思ひません。パンの問題は、あなたの說かれた人々の生きてゐた時代にあつては、今日に於ての如く致命的の問題ではなかつたのです。日本で、しかも最近六七十年の間に於て、資本主義的な產業制度を取り入れる前と後とには、パンの問題の深度に驚くべき相違が生じてゐます。凡ての時代がその時代が最も要求するところの緊迫した實際問題を持つてゐます。而して私の僅かばかりな知識が私をあざむかないなら、聖人といはれる程の人は、常に彼が住める時代の最も重要な問題を自己に於て解決してゐると思ひます。例へば基督の例をいふならば、當時の民衆の欲求と異なつた道を步いてゐたパリサイ、サドカイの徒に對して實に手痛い攻擊を與へました。神の宮の神聖を保つために繩を以て商人を追ひ出しま

した。形式にのみ流れた宗教上の慣習に對して徹底的な叛逆を敢てしました。是等のものによつて當時のユダヤ民族が如何に苦しんでゐたかを彼は體驗したからです。然しこれらのものは現代にあつては最も緊要な問題とはなりません。從つて私達は基督のかゝる意見若しくは行爲を見のがして、基督にそれほど恐ろしい義憤があつたかを忘れてしまひ、さういふ事蹟を輕く省略して、基督を何等の抵抗も攻擊もしなかつた鳩の如き柔和な人の如く描かうとします。由々しい思ひちがひだと思ひます。

基督は時代の病弊を鋭く衝きました。然し今の宗教家はそれをしません。鳩の如く柔和であらうとします。單純なる哲學として聖書を見る時、佛教の哲學の足許にも及ばないのに、基督の力が矢張り私達を動かさずにはおかないのは、彼の愛が人類的であり、彼の行爲がその時代から少しも浮き足になつてゐなかつたといふ一事にあるのではないのでせうか。然し是等は餘論です。私の貧弱な知識で彼れ是れいふべき問題ではありません。唯、かかる聖人等の言動をその時代の背景に正しく浮き立たせて見ることは、興味があるばかりでなく、必要な一つの研究であることを云ひ添へておきます。資本主義的精神に浸潤し切つた宗教家若しくは學者の解釋のみに任せておくのは惡いことだと思ひます。

あなたは個人對人類としてのパンの問題から進んで、[15]「同胞への愛から、」[16]「彼等がパンの問題について、調和ある狀態に置かれずして、その大多數の者が苦痛の中に生を送り、」[17]「多くの精神的の苦痛をも誘起してゐるのを見る時に、誰か彼等をその苦痛より免れしめんことを希(ねが)はないで居られよう、」とパンの問題を社會問題として考察して居られます。而して彼等をその苦痛より免れしめる道として、「二つの道が見出されるといつて居られます。それは[18]「一つは彼等の愛に訴へ、彼等をして自發的にその問題を正しく解決せしめんとする教化の道である。他の一つは權力を以て、彼等にその正しき解決を强制する道である」と。

この文に於て、「彼等の愛に訴へ」云々といつて居られる「彼等」といふ言葉の意味は、人類全體を指すのか、大多數の同胞卽ち勞働階級を指すのか、パンの問題に苦しむ必要のない資本階級を指すのか、それが前後の文を讀んで見ても私にはよく解りません。從つて問題解決に必要な二つの道の具體的內容も判然しないことになります。然しその點を假りに不問に附するとしてあなたの提唱を考へて見ると、第一の道も第二の道も勞働運動の指導者たるべきものが取るであらう道を敎へたもののやうに考へられます。「彼等の愛に訴へ」といひ、「權力を以て……强制する」といひ、それは勞働問題の當事者以外に、その解決を司る人のあるのを暗示してゐます。思想家として、あなたがさう考へられるのに無理がないとしても、實際に於て、勞働運動の本質上、指導者と稱せられるものゝ立場は、從來の歷史に現はれた指導者とはおのづから異色をなすものであるのを忘れてはならぬと思ひます。少なくとも從來槪念的に考へ慣らされてゐる指導者の型は、勞働運動に取つての禁物だと思ひます。

槪念的に考へられてゐる指導者とは、常に一箇の英雄です。個人的野心に動かされた人もあらうし、又は人類的聖望に動かされた人もあらうけれども、兎に角指導者は彼自身の目あてにしてゐる目的に向つて、民衆を否應なしに引張つて行つた人々です。アレキサンダー大王は世界的文化王國の建設といふ大望に向つて働いた人ではあつたけれども、彼に率ゐられた民衆の大部分は、更にそんな欲求を持つてゐたとは思はれません。マホメットは彼の信ずるところの眞理を一人でも多くの人類に傳へようとした人であつたけれども、その信者の大多數に果して同樣の要求が動いてゐたか如何かは疑はれます。「乃公出でずんば蒼生を奈何」といつた具合な氣持は、凡ての指導者の心の何處かに潜んでゐたやうに見えます。中にはシンシナアタスといふやうな人もありました。ス

パルタカスといふやうな人もありました。民衆の欲求が彼を強ひて起たしめるまでは、指導者たるの地位を決して自ら薦めなかつたやうな人もあります。而して一度民衆の欲求が滿たされるのを知ると、直ちに指導者たる資格と權能との全部を擲つて、民衆の中に融けこんでしまつた人もあります。然しながらそれは寧ろ例外で、從來の指導者の多くは、積極的に自らを薦めた人々でありました。卽ち常に英雄でありました。而して自分の無力を諦めてゐた民衆は、かゝる指導者の出現を半ば恐れながらも待ち望んでゐた傾きがあります。今日と雖も、政治界、產業界は勿論、思想界とか、藝術界とか、宗教界とかいふ分野にはかうした傾向のあるのを看取することが出來ます。

所が勞働運動に於ては、かゝる傾向は根柢から否定されねばならぬのです。少なくとも否定されゝばされる程、その純粹性を發揮するに至るのです。何故ならば、この運動は、その本質上個人的の運動ではなく、集團そのものゝ運動であるからです。パンに苦しめられつゝある大多數の同胞が、その苦難から自分自身を救はうとする運動だからです。而して若しそこに運動の指導者が現はれ出るならば、それは勞働階級の運動の便宜の爲めに、大多數者自身が作り出したといふ性質のものであらねばなりません。その指導者の存在の必要が無くなつた瞬間には、指導者も亦影を沒してしまふ性質のものであらねばなりません。換言すれば運動が指導者を作つたので、指導者が運動を作り出すのではありません。然しながらこれは理想であつて、自ら薦めるところの指導者、卽ち「乃公出でずんば」風の英雄が、勞働運動を利用して姿を現はした例は枚擧に暇がありません。而して恐らく勞働運動にあつても、かゝる現象が必要であつた場合もないではありますまい。けれどもそれはこの運動にあつては決して常道と稱すべき現象ではないので、明かに首尾顚倒の病的現象です。

こゝに於てか勞働運動に於て、指導者と運動そのものとの關係を明かにしておく必要が生じて來ます。とこ

ろがあなたが勞働運動の實際的方法として擧げられた二つの道は、共に運動に於ける指導者の取るべき方針を指示されたのであつて、運動そのものが如何なる方法によつて進んで行くべきであるかに就いては言及して居られぬやうに見えます。少なくとも、運動そのものについてあなたが論じられる場合には、あなたが不知不識或る論理の混雜を犯してゐられる時のやうに思はれます。あなたの本當の態度は勞働運動をも指導者の手によつて解決しようとするものであつて、それは、私のいふ英雄主義の運動にまで勞働運動を遞合させる結果にはなりませんか。若し果してさうならば、それは勞働運動の本質を去勢するものだと私は考へます。もう一度繰り返すなら、勞働運動は常に多數者の團體的自覺が基調となつて、その上に理論も發生すれば、指導者も出現すべき筈のものです。その結果が運動を個人的のものとなさず、階級的のものとするに至つたのです。固より從來の諸種の運動に於ても、その內容に階級（何等かの意味に於て）の觀念のはいり込んでゐない運動は皆無だつたといふことが出來るでせうが、勞働運動ほど階級觀念が顯著で、個人的自發力の働く餘地の少ない運動は恐らく存在しなかつたといふことが出來るでせう。この大切な豫件を無視してかゝるならば勞働運動を正當に理解する鍵は失はれたのです。

或はかういふ人があるかも知れません。勞働運動と雖も永續的のものではなくして、早晩解決を見ねばならぬものである。人類が二つの分野に分れねばならぬといふのは、勞働運動が第一に否定するところの現象である。人類が勞資の二分野に分れてゐるのは人類の本相ではない。思想家なるものは常に人類の本相を目あてにして思索せねばならぬ。この意味に於て、本當の指導者は、一時的現象なる勞働運動から超越して、兩階級に共通した理想を示さねばならぬのだ。それ故この運動が指導者によつて指導されることに不思議はないではないかと。然しながら人類が一體になり得た場合に法則となつて役立つ理想が、さうでない場合に於ては實際に役立たないと

いふ事實を如何處理すべきでせう。例へば、「彼等の愛に訴へ、彼等をして自發的にその問題を正しく解決せし」めるとあなたの云はれる提言に於て、「彼等」といふ言葉を先づ人類全體を意味するものと假定しませう。あなたの揭げられる「愛」といふ理想が、勞資兩階級の實在する現在に於ても、人類全體に共通する理想となり得るか如何か、それを考へて見れば如上の問題は釋明する譯です。

先づ勞働階級の愛に訴へますか。この階級に屬する人々の間に於て、本能的に愛が働き合つてゐるのは明かな事實です。それを疑ふ人はない。然しながら問題はそこにはありません。問題は彼等が資本階級に對しても愛を以て働きかけてゐるか如何かといふことになるのです。

長い歷史の道程に於て、彼等は資本階級に對して愛を以て仕へることを教へられました。教へられたのみならず、人類として有する彼等の本能によつて愛を以て働きかけました。大體に於て、古來、勞働階級と資本階級とのいづれが、より以上の愛と忠實さとを以て資本階級と勞働階級とに對しましたらうか。勞働階級が資本階級に捧げた愛と奉仕と、資本階級が勞働階級に捧げた愛と奉仕と、どちらが大きかつたでせうか。主人のために生命を賭した從僕と婢妾とを私達は多數に知つてゐます。然しながら從僕婢妾のために命を隕した幾人の主人を私等は見出し得るでせう。勞働階級は實に何百年何千年といふ間、資本階級への責任と彼等が感じてゐたものゝ爲めに、又自分の立場に自分が忠實でありたい爲めに、夥しい犧牲を甘んじて拂ひながら、奉仕の生活を續けて來てゐたのではなかつたのですか。その上如何なる愛を以て私達は彼等に訴へねばならぬのですか。

しかもその犧牲と奉仕とが誤つた神に捧げられたそれであるのを遂に發見した時、彼等の仕へてゐた資本階級が、神の敵であるのを發見した時、彼等は如何して資本階級に愛を感ずることが出來ませう。この階級を愛することが神の正義に背くことであるのを實證した時、彼等の愛が怒りに變るのは當然ではありませんか。

飜つて資本階級の愛に訴へますか。資本階級がその存在を保證する爲めには、その階級内の人數が成るべく少なく(從つて一人に對する資本の集注が出來るだけ多く)、而してその階級が使役し得る勞働階級内の人數が成るべく多い(從つて勞働階級の生活狀態が或る限度まで出來るだけ困難になる)ことを必要とします。この條件が履行されなければ、資本階級は決して存在し得ないのです。かくて資本階級はあらゆる手段を講じて、自分と勞働階級との間の埒を高くし、勞働階級から資本階級に移らんとするものゝ侵入を防止せねばならぬことになり、人類全體を互ひに相隔たつた二つの分野に峻別する結果を馴致します。それ故資本階級の愛は如何しても勞働階級に流れ出よう筈がありません。何故ならば、他階級への愛の流通を妨げる埒は資本階級自身が作製したものであるからです。若し假りに資本階級が勞働階級に對して愛の現はれなる慈惠をなしたとしても、それは勞働階級から奪略した餘剩價値の一部分(常に一部分)を返濟するに過ぎないのです。全部を返濟したら、資本階級の存在は成り立たなくなるからです。從つて資本階級も、その階級の存立を條件とする限りは人類的の愛を以て働く餘地はあり得ないのです。

人類愛、それは美しい言葉です。然しながら勞働運動の存續する限りは、その實行は絕對的に不可能です。こゝに於てか人類愛を標語とする指導者の存在は、勞働運動のかゝはる範圍に於ては意義をなさないことになるのです。

故に勞働運動に於て、勞働階級の指導者は英雄であつてはならずして、實に運動そのものから生み出された一時的の仕へ人であらねばならぬことになります。だから、勞働運動の道德的根據を考へる場合に於て、考察の主體となるものは、勞働運動そのものでなければならないのです。この點を明かにした以上、私は次號に於て更に私の思ふところを申し出で得る順序になつたのです。(以上、「泉」第二號所載)

○

前號に於て、私は勞働問題がその指導者の任意的發意によつて解決されるものではなく、勞働問題の內在的な動向そのものに依據するものであると申し出ました。而してその內在的動向そのものは、あなたの提唱された理想と、その實質に於て同一のものなのを闡明しました。こゝには勞働問題が實際的な問題としてその解決を實現するに當つて、如何なる動機と經路とを取るべきであるかについて考へて見たいと思ひます。

あなたの提唱に從つて、愛によつて凡てが處理されねばならぬといふこと、從つて權力の使用によつて所求の環境を建設しようとすることの不徹底であるといふ事、これを指導者の方針として考へずに、勞働問題の要望として考へて見ようと思ひます。

私は前文に於て、人類を二つの分野に峻別した埒、卽ち勞働階級と資本階級との區分を餘儀なくせしめた埒が、資本階級の手によつて造り上げられ、而してさう造り上げられねばならぬ事情にあつたと申し出ました。埒は資本階級が設けたのです。彼等自らがそれを破る理由はありません。又實際今に至るまで破らうとした例しがありません。それを破るべき手がありとすればそれは勞働階級のみです。人類全體を一つの大きな生活の流れに合せしめる鍵は、勞働階級のみが握つてゐるのです。勞働階級の人類的愛が深ければ深いほど、この埒を除かんとする要求は強くなる筈です。この埒を憎み且つ破壞せんとする衝動は強くなる筈です。それが勞働運動を實際に成立せしむる唯一の力となるところのものだと私は信じます。あなたの云はるゝ愛といふ觀念は、勞働階級內にあつては、實にかくの如き形に於て働き、かくの如き姿となつて現はれてゐるのです。勞働階級は本當をいふと、長年の間、資本階級から虐殺、謀殺、故殺(言葉通りにさうです。それらの行爲が卽座に行はれないで、なし崩

しに行はれたといふだけのことです。如何なる暴戾な君主の失態も、資本階級が勞働階級に對して與へた失態に比べれば遙かに輕微でまた小規模なものです）、其の他の虐待を受け續けてゐたにもかゝはらず、資本家そのものを恨まずして、資本家の存在を可能ならしめた制度を恨んでゐます。勞働問題の原理は實にこの心理から生れたのです。或る人の如きは、勞働問題として制度の非が主張されるのを見て、それを全然唯物的であると非難し、制度の變革位で人類生活の狂ひが止まるやうなら何の面倒もないことだがといふ說を高調してゐますが、若し勞働階級が制度を非難する代りに、資本家を非難したら、而して積年の暴逆をその正しき報復によつて矯正しようとしたら、そこにどんな恐ろしい虐殺が行はれねばならぬかを誰が知り得ませう。嘗ては勞働階級が斯樣の復讐に出ようとしたことがあります。然し彼等の人間的本能は、それによつて徹底的に、借り貸しなくして退ける殘酷を拒んだばかりでなく、その道理性は、如何に資本家を懲罰しても資本制度が存立してゐるかぎりは、そこに再び資本家の生起を結果して、前同樣の狂ひが生ずるといふことを自覺したのです。一人の親があると假定しませう。而してその子がパンの爲め親諸共勞働せねばならなかつたとし、勞役が激し過ぎた爲めに、一日々々と瘦せ衰へて遂に重大な病魔に犯されるに至つたとします。名醫はゐても、親はその子を診て貰ふ資力がありません。名藥はあつてもそれは彼の手の屆くところにはありません。勝れた養生地はあつてもそれは親にとつては月の世界にあるのと同樣です。子を働かせなければ親子共に餓ゑなければなりません。而して彼の周圍には、所謂文化の粹を集めた資本家の贅澤な生活がこれ見よがしに行はれてゐます。子は遂に死に脅かされ始めました。親は死身に働いて子を救はうとしました。子は遂に榮養物と看護の手不足との爲めに死にました。回復すべからざる悲しい損失が親の手には殘りました。かゝる事實は勞働階級の間には、あまり屢〻行はれてゐて、珍らしくもない事實であるが故に、それを人間普通の運命と思ひなして取り立てゝも噂しない事柄であるでせう。然しこの單なる

一事實でもよろしい、その經過の時間を引き縮めて見るとします。一人の男がその男の我儘な心を滿たさんためばかりに、一人の親の手から一人の子をいきなり引き放して來て、石の上に敲きつけて殺してしまつたのと何處に相違があるでせう。しかも一人の男が一人の子を殺した場合には法律の制裁があります。然しながら資本階級が勞働階級に臨む場合には、資本階級を擁護する爲めに主に出來上つた法律が、申し譯のやうな怪しい處置を取るに過ぎません。この時勞働階級が立ち上つて資本家の一人々々に報復の刃を振り下ろした時…………然し勞働階級は遙かに更に寛大です。勞働階級は資本主義者がかゝる罪惡を犯すに至つた資本階級存立の源頭に溯つて、それを打ち崩さうとしてゐるからです。これを打ち崩すことによつて、資本階級も亦その暴逆を特權として行使することから放たれ、人間らしい生活に這入ることが出來ると期待してゐるからです。

それ故に彼等の熱意は制度破壞に集注されるのです。この位殉情に依らずして合理的に考へられたことが、全く退けられたならば、而して愛によつての教化のみが唯一無二の眞理であるとして說かれねばならなかつたなら、而してその眞理の實現が、長い歷史に於て無效だつたのが事實によつて證據立てられてゐる以上、何處に勞働問題解決の光明は見出されるのでせう。制度破壞の運動に代つて、更に合理適切な方針が提唱され得るならば格別、それがない以上は、これに據るの外はありますまい。單なる破壞は許さるべきことではありません。然しながら他に方法が提唱されない場合、而して資本制度の破棄が人類の生活をはじめて一つの水準上に置くの結果になることだけは明かな場合、それは單に許さるべきことであるのみならず、あらねばならぬ正しい事です。さう私は思ひます。

然しながら資本階級の建て上げた埒、即ち資本主義的生產制度を破壞するといふのは、議論の上のことではありません。目前現實のきびしい問題です。石塀一つ倒すのにも、動ともすると怪我人が出來ます。況んや世界大

の大きな制度を壞さうといふのですから、思ひあやまりや、過失や、或はまぜつ返しや、惡戯やが混入するのは已むを得ないことでせう。然しそれがあるからといつて、勞働階級の底潮に動く道德的根據、卽ち資本制度破壞の精神のあるところを忘れてはならぬと思ひます。

それならば人類の二大分野の他の部分卽ち資本階級に屬する人々の愛に訴へて、問題の解決をなすべきかといふ點が今度は考へられねばなりません。これに對する答解は既に前掲の勞働階級のくだりに於て、大部分說明されたことになります。然し事の順序上、或る部分の重複を厭はずこゝに申し出て見ます。

人類の二大分野の間に埒を設け、それを成るべく高く固く築かざるを得ない立場にあるのは、資本階級であることは前に委しく述べました。自覺せざる勞働階級の人々は、資本階級の人々に對しては從來弱者の立場にあると考へてゐましたが故に、資本制度の軍略にかゝつて、相互間にパンを得るための競爭を餘儀なくされてゐたにもかゝはらず、弱者として互ひを勞はり合ふ愛の精神は比較的色濃く動いてゐるのですが、資本階級の人々になると必ずしもさうではありません。彼等は始めから強者たるの自覺を持つてゐるが故に、相互間にも自ら相對峙して讓らない傾向があります。それ故彼等の有する經濟學の原理は自由競爭であります。彼等の有する人生觀は利己主義であります。資本主義の源頭であり、且つその發達の目覺しかつた英國に於て、經濟學者としてアダム・スミスが出で、哲學者としてホッブスやスペンサーの出たのは偶然ではないと私は思ひます。かゝる傾向を持つて生活する人々にあなたの提唱なさる人類愛を鼓吹することの如何に困難であるかは、識者を待たないで知ることが出來ませう。彼等の存在は、人類に對する自然の恩惠を壟斷して、自分等の集團の專有物にしたところにのみ成り立つのですから、彼等は自然若しくは人類の意志に背いて、その立場を堅く守らねばならぬのです。個人としては如何に淚脆く、惠み深い人であつても、彼が資本家たる立場にある以上は、自分に對して餘剩價値を朝

貢する勞働者の存在を豫件とせねばなりません。彼が如何に潤澤に勞働者に恩惠を施すにしても、そこには必要に限度が設けられねばなりません。それはその恩惠の量が、必ず奪取した餘剩價値の量より少なくなければならぬといふことです。若しその限度が無視されゝば、その瞬間に彼は資本家たるの位置を離れねばならないからです。それ故如何に恩惠的であつても、資本家たる以上は必ず奪取者であつて、被奪取者を自分の支配の下に置くことを必要とするのです。所謂慈善なるものが、溫情なるものが、協調なるものが、パンの問題の根本的解決法として如何に無意義であるかゞ、この點の考察によつて判明する次第です。それ故資本階級といふ階級の存在を許す以上、卽ち資本主義といふ制度の存在を許す以上、換言すれば資本階級と勞働階級との間に埒が存續する以上は、資本家が縱令如何に崇高な愛に燃えたところが、それは畢竟結果としては虛僞の上塗りです。それ故資本階級が愛に目覺めたならば、その階級は勞働階級の要請通り兩者の間の埒を取り除く外には何等施すべき道がないのです。勞働階級は、資本家の機關なる資本制度を破壞することによつて、人類全體を一體とすることが出來るとの積極的な道德的根據を持つてゐますが、資本階級は自滅の外に何等積極的な方針を持つことが出來ないのです。單に一二の資本家が假りに彼の所有の全部を投げ出したとするも、而してその所有が如何に巨額なものであつたとするも、それはそのまゝ問題の解決には寸毫も役立ちはしないのです。然らば資本階級全部の人々が、勞働階級からの何等の示唆壓迫を受けることなしに、彼等の據つて以て立つところの制度を自發的に破壞する機運が來るでせうか。あなたは敎化の方法によつてそれが來り得ると確信なさいますか。私としては「富めるものが天國に入るは駱駝が針の孔を通るよりも難い」といつた基督の言葉が實感を以て思ひ出されます。それのみならず勞働階級としては憎しみを以てしても、その制度を破壞し得たならば、それを人類に對する功績として認めねばなりませんが、資本階級にあつては、懺悔と謝罪とを以てその埒を破壞せねばならぬ必要がありま

す。何故なら資本階級は、意識的にせよ、無意識的にせよ、長い年所をかけて自己の階級に屬しない人類の大多數を虐遇したのみならず、極力自己の階級へのその大多數の入來を妨げたからであります。而して自然が人類全體に授けようとしてゐたものを、何の道理もなく獨占してゐたからであります。是は明かに人類的罪惡です。一面に於て、この階級が先き走りに一種の文化を創建し、人類の能力が如何なる點にまで發達し得るかを示さないではありませんでしたが、それは結局人類全體には均霑されない種類のもので、人類の大多數には利用も理解も出來ないやうなものであつたのです。この位の功績を楯にして、この階級が若し善人顏をして自分を處理しようと思つたら、それは餘りに蟲のよ過ぎることゝ云はねばなりません。若し資本階級が眞に目ざめたならば、爭つて自分の築いた埒を取り壞すことに全力を注がねばならぬのみならず、それを謝罪の氣持でなさねばならぬ筈です。かくの如き謙遜な態度を果して自發的にその階級の意識として望むことが出來るでせうか。私から見ると、それは恐らく勞働階級の要求が醱酵し、激進し、動もすれば爆發せんとする後にしか來ないだらうと思はれます。或はさうなつてもまだ來ないでゐて、遂に勞働階級によつて、强制的に埒が撤囘される結果になるだらうとさへ思はれます。

即ち少なくとも從來の經過によれば、人類の二つの分野に於て、どちらの分野に自發的により早く愛が動いたかといへば、それは勞働階級の分野に於てゞあつたので、動いた以上は、運動が動いた方から起らねばならぬのは當然過ぎることです。それならその運動は如何いふ風に動くか。

あなたはその運動の目的を成就する第二の道として、「一つの權力を以て、彼等にその正しき解決を强制する道である」といひ、かゝる道は實際問題として恐らく避け難いことであり、さういふ道の取られることに同情もするが、然し決して眞に正しいことだといふことは出來ない。それは決して理想に叶ふ道ではないと斷じてゐられ

ます。而して基督が「世界の國々とその權力とを汝に與へよう」といつた惡魔の誘惑を退けて、敎化の道のみ選んだ例證を擧げて居られます。私はそれを考へて見たい。

勞働運動に於ては、資本階級よりも勞働階級が先づ動くに至る實際を私は上に申し出ました。又勞働階級が神と直面する人類生活を憧憬すればするほど、資本制度の存在を憎み、一日も早くそれを破壞せんとして動くやうになるといふことを申し出ました。卽ち勞働階級は資本階級に對して自分達の悲慘な生活そのものを以て、又代辯者の口と筆とを通じて、幾百年間訴へて來たにもかゝはらず、その甲斐のないのを知つた時、彼等は資本家達に訴へることの無益を悟り、資本家達の存在を絕滅する爲めに、制度そのものゝ破壞に取りかゝつたのです。これは近代の勞働運動の極めて顯著な特色をなすものだといふことも、既に大要は申し出ておきました。

長い間人類の生活を眞二つに截ち割つて、醜い隔りを作つてゐた障壁の破壞です。それには確かに異常な力が必要とされます。而して障壁が崩れる場合、若し資本主義制度に未練を持つ資本家側の人が、戀々としてその傍に佇んでゐたら、障壁の下敷になるのは勿論です。その障壁は勞働階級の力によつて崩されるのですから、資本階級の方に向つて倒れて行くのは勢ひとして仕方のないことで、怪我人も亦勢ひ資本階級の間に多く生ずる結果になるかも知れません。然しその責めは、公平に考へて、勞働階級にあるよりも、資本階級にあるといはねばなりません。第一、障壁を築いたものは資本階級です。その非が如何に說かれても、それを持ちこたへようとしたものも資本階級です。障壁が倒れようとするにもかゝはらず、その側に戀着してゐたのも資本階級です。かくの如くにして、怪我をしておきながら、彼等は何の面目があつて、その責任を勞働階級に嫁することが出來るでせう。

あなたは「權力」といはれます。あなたのその言葉は勞働階級が用ゐたこの力を指されるのですか。それともその階級の指導者なるものが、自己の目的の遂行の爲めに擅まに僭奪した權力を指されるのですか。あなたは後章

に於てレーニンを例として權力使用の弊害を論じて居られますがそれから考へて見ると、指導者が自ら已れに附與した權力について云つて居られるやうに見えます。果して然らばあなたはこの場合、勞働運動指導者の行動と勞働運動そのものとを混淆して居られると私は思ひます。レーニンであれ、誰であれ、その勞働運動の指導者としての資格は、彼が勞働運動そのもの丶本當の意志に自分の意志が適合しなくなつた瞬間に亡失せねばならぬのです。勞働階級の意志そのものは(地方及び時代によつて特色を有するが故に)容易に看取され得るのではなく、從つて指導者の所爲も正當であつたか否かは、容易に決定されるものではありません故、例へばレーニン一人を非難するに當つても、綿密に事情を調査した上でなければ決してなし得るところではないのです。あなたは權力といはれます。こゝで私はあなたが例に取られた基督の生活を考へて見たいと思ひます。(この事は前號にも述べておきましたから、重複するところもありますが、)基督は人間の愛に訴へる敎化の道によるのみで、曾て權力を用ひて彼等の正しき解決を强制する道を用ひられなかつたでせうか。神殿に巢喰つた商人達を基督が繩で追ひ出した例は前に述べました。それは現代に於て、淺草觀世音の堂前に集まつて、鳩の豆を賣つてゐる露店商人を追ひ拂ふのと大分違つた意味を持つと思ひます。當時にあつて神の宮は神聖無比の靈場とされてゐたのです。商人達は當時の權力階級なる祭司と結託して、民衆を愚にしてゐたのです。(丁度現代の資本階級が政府と結託して民衆を愚にしてゐるやうに、)基督はその時、祭司と商人に對して「彼等の愛に訴へ、彼等をして自發的にその問題を正しく解決せしめんとする敎化の道」ばかりを選んではゐませんでした。彼は同時に直接行動を取つてゐます。彼は怒れる民衆の一人として、又指導者として權力に依賴してゐます。又安息日が無意味に、而して多分貧乏な百姓達の生活の脅かしになるやうにのみ守られてゐるのを見出した時、「神は働き給ふ。我も亦働くなり。」といつて、麥畑から平氣で穗を取つて喰ひました。こゝにも彼は直接行動を敢てしてゐます。基督は又パリサイ

人に對して、愛による敎化の道ばかり取つてゐません。「蝮毒蛇の裔よ」ときびしい惡罵を浴せてゐます。その外聖書の中に散見する類似の出來事は、愛による敎化ではなくして、正義によつて裏書きされた憤怒憎惡の發露であり、敵の武器を倒まに用ひて攻め寄せる權力の使用ではありませんでしたらうか。基督は決して時代を超越した瞑想的理想主義者ではなくして、同時にきびしく現實に卽し、その思想を現實の問題に對して、現實の方法によつて鬪はした人であつたことを思はせます。然しながら年所と共に支配階級に降伏するに至つた基督敎は、かゝる基督の面目を目立たぬやうに塗抹して、無害（harmless）な空想的人道主義者としてしまひました。然しかゝる概念によつて基督を見ようとしたら、それは彼を全く骨拔きにしたものだと私は考へます。若し基督が單に空靈な理想の提唱者であつたなら、いかに道理の分らぬ祭司、パリサイ人と雖も、磔刑を以て彼の命を絕つやうなことはしなかつたでせう。十字架による彼の死は、彼がどれ程卽實主義者であつたかといふことを語るものでなければなりません。

唯基督のかゝはつた時代にあつては、それが英雄主義の時代、指導者崇拜の時代であつたが故に、葛藤は多く個人から個人に向つて生じたものでありました。基督も亦民衆を代表する英雄といふ形に於て現はれてゐます。けれどもこれは人類歷史の常住の相ではありません。異つた時代は異つた姿を生みます。而して勞働問題が時代の中心問題となつてゐる現在にあつては、運動が截然と二つの階級の間のそれになりました。かゝる運動の指導者が自分一箇の處置によつて働かずに、階級と共に働かねばならぬのは當然です。卽ち一つの階級が一つの人格的存在となつて、その力によつて働かねばならぬのは當然です。レーニンの如きが彼の屬する運動を指導するに當つて、自ら社會的色彩を濃厚にしたのはそれがためで、レーニンが勞働階級の意志を遵奉してゐる限り、而してそれによつて行動してゐる限り、彼の道は權力の道であると同時に敎化の道（基督のがあつたやうに）であつ

て、そこに何等かの疚(やま)しさやひけめを感ぜねばならぬ理由は存在しないと私は信ずるものです。「[20]自分はレーニンの如き人の心事を思ふ時に涙を禁じ得ない程同情を感じはするが、それだからといつて、その立場を道德的に承認することは出來ない。たゞ願くば彼等が神とその律法とを瀆さないで、自己の立場を守るだけの謙遜を希望せずにはゐられない。神の律法の神聖だけは不可侵のものとして保つて貰ひたい。若しレーニンがそれを認めないならば、彼は結局神の座をねらふところのルチフェルである。」といはれたあなたの言葉は、それを吐かれた氣持に對して或る同情を感じ得る外、その言葉の內容は深い說得力を私に對して與へてくれません。若し私の臆想が許されるなら、あなたも亦英雄主義の氣持を輓近の勞働運動にまで及ぼしてをられて、あなたの勞働運動指導者全能の考へ方が生れ出で、露國の勞農運動がレーニン及び其の他二三人の人々の指導によつて、決定的にその眞相を表示してゐると考へられたところから起つた警告ではないでせうか。然し人類全體の要求が何であり、その要求が如何にして如何に長い月日の間はごくまれ、それをはごくんだものが何であり、その障碍が何によつて、除かるべき運命にあるかを見窮めて見れば、レーニン等の、露西亞革命に於ける位置が何であり、少なくとも何であらねばならぬかは、おのづから、了解されるのではないかと思ひます。レーニンが勞働階級の意志を遵奉してゐるのなら、彼の立場と方法とは程度の差こそあれ基督のそれと同一であり、若し遵奉してゐないのなら、彼等は何時か自分で自分を罰せねばならぬ時が來るでせう。然しレーニン等の自滅する時が來ても、その爲めに、勞働階級の唯一の道なる勞働運動は廢止されることなく、依然として存續發展して行くでせう。それ故レーニン等に失態があつたとしても、それは直ちに勞働運動の道德的根據の誤謬を指摘し得たことにならぬのは自明の理だと私は信じます。

　これから二二頁以下のあなたの餘論に移ります。あなたは云つてゐられます。

(21)「その(勞働)運動の效果について考へる時に果してかゝる方法が地上の理想國を建設し得るであらうか。卽ち此の如くして建てられたる國が果して理想國としての性質をそなへてゐるであらうか。强制を以て富める者より奪はんとする心は、自らが富みたる時には貧しき者に拒まんとする動向を含んではゐないだらうか。」

これは私にはあなたの言葉とは思ひたくない言葉として響きます。あなたは人類を信じてゐられます。種々雜多な缺點や惡弊やを含みながらも、人類全體の生活によつて暗示せられる、あのかゞやかしい約束を信じてゐられると思ひます。勞働運動の根本精神が「富める者より奪はんとする心」だとあなたは本當に信じてゐられるのですか。然らば勞働運動の道德的根據を闡明する必要は何處に存在するのですか。かゝる卑劣獰猛なる力から生れ出た運動には道德を說くの餘地なきこと、塵芥に人間の心を說くの餘地なきと一般ではありませんか。思想家とは存在の種々相をかき分けて、その核心に徹する職分を擔ふべきものだと私は信じてゐます。その思想家たるあなたとして勞働運動が、强制を以て富める者より奪はんとする運動と見られるのは、甚だ皮相な見斷であらねばならぬと思ひます。第一、今の世に於ては富める者は何等かの意味に於て、他の生活を犧牲に供することなしには富むことが出來ないのです。奪ふとは富める者の自らなしたことです、さう私は思ひます。勞働運動は富める者から奪はうとしてゐるのではなく、現在の意味に於ける富める者を無くしようといふのです。大きな趣意の相違があります。然しこれらのことは既に大概云ひ盡しましたから再び繰り返しません。私はあなたがあの一連の言葉をあなたの論文から抹殺し去られんことを希望してやまないものです。

上の言葉に次いで記された數行の言葉(二三頁二行目より七行目まで)の穿鑿については、既に本論に於て言ひ盡したつもりです。勞働運動は「やがて富」まんとする運動ではありませんから、「貧しきものに悅んで分つ」べき貧者を自分の目の下に造る運動でないのは勿論です。勞働運動がその基礎を愛の上に置いてゐるのはくどい

程述べましたから改めて申し出ません。唯あなたの說かれる愛は抽象されたる愛であり、實際の勞働運動に於ける愛は卽實的の愛であるといふ相違を指摘するにとゞめておきます。

それから、

「我が國の勞働運動の指導者は殆んど盡く唯物論者である。然しながら徹底せる唯物論より愛の觀念を導き出すことは論理上不可能である。從つて唯物論より發生する社會主義及びその運動はその本來の立場を守るならば人道的であることが出來ない」

といふあなたの言葉にも私はいふべき多くを持つてゐますが、餘り長くなりますから巨細には亙りません。唯、暫く申し添へたいのは、唯物論者は、環境のみが人間の生活內容の凡てを規定すると主張するもので、從つて極端な英雄主義の排斥者です。從つて彼は古い意味に於ける指導者の否定者です。若し唯物論者にして指導者の野心を抱藏してゐるものがあつたら、それは誤たず贋物です。それは本當の唯物論者ではあり得ません。そんな贋物までを此の場合考察に入れるのは議論の內容を濁らせることです。そんな人間がゐたとしたら、やがて自滅すべき輩として無視しておけばいゝことゝ思ひます。「唯物論から出た社會主義及びその運動」が人道的であるかないかはこゝで論ずる必要のないことだと思ひます。勞働運動と、唯物論から出た社會主義運動とは併行する部分もあり、離れてゐる部分もあります。勞働運動は本質的には勞働階級自身が生み出した實際的運動であつて、學理ではなく從つて學理的運動でもありません。かゝる運動の解釋として唯物的社會主義、ギルド社會主義、基督教社會主義、サンディカリズム、無政府共產主義、虛無主義其の他夥多の主張が分化發生してゐます。かゝる場合、唯物社會主義だけを突然擧說されるのは、勞働運動が唯物社會主義の運動と同一であるかの觀を起させるだけで何の役にも立たないことだと思ひます。

それから、

「(27)最後に自分が勞働運動の指導者達に希望したきことは、彼等が必ず文化を尊重せんことである。殊に學術と藝術との價値は如何なる種類の勞働運動と雖も尊重しなければならない」

と、あなたのいはれた言葉について一言するの許しを得ます。

既に多くの人が主張してゐるにもかゝはらず、今だに多くの人によつて理解されてゐないのは「文化」といふ言葉の內容です。漫然文化といふとその意味の範圍は極めて明瞭のやうでありますが、よく考へて見るとあながちさうは行きません。

進步發達の餘地のない文化は私達に取つて最も緊要な文化ではありません。例へば希臘の彫刻といふやうなもの、日本の謠曲といふやうなもの、それは如何に勝(すぐ)れた藝術的の價値を有してゐるにしても、その線上にそれらが進步發達する可能性がない故に、私達に取つて最も緊要な文化であるといふことは出來ません。それらは私達の有する文化の示唆となり、參考となり、源泉とはなるにしても、私達の文化そのものといふことは出來ません。私達がさういふものばかりでは滿足してゐられず、何か前には無かつたものを創り出さうとしてゐる實情がよくそれを語つてゐます。私達には私達の生活にもつと緊迫した文化的所產が要求されてゐるのです。それがなかつたなら、如何に過去の文化の中に優秀なものがあつても、それをそのまゝ受け入れて安んじてゐることは出來ません。何故なら過去の文化的所產には進步發達がないからです。而して私達は自分の生活が進步發達しつゝあるのを文化的所產によつて認めたいのですから、その欲求を滿たすためには過去の文化的所產は役立たないのです。

で、兎にも角にも私達は自分自身の文化を持つてゐます。それは私達の努力の生活が萬難を排して辛苦を厭は

ず創り上げたもので、それは私達が現在所有し、將來に進歩發達せしめんとしつゝあるところの學術、藝術です。普通私達はこれを文化と呼んでゐます。ところが、かゝる意味で受け取られた文化は、即ち私達の持つ學術や藝術は、よく穿鑿して見ると支配階級即ち現在の言葉でいへば資本階級に屬した學術であり藝術であります。人類全體に屬したそれではありません。それらのものゝ中には勿論、人類全體に共通して役立つものもありませうが、それが鑑賞若しくは利用される範圍からいふとそれは可なり嚴密に資本階級の獨占に歸してゐるのみならず、資本階級に利用されて、勞働階級を虐げる結果になつてゐるものさへあります。勞働階級は、それ故、それを尊重する前に、何が彼等に緊迫した關係にあるか、何がさうでないかを見分ける必要を感ずるのは理の當然です。その結果として、現在私達が立派な文化的所産と思つてゐるものゝ中に、勞働階級に取つて無用の長物である底のものが現はれ出ないとは限りません。恐らくそれが多數にあるでせう。これらのものはその當時にあつて、その國々に取つては驚くべき文化的所産であつたに相違ありますまい。然しながら私達に取つては、その當時の人間の生活の狂ひの甚しさを思はせる好奇的物件に過ぎません。それと同じやうなことが來るべき時代に生起したところでそれを責めることは出來ないと思ひます。若し抽象的な意味に於ける文化、及びその所産なる學術、藝術といふことならあなたの杞憂は恐らく杞憂に終るだらうと思ひます。人類の生存する限り、而して人類が退化の道程に這入り込まない限りは、學術とか藝術とかに對して人類の要求は決して無くなるものではないにきまつてゐますから。若し人類の實生活が革命に遇つた後、私達が今持つてゐる文化的所産中珍重されるものがあつたらそれは人類全體にかゝはつた所產だけがさうなるでせう。段々發達して來た資本階級の生活の要求にのみ役立ち來つた文化的所産は當然消えて失くならなければなりますまい。而してそれは極めてよいことだと私は思つてゐるものです。

まだ申し出づべきことは殘つてゐるかも知れませんが、この位にしておいて、私はこの論文に對する結論に急ぎます。

倉田兄。私は思ふ存分なことをいひました。私が勞働運動について考へてゐることを間違ひのないものゝやうにしてあなたの所論に論じ及びました。しかもそれは言葉の末に拘泥したところさへあるかも知れません。然し私はあなたの意味せんとせられたところを全く無視してはゐないつもりです。あなたは勞働運動の避くべからざるのを認めては居られますが、それが如何にも荒々しく、これまでの人間の努力を無視した手段方法によつて遂行されんことを、人間文化の爲めに深く懼れてゐられるのです。その點からの警告としてこの論文が發表されたものと私は感じてゐます。その點については私も亦全然同感するものでありますし、又私自身が資本階級に生れ育つた人間として運動の本質について十分の理解が出來かねてゐるかをも危ぶんでゐるものです。然し一九〇六年の外遊以來私が常に考へ續けて來てゐたところに依れば、現在の生活様式が資本階級のものゝ爲めにも勞働階級のもの丶爲めにも甚だしく不合理であるといふ點だけには如何しても疑ひを挾むことが出來ません。而して勞働階級の要求の中にこそ將來この狂ひを正しくする胚子が隱れてゐるといふことも見出さないではゐられません。それで私があなたの「勞働運動の道德的根據」を論ぜられるのを知つた時、私はあなたがその根據は勞働階級の要求の中に存在し、それを認めて自分の非を改めようとしない資本階級の態度の中に大部分の禍根があるのを發かれることだとばかり思つてゐたのに、結果はその反對であつたのを見出して、少なからず失望を感じたのでした。この大きな問題の解決は、資本階級が悔い改めざる限りは、決して平和に行はれ得ないのは目前のことだと私は思ひますが、あなたは如何お考へですか。この場合勞働階級が惡いといふことは勿論、兩方共惡いといふことさへ出來ないと思ふのですが如何ですか。あなたは現在日本の知識階級の中に多數の渴仰者を有してゐられます。

あなたの言葉は強い暗示となつてその人達の心に訴へてゐます。この重要な點を若しあなたがもう一度考へて下さるなら、その幸ひに浴するのは私ばかりでは必ずないと思ひます。少なくともこの論文と共に、あなたが勞働問題の道德的根據について「富める者」に訴へる一文を草せられる時節の到來せんことを、私は希望してやみません。それが無ければ、この論文は本當の完璧には達してゐないと思ひます。何故なら、あなたは現在の人類生活が二つの分野に峻別されてゐるのを明かに認めて居られるからです。あなたは一個の勞働者を以て自分を見て居られますから、その注意がおのづから勞働階級に餘計傾いて、自分の仲間に對して忠言を送つたといふ結果になつたのも一面無理はないと思ひますが、一個の思想家としては、勞働階級に對してと同時に、資本階級に呼びかけられても、決してその僭越を思ふ人はないと信じます。

思想家としてゞはなく個人として、或は問題を客觀視せずに自己の問題として、現在のやうな時代に處する道はおのづから異なります。私の個人としての立場（卽ち藝術に關係するものとしての立場）については、本年一月號の「改造」に申し出てありますから、こゝには述べませんが、感情生活までを勘定に入れた私は――而して藝術家の生活には感情生活は大きな要件です――資本階級に屬するものであつて、しかも思想家としての私は自分の屬する階級を全然不合理として否定してゐるが故に、藝術に於ても思想の上でも私のなし得るところは、資本階級の人々に訴へてその生活の棄却を促す外には道がないと信じてゐるものです。あなたに宛てゝ書いたこの未熟な論文も、その副目的としてかういふ氣持を持つてゐるのを申し添へておきます。

四、「積極道」について

あなたのこの提唱について、私が以前にそれを二度ほど讀み返した時には、申し出づべきことが可なり多量にあ

るやうに感じてゐましたが、この文を草するに當つて更に精讀して見ると、いふべきであると感じてゐた點の多くは、その必要がないものとなつたやうに思はれます。といふ意味は、あなたの提唱の私に多く關はりのないのを發見したのではなく、この提唱はあなたの將來の生活の目論見としてなされたものであつて、あなたの現在の生活そのものゝ表明ではないといふことを發見したからであります。卽ちこの提唱は將來に實現さるべきあなたの生活の理想卽ち價値標準として擧示されたものであるのを發見したからであります。

然しながら、實際いふべくして行はれ難いのは、現實卽理想の境地です。生活の前途に理想があるのではなく、生活そのものが理想であること、卽ち瞬間々々の生活の中に目的が全く含まれてしまふこと、卽ち現實に堅く卽することにそのまゝ理想が體現されること、これに越して望ましい生活もなく理想もないとは私の常に思ふところであり、又心懸けてゐるところではありますが、その實現は殆んど超人力的です。從つて人には已むを得ず目論見といふ分解的な生活が生れ出て來ます。その目論見について彼れ是れいふのは、實は可なり浮き足な仕事です。私があなたの「積極道」についてものをいふのは、この意味に於て餘計なおせつかいであるの嫌ひを免れません。然し私は假りにその點の許しを豫め得ておきたいと思ひます。

あなたはあなたの從來の生活を反省して或る不足を感じて居られます。あなたの從來の生活は罪を造らぬ生活であらうとすることでした。然し[25]「『罪を造らぬ』と云ふ事と[26]『天命を全うする爲め』と云ふ事とは、多くの相違する點を持つてゐる」ことを發見されるに至りました。「只罪を避けんが爲めに與へられたるものを發展せしめないならば、造化の意志に適はないものと云はなくてはならない。然しながら與へられたるものを生かすことゝ、罪を造らぬ事とは果して兩立するであらうか」といふことが次の問題にされてゐます。謂はゞ火事を消すことゝ花見をすることゝが、どう調和されるだらうといふやうな問題になる。西田天香氏は、[27]「火事が起つてゐる間は先

づ火を消すことを初めにし、花見は後廻しにしなければならない」といつた。併し、火を消す事が出來ない間は美を樂しむことが出來ないとすれば、若し生きてゐる間に火を消すことが出來ないならばどうであるか。西田氏は「そこが殉教者の十字架であると云はれた」さうである。然しあなたは「[23]火を消しながら花見をする二元の道を執らなければならなかつた」ので一燈園の生活から離れてしまはれた。あなたに從へば「[29]この二つの願ひはそれ自身に矛盾す可き筈のものでない、正しい願ひとして肯定する。故に此の二つの願望は同時に滿たさる可き筈のものである」。「[30]我々は創造主の偉大なる構圖、造化の最後の意匠を想像して見なければならない。貧弱にして、消極的なる平和世界は、豐富にして積極的なる爭鬪の世界より果して造化の意志に叶ふであらうか。私はさうは思へない。より大なるもの、より强きもの、より美しきものを造り出さんとする意志は確かにこの世界の一つの意志である。若しその爲めに或る爭鬪が止むを得ないならば、縱令その爭鬪を認めても、尙その意志を全然排斥するよりは造化の心に適ひはしないであらうか。素よりその爭鬪は克服せらるべきものであつて、理想世界に於ては存在を許されざるものであり、その爭鬪を消滅せしめんとするも亦世界の一つの意志である。我々の取るべき道は不調和を含みながら、次第に調和に達すべき道である。火事を消しつゝ花見をする道である」「[31]私は嚴密に考へる時、かゝる瞬間を許さずしては、私の生活法を立てることが出來ない。立てるに堪へないのみならず、立つべからざるものと思ふのである」。から考へて居られます。

かくあなたはこれまでの受難、忍苦、捨身、奉仕の道を肯定すると同時に、それのみの存在の完全でないのを思ひ、「[32]强固なる超人の履む道」なる「[33]人間性を超越して、非人情の世界、超人の世界、覺者の世界に達しなければならない」。その世界を前の罪のない世界と兩立させなければならない要求を感じて居られます。「然らざればこの宇宙の意志に合致した生活、享受と創造の生活に入る事が出來ないのである。眞の生活となることが出來

ないのである」と主張されます。然しながらかゝる生活ばかりでは現在の人間生活には必至的に矛盾が生じて來る。

それは「[34]只我々の現在の力量が不足し、現在の世界が不調和である爲めの經濟的關係より矛盾するのである。あるがまゝの我々が、願ふところの我々でない爲めに生ずる矛盾である。願ひそのものゝ內に於て矛盾してゐるのではない。我々が願ふ所は、我れも生き、他人も生きん事であるが、力の缺乏の爲め、已むを得ずして他人の死を傍觀して、自ら生きるのである」ところから生ずるのだとして居られます。然しながらこれが人間世界に已むを得ないことだとするならば、「[35]我々は捨身主義と、ギリシヤ主義とを同時に兼ね行ふ外に選ぶ道がないのである」。

あなたは更に一轉して「[36]然しながら我々は若し此の二元を肯定して生くべきものとせば、如何にして現實生活に於て、この二元の調和を求むべきであらうか」といふ問題に對して居られます。而して「[37]眞の調和は此の二元が人格の內に於て、包攝、統合されて、一つの統覺となり、一つの行爲が動機の分裂を意識さるゝことなくして發現し、そのまゝ此の二元を含んでゐるのでなくてはならない」「[38]私はかゝる覺者の境涯に達することによつて、此の二元を調和せんことを最後の念願とする。併し私が此の最後の念願を成就して覺者となるためには、猶一度通過せざる可らざる一つの世界の存在することを痛感する。私は今直接にはその世界を求める。即ち基督教主義と同じ權利に於て、ギリシヤ主義を肯定する事から始める」と結論されます。

以上の拔き書きはあなたの所論の本筋だけは間違ひなく拾つてゐると信じます。勿論この論理に纏はる巨細な氣分氣持はこゝには迚も盡すことが出來ません。あなたが提唱されたやうな氣持は徹底的な強者若しくは弱者には起り得ないものです。強者と弱者とは彼自身以外の世界を持つてはゐません。従つて彼の立場には、善いにせよ惡いにせよ揺ぎはありません。あなたは不幸にして、而して幸福にして、孤獨を唯一の力源とする強者の境地

と、自他の區別を知らない弱者の境地との中間に生を得られました。私はそれを不幸だといひます。何故ならば、迷悟の輪廻に永く苦しまねばならぬからです。私はそれを幸福だといひました。何故ならば、人間の大多數はあなたと共に苦しんでゐるからです。あなたは誤たず人類苦を體驗して居られるからです。殊にあなたはこの人類苦を鋭敏に細微に感知する觸角を授かつて居られます。而してその觸角を十分に働かさずにはゐられない逆境と順境とを持つてゐられます。あなたの肉體其の他に纒綿する逆境、及びあなたの衣食住に惠まれた順境は、あなたに必要と餘裕とを與へました。あなたがその兩者に打ち摧かれず、それらのものに打ち克つて、自分の立命の地を創り出さうと猛進される態度は、私を感激させます。而してそれは私達に取つての尊い賜物であるでせう。これからの私の申し出に於て、私はこの點を決して忘れまいと思ひます。然しながら所論を明瞭にしようとする必要上、さうした氣持をわざと押し鎭めて物をいふことがあるかも知れません。

第一にいひたいのは火事と花見との例についてゞす。火事が他人の家の燒けるのであつたらそれは問題ではありませんが、自分の大事の家が燒けてゐる時、しかもその火が自分の着てゐる衣類にも燃え移つてゐるやうな時、人は一瞬たりとも花を見たい氣持を起すでせうか。嘗てあなたの論文の趣意を紹介した時、全く衣食の術に窮迫した一人の友の發した言葉はこれでした。私は返す言葉を知りませんでした。あなたはそれを如何考へられますか。

兎まれ私にはかう見えます。あなたの提唱は、實生活に餘裕のある、少なくとも實生活に餘裕あらしめる能力を修練する餘裕のあり得た人の提唱であつて、實際能力はあつても、それを修練する餘裕もなければ、實生活にも現在餘裕のない人々の提唱し得さうな事柄ではないと。概念的にいへば、人間である以上は、誰にでも花を見たい願望はある筈です。然しながら實際に於て、花見をする餘裕の許されない人、而してしかも嘗て花見らしい

花見をした經驗のない人に取つては、その願望は全く無いに等しいといつてい丶でせう。花見といふ言葉であなたが意味してゐるやうな享樂の氣持を眞に分け前する人間は、この地球の上に何人ゐるでせうか、あなたのやうな趣味の高さにまで進み得た人は、實際人類の極めて小なる部分であるのを知らねばならぬと私は思ひます。人類の最大多數は花見なるもの丶前味さへ知り得ないで、唯漫然たる不滿の中に、自家眼前の火事のために苦しみ藻掻いてゐるのです。結局あなたの提唱は私達有閑階級者の提唱であつて、人類の大多數には當分用のない問題です。この事はお互ひにはつきりしておかないと飛んでもない思ひあがりをしたり、間違ひをしたりする結果になつて、この問題を現在の人類に直接共通する重要なことの如く鵜呑みにする馬鹿々々しさに陷らないとも限りません。

然しながら私達の如き有閑階級者に取つては、この問題は極めて重要な意味を持つて逼つて來ます。私達は何をいつてもまがひのない有閑階級です。而して、有閑階級者は自分達で解決せねばならぬ特殊の問題を持つてゐることは、無閑階級がその特殊の問題を持つてゐるのと同樣です。私達は力の限り自分達の問題を徹底的に最上に解決せねばならぬのです。あなたの提唱が無益でないばかりでなく、極めて重要であり得るのは唯此の點に繫つてゐると思ひます。

あなたの苦しまれた二つの道に私も亦苦しみました。程度の深淺に於て私の苦しみは淺かつたかも知れませんが、その苦しみの方向は同じでした。私は自分の苦しみを突きつめて行つて本能を見出しました。その本能を見出す前に、あなたの所謂基督教主義及びギリシヤ主義の二つの内的要求を色々な形に於て發見しました。客觀に立脚するか主觀に立脚するか。宿命を信ずるか自由意志を立するか。利他か利己か。目的に生活を引き寄せて行くか、生活に目的を引き寄せて來るか。柔順か叛逆か。唯物か唯心か。理想主義か現世主義か。靈か肉か。アポロ

かディオニソスか。神人か人神(God-man—Man-god)か。それは私の生活が一つの展開をなすごとに、あらゆる種類の對立的な形に於て私の前に現はれました。私はそのいづれに據ることも出來ず、同時に兩者に據ることも出來ませんでした。何故ならあなたの火事を消すことゝ花を見ることゝは、全く相反して見える內部の要求でありますが故に、而して私にあつても、あなたにあつてのやうに、その要求は殆んど同等の强度を以て私には感ぜられましたから、私は交互的にその二つの道に據ることさへ不安でした。一方の要求を滿たしてゐる場合でも、常に他の相反した要求が脅威となつて感ぜられました。いづれの場合にあつても、人間的責任が不完全にしか遂行されてゐないといふ自責の爲めに、沒頭しようとしてゐる道にさへ、沒頭し得ない焦燥にあらねばなりませんでした。戲れごとのやうですけれども、人類全體が奉仕の生活をなすやうになる時のことを考へたら、殆んど滑稽にさへ感じられるやうな、あり得ない生活が眼前に浮んで來ました。奉仕(自分を空しくしての奉仕)の生活は實は空ら事だ。現在の生活を些か住みよくする爲めの淺い方便に過ぎない。理想的社會が出現して、他人の奉仕を必要としない狀態が實現されたら放げ棄てられなければならない生活だ。自分の生活をこの方便の爲めに捧げることは何んとしても忍び得ないことだ。と云つて、全く奉仕のない生活、凡てを自分一箇の欲求の爲めばかりに用ひて行く生活は、現在に於ては一瞬間も成り立たないばかりでなく、私の心が許してはおかない。許しておかないものが心のどこかに宿つてゐる。

かういふディレンマに追ひつめられた結果、私は自分と自分でないものとを出來るだけ截然と別けて見ることを餘儀なくされました。而してあなたの云はれる基督敎主義は自分でないものに凡ての力を置くことであり、ギリシヤ主義は自分であるものに凡ての力を置くことだと知ることが出來ました。

こゝまで來て私は或る發見をしました。自分であるものに凡ての力を置くといふことはよく解る。それは人は

何といつても自分のことを一番よく知つてゐるといふ意味に於てよく解る。然しながら自分でないものに凡ての力を置くといふことは、概念的には解ることで、實際には少しも解らないことだ。本當は自分でないものであつても、何等かの意味に於て自分とかゝはりを持つてゐるものでなければ、その存在さへ理解の出來る筈はない。即ち一見自分でないものと雖も、それに凡ての力を置き得る爲めには、自分と何等かのかゝはりがあらねばならぬといふことを豫件としてゐる。即ち自分でないものに對する問題も結局は自分の問題に過ぎないのだ。かういふ發見でした。これは私に取つては小さな發見ではありませんでした。

これから私はこゝに自分の生活に對する反省に重點を置くやうになりました。つまり私は自分の本當の要求に從つて動く外はない。自分をもつとよく見詰めて見る外はない。自分に於て何が深奥なところに力として働いてゐるか。それを發見せねばならぬと決意しました。

この結果として私の眼からは、理知と道德との梁が取り除かれました。奉仕とか犠牲とか獻身とかいふ要求が無意味な言葉として響いて來ました。無内容な單なる策略として映じて來ました。而して理知とか道德とかの奥に、それを創り出す根柢的な力のあるのを朧ろげながら感知するやうになりました。それは私が本能の發見と云つたところのものであります。

私のいふ本能とは個性の生長を促がし進める力です。あなたの云はれるギリシヤ主義の傾向に當るやうにも見えますが、基督教主義と對照されたギリシヤ主義ではありません。基督教主義に對照されたギリシヤ主義は理知といふものに非常な重さを置いてゐます。然し私の本能はいつでもそれを破壊しよう破壊しようとしてゐます。個性の生長は如何して成し遂げられるかといふと、私が交渉を作つた私以外のものを私の中にきびしく取り込むことによつて生長します。だから他人の眼からは奉仕とか獻身とか見える所謂基督教的行爲も、私自身が云ふな

らば、既に私自身に攝取した外物に對して奉仕獻身をしてゐるので、それはつまり私自身の爲めに私自身に對して奉仕獻身と見えるものをしてゐるのです。それ故例を火事と花見との例に戻すなら、私が火事を消してゐたらそれは花見をしてゐるのと同一事です。その時火事は、第三者にはさう見えなくとも、私からいふならば私の自家の火事であつて、私が花見をする時と同樣に、火事を消すことが私自身の生長に役立つてゐるのです。花見も私自身の生長に役立ち、火事を消すのも亦私自身の成長に役立つのです。但しこの場合、若し火事といふ事件が私といふ個性と何んのかゝはりのないものだつたら、その火事がいかに蔓延しても、私はその火事に對して冷然としてゐることでせう。火事を消すことの必要は、火事だからといふのではなく、その火事が私にかゝはつてゐるからです。火事なり花見なりが私にかゝはる程度が同一である以上は、火事を消す時にも花見に劣らない熱意を以て火事を消し、花見をする時にも火事を消すに讓らない純情を以て花を見るでせう。この場合、どつちが功利的にこの世により役立つかといふやうなことは問題にはなりません。

大切なことは、それらのことによつてどれ程自分が心ゆくやうに生長するかといふことです。その爲めには自分の生長慾に對して能ふだけ慾深くなるより仕方がありません。卽ち外界から出來るだけ廣く深く高く攝取することの外にありません。而して私の生長は義務ではなくして享樂であるのですから、如何なる被攝取物も結局私の享樂の的です。花見でも火事でも。

私の本能が私を不完全から完全に生長させてゐるやうに、私の外界も不完全から完全に赴かうとして喘いでゐます。私に攝取された外界に私が働きかける時は、私としては私自身に働きかけてゐるのですけれども、恐らく第三者には、私が私以外のものに働きかけてゐるやうに見えるでせう。例へば前章に於て、私は資本制度の滅却を極力主張しました。私自身は勞働階級に屬しないが故に若し私が自分の生長だけを希ふのならば、資本制度の

滅却などは問題にならないのみか、その存續をこそ主張すべきであるといふ風に見えるかも知れません。然し私は既に勞働問題といふ問題に不完全にせよ、かゝはりを持ちました。私の生活の中には、その問題が私の生活の一部分として活きてゐます。私がこの問題を私の内部の正しい座に置かなければ個性は生長を妨げられます。私自身の仕事(即ち文藝家としての)を勵まうとすれば、この問題が來て私を妨げます。お前が呑氣に仕事をしてゐる間に、民衆の大部分は餓ゑてゐるが、それでいゝのかといひます。お前の仕事はその民衆と如何繋がれてゐるかといひます。お前がお前の中に取り入れた人類の全要求を滿たさず、お前の内部の分裂をそのまゝにしておいて、お前は生長が出來ると思つてゐるのかといひます。私の本能は私が安全な地帶に立つて歩いてゐないことを告げます。私の攝取した外界がやゝともすると私から離れて無緣のものにならうとしてゐるのを警めます。かくて私は今私が持ち合せてゐる力一杯でその問題をすわりのいゝところにおきかへねばならなくなりました。私は產業制度の不合理を告白しました。その不合理を幾分でも取り除ける實行的第一步を踏み出しました。私の仕事を、私の訴へ得る最も近い人に、私が有する最も理解し易い言葉と行爲とで說きすゝめ得る方向に進ませました。これは何も私が他人に奉仕しようとするからではありません。私が自分自身の完全へ向つての生長に餘儀なくされるからであります。私に直接のかゝはりのある人が、私の說きすゝめる方向に生きて行つてくれなければ、私自身の内部生活が矛盾を感じてやまないからです。從つて私のすることが勞働問題の解決にとつての迷惑とならうとも私としては致方のないことですし、偶ゝ何かの役に立つ結果になつたところが、それに對する感謝は私に向けられると見當違ひになります。かういふ私の態度が萬一にも火事を消すことになつたとしても、私自身からいふなら花を見てゐるのと同一です。私としては自分自身の滿足があつてそれをしてゐるのに過ぎないのですから。何も火事を消すのを義務責任として、してゐるのではないのですから。

かういふ立場は、世間一般に今まで成り立つてゐた約束を無視することになります。少なくとも、制度とか道德律とか、人々間の關係を規定する約束を、私自身の本能的要求より下位に見積ることになります。二つのものが衝突した場合には、私はいつでも私の本能の命ずるところに從はうとすることになります。私は如何なる意味に於ても世の中に犧牲とか獻身とか奉仕とかいふものが高い德として認められようとするのに反對します。それが德と認められるところに、その德は滅び亡せてしまふのだと信じてゐます。外面的に犧牲とか、獻身とか、奉仕とか見える行爲があつたとして、それが無理な心の動き方から行はれた場合には、犧牲でも獻身でも奉仕でもなくして、それは僞瞞か野心の發露に過ぎず、自然な心の動き方から行はれた場合には、生命の滿足のために行はれたものであつて、それは獲得でこそあれ、犧牲でも獻身でも奉仕でもないと信じてゐます。

現在私は如上の生活態度を取つてゐます。この態度の上に立つてあなたの提唱を考へて見ると、あなたは少し無理に心を動かさうとして居られるのではないかと思はれるのです。あなたは自己の爲めでなく他の爲めにのみ働かなければならぬといふ責任を、深く感じようとしてゐられるやうに見えます。あなたの用ひられた例でいへば火事の場合がさうです。あなたに取つてはその場合火事は他人の家の火事です。それが消されたことによつて喜びを感ずるのは他人です。あなたは他人の喜びの爲めに、自分の中から何かを犧牲に供さねばならぬ義務責任を感じて居られるのです。他人の家の火事があなたの家の火事と同樣な感じを以て受け取られる心の動き方になつてゐないのに、強ひて花見を止めて火事を消すべきだと sollen に重きを置いて居られるやうに私には見えます。そこにあなたの心の不滿が芽ざすのではありませんか。花見をしないのが惜しまれるやうな未練が出て來るのではありませんか。若し、あなたが他人の家の火事を自分の家の火事と同樣に感ぜられる程、他を自己の中に攝取した場合にのみ、火事を消すことに力を用ひられたら、花見をしなかつたのを悔むやうなことはないと思ひます。

自己にしつかり攝取されたものに對しての外は、動かないといふ態度さへ取られたならば、あなたの感ぜられる矛盾は、ひとりでに消えるものではないかと思ひます。そこにはもう、基督教主義もギリシヤ主義もないと思ひます。一筋の道があるばかりだと思ひます。

實際人間はあまりおせつかいをすることに慣らされてしまひました。衷心の欲求のないところに輕々しく動く習慣をつけられてしまひました。それは一寸見にはお互ひが社會生活を導いてゆく上に大變便利です。それ故社會は頻りとかくの如きおせつかいを讃美します。さういふ行爲が所謂社會道德の骨子とさへ認められます。而してそれが社會若しくは人類に對する奉仕といふ言葉でいひ現はされます。而してその行爲に對して、社會は何等かの方法によつて報酬を送ります。言葉の上の感謝から始まつて、勳章となり、賞金となり、Hero の尊稱となります。然しながら私達が眞に尊敬せねばならぬ釋迦とか基督とかいふ人がそれらの社會的報酬を目あてにしてあの生活をしたのだとは誰も考へる人はありますまい。彼等は彼等自身の最上の生長即ち滿足の爲めにあの生活をしたのです。彼等の生活そのものが彼等の報酬だつたのです。しかも社會は彼等の行爲の獻身とか奉仕とか見えるものに對して嘆美嘆賞のあらん限りを獻げてゐます。彼等が要求し得ないものを社會は爭つて獻上しようとしてゐます。犧牲、獻身、奉仕の德は報酬を無視して行はれゝばこそ犧牲、獻身、奉仕なのだと社會は教へておきながら、たま〱さういふ行爲が現はれゝば、爭つて先づそれに對する報酬に急ぎます。あまり見え透いた道德的僞瞞ではありませんか。私達が眞に彼等を尊敬せねばならぬのは、さういふ意味に於てゞはないと思ひます。彼等が如何に彼の個性の中に攝取したものに對してゞなければ動かなかつたか、而して彼等の攝取した範圍が如何に廣大無邊なものであつたか、その點に驚かされてしまふのです。人間の生命がどれだけ生長し得るものであるかの實證を與へてくれたのに驚かされてしまふのです。而してそこに尊敬を感ぜなくてはゐられなくなるので

す。即ち彼等が人間向上の可能性の適確な證據を與へてくれたのを尊敬せずにはゐられなくなるのです。

若し基督や釋迦の行爲のみを標準にしてかゝつたら、屹度私達の生命に割れ目が出來るのは知れ切つてゐます。何故なら私達は彼等ほど高く深く遠く環境を攝取し盡してゐないから、彼等の行爲そのまゝ實行することは、私達の全くかゝはりのない世界に對して私達が漫然と働きかける結果になるからです。そこに私達のまことの要求と、より外面的な責任感との間に大きな隔りが出來るからです。玆に私達の生命の分裂が始まるのではありませんか。二元の苦痛が起つて來るのではありませんか。あなたの消極道と積極道との葛藤も如上の經緯にその根を持つてゐはしないかと考へてはならないでせうか。

もどかしいことではあるかも知れないが、私達は私達の生命內容卽ち私達が確かに握り得た世界を正しい關係におくことにのみ働かねばなりません。檢證の結果、それはいかに狹い範圍であつても仕方のないことです。思想家としても實行家としても、濫りにその範圍を拔け出て仕事をしようとしたら失脚します。それは結局私の生命を外面化して混亂を來たし生長を阻止するのみならず、人類に對して一層僞瞞の種を播くことになります。先づ働きかける前に、その働きかける對象を立派に自己の中に攝取することが大事だと思ひます。一度攝取された以上は、それが火事であれ花見であれ、それに働きかけることは、自己の生長の爲めであるが故に、火事も花見であり、花見も火事であります。西田天香氏が花見を捨てるのを「殉教者の十字架道である」[9]と云はれたとしたら、私はその言葉を疑ひます。

私はまだ私の考へてるところを十分にはいひ足らないやうに思ひますが、私のこの心持は「惜しみなく愛は奪ふ」の中に少し縷說しておきましたからそれに補はせることにします。

偖て私はあまり饒舌に過ぎたかも知れません。あなたのこれらの言説に純眞な氣持は感じながら餘りに逆らひ過ぎたかも知れません。而して私の思想にも恐ろしい誤謬があるかも知れません。唯私はあなたの友情を信じて思ふ存分を申し出ました。この稿が印刷に附せられてあなたに讀まれた後、私はあなたの病床を訪れて存分の叱正を請ひたいと思つてゐます。言葉が思はず失禮に亙つてゐたら私の心持へのあなたの理解に縋つて許しを乞ひます。

(1)「靜思」序文　二頁
(2)同　上　二頁
(3)同　上　三頁
(4)同　上　四頁
(5)同　上　三頁
(6)「靜思」本文　三頁
(7)同　上　五頁
(8)同　上　六頁
(9)同　上　六頁
(10)同　上　七頁
(11)同　上　八頁
(12)同　上　九頁
(13)同　上　一一頁
(14)同　上　一一頁
(15)同　上　一一頁
(16)同　上　一二頁
(17)同　上　一二頁
(18)同　上　一二頁
(19)同　上　二〇頁
(20)同　上　二〇頁
(21)同　上　二二頁
(22)同　上　二三頁
(23)同　上　二六頁
(24)同　上　一五一頁
(25)同　上　一五三頁
(26)同　上　一六二頁
(27)同　上　一六三頁
(28)同　上　一六三頁
(29)同　上　一六四頁
(30)同　上　一六六頁
(31)同　上　一六七頁
(32)同　上　一六九頁

（33）同　上　一七〇頁
（34）同　上　一七二頁
（35）同　上　一七四頁
（36）同　上　一八〇頁
（37）同　上　一八一頁

（38）同　上　一八一頁
（39）同　上　一六三頁

大抵必要な引照はした積りであるが、倉田氏の氣持は氏の文章全體を讀まないと解りにくいが故に、この文の讀者は「靜思」をも併讀されん事を希望する。

（一九二二年十一月・十二月「泉」第二號、第三號所載）

序・跋

「涙の底から」の序

長く延び〳〵になつてゐた「涙の底から」を今夜讀みました。この一冊の書物はいたづらに讀み切る事の出來ないものであるのを感じます。何故ならその中に私は明かに著者その人の生活と實感とが織りこまれてゐるのを感じますから。若しこれが私の僻見であつたらこれから私の申さうとすることは何等の力をも持ち得ません。何故なら私は出發點に於て既に跌いてゐるのですから。私はたゞ自分の不明を著者に謝する外はありません。

然し私の受感した處が私を詐つてゐないなら、即ちこの書が著者の生活と實感から織り出されたものとしたら私はこの作品に對して多少の云ひ分を持つてゐます。

第一これを著者自身の懺悔錄と見る時に、私は一種の嚴肅な感じに打たれます。その中に書かれた事は確かに著者が苦しみ拔いた上に作り出されたものである事を十分に納得させますから。

然しながら共の表現に至つては私は少からぬ不滿を感じます。戲曲の形に於て書かれた所は戲曲の形をなしてゐません。それは寧ろ人間の葛藤と云ふよりは人間の持つ思想の葛藤であつて丸彫りにされた人間は影薄くよりそこに表はれてゐません。これは寧ろ感想文とか懺悔錄とかの形に於て書かるべきものだと考へます。

その戲曲の女主人公の「懺悔錄」として書かれた部分は懺悔錄として內容がまた餘りに allusive です。痛い所

に來ると作者は逃げを張つてゐます。而して或る種の理窟を以て其の空虛を滿たさうと企てゝゐます。

それ故に形は懺悔錄でありながら讀者は屢ゝこちたい宗教哲學風な言說の爲めに共鳴的實感から遠ざけられます。然し同じ道理が繰り返し繰り返して述べてあるにも拘はらず、はつきりした要點を確かに摑むことから失敗せねばなりません。懺悔である以上はもつと端的な表現を望みたいやうな心にさせられます。

要するにこの表現の凡ての缺點の源はそれが藝術化される爲めには餘りに著者の姿が現はれ過ぎ、懺悔錄として見られる爲めには餘り著者の回避が過ぎてゐて、謂はゞどつちつかずになつてゐる所にあると思ひます。

この點に著者は知らず識らず自己を死地にまで連れて行くことからのがれようとする不徹底さを見せてゐます。自己の各面を俎上の魚のやうに無容赦に見つめるか、自己の中に入り切つて左顧右眄なく自己を露出するか、何れかの道を徹底的に成就さるべきだつたと考へます。

そとからその中に織り込まれた思想上のことについていへば、初めの戯曲も後の「懺悔錄」も同一の思想の繰り返しに過ぎない事を感じさせます。牧師原田の戯曲に於てなした所は「淚の底から」と云ふ種本を遂に行つたに過ぎないので、或る事を行つた結果として「淚の底から」が生きたものだと考へられない程思想の上の發展がありません。それ故これは戯曲だけにしておくか「懺悔錄」だけにしておくかで澤山なものだとの感じを私に與へます。

思想の內容についていふと、生活經驗から水のやうに湧き出て來たものではなく、ある生活經驗があつてそれを整理する爲めに其の經驗者が今まで讀んで來た書物の中からあの部分この部分を採用して一つの系統を立てようとした跡が考へられます。これは餘りうがち過ぎた言葉のやうに聞こえるかも知れませんが、私にはどうもさういふやうに響きます。もつと素直に生活そのものから生れ出た思想だけを分り易く披露されたならもつと心を打つものが生れたのではないかと思はれる節があります。

人生には矛盾がある。大自然には調和がある、矛盾の人生にそのまゝ生きるのは恐ろしいことだが悪いことではない。そのまゝの姿を突きぬけて見ると、やがて大自然の調和と睨み合ひすると云ふのが大體の考かと思ひますが、私の頭の悪いせゐかその脈絡が繰り返し繰り返し云つてあるにも拘らず――私にはよく會得が出來ませんでした。

それには外來の思想のつぎはぎが祟りをなしてゐるのではないかと思ひます。もう一度それが作者の個性の中に融合してからいひ出されたなら、もつと脈絡のあるものになり得るのではないかと思ひます。

自分が碌でもないものゝ癖にこんなことを申上げるのは分に過ぎた事だとは思ひます。

それ故私は元來他人の作品を彼れ是れ云ふ事はしまいと思つてゐる者なのですが、强ひて何か云へと仰しやられて見ると、矢張りいゝ加減な事はいつてゐられませんから、自分を省みる暇もなく失禮をもいとはず思ひ切り我儘を申します。不惡御容赦御披露下さい。

（大正十一年四月）

「太陽の沈みゆく時」の序

橘　外男様

私は序文を書くのが嫌ひです。それは序文を書いてもらふのが嫌ひだからです。その上、私は他人の作品に序文を書く力量のないことを自分でよく知つてゐるし、又本屋の廣告文代りに利用されるのが、私として餘り氣持がよくないので、序文は書かないことにしてゐます。

ところがあなたの場合は、私のこれまでの考へを大分ぐらつかせます。それは、今は世にないあなたの愛人が、私に序文を書かせる希望を持つてゐられたといふことが一つ、どんな惡口でもいつていゝといふのが一つ、私の名を利用する以外に、本屋があなたの心持をよく呑み込んでゐて、寧ろ私の序文を掲げるのを承諾するといふ位の立場にあるといふのが一つ。この三つが私に自分の禁を破らせる結果になりました。

そこで私は遠慮なく思つた通りをいつてのけます。あなたはこの作品を藝術としては作らなかつたといはれます。又強ち人に讀んでもらふ氣もないといはれます。それは然し一人の讀者としての私が顧慮するには當らない二つの豫件です。私は矢張り讀まるべく印刷された一つの藝術品としてこの作品に對します。

極めて冗漫で、而して不必要な挿話が到る處に挿まれてゐます。或るところではそれはお伽譚のやうに單純で、或るところでは調子外づれにしちくどく思はれます。この作品に於て「藝術も亦一つの經濟である」といつたラスキンの言葉――而して私はそれを正しい言葉だと思ふものですが――が遠慮會釋もなく無視されてゐるやうに見えます。若し私があの材料を取扱つたら、恐らく全量の三分一で片付けてしまつたらうと思ひます。それ

から文章は綿密にこなれてゐますけれども、その割合に作家の氣稟を現はすやうな確實なスタイルが見出されません。だから立體的といふよりは平板(フラット)な感じを處々で味はされます。心が緊張して行くかはりにだれてしまひます。作者の焦躁が累をなして、讀者の興奮が却つて抑しひしやがれます。これが惡口です。

けれども讀んでゐて、いやな氣持は何處の隅にも感ずることが出來ませんでした。何處の隅にも。それは子供が人に對して熱心に話しかけようとする時のやうな感銘です。眞實無比な童話といふ氣持がします。自然でも人でもが、急がしげな早口の間に、少しもゆがめられずに、見られたまゝ、感じられたまゝに現はれ出ます。而して凡ての事件や人間やが奇妙に生きてゐます。あんな書きかたをして生きて來るだらうかと思ふところに不意に生きて來ます。一見單純に見える發想の背後に或る拒むべからざる生活があります。而して生活のあるところには、汲み盡せない複雜さのひそむのは誰でもが知りぬいてゐる事實でせう。勿體ぶらないでゐて、氣品の自然にしみ出る性格と、極めて平面的に見えながら、深味にはいりこむ可能性を十分にほのめかす情緒とが、作品を裏付けてゐるのが私にはすぐれて快く受け取られます。

第一卷に於てはあなたは單に序曲を彈じてゐるのだといはれます。第二卷に於て、あなたは聲をあげて死の讚美をするのだといはれます。だからこの卷だけを讀んであなたの作品の內容を彼れ是れいふのは無益に近い事かも知れません。私は樂しんで第二卷の出るのを待ちます。而して更にいひたい事があつたらいはせていたゞきます。

この一つの作品にいはゞあなたの生命の全部を瀉(そゝ)がうとしてゐられるのを知つて、こんな亂暴なことをいつてゐてはすまないやうにも思ひますが、感じたまゝを書けといふあなたの要求に忠實に以上のことを書きます。あなたのいはうとなさることの凡てが、遺憾なく現はれ出るやうに、それを希望してやみません。

（一九二二年六月二十九日、曇れる朝）

「米國學生生活」の序

私が亞米利加で學生生活をしてゐたのは、十數年以前のことになる。その記憶は淡いものになつてしまつた。私は自分の部屋に閉ぢこもつてゐる學生生活といひ條、私は純粹に學生らしい生活をそこでは送らなかつた。それでなければ醉狂な勞働の生活をやつてゐた。色彩の濃厚な、贅澤な、か、獨りでどことなく歩きまはるか、それでなければ醉狂な勞働の生活をやつてゐた。色彩の濃厚な、贅澤な、亞米利加風の學生生活の種々相は、可なり遠い隔りにあつて朧ろげに感ぜられるばかりだつた。

然しながら若さによつて護られる生活は、誰にでも快い牽引であらねばならぬ。私の垣間見た米國の學徒の生活は、瞥見には過ぎなかつたけれども、いつでも快い回想となり、活々した刺戟となつて、私の胸の奥に響いて來る。米國の學生は一帶に氣持よく無邪氣だ。よく遊びもするが、自分に必要な勉强もしてゐる。思想的な方面に於ては、日本の學生などより遙かに幼稚だが、その代り早く性格が固まつてしまふことなく、いかにも延び延びとした生長力を持つてゐる。彼等はこのライフ・ウォークを始める前の準備として、能ふかぎりの樂しい生活を貪るやうに見える。殊に女性が男性と共にこの境涯を味ひ得るやうにしてあるのは、米國學界の一特色であるといつていゝ。

それらの事情が喜多氏によつて紹介されるのは私一人にとつても樂しみなことだ。私はそれによつて彼處にあつた時の生活を思ひ出すのみならず、私の見聞しなかつた多くのものを知ることが出來るだらう。而してそのよろこびを持ち得るものは單に私ばかりでないとおもふ。

（一九二二年七月二十六日、夏雨の午後）

「藝術と生活」書後

私は永く書後を誌すことを怠つてゐた。怠つて以來のことを忘却の中から呼び起すのは必要もなく面倒でもあるから、最近のことを少し書きとゞめておく。

今年になつて私は「宣言一つ」なる小感想を「改造」に送つたが、それが思ひもよらぬ反響を文壇と思想界とに呼び起した。その後私が發表した感想にも私が注意しておいたやうに、これは私の所說が際立つて重大な提言であつたといふのではなく、私の觸れた問題が、凡ての人の考への中に熟し、而してそれが細心に思議されかけてゐたのを證するものであるといへる。私の書いたものに對する批評や非難の中には、深い注意と反省とを以て讀まねばならぬものも多かつたが、中には私を不快にさせ、或は私を惘れしめるものもないではなかつた。この輯の中に私の所說を取り入れるについて、それらの評論の凡てを併せて集錄するのは、時代の傾向を看取する上に、又私自身の所說の長所や弱點を明かにする上に、無益のことではないとも思つたが、餘りにわづらはしいのでわざと省略することにした。私の手許に集まつた反響の中で最も私を不滿にしたものは、その或るものが理窟の上ばかりからの批評非難であつて、筆者がこの問題に就いて、體驗的に明確な態度を示してゐないことだつた。若しくは明確な態度を造らうとさへしてゐるやうには見えないことだつた。唯議論をするのが面白さに議論をしてゐるなといふことを思はせるものゝあつたことだ。かういふ身構へでものをいふのはいけないことだと私自身は思つてゐる。

それから久しぶりで「星座」第一卷に於て私はまた小說に筆をそめはじめた。創作らしい創作をしなくなつて

から約三年を過した譯である。「星座」を書くについても、私にはまだ本當のところに自分が立つてゐないといふ感じがしてならなかつた。然し考へてばかりゐることが必ずしも常によいことではない。ぶつかつて行くことも大切だと考へた。私は今年中にはその第二卷を出したいものだと望んでゐる。多分第一卷位の厚さのものが、あと四冊位にはなるのかと思つてゐる。

それから私は「一房の葡萄」といふ童話の本を出した。童話については、私は或る主張を持つてゐて、その主張によつてあの四つの話を書いて見た。大人が子供に讀んで聞かせるやうにすると、一番子供にはよく訴へるやうだといふ人が多い。若しあの本を顧みて下さる讀者があつたら、さういふ試みがしてほしい。

それからこの年に於て、私は自分の實生活に多少の變化を行つた。その目論見が或る人の口から漏れたために、世の中の或る方面に兎や角の噂を提供する結果になつた。これは私の不謹愼から起つたことで申し譯なく思つてゐる。私のしようとする位のことは今までゞもなし遂げた人が少からずあるに相違ないと思ふ。唯私が公人として多少人に知られてゐるところから何か物珍らしげにもてはやされる結果になつたのだ。それは主に私一個にかゝはる問題であつて、しかも何年かの過去にあつては、私に取つても相當重大な問題として考慮されたものであつたが、この頃では人に披露するには恥かし過ぎる程のことになつてしまつてゐる。然しそれだからといつて、別に隱しておかねばならぬことだとも思はない。既に世の中に擴がつて、しかも新聞や雜誌が多少なり間違つた報道をしたり、私の考へに對する多少見當ちがひな揣摩臆測が發表されてゐる以上は、何かの機會に私の考へ方や實行の方法を、少くとも私の讀者だけには報告しておくのが至當ではないかと思つてもゐる。

それから、これも私の永年の目論見であつた個人雜誌を刊行する機運が來たことをもお知らせする。私は每月雜誌や新聞に何かを書かされる。成るべくそれをしないで創作の方に沒頭したいと希望しながらもそれをさせら

れる。これを斷ち切ることの出來ないのは私の弱いのにも起因するが、ジャーナリズムの政策が極めて巧妙に運用されるのにも原因するところが多い。然し私が書く以上は、それをまとめた形に於て書く方が私の讀者の爲めにも便利なことであるし、私にも氣持のいゝことだ。それのみならず、私は元來一家一流派といふ文藝上の主張を持つてゐるもので、能ふかぎりその實行をしたいと思つてゐるのだから、自分の時々の思想を發表すべき機關を一人で持たねばならぬのは、當然のことでもあるのだ。前から私はそのことを考へてゐたが、中々實行の運びには至らなかつた。然しこの十月から斷じてやることにした。いつまで續くか、それは自分にも見當がつかない。然し私に書きたいものがある以上は、一生懸命で書いて行くつもりでゐる。題は皆んなで考へてくれた。「獨旅」「くさ」「川」「ひとりしづか」「路」「こゝろ」など。その中に「泉」といふのがあつた。それが一番私の氣に入つた。それで「泉」とすることにした。

この秋には「ホヰットマン詩集」の第二輯を出したいと思つてゐる。

私は幸にしてよい健康を惠まれてゐる。明日は知らないが今日までは惠まれてゐる。だから人一倍働かねばならぬのだが、どうもあるべきだけ働いてゐないのを恥ぢる。

（一九二二年七月三十一日、靜かな夜）

「泉」を創刊するにあたつて

私は毎月雜誌新聞の類に何かを書かねばならなくされる。それが常によい氣持を以てばかりではない。時には心にもなく註文を引き受けた自分に對する憤懣にいら〳〵しながら約束の期間が逼つたために筆を執るやうな時もある。それを受け取る人に對しても、それを讀む人に對しても、又自分自身に對しても、不滿であらねばならぬ狀態にあつて筆を執るやうな時もある。而して私は遂に自分の弱さに呆れてしまつた。こんなことをしてゐては濟まないと考へるやうな日が續いた。而して遂に自分一人の雜誌を出して見ようといふ決心に到達した。どうせ毎月いくらかづゝのものを書かねばならぬのなら、それを一つにまとめて發表した方が、自分としても快いし、私の書いたものを讀まうとしてくれる人にも便宜であると考へたからだ。

しかのみならず、私が文壇に踏み入つたそも〳〵から、私の主張は一家一流派といふことであつた。何によらず私は一體黨派といふものが極端に嫌ひだ。殊に文壇に於てこれがあるのは罪惡だとすら考へてゐるものだ。この考へを徹底する爲めばかりから云つても、私が自分一個の雜誌を持つのは當然なことなのだ　私はとうの昔にそれを實行してゐなければならぬ筈だつたのだ。

今後私のこの企圖がどれたけ續き得るかについては何等の自信もない。私は毎月豫定の頁數を埋めるつもりではあるが、書くことがなければ埋めたいにも埋めやうがない。又いつ倦きが來て、止めたくなるかも知れない。又この雜誌が賣れないで、其の收入からでは本屋も立ちゆかないし、私の生活も脅かされるやうになつたら、今までどほり、已むを得ず他の雜誌に書いて、原稿料を貰ふことに腐心せねばならぬかも知れない。その時はまた

その時のことだ。「今日のことは今日にして足れり」、それを私は自分に取つていゝ金言とする。

然し私がこの雜誌を持つことは何しろ愉快だ。この雜誌の讀者は確かに私の讀者だ。私は直接に私の讀者にのみ話しかけることが出來るのだ。一人の著作家に取つてこれ程會心なことは他にあり得ないだらう。

この雜誌が幸にして存續の運命を荷ひ得たら、讀者と私との親しみは、段々はつきりして行くだらう。私は讀者に對して、以前にはあり得なかつた友情の中に置かれ得るだらう。而してこの雜誌によつて、讀者間の友情も亦實現されるだらう。若し、かくの如くして實現された友情が、何等の規約も、束縛も、虛禮もなく、平等な關係に於て深まつて行くならば、その數は縱令いかに少なくとも、そこには一つの世界が創り出されるだらう。私も亦その友情の小さな一分子として數へて貰ひたい。

然しながら、そこには一つの無理があつてもいけない、一つの强制があつてもいけない、一つの不自然があつてもいけない。こゝに出來上つた友情が、銘々の自由をいさゝかでも妨げた瞬間には、その友情はすぐに破り去られなければならぬ　集散離合を氣にかけるのは私達のことではない。

私は常に步いて行かうと思ふ。昨日の私の言葉は、今日の私の言葉ではないかも知れない、今日の私の行ひは、明日の私の行ひではないかも知れない。私は自分自身にすら束縛されないものであらう。云ふべきことは出來るだけの素朴さを以て云ひ放たう。その結果を顧慮しまい。自分がしつかり持つと信ずるものだけを筆にしよう。小さな種子……あとは風が欲するところにそれを運び去るだらう。それは私の關知する限りではないのだ。

（一九二二年十月、「泉」所載）

「狩太共生農園記念碑」文

『この土地を諸君の頭數に分割してお讓りするといふ意味ではありません。諸君が合同してこの土地全體を共有するやうにお願ひするのです。誰でも少し物を考へる力のある人ならすぐ分ることだと思ひますが、生產の大本となる自然物卽ち空氣、水、土地の如き類のものは、人間全體で使ふべきもので、或はその使用の結果が人間全體の役に立つやう仕向けられなければならないもので、一個人の利益ばかりのために、個人によつて私有さるべきものではありません。それ故にこの農場も、諸君全體が共有し、この土地に責任を感じ、互に助け合つてその生產を計るやうにと願ひます。諸君の將來が、協力一致と相互扶助との觀念によつて導かれ、現代の不備な制度の中にあつても、それに動かされないだけの堅固な基礎を作り、諸君の正しい精神と生活とが、自然に周圍に働いて、周圍の狀況をも變化する結果になるやうにと祈ります』

以上は農場主有島武郎氏が大正十一年八月十七日この農場を我等に解放した時の告別の言葉の一節である。刻して記念とする。

大正十一年十一月　　狩太共生農園

（玆に記念碑の略圖あり、略す。）

廣告文

「星座」

これは一つの長篇創作の序曲たるべき第一卷である。若い生命力が如何に生れるか、如何に萎むか、如何に育つか、如何に實るかを作者は探らうとする。それは明かに作者の力には餘るらしい冒險である。けれども船は既に乘り出された。覆る所まで進む外はない。

「藝術と生活」

藝術と生活とに關する私の折に觸れての感想を集めたものだ。人はこの集の中に私の思想と生活との貧しさを感ずるとも僞りを感ずることはないだらう。私は系統を提供することは出來ない。然し恐らく或る示唆は。

「泉」

永く懸案としてゐた個人雜誌の發行を私は決意した。他の雜誌新聞に雜多な投稿をするよりも、この方法に據る方が私の氣分を純一にすることが出來るだらう。何故なら私は私自身の讀者にのみ語り得るといふ有意義を確

實に持つことが出來るから。私はこの雜誌に於て、分量の小さな創作と論文感想と研究とを發表したい考へである。この雜誌が存續する限り、私はこの雜誌にのみ立て籠る。

「一房の葡萄」

子供の慾念、祕密、悲しみ、喜びを子供と共にわかちたいといふのが望みだと著者はいつてゐる。子供の空想や、知識慾や、冒險的傾向に訴へた童話は多いが、この著の如く子供の實感を子供になり代つて書いたものは恐らくはたいであらう。

新舊藝術の交渉

新舊藝術の明確な境界線を、どの邊に引くべきかといふことは私にもわからない。唯漫然と私自身の氣持で新舊の境を分けてゐる。尤も現代と對比した意味での近代の文藝の相對する舊時代の文藝なら、普通ゲーテの死んだ一八三二年を以てその境とされてゐる。然しこれとて可なり任意的な區分の仕方で、思想の流れは爾かく判然と劃されるものでない。舊とは言へゲーテの書いたものなど今尙ほ私共の心にひゞく。それを舊と呼ぶのは妥當でないが、便宜上假りにゲーテの死をもつて新舊の境界線として置く。

新舊文藝を對比する前に、少しく考へてみたいことは、藝術が如何にしてつくり出だされるかといふことである。

私は先月の「改造」に、「描かれた花」と題する想片を書いたが、私一流のひとり合點のやうな物の言ひ方の爲め或は十分に意味が通じなかつたかも知れない、又、それを讀まなかつた人のためにもその概要をこゝに繰返してみたい。

色彩について、非常に鋭敏な感覺を持つた二十三歲の青年が米澤市に現はれて、一つの大發明を爲し遂げた。從來、活動寫眞のフィルムは、非常に面倒な手續きによつて着色されて來たが、彼は或る藥品を通すことによつて、

自然に着色する方法、例へば煉瓦の建物は赤く、木の葉は綠に、白堊は白く、手を省略して極めて自然に着色する新方法を發明した。私は始め、その可能を信ずることが出來なかつたが、實際、うつされたのを見て驚いた。かゝる大發明を生むだ最大の理由は、青年の色彩に對する感覺が、異常に敏感で、且つ纖細であつたからだ。彼は普通の寫眞を見て、その黑白の濃淡により、その着衣の色合を適確に識別するといふ。が、私のこゝに彼について語らうとするのはそのことでない。彼の言つたといふ言葉のなかに、私にとつて暗示の深い一つの言葉があつた。それを語らうとするのである。

その言葉は、自然の色は繪畫の色よりも遙かに美しくない、これである。此の一見頗る逆說的に見える言葉を提げて、專門の畫家にも、通常人にも叩いてみたが、彼等は一致して青年の言葉に同意しなかつた。然し私は、私の受けとつた暗示の意味を、如何にかして明瞭ならしめんとして、筆を執つたのが「描かれた花」である。

一體、人間が自然の生活から次第に離れて、恰も自然を人間にだけの從屬物であるかの如く思惟するに至つた理由はどこにあるか、人間は他の動物の持たない、いろ／＼の能力を持つてゐるが、その一は人が「笑ひ得る」ことである。これは人間を一種の樂天家たらしむることによつて、自然のうちに一道の活路を開かしめてゐる。次に人間は器具を使用することの巧みな動物である。赤手空拳では弱いが、一旦器具を手にすれば如何なる猛獸も彼の敵ではない、又人間が自覺の機能を有し、自意識を持つことも、他の動物から截然と區別さるべきその優越點であらう。これが人間をして、自然の生活から隔離せしめて、他生物の上に嶄然として頭角を擢んでしめてゐる理由であるに違ひない。然し、更によりよき定義をそれに向つて下すならば、人間は誇大する動物であるといふことである。これは他の動物に見出しがたい人間特有の本然的性情であつて、これあることにより人間の人間らしさは、最も强烈に發現されてゐる。空を飛ぶ鳥の翅は如何に自由であらう。然し人間の飛翔力は更によ

り以上に無限である。三間の距離を飛び能はぬ人間は、決してその限度に滿足してゐない、直ちに五間を飛ばんと望み、百間を欲し、軈て無限を欲して、輕氣球、飛行船の時代を過ぎ、遂に全地球の空中をも一週しうる飛行機を發明した。汽車、汽船、自動車、電話、活動寫眞、それらは皆より以上を誇大する無限に豐富な人間の誇大性の產物ならざるはない。形の上に於ける斯くの如き誇大性のあらはれが、人間の心の生活に於て更に自由に、更に豐富に働きうることは、考ふるに容易である。茲に於て前述の色彩の問題に立ちかへらう。

太古未開の時代、未だ畫を描く術知らぬ蠻人の一人が、美しい周圍の自然を、一度色彩に於て表現せむと欲し、いろ〳〵の草の葉、木の汁から色をとつてなすつてみたとする。然しその結果は、自然そのものとは似もつかぬものとなり、仲間の嘲笑を買つたことだらう。何故なら、彼の表現した自然は、自然そのものゝ再現ではなかつた。實は彼の誇大性をくゞつてきたところの、言はゞ自然の幻像に過ぎなかつた。自然は常にそれ自らにしてユニークだ、有島武郎といふ一人の人間はたとへ如何にやくざでも、他に今一つ創ることは出來ない。自然も同樣、その再現も、再建も、全然不可能だ。自然らしいもの、それが自然の再現を志す者に報いられる唯一つの贈物だ。それは自然の放つ魅力を弱める事によつては遂げられぬ、自然の魅力を誇大することによつてのみ遂げられる。卽ちそれは、眞の再現でなく、再現らしい模倣である。そしてそれには三つの手法がある、その一は、全景を描破することは到底不可能であるから、自然を擅まゝに切斷し抄略して、特色ある部分のみを描き出す。次に自然は、非常にデリケートで、複雜靈妙な色彩の階段的配列が鏤められてゐるが、それを一つ餘さず描きつくす如き術は人間に許されてゐないから、その色彩の層の中から强烈なものゝみを切りとつて表現する　第三は、或る描かむとする色彩に、他の異なつた色彩を對照せしむることによつて强調する方法、例へば樹木、又は草原の綠色は、そこに登場して來た少女のパラソルの赤さを、燃ゆるが如き赤色に誇大することによつて效果を

高めうる。これはそのいづれもが、明かに自然の誇大だ。色彩に對する感覺に於て極めて素朴なる蠻人の眼が、仲間の最初の畫を嘲笑したのはあまりに當然過ぎる。が然し、すべての人間は量と質との差こそあれ、皆誇大性を持ち合してゐるのだ。此の人間が本然に共有してゐる誇大性は、何時とはなく、不知不識のうちに、藝術家によつて誇大せられたる表現に親しみ馴れる。そしてその表現が恰も自然の再現でゞもあるかの如く映じ始める。即ち誇大性の詐術に仲介せられて、彼等は藝術家によつて義眼せられたのだ。ゴッホの描いた畫の中には、藝術的衝動の高調から、繪具をぬら〳〵溶かしてゐる餘裕がなく、チューヴのまゝ畫布になすりつけた單色の、一見甚しく亂暴で、こんな自然がどこにあるだらうとあやしませるやうなものがあるが、しかもどこかに肝要な一點は摑まれてゐる。又セザンヌの畫によくある草木は、實際の自然の中には滅多に發見しがたい彼獨得な、彼の誇大性をくゞつた草木の形態であるが、鑑賞者は間もなく彼等の異常な誇大性に親しみ馴れ、畫の魅力に吸引されて、自然とは斯くの如きものだと思ひ込んでしまふ。

巧妙な繪の花を見せられた時、大抵の人が自然の花の如く美しい！と嘆美するのは、即ち鑑賞者が畫家から授けられた先入主觀によつて物をいつてゐるのだ。畫家の誇大性によつて鑑賞者の眼が義眼せられてゐる證據だ。そして彼等の自然を見る眼は、その繪の鑑賞に於けるが如く次第に始めの素朴さを失ひ、曾て見てゐたとは全然違つた自然が見られるやうになつてくる。恰もゴッホやセザンヌの繪の鑑賞者に、自然の或る形象が恰もゴッホやセザンヌの繪そのものであるかの如く映ずるやうに。然るに畫家は鑑賞者よりも先に、自己の誇大された繪具の色彩によつて彼自身義眼されてゐる。そしてその義眼によつて知らず識らず自然を上塗りしてゐる、換言すれば、彼の誇大された色感をその畫から自然の方に投入し、その投入したものを自然そのものであるかの如く思ひ誤つて更に色彩の上に誇大する。かくて彼等は無意識のうちに一種の自己陶醉に陷つてくる

然るに彼の米澤の青年は、色彩に對して敏感ではあつたが畫家ではなかつた。彼は色彩に對する誇大性を所有してはゐない、否、何等かの形に於て彼も誇大性を持つてゐるには相違ないが、色彩に對する異常な鋭敏さと、その熾烈なる科學的精神とは、藝術家の凡てが陷つてゐる色感上の自己暗示を突き破り、誇大性の詐術を看破して、自然の色と繪具の色とを比較することが出來たのだ。而して、その結果を率直に報告したのだ。曰く、自然の色は繪畫の色よりも遙かに美しくない！色彩を素朴に感ずる野人は、新鮮な野の花を見た場合嘆美していふ、おゝこの野の花は繪の花の如く美しい！と。此の言葉も亦彼の青年と同じ立場に立つて叫ばれたものだ。何故ならこの野人は畫家の無意識的な詐術に煩はさるゝことなく、素朴に自然を、そして繪畫を見てゐるのだ。自然の花の美なることを嘆ずるために、事實、自然の花よりも遙かに美しく誇大された繪の花を形容詞としてゐるではないか。

旣に繰り返して來た如く、自然は再現されえない。人間の本然的に持つ誇大性は、自然の魅力を限りなく強調することによつて、僅かに自然らしいものを表現することが出來る。藝術とは實に自然らしいものゝ表現を指すに外ならぬ。

而して人間の心の中にはその誇大性と共に、かの米澤の青年の型に見るが如き、冷嚴なる態度を以て物を如實に見んとする性情がある。誇大性に對する批評性が是れである。この二つの相異なれる人間性が恰も二つの小索が合力して一つの强い繩となるが如く、人間の生活を限りなく大きく進展せしめて來た。此の誇大性の極度の表象、卽ち自然を支配せんとする人間の氣持を極端に延長せしめ、そこに超人間的な力、人間が欲してやまぬ力をつくり上げたのが「神」である。反對に批評性を極度に働かして、人間から一切の夢を壞はし去り、藝術の誇大

から、宗教の誇大から、一切の人間生活の誇大から自然を解放して、その所謂美しくない姿に於ての自然を赤裸々に露呈せしめたその極點に表象されたものが「惡魔」である。從つて多くの場合人間は惡魔を逃げて神に近づかうとする通有の心理を有つ。然し誇大性が人間の生活に勝ちを占めてきて、幻覺の殿堂の陶醉に人間が有頂天にならうとすると、そこには殿堂を無殘に踏み躙つて、冷酷に現實を徹視せねばやまぬ惡魔がいつのまにか現はれてくる。他面から見れば、神とは人間を絕えず理想に引き上げむとする力であり、惡魔とは絕えず人間を冷嚴無比な手によつて醜惡なる現實に突き落さんとする力であると言へる。そして人間の自覺が進んで來て、神が次第に藝術家に變形し、惡魔が科學者、批評家に形を代へて現はれて來た。

ゲーテの「ファウスト」は、人間に於ける神と惡魔との問題を非常に面白く取り扱つた戲曲である。そこに出てくる惡魔のメフィストは、人間の批評的、科學的精神の權化であるが、人間にはどこまでも夢をゑがかせねばならぬと神がいふと、惡魔は忽ちそれを遮つて、凡そ神樣の數ある創造物の中で、人間ほどやくざな劣惡なものはない、人間から夢を剝ぎとつたら、そこに一體何が殘らうと言つた。すると神は、ではお前人間から夢が剝ぎとれるものなら取つてごらん、と答へた。そこで惡魔は、當時哲學醫學を始め深い人間の叡智にたけた信仰厚い學者のファウストを誘惑し、ファウストがこれまで哲學や宗教で築き上げた人生の一切の意義を打ち壞しにかゝつた。惡魔のたくらみはファウストに先づ「若さ」を與へた。急に若返つたファウストは忽ち純な處女のマルガレーテに戀し、惡魔の手引きで、その戀を遂げる。そしてその結果は人間の不思議な悲慘へとだん／＼はまり込んでゆく。これが「ファウスト」の第一部で、第二部は、ファウストがそこから去つて、次第にヘレニズムの理想に這入つてゆくところを取り扱つてゐる。

神と惡魔、それはすべての人の心のなかに、質量の差こそあれ、自覺と無自覺の別こそあれ、嚴として存在す

る人間性の二要素である。この相容れがたい二つが、渾然としてもつれ合つて慟哭する人間の姿は正しい。然しその二つの中いづれかゞ缺けると、それはカルカチュアとなり、悲劇となる。人間は概ね次の如き三つの型のそのいづれにか類屬する。一はハムレットの型であり、一はドン・キホーテの型であり、一はオブローモフの型である。ハムレット型の人間は絶えず自分自身に對する批評にのみ囚はれて、何をするにも有頂天になることが出來ず、藝術をつくればすぐその藝術に幻滅し、何か行動すれば忽ちその行動の意味を穿鑿せねばやまず、始終自己内省に沒頭してゐる。ドン・キホーテ型はそれと正反對で、誇大性が强く空想的樂天的で、すぐ現實から飛び離れて空中樓閣をゑがく。ドン・キホーテ、彼は非常に想像力の旺盛な男で、その武者修行の旅に於てさまざまの突飛極まる笑劇を演ずる。遠くに風車を見るとそれが忽ち自分を覘ふ敵兵が無數に簇つてゐる姿に見え、素破天下の一大事と拔劍して躍り入る。豚の群れを見るとこれが惡魔の群れと映じ、或は敵兵と間違へて茨の繁みに飛び込むで出路を失つてしまふなど、飽くまで突飛な架空的な人間の典型である。オブローモフはハムレット型ともドン・キホーテ型ともつかぬ。否、そのいづれをも失つて了つた、世紀末的人間の型で、內省なく感激なく、空想も興味も一切の人間性を失つたやうな、ぐうたらな人間である。いふまでもなくハムレットは批評的精神の代表者で、ドン・キホーテは誇大性、空想の典型であるが、この二つのタイプを人間の上に指摘したのは、ツルゲニエーフである。後、メレジコフスキーによつてゴンチャロフの作中の主人公オブローモフを加へて以上の三タイプとなつた。

私は衆人の嘲笑の的であるところのドン・キホーテの中にも笑ひと淚とを覺ゆるごとく、オブローモフのぐうたらなデカタン生活にも淚を催さずにはゐられない。それらは仔細に檢すれば私達の內部にも發見することが出來るであらう。殊に誇大性と批評的精神とは人類生活の無限の發展を綯ひ交ぜてゆく二つの大きな力であるが故

に、又私達の內部にも絕えずこの二つの力が交互に相うち相働いてゐなければならぬ。私は所謂人間の道德心よりも、此の二つの性能が如何に嚴粛に第一次的に働いてゐるか否かに遙かに重きを置く。此の二つの力こそ人間の力となるものである。

希臘の神アンテユースは、自然の足が地上についてゐる時、自然は無限の力を持つてゐた。然し足が一度地から離れるとその力はすぐ失はれたと言つた、人間の誇大性が直接の自然から離れて、誇大の上の誇大となるとも う無力だ。ヴォルテールは言つた、美しい女を見て最初に、貴女は花のやうに美しい！　と言つた男は天才だ。然し第二の男がそれを眞似て同じ言葉で美人を賞めたとすれば彼は馬鹿だと。それは第一の男の言葉が自然からの直接の誇大であるに反し、第二のそれは單なる摸倣に過ぎないからだ。私達の誇大性に於けるセコンドハンドは無用なるにとゞまらず、寧ろ有害だ。それらの第二次的精神に對しては、批評家の打ち下す三十棒が必要である。それに對してこそ容赦なき模倣の假面を剝奪しなければならぬ。批評的精神のすぐれた人は、模倣しない。然し劣弱な人は洒啞々々としてそれを繰り返す。この例は藝術に於て最も顯著である。批評的精神は第二次的精神に對して容赦なき三十棒を喰はすが如く、第一次的精神に對してもそれを爲すが、唯第一次的精神に對しては それを破壞し剝奪し遂せることが出來ない。それは恰も惡魔メフィストがファウストの持つ第一次的精神、即ち自然からの直接の誇大だけは遂にさましきることが出來なかつたやうに。

若しも批評的精神がその與へられたる限界を越えて、第一次的誇大をも破り去る日が來たら、人間は無くなるのだ。人間が存續する限り、第一次的誇大も亦嚴として存續する。そこで私達は常に第一次的精神を生かし、第二次的模倣的精神を拭ひ去ることだ。私の重きをおく道德とはこれだ。此の行爲に眞劍であることだ。さうする

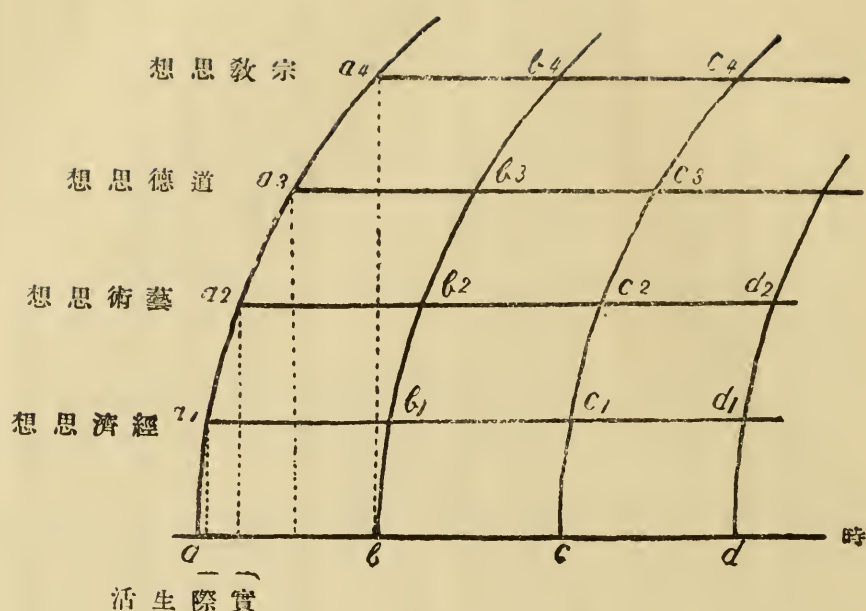
事によつてのみ私自身の生活は成立する。
英國の或る大學の講師ゼー・ラブリン氏は、セルヴィヤ人で文藝批評家であるが、その著書 "Dostoievsky and His Creation" の中で、ドストイエフスキーは一つの大きな謎たる神人と人神とを如何にして調和すべきかといふヂレンマをいだいたまゝ死んだと言つてゐる。これは正しい見方で、上に述べて來た私の言葉を明かに裏書するものであつて、現代の藝術は實にこの神人と人神との鬪ひである。又ニイチエが超人を唱へたのも同じ氣持に發してゐる。ロシヤに於ても極端に相反する二つの文明、一は飽くまで精神的で希臘正教の教へを受け入れたスラヴ主義と、他は飽くまで物質的科學的の傾向著しい西歐主義とが相鬪つた。ドストイエフスキーの苦しみも實にその根深い矛盾に源を發してゐる。彼は極めて象徴的な言葉で、次のやうな意味を言つた。
「キリストが此の世に下つて、神になつたところの人間の生活を創造した。神になつた人間の生活には何等の拘束がない。その代りすべての人類の重荷を身に負うて安んじてゆく生活である。それは無抵抗の極致である。是は吾々にとつての非常な光であると同時に又大なる呪ひである。何故なら平凡で罪惡に潰れてゐる我々は、キリスト出現前は偶像の前にでも宥しを受けることができたが、キリストが世に現はれて以後それが出來なくなつた。そして神になりえざる人間の苦しみが、底の知れない人間の悲慘が、われらに殘された。その苦しみその悲慘から藻掻き出んとしてつくり出したものが人神である。人としての神である。その第一の人が羅馬法王で、法王廳では人民から謝金を受けて、神に向つて只管人間の罪の恕しを乞うてやる。ロシヤに於ては、皇帝が法王と同じく人民と神との仲裁者の役割をつとめた。かくて廣大無邊の姿から人らしい姿を引き出し、神人から人神を見出してきてそれによつて人間は救はれむとした。」
キリストが人間の夢たるべく、あまりに崇高に過ぎることを知つた人間は、低いところの世界に神をつくらう

として人神を得たのだ。この神人と人神とを、如何に調和すべきかゞドストイエフスキーの深刻なヂレンマであつた。ドストイエフスキーは、その短篇小説のなかにもそれを描いてゐる。

「ローマ法王が人と神との仲裁者の椅子についてゐる、そして本當に悔いあらためた人々をなぐさめて送り歸してゐる。そこに一人の青ざめた神々しい年の頃三十程の青年が現はれる。肥滿した健康そのものゝやうな法王は、その痩せ衰へた青年の唯一人の出現に愕き懼れた。『こゝはあなたの出る幕でない、あなたの姿はあまりに高い、あなたと人間とのつなぎ目には私が立つてゐる。人間は多く今惱むでゐます。早く立ち退いて下さい。若し退かないなら、無理にも突き出しますぞ。』けれども青年は微塵も激せず、悲しまず、ひやゝかな神々しさを持ちつゞけたまゝ靜かに室を出て行つた。」

こゝに暗示されたやうにドストイエフスキーには、基督と法王といふ形で神人と人神との矛盾が現はれたが、われ〳〵にはもつと直接に、もつと痛烈に現はれ迫つて來た。私達にはもう基督も法王もない。唯私自身があるばかりだ。私は私自身にのみ頼る外はなくなつたのだ。

藝術的衝動に對して、外部の環境が如何なる意味を持つてゐるか、その關係如何を考へてみたい。これは屢々私の引例するところであるが、合衆國フィラデルフィヤ市の經濟學者で、唯物主義者のパッテン氏が、環境の方面から英國の思想の發展史を研究した著者の序論の中に、次の如き實生活と思想との關係を描いた圖解がある。

この圖の中、點線の部分は私が書き添へたものであるが、圖の底線によつて時間が示されてゐ、上向する曲線によつて、思想の發展の經路が示されてゐる。今假りにaといふ實生活が現はれたとすると、そこからa_1といふ經濟上の思想が生れ、或る時期の後、それがa_2といふ藝術思想を胚胎し、更に或る時間を經て、a_3といふ道德

思想を惹起し、それから又或る期間が過ぎてa_4といふ宗教思想が醱酵する。而してaといふ實生活の狀態が或る期間續いた後、bといふ狀態に變化すると、それを機緣にしてb_1 b_2 b_3 b_4といふ諸思想がつぎ〳〵に生れ出て來るので、同じく經濟思想でありながらb_1はa_1から進化したものではなく、又同じく藝術思想でありながらb_2はa_2から變化したものではなく、a_1 a_2はaから、又b_1 b_2はbから進化發展したもので、今までの歷史家が考へてゐたやうに、橫にばかり進化するのではなく、實は縱に進化するのみである。

又、aといふ實生活が生じてからa_4の宗教思想が生ずるまでには、多分の時間を要し、それが或る場合には、底線に垂直な點線が時間的に、bにまで實生活が變化した後に現はれ出るやうな點に落ちる場合も生じて來る譯になる。さうするとbなる實生活に於て採用されてゐる宗教思想は、その生活から生み出されたものでなくして、その以前の生活卽ちaなる一時代前の時代の產物であるといふことになる。此の如き宗教思想がbなる實生活を指導し得ないのは勿論、調和することすら出來かねるのは明かなことであ

る。

こゝに宗教生活を一つの例に取つたに過ぎないが、實生活の變化と共に割合速かに變化する藝術思想と雖も、程度の差こそあれ、後れ馳せに實生活のあとを追ひかけてゐるのだといふことは爭はれない。

この圖解には勿論幾多の缺點があるのに直ぐ氣付くことが出來る。第一實生活はaからb、bからcといふやうに截然と區別され得べきものではなく、どんな革命時代にあつても、必ず或る連絡を持つてゐると見るのが正當だ。又時代の變化に伴つて遲れてから發生する道德思想、宗教思想といふやうなものも、その內部に恒久的な力と存在理由を持つてゐるならば新しい時代に順應することの出來る要素をそれ自身の中に持つてゐるかも知れない。これらのことをもつと綿密に商量せずに、漫然と結論に入るのは多少暴擧である。

然しながら實生活といふ環境が、藝術の上に强大な作用を持つてゐることは私も肯定する。環境は單に藝術のみならず、人間生活の一切の樣式を變化せしめ、支配する力であつて、それを喩ふれば、土壤の良否が芽の生長力を支配すると一般である。然し種子そのものを全然慮外することは出來ない。種子が若し劣惡であつたら、如何なる良好の土壤も效を收めがたい。要するに外部の環境の强い支配と、藝術家の質とが藝術構成上の二大要件である。

カール・マルクスの「共產黨宣言」は、現代人に與へられたる大きな詩である。それには人間の思想、行動、制度は物質的及び經濟的事情に依つて決定せられ、且つ作られるもので、此の結果、經濟上の利益を獲得し、若しくは保有するために階級鬪爭の不斷の連續を齎し、この不斷の階級爭鬪は窮極に於て、地代、利益、利潤に依つて生活する階級と、唯賃銀の爲めに勞働する階級との間の近代的な爭鬪にまで高潮する、而してこの爭鬪は社會の支配するまゝになつてゐたが、ひとたびその基礎を築くや、一切の階級と、生產と分配との手段の私有とを

廢絶する無產階級乃至勞働階級の決定的な勝利に依つてのみ終局を告げるものであるといふ意味を、科學的に、批評的精神を以て書いてゐる。そして最後には、「プロレタリヤートが革命によつて失ふはたゞ鐵鎖あるのみである、全世界のプロレタリヤートよ、結束せよ！」と結むでゐる。

マルクスは云ふ、中世紀には對人間關係が人間的に取扱はれてゐた。―親子、主從、地主と小作人との關係には、利害を脫した實に暖かい人間味があつた。すべてが人間同志の交渉であつた。然るに資本主義の治下に在つては、金が人間と人間とのあひだを一度仲繼ぎする。從つてそれは人間的交渉ではない、常に利害を主とする鉛の如くつめたき功利的關係である。そこでは勞働者は商品の如く買はれ來り、弊履の如く棄てられる。資本主義制度の下では、決して人間關係の血と血は結びつかない。

その意味の言葉をマルクスは極めて冷やかに言つてのけてゐる。しかも彼の冷やかな言葉の底に、人間味を握りたい、人類の上にそれを恢復したいといふ熱意が、如何に强く流れてゐることか。人は唯物史觀といふと、兎もすれば、人間の主觀や、人間的熱情を沒却してゐるが如くに考へ易いが、然らず、自らは氣付かずにゐるかも知れないが、唯物史觀をとつてゐる論者と雖も、その內部にマルクスと相通ずる熱い要求を持つてゐる。そこには決して論理の斷絕はない。マン・ゴッドの要求は依然として近代人の胸の中に流れ迸(ほとばし)つてゐる。物質化されたマン・ゴッド卽ち唯物史觀の裏面にそれを主張する人々の胸の奥に、マン・ゴッドの要求が流れてゐるのを看取せねばならぬ。この傾向が近代の藝術の上に如何に現はれたか。

一八三二年、ゲーテの死以前に於ける、所謂舊藝術の發達の環境は如何？ヨーロッパに於ては文藝復興期が中世紀の所謂暗黑時代にとつて代つて、近代の基礎をそこに据ゑ、色々の文物の復興によつて新しい近代を形造

つた。それは中世紀を飛び越して、一躍古代、殊に羅馬帝制時代の盛時への接續とみる事が出來る。中央集權的の傾向がさうである。軍國主義がさうである。專制政治がさうである。そこには奴隷階級が暗默のうちに設立され、侵略的植民政策が行はれた。希臘文明の復興といふことが、その時代の旗印にはなつてゐたが、政治は上記の如く、羅馬の轍を履むで、現に見るが如き帝國主義的國家存在の確固たる礎をそこに造り上げた。コロンブスのアメリカ大陸發見を始め、地球の各方面に新領土が發見せられたのもその當時である。かくて物資の掠奪、新領土の保護のため、強大なる武力の必要を訴へ、列國は軍備の競爭に鎬を削つた。「朕は國家也」とおぞましくも豪語せしルイ十四世の時代には、ヨーロッパの最强國佛蘭西は、羅馬帝國型の帝國主義を殆んど完成した。次いでルイ十五世、十六世も亦專横暴戾を極め、殊に王室關係の僧侶、官吏の横暴は言語に絕した。一例を擧ぐれば、彼等の外出の前路に人民が邪魔になれば、たゞそれだけの理由で斬り捨て御免であつた。彼等の刄の銹となつて斃れる者が每年數百名に上つたといふ。

然るに、一つの文明が爛熟すると、そこには自解作用が起つてくる。エドワード・カーペンターは、「文明とは人間の發達過程に於てかゝらずにはゐない一つの疫病である」と言つたが、文明はいつかは自分自身の分泌物によつて自滅すべく約束づけられてゐる。かくて佛國に於ては十八世紀の末期、一七九三年の大革命となつた。當時ヨーロッパの文化の中心たりし佛國に於ては、横暴極まりなき專制政治の爲め、人民の大多數は文化の光に浴せず、奴隷の境遇に陷つてゐた。革命の赤旗には自由平等の文字が染め出された。當時の支配階級は佛國の貴族のみであつたから、當時商工業者及び地主等を呼稱せしブルジョアは、大多數のプロレタリヤートと共に、被支配階級に屬した。此のブルジョアとプロレタリヤートは團結して、共通の敵たる貴族に對抗した。當時革命黨員は貴族の慣習に反抗するの餘り、サン・キロット（Sans—Culotte）——無袴漢——なる名稱の下に、ズボンなし

の服裝を好んでなし、巴里の市中を練り歩いた。かくて革命は遂に成就し、ルイ十六世は斷頭臺上に相果てたが、革命の結果は如何？　佛國民衆の大多數は果して自由平等を呼吸し、新しい文化の恩惠に浴したのであらうか。否、革命の甘い汁を吸ひ取つたのは唯ブルジョアのみであつた。狡猾敏捷なるブルジョアは、過半の功績を分つべきプロレタリヤートを舊の如く踏みつけて、今度は自分が新たに支配階級（ルーリング・クラス）となつた。然し、兎も角少數の貴族の專横に委せられてゐた權力が、それより遙かに廣い基礎の上に移されたのだから、その反響は大きかつた。ヨーロッパ各國は、新共和國の新しい文化の影響のもとにひとまづ落ちつきを得た。かくて佛蘭西共和國は國會を開設して人民代表者を送り、國是を議することゝなつたが、その實權はブルジョアの專有に委され、プロレタリヤートはその自らの生産を收奪されるのみにて、議會への自己の代表者をさへ有しなかつた。後、プロレタリヤートからも代表者が出たが、それは狡猾なるブルジョアの革命再發抑壓策で、發言權は與へるが、多數決で否應なしに抑へつけ、ブルジョアの思ひのまゝに、一切の政策は彼等の階級の利益の具に用ひられた。プロレタリヤートはその後永い間欺かれて來た。自らの力の足りないのに、否、その力に無自覺なりしのみにその欺きに引きずられて來た。

この氣勢に煽られて、當時二大潮流がヨーロッパの社會に現はれた。一はロマンティシズムの潮であり、他はナチュラリズムの流れである。前者は人間の內部的生命のやむをえざる漲溢（ちやういつ）として、後者は人間生活の環境が生んだ事實として。何が故にこの二大潮流が現はれたかについて以下概說してみたい。

ナチュラリズム、卽ち謂ふところの自然主義は、科學勃興の當然の結果としてあらはれた。何が故にルネッサンス以後現はれたかについては理由がある。ヨーロッパ諸國が羅馬風の帝國主義政治を實施して以來、生産は愈ゝ資本集中に傾き、カール・マルクスの言葉の如く、人間的な溫かい關係は次第に社會から消えて、すべてが功利的に非

とはなく、生活の各部門に浸潤し出した。古い時代の錬金術の如き、可なり空想的な要求から發した科學は跡を人間的に變化した。卽ち存在そのものゝ經濟化だ。ラスキンの所謂「藝術は一の經濟なり」といつた傾向が、いつとはなく、生活の各部門に浸潤し出した。古い時代の錬金術の如き、可なり空想的な要求から發した科學は跡を斷ち、學者の頭は次第にプラクチカルな方面へ向けかへられた。勿論、誇大性がつくり出す事實、人間の夢がつくり上げた空中樓閣の如きは、彼らの一顧にも値しなくなり、全科學の世界を擧げて、その對象は自然の上に求められた。それはやがて近代的科學を生み出だす基礎となつた。そこには宇宙引力の法則、地球回轉說が研究さるゝと共に、ファーブルによつて進化論の最初の階段が切り開かれ、航海術の進步、各地の探險となつた。そしてそれら科學の隆昌が世のブルジョアの要求と合して、彼等の有利な武器となつた。例へば、近代文明の一大革命を齎らしたと言はれるハタオリ機械の如き、近代科學の產物であつて、その發明以來、今迄十人を要した勞働者は三人に減員され、しかも十人當時以上の多額が生產された。その結果は勞働者の失職となり、同時に彼等同士の激甚なる同士打ちが惹き起された。英國の如き、失業者夥多のため、幾度か革命の危機にさへ瀕した。然るに此の勞働者の同士打ちは、皮肉にも資本主義自解作用の第一步であつた。何故なら、勞働者同士の生存競爭が切迫詰まれば詰るほど、やがて來るべき怖ろしいその共斃れに對する恐怖を捲き起し、進んでは現制度そのものを共通の敵とする感情、卽ち、勞働者の和解と共同戰線を造り出さしむる感情的動機がひらけたからである。近代愈〻深刻になりまさる社會問題の素因も亦、それである。そこに蔓るものは階級的敵意と、人間的關係の功利化とである。さうした外部的狀態のなかに、ヨーロッパの近代生活は連續して來た。かくて環境のかくの如き事實が、文藝思想方面にまでも及んでナチュラリズムが生れた。

次にロマンティシズムの潮流及び運動は如何？　ヨーロッパの文化が、前記の如き狀態になると、社會一般の中に、社會的不安がどこともなく漂ひ始めた。佛蘭西に於ては、ブルジョア革命の禍根がいつとはなしに感ぜられ

出したが、それはいふまでもなく社會の下層に人間以下の生活に虐げられたる、夥しいプロレタリヤートの群の存在からであつた。不安と不滿と憧憬の波、英國に於ては夥しい亞米利加移住民をつくり、露國では中歐文明と汎スラヴ文明との兩極端の對峙となり、伊太利、獨逸皆なそれ〴〵の理由と特色とを持つて、新しい時代の浪の動搖に躍り始めた。

ロマンティシズム、謂ふところの浪漫主義は、現在への烈しい不滿と、未來への強い憧憬と、自由奔放なる情熱とをその特色とする。現在の否定と未來への憧憬といふ點では、理想主義とも一致するが、唯「理想」の有無といふ點に、兩者の重大なる相違が横たはる。殊に理想主義が兎もすれば潑剌たる生活力から去勢されたやうな人々の間に造り出さるゝに反し、ロマンティシズムは非常に若々しく、華々しく、生命の燃え輝いた熾烈な要求のもとに、新しい未來へ泳ぎ出でんとする熱情を持つてゐるが故に、若き精力ある人間の間に勃興した。それが當時のヨーロッパ知識階級の間に榮えた理由は、知識階級が最も多くその條件に適合してゐたからである。知識階級に屬する學者、藝術家は一般に深い信念と自意識とを持つてゐる。然るに世の實權は、知識階級を目して「俺達の羊だ。俺達に智慧を貸す道具だ」と高をくゝつてゐるブルジョアの手にあるので、彼等の自尊心を傷つけること夥しかつた。氣骨ある學者、藝術家は、猛然立つてブルジョアに、否、時代そのものに反抗した。卽ち英國に於てはバイロン、シェレー等の若い反抗詩人が現はれ、一は國外に追はれ、希臘の革命戰に參加して斃れ、一は自ら國を去つて漂浪の後、伊太利ビア・レキオの海に水死した。彼等は共に現在への反抗と、未來への熾烈なる憧憬に燃えてゐたところの代表的なロマンティシストであつた。佛蘭西に於ては、墮落の極に達せる擬古主義に最も強い否定を放つたところの、ヴィクトル・ユーゴーや、後、ナポレオンと妥協したシャトオ・ブリアン等が現はれた。ユーゴーの戲曲「エルナニ」が巴里の劇場に上演された時の如き、非常な爭鬪を觀客の間に惹き起し、見

物席で舞臺以上の大芝居が演出され、ユーゴーは身を以て劇場を逃れた。その爭鬪は、ユーゴーの作品の基調をなす自由奔放なる彼自身のロマンティシズムからの爆發であつた。古代模倣の安價なる娛樂藝術の捕虜となれる當時の佛國人と、若きロマンティシズムの血に勇む佛國人とは、ユーゴーの爆裂弾によつて端なくも爭鬪の動因を得た。そしてロマンティシズムの勝利を結果した。獨逸にも亦ロマンティシズムの運動が洪水の如く動き始めた。所謂スツールム・ウント・ドラング（暴風的感情）の時代がこれである。千七百年代の終より千八百年代の初頭にかけて、ゲーテ、シルレルの二大文豪が活躍した。ゲーテの「若きヴェルテルの悲み」が市場に出た時の如き、又シルレルが「群盜」を出版した時の如き、獨逸の青年は狂氣せんばかりの感激を以て、ロマンティシズムの代表的作品を歡迎した。ロシヤに於てはロシヤ國民文學の父と言はれる、大詩人プーシュキンを始め、その後繼者のレルモントフ等が遲れ馳せながらロマンティシズム運動に參加した。

又、ロマンティシズムの潮は、哲學方面にも影響し、カントやヘーゲル等によつて築き上げられた論理的な固い石のやうな哲學に極力反對して、ショーペンハウェルや、マックス・スチルネルが現はれた。「自己とその所有」は一高等女學校敎師たりしスチルネルの名著であるが、彼は從來社會の一員として生活して來た近代人が、所謂社會我から自己我へ移るべき、自己革命の第一聲を叫んで、自己と社會との對照の上に明かな觀念を造り上げた點で不朽の功績を持つ。又ニイチエは自己の尊嚴を極端に唱へ、人をして神にまで肉迫せしめた。彼の哲學思想はショーペンハウェルとスチルネルとを相牛して取り入れたやうな傾向がある。かくて現代への不滿、破壞と解放そのもの丶讃美、自由奔放なる自我の活躍、未來への憧憬等を條件とするロマンティシズムの一大潮流は時代の隅々にまで動いて來た。

ロマンティシズムが人間の誇大性を極端に重んじたのに反し、自然主義は遙かに冷靜に、社會の不滿不安に對し

ても徒らに感情に走らず、批評家の、若しくは科學者の態度を以て不安そのもの丶芽を見極めようとした。ロシヤに於けるゴーゴリ、ゴンチャロフは自然主義系統の作家で、ゴーゴリは人間性の缺陷に少しも眼を閉ぢず、些の容赦なく剔抉のメスを振うてゐる。ゴンチャロフはデカダンと言つてもいゝくらゐ、社會的不安に襲れたる、若しくは不安に打ち碎かれたる人間を、即ち、オブローモフ型の、夢も皮肉もなくなつた人々の生活を描いた。かうした傾向の流れは、後世のチエーホフ、アンドレーフ、クープリン等にも傳へられた。

文明は南から北に向つて發達してゆく特殊の傾向がある。吾が日本に例をとれば、九州に源を發し次第に東漸して東京へ來た。ヨーロッパに於ても希臘、羅馬から獨逸及び露西亞に移動した。尤も南にも擴がるが、唯南方へ傳播するとそれが不思議に變化せず、從つていつのまにか萎縮し、固定してしまふ。北方への移動が變化と新味とを持つことは、ルネッサンスの當時、中部ヨーロッパに這入つて來た希臘文明が、一先づ試驗の篩にかけられ採長捨短されたのみをみても首肯される。かくて遂に現代にまで及んでゐるが、現代の文化が更に進んでゆくとき、露西亞、スカンヂナヴィヤ等に移動するらしく思考される。否、早くも露西亞には、現に新しい文化が建設されつゝあるのだ。露西亞にゴーゴリ、ゴンチャロフの冷靜なる自然主義的觀照の上に立つ藝術があつた如く、スカンヂナヴィヤにはイブセンが現はれた。彼は中歐文明の批判者として、ナチュラリズムの立場から、その文明の缺陷を一つ一つ、辛辣に、尖銳な針を以てほじくり出すが如く、これはどうだ、これはどうだと言つて彈劾した。佛蘭西の爛熟した文明に對する批判者として現はれたのは、フロオベル、モオパッサン、ゴンクウル兄弟、ゾラ等である。殊にフロオベルは、冷嚴なる態度を以て、恰も人生の醫者の如く、銳敏、深刻なる解剖を下した。その名著「マダム・ボヴリー」の最後の自殺の章を脫稿せし時のごとき、さすがに冷默そのもの丶如き彼も、滿眼の淚を湛へてゐたといふ。モオパッサンは彼に比ぶればやゝセンティメンタルな性格の所有者であるが、その傾向は

作品の上にも現はれてゐる。彼をして一躍、自然派の寵兒たらしめた傑作「脂肪の塊」(Boule de Suif)は彼のセンティメントと共に、人間の利己心に對する些の忌憚なき批評を見る事が出來る。ゴンクウル兄弟も亦、文藝上の自然主義運動に功績拭ふべからざるエミイル・ゾラと共に、佛蘭西文化の批評家として、又自然派文藝の先驅者として活躍した。

繪畫に於ては、インプレッショニズムが新しい潮となつた。過去の繪は形と色とを綜合的に描き、繪の分子のなかに文學的な素因を濃厚に取り入れることに一つの特色があつた。歴史畫、風俗畫、人情畫等がそれに屬し、繪畫そのもの丶藝術的價値よりも、繪に附帶する外的な條件との關係によつて眼を欺かしむる種類のものが多數を占めてゐた。日本畫に類同を求むれば、菊池容齋の描いた有名なる楠公父子別れの繪であるが、鑑賞者がその場面にあらはれたる史實的或は文學的要素を豫知してゐるが故に、その繪に一滴の涙を催すが、若しその附帶的條件を沒却して純然たる藝術的批判の對象として見れば、それは誠に拙ない有りふれた親爺と子供の繪に過ぎない。殊に十七世紀の佛蘭西美術は、殆んど伊太利模倣と官學跋扈の時代で、熱情なく自由なく、乾燥無味なる模倣に終始した。その代表的なるは、官學派の首領にして、非藝術的なるをもつて知らる丶ルブラン及びミグナー等の繪を擧げることができる。然るに新たに勃興せる自然主義の新運動は、繪畫に於てもクラシシズムの作爲と模倣を容赦なく剔抉し、剝奪した。そして色彩を分解し、形を分解するインプレッショニズムの時代がやつて來た。そしてこれが前記の二大潮流に合流した。而して二大潮流の傍系ともいふべき、高踏派、耽溺派等が現はれ、それらの代表作家に、ボードレール、ヴェルレーヌ等を指すことが出來るが、これらは社會的主潮から離れた個人的なものであつた。後、メーテルリンク等によつて代表される一種の象徴主義の文藝も同樣傍流に屬するものとして、こ丶では問題にしないことにする。

現代の文明は、ロマンティシズムと、ナチュラリズムの流れの上に、如何に築き上げられて來たか？
先づロマンティシズムの何か新しい意義をつかみたいといふ、もやもやした漠然たるやるせなさが次第に形を備へるやうになり、それが「自我の覺醒」となつてあらはれた。ニイチエやスチルネル等はその促進に與つて功勞ある人々で、前代の末葉、人間の心に起りかゝつて來た自覺が、現代人には最早明確なる實感として考へられるやうになつたことは、たしかに一つの大きな事實である。過去に於ては自我が唯心理的にのみ考へられ、心があつて萬物がある等いふ空疎な觀念に支配されてゐたが、次第に物心二面の現實に引き返され、そこには確然たる自我樹立の必要が叫ばれ、凡べてのものゝ根柢は自己である。自己の立場を確立することによつてのみ、凡べての生活が意義を持つといふ思想が浪打つて來た。その思想が現代文藝の上に人間的、若しくは人間主義的傾向となつてあらはれた。

文藝上に於ける自然主義は、それ自ら破壞すべく運命づけられてゐる。何故なら、それは科學的批評的なるが故に人間性の本然たる誇大を破り、誇大を破るところに藝術は失はれるからである。自然主義は藝術の流れに一味の凉風を送つて、遂に永續するをえず、おのづから下火となつていつた。そして自己を無にして、あるがまゝにのみ自然を觀ることの到底不可能なるを實證した。かくて自然主義の自滅的傾向に慊らずして、寧ろその缺陷を補うて現はれたものが、自然を自己に引き寄せようとする新傾向の藝術で、これをリアリズム、又は寫眞主義と私は呼ぶが、このリアリズムがロマンティシズムの發展たる人間主義と接近の機を得、必然一つの大きなリアリズムに結合した。現在の藝術は實にそのリアリズムの發展したものである。

イブセンが、自分の後に、自分よりも偉大な藝術家が出現したと嘆賞したところのストリンドベルグの藝術は

その傾向の一例で、彼の徹底した批判は、イブセンのそれとは既に非常に異なつて來てゐる。彼の作品には時代と自己とのアマルガメーションを强烈に發見する事が出來る。トルストイの諸作、殊に「クロイッチエル・ソナタ」、「地主の朝」等にもそれを見ることが出來、ドストイエフスキーの「白痴」「罪と罰」、「カラマゾフ兄弟」等皆なその例に洩れない。卽ち作品に描き出された人物の苦しみは、作者自身の苦しみであるといふ、時代と作者自身との合金の上に、リアリズムの本義が存する。

然るにそのリアリズムもやゝ行き詰まりの形となり、その後に起つて來たのが所謂、後期ロマンティシズムである。これ、私達が社會的不安の浪にぶツつかつたことを證據立て、現代人が一度革命の怒濤をくゞるべき運命にあることを暗示するものである。佛蘭西革命は前述の如くブルジョア革命であつた。過半の功勞を分つべきプロレタリヤートを社會の下層に沈めて、詐術に老けたるブルジョアが專橫なる貴族に代つた革命であつた。その後ブルジョアの橫暴なる獨裁が、プロレタリヤートの漸層的覺醒の機運をつくり、社會的不安の浪は全ヨーロッパの社會に漲つて來た。而して自己の權勢利慾をどこまでも押し通さうとする飽くなきブルジョアの貪慾が强まれば强まる程、それが皮肉にも彼等自身の重荷となつた。獨逸の植民政策の如きその好適例である。一九一四年に勃發せし世界大戰は、實にさうしたブルジョアの欲望の擴大であるところの獨逸と聯合國との帝國主義の破綻であり、現實暴露であつた。全ヨーロッパの民衆は勿論、カイゼルさへがブルジョアの魂膽に否、利慾に利用せられたとみることが出來る。戰爭の慘虐の犧牲となつて、直接戰場に血を流したのは、實にその戰爭の當の責任者たるブルジョアではなくて、戰に勝てば勝つたで盛んに搾取され、若し負くれば更に苛酷な搾取を蒙らねばならぬところのプロレタリヤートである。彼等は正義の爲め、自由の爲め、祖國の爲めの美名に欺かれて戰場で血を流した。勝つも敗るゝも何等彼等の利益ではない。唯父を失へる兒、夫を失へる妻、兄を失へる弟、子を失へる老

又が殘り、暴騰せる物價、夥しい失業者の新現象があとに殘つた。それはいふまでもなく資本主義が生み出した恐ろしい現象である。

獨逸は八億パウンドを政府の經費から節減しようとしてゐるが、負ふに餘る苛酷なる賠償の重荷のため國內の生產費を極度に引き下げ、安價なる製品をどし〳〵英國並びに英國の海外市場に賣り出して、此の同業の工業國を脅かしてゐる。ロイド・ジョージが獨逸の賠償緩和と、その馬克相場引き上げに努力してゐるのは、勿論彼の人間的な同情からではない、自國の益利擁護からである。この英國の國策と事每に衝突しつゝある佛國は、益〻世界の大勢に逆行して、自國のブルジョア帝國主義者の擁護に努めつゝある。又中部ヨーロッパの諸國は經濟的破產に瀕してゐる。かくの如き實狀にあるヨーロッパに、何時革命が起らぬと誰が斷言し得よう。

日本は如何？

封建時代の家內產業から大規模の機械的產業に移り、兎も角も外國との競爭ができるやうになつたことは、維新當時の先見と言ふことが出來よう。と共に、資本主義的生產方法が一つの國に移入される時、それは必然勞働問題を背負うてくるといふことは必ず豫期せねばならぬことである。××の××××も、その國民生活の環境推移と共に、次第に變つてくる。卽ち外部的な狀態の變化は、必ず內部的狀況をも變化せしめずには置かない。日本開闢以來、國家そのものゝ內容は實に多樣に推移してゐる。

資本主義的生產方法のもとでは、人間は必然的に物質化する。それは如何にするも防遏しがたい現象である。かくていろ〳〵の未だ曾て經驗せざる新しい事件にぶつかつた。そして政府は、何時もそれより一步二步遲れて後から彌縫して來た。然るに最近に於ては、問題は單に都會勞働者にとゞまらず、地方農村にまで波及して來た。

社會的不安の高調からの、最も悲しい、最も激しい爆發はロシヤに起つた。これは決して對岸の火災では無

い。能因はどこの國にもころがつてゐる。

以上のやうな環境に處して、後期ロマンティシズムが、新しい文藝の潮流となり、獨逸に於てダダイズム、エキスプレッショニズム等の新傾向を生みつけた。エキスプレッショニズム、謂ふところの表現派は、印象主義を全然反對に行つたもので、後者が自然に卽することを主眼としてゐるのに、前者は藝術家に卽して表現する。勿論、藝術にして表現ならざるはないが、印象主義を始め過去の藝術は、表現を一の手段として用ひたのに、エキスプレッショニズムは表現を全體として取り扱ふ。「自然は如何に笑つてゐるか」これが印象派の境地であるが、表現派は「自然はかく笑ふ」である。そして表現派はミレーが既に十八世紀に於いて「絶對の醜もなく美もない」と言ひ、ロダンが「醜も亦美である」と叫んで、在來型の藝術を破壞した如く、從來の傳統から全然離れようとする傾向を持つてゐる。だから私達が組織的にして來たものを極端に分解し、若しくは從來醜として來たものを美と見たりする。

未來派(フーチュリズム)も、印象主義と同じ氣勢に促されて起つたもので、繪畫に例をとれば、印象主義が色彩の分解に終始した中途半端に慊(あきた)らず、未來派はその極端な個性別の主張から、色彩は勿論、形を分解し心を分解する新傾向である。それは怪奇な繪を生んだ。

印象派に反對して起つたものに立體派がある。これも、藝術家が如何に見たか、卽ち藝術家の個性の强さを極力主張する點では未來派により近い。

一瓶の葡萄酒の味は、數人の科學者の分析の下には同一である。然し藝術家が、それを啣(ふく)んだ時、その藝術家が獨得の個性を持てば持つ程、その味は一人一人に於て變化する。表現派を始め新しい傾向の文藝を通ずる主張はこれである。私達には尙解らない傾向ではあるが、近い未來にそれがぴつたり解つて來ないとは勿論誰も斷定

しえない。例へばロダンの彫像「鼻のかけた人」は、當時に於て笑ひ怪しまれたが、現在では誰の眼にも一個の優秀なる藝術である。

然らば表現派その他の新傾向の藝術は、一體何人の心に訴へ、何人の眼に鑑賞さるべきか。貴族か？　否、ブルジョアか？　否、彼等は既に過去に於いて藝術を持つた。それは僧院の堂に調和せず、中世紀時代の薄暗い室に調和せず、帝國至上主義者のサロンに調和せず、軍國主義者の壁間に不調和なる藝術である。此の新興の藝術を藏め込むべき過去に於ける如何なる時代も如何なる階級もない。

未來に育つべき藝術は、それ自身の中に大民衆を溶かしこんでゐるべきである。これは確かである。私は表現派の藝術がその榮光を擔うてゐるとは考へない。表現派は在來の一切の傳統に反抗して立つたには違ひないが、それも矢張りブルジョア畑に育つたものであつて、盲ら探りをしてゐる狀態にあるのだ。

私の觀るところによれば、その未來の藝術は、恰もロマンティシズムの後に、リアリズムの藝術が出現した如く、その畑もその種も、民衆自身の中から出なければならない。今日まで築き上げられて來た藝術を失ふことは、人類の大なる損失ではないかと人々は思ふかも知れない。然しそれは達見でない。藝術は決して退化しない。ロマンティシズムの藝術が十九世紀の藝術を代表せしごとく、リアリズムの藝術はその次の新しい時代を代表した。しかもロマンティシズムの物指しでリアリズムの藝術は測定出來なかつた。生れ出でんとする新しい世界、新しい藝術を、古き世界、古き藝術の立場から批判することは全然不可能である。

（一九二二年八月、木崎湖夏季大學講演）

愛に就いて

私の書いた本の「惜みなく愛は奪ふ」――あれの內容を概略お話したいと思ふのですが、本をお讀み下さつた方も或はこのうちに幾分いらつしやることゝ思ひます。さういふ方には多少重複の嫌ひがないでもないと思ひますけれども、何分どうも事新しいことを後から〳〵と出すほど頭腦が豐富でないので、やはり古いことを繰り返すより外仕方がないし、もう一つはあの本は何だか獨り合點のやうな嫌ひがあつて、讀んで下さつても譯が分らないと仰有る方もないでもないと思ひますので、私の口からお話して置いたら、又何とか多少筋道がつかないこともないと、斯う思ふのです。

それは人が宇宙と云ひますか、或は何と云ひますか、兎に角時間と空間とに大きく擴がつたこの不思議なところに私といふものが一つ生れ出たのです、幾何學で云ふ點といふものになる。厚さもなければ幅もなく深さもない。この大きな宇宙といふところから考へますれば、幅も深さも厚さも持つてゐない唯存在だけを持つて居るところの點と考へられないでもない。その空漠とした大きな世界の中に、私が一人現はれ出たといふ事實は、他の人には何でもないことであつても、私には大分何でもあることです。さうしてその大きな場所の中に現はれ出たところの一つの點が、見る〳〵中に――宛然空に現はれた小さな雲の切れが現れたかと思ふと隱れてしまふやうに、消えて失くなつてしまふ、死んでしまふ。私は、私自身として死んでしまふことは決して恐ろしくない。恐ろしくないことはありません、死ぬ時には隨分恐ろしいだらうと思ふけれども、然し死ぬといふことよりも、私がこゝに現はれて來たといふことがもつと遙かに恐ろしいことのやうに思はれます。この私といふ人間がこゝに現は

れて來まして、さうしてその點の中には私といふ存在がある、點の外には宇宙といふか何といふか大きな擴がりといふ一つの存在があります、さうして私の存在がそこに可能となつて參りますと、その存在の周圍にいろ〳〵なところの物が附いて來ます。宇宙の時から云ひ廣さから云つたなら何でもない存在でありますけれども、私の生命が育つて行くに從つて、私の周圍にはいろ〳〵な物が廣く出來て來ます。それを人々が呼んで環境卽ちミリユーといふものが私の周圍に出て來ます。兎に角、私が玆に存在するといふことは、これは明かなことである。私が生長する。私の內部生命がこの自覺を段々持つに從ひまして、私といふものゝ人格がはつきりとなつて來ます。はつきりして來ますと同時に、私の周圍には、私でないところの、私と何等かの意味において同化され得ないところのもの卽ち環境といふものが段々明かに現はれて來ます。

でこゝに私がある、かしこに環境がある——斯ういふ不思議な事實——私に取つては不思議でありますが、それが現はれて來ます、そこで私の生活は、常に私の環境、私の周圍のものと何等かの交渉を持つにあらずんば、成り立たないといふことを私が考へなければならなくなつて來ました。これも私に取つては恐ろしいことです。私の生活私の生命の要求から云へば、斯うありたいといふことであつても、それを環境が許さない場合がありますし、それから環境が斯うあらせたいとして居る場合でも、私がその環境を突破して進んで行くやうな場合があります。さうしてこの環境と私自身の交渉といふものが可成り複雜な、さうして不可解な交渉となり、私の生命に感ぜられます。私にはさういふ迷ひがある。あなた方におありになるかどうか知りませんが、私はあると思ふのですが……

我々が歷史を讀んで見ましても、斯ういふやうな環境と自身との關係から出發して、出來上つたと思はるゝいろ〳〵な生活の樣式、思想の傾向といふやうなものがあります。例へばヘブライズムとヘレニズム——ヘブライ

ズムといふのは御承知の通りユダヤに起つた思想でありまして、神といふ一つの恐ろしい絶對な力といふものを自分の心外に置いて、さうしてその支配の下に在る人間は塵芥のやうなものであると考へて居るところの生活態度であります。それからヘレニズムは自分の力といふものを土臺に置きまして、自己の完成に全力を盡さうといふやうな生活、この考へ方が歐羅巴のずつと古くからの思潮に流れて居つて、さうしてそれが互に相剋しつゝ來たといふことは誰でも周知の事實であります。

又希臘の思想の中においてはアポロとディオニソスの思想、このアンティセシスの兩極にあつて、バランス――平衡――吊合ひといふものに非常に重きを置いて、さうしてその間また建設といふことに力を入れたところのアポロの思想と、それを踏み破つて行かうとするところのディオニソスの思想、この思想が絶えず互に働き合つて居るといふことも、我々は知つて居る事實であります。

また私共の自分自身の内部生命を考へますと、こゝに宿命といふ、それから意思の自由といふものも考へられます。私の友達ですが名前をちよつと思ひ出せない――その人にこんなことがある、これはもう多分公表しても構はないと思ふけれども、新宮に居た時に彼の幸德事件が起つた。新宮には幸德事件の一人の首魁と思はれてゐた何某といふ人があつた。その人はお醫者さんで、その人の幕下といふやうなものが澤山あつて、それから私の友人――思ひ出しました、沖野岩三郎氏でした。沖野氏が新宮にゐた時にそのお醫者さんと大變懇意にして居つた。ところが、ある正月、丁度日露戰爭の後でしたか、これも不景氣な時代のお正月であつた。その時に、芽出たい正月ではない、芽出たくない、不芽出たい正月をやらうぢやないかといふことになつて、廻狀をまはして、酒を飮んで歲の不芽出たさをのろつた譯です。

その廻狀を廻すことになつて自分達仲間の沖野岩三郎氏の名前も、一番仕舞ひに書いたところが、思ひやりの

有る醫者さんで、沖野氏は牧師ではあるし、乃公みたいな深酒を飲む連中の中に入れるのは氣の毒だ、棒を引いて置け、それもさうだといふので沖野君の名前は書いたが棒を引いてしまつた。それがため沖野君の所へはその廻狀は廻つて來なかつた。その後その廻狀が警察の手に入りまして、一網打盡にやられてしまつたのです。

沖野氏は酒を飲まないといふ同情の下に唯筆の先で斯うやられたゞけで首が繋がつた、沖野氏が宿命論者になつたのはそれからだと自分でいつて居りました。さういふことを考へて見ますと、私共の生活は何か恐ろしい恐ろしい迚も抵抗の出來ないやうな大きな力で支配されて居つて、さうして私共がこの內部から働いて行かうといふ餘地は全くないやうに考へられる。そこにおいて私共はどうしても寂しいけれども、諦めなければならぬ宿命觀といふものが一方に生じて來る。けれども他の一方において私共はこの宿命觀の、人間の全く働く餘地のない生活には安んじてゐられない謀叛氣があるといふことも拒むことは出來ない。如何なる艱難が襲つて來ても、絕えず打ち克つて行つて自分としての生命を切り拓いて行かうといふ衝動は、どうしても防ぎ止めることは出來ない。で生命といふ大きな問題になつてもさうでありますが、日常の極く小さい問題になつても、自分の立場が始終ぐらついて居るといふことは、我々の常に感じて居らなければならないことだと思ふのです。

その外基督敎的の神人主義、卽ち神の人といふものを造り出さうといふところの考へ、神に人の依らうとします考へや、人神主義卽ち人間が神と同樣といふ思想、その他何々といつたならば、數限りのない程に私共の生命に反對して相剋する內容が、無限に併せられるだらうと思ふ。恐らくは大抵の人はその場その場でごまかして通つて居ますけれども、少し徹底して自分の立場をきめて、どう步かうかといふことになつて來ると、どつちを拾つたものであらうか、どつちを棄てたものであらうか、可成り恐ろしい問題である。

斯ういふやうな、私共の生命の中に入り込んで來る二元といふものは、常に自分の環境がかしこにあり、自分

がこゝにあるといふ自分とミリューとの關係から出て來るものだと斯う私は思ふ。で少なくとも私の生活にはこれが大變強くありました。さうして私はこの生活をどういふ風にしたら純一の生活にすることが出來るかといふことが、私の生活で一番苦痛となつたところの懸案であつたのです。それを私はどういふところまで漕ぎ付けたか、どつちをお取りになるにしろ、それを今夜私はお話して見たいと斯う思ふのです。

私が若し強者であつたならば――ほんたうに強いところの人間であつたならば、ニイチエのスュパーマンのやうな人間であつたならば、私は寧ろその矛盾には苦しまなかつたであらうと思ふ。何故ならばほんたうの強者には彼以外にはミリューはない、彼は常に自分の意志の自由を以て進んで行きます。彼は常に自分、彼自身を以て何處へ行つても他人を打ち伏せて行きます。又ほんたうの弱者には私に來るやうな煩悶はなかつた。若しほんたうの弱者ならば、彼には自分といふものは殆んどない、全くない。自分といふもののないところには自分に相對するところのミリューはない。彼は全く無抵抗な生活を生活することが出來るのです。私の持つて居るやうな煩悶はない。然し私は不幸にして強者の分子を少しばかり持つて居り、弱者の分子を少しばかり持つて居る。或はその持つて居るのも丁度うまく平均して、五分五分に持つてゐればいゝが、強者の方の分子が七分で弱者の分子が三分になつたり、弱者の分子が七分で強者の分子が三分になつたりするものですから、兩方とも五分五分ならハカリがちやんとなつてゐて何でもないのですが、それが何ん時でもぐらつくものですから私の生活の不安定といふものが始終起つて來る。さうして私は或る時にはほんたうの強者でありたいと思ひます、ある時はほんたうの弱者であつて、さうして生活を純一にしたい、そんな生活の二元からして全く解放されたいと思ふのであります。そこで仕方がないから私は僞善者になるのです。強者にならうとする時に強者になれないから、せめては強者らしい振舞ひをしてお茶を濁さうとするが、どうしても強者で行けないから思ひ切つて、自分以上の弱者になつて

しまつて無抵抗主義を唱へたりする。それは私の心の中にあることではなくて、常に私の外部に對して自分を調和して行かうといふところから成り立つて居る表面的な生活であつて、さういふ生活が私には絶えず繰り返された。然しながらさういふ表面的な生活は、いつまでも不滿足な生活であつて、ほんたうの内心の滿足を購ふことはどうしても出來ない。然しながら私が微かながらもこの二元といふ生活において自分の立場を作り得ないといふことは、私がこの弱者でもない强者でもないところの灰色の人間で又僞善者であるからであります。僞善者は人から最も嫌はれる分子を持つて居ります。さうして恐らくは僞善者といふものを一番嫌ふところのものは、義人でもなければ罪人でもなくて僞善者彼自身だと思ふのです。その僞善者たる私自身が、その僞善に堪へられなくなつて、かすかに自分の一路を摸索して、さがし出したのではないかと思ふのです。

私は外界に自分の何か依るところを求むべく求め歩きました。私はある時には宗教に行きました。ある時には自分の好んで居る道である藝術に沒頭しようとしました。然しながら宗教に行つた時でも藝術が附き纒つてゐてどうしてもいけない。それからとう〳〵あの弱い動物であるところの兎が、獵師に追ひ立てられた時に山中をあちらこちらと逃げ廻りますけれども、彼は嶮しい崖の上に彼の遁れ場を作ることも出來ず、深い谷の間に彼の隱れ場を尋ね出すことも出來ずして、さういふところを段々驅け廻つた末に極めて平凡な元の草の巣に歸つて來るやうに、極く平凡な私はいろ〳〵苦しんだ擧句又平凡な巣に歸つて來ました。その平凡な巣といふのは――私は神を求めたり理想を求めたり、或は知識を求めたり、といふと如何にも大變求めたやうですが――私相應に求めた結果、さういふ嶮しいところに堪へ切れなくなつて、私はとう〳〵私自身の所に歸つて來ました。少なくともこの大きな時間と空間とは、こゝに瀰漫してゐるとしても、それは少なくとも、私ではない。そこにあるところの小さな點、何等のダイメンションも持つてゐない存在に過ぎなくても、それは私なのです。そこで私は私自身

に歸つて來ました。さうして私自身の生活が何であるかといふことを少し檢證して見ようと斯う思つたのです。それでこれから申すことは——言葉といふものは大變都合の惡いところの人間の下僕で、殊に私みたいな物恐れをしたり自分の言葉を自分で疑つたりする人間には、私の考へてることをあなた方に言ひ現はすことは實に困難なのです。

私は小說を書いてゐます、がそんな物を書いてつく〴〵思ふのは、言葉といふやつは、人間に作られたものであるけれども、人間に謀叛してゐるやつで、あれはちやんと立派な生き物です。言葉は人間から作られても生きてゐます。だから人間の方でその言葉を尊敬してやつて、その言葉が丁度うまく入るところにその言葉を遣ひますと、その言葉は初めて恐ろしい力を以て働くのですが、うつかりして少し脇の方へ言葉を嵌め込んでしまふと、決してその言葉は遣ふ人の意を現はすことは出來ない。況んや私が生活の內部に起つたところの現象を言葉で言はうとするには、言葉は嘸かしいふことを背かないだらうと思ふ。

だからこれから言はうとすることでも、あなた方に道理のないやうに聞こえはしないかと心配するのです。どうも私は道理を揃へてずつとお話しすることが出來ない。つまり論理學を研究したことのない人間で、頭腦の方が論理的になつてゐないためでせうが、思つたことをべら〳〵言ひます。べら〳〵も言へないけれどもぽつ〳〵言ひますが——その言葉に理窟を見ないで、その中に暗示的なものがあつたら、あんな氣持で話をしてゐるんだなといふやうな所をどうぞ拾つて頂くやうに願ひたい。

長い廻り道です……。私自身の個性を知らうといふために、つまりソクラテスが「汝自身を知れ」といつたやうに、私自身を知りたいために長い廻り道をしました。ある時には偉い人の傳記に行つて見たこともあります。ある時は歷史を少しばかり探つて見たこともあります。さういふやうなことがあつても、その私が例へば舜の生

活を見て舜のやうな行ひをする、たとへば我舜の衣を着、舜の食を食し、舜の言葉をいへば卽ち舜のみと、誰かが言つたのですが、さういふやうなことを私が學んで見ましても――舜らしい考へ方をし、舜らしいことを言つたところで一向駄目です。一向附燒刄で、とても私には居心地が惡い、居据りが惡いのです。

そこで私は、私の自分自身に歸らうとしましたが、自分自身に歸るにつけても、實にためらはしいものを澤山持つて居るのです。世の中には非常に聰明なシニックな哲學者があります。彼はこの人生を非常に明晰なところの頭腦で見拔いて居ります。人が如何なる理想を描き、如何なる努力をし、如何なることをしても、その人の生命、人間の力といふものは實に憐れむべき限度が設けられて居る。そのじたばたして居る人間の姿を、冷やかな眼で、然しある溫かさを持つて同情の眼で、飛び放れて靜かな氣持で見て居る人があります。あゝいふ人はほんたうに羨ましいと思ふ。羨ましいと思ふけれども、私自身はさういふ風な非常に勝れた、感じの上品な淋しいそのシニックになることは出來ない。

さうかと思ふと、自分の生活を全然外部に與へてしまつて、有ゆる享樂とあらゆる放恣とに自分の身を投げ込んでしまつて、私共が凡べての約束上の羈絆から全然自分を開放して、自分の一歩先が何であるかといふことを顧みず、自分の生活を嘆美する人があります。その人の生活の樣式が外部の人から見るならば、これは如何にもひどい反社會的の樣式であるかも知れませんが、その人の生命の要求としてそこまで自分を突き込んで、自分の生命を何かお皿に入れてその人の前に出したやうに、思ひ切つた生活をする、それもまた羨ましいと思ふ。その人の生活は漫然と罵り去らるべき生活ではないと思ふ。その人の生活の後には、その人が如何に自分の生命を徹底的に見性したいかといふあこがれがある。

然しさういふ生活も私には出來ない。私には如何にも徹底味のないところの生活内容といふものが殘されて居

るといふことが沁々感ぜられて、自分に歸つて來るといふことが非常に恐ろしくてならなかつた。仕方がないから自分自身を恰好のいゝやうに平衡のつくやうに守つて行かう、さういふ極くちびた考へに纒まつて、さうして先づこの見惡い僞善者であるところの私が、自分自身といふものにすご〳〵歸つて來ました。さうして歸つて來た時に、私の生命の中の或るものが、私に告げて言ひました。

お前は今までお前自身と外界といふものを考へて居つた。お前がこの外界に對して何等かの正しい關係を持たなければならぬといふことに非常に苦心して居つた。それから又お前が、お前自身を他の偉い人にくらべて、お前自身の器量が貧弱であるといふことを顧みて居つた。然しお前はようこそ今お前自身に歸つて來た、お前自身はお前がいふ如く醜い、又お前の外界は絶大の力を以てお前の周圍に浮游してゐる、然しながらお前はそれ等から全く眼をそむけて、お前自身に歸つて來たことは何たる善いことであらう。お前は醜くともお前に取つて最上のもの、お前に取つて唯一の所有はお前の外にはないではないか。お前に取つて唯一な根據はお前の外には何にもないではないか、その根據から出發してお前はお前の生命を開拓して行け。さうしてその時お前の生命が何物であるか、さうしてその生命の延長の彼方に何物が存在するかといふことを、しつかり見極めて見よ。或はお前の生活が其處から一元のあけぼのを見出さないとも限らない、といふやうな聲を私の內部に囁かせたのを私は感じました。

斯ういふ風に歸つて來て見ると、今迄私の心にあつた善惡美醜といふやうな問題が、かなり異なつた姿を以て考へられるやうになつて來たのです。私が今まで美しいと斯う思つて居たものは、他の人が皆なで美しいと言ひならして居つたものを、私自身も皆ながあゝいふから美しいなあと考へて居つたらう。他の人が醜いと言つた。大多數の人が醜いといふのだから、多分醜いものだらうと考へて居つたらう。けれども私が自分にほんたうに歸

つて來て見ると、私が今まで美しいと思つて居つたものも、さう思ふのにはより少し違つてゐたり、醜いと思つてゐた今までの醜さとは姿が變つて現はれたことを發見した。これは決して小さい發見ではなかつた。さうしてこいつは面白いぞといふやうな氣持が起りました。さうして、私は自分を探檢する途上に出發して行つたのです。で私は私自身が僞善者でありますけれども、この二た道かけた所のどつちつかずの道から救はれたいといふ、僅かばかりの性質が殘つて居りました。その性質を賴りにして私は今日までの自分の生活をわづかに築き上げて來ました。これからその私が、どうして自分を發見したか、自分の內容が何であつたかといふことを、唯私自身の喜びからざつと申し述べて見たいと思ひます。

凡そ人の傾向には三つの傾向があると思ひます。その三つの傾向はセンティメンタリズムとロマンティシズムとリアリズムといふ言葉を以てよくいひ現はすことが出來ると思ふのです。でセンティメンタリズムはどういふことかといふと、よく殉情或は感傷主義といふ樣な字を書くと思ひます。ロマンティシズムは浪漫といふ字を當てる。リアリズムは普通現實といふ字を書きますが、私はこの字を書かないで卽實とすることにしました。事實に卽する、理想と違つて現實に卽して行く考へ——斯ういふ風な人がありますが、私がこれからお話しようと思ふのは、このセンティメンタルの考へを持つてゐる人、ロマンティシズム、リアリズムの考へを持つてゐる人、それがどれに屬するかといふことを、はつきりどの人がどれであるかといふ事を考へて見ますと、私の考へる所に依ればセンティメンタリスト感傷主義者といふものは、常に過去の生活に重點を置く人だと思ふ。それからロマンティシズムの人は、常に未來に重點を置く人だと思ふ。それからリアリズムの人は、常に現在の生活に重點を置く。私はこのリアリストの立場です。

ロマンティストはどういふ人かといふと、理想主義者も入つて居ると思ひますが、ロマンティストは過去に滿足

しない、現在にも決して滿足しない、現在が如何によく見えても、現在には種々雜多なる發達しない未完成なものが澤山殘つて居る、唯完成すべきところのものは、現在を飛び越えたところの未來にある、何處か現在でもない過去でもないところにあらねばならぬ、といふ氣持を有つて居るところの人であつて、過去と現在とを無視して、未來で何かを憧憬しようといふところの人、その憧憬しようとするところの目的物がはつきり分つて來た時に理想主義者となつて來ます。

それからセンティメンタリストは、未來に出て來るところのものが、どんな善いものであつても我々に取つては何でもない、現在といふものは非常に住み惡いところの現在である、然しながら過去の中には人間の生活のある高さには――過去にあつたところの絕頂には、現在には迚も見ることの出來ない現象を澤山實現して居る。例へば釋迦の生活であるとか、基督の生活であるとか、或は支那の黃金時代であるとかいふ、非常に立派な寶が過去には澤山藏せられて居つた、それは祕密に貯へられて居る、この寶に憧憬してそれに自分の夢を繫いで、現在の不愉快な生活を忍ばうといふ。これはセンティメンタリストの立場です。

これから私の立場――リアリストの立場は、過去にはいゝ物が確かにある、私自身の生活を考へて見ても、それは大變なものだと思ふのです。恐らくは先程申しました通りに、宇宙に遍在してゐるところの星、この星の光といふもの、それは皆な私を作るために動いたに違ひない。それから地球に存在するところの凡ての存在は、それは直接か間接か知らぬが、私が生れ出るところの力になつてゐるに相違ない。こんな小さい個性であるけれども、私といふものを作り上げるところの過去の力、過去の莊嚴さの如何に絕大であるかといふことは、私自身が拒み得ないところであります。然しながら私がこの過去に生きる所以のものは、この過去が私の生活の中に引き入れられまして、過去の善いものが私の生活の中で再び生活されたのでなかつたならば、その過去のいゝものは

何等の役に立たない、それで過去のいゝものがあつて、私の現在の生活に生活されるといふものは、名前こそ過去であるけれども實は現在で、私の現在の生活の中に入つて居るのであつて、それはもう過去を現在の一瞬間に引き入れてしまつたものです。それから私共の人類の未來といふものには、輝やかしいものがあるといふことは、私も感じます。私も人類の未來――人類が必ず進化して行くといふことを考へるものでありますけれども、然しながら未來に如何にいゝものがあつても、その未來を築き上げるものは私の現在だ。私の現在のこのエヴリー・モーメントが最上に生きられなかつたならば、未來に現はれて來るかゞやかしいことは、何時まで經つても生れ出て來ることは出來ない。

若しロマンティストがいふ如く、善いものをほんたうに捕へ得る力は何處にあるかといへば、私のエヴリー・モーメントを最上に生きるより外はない。だから私のこれからお話するのは、私の現在に引き込んで行つてお話することになるのです。

例へば私のこゝに立つて居るところの凡ての瞬間、聞いてゐらつしやる凡ての瞬間、それに優つて尊い時もなければ處もない。この各〻の瞬間が若し最上に生きられるならば、もう私共の生活の滿足は他にないやうに考へる。だからリアリストは目的を自分の外に作りません。リアリストは何か未來にいゝものがあるとか、死んだ後に極樂があるだらうとか、そんなことは思はない。つまり私の理想なり目的なるものが私の今日の生活に入つてしまつた、今日の生活がそのまゝ理想でありそのまゝ目的である。今日の生活が目的で、目的が生活であるといふやうに、例へば私が海に溺れて、さうしてあぷ〳〵して居る時に、俺は何で此處で生命を助からうとして居るのか、俺がこれから生きたならば、何年先き生きるだらうといふやうなことを考へてるものはありはしない。その人が水の中から浮き上つて生きようといふ生命そのものと一緒に、彼が救はれようといふのが彼の目的であ

る。彼が救はれよう、自分自身を救はうと云ふのが彼の目的であるから、それがすつかり一緒になつて、現在の緊張した、さうして弛みのない生活である。それが離れてしまつて目的が飛んでもないところへ行つて、目的が彷徨して居るといふならば、それは私には疑はしい生活である。

だから、リアアストである生活――出來るだけ目的と生活を一緒にして、解け合つてしまふ生活は、いゝ生活だと思ふのです。倉田氏の「靜思」といふ本を讀んだらその中に、百の理想を持つて三十歩しか行かない人は、八十の理想を持つて七十歩行つた人よりも人格者である。理想が低くつて行ひの高い人よりは、理想が高くつて行ひの低い人が人格者であるといふやうな句があつたのですが、私にはこれはどうしても首をひねらずには居られない。そこで私はこの現實――卽實的な私としては、唯今申しましたエヴリー・モーメントを最上に生きることの外に私のほんたうの滿足はないといふことを朧げながら感じた。それを生きることによつて過去も生きて來れば未來も生きる、ほんたうに生きる道はそれより外はない。これは私の實感です。然しさういふ風な目的と生活、理想と生活が、そのまゝ合一するやうな生活を導くといふことは、如何に難いことでありませう。私は、自分自身の生活を考へて見ますと、私の生活がいろ〳〵な緊張をする、緊張をする度合ひによつていろ〳〵な變化をしてゐるといふ事を發見する。私の理想は非常に遠くに行きまして、さうして私の生活が恐ろしく低く見える時には、隨分警戒しなければならぬといふ事を考へます。それから又私のやつてゐる生活が、理想も何もなくなつて漫然と生活して居つた時には、私は非常に恐ろしい生活に入つて居るのだ、といふことを自覺しなければなりませんが、私がほんたうの生活に入つて居るか居らぬかは、内部の生命力が緊張して居るか緊張してゐないかといふことに繫つてゐると思ふのです。

よく近代の科學者は生命の内容を分解して智と情と意と名づけてゐる。この三つの要素がいろ〳〵になつて、

さうして我々の生活をよくもし惡くもするといつて居りますが、私は一つの生命がそんなに分れることが不思議です。

太陽の光りが――眞白い光りが三角稜を通して見たなら、七つの色にも澤山の色にも分れるでせうが、その色の内容を調べて見ても太陽の光りといふ白い光りにはならない。我々の生活の現はれとして出て來る智情意といふものは、如何に綿密に研究して見ても人の生活にはならない。世に思想家といふものがある。漫然思想家といひますが、よく考へて見ると思想家には二つあると思ふのです。それは片方は研究家なのです、片方は思想をする人なのです。私共が思想家といふのは思想の研究家であることが多いのです。つまりあの人は斯ういふ思想を持つて居る、あの哲學者は斯ういふ思想を持つてゐる、その關係が斯うであるとか、これを比較して見たところが、此方が正確であるとか、不正確であるとか、それを整理按配して研究してゐる人を、我々は思想家といつてゐるやうに思ふ。けれどもさういふやうなのは、ほんたうの思想家ではなくて思想研究家だと私は思ふ。さういふ人は丁度科學者が蟲を集めて、その蟲を綺麗に分類して一つの喜びを感じてゐるやうに、人間に現はれたところの思想をいろ〳〵に分類按配して、その系統を立てゝゐるところの人である。私の考へるところのほんたうの思想家といふものは、さういふものではなく、彼の思想が彼の生活と殆んど一致して、己れの叫ぶところを實行して居る人がほんたうの思想家だと私は思ふのですが――概念的にいふと、さういふ風に單に思想家といふが、思想家には二つの差別がある。その事を忘れて兩方を引つ括めにして、一つのものと考へることがあるが、丁度さういふやうに智情意といふ問題が、人間の生命は、ある時には生命力が分裂して居つて生命力それ自身ではない、其の分裂したものを如何に研究したところが、生命力そのものには到達することが出來ない。智情意といふものを如何に考へて見ても、そんな形で人間の生活に三頭政治が行はれて居るとは思へない。ある一つの目的に

向つて連續的に生命力が働いて行つたとすれば、それを私共は假りに意志といふのだと思ふのです。それからこの力がある時には非常に強くある時には非常に弱く、交流電氣のやうな姿で對象物に對して働いた時には、私共は情といふ言葉を以て現はし、それから二つの對象において選擇して私の生命が現はれた時、それを知といつて居る。だからして本當の知と意志と情と、さういふものゝ間にカッチリした區別はない。その間には太陽を分析した時、七色になつて――赤と黄と青の間には紫とかいろ〳〵な色があるが、その境目に行くとどちらか分らないやうに、人間の個性の働きを、知と意と情とに分けて生命力がさういふ風に動くのだとは考へられない。私の微かな實感からいふと、生命といふものゝ緊張して居るところの度合ひ、その度合ひに依つて生活は違つて來る、斯ういふ風に感ずるのです。

それで又前に歸りますが、自分自身に歸つて自分の生活を一番飽滿な一番純粹な生活をしようと思ひますけれども、私の生活は常に一番緊張して一番飽滿で一番純粹であることが出來ないで、しば〳〵外界との妥協を餘儀なくされる。その外界との妥協が甚だしく餘儀なくされた時に、私の生活は段々緊張度を缺いて來て、だらけて行きます。そのだらけて行く生活を、私は假りに習性的生活（habitual life）と名づけます。その習性的生活が私の中に入つて來ます。つまり私の生活が弛み切つて居るから、スポンジが水を吸ふやうに、抵抗なしに環境の力を吸つて了ふ。さうして成り立つところの生活――といふと少し分り兼ねるが例へて言つて見れば、私が御飯を食べる、私の手が怪我でもして居なかつたならば、左の手に茶碗を持ち右の手に箸を持つて飯を食ふ、朝もさうだらう晝もさうだらう晩もさうだらう。今日は一つ生活を緊張する爲めに、右の手に茶碗を持つて左の手に箸を持つて飯を食つて見よう、といふやうなことはまあ私の氣が變にでもならなければ出來ないことですが、飯を食ふといふ習慣から馴致された方法は私の生活の中の極めてだらけた生活です。唯私共が右の手に箸を持つて、左

の手に茶碗を持つて飯を食ふのが、飯を運び易いやうにすつかり習性づけられてしまつたまでのことです。

さうすると私は、私自身の生命力を動かす必要がない。腹が空いて來れば左手に茶碗を持つて飯を食ふ。これは丁度人間の生活に——矢張り人間は阿母さんの胎内で十ケ月下等動物の生活をやつて來たといふ話ですが、本當をいふと下等動物、單細胞生物の生活よりもつと以前の生活があるのですよ。どうも習性的生活といふのはそれです。石や木の生活です。樹を土の上に植ゑればもう其處に樹はくつ着いてしまつて、別に引越しなぞはしません。一つの玉をころがせば若しそれに引力がないものだと考へれば、どこまでも何か支へる力があるまで轉がつて、止める力があつてそれが止まればもう其處から動かない。さういふやうな生活が私共の生活の中にあるのです。顏を洗ふにしても今日は手拭を三つに折つて見よう、四つに折つて見よう、明日は斯う折つて見ようといふことは考へない。大抵三つに折る人は三つに折り、四つに折る人は四つに折る。氣を付けて御覽なさい。手拭を斯う（右手を下より左に）絞る人は斯う絞る、斯う（左手を上より右に）絞る人は何時でも斯う絞る。もう全く自分の意識を使はないで成り立つて行く生活、斯ういふ生活が私の中にある。さういふ生活は可なり廣い範圍において行はれて居る。つまり私の生命力が外界と調節して行かなければならん。その場合には外界が私の生命の中に遠慮會釋もなく攻め込んで行く。それだから丁度先程申しました弱者の生活のやうに二元はない、無元の生活、何故ならば私といふものが殆んどない生活だから、そこは元のない無元の生活なんです。無元の生活であつて何等の努力のない生活である。斯ういふ生活が私共の生活の中には可なり廣く行はれて居る。ところが、人間はこの生活ばかりでは迚もやり切れない。これは全く意志の自由といふものを人間自身が無視した所の生活——外部の力ばかりで働いてゐる。この生活にはどうしても人間が安定して行けない。そこでこの人間が外界の刺戟に對して緊張して行く。その緊張はどうして行くかといふと、今言つた手拭を三枚に折つては少し短い、さう

するとこれは三枚に折つてはいかん、二枚にしたものだらうかと考へる、即ち外界の刺戟が、新しく加はつて來ますから、外界の刺戟に對して順應して行かなければならん。順應して行くところの生活は習慣的生活よりも緊張する。さうすると外界が向うからやつて來る。それに對して私の生命力が反撥して行く。その力はスポンジに水を吸ひ込んで行くとは違つて、ゴム玉に向つて拳固が飛んで行くやうに生活が出來て來ます。その生活を、私は假に知的生活(intellectual life)と申します。これはもう植物や動物でも――根も下された植物はその根を下されたきり動かないと云ひましたが間違つてゐます、矢張り動きます、大きくなります、だから習性的生活は石や土の如き生活といふべきで、知的生活が植物や動物の生活なのです。植物にも動物にも外界の刺戟に對して必ず反應するところの生活はありますが、人間の社會にはこの生活が非常に大きな部面を占めて居る。殊に私共の持つて居る現在の社會生活――個人生活でない社會生活といふものは殆んどこの知的生活に支配されて居ると見て大して差支へはないと思ふ。知的生活といふことに就いて言つて見ますと、今迄の習性的生活にあつては、個性といふものは全然隱れてしまつて働かない、然しながら知的生活に入つて來ると私共の生活は始めて獨立の存在を明かにして、外界といふものが共處に現はれて來る。そこで外界と自分の對立が實現して來ます。さうして自分といふものが此處にあり、外界がその個性に對して働きかけて行く。個性はこれに反應して行く。この生活を私共は經驗といふ言葉に依つて言ひ現して居る。習慣的に顏を洗ふ毎に折つてゐた手拭の短いのを經驗したといふことは、外界の刺戟が違つて來たことで、私はそれに對して生命的に反應する。その反應が即ち經驗といふ形で私共に取り入れられる。違つたものにぶつゝかる、ぶつゝかつた時に私の生命力は緊張しまして、どう處理しようといふことになつて考へる。さうしてその經驗が重なりますと茲に私共の言ふところの知識が生れて來るのです。それからその知識が生れて來るプロセスを少し申しますならば、例へば私共が往來を歩いて居る、大丈夫だ

と思つて歩いて居たのにうつかりして蹉跌いたすとします。はてなと思つて見たら往來に石ころが出て居た。さういふ新しいことにぶつかつて、これは不可ん、これから先きは歩く時はこんなものが出て居るから足を高くあげて歩かなければならんと、歩くことの少しの經驗が今度は反省といふ形になつて生れて來る。出掛けにぶつかつた時には倒れるのでせうが、二度も三度もこの經驗を繰り返すうちに今度は、あんなものが出て居るとすると足を高く歩かうぞといふ知識が生れて來る。

その知識が生れて來ると、知識に依つて物の價値といふものを定めることを私共は覺える。その物の値打ちを定めるといふことが私共に取つての道德です。例へば恐ろしく强い人から横ッ面を張られる、又出たら又毆られた。强い人の前へ行つたら頭を少し下げぬと毆られなければならん。目上の者は尊敬して頭をさげろと、つまり向うの强い人の價値を自分自身の價値が經驗に依つて——知識に依つて解つて來た。人間と人間との價値關係といふものが定まつて來るといつた具合です。それが我々の持つて居る道德です。個人においても社會においても道德と知識といふものは知的生活の所產として現はれて來た、だからして知的生活といふものは前にも言ひました通り我々の生活に取つては非常に大切なものです。習性生活はいくらやつても現狀を維持するといふに止まるけれども、知的生活に入つて來ると現狀を維持するに停まらずして現狀を整理する、丁度圖書館の整理をするやうに、記帳をしたりカードを作つたりして、この本が欲しいと思へばその價値のある本は鍵を持つて開けに行けばちやんと其處に出て來る。さういふ生活が私共に可能になつて來る。だからこれは私共の生活として非常に大切な生活であります。

然し斯ういふことが出て來るのです。社會的の知識を持ち道德を持ちますと、私でもさうですが、人間は立派なものに生長したいといふ欲求も持つて居るけれども、同時に兎角天下に事無かれといふ現狀維持的な欲求も持

つて居る。無事安泰に過して行きたいと思ふ姑息な心を持つて居る。ところが知的生活は、非常にこれに役立つ生活なんです。圖書館にすつかり整理されて居る、あの中に入つて居る人も別に混雜しない、この知識は非常に立派な知識だといふことがちやんと認められて、斯ういふ道德は斯う守らなければならぬ道德だといふことが極まつて居れば一番安全です。强い人は弱い人を憐れんでやるといふ道德があつて、それを皆な守つて居れば非常に好都合なんです。ところが人間にやつて來るところの刺戟といふものは常に同じである間は無事ですが、一旦新しい經驗をやるといふと、此の今までの知識が崩れる。知識といふものゝ建替へが起る。例へば私はよく知りませんが、ニュートンの萬有引力といふ物理學の基礎理論があつたのが、アインスタインといふ人が相對性原理といふものを發見しまして、さうして萬有引力說を打ち破つたといふことでありますが、これが打ち壞されたことになると、私共みたいなものでも大したことだと思ひますが、アインスタインには全くニュートンに來たとは違つた外界の刺戟が頭に來たのです。だからどうしてもアインスタインは、ニュートンの考へたところを訂正しなければならんことになつた。ところが訂正された段になると、それがそれだけに濟めばよいが、恐らく永い間には吾々の他の知識にも道德にも、從つて生活そのものにも影響して來るやうになることだと考へられます。それだから經驗が變れば知識が變り、知識が變れば從つて道德といふものが變つて來ます。だから知的生活は何時でも自分を修正して行かなければならんのですが、元來知的生活は我々の生活を安全にし、整理して居るところの生活なのだから、成るべく變らないで、そのまゝ行けば一番それに越した面倒がなく都合のいゝことはないのです。ところが近頃のやうに社會問題とか勞働問題とか危險思想とか、いろ〳〵な刺戟が外からやつて來る、さうすると社會が不安になつて來ます。不安になつて來て、何だか世の終りが近づいたやうな感じを持たないとも限らない。これは外界の刺戟が從前通りではなくなつた證據で、それに對して知的生活は自分自身を訂正せねばな

らなくなつてくるのです。かういふ狀態は知的生活としての破綻です。

ところがそれと反對に石に躓いて倒れるといふ經驗を澤山やると、あそこに石が出て居るぞ、と前から用心して本能のやうに足を高く持つて行つてしまふやうになつて、意識的に心を動かさないでも生活が出來るやうになつて來たとします。さうするとその生活が知的生活といふ性質を失つて來て段々と習性の生活に入つて來る。努力をして人の定めた道德律によつて動かうとして居る間はそれは知的生活なんです。それがやがて習性的になつて、さうした努力なしに、そんなことが出來るやうになつて來れば、その生活はみんな習性の生活に入つてしまつて、道德も道德ではなく習慣になつてしまひます。よくお婆さんが南無阿彌陀佛〳〵と口の先きで言つて居るやうなもので、元は矢張り實感的に言つたのだらうけれども、佛樣に對する道德的の觀念といふものが段々習性的になつてしまつて、くちびるの所だけで、南無阿彌陀〳〵といふやうになるのと同一です。習性的生活が向上すれば知的生活、知的生活がだらければ習性的生活、この二生活の關係は以上のやうな具合です。

私共が知的生活を持つて居るといふことは、人類に取つて大變に强い幸だと思ふ。私共は道德を有し知識を有し、而して私共の生活の內容を整へ、社會生活の秩序を整理してゐるので、人間生活の內容が規則立つて來て、色々な不幸や災禍が減ぜられてゐます。私共の現在の生活を整然とした秩序の下に置かう、或は道德的觀念を以て自分と外界の間を調節しようといふこの傾向は、人類が今後如何に發達して今後如何に美しいものを作り上げようとしてゐるかといふことを、我々に考へさせるところの――暗示させるところの現象であると思ふ。但し、こで私のいふ道德といふものは、さういふ道德を生み出すといふ不思議な力を指すのではありません。道德を生み出す力卽ち道德的欲求は不變な力で、意志のある道德は崩れて、凡ての道德律を割り出す源頭となるものであつて、今申した道德は知識がさうであると同樣に環境の變化と共に變化するものではありますが、然し何と云つ

ても知的の生活は私共と外界との交渉を、或る程度まで人間に近づけるやうにした生活です。けれども外界が働いて來るに對して私が跳ね返すところの生活、この生活は未だ一元的な生活だといふことは出來ません。必ず何等かの外界との交渉を持たなければ成らない生活です。私が憐れな兎のやうに外界から逃げて私に歸つて來た。その欲求は知的生活が如何に滿足に生活されてもそれは滿たされることは出來ない。もう一つ私自身が外界の刺戟から絶緣せられても行けるやうな生活がありはしないかと思ふ。卽ち私は私自身の生活の實感からして、それをいろ〳〵探つて見ようとするのであります。

それは私の生活が一番緊張したところに出て來る生活でありまして、外界から私に働き掛ける事なしに、私の方から進んで外界に働き掛けて行く生活、さういふ生活が、私共にあるといふことを微かながら經驗することが出來る。例へば私自身の生活といへば小說書きなんですが、小說でも書く場合に筆を執ると先づ讀者を念頭に置いて、巧く出版して世間にうけたらしめたもんだ、などといふやうな氣持が、ないことはない、澤山ありますあり過ぎるほどあります。けれどもそんな氣持で小說を書いても、どうかすると私はそんなことは忘れてしまふ。讀者が讀むか讀まないか、私がその小說を讀み返すかどうかも知らない。筆を運ばせるといふことに一生懸命になつたら何かそこから生れ出て行く。それは何の心もなくて、謂はゞ澤山の群衆が歩いて行く、その中に私は、一緒に入つて、前にも人が行く後からも私の肩を輕く押へて吳れる、私は步度を自由にして自分には何の考へもなくて、とつ〳〵と息の切れないやうな程度で、步いて居る氣持です。そんな氣持がするんだらうと思ふ、その外には何にもない。同じ步度が快く息の切れない程度に繫がつて行く、そんな氣持に入る時に、私は讀者から讀んで貰はうといふ期待もなければ、いゝものを書かうといふ期待もない。小說を書くといふ私は、もう凡ての外界と全く絶緣されて、私自身の生活がずん〳〵伸びて行く。伸びて行くことすらも、感じないけれども、後から

考へるとあの時が一番よかつたのだといふことが分る。私は先づ小說書きだから自分の生活經驗からそんなことをいひましたが、事實あなた方の生活にも屹度さうした經驗がおありになるだらうと思ふ。さういふ生活は、私はもう私の外界があつても私の外界は何でもよい、私が外界に向つて、驀地に働き掛けたところの生活だから、その生活は先程申した知的生活の二元的の關係から離れてしまつて、もう一つ緊張した一元的の生活に入つてゐるのです。何等の努力もない、息苦しさもない、全く無努力の例へば遊戲の生活である。その生活には目的はない。謂はゞ子供が箱か何かを作つて居るやうなもので、始めは箱を作らうといふ目的でその仕事をはじめるのでせうけれども、その中に子供は目的などを忘れてしまつて、たゞ仕事といふことに無我夢中になつてしまふのです。併し箱は出來つゝある。箱を作るといふ手段そのものゝ中に目的は吸ひ込まれてしまつて、創造――造り上げるといふ力が働く。又進化論の中にこれは餘り自信を持つて言へないことですが、而してその後どういふ風に變つたか知らないけれども、ドゥフリースと云ふ人が突發變性(mutation theory)といふ現象を生物の中に見出した。その說に依ると、花から種子を取つて同じ肥料をやつて同じ光をやつて同じ地上に播いたものから、形體學上異なつたものが現はれて來るといふのです。例へば月見草と云ふ花がある。今あの草は私のこれから說明しようとする生活をしてゐるのですが、外界の刺戟に反應して自分の生活を作ることばかりせずに、自分自身で自發的に變らうとして居る。だから月見草の種を取つて播く。十本なり二十本なり同じ狀態の下に播き付けると、葉も變れば花も變る色も變るといふのがいくらも出來るのです。つまり月見草は從來の月見草でない物にならうとして居るのだらうと思ふ。外界の刺戟に何等據らないで內發的の力で、變つたところの生長を遂げようとして居る。斯ういふ現象がしば〳〵生物界で行はれるといふことをドゥフリースといふ人が發見した。その話を知つた時に私は有頂天になつて喜んだ。人間にあることが植物界にもあるかと思ふと、植物でも實に可愛い氣持がした

のです。

然し變る場合は變るけれども大抵退化する場合だといふことも聞かされました。善くなる場合に變ることは滅多にないといふのだ。けれども滅多になくてもあつても構はない。又ドゥフリースの說が古い說だと云つて訂正されたつて私はそれでも宜いのです。兎に角さういふことが植物にあつたといふ噂を聞いただけで、私は自分の經驗の中に符合するものを見出だしたのを喜ばずにはゐられないのです。だから若しさういふ說がたとへ破れたつて、その中に又さういふ說が立つだらうと考へる。兎に角私には大變力になつた說であります。この外界に對してこちらから働きかけて行くところの生活、この生活を假りに本能的生活(impulsive life)と申します。本能的生活と假りに私が名づけたところが、多くの人から非難を受けまして、貴樣は本能的生活といふが、何だか近頃云ふ耽溺生活のやうに聞こえていけないから、本能と云はず何とかうまい字はないかと云ふことを聞かされるのでありますが、それなら何といふ字にしたら宜いだらうといろ〱考へて見ても、餘りいゝ字がない、本能といふ言葉は——隨分人間といふものは言葉を墮落させることの上手なものです。科學者が本能といふ言葉を作つた時には、人間以外の生物を調べて、例へば馬だとか兎には斯ういふ本能がある、斯ういふ本能は人間にもあると云つたのです。人間にあるところの本能は馬や兎に本能だとは云はない、人間には兎にある本能の現はれもあるけれども、外に人間としての本能の現はれもある。斯ういふ本能は人間にもあると云つた事と、馬や兎にある本能だけが人間にあると云つたのとは大變違ふでせう。それを本能とさへいへば人間にも他の動物にも同じ本能の現はれがあるやうにのみいふのは、科學の定義を無視したものだと思ひます。人間は天使でもなければ獸物でもなく、人間には人間の本能があるのです。その人間の本能にまでこの本能といふ言葉を還元して、墮落から救ひ上げて來て考へればちやんと分る話です。ラッセルといふ人が創造的本能と征服的本能と兩方に分けて居るやう

ですが、そんな風に二つに分けて宜いのか知りませんが――とにかくこの本能生活と私の名づけたものゝ内容を見て下さつて、名に囚らはれないやうに、有島といふ奴は奇怪な說を立てるひどい奴だと頭からきめてかゝらぬやうにして頂きたい。

習性的の生活は無道德の生活である、知的の生活は道德的の生活である、本能の生活は超道德の生活である。だから私が本能的に働いて何を働いたところが、憚りながら人はそれを道德的に批判する餘地はない。私自身に批判がある。若しそれが惡いことであつてもその全責任は私の環境になくて私自身にある。このかゞやかしい所の生活が若し人間になかつたならば、私共人間の生活は正しい生甲斐を持つことは出來ないと思ふ。ところがこの本能の生活のお話は實にし惡いので、私は又謎のやうな言葉を以て言はなければならぬのです。

先程も言ひました通り人間の生活は、無元の生活から知的二元の生活に入り、知的二元の生活から本能の一元の生活に入ります。又單なる保存からして知的生活の整理といふことに行き、知的生活の整理から今度は本能的生活の創造といふことになり、更に換言すれば、無精力の生活から努力の知的生活に、努力の知的生活から超努力の本能的生活に入ります。だからその生活に入るともう努力はない、その生活自身で働いて行く。かく私の個性がどうかした場合に緊張して行きますと、私を拉して外界に突貫せしめる。私が外界に突貫して行くやうになる。つまり外界が個性に働き掛けない中に個性が外界に働き掛けて行くのです。言葉を換へて言ふならば、個性が外界の刺戟によらないで自己必然の衝動、內部的なる衝動において自分の生活を開始する。何が私に斯ういふ生活をさせるのであらうかと考へて見ますと――不思議なのは私共お互が此處まで步いて來たといふことです。地球の一番初めにべろ〳〵した混沌たるその地球が、段々收縮して地面に地殼といふものが出來て、地殼が冷めてそこに偶然有機物といふものが出來た。全く無機物だけの世界に有機物が點ぜられて、さうして單細胞といふ

一つの生物になつて、さうしてこの單細胞はやがて複細胞となつて、それが生活の樣式に於て二分して、一つは植物となり、片方が動物となり、さうしてその生活が非常に複雜化して行きまして、その進化に伴れて、人間といふ自覺を持つた動物、つまり自分に對する意識を持つところの人間が出來た。この地球の混沌たる長い間の幾兆年かの過程は、創造から創造への順序を以て遂に私といふ人間、我々お互が出來て來たといふこの大きな事實、それは科學者が說明して居る如く、私は矢張り男らしく認めたいと思ふ。恐らくこの大きな創造の流れといふものは、このお話をして居る間にも、私が何處かへ行つた後も、皆樣を更に複雜なる進化した世界に連れて行きつゝあると思ふ、大きな一つの流れです。私はこれを本能の流れと言ひたい。私はこの本能と云ふ大きな流れの分子の一つで、私の個性はこの本能といふ流れから一部を切り取つて居るのです。さうして本能と一緖に流れて行く。私は本能の流れを有する或る目的を以て流れて居る一分子です。ところがこの川には兩方に岸があります。私が岸といふものが何であるかは極めて曖昧であつて說明を要しますが、その說明は長くなりますからこゝでは略します。

現に角流れを堰き止める兩岸の間を本能の流れがずつと流れて居る。御承知の通り岸があつたならば、岸に近いところの水は摩擦の爲めにその速力が中流よりか遲れる。さうして一番速力の早いところは兩方の岸から遠い中心點が一番早い。だからこの中心點の速力といふものが本能の本當の流れの速さです。それが岸に行くに從つてその速力が鈍く、あるところになると水の勢ひで逆流するやうなことがある。ところが私は本能の中に流れるが、どういふ加減か私の生活が岸近く來ることがあるのです。その場合に先程云つたところの習性的の生活が始まるのです。かく岸の近くにあつては河の流れが中流の速力の半分しか流れなかつたとします。私の內部にある本能の力は、常に最大の速さで流れたいといふ欲求を持つて居る。しかし私の生活が惡い生活になつた爲め實際

においてその半分しか流れない、そこで私の生活に宿命觀が起る。私は流れたいのだが、どうしても私をこれだけしか流させないといふこれだけ宿命的な觀念が起つて來ます。然しながらこれが中流の所へ行きまして、一番早いところを流るゝ事が出來ましたならば――私の欲求、即ち河の水が持つ中流の速さと同一である欲求に從つて、私はその早さだけ流れることが出來ますから、本能といふ大きな流れによつて支配されて居るにもかゝはらず、私は私自身の欲求の十分を以て進むことが出來ます。この場合私の意志は自由です。私の欲するとほり本當の生活に入り切つた時に私は初めて意志の束縛、意志の宿命觀といふものと絶縁されて、私は自分自身の本能の所有者となり、本當の自己となる、斯ういふ生活が起つて來ます。然しこの生活は往々危險視されるのです。何故ならばかゝる生活は往々にして、既に整理された從來の知的生活を破壞する結果になるからです。然しその破壞は決して單なる破壞ではなく、人間生活の視野を廣くし、生活の更新を結果するところのものです。一つ比例を言つて見れば、こゝに田園があるとします。これはもう人が耕してゐる、こゝには道路が附いてゐる、こゝには森がある、こゝに住んでゐる人は澤山の經驗と、それからして澤山の反省とを以て生活を造り上げてゐます。こゝには道がある、これが道德の道です。人はこの道を歩かないとその村の人から咎められます。そこには知識の森があります。適當な時にこの森に入つて樹を伐る。この道を歩かなければ他人の田圃に踏み込まなければならぬ。他人の田圃に入り、時ならざる時に森から樹を伐つて來ることは許されない。ちやんとその時期に樹も伐れば、道があるところは道を通る。さうしてこの知的生活が永く續けば續くほどこの村は整然として整理され、村の生活は無事泰平、桃源のやうな村が出來るのです。ところが茲にその村人の誰も持たなかつた大望を起す人が出て來たとします。村には兎角天下に事無かれといふ考へがあると共に、それに反對する觀念も存在するのです。折角無事泰平をと思ふけれども、無事泰平を破つて行かうといふ勇敢なものが居るので、その人が村のこれ

までの約束を破つて、境から一歩を踏み出したとします。この村落から一歩踏み出したところは荆棘——いばらの原です。其處には道はない、そこには經驗はない、經驗されたものといふものは其處には存在してゐない。然し彼は彼自身の欲求として此の領土を廣くしたいといふ彼の欲求から一歩を踏み出した。一歩踏み出した時、その村の姿といふものは一歩だけ變る、否、全然變る。私共は一歩といふものを小さく見るけれども、一歩でも百歩でも村が面目を一新するといふことに變りはない。彼は踏み出した。その人にお前は境の外に出てゐて道を歩いてゐないから、道德に背く、不合理だと咎めることが出來るか。こゝは道のない世界ですから踏むべき道もないのです。合理も不合理もない。彼が一歩踏み出したことによつて、この領土の大きさを一歩だけ大きくした、領土全體を作り上げ變へたといふ事實があるだけです。だからしてこの本能の生活といふものは超道德で超知識的である。さうしてこれは彼が自分の本當の欲求に出て行つたところで何等の努力もない。定められた村の道を歩くには可なり努力しなければならぬ。然しながら道をきつちり歩く氣持はこゝには全くない。全く超努力な本當の一元の生活はこゝにある。これは一人の生活の上のみにあらずして、社會生活の中にも勇敢なるさういふ戰士が姿を現はします。勇敢なる戰士が新なる創造をして、全く道もない知識もない未知の世界に人類の生活を導いて行く。ところが斯ういふ生活をする人は困つたことには、他人の爲めなどゝいふことは考へない。先程も言つた通り外界の刺戟を受けて出發したのではないのですから誰に仕へようとか、誰の爲めに奉仕をするとかいふことはちつともない。他人の爲めにするのではない自分の爲めにする道德ですから、その結果が獻身的に生命を捧げたやうに見えても、獻身でもなければ犧牲でもなければ奉仕でもなく彼自身の滿足の爲めやるので、犧牲とか獻身とかいふのは知的生活の所產物なのです。個性が一番墮落して緊張の度が緩んだ時に、個性の力はちつとも働かないで外界が個性に働き掛けて來る。だからこれは無元の生活です。そこから出來る生活が習性的になる。そ

れからこの生活が緊張して來ると二元の生活が出來て、そこで個性がそれに反應する生活が初めて出來る。それが知的生活です。知的生活には經驗といふものが出來る、反省の結果が知識となり道德となるのです。その知識なり道德なりがすつかり固定してしまふとこれが習性の生活へ入つて行く。知的生活は始終努力といふものが伴ふのだ、義務であるとか努力であるとかいふものがこの生活には伴ふのです。それだから義務だとか努力だとかいふものは社會の爲め人の爲めにするのであつて、自分の爲めにするのならば何も義務でもなければ努力でもない。社會が彼に對して何か報酬をしないとバランスが取れないことになる。それからもう一つ緊張致しますと個性が、こんな所で愚圖々々してゐないで自發的に外界に突入つてしまふ。個性の方から外界に入つてしまふ。これがつまり本能生活です。この本能生活になつて來ると義務もない。義務がないものだから趣味である、唯したいからやるといふ生活です。それからこゝには努力といふものが更にありませんから謂はゞ遊戲の生活、子供がよろこんで仕事に沒頭してしまふ、あゝいふ生活になります。それが固定しますと、道德化してしまふ、理知化してしまふ。本能生活は常に或る時期の後には知的生活に還へされるのです。これで先づ私の學說めかしいお話はおしまひにして、愛といふ問題にいよ〳〵移るのです。これまで申し上げないと私の「愛」といふものがつまり分らないと思ふのです。

私は先程本能の流れといふことを申しました。本能の大きな流れがある、我々の個性に依つて切り取られた部分が本能の流れと共に流れて居る。その個性が切り取つた本能を單に本能といふ言葉でお話をしましたが、それを少し區別します。で本能と云ひますならば、我々の世界を包んで流れて居りますものを假りに名づけましたから、本能の中から切り取つた私といふ存在卽ち私によつて切り取られた本能といふものを、少し他の言葉で呼んだ方が便利になります。この生命の本源の力となるものは、古來種々な言葉で言ひ現はされて居ります。例へば

老子の太極といひ、ヨハネのロゴスといひ、或は基督の神といひ、種々な人が種々な名前で呼んで居りますけれども、それには色々の陰影が附隨して言葉が不純にされてゐます。その中でも一番我々に分り易くて屬性の嫌味がないのはつまり愛といふ言葉です。私の意味する愛といふ言葉は、大きな本能の流れを私といふ個性で切り取つて居るそれを指すので、人間によつて切り取られた本能を、私は假りに愛と呼ぶのです。その私の中に働いて居る愛といふ――本能から切り取られた愛といふ力がどんな働きをするかといふことを考へて見たい。今迄考へた愛といふ働きは――人が今迄考へたところは、何だか私は謔だと思ふのです。だから私の考へたところを述べて御批評を願ひたいと思ふのです。

だからして私は愛といふものは、人間に現はれた純眞な本能の働きを指すものとします。然し概念的に物事を考へる習慣に縛られて居る私達は、愛といふ重大な問題を考察する時にも、極めて習慣的な外面的な考へから愛といふものを考察しようとする。だからして愛といふものゝ本體、眞相は往々にして誤られるのではないかと思ふ。私共は先程も申しましたやうに、凡てのものを判斷する時は知的生活でやつたのです。本能的生活は價値のない生活だから、知的の原則を以て判斷しようといふのは見當違ひなことで、そこに私は間違ひが生ずると思ふ。つまり愛といふものを考察しようとする時に、それが外面的に現はれて自分自身を表現する時に、外面的の現はれだけでこんなものだと見る嫌ひはないでせうか。例へばポーロの言葉の中に愛を說いて「惜しみなく與ふ」と斯う言つて居る。愛といふものは果して惜しみなく與へるものであるかないか。恐らくはポーロといふ人は、愛の本能をその實行的表現に於て、具體的にいひ現はしてゐるでせうが、私共はそれをすぐ知的に解釋して、愛は與へる力だといはうとするのだと私は思ひます。凡俗の悲しさは、私共は知的圈內に於て、愛の本質を見ようと思ふが故に、姿に現はれたものをそのまゝに見て、自分から放射する力が愛だと斯う思つて居る。斯ういふ風に

思つた嫌ひはないでせうか。然しながらよく考へると、愛は與へるといふ考へは表面的の觀察であつて、實際よく考へて見るとさうでない。若し愛は與へるといふ人があるなら、私はそれに對して愛は奪ふ力だといひたいのです。愛といふものは與へるものだとするが故に、その愛といふものを本當に發動させる爲めには他を愛せなければならない、他に與へなければならない、他に自分の所有を與へなければならない。卽ち愛他主義の道德が非常に大切なことになる。そこで奉仕をするとか犧牲をするとか他人に物を捧げるとかいふことが、非常に愛の美くしい表現として讃美されるやうになつて居る。我々社會の道德は何だといふと利他です、他人を利するといふのが我々の道德です。他人への義務、社會への奉仕といふやうな言葉でいはれて居るものが、我々の實際生活を規律して居るところの道德だといふことになる。だから社會奉仕――個人道德でもさうだが、苟くも報酬を求めた時には、道德でなくなる。實際社會奉仕人類奉仕といふものをする人は、自分を全く無にしてしまつて、他に仕へた時にその人は實に完全に道德をやつて居るといふことになつてゐる。國家でも社會でもそのやうに敎へて居る。さういふことを本當だと私も長く思つてゐた。國家に身を盡して何等の報酬をも顧みないのが、忠良なる國民だと云つて小學敎育にも敎へて居る。ところが實際は如何ですか。國家の爲め勇敢に戰つた人があると直ぐに國家が金鵄勳章を呉れる。報酬を求めないのが眞の道德だと敎へる國家なり社會なりが、さういふ人を見出だすと第一に物質的に褒賞しようとする。何だかそれは不可思議なことではありませんか。身を以て何等の報酬をも求めないのが國家奉仕だといふ、それを國家が敎へて居るのですよ。それだのに身を以て仕へた人に忽ち金鵄勳章を呉れる。國家は彼が敎へて居ることゝ彼が實行して居ることゝ、何といふ大きな相違を持つて居ることでせう。小學校でも犧牲だとか奉仕だとか獻身だとかいふことを如何にも尤もらしく說いて居る。ところが何處かの小學校の先生が死ぬといふと、何といふ報酬を積み上げることよ。彼の說いて居るところの道德と彼の爲して

居る道德に、それだけの相違があるといふことは、何處かに謔がなくてはならぬ、何處かに思ひ誤りがなければならぬと思ふ。そんな事も考へるのです。そこで大抵の人は愛するものゝ本質を考へて、直ちに與ふるところの本能である、惜しまないところの本能であると考へて、そこに人生觀を築くのですが、それは然う思ふのは一應尤もなことであるのです。若し愛といふものゝ現象、若し愛が働くその有樣が知的に考察されましたならば、然う考へられるのは無理もないことである。然し知的生活の所産ではなくして、本能に源を爲すところの生命力、その生命力が理解されようとする場合、單に表面的な現象に依賴し、知的の判斷にのみ依賴しようとするのが間違ひのもとで、端的表現なる愛がそのまゝ把握される爲めには、本能的經驗によつて把握されなければなりますまい。そんなことをお話することは實際は出來やしませぬ。謂はゞ影の影をお話しなければならぬ結果になりませう。言葉は知的生活の所産です。その知的の言葉に飜譯して本能の世界の事柄を、お話して行かなければならぬからです。單に愛といふものを一つの現象として見て、それに客觀的な定義を下すよりも、もつと實感から切り出して、これまで概念的に認められてゐた愛が、正しいか正しくないか微かながら申し出て見たいと思ひます。

第一、私は私自身を愛して居るか、偶には愛して居ない日もある。已れが憎くて堪らぬ日もある、けれども憎いといふ交渉を持つだけ矢張り愛して居るのです。それならば私は皆さんを愛して居るかといふと、愛してゐますよとは直ぐに答へられない、私が皆さんと何等かの交渉を持つ。かゝはりを持つ程度によつて愛するといふことが出來るだけです。皆さんを私が愛し得るためには、顏を見るか、噂を聞くか、話でも仕掛けてさうして初めて愛するといふことになるのです。さうすると私が今言つた利他主義、他を愛するといふやうな主義も本當は純粹な利他でなくなる。如何に自分をなくして他を愛するやうに愛を解する人でも、お前は自分を愛するか、お前

はお前を愛するかと問ふならば、僕は愛しますと言ひませうが、お前はあの人を愛するかと聞かれた時には、まあ待つて呉れと、愛すべき人と先づ交渉をつけて見なければなりますまい。つけた上で愛しますとか愛しませんとか、と斯ういふより外仕方がない。だから自分自身にして自分を愛するといふことは確かだけれども、他を愛する段になると、他と何等かの交渉が生じない以上は愛するといふことは出來ない。他と何等かの交渉を持つといふことは、卽ち私の生活の中に他が攝取されてゐるといふことを意味するのです。卽ち私の愛がその人の生活を私の中に奪つて居ることとである。一つ例を取つて言つて見れば、私がカナヤリを愛するとする。カナリヤが可愛いからカナリヤに籠を作つてやりますね、それから美くしい緋房でも編んで掛けてやりますね、絶えず餌を遣つてやります。その時私はカナリヤにどの位澤山やつてしまつたでせう。所がそれは本當にやつたでせうか。私がそのカナリヤを愛すれば愛するほどカナリヤとの關はりは强くなつて來る。さうしてカナリヤは段々私の中に引き入れられて、カナリヤが何を欲して居るかといふことを知るやうになつて來る。カナリヤがどうかして首を垂れてゐると私は悲しみを感ずるやうになる。美くしい聲を出して鳴くと私は嬉しい。私自身から言ふとカナリヤの生活は段々私の中に取られてしまふ、兎に角カナリヤは私の生活に入つて來てしまふ。小さな鳥は私自身になつてしまふ。私はカナリヤを生活する。然らばカナリヤに籠をやり餌をやり、咽喉が乾いたと思へば水をやる。カナリヤが飲めば此方の咽喉の乾きが直つてしまふ。餌だつて緋房だつて同じことだ。カナリヤが私の物になつてしまふのみならず、私の與へたものは凡て私に歸つて來る。愛は與へる本能で、出してしまふ本能であるかのやうに御覽になるか知れませんが、私自身の實感から言ひますと、私自身の愛といふ體驗からいふと、カナリヤに何物をも與へないのみならず、籠や餌や水やを所有するカナリヤ自身を私は奪つて居るのです。だから若し與へるとか奪ふとかいふ言葉で言はなければならぬならば、愛といふ力は決して與へる力でない、惜しみなく奪ふ

力だと斯ういふのです。

それで此のやうにして愛の本能に從つて、私は自分の愛するところのものをば、私の中に始終同化して來る。さうして又私は他の人に愛せられることによつて、他の人の中に奪はれて行つて、その二つの關係といふものが美くしく繫がれまして、謂はゞ卷絹の縱絲と橫絲のやうになつて、人類の生活が完全に成り立つのだと、私は斯ういふ風に考へます。若しも與へるものだつたら、他のものから互ひの間に遠心力が働いて居るやうなもので、互ひの間は離れて行くでせうが、お互ひが奪ひ合つてこそ引き合ふので、そこに始めて人間生活のソリダリティーが實現されるのでせう。さうして又もう一つ面白いことは、空想家の描く奉仕の生活が本當に善いのだとするなら、それを善い事だといふので皆なで一緒にこれから奉仕生活をお始めなすつたら、一體誰がその奉仕を受取るのです。その奉仕を誰も受取る人がなくなつてしまふでせう。つまり奉仕生活といふものは受け取らなくつても受け取つても宜いといふやうな、理想的時代を作る一つの道行き、奉仕の必要がなくなるまでの一つの道行きの生活です。卽ち手段的倫理に過ぎません。究極の姿ではありません。

奪ひ取る生活は、益々奪ひ取る。もう其處には中途といふものはない。最後の目的だから、人間の生活がどんどん緊張すれば緊張するほど、奪ひ方がひどくなつてしまふ。だから中途半端といふものは決してない。大抵奪はれゝば知的生活に屬するものではなくなる。例へばこの本を讀めば汚なくなつて頁がよごれるが、本能生活になると奪つてもなくならない。私がいくら愛人から奪つても、奪はれる愛人は喜んで居る。恐らく愛人は奪はれる度に嬉しくて堪らない。私は必ず奪ふ事によつて報酬を確實に得てゐます。何等かの形で報酬が付いて居ります。例へば自分はその人から眼に見える何等の報酬も受けることなくて、非常に不幸な人を救つてやつたとして、その人が直ぐに逃げてしまつた。番地も何も分らない。けれども私の心持はあの人を救つてやつたといふ善い氣持な

しではゐられない。その氣持は何でせう。それは報酬でなくて何ですか。世の中ではもう愛の突き詰つた時は、報酬などゝいふ氣持は交らない。與へるのでない、奪ふのでもない。唯愛したいが故に愛するのだと論ずる人もありますが、實際さういふ風なすぐれた愛を一度行つた人は、行つた後にどんな報酬か來るかといふことを、經驗せずにはゐられないでせう。彼に來るところの大きな滿足、彼の個性の生長は何物ですか。立派な報酬ではありませんか。本能の滿足といふものを蔑ろにすることは出來ない。一度愛の經驗を持つた人は、再び愛といふものは無報酬で行はれるといふやうなことは、言はなくなる筈です。愛の行はれるところには必ず奪ひ取つて居る。さういふ風に私は思ふ。絕大の滿足があるやうに思ふ。それならば人は愛するものを愛するでも宜いが、私が誰かを愛する時に先方の人が私を愛しなかつた、斯ういふ時には如何なるか。私は奪ふけれども先方は奪つてくれない、そんな時には愛が成り立たないかといふ問題が次に起ります。私は成り立つといふ。ダンテといふ人はビアトリスが六つか七つの時、彼女を見て愛を經驗した。けれども兩人の間には相互的愛はなかつた。ビアトリスが十八九の時、フロレンスの街でダンテは彼女に會つた。その時ビアトリスはしとやかに目禮を送つて別れた。ダンテの心にはビアトリスの美しい姿が刻み込まれた。暫くするとビアトリスは他の人の奥さんになつた。夫になる人はダンテの友人であるが故にダンテは招ばれてその結婚の席に行つた。ダンテは卒倒して其處に倒れた。彼が息を吹き返した時はもう結婚の席には居なかつた。それからダンテはその人に會はなかつた。そのうちにビアトリスといふ女は二十三四歳で病氣に罹つて死んでしまつた。ダンテは確かに奪つたけれども、ビアトリスの方からは餘り奪つた樣子が見えない。それからダンテは他の女と結婚して澤山子供が出來た。さうしてこの人は不幸な失戀の淋しい生活をして死んでしまつた。何だか斯うダンテの方が奪はれて居ないと、ダンテの奪つた生活が非常に片輪な淋しい生活のやうに思はれるが、ダンテの奪ふ力はひどかつた。ビアトリスは始終ダン

テの生活の中にあつて、その爲めにダンテは不幸だつたけれども、凡そダンテの胸の中にはビアトリスは始終生きてゐた。遂に肉體としてダンテの上に見えなかつたけれども、明かにダンテの胸にはビアトリスは生きて居つたと思ふのです。全く愛し得ない人の淋しさにくらべたならば、このダンテの苦しい生活は、どの位生活らしい、どの位緊張した、どの位幸福な生活であつたらうかといふことは、誰にでも想像が出來ると思ふ。しかもダンテといふ人はこの大きな愛を自分の心の中に置くことが出來なくて、その愛を「新生」といふ、「聖曲」といふ大きな詩にまでしたてあげました。そこに出て來たものは彼の心のかけらです。彼は僅かばかりの心の破片を世の中に殘して死にましたけれども、その殘されたところの破片だけですらが、世界における三大傑作の一として人に謳はれて居ります。ダンテの僅かばかりの心の殘り滓といつたやうなもの、それがそれだけの強い力となつて居る。又私の好きなホヰットマンといふ人の詩を讀んで見ると、「自分は嘗て或る女を心から愛した。然しその愛は酬いられなかつた。然し私の苦しみは無益ではなかつた。私はこの苦しみの中からこの詩を生み出したからだ」といふやうな詩がありますが、この奪ふところの愛の力といふものは以上の例の如く必ずしも相互的であるといふのを必要としない。恐らくは今迄の知的生活においては、相互に働くといふことが條件になつて居つたかと思ふが、本能的の愛が働き掛ける時は奪つた場合には完全に彼に所有される。さうして若しもその愛が強ければ、奪つたものが何時までも彼の所有の中にあつて生きて居ることが出來る。さういふものが本能の愛だと思ふのです。それだからして愛は個性の飽滿と自由とを成就する。殊にその愛は嘗て義務を知らない、犧牲を知らない、獻身を知らない。奪はれるものが奪はれることを許しつゝあらうともあるまいとも、それらに煩はされることなく愛は奪ふ。若し愛が相互的に働く場合には、爭つて互に奪ひ合ふ。その結果私達は互に何物をも失ふことがない。互に獲得する。だから人が通常いふ愛するものは何等失はなくて、そこに二倍の惠みを感ずるといふ言葉を

知ることが出來るのです。それで先程申しました通りに、知的生活の傾向といふものは何時でも本能を墮落させようとする、知的生活に還元しようとする。その本能を第二義的な狀態に利用しようとする。知的の生活が要求して居ることは平安無事であることですから、この生活においては愛の本質よりも、現はれたところの與ふるといふことさへあればそれで澤山なのです。人間の內部の要求はさうであつても、外部的知的の生活においては、與へ合ふことさへ行はれゝばそれで平安は保たれて行く。それで倫理であるとか道德であるとか、義務獻身或は奉仕といふやうな德を頻りに敎へる。人は遂に固定的な概念にあざむかれて、愛の本質といふものを忘れてしまふ。それだから愛のない所に愛を行ふ。本當に愛してゐないのに、外面からは愛して居るが如く取扱はれ、社會から賞讃されるから、遂に人は愛してゐない所へ物を與へる。さうするとその與へたものは本當になくなる。先程申しましたカナリヤは私がすつかり愛の中へ取り込んでしまつたから、籠を與へればそれは私に返つて來る。取り込んでゐない愛だと、籠を與へたら最後籠はもう返つて來ない。愛のないところに社會奉仕をする、例へば何處其處に慈善會があるからと云つて、五圓なり參圓なり寄附する。さうするとその金は決してその人に返つて來はしない。そこに苦い後味が殘るのです。惜しいことをしたなあといふ、その惜しいことをしたといふ後味を、何とかしてごまかさねばならぬから、これは人間の義務といふもの、これは人間のしなくてはならない道であると斯う來るのです。或はそれに對して、他人が禮狀でも寄越しませう。この度は三圓御寄附下され有難く存じ候と書いてある。どうもこの手紙の書方が少し失禮だと斯う思ふ。それはさう思つてゐないやうな顏をしても、どこかでそんなものが動く。それは自分の本當に愛しないものに與へるからであり、又殘り惜しくなるからだと思ひます。本當に愛して居る人に與へるならば、他人に賞讃して貰ふ必要もない。賞讃して吳れゝば持つて來た物に熨斗が附いた位の喜びぐらゐしか感じない。知的生活に最上の重きを置いて本能の生活を顧みないと、兎角「天下

に事無かれ」といふ要求に押されてしまつて二元的になつて、大切な一元的の生活ばかり働かなければならぬ所に、表面的な愛を働かすことになり、さうすると愛の働きが穢されて苦い後味が殘されます。義務だとか獻身だとか犧牲だとか人類の責任だとかといふやうな大變な聞こえのよい名前を用ひて、自己の行爲を辯護しなければならなくなる。しかもその與へたものが、與へられた者に行くかといふとさうでない。愛しないでこの三圓を與へると、これは與へたものにも返らず、與へられた者の身にも付かない。この金の中には汚ないものが泥つて誰にも所有されずに、人生の生活途上にぽたりと落ちる。私達の生活の往來にころがつて居る所の瓦礫です。我々の家の中に積つて居る塵です。先程の河の堤防です。さういふものが段々積み重なつて來ると、つまり我々の生活が僞善になる。さうして生活が段々外面化して、單に道德とかいふものを矢鱈にふりまはして、人間の生活を表面的に規律しなければならなくなる。かくして人間は互ひに愛によつて交渉することなく、愛の假象なる物質によつてその關係を作らなければならなくなり、人間と人間との間に投げた物の爲めに、遂に生活が窒息して活力が萎微廢頽されてしまふ。だからして愛といふものゝ生活は、決して知的生活を以て律することは非常な危險なことであると思ふ。或る人は斯う言ふかも知れない。或る人があつて、お前のやうに自分の個性を、最上に最高に完成するといふことに力を盡すとする。卽ち自分だけの完成の爲めに他を顧みないといふ。所がその人が奪ひに奪つて生長しようと思ふ時に、實際世の中には自分を殺して仁をなしてゐる人があるではないか。楠正成が南朝の爲めに奉仕して遂に身を殺した。さういふ例を一體どう考へるかと、斯ういふ人があるかも知れない。それは餘りに分り易い質問だから、お答へするまでもないと思ひますけれども、楠正成が例へばあの南朝の下に湊川で討死した時、俺は實際討死は嫌なことだけれども、今迄折角南朝の爲めに盡して來たのだ、名前が消えてしまふぞ、腹は痛いけれども切らうと討死したんだと思へるでせうか。楠正成は死にたいから死んだので、名前がどうだら

うと寸毫も念頭になかつたと思ふのです。楠正成は南朝に對して同情を持つてゐた。その愛といふものを徹底的に自分の生活の中に成就した。さうしてその奪つた爲めの焔で以て生ずる自分の生活の、生命力といふものが彼の肉體の中に緊張してしまつて、その生命力が爆發して彼の肉體を破つてしまつたのだ。その時に彼の肉體の亡びたといふことは、彼の個性の滅亡を意味しない。個性の生長擴充を意味するだけのことです。彼の個性を形造つて居る機械の中で極く脆弱な肉體といふ機械が、個性飽滿の滿足の爲めに偶々崩れたといふだけのことです。人間は何時か死ぬのです。個性の滿足といふことを成就してもしなくても死ぬのです。何時までも破裂しないやうに知的生活で保存して居つたところで死ぬのです。しかもそれは矢張り枯木が燃えるやうに、死ぬことにおいては同じです。個性が非常な滿足を以て非常に緊張して破れて死ぬほど心安い死はない。正成だつて個性の本當の滿足の爲めに破裂した。楠正成に取つてはこの上もない滿足だ。その他の動機から正成が討死したのならその行爲は非難にこそ値すれ、嘆美には値しないものになると私は思ひます。正成も亦自己飽滿の爲めに死んだのです。

だから愛といふものは犧牲だとか獻身だとかいふことで律し去つてはならない。愛といふものは知的生活から自由に解放されなければならぬ。この發見は私に取つては小さな發見ではなかつた、小さい弱い經驗ではあるが、私の生活がそれを裏書して呉れる。私は先程申しました通り創作の衝動に驅られまして、自分が何か創作をしようと思ふ時に、私の生活といふものは元來極めて孤獨な生活でありますが、筆を執るといふと、私の內部に未だ見たことのないやうな顏が澤山現はれて來るのです。俺を書けと言はんばかりに現はれて來るのです。これはまあどういふものか、こんな人間も私の中に居たかと云ふやうなものも出て來るのですが、それは思ふに、私と先祖とが愛の生活に於て外界から奪つて來て、捕虜にしておいた人々が現はれ出るのだと考へます。若し愛が奪ふものでなくしては、そんな不思議なまぼろしの影は私の心の中に現はれて來ない。私はそれに使つて兎にも角にも

自分の藝術を生んで行くといふことが出來る。更に申上げておきたいことは、愛といふと如何にも生優しい力であるやうに考へ慣らされてゐる。愛を語るのは私のやうな頑固な人間にふさはしくなく、もつと優しい男でも語ると如何にも似合はしくありさうだけれども、本當を言ふと愛といふものは優しいものではない。愛といふ力は、優しい心臟に宿り易いけれども、愛そのものはなまやさしい力では決してない。非常に激しい力、遠慮會釋の更にない力です。それを我々は考へ違つてゐると、大間違ひが出來るのです。假初の戀にも處女の頰はこけるのです。一人の幼兒の病にも母の姿はやつれるのです。人の肉體などはどん／＼腐らすところの、恐ろしい力であるのは本能的の愛です。

　それからもう一つ考へておきたいのは、我々のお互の間には憎むことがあります。憎むといふことは愛の反對であると思つてゐる人もあるやうだが、憎しみと愛とを超越したところにあるやうな大きな愛を空想した場合は知らぬこと、私みたいな凡俗な人間の感ずる愛憎からいふと、私は愛することもありますが、確かにひどく憎む場合が甚だ多い。これはどういふものか。大抵の人は憎むといふことを愛することの反對であると思つて居る。ところが私はさうは思はない。愛することの反對は愛しないことです。さうして愛することゝ憎む事とは紙一重隣り合せにあると思ふ。例へば私がこの土瓶を見まして、この土瓶が憎らしくてならないと思ふ。ところが本當に愛することを知つてる人は、これを憎むことの如何につらい事であるかといふことを知つて居る人です。愛することのない人は、憎からうが可愛からうがどうでも宜いことだが、本當に物を愛した人は、憎むといふことが如何に苦しい、自分のものとして苦しいことであるかといふことを一番知つて居る人だから、彼は愛したい人だ、何とかこれを愛する方法はないかと斯う來るのだ。この邊から土瓶を見て何とかこれを役立たせる方法はないかと思ふ。而して遂に愛し得る角度を發見するに至ります。人間の心の本當の働きに、何時までも憎いと思ふもの

はないと思ふ。如何なる曲つたものでも、その曲つたものがあるべき位置にあればそのまゝ直ぐなものと等しい値打を持ちます。だから我々が憎むのも、愛の生活においては憎むべきものでなくて、それは愛への希望の旗じるしである。憎しみの直ぐ隣りには愛の生活が宿つて居る。斯ういふやうな考へで私は行きたいと思ふ。さうしてこのやうにして私の愛が深く善くなるに從つて、私はより多くの物を愛によつて攝取すべく、而して攝取されたものは私の中に溶け込んで、正しい排列をなして私の中に完全なる世界を生み出します。私はその喜びによつて生き、私は他に向つて何等の報酬をも顧みず惜しみなく與へますが、その與へたものがどんなに高價なものでも、それによつて得たところの喜びに對して、比較にもならぬ程その値打が小さいものであると考へた時、況してや投げ與へたと思つた贈品も、畢竟は自分に還つて來るものだと發見した時、たとへ私の生活が犧牲と見え獻身と見えても、それは獲得であり生長であると感じた時、その時に私は本當に徹底した人生を樂しみ、人生の可能性を本當に味ひ知つたやうな氣を起さずには居られないと思ふ。私は知的生活といふものが社會の秩序を保つて行くといふこと、安全を保障して行くといふことを認めて、その功績を無視するものではないと前に申しましたが、然しその知的生活が愛の生活卽ち本能生活にまで立ち入つて、知的生活の根據から本能生活を批判し決定して、其處に或る約束或は或る覊絆を作らうとする時には、愛の生活は何時でも知的生活のもう一つ上層にあつて、智的生活を生み出すところの力であることに氣付かなければならない。而して知的生活によつて愛の生活を指導させずに、愛の生活から知的生活を生み出してゆかねばならぬ。私の生活がその域に入つた時に、私の初めに申しました恐るべき迷路、二元の生活、二つの極の間に迷つて居る生活から初めて救はれて、本當の自分らしい生活に入ることが出來ます。社會生活においてもこの道理は同じに働くわけで、例へば社會生活の奉仕といふやうなことを言ひますけれども、漫然とその美しい言葉にあざむかれることなく、その社會の奉仕を受け取るも

のが誰であるかといふことを私達はよく考へて見なければならぬ。愛といふ本能になぞらへてその本能の姿を外面的に利用して、或は曲解して、奉仕といふやうな極めて曖昧な道徳が、我々に說かれてゐるやうなことはないか。說かれてゐるならばその說かれた理由は何處にあるか。如何なる心理的のトリックによつてそれはなされてゐるのか。それらのことを徹底的に見窮はめる必要があると私は信じます。そこにひよつとすると人間全體を愚にしたやうな、馬鹿々々しい策略が潛んでゐるのを發見せないものでもありません。（大阪每日新聞社主催文化大學講座講演筆記）

（一九二二年、十月）

卽實

一

私が當地へ參りますと、新聞の廣告で「卽實」を「卽賓」と間違へられたために、當夜は「卽實」を「卽賓」することに致します。ですが、私は話下手であるために話の順序を正しくして行くことが出來ないのを遺憾とします。昔から小說家の話下手は通り相場であり、私もその一人として未熟です。

御覽の如く私は歲は相當に食つてゐます。しかし云ふことがあるひは譃になるかも知れないとおもひますから、私の云ふことをよく嚙みしめて、良いところと惡いところとを擇んで下さるがいゝ。私が小說家になつたのも極めて晩年、と云つて餘り晩年でもありませぬが、三十六のときでした。その時まで考へに考へつめて來たためだと今思つてゐます。考へが纏まらないためにだつたのです。しかし私は何うしても自分の好きなことをやらずには居れない。やらずに居れないと云ふのは小說を書くことです。書きたいことなら私は何でも書きます。そのために諸君が墮落なさらうとなさるまいと、それは私の關知しないところです。私としてはどんな賢人の言葉よりも、私自身の書くこと云ふことの凡てが、私にとつて一番正しく當て嵌まつてゐてほんとなのです。これは自分の頭から自分の內部のものを割り出したからです。私の前に、秋田雨雀氏が申されたやうに、私はセンチメンタリズムから遁れ出たいために、苦しみ抜いたのです。苦しみ拔いて自分の持つてるものを、些かのまやかしなく眞直ぐに出すのがこのセンチメンタリズムから遁れ出る唯一の路だとおもつたのです。

私達の立場に三つの傾向があるとおもひます。第一はロマンチックです。第二はリアリスチックです。このリアリスチックを現實的と譯されて居りますが、正しく譯すると「卽實」となるのです、「現實に卽する」と云ふことです。そこで第三は、センチメンタリズムの立場です、殉情です。この三つの方向によつて私達は大體進んでゐると見てよいかとおもひます。自分の過去、歷史、生活の過去及びその現在に不滿を感じるのはロマンチシストの立場であります。その未知の世界に猪の如く突貫するといふことに不安定なものを感じて絕えず過去を顧みる。先人の中にある偉大な人々を眺めてその時人の華やかさに憧れるのがこの殉情主義者であります。ルネッサンスの時代、中世紀の文化、ローマ全盛時代、ギリシャの紀元前五六百年頃のあの絢爛眼を奪ふばかりの世界、印度の釋迦時代、支那の孔子孟子時代、これらの時代に憬れを感じて過去のさうした世界を現在に夢見る人々があります。私の知人である今年十八歲か九歲の靑年にギリシャのこの華やかな時代を唯一の標的としてゐた人がありります。その靑年はそして遂にギリシャの國へ立つて行きました。靑年はソクラテスの出る少し前のギリシャが一番美しい人間の時代であつたとおもつてゐたのです。そしてその時代の憬(あこが)れを滿たすために現實の日本を出てギリシャに旅立つて行つたのです。

しかし私はこの立場をとらないものです。またとりたくないとおもひます。その過去に如何に華やかなものがあつても、美しい世界が橫たはつてゐたとしても、それをとつて私は私自身の生活を充足して行くことは出來ないのです。私が過去のさうした生活をば仕直すことが出來たとしても、それは私が過去の生活を現在に生活してゐるといふことになるのであります。

二

私はいま私同様ブルジョアジイの諸君に對してこの話をするのです。言ひかけてゐるのですから、若しこの中にプロレタリヤの方がいらしつたら、或は私の言ふことが意義をなさないかも計られませぬ。私は私と同じブルジョアジイに向つて話し掛けたいのです。それで私の話は、閑人の閑話であるかも知れませぬ。さうおもひます。今の世に、私は衣食住の道を完全になし遂げる業を知らない閑人です。ですから、私は衣食住の問題に對してはまるでお坊つちやんであるかも知れません。私は親父の遺産を相續したのです。ところがそれを處分することが出來ないで困つてゐるのです。私の相續した遺産が、私の知らない間に、どん〳〵子供を生んで行くのです。利子が殖えて行くのです。私が働かないのにそのために私は私の衣食位の生活を樂々と出來るのです。私は親父が私に教育を授けてくれたために箔が付いてゐるのです。親父が私といふ子供に向つて、教育をさせたのです。そのために、私の頭の中にも親父の遺産があるのです。講演會に行きますと、美しい衣物を着た婦人がよく見受けられます。その婦人は大抵美人のやうですから、その顔に相當した衣物を纏うてゐられるのだらうとおもひますが、それを見ると私のやうなものでも、ちよつと反感を持たせられます。一面から言つて反感を持つことの出來ない私が、柄にもなく反感を持つのです。その婦人はまさかに親の脛噛りではありますまいが、兎に角親達の金で或はその主人からのへそくり金で、さうした着物を纏うてゐるのだなとおもふのです。勿論今晩お集まりの淑女諸君の間にはさうした婦人も見受けられないやうですが、……ところが、その反感がやがて自分自身に返つて來るのです。そして私は苦しむのです。親父の力で最高の學校までやつて貰つたことがこの苦しみの種です。それから今の私の身についてゐる一切の遺産が、私に苦しみを與へるのです。そして私が手を束ねて遊んで暮してゐるのに遺産はどん〳〵子供を生んで行く。これではどうもいけない。小説を書く氣になれない、自己分裂がやつてくる。外部生活が私の內部生活に對象としてある以上、私はどうしても考へずには居れなくなるのです。そ

の結果、遺産は親父が辛苦して築き上げて行つてくれたものであつて、誠に有難いものでもあらうけれど、どうも私にはいけないのです。これを子に孫にまで遺して行つていゝものか、どうか、疑ひたくもなるのであります。土地なども一日々々と高くなつて行つて不思議な價値が私の知らない間に附けられて行くのです。この私自身知らないものゝ價値が自然に糶り上つて行くのを見ると、私自身は泥坊しないが、遺産が泥坊してゐるのだと見なければならないのです。ものゝ利潤であり、地代であるのです。私はさう見なければ居られないのです。それは近代の經濟學の極めて初歩が私に教へて吳れるのです。ところがこの甚だ簡單な經濟學の原理を、それを初歩さへ讀めば直ぐ分つて來るのに、頭の惡い經濟學者などは、まだ〳〵と云つてやつて居るのです。

倉田百三氏の「靜思」といふ本の中に倉田氏は言つて居られます。勞働は天に捧げるもの、パンは天の惠みだ、といふのです。倉田氏は、この二つによつて、今の勞働問題に或る突き詰めた解決を與へようとされたやうです。そして倉田氏は今の勞働問題はパンを食ふのを權利として要求してゐるのは根本的な間違ひであると指摘して居られるのです。しかし私はこの倉田氏の言葉そのまゝを素直に肯定出來ないものです。と云ふのは私はかういふ意味で、倉田氏のこの言葉を正しいと觀たいのです。

三

それは神と人類と直面してゐる限り眞理である、と云ふのです。併しながら天が與へてゐるパンの原料と自然とを人類の一部少數者がその根本を奪ひ去つてしまつてゐるのであつて、その一部の極く少數に限られた連中が義務として人類の大多數に勞働を强ひて、そして彼等の權利としてパンを勞働するものに與へてゐるのだから、この階級が存在する限り、パンを要求していゝのだと私はおもふのであります。この意味で前述の倉田氏が言は

れた惠まれてゐるパンを、今日の勞働問題において要求するのが當然であることを私は信ずるものであります。惠まれてゐるパンをその途中で泥坊してゐる者があるからです。

勞働はその個人の能力に應じて素直になされなければならないものであると私はおもひます。個人の能力に順應してなされなければならないものである限り、今日のごとく過酷に失した勞働が、最大の限度で勞働者に强ひられてゐるのを見ると、ブルジョアの私でさへ、その正しからざるものに對して人間的な反感や憤りやを感ぜずには居られないのです。

資本家階級は人類全體の持つてゐない特權を夥しく所有して居ります。そして彼等は出來るだけ儲けるといふ欲望を持つて居ります。この欲望の充足の前には彼等は彼等の持つてゐるそのすべての特權を完全に利用することに上手であつて、そして有ゆるものゝ犧牲を强ひて、顧みないのです。しかしながら、人類がパンを惠まれてゐない以上、これは人類共通の欲求であるのです。惠まれてゐるパンが其の中途で阻(はゞ)まれてしまつてゐるので、人類はどうしても、この欲望を捨てる事は出來ないのです。今假りに私が勞働をして今日を過(すご)すとしまして、明日の病氣が氣になります。病氣になつて明日の勞働をすることが出來ないとすると、私は勢ひ今日の勞働で、明日病氣をしても食つて行けるやうに考へ、そしてその勞働を餘計にしようとするでありませう。病氣が出たら、その日は勞働出來ないからです。勞働が出來なければその日は賃銀が得られないから、食つて行くことが出來ないことになるのです。ですから私は少しでも餘計に儲けて明日の豫防のために蓄へを希願します。この明日の生活を考へることは、やがて私自身の妻のこと、またその子供のことを考へるでありませう。子供の生活の安全を考へるでありませう。そして子供の生活の保障を考へれば、また必然の心理としてその子々孫々のことをも考へるでありませう。子々孫々のことを考へることは、その生活の保障を與へるために、私は儲けなければなら

ないと考へるでせう。誰も自分の生活に對して保障を與へてくれる者なく、更に私の延長である私の子供、その子々孫々の生活保障が與へられてゐない限り、パンが惠まれてゐないことを知る限りにおいて、この儲けようとする欲望、飽くことを知らないこの欲望の充足は、どうしても、今日の人類に共通のものであらうと考へます。

私は好きでやつて居る小說の原稿が、私の生活を兎も角も保障して呉れるのは不思議でならないのです。ところが世間には、自分は嫌だとおもひ乍らその仕事に從事して行かなければならない人があります。金を蓄めるために嫌な仕事をしてゐる人間が多くあるのです。私は前に、勞働は個人の能力に應じてなさなければならないと言ひましたのは、こゝのとこです。私のやうに自分の好きな途に入つてその好きな小說を書いてそれが金になり私の生活を兎も角も過さしてくれるのと反對に、この能力に應じない、嫌だ〳〵といふ仕事を一生つゞけて行かなければならない世界は、何のためであるか。諸君は、それは惠まれてゐないパンのためであることを考へることが出來るであリませう。

四

ところが、この嫌だ〳〵とおもつてそれをつゞけて行かなければならない仕事は、私のみでなくて、その子供の時代になつても矢つ張りさうせねばならないのです。ならないやうに、この現實の世界が今の儘に繼續して行く限り、致し方のない事實として觀なければならないのであります。さうして、このいやなことが、代々續くと人間の能力はどうなると云ふことに考へを及ぼしてみると、まことに寒心すべきものであるとおもふのです。ですから、この人類全體の嫌だ〳〵といふ不自然なしごとの繼續は、他の一方がさうであるやうにまた他の一方の資本家と稱へられる者にしても、おなじやうにこれは良い生活であるとおもつて彼等の今日の生活を何等の反

省もなく繼續して行つてゐるとはおもはれないのであります。彼等は彼等の階級――同じ資本家と競爭をしてゐるのです。彼等は一方にプロレタリヤといふ他の階級と爭ひをつゞけねばならず、又その一方では同階級の者との噛み合ひをつゞけて行かなければならないのです。この生活がどうして良い生活であり得ませう。彼等ブルジョアジイの門構へは立派です。立派といふより嚴めしくしてゐます。そして外界から受けるいろんなものゝ感じや壓迫を、この嚴めしい門で喰ひ止めようとしてゐます。イギリスの自由競爭經濟學の原理と倫理學の利己主義がこの氣もちを裏書きしてゐるものであると見られます。ところで資本家階級は自分と同階級の者が一人でも尠い方がよいのですから、勞働階級から新たに頭を擡げて來る者があつて、それ等が自分達の自由競爭の鬪ひを餘計凄じいものにすることを嫌ひ、その當然の經路として、資本家は少い方がよいから、聯盟して新しく勃興しようとするものを壓へ付けます。そして勞働者を彼等の利潤のためによりよく働かさうためには、それに最少限度の生活をさせておかうとして、僅かな賃銀を支拂つておかうとするのです。賃銀をうんと支拂へば彼等の生活が昂上して行つて、資本家を壓迫しようとするから、それでは困る、と云つて餘り非道過ぎた虐待をすると、彼等はへとへとになつてしまつて勞働をさへし得ないやうになる、さうなると、資本家の搾取の條件が缺けて行くことになる……とするとどうなるのでせうか？――そこで、私は私自身の内部生命に入つて行つて一度外界を見るために、その内部から外界を眺め、そして更に内部を振り返つて見ると私は私の書かうとする小說に大きな壁を發見するのです。これではいけない。これではいけない。私の内部のものが呟くのです。

倉田氏は「靜思」の中で言つて居られます。理想家である倉田氏は、二つの方法を說かれるのです。一つは、彼の愛に訴へて自發的に教化の路にすゝむ、もう一つは或る權力を使用して彼等を壓制的に教化すると云ふのと二つです。そして倉田氏は前の愛によつて、彼等の愛に訴へてこのいけないものを教化しなければならないと言

つて居られるのです。

ところが即實――現實にぴつたりと即して考へて見ると人類全般の愛を働かして見ようとするには私はどういふ態度を持つてやつたらいゝか、ほんとに言へなくなるのです。私は閑人だからです。

勞働者の貧しい者の中には親子して勞働してゐる者がゐます。兄弟揃つて工場に通つてゐる家があります。そして子が肺炎にでも罹つたとします、工場の塵埃を吸つた爲めにかどうか、その直接原因は言ひ當てることが出來ないとしても、兎に角工場に通つてゐて肺炎に罹つたとします。

五

肺炎に罹つた子供を、その親は名醫に見せたいでせう。いゝ病院に入院さしてやりたいでせう。いゝ療養地に子供をやつて、其處で氣長に療養もさしてやりたいでせう。しかし彼等にとつて名醫は案山子であるのです。いい病院は地獄の中から見るパラダイスであるのです。適當な療養地はロビンソン・クールソーが孤島から遙かに故鄕に想ひを寄せた其の心の有樣であるのです。それら諸の設備などは、彼等にとつては却つてうとましくあるが故に却つて癪の種であり焦だゝしさの種であることを知るに役立つ外の何ものでもないのであります、それは別の階級――資本家にこそもつとも大事なものであり、またそれらに役立つものであるだけなのです。そのために、子供は死んでしまふのです。直ぐ間近に招けば招かれる名醫が居り、入れようとすれば入れることの出來る病院があるのを他に見ながら、子供は死んで行くのです。このやうな事實が、どれだけ多くあるか知れないのです。人生から見ると單なる一つの事實です。しかし、かうならなければならない、かうなつて行く事實を直觀すると、その底に何があるか、如何なる暴虐のものがその底に潜んでゐるかといふことを知るのです。實質におい

て、子供を捕へて來て石に叩きつけて殺すと何の擇ぶ所があるでありませうか。……それさへも私は言ふ資格の無い者です。けれども私は人間です。この正しくないために起つて來る人生の事實に對して、人間としてのショックを感じます。この事實を直觀することの出來る資本家が本當に愛に燃えることが出來るならば、彼は自分の所有慾を捨てゝ愛のために、それこそ麻の衣を被つて跪いてその所有を返さなければならなく感じてさうするであらうと思ひますけれど、今の事情ではそんな人が一人や二人あるとしても、それは結局他の資本家にとられてしまつて、その愛に燃えた一人二人の資本家は徒らに、彼等の膝下に踏み敷かれるに過ぎないことは、餘りに明白であるのです。さうした資本家階級とは違つて勞働階級の間に比較的暖かい愛の脈打つてゐることは誰も認めてゐることでありまして、彼等には嚴めしい門構へがなく式臺のついた玄關がないのです。お客があつて、足りないものが生じた場合、直ぐ近所隣から夜具や、皿やを借りて來て間に合すと云つた風な事實を日常の茶飯事として私達は見るのです。ですから、私達ブルジョア階級の者に說くほど彼等に對して愛をすゝめたりする要はないのです。事實さうなんです、勞働者は資本家に愛を働きかけてゐるのです。子供が死んでも、彼等は資本家の處へ行つて、默つて默々として勞働をしてゐるのです、彼等は無知かも知れませぬけれども、その無知なるが故に彼等はその子が何のために死んだかといふことの深いところを突き詰めて見ずに、それを恰も運命の如くに見て默つて工場にその勞働を賣りに行くのです。人類愛が人類全體の美しい生活をのぞんでゐるものとしたら勞働階級の人達は、資本階級のあの嚴めしい煉瓦塀を破壞しなければならないのです、破壞してこの障壁を突き破らなければ人類愛が人類全體に及ぼす日は來ないでありませう。しかし道學者は云ふのです、彼等が若しこの障壁を突き破つたならば更に彼等の手は一度にどつと資本家に向つて働く場合、そこに危險なものが生れる、その場合をどうする、と云ふのです。私はおもふのに、勞働者階級はそれほど愛のないことはない。資本家が長年かゝつて

苦しめた樣に、彼等は資本家を苦しめようとはしないであらう。彼等は制度を破壞したら足りるのだ。

六

愛や權力を概念的に考へるならばいけないが、卽實的に考へたら、卽實の愛を愛し、その愛によつて終始するであらう、そこまで卽實的に愛するにはどうしても障壁を打ち破らなければならないのである。さうおもふのです。それだのに、私は今そのことを彼れ是れ言ひ得ないのです。言ふ資格が私にないのです。プロレタリヤの言ひ得ない舌の中に私が入つて行くことが出來るなら、私は怖ろしいものを書くことが出來るのです。出來るとおもふのです。が私はブルジョアジイです。そのためにブルジョアジイに訴へる小說しか書けないのです。書けないのは殘念であるが、致し方がないのです。ブルジョアジイの私は我々階級を否定的に言ふことは出來ずにゐるのです。日本の小說をお讀みになつて見て、一つのものばかり書いてゐることにお氣がお付きになりませぬか。それは突き拔けてゐぬためです。私は小說を書くとき苦しむその突き拔けが彼等多くにも出來てゐないためです。そこで致し方なく、自分の小さい個性をしか出し得ないのです。私小說といふのなどこれです。致し方なく共處に行きつかなければならないのです。個性尊重といふ內部的生命の中に入つて行かなければならなくなつたのです。ところが一つの本を見ると是れではいけない、彼れでもいけないとて作者の基調が迷つてゐるためにばらばらになつてゐるのです。ばら〳〵になつてゐるから、是れでもいけない、彼れでもいけない、となつて來るのです。

社會奉仕といふ道德はまことに結構なことであるとおもひますが、やりだしたら受け手がなくなつて困るであらうとおもひますが、皆んなが裸踊りをしなければならなくなるからです。ところが國家は小學讀本からずつと

社會奉仕を教へ込み、そして奉仕の報酬を受けてはならないと教へ込むでおきながら、三十年勤續とか四十年勤續とか言つて、教へ込ます道具の先生達に盃をやつたりしてゐます。こゝに國家自體のヂレンマがあり手品がありはせぬか、とおもふのです。植民地があり資本家がこれに眼をつけ、宣戰をさせて社會奉仕によつて人民を引き出さうとし、その裏に廻つて甘い汁を吸つてゐる事實。何といふことでせう。このときに當つて私は何の指針によつて進んだらいゝのか。社會奉仕をすゝめ、その報酬を貰つてはいけないと云ふ國家。そして資本家の眼をつけた植民地に社會奉仕でどん／＼戰地に向けて出發する多くの民衆。と考へてくると私は矢つ張り自分自身の内部に潜り込まなければならなくなるのです。そして死です。死を凝視するのです。神經の少しばかり鋭い人々は我々が生きる路においてどうかしなければ生きられないことを知り、どうかして自分の生きて行く路の眞つ直であることをのぞむでありませう。（愛知縣立第一高等女學校に於ける講演筆記）

（一九二二年十月）

道德と道理

總説

一

唯今司會者から、此處に來て女を輕蔑して話をすると怒る聽衆があるからと仰有られました。怒られると大變ですから、成るべく私も差支へない事を言ひませう。差支へない事を云ふ以上は、多少差障りのある事があるだらうと思ひますが、それは怒らないで戴きたいのであります。そこで私の今日の演題は「道德と道理」と云ふ題にしましたが、これも私自身にもよく分らない事ですけれども、自分の考へた通りを申上げて見ます。

私は人間生活の一番奧深い所には本能――私の言ふ本能は、今迄普通に用ひられてゐる本能と云ふ意味とは違ふので、よく人からさう云ふ字を用ひるのは誤解の因になるから、何とか他の名前にしたら宜からうと云ふ注意も受けましたが、色々の言葉の中を穿鑿して見ても、一番私の言はうとする意味に適つて居る言葉がそれであるものですから、その言葉に附帶していろ〳〵な弊害があるにも拘らず、其の言葉を今迄使つて居たのであります。其の本能と云ふものが、人間の生活の一番奧底に働いて居つて、結局人間が新しい生活を産み出して行く時には、何時でも此の奧深い人間の生命力とも言ふべき所の、本能の働きから來るので、其の表面に出來た所の道德――道とか、習慣とか云ふやうなものは與つて居ない。と云ふ事を、私は始終思つてゐるものでありますが、今日の話は其の本能生活と云ふ事には觸れずして、それよりも一段低い處にある生活、私の言葉で申しますと理知的の

生活でございますが、其の生活の範圍內に問題を限つて少し話して見たいと思ひます。

私の申します理知的の生活と云ふのはどう云ふのでありますかと云ふと、私共が此の本能の促しに依つて、生活途上にございます所の活動を致しました時に、其の活動には、即ち生活の經驗には、必ず其の後に結果が殘されます。其の結果を私共が反省、或は經驗から出て來た所の反省と云ふ形でそれを整理致します。例へば私が步いて居て石に躓いた。躓いた石と云ふものは何であるか、どうして其の石に躓くか、其の躓いた原因をいろ〳〵考査して見て、さうして足を高く揚げないで、石の出てゐる所を步けば轉び、或は躓くと云ふことを考へました時に、そこに私共には、經驗に依つて生ずる反省、反省の結果として一つの智慧、一つの道理と云ふものが出て參ります。其の道理と云ふものは、私共の今後の生活の參考として、大變役立つものではありますけれども、併し本當を言ふと、其の道理と云ふものは、吾々の生命の本體と言ふことは出來ない。生命の本體から產み出された所の一つの結果であると私は思ふ。此の道理、或は此の智慧が出來まして、さうして此の智慧に依つて、私達の行爲を樣々に整理しまして、さうして其の整理の結果、斯う云ふことをする事は善い事である、樂しい事である。斯う云ふことをする事は惡い事である、苦しい事であると云ふやうなことから、一つの約束が、自分自身に出來るのみならず、自分と他人との相互關係の間にも成り立ちます。それを道德と言ふことが出來ると思ふのであります。私共の日常の生活の大部分は、此の道理と、道理に依つて結果された道德と云ふものに依つて成り立つてゐると云ふことが出來る。殊に現代のやうな、本能的生活、或ひは創造的生活が、割合に無視されてゐる時代に在つては、私共の生活は、道德と道理に支配されてゐる部分が非常に多い。それだから道德と道理が何ものであるかと云ふことを、少し檢察して見る必要があると思ひます。

二

それならば私共の謂ふ所の道德とは何でありますかと申しますと、前にも申す樣に、私共の經驗に依つて生れた所の道が、私共の生活を按排整理した結果であつて、私共相互の間に在る所の一つの約束でございます。此の約束を以て、私共は自分達の生活を導いて行かうとして居るのであります。それで此の道德となるものが私共自身の生活だけから造り上げたものであるかと云ふと、それは割合に勢力が弱いものでありまして、自分の賴みになりませんけれども、併し私共の周圍、或は私共の眼には、私より遙かに勝れた偉い人が居りまして、私共が聖人とか、君子とか、賢人とか、先覺とか謂ふ人が居りまして、其の人達が、私共よりも遙に高い、深い生活をしまして、其の生活から私共が一つの道德を引き出す事が出來る。それだから此の社會に造られた道德と云ふものは、ちつぽけな私達自身の造り上げたものであるのみならず、私共よりもつと高い標準を以て生活をして居る人人の行爲から、又生活から產み出された所の一つの軌範がそれに加はりまして、私共が普通持つてゐる所の道德と云ふものが出來上つて居る。それだから私共は此の社會の持つて居る所の道德と云ふものに、割に信賴を以て生活してゆく。又同時に私共は道理と云ふものを持つて居る。而して道德の方は、成るべく固定な形を以て、動かないのを宜いとする。其の道德が始終變つて仕舞つたのでは殆ど道德にはならない。其の道德が固定してゆくと云ふことが、道德の一つの大切なる條件でございますが、吾々のもつてゐる所の道理と云ふものは、道德程の固定性をもつて居りません。道理は時に變つたものになる。さうして寧ろそれがいろ〳〵變つた方が宜いと云ふやうなこともないではない。例へば此の頃大變流行する事で、私共は其の內容は知らないが、アインシュタインと云ふ學者が出て來まして、其の人はニュートンの作つた所の引力の法則を根柢的に覆へして、凡ての宇宙の物

質現象は、絶對性と云ふものは全く持つて居ないで、相對的のものであると云ふ一つの道理を發見したと云ふ。それは人の生活を惡るくするよりも善くする譯である。少なくとも人の生活の面目を新たにすると云ふ效があるやうに思ふ。或る道德が破れると云ふことは、社會全般から、可なり多くの不安をもつて見られると云ふことになる。私の父母と云ふやうな時代の人々の道德的生活を見ますと、自分の仕へた所の君公に對しては、生命を賭して忠義を盡さなければならぬ。一つの私議をも許さない。理窟や道理をもつてそれを考へて見る事を許さない。併し私共の時代になると、そんなに單純に、それに則つた生活は出來ない。それは道理をもつて、果してさうだらうか、どうだらうかと云ふことを、一遍檢察して見る必要を感ずる。それ程道理と云ふ方は變つて來ますが、道德と云ふものは成るべく變らせまいと云ふやうな傾向をを持つて居る。

三

そこで道德と云ふものは、全體的に言ふと、是れは年を取つた古い時代に屬すると稱せられる人々の隱れ家になり易い。それから道理と云ふ方は、新しい、これから芽を出して行かうと云ふ人々の武器として役立つと云ふ傾向を持ち易い。それで人間の生活が生き〱として、日に〱新たになり行くと云ふやうな生活でありますと、道德と云ふものは始終道理に依つて正されてゆく。さうして道德と道理との距離が非常に近く、若しくは密着してゆくことが出來ます。人の生活がだらけて來て、働く力が弱くなればなる程、道德と道理との懸隔が甚しくなつて來る。時代が矢張り同じことで、時代が或る一つの新しい目的を見つけまして、其の新しい目的に向つて、自分が生きる力を十分に感じて進んで行く時には、道德と道理との關係が非常に近うございますが、世紀末とでも云ひますか、時代がもう行き詰つて仕舞つて、何とか方向が變らなければ行き詰りのどん底で、憐れな社會狀

態になると、道德と道理との距離が非常に隔たる。不幸にして――或は幸福にしてかも知れませんが、今の社會生活、私共の生活に於ては、此の道德と道理との差が非常にひどくなつてゐる。德川時代なら德川時代と云ふやうな時代が定まつて、一つの社會生活がちやんと定まつて、一つの武士の家があつて、自分のした事を子供に傳へる。子供も一つの誇りを以て傳へられたる所の武士の家柄を守ると云ふやうな時代に於ては、其の親父と子供との間の、道德と道理との差は少ない。併しながら現今のやうに、親がこれが道德だと感じてゐる事でも、其の子供から道理をもつて推して見ると、必ずしも正しく感ぜられない。即ち親がさせようと思つた事を、子供が其の儘する事が出來ない。道理から云つて出來ないと云ふやうな時代が來て見ると、道德と道理の差が非常に強くなる。此の場合道德と云ふものを、何處までも押し通させて、さうして道理が敗けて引つ込む可きであるか、或は道理を何處までも押し立てゝ、道德を立てゝゆく可きであるかと云ふ事が、私共の眼の前に與へられた所の大きな問題であると思ふ。此の問題の爲めに苦しんで居られる方は、此處に決して少なくはありますまいし、又私自身共の問題に對して苦しむことが殊にある。殊に女の方と云ふものは、道理と云ふことに就て何だか一種の偏見をもつていらつしやるのぢやないかと思ふ。女の癖に理窟立てをして女らしくないとか、女と云ふものはもつと理窟のない、美くしい情と云ふやうなもので萬事をやつて行く。そこに本當の女らしさがあると云ふやうな、一種の茫然とした概念が、何となく女の生活の中に働いて居やしないかと思ふ。男であれ、女であれ、理知の世界にあつては、道理と云ふものが非常に強く働かねばならぬ。さうして其の道理と云ふものが、道德に對して始終目附役をして居りまして、如何に聖人君子の作り上げた道德であつても、其の道德の內容が、其の道理から見て空疎なものであつたならば、其の道德の方を打ち壞して、新しい道德を作ると云ふ方に行かなかつたならば、私共の生活は決して向上し、進步して行く事は出來ないと思ふ。

或る青年の戀

一

大變に理窟ぽい事を申しましたけれども、今度はずつとくだけて、私共の身近に起つた例を一二申し上げます。但し此の例は餘り私の身近に起つた例でありますから、そんな事をお前が商賣にして居るならば、取り上げるならば、私もお前にさせると云ふやうな方が、萬一出て來ると非常に困ります。さう云ふことは其の時限り二度としたくないから、どうぞそれは豫め御記憶を願ひます。

二

私の知つて居る青年があつて、其の青年が一人の或る奧さんを姉の如く思つて居つたのですが、其の奧さんに對して戀を感ずるに至つた。奧さんの方が年上なのです。其の奧さんも非常に心に染まない結婚をした人なので、自分の結婚生活に於て或る不滿を始終感じて居たのです。所が其の青年に遇つていろ〳〵話をして、思想的に非常に共鳴する所のあるのを見出だして、さうして弟の如く思つて居つた。若し青年が單に姉の如くに思つて居れば、それで何にもなかつたのですけれども、それが遂に昂じて戀と云ふやうな形を執るやうになつた。青年にはさう云ふ氣持が非常に動き出して、其の青年は非常に苦しんだ。苦しんだに就いて奧さんは益〻同情した。同情をするにつけても、戀と云ふ氣持がどうしてもぐらつかざるを得ない。奧さんは自分の弟として愛するけれども、其の間に非常な苦しみを感じた。其の青年は非常につゝましやかな青年でありましたから、さう云ふ氣持を露程

も顏に現はすやうな事はしなかつたのですけれども、奥さんが病氣になつて、さうして病氣の爲めに夫と共に都會から田舍に行つて、淋しい生活をしてゐる時に、靑年は非常に淋しい氣持になつた事があつて、其の田舍に行つて、其の家に泊つた。さうして夫の人が他所に出て居る間に、其の靑年は長く仕舞つて置いた本當の氣持を、うつかり口を辷らして打ち明けて仕舞つた。其の時奥さんは確かに靑年に對して好意をもつてゐたと云ふ事を言つたのです。言つたけれども、併しながら私は三人の子供のある此の家庭、夫と共に長く住んだ此の家庭を破ると云ふことは、自分はどうしても出來ない。それ故に私は何處までもあなたを弟と思ふ。あなたが家へ歸つたならば、これを見て下さいと言つて聖書を與へた。其の何章かの處に、「今は互に相見る事が出來ないけれども、應て主の日が來たならば、卽ち其の人達が死んで、さうして天國に行つたならば、相見る事が出來るだらう。其の日迄お前達は忍んで、さうして待たなければならぬ」と云ふやうな文句が書いてある。其の聖書の一節を示して、これを見てあなたはよく考へて呉れと、靑年と別れた。靑年は家へ歸りまして非常に苦しんで、其の話を私の所に來て話した。其處に道理と道德の爭ひが奥さんの方に起つて居ると思ふ。此の世の中が定めた所の道德に依るならば、既に夫婦となり、子供のある間柄であつて、他の男に氣持を移すと云ふことは、既に間違つた事であるのですが、事實として移してしまつたのです。それはどうする事も出來ない。併しながら自分の長い間の夫との生活、或は子供との生活を考へて見ると、自分が今其處を拔け出して、さうしてもつと新しい生活に入ると云ふ事は到底忍びない事だから、此の自分の信じて居る所の神の言葉に從つて、未來に於て其の希望を滿たさうと云ふ事を、奥さんは考へて居られるのです。

三

其の青年は、それが非常に道德的な事と思つて私に告げた。冷靜に物を考へて、女には珍らしい道理に適つた事を言ふ偉い奥さんだと云ふ風に、其の青年は取つて居る。私はさう言つた。それは少しも道理に適つて居ない。道德的であると云ふ事は言へるかも知れないが、道理には適つて居ない。私は其の奥さんの心持や言つたことは、十分理解する事も出來、考へる事も、同情する事も出來る。さうして奥さんの爲めに涙を感ずる事すら出來る。併しながら道理にかなつた行ひと云ふことは、どうしても言ふ事が出來ないと私は思ふ。何故だ。第一、其の奥さんがさう云ふ風に聖書を青年に示してゐながら、青年に自分にはそれだけの戀の氣持があると云ふことを示して居ながら、何故これ迄の生活を續けるか。奥さんの心の中には、夫以外の戀人があつて、さうして其の夫には一言も云はない。夫には打ち明けられない。さうしてさう云ふ家庭を續ける以上、何等愛のない所に子供が生れる。愛のない所に生れて來た子供は、何と云ふ不幸な境遇に在るか。さうして其の奥さんの氣持の中には、此の世の中ではどうする事も出來ないけれども、先の世に行つて青年に遇ふと云ふ希望をもつて居たとすれば、其の恐ろしい謀叛心と云ふものは、其の家庭に對してどの位害毒であるか。若し道理で考へてゆくならば、其の奥さんに本當に道理を見る所の氣持があつたならば、迚もさう云ふ程度のごまかしでは、其の場はごまかし切れない事と思ふ。道理と云ふものはさう云ふものだと思ふ。併しながら多くの場合には、所謂在り來りの道理を、其の儘用心堅固に行つた人は道理が分つた人と、斯う云ふ風に言はれる傾きがありはしないか。若し其の奥さんが本當に道理に從つて動くならば、今の動き方と違つた動き方があるべき筈である。奥さんが其處に止まつて居ると云ふことを、決して無理とは思はない。私がさう云ふ境遇にあつたならば、私もさう云ふことになつて居るかも知れない。それは人間の弱味であるとして許す事が出來る。けれども人間の道理としては許す事が出來ないと思ふ。

道理に活きた婦人

一

もう一つの例は、私の所に一人の女の人が轉げ込んで來ました。其の女の方は小さな一つの包みを持つて來た。さうしていきなり「どうぞ私をかくまつて呉れ」と云ふ話です。私はそんな經驗は生れて始めてだからちよつと驚いた。それからいろ〳〵話を聞いて見ると、其の婦人には愛人があるので、其の愛人と結婚する事が出來ない爲めに、自分は方々逃げ廻つて、九州から北海道迄逃げ、北海道から東京迄來た。話が少し長いけれども、私の所に轉がり込んだ譯もあるのであります。

二

其の婦人は東京の或る高等教育を授ける女學校に居た人なので、其の人に一人の親しい友達があつた。又其の友達に兄さんがあつた。兄さんと友達とは非常に親しい兄妹で、日記を互に見せ合ふと云ふやうに仲がよかつた。其の兄さんの日記が友達の所に來てゐた時に、其の友達から其の兄さんの日記を、其の婦人が許しを受けて見た。婦人は其の日記に依つて、兄さんと云ふ人がどの位偉い人だかと云ふことを、其の友達と話したのが因で、其の妹さんを通じて婦人と兄さんとの間に手紙のやりとりが始まつたのです。其のやりとりの結果二人の間に非常に深い愛が生じた譯である。所が其の婦人の家庭は九州の或る大きな物持ちで、代々の家柄で、其處の村では丁度其の村の道徳の御本尊見たやうな譯で、其の家でする事は皆正しい事だ、其の家では代々金も持つて居るし、

人間も立派で、世の中の道に一つも外づれない人が代々出るので有名な家柄である。其の婦人のお父さんも、其の家柄といふ事が自分の小さい時から頭に染み込んでゐて、苟くも其の家柄に傷を附けまいと云ふことに、日も亦足らないと云ふやうな人である。個人的には素直な心を持つた、正直な、誠に善い人である。其のお母さんと云ふ人には私は逢つたことはないが、ヒステリー見たやうな所もあるやうだけれども、これも正義と云ふ觀念に就いては夫にひけを取らない。さうして其のお父さんは自分の子供の教育には、或る點に於ては非常に理解をもつた人で、子供が夏休みに歸つて來ると、お母さんは臺所の手傳ひをさせたり、針仕事をさせたりしようとする。さうすると、さう云ふことはお父さんが止めさせて、お前は今の中は學問を一生懸命にしなければならぬ。針仕事とか、臺所の事などは、家庭に入れば覺える事だ。勉強しろと云つて、本を讀んだり書かせたりする事を何よりの樂しみにして居ると云ふやうな、殊勝な心懸けを持つたお父さんなのです。唯一つ困つたことは、家代々の道德です。それで私の所に來た婦人は、卒業してから家に歸つて、男の人と會つたか會はないか知らないが、二人が夫婦にならうと云ふ氣持は堅く結ばれて居つた。所が婦人が國に歸ると間もなく結婚問題が出た。併し自分には既に許した人があるから、他の男と結婚しようと云ふ氣持はない。そこで一番苦しい苦肉の策として、男の家の方から結婚を申し込んで貰つたのです。果して男の方は大喜びで早速申し込んだ處が、はね附けられて仕舞つた。男の方に何等かの傷があるのかと思つたら、さうではなくして、其の男のお父さんと云ふのは小學校の校長なのです。詰り家柄が違ふと云ふ廉(かど)ではね附けられた。家柄を大切にする所に於ては、家柄が何よりも大切な事で、小學校の校長と云ふ點で一も二もなくはね附けられた。それからその理由の外に、もう一つ非常によい申し出が婦人の方に來て居る。それは東京に住んで居る或る金持で遠い親類に當つて居つて、媒介をする人達が皆親類です。そこでどの親類もあのお婿さんなら申し分がないといふ、結構な三國一のお婿さんが現はれて居る。既に結納迄

來て、殆んど約束が言はざる中に成り立つてゐたのです。婦人の家では頻りにそれを勸めるけれどもどうしてもそれに從ふ事は出來ないから、あらん限りの力を以てそれを防いだのです。其の婦人の方も、所謂高等の學校を出たのだから、大いに理窟を述べて、べら〳〵とやつたのかと思ふと、さうでない。隨分穩かに、いろ〳〵な事情でどうでも結婚が出來ないから、一年間延ばして吳れと云つたけれども、東京では頻りに迫つて來るので、其の婦人は非常に苦しい立場に立つた。お母さんと云ふ人は、ヒステリーが昂じまして、打擲と迄はゆかないが、自分の一人の子供が、大切な親の云ふ事を聞かない、さう云ふ子供が居る事は親類に對して合せる顏がないと、或る時は舌を嚙んで死なうと迄したのです。

三

大抵の女の人なら其處で道德家になつたゞらうと思ふ。併し其の女は遂に道德家にはならなかつた。遂に斯うして居つたならば、唯徒らに親達を苦しめるばかりで、分分も亦苦しまなければならぬ、と云ふので家を拔け出して、愛人の所に走つたのです。兩方とも家は九州です。そこで少し男の方の惡口になるが、男の方は其の女程道理と云ふことが明るくなかつたか、其の婦人が來たので大分躊躇したのです。其の婦人の氣勢が餘りに强いので、さうむきに事をやつても仕方がないだらう、先づ一遍歸つて、もう一遍何とか方策を廻らさうと言つた。併しもう旣にあらん限りの事をやつたので、其處に道理と道德との調和を見出ださうとしたところで、迚も出來ないと云ふことを知り拔いてゐるのですが、其の男の言葉に從はうかとして居る所へ追手がかゝつたものですから、置手紙をして男にも知らせずに、男の友達が北海道に居るので、小さな荷物を一つ抱へて北海道へ行つたのです。さうして札幌にゐる男の友達の家に轉げ込んだ。お父さんと叔父さんは九州から後を追つかけて來たので、其の

友達が青年なものですから、迚も考へあぐねて、どうする事も出來ないので、或る宣教師の家に頼んだ。所が宣教師も恐くなつて、山の奥に在る百姓の家、屋根に雪の積んでゐる中に——曾て住まつても見たことのない百姓の家に預けた。其處でどうか斯うかやつて居る中に、親父さんと叔父さんがやつて來て、其の友達をいびるのです。友達も仕方がないから、宣教師の所にやつたと云ふことを白狀した。今度は宣教師がいびられる番になつて、宣教師もとう／＼白狀して仕舞つた。そこで或る雪のひどく降る日に、親父さんと叔父さんとが其處に乘り込んで娘さんをふんづかまへた。其の時のお父さんは實にやさしい、自分はどうかお前の爲めに道を開いてやりたい、兎に角九州迄歸つて吳れ、お母さんは病氣になつてもうお前の事ばかり言ひ暮して居る。兎に角歸つて吳れと云ふので、お孃さんも流石に心が碎けまして、共に國に歸らうとして東京迄來たのです。所が東京に來る迄の間に自分は少しも自由が許されてない。便所に立つのでも、直ぐ廊下の傍に誰かゞ附いて來る。これでは九州に歸つても、所詮同じ事を繰り返すに過ぎないと云ふので、そこで風呂場に行く時に、誰も見て居る人がなかつたのを機會に、一つの小つぽけな風呂敷包みを持つて、とう／＼私の所に來た。

四

私の所にどうして飛び込んで來たかと云へば、私が曾て英語の教師をやつて居つた時に、其の愛人なる人を敎へた事がある。さう云ふ關係で私の所に飛び込んで來たのですが、實際私も恐くなつた。私の家に置くと云ふことは、私が獨身者でもあるし、恐ろしくなりまして、友達に畫家があるから、養子ですけれども其の家に頼んでかくまつて仕舞つたのです。東京に來て逃げられるのは、愛人がもと關係のあつた有島邊だらうと云ふので、お父さんと叔父さんがやつて來られた。私は詰り談判の衝に當る事になつて譃を吐きました。私の所に娘さんは確

かに來られましたが、又何處ぞへ行かれましたと言つた。所が親父さんは、私共は實は二度も逃げられて、誠に不幸なもので、困つてゐるのですから、どうかお察し下すつて行つた先を知らしてくれと云ふのです。私はお孃さんは確かにいらつしやいましたが、ちよつと友達に用があると云つて出てゆかれたきり、何處へ行つたか分りませんと譃をつきました。いろ〳〵の話をお父さんに聞いて見ると、誠に御尤もの事なのです。既に約束の出來た向うの人は誠に立派な人です。若し其の婦人にさう云ふ風な戀愛事件がなかつたならば、其の婦人が行つて仕へても實に結構な人だと私も思つた。さうして親類全體が承諾を與へてゐる。それだのに自分が娘を動かす事が出來ないならば、誰に合はす顏もない。元來男と女が上長の許可を得ずして手紙を交したり何かすると云ふことは、實に怪しからん事ぢやないか。それは既に野合と云ふものである。これは全く出來合ひ夫婦、野合の夫婦と云ふより仕方がない。將來此の家庭に子供が生れて其の子供が學校に行つて、敎育勅語の夫婦相和すと云ふやうな言葉を聞いて、夫婦相和すと云ふのはどう云ふことかと母親に聞いた時、野合の夫婦なる母親は何と云つて答へるか、答へる事は出來ないぢやないかとお父さんは私に質問されるのです。私もさうなると負けてゐたくないものだから、それはさうかも知れないけれども、それならばあなたが、これならば宜いと思ふ家におやりになつたと假りにしませう、所が其のあなたのお孃さんが既に愛して居る人があるのに、其の嫌つて居る家に行かれたとしたら、其の夫婦は本當に平和なこだはりのない夫婦で居ることが出來ませうか。お子さんが出來て、其のお子さんが學校で夫婦相和しと云ふことを聞いて來て、家に歸つてお母さんに夫婦相和しとは何ですかと云つて質問したら、お母さんは果して答へられるでせうか。これは話が五分々々でせう。私の考へでは形式的の夫婦になつて居るより、寧ろ精神的に、本當に相和して居る所の者が夫婦になると云ふことが、どうしても正しいと思はれる。殊にお孃さんのお考へを聞いて見ると、さう云ふやうに考へられる。どうぞ若しお會ひになつたら、何と

かなるやうにお願ひしたいと云つて、話はそれ切りで、お父さんも「私の娘は死んだものと思つて断念めませう」と、涙を流して行かれた。私もお父さんの方のいろ〳〵の事情を想像すると實際お氣の毒と思つて、お父さんを送り出した。

五

其の後其の女の方は畫家の家に居りましたが、其の畫家と云ふのは、最近細君を失つた人で、其の女の人の氣持に非常に引き附けられまして、一寸戀に似た心持を起したけれども、女の人の畫家に對する態度や氣持が實に立派だつた。其の後私は其處に頼んで置いて、京都に行つて宿屋にゐた所が、又其處に轉げ込んで來た。例の小さな包み一つ持つてやつて來た。其の前にもう屢〻結婚したらどうですかと勸めて見ました。何しろ男の方は流浪して朝鮮から滿洲の果迄行つて居る。兩方で淋しい生活をしてゐるよりは、寧ろつゝましく一緒にやつたらどうかと勸めたけれども、私は女としてどうかかうか食へない事はないが、自分は夫が何かきまつた職業が出來て、これならば大丈夫だと云ふ時に行つて働きます。飽く迄も出來るだけ勉强させたいからと云つて聞かなかつた。處が突然京都にやつて來た。どうしたのかと聞くと、自分の夫が中々聞いて呉れない。早く一緒になつて仕舞ひたいと頻りに言つて來ますから、私もゆく事に決心致しました。「へー滿洲まで一人でゆくのですか」、「滿洲位何ですか、一人で行きます。滿洲に直接ゆく船はないから、朝鮮は危いけれども朝鮮を通つて大連に出る。一人でゆきます」と云ふ譯です。さうしてちつぽけな風呂敷包一つで洋傘も持たない。まるで隣りにでも行くやうな風です。懷中には三十圓そこ〳〵持つて居る。たつた一人の年頃の女が風呂敷包一つ持つて滿洲へゆくと云つて出て來た。私はその勇氣に驚いた。其の晩はまア京都見物をさして、私は洋傘を買つてあげて、それから少し旅費を足

して、兎に角あやしいと思つたけれども一人で出した。とう〳〵一人で行つちまつた。さうして其の婦人は父母の家庭とは永遠に別れた。其の家庭には妹さんがゐるが、實家とは交渉は全くない。全く淋しい。それから滿洲から朝鮮のある田舍へ移つて生活して居る。小さな官吏をやつて、どうかして金を溜めて自分の腕でやらうとして居る中に、姙娠した。そこでまア金を溜めて一つの小さい家を造つて、オンドルを附けたら、其のオンドルを一番初めに焚いた日に火事が出て家中燒けて仕舞つた。其の火事の時には、婦人は懷姙してゐる身體を以て、夫が平常これは大切なものだと始終言つて居つた書類だけを取り出して立ち退いたが、其の又二三日過ぎると、今度は夫が腸チブスに罹つて入院しなければならぬ事になつて仕舞つた。そこで婦人は一生懸命に看病をして、遂に夫の生命を恢復させ、さうして自分は玉のやうな大變に丈夫な兒をお產した。斯う云ふ風に次ぎ〳〵に起る不幸に遭つて居ながら、此の人は實に愉快な氣持で、今日迄大切な親や妹から離れてやつて居る。私共には其の後詳しい手紙を吳れたが、未だ曾つていぢけた、言譯染みた、心苦しい所の感じを受けた事がない。始終新しい希望に燃えて、此の生活苦の中から何物かを生み出さうと云ふ氣持が現はれて居るやうな手紙を受け取つて居るのであります。

六

それで私が最も其の人に感心する事は、自分の處置を非常に能く理解して居る事である。自分は自分のお父さんやお母さんが苦心して居る——あの人達はあの人達の時代に於て最上のやり方をして居るものだらうと思ふ。あの人達の愛情と云ふものは、私を一番幸福なところに置いて吳れようとしたゞけだと云ふことを頭から忘れる事が出來ない。どうかして機會があれば謝罪して父母を喜ばせたい。併しながら自分の道理が曲げられる間はそ

れをする事は出來ないと、其の區別が判然とついてゐる。私の處には戀愛事件をもつた色々の人が、ちよい〳〵來たのですが、さう云ふ人々の中で、此の位しつかりした氣持から動いて、自由戀愛の道理に從つた人は、其の人以外に見たことはない。大抵は初めは道理に從つて居るやうな事を言つて居つても、何か困難が來ると變つて仕舞ふ。どうぞ後を宜しくと云つて仕舞ふ。後を宜しく頼むでは此方はやり切れない。

結末

一

私は日本の婦人がリーズン(道理)と云ふものを辨へる力が、もう少し出て來なければならぬと思ふ。今日の吾吾社會のリーズンと道德と云ふものは、年をとつた人の若い時代と今日と、生活が非常に隔つて居る如くに、隔つて居ります。此の新しい時代にしつかり處理して行かうと云ふことは、餘程の覺悟が要る。昔の基督の生活なんか見ると、何か理想的なことを言つたり行つたりして、其の時の社會に全く關係がない永遠な言葉や行ひがあつたやうに考へられて居る。實際的の事は無視したやうに考へてゐる人がありますが、それは大間違であります。基督時代にあつた實際的の問題が、今日の實際的問題として存在してゐないから、吾々がそれを無視したに過ぎない。基督はその時代の現實な大きな問題を何時でも實際的に解釋して戰つて居る。

二

私共の此のリーズンと道德の問題と云ふものは、決して空想に考へて居る問題ではない。私共の日常生活に始

終起つて來る問題だと思ふ。其の問題を私共が解決する事が出來なかつたならば――其の問題にぶつかつて其の問題を正しく解決する事が出來なかつたならば、さう云ふ理窟を言ふことは、百言つても、千言つても、何の助けになるものではない。其の問題が一々現實の場合に於て解決されていつて、其處から永遠的な言葉や行ひと云ふものが、初めて現はれて來るものだと私は思ひます。私は決してそれを自分で實行して居るとは云ひませんけれども、稍〻其の消息を感じたやうな氣がするので、私が出來るだけそれをしたいと斯う思つて居ります。

（一九二二年十月、國民婦人會講演會に於て）

第四階級の藝術

文藝は如何に變轉し生長して行きつゝあるか、その生長が次の時代を形成するとすれば、其處から果して何が生れるかと云ふ問題に對し、先づ第一に、私は今の時代を觀たいと思ひます。ブルジョアが生んだ現代の作家たち、その歩いて來た路は或る意味で餘りに平坦過ぎる所まで來てゐます。然し乍ら當然次の時代を形成すべき所謂新進作家はどういふ處にあるかと云ふことになりますと、それは其の人々の時代から滲み出る或る空氣の新しさが現文壇人より一歩出てゐるといへば云へないことはありますまいが、矢張り其の中から時代に徹したものを見出すよりもより多く舊道を危なげなく歩く其の努力しか見出されないと思ひます。ですから、此等のものから全く別な新興文藝が求められるかどうかは、其の點で疑問とせねばなりますまい。

では何處に新興藝術の氣運が動き且つ芽ぐんでゐるかと云へば、言ふ迄もなく眞のプロレタリアの生む藝術にそれが期待されます。

プロレタリアの藝術それは我國文壇の一部に於て論ぜられてゐる所謂ブルジョアの生活の中から生れたプロレタリアの藝術ではなくて、眞のプロレタリアそのものゝ中より生れた藝術を云ふのです。ブルジョアの製作する第四階級の藝術は決して次の時代を作り得べきでない。何故ならば、其等の記錄は內部から滲み出る實在ではなく、ブルジョアが觀た外部からの時勢相であるからです、

例を他に求むれば、クロポトキンにしろマルクスにしろ、ブルジョア生活を體驗して來た人間達が學究的に偶ゝプロレタリアの中に潜むもの、或は表面に擡頭して來たものを發見して迎合したとも見ることが出來る。丁度そ

れは目下の勞働文學の如く、是等を混血兒にするに過ぎないと思ひます。然し乍ら此の混血兒の狀態は漸く世界的に目醒めてきて、特に本年度に於て勞働爭議が それを明かに實證してゐますが、プロレタリアがブルジョアの庇護から全然獨立しようとする傾向が生じてきてゐます。この運動に於ける如き內部から滲み出してきたプロレタリアに文藝が道を拓く樣になれば、明かに現代文藝に一轉機を劃することが出來、現代ブロジョア文學は地に影を止めないであらうと思ひます。

最後に私自身の立場に就いて云へば、前に述べた言葉から私は明かにブルジョア文學者であると云ひ切ることが出來ますが、それなら私が次の時代に處する方法はと云へば、唯我々は其の生活を沈潛させ、深く自然を省察――人間性の本能に徹することによつてのみ其處に彼等との融合點が見出されると思ひます。（談話筆記）

（一九二二年一月一日、「讀賣新聞」所載）

反キリスト教問題より一般宗教批判へ

一

制度としての宗教に對しては自分は全然同情もなく共鳴も持つてゐない。一つの信念は何時でも或る形式によつて表はされようとする傾向と要求とを持つてゐるものではあるが、その信念が信念として何處までもその生命力を持ち續けるためには絶えず形式によつて附き纏はれることからそれ自身を解放しつゝ進まねはならない。

二

この一見矛盾と見える二つの要求の内に、もしその信念を保持すると信ずるものゝ力が衰へて來ると、形式化が自然に行はれるやうになつて來る。さうなることは一寸見には人の意識に觸れ易く、理解し易く、また實際的にも見えて來る。さうしてその信念が容易に人々に傳へられ、その信念の實行が割合に速かに成就され得るかに見える。然しながら私の信ずる所によれば、それはその信念の危機を示すものであらねばならぬ。その時にその信念の醱酵力は不可避的に滯つて、發展の餘地が減じて來る。さうしてその無力な部分が動きのつかない形式によつて塡められる。さうして終には自分自身が生み出した形式に壓倒されて信念は影を隱してしまふ。

三

制度形式は如何なる場合にもこのやうな結果に終るものであるが、その弊害の殊に甚しいのは、宗教的信念の場合に於て然りだと云はなければならない。何故ならば、宗教的信念は藝術の作用のやうに、極めて外界の束縛を厭ふものであるからだ。その悪い適例は現在日本に行はれてゐる。

四

いろ〳〵の制度としての宗教的生活の中に顯著に表はれてゐるそれらの宗教生活は、云はゞ固定した過去の生活、現代への持ち越しである。そしてそれが聖化されたと考へられる空疎な觀念によつて支持せられてゐるだけに、人の心の姑息な部分に訴へ易い。さうしてその自然の結果は吾々と何の緣もない不必要な生活樣式の支持者となるに過ぎぬ。斯くの如き制度は一日早く崩れゝば一日だけ人の利益になると思ふ。

五

それなら制度を離れての宗教的信念があるかと云ふに、私はそれは有ると思ふ。今までの一般の考へ方によるならば、超越的な絕對的な存在、若しくは觀念的に對する信仰のみが、宗教の對象物とせられてゐたやうだけれども、たとへ相對的な觀念の中に住してゐる人でも、そこに何等かの決定的な信念が燃え動いてゐるならば、その人にとつてはそれが取りも直さずその人の信仰であらねばならぬ。それを信仰でないと拒むことは、誰によつてもなされ得ない。同時にさう云ふ信念に立つ人は、往々にして自ら無信仰を標榜する傾きがあるけれども、それをも私は無信仰とは思はない。それはやはり一個の信仰といふ觀念を此處まで擴げ、こゝまで自由にし、宗教をそれら凡てのブローカーの手から解放すべきだと信ずるものだ。〔談話筆記〕（一九二二年四月、「讀賣新聞」所載）

藝術と革命の關係

ミレーの畫家としての一生涯の間には、佛蘭西と獨逸との國際的關係に於て常に革命的と稱せらるべき事件が勃發してゐた。それに對してミレーがどういふ態度を執つてゐたかと云ふと、常にそれを回避してゐたのみならず、常にそれらの運動に對して反感を持つてゐたやうにさへ見える。獨逸軍が佛蘭西に攻め入つた時には、彼は干戈を執つた代りに、祖國の爲めに戰ふ代りに、彼の生れ故鄕の方へ逃げて行つた。また、巴里でコンミューンが組織されて都市の革命が起つた際には、巴里にゐる畫家の一群が蹶起しクルベーなどはその頭目を以て自ら任じ、ミレーをも指導者として呼び迎へようとしたことがあつたらしい。その時でもミレーが頑固爺らしい態度をもつて無下にその乞ひを斥けた。さうかと思ふとフィヒテの如きはナポレオン軍の進入に對して書齋を出で、祖國の爲めに敵愾心を煽る事にその全力を盡してゐる。革命といふものに對して藝術家若しくは學者が執るべきどちらの態度が正しいであらうかは、遽かに定める事が出來ない。恐らくは定めることが出來ないのが本當で、ミレーのやうに動くのも、フィヒテのやうに動くのも、その性格の然らしめる所であるかもしれない。が、尠くともそれらは一人の藝術家に取つて致命的の問題ではない。何故ならば藝術家の志すところは、團體生活に及ぼす革命ではなくして、一人の人の心の中に及ぼす革命であるからだ。

一人の人の心に及ぼす革命といふよりも、それは寧ろ、藝術家自身の心の中の革命である。革命と云ふ言葉は、その一番純粹な意味で藝術家の心の中に惹き起されねばならぬ。藝術家ならざる人々の心の中にもかうした動きが必要とせられるのかも知れない。併しながら藝術家に於てはこの事がなかつたならば、その人は藝術家で

はないと云ふ事が云へる。藝術品とは結局藝術家の心の中の革命の火花である。何故、革新と云はずに革命と云ふかと云へば、一つの心の狀態から他の狀態への移り變りが革新と云ふには餘りに急激で根本的であるからだ。社會の事は或は革命に依らずして進化に依つてのみ開展せられ得るかもしれないけれども、藝術家の心の領土は常に飛躍的な革命によつてのみ、その進展を全うすることが出來るやうに見える。固より吾々が藝術品と稱してゐるものゝ中に、この心的革命の火花から生れずしてもつと緩やかな心の狀態から生れたものゝあるのを否むことが出來ないが、かゝる作品はその內在的の生命力に於ていつでも私の意味する藝術品の强さを持つてゐないことは明かだと思ふ。尠くともそれが社會的生活の推進力として考へられる時に力の薄いことは拒み得られないことだ。

藝術家が絕えずその心の中に育くんでゐねばならぬこの革命的の要求は、單に彼自身の生命の流れを可能ならしめる爲めに行はれてゐるものだけれども、これが作品となつて現はれてくる時は、どうしてもそれに接する人の心をも動かさないでは措かない。それは常に團體的革命過程としてゞはなく、個性的の推動力として働いてゆく。藝術家はそれだけの事が出來れば、それで滿足すべきであつて、さうして恐らくはそれが一番いゝ態度ではないだらうか。それ以外の事を藝術家が企らまうとするのは已に、藝術家としての不純さを現はすものではないか。

この間私は或る友人と話をした序でに藝術と主義のプロパガンダと云ふ事に及んだ。私は云つた。藝術をプロパガンダに用ひようとする事は正しくない。固より、藝術家であつて同時に一つの主義の人である以上は自分の主義の徹底の爲めにその藝術をプロパガンダに用ひようとする、その氣持だけは理解することが出來る。併しながら、藝術は一つの獨立した存在であつて、それが他の目的に使用されようとする場合には嚴しく反抗するのは知れた事である。如何なる藝術家と云へども、藝術と云ふものをそれが持つ使命以外の目的に完全に逆用する事は

出來ない。それを企てる瞬間に、藝術はその藝術家に反逆するだらう。さうなれば結局、斯くして生れ出た藝術品は藝術としての價値に於て大いに損じ、プロパガンダとしての價値に於て、僅かに得るの結果に過ぎなくなる。こゝに於て藝術家として立つべきか、プロパガンディストとして立つべきかに就いて、一人の人は自分の立場を明かに決定しなければならぬ。古人が自分の藝術を完成しようとする其の時の心持を推察するに、それは決して假初(かりそめ)なものではない。彼の今までの生活と實感とを全部、自分の作品に注入して少しの不純さをもその中に交へまいとする努力をもつて、一杯になつてゐるやうに見える。そこにはプロパガンダとか、論理的な思潮とか云ふやうな不純な影は些かも見つからない。それ程の態度をもつて當つてゐてすらも古人は、自分の作品の全きを得ないのを憂ひとしてゐるやうに見える。私はさう云ふ心持を古人に見出だすと、自分の純一さと云ふものに就いて大きな負(ひ)け目を覺える。社會的團體としての革命事業と個性の中の革命事業とを同時に成就して見せようと云ふやうな、二股かけた――非望とも云ふべき――大望を持つ事に大きな羞恥を感ずる。かういふものは自分がまだ本當にものを煮つまつて見たり考へたりしないで、もつと輕薄な態度に於て自分の力量に依賴してゐる所から起る卑しむべき態度だと思ふ。もう少し私は自分の力と云ふものを割増しなしに考へて見なければならない。一つの事業を完全に仕上げるのは實に容易な事ではない。それを深く思つてみなければならない。

ミレーは凡ての社會的革命に對して回避した。それは恐らく彼が社會的の革命を無視したからではない。彼は彼の完成すべき革命事業を自分がもつてゐたからだ。彼はそれを成就する事が彼自身の爲めにも社會の爲めにも、一番忠實な態度であると考へたばかりでなく、實に知つてゐたのだ。彼の作品は後に殘つた。さうして彼の繪は如何に人々に新しい生活に對する力となり、養分となつたらう。この事を私は深く考へて見たいと思ふ。(談話筆記)

(一九二二年四月一、二日「時事新報」所載)

三大偉人の懺悔

社會の制度に多くの缺陷があり、世に僞善がしば〳〵行はれてゐる限り、われのみ淸く生きることは容易なことでない。

苟くも今日の時代に社會生活を營んでゐるもので、俯仰天地に愧ぢない行ひをしてゐるものが幾人あらう。金があればあるやうに、なければないやうに、いろ〳〵な罪を犯したり、無理な眞似をしたりする。さうして深夜密室に於て默思する時、或は繁雜な活動場裡を去つて、靜かに思ひに耽けるとき、良心の苛責を感ずるのが當り前である。そして、懺悔をする。卽ち、見えざる神におのれの過失を詫びて、再び同じやうな行爲を繰りかへすまいとするのである。

古來大人物ほど鋭敏な良心を有つてゐたので、過失と悟ればすぐ懺悔してこれを改める。

しかし、凡人にはこれが出來ない。世間を憚かるからである。思はず知らずして行つた罪惡なら、出來るならすぐ、その場で懺悔して心の重荷を下した方が、どれくらゐ氣持がよいか分らぬ。けれども、世の中といふものが、原因よりも結果に重きを置いて、いつも批判を下し、もしも惡い事でもあると、忽ちに物笑ひの種にしてしまふ。溫かい同情をもつ者などは誠に少ない。そこで社會的の罪を犯して、多くの人の前で懺悔をすることは、よほどの勇者でなければ出來ないことになる。

私はひと頃、好んで他人の自叙傳をあさつた事があるが、そのうちでも最も深い感銘を受けたのは、世間の名

譽とか地位とかを全然考へないで書いたらしい、正直な懺悔錄であつた。
さうした私の頭に、三人の非凡の人の面影が殘つてゐる。
中世紀時代に、多數の人に精神的感化を與へたセント・オオガスチン、民約論やエミイルを書いて近代人を目覺ましたジャン・ジャック・ルッソオ、それに現代の人道主義を高唱したところのレオ・ニコライヴィッチ・トルストイである。
この三人の書いた懺悔錄のうち、オオガスチンの著はしたものは、彼の記してゐるところがどれだけ眞實か、ちよつと分らぬが、とにかくその生活をうかゞふに、彼は非常に才能の秀れた享樂兒として出發してゐる。さうして著者のいふところに從へば、純眞な感情の持主で、信仰深く、貞淑の母の庇護と祈禱とによつて、彼は多くの過失を作らずして懺悔の門に導かれたのである。さうして、その晩年は、聖者といふ名にふさはしい立派な性格の持主となつてゐる。
ジャン・ジャック・ルッソオは、その懺悔錄に於て、徹頭徹尾、自然兒としての面目を保ちつゞけてゐる。その生活全體に、私達のいふ意味での遊蕩兒もゐないし、また聖者もゐない。一人の「自然の人間」が始めから終りまで活躍して現はれてゐる。
元來彼は唯心論者で、靈の存在を信じ、神の存在を信じた。さうして當時の功利主義に反對してゐたところなどは面白い。功利主義者は、人の善を行ふのは、要するにその人自らの功利のためである。善を行ふことがその人の利益になるから……そして惡を行ふことは不利益になるから、人は惡を斥けて善を推賞するのだと說くが、ルッソオは、これに反對していふのである。「善を推賞し、惡を斥けるのは、人の天性に出づるので、決して打算の結果ではない。われらの天性は善と一致し、惡とは一致しない、われらの良心は絕對的のものであつて、この

良心こそ、人のまことの道案内である。良心のわれらの靈における は、本能の我等の肉體に於けるが如きものである。自分たちが善を行ひ、惡を斥けるのは、良心のおのづからなる働きであつて、利害の打算から來るものでは決してない。」

さうして彼は「人間の性は善だ」と喝破し、「自然にかへれ！」と叫んだのである。そして彼の生涯は、極めて感情的ではあるが、自然に行つてゐる。無理のやうなところが見えないでもないが、彼自身にとつて、それが凡べて自然であつた。

この自然兒が、近代文化の開拓者の先驅をなしたことはいふまでもない。

このルッソオに最も愛敬の念を寄せてゐたトルストイは、彼から見ると、更に近代的な色彩を見せてゐる。トルストイは、素より自然人ではなかつた。さうして、その意識の中には、始めから聖者と遊蕩兒とが混合して含まれてゐた。彼の全生活が、亂雜な遊蕩のうちにある間でも、彼はオオガスチンのやうに、そこに沒頭することが出來ないで、常に相反した感情のために煩はされてゐたのである。また彼の懺悔後の生活にあつても、彼は絕對的に聖者としての生活をなし得ないで、そこから傍道へそれようとする苦悶のために、絕えず惱まされてゐた。

この三人の懺悔錄に、三樣に現はれてゐる生活の狀態が、中世と、近代と、現代との相違をよく示してゐる。

中世紀にあつては、人の生活が明かに二つの極に分離されてゐて、人はそのいづれかに屬しなければ、その生活を可能にすることが出來なかつた。

近代にあつては、科學的精神の勃興に伴つて、人が自然に卽して生きるやうになつた。彼には、分裂せられた

る理想といふものがなく、自然に徹底するところに、その存在の價値が認められた。彼は人爲的な法則から先づ自分自身を解放すべき、强い要求に促されてゐたのである。この要求が、ある程度まで成就されて見ると、そこには一味の物足らなさが殘つた。人間は何といつても、自然に對する反逆兒である。彼は再び自然に歸つて、それと同化することが出來ない。それがよいことであらうが、惡いことであらうが、出來ない。要するに自然に對して絕對的の降服を敢へてする事が出來ない。人間のこの自覺は、痛ましくも彼等を現代の生活卽ちトルストイが取つたやうな生活を選ばしめねば已まなかつた。

卽ち、彼は、再び自然の征服者たるべく起き上るのを餘儀なくされる。しかしながら、中世紀の人のやうに唯心的な超越的な原理の上に自分を組立てることは出來ないで、彼自身の實生活そのまゝを以て、直ちに自然に肉迫せねばならぬ。さうして彼の實生活には、遊蕩兒と聖者とが、殆んど不可分の狀態に於て、葛藤してゐるのである。

いはば神人と人神とが、一人の人の中に居つて、同時に葛藤してゐるのである。これが現代人のもつ惱みであつて、同時にまた現代人の强みである。

現代人は、この內心の葛藤を如何にして最後の調和にまで突きつめ得るかを試さねばならぬ。

この意味において、トルストイの「わが懺悔」は私達の生活に、密接した意味を有ち、何ものかを適切に敎へてゐると思ふ。(談話)

(一九二二年七月、「婦人世界」所載)

上田博士の就任を機に漢字制限に就いての意見を徴されたのに答ふ

一

漢字制限の問題に關して私は理想から云へば撤廢論者です。現在の社會において漢字の適用されてゐる效果を見るに、殆んど漢字によつて表現されなくてはならない意義を發見するに苦しむ位です。云ふまでもなく言語の本來の意味は、口から耳へのものであり、その距離が遠いといふことから文字が創造されたのであるが、この原理において文字は音そのものゝ摸寫でなくてはならない筈であるのに、殆んど音に無關係な文字は我々にとつて意義のないものではありますまいか。私個人としては因襲的なこれまでの生活に、在來の文字がこびり付いてゐる關係で中々拔け切ることの困難を感じますが、文化的に見て、漢字制限は當然、漢字撤廢への道程であるべきで、理想としてはローマ字時代を主張すべきであると思ひます。

二

ローマ字時代になるとすれば、現在における言葉の革命が當然來なくてはならぬと考へます。それは自然の上からも淘汰さるべき問題ではあるのですが、例へば漢字によつてこれまで「橋」、「箸」などが區分されてゐたのであるが、これはローマ字時代にはアクセント並びにそれに連れての言語の使用法によつて、新たな言葉が創造

さるべきです。ローマ字によつて得られる利益に關しては、これまで幾多のローマ字論者が述べてゐることであるが、若し漢字の代りに假名を用ゐる不便に較べれは、ローマ字の横書きの方がずつと有效であり、且つ世界的であるのは云ふまでもありません。尙ほまたローマ字にすれば一つの言葉を構成する上において文字が長過ぎる憂ひがあるといふ人もあるが、これらも眼の習慣によつて連結した一つの文字に見えるやうになるのは、さほど困難でありますまい。

三

或る人は漢字を廢止することによつて、東洋文明、特に支那古代の哲學的思想研究に不利を感じるであらうといふことですが、これなぞも、生ま半可な漢學の知識でその思想を受け容れてゐる現在よりも西洋に於けるラテン、グリークの如く、特殊な學者によつて研究されたものによつて指導されても差し支へないと思ひます。寧ろエスペラントにしてはといふ意見に就いてはまだ十分に考へてゐませんが、エスペラントも目下の狀態では各國によつて異ふやうで、結局ローカル・カラーの强いものになりはしないでせうか。(談話)

(一九二二年八月三日、「讀賣新聞」所載)

一九二三年

文化の末路

一

文化はいつでも二時期を劃して發展する。

第一の時期はそれを生み出した民衆全體の力を以て、而して第二の時期は、民衆全體の力に依つてゞはなく、その民衆を形造る個人の或るもの丶力と、その文化の生長を阻まんとする外來の力との合成によつて。

而して第二の時期がその作用を成就し終ると、その文化は過去の遺物たるべく停止の狀態に崩れ潰える。文化の末路が來る。

二

第一の時期には民衆全體の力によつて文化が生み出される。

民衆全體とは必ずしもその文化の創建に與かる人間の全體を指すのではない。その與へられたる社會生活に於て實際的の支配力を握る人間の集團を指すのである。例へば古代希臘の文化創建に於て奴隷階級は關與するところがなく、羅馬のそれに於て屬邦人は關與するところがなく、中世紀のそれに於て農民は關與するところがなか

つたといふが如きである。けれども第一の時期にあつては、隷屬的階級を除けば、その當時に於て民衆と呼ばれたものは、大體に於て等しく文化の創建に合力した。

文化の一つの現はれなる藝術に於てそれは殊に著しい。古代希臘に於ける神話的史詩は、ホーマーの作とされてゐるけれども、恐らく無名の民衆詩人が民衆全體の詩想を代辯した、その集成であらうといふ事に疑ひないやうに見える。中世紀の自由市に建設された素晴らしい寺院建築も亦、市民全體の信仰の表現として、市民そのものによつて建て上げられたものであつた。伊太利を旅行したものは、所在に散在する小都市の寺院と、そこに遺存する古い民家の建築様式との間に、著しい近似を見出すだらう。一つの大寺院が完成された爲めに、そこに用ひられた様式が民衆の建築様式にも利用されたと、その現象を考へることも出來るであらうが、同時に、既に民家に共通であつた様式が、その町の守護聖者を祭る寺院のそれとして採用されたとも考へられる。而して前者があり得ると共に後者も亦極めてあり得べきことだ。何故ならば都市的集團が生じて後に寺院は建てられたので、寺院が出來てから都市が創立されたのではないのだから。而して伊太利の諸都市にある寺院建築の様式は、その宗派を區別し得るために選ばれたものではなくして、或る都市のそれを他の都市のそれと區別するために設計されてゐるやうに見える、その事實から考へて見ても、各都市の持つ寺院の特色は、民家の様式から暗示を受けることが多かつたと想像するに難くあるまい。出雲大社の平面圖が現在私達の有する百姓家のそれと極めて近似してゐるのだが、百姓家が大社を範典として造られたと考へるよりは、日本古代の民衆の家屋が大社建造の暗示になつたと考へる方が合理的であるのと同軌である。又獨逸の古民族が有するニーベルンゲンの傳説、スカンディナヴィヤの神話の如きは、いづれも民衆生活の全體が生み出した藝術である。

凡て是等民族生活の初期の發達を記念する文化は、その現はれに於て民衆的であつて個性的ではない。合成的

であつて分業的ではない。故にそれは、第二段に述べられるであらうところの末期的文化のやうに、きらびやかな色彩を持つこともなく、個性的な特殊な強調もなく、その表現は素朴で、內容は單純であるのを特色とする。此の如きは價値的に眺められた文化としては、甚だ不十分に見え、その發達の中途にあるものゝ如く考へられないとも限らない。それは確かに一つの見方には相違ない。單にその現はれのみから觀察されるならば、第一の時期の文化は第二の時期の文化を產出する素地としてのみ存立したと考へるのを强ち尤(とが)めることが出來ないであらう。

然しながら第一の時期の文化が生れた事情と第二の時期のそれが生れた事情とを考へ合せて見るならば、即ちその生成の原因を檢察して見るならば、この二種の文化が一つの延長線上に立つものとは容易に考へられないと私は信ずるものだ。

第一の時期に屬する文化を生んだ民族は、民衆自身が活動の本體を成してゐた。彼等の目的は共同であり、その力量は比較的に平均し、その利害は等しなみに均霑(きんてん)され、從つて彼等の集團的自覺は强烈であつて、外界の刺戟に對して結束した反應を惹起することが自然に行はれたが故に、その力はおのづから强靭(きやうじん)で民族を一定の方向に發展させてゆくことが出來た。

かゝる生活を可能ならしめたものは民族の若さが持つ力であつた。民族が自分の力に十分の信賴をなし得る間は、自分を組み立てる分子として廣い意味の民衆があれば十分であつた。民衆の意志以外の生活の指導原理を抽出する必要もなく、生活の各分野に對する特別な指導的天才を摸索する必要もなかつたのだ。それ故民族が己れの內在的力量の自覺を持續する限りは、抽象的原理と指導的天才とに依賴しようとしなかつたのみならず、かゝるものゝ出現を生活の攪亂者として警戒し排斥した傾向がある。從つてかゝる生活がそれ自身を表現するために創り出した文化は、おのづから民衆的色彩の濃厚なものであらざるを得ない。

かゝる文化は私達によつて一概に原始的な發育不十分なものとして考へられる。然しそれが本當にさうであらうか。例へば埃及古代の泥人形を眼の前に置いて見よう。その或るものは恐らく當時の民衆の一人が、その心の要求に從つてひとり樂しみながら造り上げたものに過ぎないであらう。その足は私達の持つところの解剖學の知識に從つては少し短か過ぎるかも知れない。又その面は私達の持つところの彫刻術の手法に從つては、少し荒過ぎるかも知れない。私達は現在その泥人形よりも遙かに巧緻な彫像を所有することを誇り得るかも知れない。然しながらそれが何であらう。埃及の泥人形は、個人によつて造られながら、直ちに民衆全體の生活に繫がれて居り、私達の持つ彫像は、それがよいものとせられるものであればある程、民衆から離れて個性的である。第一この點に於てこの二つの藝術品は同一に考へることが出來ない。第二に埃及の泥人形は、私に不思議な餘裕の感じを與へる。その人形はそれ自身として、改易することの出來ない完全な表現を持ちながら、しかもそれが土臺となつて、種々なものが發展されるであらう十分な餘裕を持つてゐる。實現されない幾多の夢がその中には藏されてゐる。トルヴァルドセンの「ナポレオン」やカノーヴァの「セシュス」の如き第二の時期の文化的所產の中にはさうした胚子は含まれてはゐない。而してさういふものゝ含まれてゐないことが、寧ろ却つてその作品の價値をなす所になつてゐる。

第一の時期の文化は謂はゞ樹木の幹であるといふことが出來ようか。それを幹に例へるなら、第二の時期の文化は葉に相當するだらう。幹も葉も地中の根から養分を吸收して、その存在を實現するけれども、幹は每年葉の萠え出でる機緣をなすに反して、葉は葉の役目を果す外に、更に與ふべき自分の次のものを持つてゐない。幹は葉に較べれば一見粗雜である。然しながら幹と葉とが異質のものである以上、その間に比較を敢へてするのは愚かなことである。唯その相違に注意する外はない。或はその各〻の特色を檢討する外はない。

三

然しながら或る民族の民衆的な文化生活は若干な時間の後に澁滯してゆく。民族も亦いつかは老境に向はねばならぬ。民衆が集團としてひた押しに押してゆく力がやうやく鈍つて行くであらう。外界の障碍物が如何に頑强でも民族が若い間は、民衆が合同した力そのもので苦もなくそれを突破し得たであらうけれども、民族が老いるに從つて、單なる合同の力では（卽ち形にして考へて見ると圓周のやうな出ず入らずの力では）、到底障碍物を突破し得なくなる。こゝに於てか民衆は特別の刺戟を自分自身に與へ、特殊な突破力を外界の障碍物に對して有するところの、一種の專門的人物を必要とするに至るのだ。天才若しくは英雄の出現はこの要求から結果されて來る。而して民衆は自分自身の地なりの力に依賴する代りに、天才若しくは英雄が與へるところの指導的原理によつて動くやうになる。

然しながら民族老衰の初期にあつては、天才なり英雄なりが民衆の生活方便として選び出されるが故に、それによつて或る障碍が除かれゝば、かゝる特殊な人間の壇場は無用に歸して、民衆は再び自分の合成力によつて生活を進めて行き得るであらうが、衰退が募るに從つて、民衆は天才若しくは英雄の常住の指導を必要とするに至り、遂に職業的天才若しくは英雄の蹶起を馴致する。この場合、英雄若しくは天才は民衆の要望に應じて起たずして、進んで自らを薦めて起つに至る。而して民衆的合成力は益〻衰退して、そこに生み出された文化は、實際に於て民衆の生活がその生成には與かつてゐるにもかゝはらず、民衆自體の享樂には全く不適當なものとなつてしまふ。

更に言葉を換へていふならば、民族として結束した力だけでは外界の障碍物が突破出來ない程に生活が衰退し

て來て、彼等の前に屹立する障壁を如何始末することも出來なくなるのだ。民衆はその障壁に突き當つて、しかも生物本然の衝動によつて前進運動を續けようとする。そこから退却することは見す〳〵彼等の死滅を誘起することだ。といつて、前進せんためには、彼等の力に餘る障壁が眼の前に横たはつてゐる。彼等は已むを得ず、分化作用に從つて、圓周のやうな圭角のない彼等の前進的接觸面に强ひて突角を造り出す。而して僅に障壁を突破して進む。けれどもかゝる手段さへが不可能になると、もうそこに殘されてゐるものは繰り返しの生活だけだ。突破すべからざる障壁の面に對して、彼等は前進の眞似事をする。障壁にぶつかる。突破することが出來ない。一足あとに退く。又ぶつかつてゆく。而してそれを無限に繰り返さねばならなくなる。

けれども人間の欲求は迚もそれでは滿足することが出來ない。過眼の風光が常に新しくなつて行くにあらざれば、即ち生命に對しての新たなる獲得を成就するにあらざれば、あの致命的なアンニュイの疫病を如何しても防止することの出來ないのが人間である。

繰り返しの生活に忍び得られなくなつた結果、民衆は遂に民衆としての解體を始める。民衆としての合成力は遂に見棄てられなければならなくなる。そこに始めて個性の要求といふ聲が生れ出る。

個性の獨立によつて、障壁が突破されたのではない。そこに繰り返しの生活が行はれてゐるのに變りはない。たゞ然し民衆の合成力といふ一定の形の運動の繰り返しが、個性の跳躍によつておきかへられることにより、繰り返しの生活に多少の異色を呈するに至るのだ。それは謂はゞ一つのイリュージョンに過ぎない、自己僞瞞に過ぎない。カアライルの所謂 sham に過ぎない、cant に過ぎない。

個性の要求のあるところには英雄と天才とが出現する。さういふものが民衆とは全く飛び離れた或る天啓的能力として承認される。彼等は生活の指導原理を設定する。民衆は自分等自身の力に依頼することを捨てゝ、酔う

たものが更に酒を求めて更に醉はんとするやうにこの異邦の力に牽きつけられてゆく。こゝに私の謂ゆる第二の時期に於ける文化即ち個性的文化が燦然として生れ出る。人々はかゝる文化に對して驚異の眼を見張り、彼等の生活の復活を讃嘆し、所謂 rejuvenescence が成就されたかの感を懷く。

けれどもそれは一時の幻覺に過ぎないだらう。何故なら天才や英雄によつて一段の高所に引き上げられたと思つた民衆は、いつかその思ひ謬りを悟らなければならないから。卽ち彼等は眼前の障壁を實は一歩も踏み越えてはゐなかつたと覺らねばならないから。天才や英雄によつて築き上げられた文化が、段々彼等の理解と享樂から遠ざかり、遂には煙の如く視界から離れ去るのを民衆は發見せねばならないから。

民衆は解體した。天才と英雄とは雲に乘つて天外に飛び去つた。幹は秋を感じた。然し秋を感じた幹の上にもなほ葉は靑々と繁つてゐた。幹はそれを見て稍ゝ安んじようとした。然し葉もやがて小舟の如く幹を離れて空中に浮び去つた。而して蕭條たる冬が來る。

かくして一つの民衆の破滅が來る。文化の末路が結果される。

四

個性の要求の銳く叫ばれる文化の到來を愼しめよ。

私達の持つ文化は實に極端なる個性の要求によつて生み出されつゝある文化ではないか。現在私達の持つ文化は利己主義の哲學によつて胚胎され、生活の科學的分化となり、個人主義の經濟學を擁立し、天才主義、英雄主義による人々と、その何者であるかを解し得ない人々との分離の溝を深くし、極端な分業を結果して、遂に人間を物的價格にまで還元してしまつた。しかも人々はこの方向の線上に焦躁を以て rejuvenescence の到來を期待し

てゐる。私達は正しく第二の時期の文化の尖端に舞踏してゐるのではないか。

私達の眼にある藝術は、單に根氣のよい、智慧のない繰り返しでなければ、その制作者以外の何者にも理解し得られない極端な個性の主張の外の何者でもない。前者に對しては私達は飽き〳〵してゐる。後者に對しては私達は惘れるか驚くかの二つの途より選ぶことが出來ない。而して或る人々に取つては、それら凡てが單なる反感の材料となるばかりだ。

五

個性の獨立と要求とを極端に徹底的に要求したのは私だつた。私には實にその外には行くべき道がないのだ。私は如何しても民衆の合成力と思ふところのものに融けこんで行く生活は出來なかつた（こゝに私が民衆といふのはこの論の始めに斷つておいた通り、與へられたる社會生活に於て今まで實際的の支配力を握つてゐた人間の集團を指すのである）。私の本能は その民衆の合成力が、新しい境地を開拓して進み得ることを信ぜしめなかつた。それ故私はその民衆的合成力に對する一箇の叛逆者として絕對的に私自身に依賴することを餘儀なくされたのだ。私は微力で不徹底である。然しながら私のさゝやかな體驗も、スティルネル、ニイチエ、トルストイ、ベルグソンが何故にあゝ主張せねばならなかつたかを朧ろげながら理解することが出來る。

卵細胞を眼がけて突進する精子の運動を顯微鏡下に見た人は、私達の生活狀態をそのまゝプレパラートの中に發見するだらう。精子は先きを競ひ、結束して卵細胞に近づいて行くが、卵細胞が被膜を有して生命の核心に精子をたやすく近づけないのを發見すると、精子は忽ち慌て出す。而して被膜を突破すべき機會を見出すべく、精子は結束から壞れて右往左往に卵細胞を繞走し始める。精子の集團からいへば、それを離れた精子は叛逆者であ

らねばならぬ。然しながら卵細胞中に徹入しようとする目的からいへば、かの叛逆者も亦集團の意志を遂行せんとする別働隊に外ならない。

前掲の諸先人も、或る意味に於てはクロポトキンもマルクスも、實に民衆に對するこの叛逆の子であつた。民衆の合成力に信用を置かなくなつたといふ點に於ては共に相等しい。たゞ或る者は彼等の屬する民衆以外に民衆の存在を認めず、或る者は明かにそれを認めたといふ相違を持つ。

いつまでも自己僞瞞に醉つて從來の民衆が創り上げた文化の可能性を信ずるか。而してその境地にあつて、自らをその代表的英雄に仕立て上げるか。或はその合成力を見かぎつて孤獨の一路を淋しいながら踏み遂げるか。或は第一の時期に在る民衆の中に投じてその民衆的文化の渦中に溶けこむか。私の選び得る道はこの三つの中の一つより外にはない。

私は現在に於て明かに第二の道を選びつゝあるものであるのを自覺する。私は私の屬し來つた民衆の文化を繼承することの無益をしみ〴〵と知つた。私は從來の生活の延長が破滅の深淵へのひた走りに過ぎないのを痛感する。私の生活は崩れて行かねばならぬ。而してそれらは明かに崩れてゆきつゝある。私の個性への主張は、實に私の從來の生活への告別の宣言だつた。私は不思議に朗かな然し淋しい空の下に自分を見出してゐた。

實に現在の文化に浸つて生長した者に取つて、實際に殘された道とては三つといふよりも實は二つよりあり得ない。奥底の知れないデカグンの生活へか。極端に鈍い而して圖太い神經を以て他の文化へ移入する盲目的努力へか。

明かに私達の文化の末路は來た。私は私と同じ境遇にある友等に對してこの傳言を送らずにはゐられない。凡ての世のしるしが、而して內部の要求によつて動く私達の生活そのものゝ證言が、明かにそれを私達に思ひ知ら

せるではないか。

生活は死ぬまでは續く。死ぬまでそれを徹底するやうに私は續けて行つて見よう。

（一九二三年一月、「泉」所載）

永遠の叛逆

革命は異常な、兇暴な、不吉な出來事として忌み考へられてゐる。然しながら革命の自明の屬性とせられてゐるこの異常さと、狂暴さと、不吉さとを以てしても、時代が陷りつゝある異常さと、狂暴さと、不吉さとが、比較にならぬほどに重いものであると時代が感じはじめた時、時代は自己調節の理法に餘儀なくされて、革命を選ぶのを意としないであらう。

私達は平和な民でありたい、太平の逸民でありたい、鼓腹擊壤の平民でありたい。けれども私達は停滯の生活には甘んじてゐられない。それは努力的にさうであるのではなく、自然の意志が私達をさうした方向に驅り立てるのだ。生きてゐる間は、生物に働きかけるこの業力から遁れる術がない。私達はそれを回避することが出來ない。回避するところには死があるばかりだ。

停滯を忌み嫌ふ私達の本能は、私達を驅つて、望み欲しない境界にさへ進出させる。最も多く生きようとする力に滿たされた人が、眞先きに身を滅ぼす殉教者となるやうに、平和と太平とを翹望する私達は、異常な、兇暴な、不吉な革命に赴くことを餘儀なくされるのだ。

革命そのものは私達の欲するものでは勿論ない。私達は必然にその革命が既成の生活を攪亂し、無告の犧牲者を出し、必要以上の誤解と憎惡とを惹起して、人生の一角を荒野に變ずるのを知つてゐる。私達はあらん限りの力を盡してそれを未然に防止しなければならない。のみならず實際未然に防止する本能を持つてゐる。然しその警戒があるにもかゝはらず、革命に依るにあらざれば救ふことの出來ない時代が到來する。これは悲

しむべき事實であり運命である。然しながら私達はこの事實に眼をつぶり通さうとしてはならない。私達はいつでも事實に卽しなければならない。事實に卽して強く働くことがいつでも事實を最上に解決することであらうから。

私達は革命の存在理由を是認する。

それなら更に一步を進めて考へて見よう。革命とは生活の或る時期と時期とを截然と區劃する時に起り來るもので、その他の場合には決して起らないものであらうか。

生活に對して機械的な見方をしてゐる人に取つては、革命は謂はゞ一時的の權道として存在してゐる如く見えるらしい。革命を必要とする時代が來る。革命が起る。而して革命を必要としない太平の時代が若干の間繼續する。さういふやうに見えるらしい。それはさうであるかも知れない。

けれども他の或る人にとつては——私もその一人であるけれども——革命とはさういふ性質のものとして映つて來ない。さういふものとして感ぜられない。生活は如何なる瞬間にも革命を伴ふものとして映つて來る。卽ち如何なる瞬間の生活も、異常な、兇暴な、不吉な出來事であつて、異常な、兇暴な、不吉なと考へられてゐる革命によつてのみ、それが覆へされるのを知るのである。

革命を週期的な出來事だと觀ずる人に取つては制度の存在が必要になつて來る。何故なら革命と革命との間の生存を安定にするものは或る種の形式であらねばならぬと詮議することが必要になつて來るから。それが個人の生活に於ては道德とか信仰とかいふ形で現はれ、社會の生活にあつては組織とか機關とかいふ形になつて現はれて來る。これを要約するに制度の外ではない。卽ち人間の欲求を形式に具體化し、その具體化されたる形式によつて逆さまに人間の欲求を調節しようといふのである。卽ち何といつてもそこには生命の機械化が主として働かれ

ようとしてゐる。

一度生命の機械化が成就されゝば、生命は自然安易な臥榻をその境界に發見する。而して機械化されたる制度から脱逸する勇氣を消耗する。而して制度が人間生活の上に君臨し、若し或る期間の安逸でなければ、少なくとも或る期間の平安を馴致する。これは人間に取つての一つの大きな誘惑でなければならぬ。而してそれが誘惑であるのみならず、一つの大きな貢獻でさへあり得るだらう。

かゝる貢獻をなし得る人をしてかゝる貢獻をなさしめよ。然しかゝる人は同時にかゝる貢獻をなし得ざる他の種類の生得の人があるのを忘れてはならない筈だ。

それは革命を週期的な出來事と感じ得ない人々だ。その人々に從へば、革命は始めと終りとのない一筋の鎖だ。革命の終らんとするところから他の革命が生じてゆく。鎖の中の一つの輪は、その輪自身を以て圓く完成しようとするけれども、その次の輪は會釋なくその輪の中に食ひ込んでゆき、その完成を妨げる。かくの如くして一つの鎖は可能となるであらう。そのやうに、生活を革命と觀ずるものに取つては、こゝが革命の終局であつて、そこから制度が生ずるといふやうなことはない。若し革命から革命への連續が實際の生活に於て不可能であるとするも、さうあらうといふ欲求を捨て去り得ないものは彼等だ。

それ故に彼等は叛逆者である。彼等は常に制度の存在するところに破壞を敢へてしようとする。彼等は彼等自身にさへ叛逆する。それは生命がその機械化から自分自身を救ひ出さうとする煩悶に外ならない。それは永遠の叛逆である。個性が存在する限りの叛逆である。社會が持續する限りの叛逆である。

彼等は何ものをも成就しない。何等功績の承認を受けることが出來ない。彼等は個性としても社會の一員としても野獸の如く孤獨だ。唯與へられたる境地に於て、生命に嚙りつく盲目な力に倚る外に、一つの規範をだに有

してゐない。それは或は荒さびた姿を取つて現はれるだらう、或は穏かな形を取つて現はれるだらう。然しながら制度を無視するといふ點に於ては變りがない。時代は彼等をその時代の妨害者として憎む、一箇の夢想者として排斥する、卑怯なる回避者として輕蔑する。恐らく彼等はその輕侮と憎惡との全部に値するだらう。彼等は當て勝たない。彼等は常に迫害される。彼等は常に少數であり、而して少數でありながら支配者ではない。

有史以來、彼等永遠の叛逆者は、絶えず多數者によつて、或は制度の擁護者によつて有もて揮うたれた。人類は常に彼等の存在を根絶しようと企てゝゐるやうに見える。然しながら彼等の子孫は連綿として絶滅することなく今日に生き延びてゐる。而して彼等の欲求は寸毫も衰へてはゐない。謂はゞ人類は永久に鬼子を生んで暮して行かねばならないのだ。それは空想ではない事實である。

誰がこの事實の意味を正しく認めるだらうか。然しその希望は恐らく無理であらう。何故ならその事實の意味が認められた瞬間に、彼等はその承認を裏切つて、叛逆するであらうから。若し知るといはゞ、叛逆者を知るものは叛逆者の外にはない。

だから時代をして社會をして叛逆者を迫害せしめよ。その心の十分な滿足にまで彼等を迫害せしめよ。これが恐らく彼等に對する最上の報酬であり承認であるだらう。

永遠不斷の叛逆を背うべなふものゝ小さな群れは今日も私の前を行く。私はその群れに向つて私の好意をこめた握手の手をさし延ばさう。

（一九二三・一月三十一日病兒の傍らで）

（一九二三年、「泉」所載）

詩への逸脫

私は嘗て詩を音樂に次ぐ最高位の藝術表現と云つたことがあつた。

凡ての藝術は表現だ。表現の焦點は象徵に於て極まる。象徵とは表現の發火點だ。表現が人間の覺官に依據して訴へ、理知に卽迫して訴へようとするもどかしさを忍び得なくなつた時、已むを得ず赴くところの殿堂が卽ち象徵だ。だから象徵とは、魂――若しそんな抽象的な言葉が假りに許されるなら――が自己を示現せんとする悶えである。而して詩は音樂に最も近くこの象徵へと肉迫する。少なくとも文學といふ分野に於て、詩に優つて純粹に藝術の遂げんとする要求を追求してゐるものはない。

戀人に取つて、眼の言葉と、口の音樂とは遂に最後のものではない。それは說明だからだ。如何に巧妙なる說明も、それは結局投影の創造であつて物そのものではないだらう。而して抱擁が來る。抱擁も然し戀人に取つてはまだもどかしい。而して死が來る。戀は生命の灼熱であつて、而して死は生命の破却だ。何んといふ矛盾だらう。然しながら人間がその存在の中にさぐり求めるあらゆる手段の中、死のみが辛うじて、凡てを撥無してもなほ飽き足らない戀人の熱情を髣髴させるのだ、戀人はその愛するもの丶胸に死の烙印もて彼自身を象徵するのだ。

人は自ら知らずして人類を戀してゐる。彼の魂は直接に人類に對して自己を表現せんと悶えてゐる、かくて彼は彼自身を詩に於いて象徵する。

私も亦長い間この憬がれを持つてゐた。說明的であり理知的である小說や戲曲によつて自分を表現するのでは如何しても物足らない衷心の要求を持つてゐた。けれども私は象徵にまで灼熱する力も才能もないのを思つて今

まで默してゐた。

けれども或る機緣が私を促がし立てた。私は前後を忘れて私を詩の形に鑄込まうとするに至つた。どんなものが生れ出るか私自身と雖もそれを知らない。私は或は私の參詣すべからざる聖堂を窺つてゐるのかも知れない。然し私にはもう凡てが已むを得ない。長くせきとめてゐた水が溢れたのだから。

（一九二三年四月、「泉」所載）

獨斷者の會話

B――まだお前は瘦せ我慢をしてゐるのか。
A――瘦せ我慢ばかりぢやない……一體貴樣は何者だ。
B――黑い影だ。
A――貴樣は私を誘惑するつもりなのか。
B――お前が勝手に誘惑されてゐるのだ。……だが、瘦せ我慢はもうやめたらどうだ。
A――無理をいふな。瘦せ我慢をしなければ人間は生きてゐられないやうに出來てゐるのだからな。
B――それだから瘦せ我慢をやめたらどうだといふのだ。
A――さうか。
B――何を考へてゐるのだ。
A――貴樣は無情な奴だ。
B――けれどもいつかは凡ての執着と離れねばならない時が來るのだぞ。早いか、晚いか、それだけの相違だ。しかもお前は今、どう生きて行つていゝかゞ解らなくなつてゐるではないか。
A――理窟で生きたり死んだりが出來るとでも思つてゐるのか。
B――だが、さういふお前自身が、生きるのに理窟をつけて生きてゐるぢやないか。
A――それはうはべのことだ。理窟を色々に考へ出しもするだらう。ところが私の生命は理窟に頓着なく持續し

てゐる。

B――そんなことを一時のがれにうはべで云つてゐるのぢやないのかな。

A――さうぢやない。私は全く理窟なしに死が怖ろしいのだ。たゞ生きたいのだ。生命といふものを私全體がしつかりと感じてゐたいのだ。

B――それは恐らく生きてゐるものゝ僞らぬ心持だらう、眞の本能の聲だらう。だが……

A――だが……

B――だが？

A――さう追求しないでくれ。

B――又ごまかさうとしてゐるな。ごまかしと瘦せ我慢、それがいつでもお前の惡い癖だ。

A――………

B――お前になり代つて白狀してやらうか。お前は生命といふものをしつかりと感ずることが出來ないでゐるのだ。空虛が――死のやうに恐ろしい空虛がお前の生命を蝕みはじめたのだ。その空虛が段々大きくなつて行きはしないかといふ豫感で、その豫感だけで、お前は忍び得ない程慌てふためいてゐるのだ。

A――(半獨白)底無しの沼に足を踏み入れた人のやうに……

B――さうだ。小氣味惡くお前の五體は底のない底の方へと沈んで行く。確かに、あやまたず、けれどもしづしづと。

A――貴樣は殘酷な奴だ。

B――私はお前の忠實な鏡に過ぎない、美しい顏は鏡を惠み深い神とも思はうが、醜い顏はそれを殘酷な惡魔と

思ふかも知れない。

A――兎にも角にも私にはまだ餘(あま)された命がある。

B――その枯れかけた命の根株から、新しい芽がふくかも知れない。

A――そんな貴樣のやうなものゝ皮肉にたじろぎはしないぞ。

B――お前自身が皮肉を云つてゐるのではないのかな。

A――私はまだ貴樣を憎むことが出來るぞ。

B――お前には丁度手ごろな慰みだ。

A――默れ……眼ざはりな奴だ。

×　　×　　×

A――何處に行つてしまつたのだらう。今の黑い影といふ奴は。

C――こんなに可愛ゆくなりました。

A――大きくなりましたね。

C――可愛いゝでせう。

A――涙が滲み出る程です。生れてからもう何ケ月……

C――もう四ケ月になります。この頃では、自分の手の動くのに眺め入つたり、片方の手で片方の手をおもちゃにすることを覺えましたの。

A――おもちやにしてゐますね。丸々とした指をひとりで組み合せたりほどいたりしてゐる。

C――あら、そんなに慾ばつておロに入れようたつて、その小さいおロにはいるもんですか。をかしな人だこと。
A――育つのが早くて、見えるやうでせうね。
C――本當に毎日々々眼立つて大きくなつて行きますわ。丈夫な故か少しも手がかゝりませんの。
A――日が早くたつでせうね。こんな可愛いゝ人と暮してゐると。
C――いつ經つてしまつたかと思ふほどです。
A――あゝ笑つてゐる。私を見て笑つてゐる。もう一つ笑つておくれ。
C――小父さんが見えたのかい。さうですか。あらあんなにに こ〳〵して。さうお、そんなにをかしいの……おや、あなたは……
A――何んでもないんです。
C――あなた、お子さんでもお亡くしになつたんですか。
A――私の子供は皆んな元氣でゐます。
C――それぢやどうして……
A――何、人に笑はれさうなことを不圖考へてしまつたんです。赤ちやんの笑つてゐるのをぢつと見てゐたら、急に淋しい氣持になつてしまつて……
C――まあ……どうしてゞすの。
A――この子は今こそ笑つてゐるが、私を見て泣き出すこともあるに違ひないし、あばれることもありませうね。然しどつちにしても、私はこの子を憎むことは出來ません。憎んで見ようと思つても駄目です。唯可愛いばかりです。可愛いゝといふよりももつと逼つた氣持ですね。人間の持つてゐる言葉で云つたら、可哀さう

とでもいへばいゝのか知らん。あゝやつて指を組み合せたりほどいたりして一日中……あなたが一日そばにゐなかつたらそれきりなのに、そんなことは少しも頓着しないで、あんな神々しい程な平氣な顏をして、……私は馬鹿です。もうやめませう。

C――それで……

A――さう無氣に問ひつめられると困りますねぇ。……たゞ何んだか云ひやうのない哀れさが胸につめよせて來るのです。あなたは赤ちやんをぢつと見詰めてゐるとそんな氣持になりませんか。

C――さう仰有れば、私も如何かすると、何だかこの子の餘りの力なさが哀れになることもあります。けれども私は育てることに氣を取られてゐるもんですから……

A――全くですね。私のやうなことばかり考へてゐたら、赤ちやんは見る〳〵干乾しになつてしまひますね。

C――私、あてこすりを云つた積りでは……

A――勿論です。よく分つてゐます。あなたはあてこすりなぞを云ふ人ぢやありません。……だが、私はこの赤ちやんをかうして見てゐると、妙に人間といふものゝ姿がはつきり見えるやうな氣がするのです。こんな呑氣じみたことをいふのを暫く許して下さいよ。自分も人間の一人だといふことを忘れて、謂はゞ神にでもなつて、人間全體を見渡してゐるやうな心持になるんです。

C――本當に今のこの子に取つては、私のやうなものでも神ですわね。

A――さうです。さうです。

C――さう思ふと、この子を見てゐる中に涙が出て來ますわ。

A――けれどもお互ひが持ち合せてゐる神樣の中に、あなたのやうな神樣は一人もゐません。

C——冗談を仰有つちや困りますわ。

A——冗談なものですか。私は腹立たしい程眞面目で云ひたい。世界の何處を探して歩いても、あなたのやうな神様は一人もゐはしません。神の創造した世界に、基督ですらが罪を說きました。釋迦ですらが輪廻を說きました。而してさう說いた上で初めて救ひを教へてゐます。

C——でも私達は本當に輪廻の中で罪を犯してゐるやうなもの達ですわ。

A——こんな赤ちやんを每日見ながら、あなたまでそんなことを云はうとなさるのですか。……凡ての神を葬つてしまへ。私はさう叫びます。赤ちやんを胸に抱きしめてゐるあなた一人を想像するだけで、神の存在を否定すべき證據は十分ですよ。

C——あなたは恐ろしいことを仰有いますわ。

A——赤ちやんを抱き上げて下さい。それを私に見せて下さい。何でもいゝから。

C——そら、小父さん御覽下さい。如何なさつたの。

A——氣狂ひじみてゐるが、泣いてゐるんです。

× × ×

A——何の御用ですか。

D——生活に困るから金を少し欲しく思ふのです。

A——あなたはどういふ仕事をしてゐます。

D——パンフレットを出さうと思つてゐるんですが……それに友人のやつてゐる雜誌に多少の關係を持つてゐる

のですが、思ふやうに行かないのです。

A――あなたは食ふためには働いてはゐないんですか。

D――そんなことは出來ません。私は無政府主義者です。

A――見す〳〵奪取されてまで働くのは屈辱だといふのですね。

D――無論さうです。

A――その氣持は私にも分ると思ひます。けれども私はあなたに私の金を分けて上げることは出來ません。

D――何故ですか。

A――それは他人に聞いて見るまでもないことぢやありませんか。

D――然しあなたも無政府主義的な考へは持つてゐるのでせう。謂はゞ同志です。同志が同志に對してその餘裕から助け合ふのは當然なことだ。

A――それぢや云はう。私は他人の不愉快な顔を見るのがいやなばかりの弱氣から、大抵のことは我慢してすましておくやうな習慣を持つてゐるのですが、今日は思ふ存分云ひますよ。同志が同志に對してその餘裕から助け合ふのが當然なこと位は私と雖も心得てゐます。然し理論が一致したからとて私は強ち同志とは思つてゐません。理窟の上ではどんな人間でも勝手なことがいへるのを私は知つてゐます。單に無政府主義といふ、内容の判然しない旗印や合言葉であなたと私とがつなぎ合はされるのは私は不服です。私の心はまだ一度もあなたの心と觸れ合つたことがないのです。それが同志であつてたまるもんですか。

あなたは隨分思ひ切つた意見を發表したことがありましたね。而してあなたは次の瞬間には世界を驚かしさうな仕事を獨りでして見せるやうなことを公言しましたね。しかも現在してゐることゝいつては、あなたの謂ゆ

る同志から金を集めて、自分にも出來さうもないむづかしいことを他人に強制する印刷物を出す位が關の山なんでせう。

D――あなたはそんなことをいふが、そんな仕事からでもどんな結果が現はれ出ないとも限りませんよ。

A――瓢箪から駒が出るといふ諺もあるにはあります。然しそれは駒が瓢箪から出たので、瓢箪が駒を出したのではありますまいね。

D――あなたは全く噂通り病的に潔癖ですよ。瓢箪があればこそ駒も出られたのですよ。その場合瓢箪だ駒だと神經質にわけ隔てをしてゐるのは、道學者の暇つぶし仕事です。

A――あなたは勝手に瓢箪でも振り廻はして駒でも魔でも捻り出されたがいゝかも知れません。然し私はまだ默りません。私が若しあなたの立場にあつたら、選ぶべき道は二つの外にないと思ひます。一つの道は奪取されたものを收容するのです。奪取者の持つてゐるものを正當に屬すべきところに還元するのです。若し先方にその理解がなかつたら無理に强ひてもそれをさせるのです。それが先方をも本當に生かし、私達の全體の生活をも本當に生かし得るのだとの確信を以てそれに從事するのです。卽ち terrorist になるのです。もう一つの道は不合理な現在の生活を存分に知り抜きながらも、自分と自分に近しいもの達のために額に汗して働いて食ふのです。奪取された餘剩を以て自分の口にパンを運ぶのです。その苦しみの中からこれと思ふ自分の仕事を生み出して行くのです。大多數の人類は今已むを得ず、さうして生きてゐるぢやありませんか。それと歩調を合はせて苦しみながら、その中から仕事をなし遂げて行くのです。ところがあなたはその二つの道のどちらも選んではゐないぢやありませんか。他人を terrorist にするやうな煽動だけはしながら、自分ではいつでも安全な地點に踏みとゞまつてゐるか、さうでなければ大多數の人達と一

緒に今日々々の生活に於て、自分と自分に近しいもの丶ために汗水垂らして働くかといふのにさうでもなく、あぶくのやうな不平と倦怠に滿ちた生活を續けるために、あなたの所謂同志からあちこち金を引き出して歩くのを仕事としてゐるのだ。それでいゝんですか。あなたはさういふのを無政府主義といふのかも知れないが、私は斷じてそんなのを無政府主義とは思ひませんから、あなたに同志と銘を打たれるのは以後斷然御免蒙りますよ。

D――それならあなたは一體どんな仕事をしてゐるんです。

A――他人は何といふかも知れない。然し私は明かに自分の仕事を持つてゐます。そしてこの仕事のためには、晝夜なく勉强してゐます。自慢でこんなことをいふのではありません。好きなことを好きでやるのに自慢も何もありよう筈がありません。あなたが聞くからいふだけのことです。私はさつき云つた二つの道の中で terrorist の道は選んでゐません。私は働いて食ふ方の道を選ばうとしてゐます。幸ひか不仕合せか、兎に角今は私の仕事が私の勞働と一致してくれてゐます。思ふ存分に仕事をすることが私の口と子供の口とにパンを運んで來る結果になつてゐます。それだといつて、私は現在の生活の不合理を一瞬間でも感じないでゐることは出來ません。

D――仕事と勞働との間の妥協のつく人間はお仕合せですよ。澤山仕事をして澤山お儲けなさい。

A――御挨拶を感謝します。仕事の上で私が妥協してゐる瞬間を見出したら、思ふ存分私をやつゝけて下さい。その時には私もあなたの同志にさせてもらひますから。

D――あなたは一體人を馬鹿にする氣か。

A――今のあなたなら馬鹿にしてもいゝと思つてゐる。然し私はあなたをいつまでも馬鹿にしてゐたくない。私

が傲慢を恥ぢ入つてあなたの前に謝罪する時の來るのを私は本當は望んでゐます。

D――優越者ぶつたことはいはないがいゝ。時が來たら斷頭臺の上でべそをかゝない用心をしておきなさい。

A――大多數の意志が本當に目ざめた時には、私もあなたと同樣無用の長物になるのを忘れてはゐません。

D――兎に角金は駄目だといふんですか。

A――駄目です。

D――それぢや勝手にし給へ。

A――いふまでもないことた。

× × ×

E――それぢやあなたはドン・ジュアンの讚美者ですの。

A――もうそんな話は暢氣過ぎるからやめませう。

E――でも私は男といふものゝ氣持が知りたいのですもの。

A――あなたも物數奇ですね。

E――それぢや物數奇でもよう御座います。もう一度伺ひますわ。あなたはドン・ジュアンの讚美者ですの。

A――さうです。

E――まあ呆れた。そんな方ではないと思つてゐましたのに。

A――全く私はそんな人間ではありません。ドン・ジュアンのやうに戀愛道に於ける崇高な勇者ではありません。

E――何が崇高なものですか。何が勇者なものですか。女から女へと渡り歩く燕のやうな男が。

A――あなた方女にはさう見えますかね。
E――見えなかつたら私達女性が墮落してゐる證據です。
A――一體ドン・ジュアンは何故女から女へと渡り歩いたのでせう。
E――それは倦きつぽいいたづら者だからです。
A――それ程倦きつぽいのなら、何故女そのものに倦きてしまはなかつたのでせう。
E――自分に近づく女性は思ふやうに操れるといふつまらない自信に引きずられてゐたからでせう。
A――思ふやうに操れる女性ばかりがうよ〳〵ゐたら、蟲唾が走つて二の足は踏み出せなくなるでせうにね。
E――それはさうかも知れません。ひよつとするとドン・ジュアンはかういふ興味で女性狩りを思ひ切らなかつたかも知れませんわ。それは自分の力一杯でも如何することも出來ないやうな女性がゐはしないかといふ興味で……
A――その氣持の方が本當らしいな。
E――本當ですわね。
A――けれどもドン・ジュアンは世にも稀れな美貌の持主で、强健な肉體の所有者で、勝れた才能と恐ろしい程な熱情とがあつて、運命が數奇で、無數の女性に死ぬ程戀された經驗を持つてゐるのです。そんな男に逼り近づかれて抵抗し得る女性が一體あるものでせうか。
E――有體に申せば恐らくたんとはありますまい。
A――おまけにドン・ジュアンは飛び離れた正直者です。決して見えや外聞で倦きた女性をも倦きないものゝ如く守つてゐるやうなことはしませんでした。

Ｅ――倦きるとか倦きないとか、そんな輕はずみな仕打ちがあつていゝものでせうか。

Ａ――本當は倦きるといつてはいけないのでせう。何といつたらいゝかなあ。

Ｅ――男性とはそんなに多情なものですの。

Ａ――普通の男性は、例へばＡＢＣＤといふ女性があるとすると、「ＡＢＣＤといふ四人の婦人は」云々といひます。ドン・ジュアンは「あの婦人はＡ、あの婦人はＢ、あの婦人はＣ、あの婦人はＤ」とかういひます。普通の男性には凡ての婦人が等しく女性です。ところがドン・ジュアンに見せると、女性といふ總稱で婦人を見ることが出來ないのです。女性には相違なくとも、この婦人はＡといふ婦人です。あの婦人はＢといふ婦人です。例へていつて見ると、普通の男性には梅も櫻もがたゞ花です。ところがドン・ジュアンの眼には、一方は明かに梅であり、一方は明かに櫻です。

Ｅ――さうなら如何なのです。

Ａ――別に大したことはありません。普通の男性は例へば梅にぶつつかれば花を得たと滿足するでせう。ところがドン・ジュアンは、花を得たいと思ふ以上、梅も櫻も得なければ花全體を得たとは思はないのです。ドン・ジュアンは纖細に花を感ずることを知つてゐますから。

Ｅ――まあ慾の深いこと。ですと昔の歌にある柳の枝に櫻の花を咲かして梅の匂ひを添へて見たいとかいふそんな無理な註文を女性に强ひようとしてゐるのですね。

Ａ――たうとうあなたは私の云はうとするつぼまで來てくれました。だから私はドン・ジュアンが崇高な勇者だといふのです。彼は地上にないものを求めてゐるのです。それを薄々知つてゐながら決して失望しないのです。だから數多い女性に倦きても決して女性そのものには倦きないのです。ドン・ジュアン位ゐ女性の神々しさ

に醉つてゐる男性はないのです。それに身も心も打ちひたして醉ひしれたいともがいてゐる男はドン・ジュアンの外にはないのです。しかも彼は空想家ではありません。彼は征服者の如くにその探見に一生を擲げてかゝつてゐるのです。永遠の女性のために彼は到るところで血みどろに戰つてゐるのです。

E――うそです。それは申し譯です。自分のふしだらを蔽ひ隱さうとする企らみです。私はあなたのお言葉を信じてはゐられません。

A――私は固よりドン・ジュアンではありません。悲しいことにはドン・ジュアンになる資格の大部分を持ち合はせてはゐませんから。而してドン・ジュアン自身は私が今云つたやうなことを自分では少しも意識してゐないのかも知れないのです。彼は恐らく自分の度外れた生の苦痛に呻き苦しんでゐるのでせう。

E――慘めな不幸な男ですのね。

A――さうです。大抵の女性崇拜者は、永遠の女性を象牙の塔の中に安置して、その入口で遙かにそれを拜んで、動きもせずに跪いてゐるのです。而して彼の心に描く永遠の女性とは似もつかない現實の女性を戀人にして滿足してゐるのです。これは確かに幸福な男です。

E――あなたは全く詭辯家ですね。

A――さうでせうか。

E――ドン・ジュアンのゐるのは女性全體への侮辱です、挑戰です。

A――私から云はせると、戀愛の神聖といふものを口にする以上、ドン・ジュアン程の戰ひを戰はない男性は、明かに女性を侮辱してゐるのです。何故なら彼は、女性にいゝ加減の所で見切りをつけて、それに滿足してゐるからです。戀愛道にたづさはる以上は……ドン・ジュアンを御覽なさい。理想と現實とを暢氣にも離して考

へることの出來ないものゝ悲劇的な崇高さを御覽なさい。
彼は一人々々の女性に永遠なものを求めて歩きます。而して彼の女性に對する評價の高さのために失望させられます。彼は焦立ちながら、他の女性にそれを求め出さうとするのです。或は數人を同時に愛することによつて、その要求を滿たさうとするのです。けれども何處にも彼の描いたやうな永遠の女性が見出されない時、彼は捨鉢な態度で更に探見を續けてゆくのです。彼は現實に凡ての女性を踏みにじつても、そこに女性のために永遠の聖像を刻み出さうとしてゐるのです。――哀れなドン・ジュアンは、梅に行き、櫻に行つた後に、完全な花に行きたいと熱求してゐるのです。あなたはドン・ジュアン、從つて押しなべての男性を多情だといひますが、ドン・ジュアンでも誰でも、男性はその多情から救はれて純情の戀の奴になりたいと希つてゐるのですよ。

E――私達女性ははじめから異性といへば一人の人に凡てを與へる欲求しかありませんのに。

A――ドン・ジュアンはその點に於て呪はれた迷子です。だから彼は誰からも（ひそかには羨ましがられてゐる癖に）爪彈きされます。然し考へて見ると、ドン・ジュアンは戀愛道にばかり活躍する一つの典型ではありませんね。

E――でも、にせものゝドン・ジュアンもゐますわ。

A――にせものですか。にせものなら、昔から本物より多いのは知れきつた話ですよ。だから、お互ひに、戀愛の神聖とか男女關係の理想化とかいふやうな崇高なことは、餘り唱道しないことですね。ドン・ジュアンに輩出されたら、私達平凡人はあぶなくつてこの世には安々と活きてはゐられませんから。

× × ×

F――君のところの子供はあんなにうつちやらかしておいていゝのか。
A――よくないのかも知れないとも思ふ。
F――そこをもう少し考へて見て、何とか方針を立てたらどうだ。
A――全く私には方針が立たない。
F――君は何につけてもそんなところがある。easy-going といふやうなところが見える。何事もぶつかつたところ勝負で、物事をするのに見當をつけておいて、力一杯ぶつかつていくといふやうな樣子が見えないよ。それが君を一寸おもしろみのある人間にも、輪廓の大きな人間にも見せないではないが、そんなことで進んで行かうとしたつて進めるものではないし、子供の問題にしてからがそんな態度では少し案じられるね。
A――見當をつけておいたら、見當どほり物事は運ぶものだらうか。
F――暢氣（のんき）をいつちや困るよ。
A――これは少し自己辯解にあたるかも知れないが、私はこれでも相當責任感があるつもりなんだが、見當をつける段になると無性に責任の荷が重くなつてね。一寸私には擔へさうに思へなくなるから、つい行きあたりばつたりといふことにしてしまふらしい。
F――そりや見當をつけた以上はそれをやり通す氣がなけれや駄目さ。
A――その氣があつても思ふやうにやり通せないとなると、私はその不快さに堪へられさうもないんだ。
F――そこから君の「人は誓ふべからず」といふ哲學が生れるんだね。それぢや君の人生觀は全然回避的で消極的だ。一寸見ると君のいつたりしたりすることはいかにも勇ましさうだが、實際は臆病から來てゐるんだね。
A――さういはれると一言もなさゝうた。

F――又回避かい。

A――さうなるかなあ。

F――さうぢやないか。

A――うむ、斷然さうだ。

F――さう無暗みに思ひ切りよく出られても困るよ。

A――嘸ぞ困るだらう。然し君の今の言葉は私の一番痛いところを刺し貫いたのだから、さう返事をするより仕方がない。私はこれでもいやに意固地なところがあつて、かうと目星をつけたら、やり遂げなければ死んでも浮かばれないといふ一面があるんだ。その氣持が頑固に强いものだから、うつかり目星をつけることが出來なくなつてね。成るべく目星なんかはつけまい〳〵と自分の氣をそらしたりだましたりする結果になるものらしい。私は生れてから思ひ入つて目星をつけた覺えがない。

F――乘るかそるかといふ冒險心は出て來ないのかい。

A――有り過ぎる位ゐあるらしい。それで駄目になるんだね。

F――あつても意志の方が薄弱なんだらう。

A――さういつてもいゝね。世の中には目星をつけてゐないと生きてゐられないといふやうな人がゐるね。目星をつけて大膽に乘り込んで行く時には、少しも失敗を疑はず、若し失敗したら死んでしまふほどの意氣込みを見せるが、一朝その目星が外れても、はたの人が思つてゐるよりはずつと平氣ですぐ次の目星へと駈け足で移つてゆくのだ。私はあゝいふ人を見てゐると、時々堪らなく羨ましくなるよ。

F――それでいゝんぢやないか。

A――さう出來れば本當にそれに越したことはない。

F――君もく／＼してゐないでさう試みて見たら如何だい。

A――とてもおつかない。

F――馬鹿だなあ。

A――馬鹿かなあ。

F――そんなことを云つてごまかしてゐては駄目だよ。君の子供の話をしてゐたのだに。子供を育てる上の方針について。君はいつか、來るべき時代の問題は勞働と婦人と子供とこの三つの問題だと十何年か前に誰かに云つたといふぢやないか。そんなことをいふ以上は子供を育てる上にも相當の準備をしてゐる筈ではないか。

A――ところが矢張り目あてをつけかねてゐるよ。

F――それぢやどうしてゐるのだ。

A――ほつたらかしてゐる。

F――君は一體子供を愛してはゐないのかい。

A――人並み位の程度には愛してゐるらしい。

F――それでほつたらかしてゐるのか。子供の行末が心配にならないのか。

A――然し心配したつて結局なるやうにしかなるものか。私には今日々々一番生きよくしておく外にどうしようもないのだ。

F――どうすれば生きよく出來るのだい。

A――子供が勉强したい氣持になつてゐるのを知つたらなるべくそれを妨げないやうにし、怠けたい氣持になつ

てゐるのを知つたら成るべくそれを妨げないやうにするのだ。
F――そんなことをしてゐたら、子供は怠けてばかりゐるだらう。
A――私のとこの連中は可なりよく怠ける。勉强してゐることなどは殆んど見たことがない。
F――君はそれで少しも不安はないのか。
A――あつたつてしやうがないぢやないか。それ以上を親と雖もどうすることも出來はしないよ。
F――何故だ。
A――何故つて、このおやぢなるものが自體親から財産をたゞ貰つて、それで彼等を養つてゐるのだ。子供は、何にもしないでゐても平氣で腹は肥やせるものだと心得てゐる。その上本當の興味か必要が湧かない以上は、大人だつて勉强するより怠けてゐるのが勝手なことはきまつてゐるんだから、必要も感ぜず、興味もないのに、子供に勉强しろといつたつて無理だよ。
F――興味を感ずるやうに指導したらどうだ。
A――まかり違ふとおやぢの方が指導されて活動寫眞やベースの試合ひなぞを見に行くんでね。
F――困つたおやぢだな。おやぢが怠けてゐるから駄目なんだ。
A――おやぢはそんなに怠けてゐる積りぢやないんだが、子供からはさう見えてゐるかも知れない。何しろ家にばかりゐて、人が寢ころんで讀む小說なるものを書きなぐつてゐるし、偶に外出すると思ふと、會だ、芝居だ、旅行だといふのだから。
F――うはべはさう見えても、本當は中々勉强してゐるのだとよく云ひ聞かせりやいゝぢやないか。
A――私にはその云ひ聞かせが苦手だ。

F――それは子供の行末を本當に思ふ以上は親としての義務だよ。親を正當に子供に理解させるといふことは。

A――さうだ、さうだ。どうか正當に理解してもらひたいと思つてゐるが、ともすると子供はおやぢに箔をつけたがつてね。その癖一方では馬鹿にしたがつてね。

F――云ひ聞かせをするとさうなるといふのか。

A――さう成りさうでうつかり口が出せない。兎に角私にはおやぢたる資格がないと諦めてゐるのが一番相當なことらしいよ。一緒になつて怒つたり笑つたりしてゐるのだな。かうしてゐる中に、いつか私の生活がわかつて來るだらう。私の生活にどこかいゝところがあつたとすれば、そこに興味を持つやうになるかも知れない。親といふものは親馬鹿だが兎に角自分達を愛せずにはゐられなかつたんだと思ふ時があるかも知れない。同時に私の弱點や缺點も存分に見ぬくだらう。而してそんな馬鹿はおやぢだけでやめておかうと思ふかも知れない。それすら果してさうなるかどうだか分つたものぢやないが。何しろ私一人では子供をどうすることも出來ないといふのは確かなところらしい。又それでいゝといふことにしておく。

F――とめどなく君は暢氣なもんだね。

A――いかに暢氣であるまいとあせつても、その外であり得ない私は慘めな親だよ。子供こそ氣の毒だが、それでも私が生きてゐる間だけは、少なくとも子供も私同樣暢氣にやつて行けるといふ利益だけは確にある。

F――その代りおやぢが死んだら、人一倍苦勞するだらう。

A――この世の中は苦の世界だ。一日でも本當に暢氣に暮らせたらそれでいゝとして貰ふさ。子供の將來に目星をつけて、一生懸命にそつちに導いて行つて、一旦それががらつと外れたとして見給へ。私にはそれは誰に對しても取り返しのつけやうのない悔恨だ。私はそんな重荷を背負ふだけの力強い肩を持ち合せてゐない。

F――盛んに臆病風を吹かすね。

A――まあさういはないでくれ給へ。今の私にはそれ以外の事は云へもしないし出來もしないのだから。

F――ぢやまあ思ふまゝにやつて見給へ。

A――そんな捨臺辭があるものか。これでも私は試驗的に子供をあつかつてゐるんぢやないよ。

× × ×

G――驚くばかりな面會人だね。丸で實業家か政治家のやうだ。

A――いつだつたか父の用事で大隈重信といふ人に會ひに行つて驚いたことがあつた。玄關をはいつた大廣間には數へ切れない程往訪者が集まつてゐて引見を待つてゐるので、そんなことに慣れない私は先づ度膽を拔かれたが、それが到着順に應接室へと呼び出されて行く有樣は、まるで病院の外來患者そのまゝさ。やゝ暫くもじもじしてゐるとやうやく私の順番が來たので、恐る〳〵應接室といふより診察室といつた方が私には似合はしく思はれるその部屋へとはいつて行くと、大きな安樂椅子にどつしり體を埋めた大隈老人の前に先客が二人ばかり腰かけてゐて、老人の有名なあのへの字口から出て來る大きな聲にたゝきつけられでもするやうに、ひよいひよいと頭を下げてゐた。待つ間もなく老人は私の方に眼を走らせて、手を上げて小招きした。それを合圖に先客は急いで立ち上つて丁寧に頭を下げて退出口の方に消えて行つた。診察が濟んだのだなと思つて今度は私が老人の前にまかり出た。小さな、然し恐ろしく光る二つの眼が射るやうにちらつと私の顏をかすめたと思ふと、そのへの字口がすぐ用向きを尋ねる。私の用事といふのは三分間程で片付いてしまつた。座を立つと後ろにはもう次の客が恐る〳〵順番を待つてゐる。

歸路についた私は呆れるといつてい丶氣持にされて、毎日々々あの老人が幾十人か幾百人かの有象無象を相手にしてゐるのを想像して見た。而して、それを偉いと思ふよりも、感心だと思ふよりも、氣の毒だと思つたよ。

G――で君も面會日だけはけちつぽい大隈老人になる譯だね。偉いと思ふよりも、感心だと思ふよりも、僕も全く氣の毒だと思ふよ。一體何人位ゐ來るね。

A――さあ先づ三十人から四十人の間かな。

G――ぢやよく〳〵けちつぽい大隈老人だね。

A――然し私はそれだけですつかり參つてしまつて、夕飯でも食ふとへと〳〵になつて悒鬱な氣分にさへ襲はれてしまふんだ。だからこの頃は故大隈老人を氣の毒だと思ふよりも、感心だと思ふよりも、矢張り偉いと思ふやうになつたね。

G――君のは自業自得だよ。つまらないといつては失敬かも知れないが、物好きといつたら別に不敬にもあたるまい。物好きな氣まぐれを世の中に發表して、くだらなく有名になつたから、その報いを受けたと思へば我慢する外あるまい。

A――全く私は自家廣告の名人だね。

G――その通りさ。自分では發表する氣などはなかつたのだといつてゐても、それが世間に漏れて、何とか世間に騷がれて見ると、まんざらいやな氣はしない方だらう。

A――婆婆つ氣の十二分な人間なものだから。

G――人間も人間、その點では君は恐ろしく人間的な人間だよ。

A――一言もない。

G――ところで訪問者はどんな種類の人達だね。

A――先づ一番多いのは失職者と、社會思想家と、社會運動者だ。

G――君は一體文學者ぢやないのか。

A――その積りだが、訪問者にはさうした種類の人が一番尠い。尤も私は今の文藝評論界には一人の異邦人で、てんで相手にされてゐないのだから、さういふ種類の人が寄り近づかないのは無論あたり前のことで、私にも實は都合のいゝことだ。ボヘミヤン・タイに亞米利加印度人のやうな長髮で、神經を槍のやうに尖らした人々に、どん〳〵見舞はれたら、こつちの神經は一本のものが、刷毛のやうにさゝくれてしまふだらう。文學の仕事の上では、私は讀者とだけの交渉になつたのを實に有難く思つてゐる。この方面で私が今より墮落しない以上は、私の方から敬愛せずにはゐられない讀者を百や二百はたしかに持つてゐる。これは私に取つての唯一無二の寶だ。その人達は直接に私の前に姿を現はすやうなことは滅多にないが、かうやつて君と對座してゐる時でも、私は明かにその存在を感ずることが出來る。この喜びだけが今の私を生かしてゐるやうなものだ。さういふ人に限つて、面會日には殊更寄りつかない。

G――社會思想家や社會運動者の中にも然し中々偉い人がゐるだらう。

A――さういふ人々に對する批評は私には的確には出來ない。然しさういふ人達の中で名高い人々の來ないことだけは明かだ。然し名高い人が必ず偉い人とは限つてゐないのだから、却つて無名の人の中に偉い人もゐるのだらう。けれども私は、自分で幾度も告白したやうに、社會問題や社會運動には到底一箇の門外漢に過ぎないのだから、それにたづさはつてゐる人々も大抵は私に委しい話はして聞かせてくれない。だからその人達がどれ

程の仕事をしてゐるかははつきり見當がつかないのだ。
G――それなら何んだつてそんな人達が君のところに集まつて來るのだ。
A――それは多くは金錢上の相談でだ。
G――君はそれに一々應じてゐるのか。
A――碌なことはしてゐない。殆んど何もしてゐないと云つていゝ。
G――それでもやはり集まつて來るのだね。
A――それで私は一つ不思議に思ふことがあるのだ。社會運動に從事してゐる人は、結束の固いもので、相互間に助け合ふ心持などが旺盛であるだらうと思つてゐるのだが、私のところに來る人達の例で考へて見ると、それがさう思はれない節があるんだ。一人の人が失脚したら、周圍の人が何とかしてどもその人を安全な場所に連れてゆくために骨を折りさうなものだと思ふのだが、實際に於ては、實に冷淡なものらしい。唯特別な關係にある一二の友人がゐれば、その人達が多少奔走するだけだ。あとは見殺しの有樣だ。而して緣もゆかりもない私のやうなものが、足らないながらに尻を拭つて廻はるやうな役目になつてゐる。あれを見てゐると私は變に暗い氣持にされるね。私はつまり大抵その尻拭ひをやらされるのさ。
G――一體その人達は君の思想に共鳴するところがあつて來るのかい。
A――さうではなさゝうだ。Aの思想なんぞは机上の空論で、有閑階級の寢言で、日和見の迎合說で、傾聽するにも足らんものと思つてゐるらしい。そんなことを端的に私に向つていふ人は滅多にはないが。
G――それでも君は矢張りいゝ氣になつてゐるのだね。
A――ちつともいゝ氣になつてゐる譯ぢやない。

G——少し見さかひをつけて人に會つたらどうだ。

A——然し私は直感の力が足らないで一と目や二た目では見さかひがつかない。おまけにAはBの惡口をいひ、BはCの惡口をいひ、CはAの惡口をいふといふ有樣だ。實に實に支離滅裂だ。

G——困つたもんだな。

A——時々純粹の勞働者が來てくれることがある。さういふ人に會ふと、私は何だか蘇生の思ひをする。少しも惡擦れのしたところがなくて、眼の色に澄んだ誠が籠つてゐて、體からは健(すこ)やかな力が凉しく溢れ出てゐる。偶(たま)にだがさういふ人に會ふと、かういふ人だな、時代を救つてくれるのはと思ふ。而して少しでも長くゐて貰ひたいやうな氣がする。然しそんな人は偶(たま)にでなくては私のやうなところには來ない。

G——そんなことで君の仕事は妨げられないか。

A——妨げられもする。同時に刺戟も受ける。

G——ぢや君も中々偉(えら)いところがあるんだね。

A——私は實際のところ、自分を偉(えら)いと思ふよりも、感心だと思ふよりも、氣の毒だと思ふよりも、淋しいと思ふよ。

×　　　×　　　×

A——また來たな。

B——中々お前はよくしやべつたね。しやべつて見たら私の本體がわかつたらう。

A——私はまだ貴樣づれを相手にしては命を見限る氣は起らない。

Ｂ――まだ瘦せ我慢をしてゐるのか。
Ａ――輕蔑するな、私にもまだ少しだが力は殘つてゐる。
Ｂ――その力で瘦せ我慢をしてゐるのだらう。
Ａ――どんなに小さくとも、力といふものは瘦せ我慢の味などは知らない。
Ｂ――未練を殘さずに死ね。
Ａ――力が一氣に振ひ立つたら、貴樣の指圖を待つまでもない。
Ｂ――ではもう暫く忍耐してお前を見てゐてやらう。
Ａ――それは貴樣の勝手だ。
Ｂ――では暫くの間左樣なら。
Ａ――この力を一點に吸ひ集める磁石のやうな美しい力が、早く私を救ひに來てくれ。

（一九二三年五月十二日）

（一九二三年六月、「泉」所載）

バルビュスの「クラルテ」の譯文を讀みて

鳥取市の水脈社といふ靑年の思想團體の招きで、山陰地方に秋田雨雀氏と講演旅行に出かけたのは四月の二十五日だつた。而して二十九日の晩に最後の講演を終るまで、私達は米子、松江、鳥取へと可なりに忙しい旅を續けた。その忙しい旅のひま〳〵に、私は秋田氏が持ち合せたバルビュスの「クラルテ」（小牧近江、佐々木孝丸二氏共譯）を讀んだ。僅かな時間を惜しみながら讀んだので、その一半を覗つたのに過ぎなかつたけれども、現代に特殊の位置を占めるこの思想的作家の持つ鮮明な色彩は見のがすことが出來ない。初めの部分の混雜した、しかも陰影の薄い描寫を暫く忍耐して行くならば、讀者は漸次に作者の視角に親しんで來るだらう。而してそこには私達と同樣な希望を持ち、欲念を持ち、傾向を持つた一人の若者が髣髴として現はれ出るだらう。而して彼がその普通な生れつきと能力とを以て、如何に奇怪な文化の雜然たる堆積の間から、徐ろに光明へと彼の足を運んで行つたかを見きはめることが出來るだらう。單にそれは思想的に一つの啓示であるのみならず、表現に於ても決して凡庸ではない。彼の筆は不思議に物象や人類を丸彫りに描き出す。而して私はこの書が日本の讀者に取つても必讀のものであるのを感じさせられた。私はこれを本誌の讀者に推薦したいと思ふ。

（一九二三年六月、「泉」所載）

序・跋・其他

お斷り

個人雜誌を出した以上、私は他の雜誌新聞の類には執筆しないことにしたが、時々私の談話を筆記に來られる人がある。それをも拒むことは出來ない故、私は考へてゐることがあれば談話することにしてゐる。但し從來の所謂談話筆記なるものは、談者のいふところを唯忠實に字々筆記して歸り、それを淨書して談者に訂正させるのを通例としてゐるが、それでは私が筆を執らないといふだけで、實際は自分で文章を書くに等しい。それでは困る。それ故今後は來られた方と單なる懇談をし、その記者はその中から隨意に私のいつたところを取捨選擇することにしてもらふことにする。從つて今後世に現はれる談話筆記に對しては私は直接責任を持たないで、それは大體記者諸君にあることになる。このことを本誌の讀者諸君に向つておことわりしておく。

（一九二三年一月、「泉」所載）

「濕地の火」の序

序文を書けと强迫される故序文を書く。

私には元來詩は判らない。他人の仕事のよし惡しが本當にはわからない。それ故序文を書く資格を最小限に持つてゐるものは私だ。

然し私が序文を書くと書物がいくらか賣れるかも知れないといふことだ。そんな現象が實際あるか如何かは知らないが、兎に角强迫されるまゝに書く。

私の讀んだところに依ると、この詩集の中には馬鹿らしい程下らないものがあるが、同時にお世辭ではなく素晴らしく本質的のものもある。詩として十分許さるべき直覺がある。私はそれを愛誦せずには居られない。作者が今後この方面にどれ程進轉するか、それを樂しみにする。

（一九二三年三月四日）

「ホヰットマン詩集」第二輯を出すに當つて

私の譯にかゝる「ホヰットマン詩集」の第二輯がやうやく完成した。屢〻豫告をしておいたにもかゝはらず、かく延引したのを遺憾に思ふ。然し今度の詩集には、詩人の最大々作なる「自己を歌ふ」が譯されなければならなかつたので、それに多くの時間と勞力とが費やされた。この一篇の詩は單にホヰットマンの全豹を窺はせる大切な作品であるばかりでなく、實に全詩壇に對する劃期的な生產だと云はなければならないものだ。それが出る前にかくの如き詩はなかつたし、それが出た後にかくの如き詩はないといふことが出來よう。從つてその飜譯は私の力の到底及ぶところではなかつた。そこに投入された詩句は他の言葉を以てしては置きかへることの出來ないやうなものだつた。のみならず單なる意味でさへが了解されないやうな箇所さへあつた。私は然し能ふ限りの力を盡して見た。詩全體が持つところの風格を成るべくそのまゝに傳へようと苦心して見た。結果は勿論企圖されたやうにはいかぬ。けれども私はこの詩の誦讀を「泉」の讀者にはお勸めしたいと思ふ。さういふだけの自信は持つことが出來ると思ふ。

「自己を歌ふ」以外の小詩篇も私は相當の細心を以て選擇したつもりだ。「草の葉」一卷の中には私の譯したもの以外に是非紹介せねばならぬと思ふものもあるけれども、悲しいかな、それらは、少なくとも私の力では如何することも出來ない。私の貧弱な日本語の蓄積では、それを譯すことが汚がすことに當る。それ程それらの詩は影が多い。それ故この詩集の飜譯はこの第二輯を以て一先づ打ち切りにする。

私は自分の恩人ホヰットマンに些か報恩の企てをした。結果は反對になつたかも知れないが、心持はさうだ。本誌の讀者が私の譯詩二卷を讀まれんことは私の切望するところだ。

第二輯の卷末に附したホヰットマンに對する小評傳も、その量の小さい割合に、集約的に事實と思想とが盛り入れられてあると私は考へてゐる。

（一九二三年三月、「泉」所載）

廣告文

ホヰットマン詩集　第二輯

本集の卷頭に收めた長詩「自己を歌ふ」に於てホヰットマンは憚るところなく彼の姿を描いた。何故ならば彼は自分の特殊性を自覺したから。而してその特殊性が彼を圍繞する人類に取つて、無くてならぬものゝ一つであることを確かめたから。彼は近代人の焦點である。彼は實に私達の尖端にあつて灼燃してゐる。私はこの大切な生命の史詩を完全に轉譯し得たと自負しまい。けれども私は最善を盡しては見た。この詩人に對する私の感想文は、彼の輪廓を知らぬ人々に取つて多少の補缺をなすかも知れない。或はそれを知つてゐる人々に對して幾分の問題を提供するかも知れない。私は、かの史詩とこの感想文とに若干の小詩の轉譯を添へて、こゝに第二輯を完成したことを通告する。

（一九二三年三月）

文化に就いて

多分誰方(どなた)か紹介して下さるでせうけれども、傍聽席から此處迄迷ひ〳〵來ましたが、市役所の方が何處に居られるか分りませんから出て仕舞ひました。私の話は至つて亂暴でして、思つた儘ぽん〳〵言つて仕舞ひますから、間違つた所もありませうし、それから順序立たない所もありませうと思ひますから、どうぞ、何時でもお話する時にお斷(ことわ)りして居るのですが、間違つた所と間違はない所は宜しいやうに貴方方の方で御判斷願ひます。

それで文化と云ふことをお話するやうに申上げて置きましたが、文化と云ふ言葉の意味は中々むづかしくて私もはつきりしたことは判りませぬ。前の方や下田さんかゞ定義を爲されたかも知れませぬが、私の定義に假りに從つて見れば、人間の此の生活には、唯今下田さんが仰しやつたやうに、吾々の現狀では生活が其の儘文化であり、文化が其の儘生活であると云ふやうなことがどうしても出來ないので二つに分れるやうに思ふのです。それは私共は生存と云つて、卽ちエキジステントと云ふ名で呼んで居る一つの價値でありまして、今日吾々が其の生存に必要である所のものがないと云ふと到底此の世の中に生きて行くことが出來ない、卽ちさう云ふものが缺如するか、或は餘裕が出るかと云ふ、其の境にある生活が生存と云ふものであると思ふのです。併し私達は幸ひにして多少なりはみ出た所の餘裕を持つて居ります。其の餘裕を持つた部分と生存と云ふやうなものをひつくるめた

もの、それを私共は普通生活と云ふ言葉で言ひ現はさうと思ふのです。それならば文化と云ふものはどう云ふものかと云ふと、此の生活と云ふものから生存を引いた殘りです。即ち「生活マイナス生存イコール文化」です。さう云ふやうなことに大體なりはせぬかと思ふのです。但し生活の中から生存と云ふものを差し引いた殘りを隨分亂暴にお使ひになるやうな方もあるやうだから、さう云ふ無駄使ひと云ふことにしたら文化と云ふものにならぬかも知れませぬが、先づ大體其の差が利用されるものとするならば、其の利用された部分が文化と云ふ名前を以て當て嵌めることが出來ると思ふのです。それで今日私が考へて見たいと思ふのは、今日私共の生活の中にある生活的要素がどう云ふ現狀にあるかと云ふことです。私は時々書きますから、讀んだ方は御承知でせうし、讀まない方は御承知でなからうけれども、私は今の世の中に於て階級の現存を認める所の者でございます。相反した所の階級が實際の生活に於て現存して居つて、それが互ひに爭鬪の狀態にあると云ふ事を認めて居る者なんです。それで私が文化と申しますのは此の二つの階級の中のどつちに屬したものかと云ふと、私の屬して居る階級の文化です。即ち流行の言葉で云へばブルジョアの範圍内に於ける場合の話しか私に出來ないのです。片つ方は知りませぬから。それでつまり今の文化の狀態がどうであるかと云ふことは、取り敢へず私の文化生活の狀態はどうかと云ふことになるんです。片つ方の方は片つ方の方で、又どつかへ行つてお調べを願ひます。で、私の考へでは、今日吾々の持つて居るやうな高等の文化――吾々の文化と言つても宜いと思ふのです。此の中にはプロレタリヤ染んだ顏の人が居られないやうですから――皆立派な顏をしていらつしやるから――此の高等の文化と原始的の文化と稱せられる所の文化とは、同じ一つの所から出て順々に發達して來たものでなくして、其の發達の起源が違つたものだと云ふ所の卑見を私は持つて居るのです。

一體私共は世の中に一人で生活すると云ふことは先づ出來ないので、お互に寄り合つて、つまり一つの集團を

成して私共は生活して居るのです。其の生活の狀態と云ふものは、原始的と云はれた時代であつても同じであつたと思ふ。所が原始的の狀態にあつては此の集團の內部の狀態がどう云ふ風になつて居つたかと云ふと、殆んど今吾々では考へ得られないやうな狀態になつて居る。此の集團の內容が非常に統一されて居たと云ふことです。卽ち言ひ換へれば、吾々に賦與された文化的要素、生活から生存を引き去つた剩餘と云ふものが大部分の人に平等に分配されて居つたと云ふことです。それが吾々の時代になると云ふと其の剩餘なるものが不平等に分配されて、それが益〻其の度を強くしようとする傾向を持つて居ります。所が原始的生活に於て注意すべきことは割合に能く分配されて居つたと云ふことです。少し側道(わきみち)に外(そ)れますけれども、一體文化と云ふことが本當に發達するためには、非常に專門的になつて、一般には文化要素が分配されないでも、英雄とか或は非常な科學者であるとか云ふ者が出て、十分に文化と云ふことを利用して、發明したり創作をしたりするのが本當の文化でないだらうか、つまり一人の釋迦を出す爲めに、一般の者が奴隷のやうな生活をしても釋迦を出すと云ふことが文化でないかと云ふやうな議論があるのです。この問題は大變むづかしいことになるのですが、私は釋迦が出たり、基督が出たり、ナポレオンが出たり、アレキサンダーが出たりすると云ふことは、丁度鬼の頭から角が生えたやうなものだと思ふのです。私は何も人間の頭に角が生えて鬼になつたから、それを元の人間に返す爲めに、釋迦や基督をぶち斬つて捨てろと云ふのではない。もう一遍頭の中に叩き込んで人間みたいにしようと云ふのが私の話の要點なんです。先づ其の事は後で述べるかも知れませぬから其の位にして置きまして、兎に角原始的の集團と云ふものには、文化的要素と云ふものが、平等に分配されて居つたと云ふことが明かであるのです。今南洋のヤップ島か何かへ行つて見ると、今では左程でないかも知れませぬが、もう少し前には、私共の持たない道德があつたと云ふことです。其の道德は一人の人が來てバナナを三本吳れと言ふと直ぐに吳れてやる。向うの言つた通り三

本なら三本呉れてやると云ふことが道德で、若しそれを拒むと云ふことになるとそれは不道德になつて居たのです。南洋の方の島ではちやんとさう云ふ道德習慣が行はれて居たので、需用供給と云ふものは相互に融通して使ふことが出來るやうな狀態にあつたのです。所が近頃日本人が行つて、大變好い道德ですから、そこらぢうへ行つて、呉れ〳〵と言つたと思ふのです。頗る結構な道德だから盛んにそれを實行したと見えるのです。そればかりでなく貨幣と云ふものが輸入されて、それでバナナが三本買へると云ふ所から、臍繰金を蓄めると云ふことを土人が考へ出した。これは土人としては大發見であつたのですが、さうして吾々が持つて居ると同じやうな道德觀、卽ち勤儉貯蓄とかいふやうな道德が土人の間にも發生したのです。もう共處になつて來ると南洋の土人も吾吾も全く同じなんです。以前のやうな非常に麗しい集團でない。私有的、自己的を重んずる所の、成るべく澤山取り込まうと云ふ意識の働く道德が成り立つと云ふことになつて來た。併し原始的の集團にはさう云ふ自己的、私有的の傾向は少しもなかつたのです。それだから共の時の人々の集團の生活と云ふものは今のやうにてんでばら〳〵でない。集まつたばかりでなく、甲の生活も乙の生活も、凡て皆變りがなかつたのです。それだから、共の集團全體が或る一つの目的に向つて共同して進んだ。集團の中に一つの目的を以て集つて生活をすることが出來た。これは今から考へて見ると非常に大きなことであつたと思ふのです。例へば希臘の――と云ふと私は大變何でも知つて居るやうですが、噂を聞くとです。紀元前五千年も昔の時代ですが、共の時分旣に希臘は、非常な文化に達して居たのです、原始的のアーカイックと呼んで居る時代ですが、共の時代の希臘の彫刻が未だに遺つて居ります。共の彫刻を見て御覽になると分りますが、共のアーカイックの時代の彫刻はどれを見ても皆同じなんです。誰が作つたんだと言はなければ有難味が出ないと云ふやうなものでなく、希臘古代の國民全體の作として、共の時代の希臘の文化が共の儘體現されて居るのです。單に古代希臘の彫刻としてそれを賞觀すると云ふ

やうなものが未だに遺つて居る。誰の作と云ふやうに作つた人の名前を書くと云ふやうなことはない。それがノフリヤスが出て來た時に非常に特種化されて、それからの彫刻には誰のもの、誰の作と云ふことを表はすやうになつて、又賞觀するに就いても是は誰の作かと云ふことを知らなければならぬと云ふ風になつたのです。又羅馬のゴシックの文化と稱せられて居る所のものを見ましても、矢張り其の頃の集團的の國民生活と云ふものが美しく現はれて居ります。今其のゴシックの文化事業で以て遺つて居るのは、其の時代に建てられた寺院でありますが、其の頃の羅馬の生活は希臘の生活が中心になつて居りました關係上、街の集會所とか寺院とか云ふものに全力を盡したものであつて、それらの市民の生活がどう云ふものであつたかと云ふことは、其の集會所なり或は寺院なりを見て略〻想像が出來ると思ふのです。私共が行つて見て奇怪に思ふことは、日本なんかで寺を見ると、是は本願寺派の寺、是は曹洞宗の寺、或は華嚴宗の寺と云ふ風に、其の宗派に依つて柱とか彫物とか其の他の色々違つて居るのが普通であるのですが、伊太利に行つて寺を見ると、それが何宗に屬すると云ふことは分らない。是はフロレンス・ペルヂャーの寺と云ふ風に自由の氣分が能く現はれて居る、どの寺の建築様式も別段これと云つて特種のものがあるのでなく、形は實に自由です。例へばゴシックの寺に行つて見ますと、吾々の實に面白いと思ふことは、丁度此處にある柱です。斯う云ふ柱の冠に彫刻がありますが、其の彫刻が一つ一つ違つて居る所があるのです。それはどうかと云ふと、柱の大きさと云ふものは最初建築技師が決めて一定致しますけれども、それに何を彫らうと云ふことは市民の自由に任かしてあるのです。市民は自分の喜びに任かして、自分の趣味に應じて彫るのですから、色々違つたものがある。人間のやうなものを彫つてあつたり、或は唐草模樣のやうなものを彫り付けてあつたり、鳥や獸を彫つてあつたり、色々異つた趣味に依つて飾られて居りますけれども、其の間に何とも言へない調和を感ずることが出來るのです。茲に於て吾々は自由なしかも調和した生活と云ふものが昔暗黑時代

と言つて居つたやうな時代にも現存して居つたと云ふことを發見するのです。さう云ふ時代の文化現象の特色は何處にあるかと云ふと、其の特色は斯う云ふ所にあると思ふのです。其の彫刻の如何なるものを見ても、吾々は決してそれを完全だと言ふことが出來ないのです。原始的文化狀態にある產物のことであるから、決して完全だと言へないのは勿論でありますが、其の不完全の中にも好いものを一つ持つて居る、卽ちこれから、更に何物かが發展しようと云ふものを持つて居る。さう云ふ可能性を持つて居るのです。それ自身は不完全であるけれども、其の中に澤山の芽があるのです。澤山の萠芽があつて、それを私共が能く養ふならば、色々の良いものが其の中から、芽生えて來ると云ふ可能性を持つて居ることとです。これが原始的の生活から生れた文化現象に於ける非常に著しい一つの特徵だと思ふのです。所が私共が自分達の文化を段々進めて參りますと、先刻言つたやうに、集團的の力でなく、個々的の力で以て進んで行かうと云ふことになつて來るのです。それはどうかと言ふと、斯う云ふ風に固まつて生活をして行くと私共は始終外界と戰つて行かなければならぬ。私共の進んで行く道に一つの障壁があると集團の力でそれを打ち破つて行く。次に又障壁があると、それも亦集團の力で打ち破つて行く。集團に若さがあれば、集團に多くの發達の力を澤山蓄へて居るならば、大抵の障壁に對しては集團的に破つて行くと云ふことが出來る。所が集團的生活も亦いつか了へる時が來るのです。さうして集團的の力が減つた場合に、又向う側の大きな障壁に出會ひますと、今度は集團の力ではそれを押し除けることが出來なくなつて來る。それだからして、これを導いて行く力、指導する所の力を發見しようとするのです。其處に吾々は初めて英雄と云ふ者を見出し、或は天才と云ふ者を見出し、さう云ふ指導者に依つて障壁を打ち破つて行かうと云ふことになり、其處に民衆の理想鄕と云ふものが描かれて來るのです。これは甚だ好いことのやうな、如何にも私共が進步した印のやうでありますが、實は私共が老いて來た印だと思ふのです。さうして其の指導者に依つて障壁を打

です。野蠻人の中には能くあることですが、一人の偉い野蠻人があつてそれが戰に行く、そして自分の部落を指導して首尾能く戰に勝つと云ふと、勝つたところの部落では、其の大將をいつ迄も部落の神として祭り上げて仕舞ふ。其處の邊は中々野蠻人も隅に置けないです。さうして神の如き者は此の部落の中に吾々と一緒に飯を食つて居るべきものではない、そんなことを神がして居てはいけないと云ふので仕舞ひには燒き殺して仕舞ふ。燒き殺すにしても、とても大騷ぎをして、うんと名譽を付けて、立派なお祭りをして燒き殺す。そして神樣は天に昇つたと云ふやうなことを言ふのです。舊約全書にもあるやうですが、大した偉い奴が火の車に載せられて天に上つたと云ふことが書いてありますが、あれなどもこれと同じやうに、神樣にして祭り上げられて仕舞つたのだらうと思ふのです。兎に角さう云ふ風に何等かの形に於て葬つて仕舞ふ。つまり先刻言つたやうに、角の役に立つ中は使ふのですが、要らなくなるとそれを引つ込めて仕舞ふ。併し集團的生活が了へれば了へる程一時的の角では追つ付かなくなるから、永久的の英雄、天才と云ふ者が出て來る事になる。中には自分自ら英雄なりと稱して、自分を薦めると云ふやうになつて來る。俺は天才だと云ふのが出て來るやうです。當今大分さう云ふのがあつちこちに居るやうですが……兎に角指導者を見出して、それを有難がつてくつ付いて行く。そして障壁を破らうとしてぶつかるのです。所が破れないで彈き返る、又ぶつかる、又彈き返る。人間と云ふものは同じことをやつて居ると直ぐに倦怠と云ふものがやつて來て、性の倦怠に罹つて來るが最後、人間の生きる力と云ふものが失くなつて仕舞ふのです。そこで今度は幾らぶつかつても駄目だと云ふことになると、自分自身で何とかしなければならぬ。其の結果つまり個性の尊重と云ふことになるのです。これが卽ち吾々の持つて居る大きな文化生活の特色と言はれて居ります。例へば私共の生活は、老いて疲れてデカダンスになつて來たと思ふのです。私共のやつて

居る藝術上の方面から考へても分ることは、ルソーと云ふ者が出て來て、人間は自然に歸れと云ふことを言つて居ります。つまり人間同士の作つた所の約束に頼る必要はない、それに拘束されて居る必要がないから、お前達の持つて居る所の本能に依つて、内部的の要求に依つて、更に人間の內容を作り變へたら宜いぢやないか、人間同士の約束と云ふものを全然うつちやつてお前達の內在的の本能其の者に依つて作り變へたらどうだと云ふのがルソーの說なんです。さう云ふ思想がルソー時代に非常に強くなつて居つたやうですが、今度ニイチェと云ふ者が出て「自我」と云ふことを主張した。人間を神にまで鍛へ上げる、超人を拵へ上げる、さうして自分自ら神であれと叫んだのが卽ちニイチェです。更にキェルケゴールと云ふ人格者が出て來て、人間の個性の尊重すべき所以を極端に述べたために、それ以來人間同士の間に既に定められた所の、色々の約束制度と云ふものに對する反對の者が段々起つて來たのです。卽ち約束、道德、制度と云ふものを打ち破つて、もつと外に個性を尊重するやうな方向に進まなければならぬ、今迄吾々が斯うだと決めて居たものを打ち壞はさうと云ふ、さう云ふ思想が非常に發達して來たと思ふのです。例へばベルグソンの哲學などを見ると、ベルグソンの哲學は所謂流動哲學であつて、例へば私共の生活の中には一つとして同じものはない、有島武郎が今此處で喋舌つて居るけれども、もう次の瞬間には今までの有島武郎ではない、一瞬間經つた所の有島武郎です。さう云ふ風に吾々の生活の中には同じものが一つとしてないと云ふことを言つて居るのです。それからダーヰンが生存競爭と云ふことを生物の間に發見したのも、アダム・スミスと云ふ個人主義の經濟學者が現はれて、人間と云ふものは各〻競爭して勝てばそれで宜い、さうすれば自然其の結果として國が富む、人間が段々進步して行くものだと云ふことを言つて居りますが、つまり是等は皆個性を尊重しろと云ふ意味なんです。斯う云ふ風に個性の尊重と云ふことが叫ばれた結果、個人主義の道德と云ふものが盛んになつて來たのです。個々の人が自分自身に都合の好い道德を進めて行く。各〻の生活

の立場に依つて其の道德觀念が違つて來る。吾々の文化生活の狀態が變るに從つて、其の周圍の道德と云ふものも矢張り變つて行くと思ふのです。先刻言つたやうに、南洋の土人の間にはバナナを三本吳れと言つて乞はれたら、乞はれた儘に與へると云ふのが彼等の持つて居つた道德觀だつたのです。それが文化と云ふものが輸入されて、急激に彼等の生活狀態が變つて來た爲めその道德と云ふものも變つて來て、今迄よりもずつと自己的になつて來たのです。それと同じく吾々の生活が變ると共に道德も變るのであつて、近頃人道主義などと云ふことが大分叫ばれて居るやうでありますが、いくら人道主義が好くても亦變る時機が來ると思ふのです。

それで今日汽車に乘つて色々考へて見ますのに、奇態なことは赤い美しい花が、黑い土の中から生れて來ると云ふことです。其の赤い花が又結局落ちて黑い土になつて仕舞ふことです。これを考へて見て、私は非常に面白いことだと思つたのです。黑い所から赤い花が生れると云ふことも奇蹟であるが、赤い花は何としても、如何に藻掻いても、結局は必ず黑い土にならなければならぬやうになつて居るのです。私共は今一つの文化を作りましたが、如何に美しい人道主義を唱へたり何かしても、それがいつか黑い土になつて仕舞ふのです。それはもう間違ひがないのです。それならば吾々は、出るべき花は成るべく早く出て、成るべく早く散つて、黑い土になつて仕舞つた方が便利でなからうか、さうすれば又赤い花が土の中から芽生えて來る時機が來ると思ふのであります。

（一九二三年六月、「文化講演集」所載）

「斷橋」の題材

私はこの頃、自分が今まで書いて來た小說のなかの、戲曲的な部分だけをとつて、それを戲曲にしてみることを企てゝゐる。「斷橋」はその試みの一つで、「或る女」の後篇からとつたものである。女主人公葉子が、戀人の汽船の事務長と鎌倉へゆく。そして、滑川で初戀の男と邂逅する。その時、女は橋の上に、男は橋の下の砂上にゐる。葉子は昔の愛をなつかしがるが、男にはもう昔の心はなかつた。といふ內容であるが、それに、國木田獨步の「鎌倉夫人」と「運命論者」を加味させた。「鎌倉夫人」に扱はれたのは「或る女」の葉子を男でいつたもの。男の「運命論者」は、その戀人が自分の妹であることを知つて、悶えながら猶ほ戀する。といふのが、その二篇のプロットの中心點であるが、それと「或る女」の後篇とを一つに考慮して出來上つたものが「斷橋」である。私がこれで鳥渡面白からうと思つてゐるのは、これの舞臺裝置である。舞臺の上手下手に砂地があつて、その間に川がある。正面には側面からみた橋が高く架つてゐるが、その橋は中央が斷れてゐるのだ。そして橋の上の女と砂地にゐる男とで劇が進行するのであるが、その舞臺裝置を私は自分では面白く思つてゐるのであるが。（談話）

（一九二二、三、「演藝畫報」所載）

私有農場から共産農園へ

A　北海道農場開放に就いての御意見を伺ひたいのですが。殊に、開放されるまでの動機やその方法、今後の處置などに就いてゞすな。

B　承知しました。

A　少し横道に這入るやうですが、この頃は切りに邸宅開放だとか、農場開放だとか、それも本統の意味での開放でなく、所謂美名に隱れて巨利を貪つてゐるやうな、開放の仕方が流行つてゐるやうですが、いゝ氣なものですな。

B　全くですな。土地からの利益が上らなくなつたり、持て餘して手放したり、それも單に手放すといふのなら兎も角、美名に隱れて利益を得る開放の仕方などは不可ませんね。最近では蜂須賀侯などが農場を開放されると聞きますが、あれなどは實に怪しからんと思ひますね。農場の小作人に年賦か何かで土地を買はして、それでも未だ不可いからといふので、政府から補助を受けることになつてゐると聞きますが、これなんかは全くどうにかしなければ不可ませんね。

A　實際です。彼等が營利會社か何かと結びついて、社會奉仕などゝいゝ顏をして利益を得ようといふんですから、第一性根が惡いと思ひます。――ところで……

B　ところで、よく分りました。私の場合は、勿論現代の資本主義といふ惡制度が、如何に惡制度であるかを思つたことゝ、直接の動機としては、資本主義制度の下に生活してゐる農民、殊に小作人達の生活を實際に知り

得たからです。小作人達の生活が、如何に悲慘なものであるかは分り切つたことですが、先づ具體的に言ひませう。私の狩太村の農場は、戸數が六十八九戸、……約七十戸といふところですが、それが何時まで經つても掘立小屋以上の家にならないで、二年經つても三年經つても、依然として掘立小屋なんですね。北海道の掘立小屋は丶それこそ文字通りの掘立小屋で、柱を地面に突き差して、その上を茅屋根にして、床はといへば板を列べた上に莚を敷いたゞけ、それで家の中へ水が這入つて來ないやうに家の周圍に溝を拵へるのです。全戸皆がこんな掘立小屋で、何時迄經つても或ひは藁葺だとか瓦葺だとか、家らしい家にならないし、全く嫌になつて終つたんですな。

A　と言ひますと、農民達にはそんな家らしい家にして住ふやうな氣持を持たないのでせうか。そんな掘立小屋なんかで滿足してゐるのでせうか？

B　さうぢやないんです。農民達はそんなことに滿足してはゐないのですが、家らしい家の建てるまでの運びに行かないのです。一口に言へば、何時まで經つてもその日のことに追はれてゐて、そんな運びに至らないのです。小作料やら、納稅やら、肥料代やら、さういつた生活費に追はれてゐて、何時まで經つても水呑百姓から脫することが出來ないのです。――それにあのとほり、一年の半分は雪で駄目だものですからな。冬も働かないわけではないのですが、――それよりも、鐵道線路の雪掻きや、鯡漁の賃銀仕事に行けば、一日に二圓も二圓五十錢もの賃錢がとれるのですから、百姓仕事をするよりも餘程お錢が多くとれるのですが、とればとれるで矢張り贅澤になつたり、無駄費ひが多くなつたり、それに寒いので酒を飮む、飮めば賭博をする。結局餘るところが借金を殘す位ゐのもので、どうにも仕樣がないのです。それでは、家の中の手內職はどうかと言へば、九州などの農業と違つて、原料になる藁がないものですから、それにあのとほりの掘立小屋では、小屋の中にばかりゐる氣にも

なれますまい。つまり、これぢや迚も、農民達は一生浮ばれないと思つたんですね。小作料は畑で一反に一圓五十錢、乃至一圓七十錢位ゐですが、これにしても北海道の商人はなか〳〵狡猾で、農民達の貧乏を見込んで、作物が畑に青いまゝである頃から見立て買ひをして、ちやんと金を貸しつけて置くのです。ですから、どんな豐年の時でも農民はその豐作の餘慶を少しも受けないことになるのです。それでない場合でも、作物の相場の變動が、この頃は外國の影響を受ける場合が多いものですから、農民達には相場の見込みがつかず、その爲めに苦しんだ擧句が見込み外れがしたりして、つい悲慘な結果を生むやうになるのです。

A　商人達の狡猾なのは論外です。殊に、北海道あたりでは、未だ植民地的な氣風が殘つてゐるのでせうから質が惡いかも知れません。——それにしても、あの農場を開放されるまでには隨分と、各方面からの反對もありましたでせうな?

B　ありました。資本主義政府の下で、例へば一ケ所や二ケ所で共產組織をしたところで、それは直ぐ又資本家に喰ひ入られて終ふか、又は私が寄附した土地をその人達が賣つたりして、幾人かのプチ・ブルジョアが多くなる位ゐの結果になりはしないか。結局、私がやることが無駄になりはしないか。といふやうな反對意見があつたのです。然し、私は私のやつたことが、畫餅に歸するほど、現代の資本主義組織がどの程度まで頑固なものであるか、どの程度まで惡い結果を生むものであるか、そればかりではなく、折角私が無償で土地を寄附しても、それですら尙農民達が幸福になれないのだといふことが、人々にはつきり分つてゐゝのぢやないかと思ふのです。私は、その試練になるだけでゞも滿足です。一旦手放して、自分のものでなくなつた以上は、後の結果がどうならうとも、それに就いての未練は少しもないのですが、たゞ出來るだけは有意義に、有效に、その結果がよくなるやうには私も今の内に極力計る積りです。兎に角、今迄ちつとも訓練のない人達のことですから、私

の眞意が分つてくれて、それを妥當に動かして行くといふことは、なか〳〵困難なことでせうが、それだけ私も愼重に考へて、結果をよくする爲めに計つてはゐます。「新らしい村」などは、多少ともに頭も出來、武者小路君の意見に贊同した人達が、どれまでのことをやれるかやつて見るのだといふ信仰的なものとは違つて、農民達の方はまるで訓練もなく、知識もなく、まだ私の考へを十分呑み込んでさへもくれないので、なか〳〵困難なことかと思はれます。たゞ「新らしい村」の方は、寄附や其の他のお金で生活してゐて、直接村からの生産で生活してゐるのではないから、その點は農場とは餘程趣を異にしてゐますが。……

A　成程、してみると、農民達はどうして土地を開放するか、その眞意がすつかりと了解出來ないのですか？

B　それは分つてゐてくれます。然し、その實行問題になると、私が思つてゐることをなか〳〵了解してくれないのです。それは、現在農場にある組合の倉庫なんかでも、組合幹部の見込違ひから、十萬圓位の穴を明けたりしたことがあるものですから、農民達もびく〳〵してゐるのです。それに、狩太には私の農場の他に、曾我、深見、松岡、小林、近藤などといふ農場があつて、孰れも同じことですが、一種の小作權賣買といふのがあるのです。つまり、一つの農場の小作人となるのに、五百圓とか、千圓とか、その農場の小作人となるのに小作の旣權者から權利を買つて這入るのですな。その爲めにしよつちう村の中で出入りがあるのです。景氣がよければよいで、その小作權を賣つて、割のいゝ他の職業に就く。その爲めに、農場に固定する人、つまり永く何代も何代も定在する人ばかりではないものですから、今度の處置についても非常にやり難い點が多いのです。――その爲めに、農場の管理者や、村長や、今後の處置を一任した札幌農大の森本厚吉君や、大學の他の諸君とも計つたことですが、その組織に就いて相談してゐるのです。丁度、あちらからその組合規定が送つて來たのですが、その表題は「有限責任狩太共濟農園信用購買販賣利用組合定款案」――隨分やゝこしいが、內容の凡てを表題に入

れて長たらしくしたものですが、實は共濟農園を、共産農園にしたかつたのです。共濟なんかといふ煮え切らないものよりは、率直に共産の方がいゝのですからな。ところが、これが又皆の反對を買つたのです。共産といふ字は物騒で不可い。他の文字にして欲しいといふのです。それも、森本君なんかよりも、大學の若い人達や、村長、管理者などに反對者があるのですから可笑しいですね。それにしても、共濟といふ字は餘り好みませんが、何とかいゝ名前はありませんか。

A　さあ、私なんかには考へつきません。――然し、隨分可笑しな人達ぢやありませんか。共産なんて文字に世間の人達が、そんなにまで氣を病むなんて、妙なものですな。うまい魚だが、フグだから不可い。それでフクにしたならばいゝだらうといふのですな。この節の議會の問答のやうに、佛教家の平和主義ならばいゝが、社會主義者の平和主義は不可いといふやうなものぢやありませんか。同じいゝことが、名前に依つて不可なかつたり、人に依つて不可なかつたり、……

B　さうです。然し、それは事實だから仕方がありません。それに、この表題のことも尙研究中ですから。――この定款も、北海道の人達が上京して來て完全なものとなり、それから農民達とも相談したら、その結果がどうなるか。實を云ふと、訓練のない人達のことですから理想的に行くかどうか、それは隨分困難のことでせう。私も常にその覺悟はしてゐます。

A　先つきのお話のやうに、今のところは村の出入りが多少あつても、「新らしい村」などの場合と違つて、家族と一緒に暮すのですから、割合に居着き易いと思ひますが、それに土地が自分のものにはなるし。暮し易くはなるしするのですから、段々安住する氣になると思ひますが。それに、今度の制度の訓練が段々に上手になつて來ましたら。

B　それはそんなものかも知れませんが。それとは又別な困難が一つあるのですから。田舍にばかりゐる人は、どうしても都會に憧れを持つのです。その都會憧憬の心ですな。その爲めに小汚ない百姓の足を洗つて、都會へ出てもつと綺麗な仕事をしてみたいといふやうな氣が起るのですな。その爲めに、落ちつけなくなるのです。私が敎へた生徒の中に、一人千葉縣人が居りましたが、その人の話に依ると、その村の靑年達の理想は、東京へ出て來て自動車の運轉手になることだといふから呆れるぢやありませんか。

A　成程、鎌子事件の主人公となつた夢なども惡くはありませんね。

B　そんなことで、いろ〳〵の困難なことが伴つて來るだらうと思ひますが、私も一旦農場を寄附する以上、今後はどうなつてもいゝやうなものゝ、再び資本家の手に這入つて終ふやうなことはしたくありませんので、その惡結果を防ぐ方法として、先つきの話のとほり、共產組合の組織にしようとしてゐるのです。今度の成案などは、まだ〳〵ほんの初めのことで、不完全なものでせうが、組織は農園組合を管理する理事を置いて、これが實務に當ることになるのです。その外に、幹事を數名置くことになりますが、これが會社でいふ監査役といふところです。こんなものが、農民自身の選擧で置かれることになります。今迄の管理者なども勿論、一個の組合員になつて終ふのです。

――それに規定の內容は、(一)貯金の便利の爲めの信用組合、(二)販賣組合、(三)購買組合、(四)利用組合、(五)農業倉庫、その他いろ〳〵とあるのですが、兎に角、農場開放のことは、私自身の氣持や、態度などゝいふことはすつかり確定してゐて、今まで言つたとほりですが、その土地の內部組織などのことは、丁度その過程にあるのですから、その積りでゐて欲しいのです、すつかり確定すれば、又お知らせしますから。

（一九二三四、「文章世界」所載）

生活革命の動機

私が自分の財産を凡て社會に提供したのは、一つには今迄の生活が餘りに煩雜であつて、私の仕事のさまたげとなつたからです。何か一つの事を書くにしても、今迄の私の樣な境遇にあつては色々の困難があるものですから、どうしても自分の仕事の上に或る壓迫を感ずる樣になります、それでもつと生活の諸形式を簡單にしたいと云ふのは私が早くから望んで居た事で、それを此の頃に至つて漸く實行に移す事になつたのであります。

*

それともう一つは、私有財產と云ふものに對して私が次第に罪惡を感ずる樣になつた事が、主なる原因となつて居ます。勿論現在の樣な我が國の社會組織の中にあつては、全然私有財產を無視する譯にはゆきませんから、私も出來るだけは働きもしませうし、お金を溜める事もあるでせう、が、たゞ親讓りの有り餘る財產を受けついで豪奢な生活をすると云ふ事は、矢張り罪惡ではないかと考へるのです。畢竟、以上申し上げました事が原因ともなり又動機ともなつて、私は自分の生活を變へる事になつたのです。

*

元來私は階級意識の極めて鋭い空氣の中に育つたのでありますが、私の性格が呑氣だつた爲めか、さうした方面には鈍感であり、又それのみならず階級的の差別を設ける事は嫌ひな方でありました。それで幼少の頃から階級と云ふ事には割合に無頓着で自分の周圍の人達と交つて來たと思ひます。

*

社會制度の不合理の事や、階級意識等と云ふものは日本ばかりでなく、何處の國でも同じだと思ひます。先年アメリカに滯在して居た時、私は其處で叉矢張り、それは或る意味に於て日本よりは合理的ではあるが、それでも尙社會の缺陷と云ふものを認めずには居られなかつたのです。特にアメリカの樣な金さへあれば何でも出來ると云ふ樣な國に於ては、凡てが物質的に傾いて居る事は如何ともなし得ない事でせう。

土地も廣大であり生活も豐かであるが故に、その弊害はさ程目立たないにしても、あの國に於て日本の樣に年年に人口が增加し、富の程度もズツと低いとすれば、我國に於ける樣な弊害がきつと生じて居る事と思ひます。

＊

私は自分が働いて作つた財產を子供に讓りたいなどゝ云ふ考へは、微塵も持つて居りませんけれども、子供の敎育に就いては及ぶ限りを盡す積りで居ます。然し萬一の事があつてそれが出來なかつた時は、その時は叉止むを得ない事です。現在の日本では義務敎育の六年間を終れば、その後の敎育はそれに相當する才と富とを有する者に限られて居るのですから、若しも私に子供の敎育が出なくなつた場合は全く仕方がない事です。然しかうした例は社會にも澤山ある事と思ひます。

＊

私はかうして自分の生活の行程に一つの區劃を作りましたが、かうした事を敢てする事の出來たのは、私がレピュテーションを有して居たと云ふ事が、一つの大きな助けになつたと思ひます。

若し一定の職業も持たず、叉社會にも認められて居ない人が、親讓りの財產全部を投出して社會に立つとなれば、それはその人にとつて非常な大問題であり、叉冒險的な事であると思ひます。(談話筆記)

(一九二三、四、二「文化生活」所載)

農村問題の歸結

私は農村問題に對して深く研究してゐるわけではありませんからあまり立ち入つた事は云へませんが、今に地主と小作人との間が崩潰する時が來るだらうと云ふ事だけは云へると思ひます。それは何故かと云ふと、農業は他の商工業に比して割が惡い。農夫が他の商工業に從事してゐる勞働者と比べて自身の勞働に對してどれだけの賃銀を得てゐるか考へたとして御覧なさい。假に勞働を勘定に入れて收支を計つて見ると、支出の方が收入よりも多いといふやうな矛盾した事實を發見するでせう。働けば働くほど本當は損がいつてゐるのです。今の狀態ではどうしても平均が取れません。百姓を止めて都會に出て他の職業に從事する者が多くなります。百姓が貧乏する、地價が低落する、從つて資本のない小地主は次第に倒れて行きます。小地主は小作人と大地主との間で安全瓣のやうな役をしてゐるのでありますが、小地主が倒れて大地主對小作人の問題になると、資本家對勞働者と同じやうに利害關係で折衝するやうになります。其處でどうしても崩潰をまぬがれない事になります。それではどうすれば良いかと云ふと、資本と土地との私有が原則として最上の經濟狀態と考へられ、國家が私有者に對して最大の保障を與へてゐる間は、この問題を根柢的に解決することは出來ないと私は考へてゐます。國有でも社會有でも良い、兎も角土地が私有でなくなるのが大切なことだと思ひます。

私の北海道の土地の如きも小作人の共有と云ふ事にしましたが、現今ではさう云ふものを保護する法律がありません。また小作人が各々入場當初退場する小作人から買ひ取つた小作權——即ち一人の小作人が他の土地に移住するやうな場合他の人に今まで自身が與へられてゐた土地の耕作權を二百圓なり三百圓なりに賣り渡して行く

のです。――それを放棄しようとはしてくれません。それ故土地は共有になつても、利用權と云ふものは全く私有の狀態にあるのです。これでは本當の事は出來ません。

それでは現在の社會制度のもとで、どうすれば農民が救はれるか。私は農村の青年が他から騙されないやうに自分自身で自分の救濟法を講ずるより道はないと思ひます。

先日こんな話をきゝました。長野縣の或る所で、村の中央部に町があつてそこには商人が住み、他の二つの部落には農民が住んでゐるのですが、商人は收利が多いので村稅の負擔も商人が多いので、それが當然なのですが、商人はその負擔だけを農民にもかけようといふ腹で、その村境にある國有の山を借り受けて植樹をすれば、やがてその山からの收入だけで村稅は出ると云ふ事を主張したのです。

農民はうつかりとその口車に乘りました。ところが樹苗を買ふにも負擔は村民全體にかゝるし、樹を植ゑたり、世話をしたりするのは全部農民がしなければならないことになつて、商人は手を束ねてゐて、自分達の納稅負擔を極度に輕くしてしまつたのです。かくて商人が自分の負擔を輕くし、結局農夫だけが骨折損のくたびれ儲けをする結果になりました。

青年會館の志賀さんが秋田の方で地主と小作人との間が極めて圓滿に行つてゐるのを見て來られたと云ふ話をきゝましたが、これも今の中こそ可能な事で、農業の利益が商工業の利益と懸隔を生ずるやうになればなる程、地主の餘裕がなくなり、從つて恩惠的な設備もおろそかにせねばならなくなるでせう。しかしまあ當面の方策としてはそれなどを調べたら多少參考になるかも知れません。歐洲ではデンマークなどで、さうした制度が割合うまく行つてゐると云ふ事で、北海道でもそれを特に調べてゐるさうです。（談話筆記）

（一九二三年四月、「青年」所載）

農場開放顛末

小樽函館間の鐵道沿線の比羅夫驛の一つ手前に狩太といふのがある。それの東々北には蝦夷富士がありその裾を尻別の美河が流れてゐるが、その川に沿うた高臺が私の狩太農場であります。この農場に、私の父が子供の可愛さから子供の內に世の中の廢りものが出來たときにその農場へゆけば食ひはぐれることはあるまいといふ考へからつくつたものであります。その當時この北海道の土地は財産を投じて經營する大規模の農場には五百町歩まで無償貸附し小規模の農場には五町歩を無償貸附したのでした。そしてその條件は其の翌年の內に一部を開墾するといふので道廳から役人が來てそれを檢べ一定の年限がたてばその土地をたゞでくれるといふことになつてゐたのであります。それから地租はたしか十五年間は免ぜられてゐたと思ひます。私は札幌農學校を明治三十四年に卒業しましたが、三十二年からこの農場が私の父によつて經營されました。この農場の面積は四百五十町歩足らずなのであります。私は農學校を卒業する前年の夏にはじめてこの農場を訪れました。倶知安まで汽車で參つてそれから荷馬を用ひ隨分と難儀していつたのでした。熊笹はこの天井位の高さにのびて見通しがきかないのみか樹木は天をくらくする位に繁つてゐました。そこに小さい掘立小屋をたてゝ開墾の事務所がありました。初めに入つた農民が八戸でありまして川に沿うた所に草で葺いた小屋をたてゝ開墾に從つたのでした。小作料なしで三年やり三年後から小作料がとれるとかうなつてゐました。その開墾の方法は秋にはいると熊笹に火をつけて燒き最初はそこに蕎麥を蒔く、それから二年目に麥を蒔き三年目からいくらかの收穫があるといふのでした。狩太の農場は三十二年から始めて、三十七八年に至つて成墾いたし、こゝで私の父の所有になつたのであります。それ

までにどれだけの金がかゝつたかといふと凡そ二萬圓であります。二萬圓ではやすく出來たのでありました。今この農場へいつてみましても、小作人の家屋はその最初と同じ掘立小屋なのであつて牛一頭も殖えてゐないのであります。私はこれを見て非常に變な感じにうたれたのでありますが、せめて家だけでも板葺きの家が見られるやうになりたいといつても、小作人は自分の經濟が發展しやうがないので迷惑がるのであります。二十四五年たちました今は七十戶程に增してゐますが、その內で障子をたてたりして幾分でも住居らしくなつた家は、小作し乍ら小金をためて他の小作へ金を貸したりした人のもので、農業ばかりしてゐた小作人の家はいつまでたつても草葺きの掘立小屋なのであります。この農場の小作人の出入は隨分激しく最初からの人はなく始めて七年後に入つたのが一人あります。併し他と比べて私の農場は變らない方なのであります。何分にも農場は太古から斧鉞が入らない原始の豐饒な土地なもので麥等は實に見事に出來るのですが、それにいゝ氣になつて肥料を施さぬものですから、二十五六年もたつて全くひどく枯れてしまふといふことが起つてゐます。それに五六年目每にはげしい蟲害を蒙つてその年は小作料をとりあげられるだけでも苦しいといふことがあるのであります。かうした不安の上に、國內經濟から國際經濟に移つた爲めでせうが、外國からの穀物の輸入されるやうになつて、その收穫の作物の値の高低がはげしく、時にはそれに投じた資金をも回收できない位に作物の價が廉くなるのでありま す。それから今一つ、この小作人と市場との間にたつ仲買といふのがその土地の作物を抵當にして、恐ろしい利子をかけて所謂米鹽の資を貸すのであります。小作人はこれにそれを借らねばならないのでありますが、その爲め時としては、收穫したものをそのまゝ持つて行かれてしまふことがあるのであります。この仲買といふのが、中々跋扈してゐます。私は明治二十七八年頃から小作人の生活をみてゐますが實に悲慘なものでありまして、その爲め私の農場の附近は現在小作權といふものに殆んど値がないのであります。

さて私は明治三十六年から明治四十年までアメリカに留學しました。アメリカにゐる時クロポトキンの著作などに親しんだことから物の所有といふことに疑問を抱かされたのでありましたが、歸朝するとすぐ英語の敎師となつて札幌に赴任いたしました。

私は父の財産で少しの不自由もせずに修學して來たのですけれども、本當のところそれで少しも壓迫されることが無かつたかと云へばさうでもありませんでした。「一圓の金でもそれは人力車夫が三日働かねば得られないものだ」と父に戒められたことを記憶してゐます。

人は財産があるがために親子の間の愛情は深められるといひますが私は全く反對だと思ふのです。本能としての愛で愛し合つてこそ其の愛情が純粹さを保つのであつて、經濟關係が這入れば這入る程鎖のやうなつながりに親子の間はなるのであるとかう信ぜられるのであります。私の家庭では毫も父によつて壓迫を感じさせられたことはなかつたのでしたが、私自身にとつて親子の間に私有財産が存在するといふことが常に一つの壓迫として私にはたらいてゐました。明治四十年頃に私はこの農場を投げ出すことを言ひましたが、それは實行が困難であり、それに父に對して、たとひこのことが父のためにも恩惠を與へることになるとは知つてゐましたが、徒らに悲しませることになると思つたのでともかく父の生きてゐる間は默つてゐることにしたのでした。しかし父も亡くなりそれに最近に至つてしなくてはならなくなつたから——つまり他人がどう思つてもいゝ、したくてせずには居られなくなつたので愈ゝかの農場を拋棄することになつたのであります。私が自分自身の爲め仕事を見出したといふこともこの拋棄の決心を固めさせてくれました。文學といふ所に落ち着くことが出來た、それで、その自分の爲めに仕事を妨げようとするものはすべてかいやりたくなつて了つたので、それからもう一つは農民の狀態を見ると、どうしてもこのまゝにして置けない、此のことも強く自分に迫つて參つたのでした。

狩太農場を開放するに到りました動機、それをたづねてみましたら先づ以上のやうなものであります。

私は昨年北海道へ行きまして小作人の人々の前で私の考へをお話しました。そして私の趣旨も大體はわかつてくれました。そのとき私がいつたことは「泉」の第一號に「小作人への告別」として載せて置きました。私はどう考へても生産の機關は私有にすべきものではない。それは公有若しくは共有であるべき筈のものだ、私有財産としてこの農場からの收益は決して私が收める筈のものではない、小作料は貴君方自身の懐ろに入れてどうか仲よくやつていつて貰ひたいとお話したのでした。

これでもう私が引き下ればいゝのでしたが、その後をいゝ結果のでるやうに組織經營され、そこを共同的精神が支配出來るやうにとの願ひから私はこの農場の組織と施設とを北海道大學農業經濟の教室で作製してもらつたのであります。その案は最近に森本厚吉君から私の手に屆きました。

それを見て第一に感じたことは今の日本の法律は共有財産を保護するといふ點に於て、殆んど役に立たぬものではないかといふことでした。あの農場を小作人の共有にするといふことが許されないなら殘つた方法は二つで財團法人にするか組合組織にするかであります。前者にすると、いはば專制政治のやうになつてそこに協調的施設が加はつても小作人自身は自分を共有的精神に訓練させることが困難になる、また組合組織にしても幾多の矛盾は避け難く、一例せば利益金の分配が極めて面倒なのであつて、その創設のとき現金を多くもつた人が組合から一番多くの利益をうけることになるのであります。

今度出來て來た施行案は、土地は皆のものであるとして小作株といふのを持たしてあるので、その爲め公有になつても實際の狀態は私有制度だと云はれるのであります。忠告して呉れる人はその小作株は一應買ひ取つて了つてそれの轉賣をも防ぎ利益配當の不平等もなくするやうに――そして名實ともに公有にせよといつてくれるの

であります。土地の利益と持株の利益とを別にして了ふことも必要と思つてゐますが、兎も角十分に案につき練りました上で、農園の總會に提出したいと考へてゐるのです。農民自身が自身をトレインするもので、もつと自由な共産的規約を致しておきたく思つてゐます。今迄に例がないのでクリエイトするより仕方ありません。この農場は共産農園と名づけることを望んだのでしたが、共生農園といふ名になりました。

私はこの共生農園の將來を決して樂觀してゐない。それが四分八裂して遂に再び資本家の手に入ることを殘念だが觀念してゐる。武者小路氏の「新らしき村」はともかく理解した人々の集まりだが、私の農園は豫備知識のない人々の集まりでしかも狼の如き資本家の中に存在するのであります。併し現在の狀態では共産的精神は周圍がさうでない場合にその實行が結局不可能で自滅せねばならない、かく完全なプランの下でも駄目なものだ――この一つのプルーフを得るだけで私は滿足するもので、この將來がどうであるかといふことはエッセンシャルなことゝは思つてゐないものであります。（談話筆記）

（一九二三年四月、「帝國大學新聞」所載）

藝術教育私見

一

近頃藝術教育の聲が非常に高まつて來て、學校等でも、此の方面の教育に力を盡す樣になつて來たことは何と言つても喜ばしいことである。智育一點張りであつた我國の教育も、漸く斯かる方面に迄進んで來たかと思ふと愉快である。併し今日學校に於いて行はれつゝある藝術教育は、餘りに創作的方面にのみ傾き過ぎて居はすまいか。私の思ふ所では、藝術教育は鑑賞の能力を養ふのが主要なる目的であつて、無暗に創作を奬勵するよりも、其の方が餘程大切な事であると思ふ。本當に創作のよく出來る者は少數であつて、多くの者はそれが出來ない。だからこれを多くの者に强ひようとするのは、誤れるも甚だしきものである。

小學校に於ける藝術教育は、將に此の鑑賞といふ事を目的として行くべきものと思ふ。そして其の教育の材料としては古來からの名畫名作を以てすべきである。子供だからと言つて割引きして考へる必要はない。彼等と雖も相當に了解するものである。私がアメリカに居つた時分、休みの時など、よく或る百姓の家に呼ばれて行つた事があるが、其處の家に八歲か九歲位ゐな女の子が居た。父親はよく子供のために色々なものを讀んでやつて居たが、子供が最も好む所のものは、シェークスピアとかメーテルリンクとかいふ樣な名家の作品であつた。よしそれは大人の樣に了解し得ないとしても、子供は子供としての解釋を立派にして居たのである。それだから子供だからと言つて、わざ〳〵程度を引き下げたものを與へる必要はない。大人が見て立派だと思ふ所のものを子供に

も示すがいゝと思ふ。よしんば半分位ゐわからなくとも、藝術の最高の境地が暗々裡に示されて居る。それでいいのである。繪なら繪を學校に掛けて置くにしても、好い加減な繪で分りのいゝものといふのを選ぶのよりも、クラシックな立派な作品を掛けて置くがいゝと思ふ。

二

も一つ藝術教育の方面として大切だと思ふのは、應用藝術、卽ち實生活に結び付いた方面の藝術である。建築とか工藝とかの方面がそれで、男の子にやらせるとすれば木工とか粘土とか、それから簡單な土木工事など、女の子なら刺繡とか、編物とか、花卉栽培とか、さういふ方面の教育が實は甚だ大切なのである。今の一般の學校では藝術教育と言へば、繪畫とか音樂とか純藝術的方面の教養にのみ力を注いで居るやうに見える。圖畫科の如きものも單に純藝術としての繪畫のみを取扱はうとして、應用藝術の方面には多く及ばない。これは甚だ遺憾な事である。手工の如きものをもつと盛んにしなければいけない。子供の能力は決して繪畫に限るものではない。彫刻にも應用藝術にも、建築、土木等にも、あらゆる問題に向つて行くものである。さうしたものを子供の趣味によつて選ばせ、これを學習せしむる事にするといゝと思ふ。今の學校は經費等の點からそれ等の事が十分に出來ないかも知れないけれど、何とかしてさういふ方面の教育を完成して戴きたいものである。

子供の興味を持つ所のものをよく見て居ると餘程實際的なものである。子供は實際に役に立つ所のものに非常な興味を持つてゐる。その心持は純藝術には大分遠い。純藝術は形とか色とか言葉とか音とかの抽象的な形式美を味ふ所に特色がある。然るに子供の心は全く實際的であつて、大人の樣に抽象的な美を樂しむ事が出來ない。それだから子供には實際的なものを與へた方が、彼等の興味に合する事であり、又研究心をも起させ得るもので

ある。斯樣な譯で、子供は實際的な方面が先づ發達し、それが進んでやがては抽象的な純藝術的なものに這入つて行くものである。此の意味で、兒童の藝術敎育は、先づ應用美術の方面から始め、後に至つて、次第に純藝術の方面に導いて行くべきものであると思つて居る。

子供の爲めの藝術敎育は、何處までも子供自身の生活に根差したものでなければならぬ。子供自身の生活そのものに對する眞の理解がなければ本當の敎育は成り立たないと思ふ。

子供は戰爭ごつこをしたり、冒險を好んだり、蜻蛉や蟬をいぢめたりする。さういふ事に對して非常に心配する人がある。私の友人に子供に武器の玩具を一切持たせない人がある。その人は中々さういふことに注意して居て、「萬歲！」といふべき所はいつも「平和！」と言はせる。これなどは實にをかしな者だと思ふ。子供は母の胎內に居る間に、下等動物から次第に人間に進化して來る形を繰り返して居るが、それと同樣に、生れてから後の子供の生活は、野蠻時代の生活を繰り返すものと見得るのではなからうか。山に行つて木を取つて來てそれを削つて劒の樣な形を作つて見たり、動物を虐待したり、さうかと思ふと妙に家畜を溺愛したり、これ等は全く野蠻人の生活そつくりである。私はかういふ時期には思ふさま子供の好きな事をさせるがいゝと思ふ。それを無理に止める事は子供の發達を害し、子供をいぢけさせてしまふ事になる。注意すべき事である。

斯ういふ所からいふと、今日の都會生活は子供には餘りに可愛さうである。桑港あたりの子供でもさうであるが、家は何で出來て居るかと云ふと、石と材木だと云ふ。それなら材木は何から出來るかときくともう知らない。斯うした子供は實に可愛さうだと思ふ。

一體都會生活は餘りに早く子供を大人にする。子供を餘りに敏感にする。私の子供なども學校で先生のお話をきいて居て、そのお話がまだるこくて仕方がない。それで何か手わるさをして居る。そして手わるさをしながら

時々きけば、先生のお話は十分わかるんだと言つて居る。これは先生の思想の歩みののろいのに比べて子供の思想の歩みが非常に早い一例であるが、それといふのも子供が敏感だからである。もつといゝ例は、私の子供は私が居ないと夜眠らない。私はどうせ一緒の室に寢るのではない。隣りの室に寢るのであるが、それで居て若し私が居ないと子供は中々眠らないで女中などを手こずらせる。それ程神經過敏になつて居るのである。

斯樣な狀態にある都會の兒童に對しては、どうかさうした方面を救濟するやうな藝術教育をしてほしい。藝術教育がたゞ一途に人間を纎細に敏感にするのみであるなら、都會の兒童にとつては全く害あつて益のない事である。もつと大きな力のある深みのある藝術教育こそ都會の兒童に向つて與へらるべきものである。

日本も今二十年も先には世の中がどんなに變つて行くかわからない。今の階級文化が覆へされ、非常な混亂した社會狀態を現出する時が來ないとも限らない。若しさういふ事にでもなつて來た日には、藝術の如きも雌伏して居なければならなくなるかも知れない。私が藝術教育を堅實なる力強い藝術の境地に求め、又應用藝術の方面を強調するのも一つは斯うした豫感をその背後に持つ爲めからでもある。

三

最後に藝術教育に對して、私の最も心配に堪へぬ所のものは、それが如何に取扱はるゝかの問題である。藝術は何と言つても樂しい世界である。勿論その中には悲しいことも苦しいことも出て來るけれど、何と言つても藝術そのものは樂しい世界であると言はねばならぬ。されば教師が何等の考へもなしに、これを漫然と取扱ふなら、其處に恐るべき危險がある。左樣な事から藝術を安價に取扱ふ癖をつけるなら、それは最も危險な事である。昔の床屋の俳諧と言つた樣に、暇つぶしとか憂さ晴らしとかの爲めにするやうな事になつたら、それは誠に恐るべ

き事である。

藝術教育は非常に大切なものであり、人間の教養として效果も大なるものであるが、若しその取扱ひ宜しきを得なかつたならば、人を毒する事も亦非常に大きいのである。どうか其の局に當る人々は、此の點に十分の考慮を拂つて、是非共堅實なる藝術教育を築き上げてほしいと思ふ。（談話筆記）

（一九二三年五月、「藝術教育」所載）

農民文化といふこと

農民文化に就いて話せといふことですが、私は文化といふ言葉に就いてさへ、ある疑ひを持つてゐるのでありまして、所謂今日文化と云はれてゐるのは、極く少數の人が享受してゐるに過ぎないのであつて、大多數者には何等及ぼす所の無いものであります。殊に農民文化と云ふに至つては、斷然無いと云はなければならぬと思ひます。今日農民のおかれてある悲慘な境遇に、どうして文化などを生む餘裕があり得ませう。

話は横道へ入るかも知れませぬが、農民に文化が無いと云ふのは、農民に文化を生む力が無いと云ふのとはおのづと意味が異なりまして、只今日の文化に何等交渉をもたないと云ふまでゞあります。眞の文化と云ふものは、人類的なものでなくてはならぬのですが、今日のそれは一部の獨占的なものに過ぎないのであります。そこで今日は眞の文化と云ふものを大いに普及する必要があるのですが、これまた一朝一夕に容易になし得る事業ではありませぬ。理論的に云つても實際的に云つても、深く突き進んで行けば行く程難關があつて、終極は現在の社會制度、社會生活の缺陷に突き當るのであります。

然らば社會制度の缺陷とは何か。それは近代の社會思想家達の指摘した如く、資本の私有と云ふ誤れる制度に歸すると思ひます。この當然に共有であらねばならぬ筈の資本が、私有されるやうになり、それが爲めに種々の弊害が生じて、當然人類的に進むべき筈の文化が、今日の如き變態的な姿となつて現はれるやうになつたのであ

ります。ですからこの制度を改めるに非ずんば、千萬言を費やしても文化の普及と云ふことは駄目であります。勿論其の時代を迎へずして農民文化の問題を取扱ふと云ふことは、早計たるを免れません。

ではこの私有財産制度から、如何にして解放せらるべきかと云ふことが問題でありますが、これは先づ私達が機械化された生活から自由を回復しなくてはなりませぬ。自由の回復と云ふことは容易なことでなく、それは多くの學者や實際家が各自に究めようとしてゐる所で、私共門外漢には正しい解決は困難であります、けれども兎に角今日の私有制度を滅ぼさねばならぬと云ふことだけは云ひ得ると思ひます。

この私有制度を滅ぼすに就いては、漸進的解放と、急進的革命の二つの方法があると思ひますが、漸進的にしろ、急進的にしろ、自由は與へられた處に攫得し得るものではなく、攫得する處に與へられるものであります。恩恵的に與へられる處に自由はなく、自ら攫得する處に眞の自由があるのであります。急進主義者にはこれはよく解つてゐるのでありますが、漸進主義者の間にはこれが解らず、往々温情主義だとか、協調主義だとか云つて、無意義な政策に骨を折る人があります。縦令漸進主義的方法を採用するにしても、温情的に文化を或は自由を與へようとするやうなことなく、自由を持たざる人が自己に目醒めて、進んで自由を攫得し得たいと頭を擡げて來た時に、その氣勢を看取して、十分に力を添へてやると云ふ方法を採ることが大切であると思ひます。

斯くして私有制度を滅ぼして後、初めて人類的な文化に到達し得るのであつて、農民文化と云ふものもつまり其の時に於て始めて建設されるのでありますから、今日農民文化を云々すると云ふことは當を得ざる云ひ分であらうと思ひます。（談話筆記）

（一九二三年六月、「文化生活」所載）

時評三つ

貞操蹂躙と貞操破棄

結婚生活が習俗的に、妻は無條件に夫に服從すべきものとせられ、又女自身もさう極めて居たのであるが、此の不滿に對する女性の無意識の自覺は、常に存在して居たのである。四十歳から五十歳位までの婦人達の話を聞くと、彼女達は、屹度一度はヒステリーにかゝつたと云うてゐる。その原因は大部分は夫に對する不滿、若しくは夫に關係の人々（例へば、姑、小姑等）の不法な壓迫に基因してゐる。しかも彼女達は、恰もヒヾの這入つた器を抱へる樣な氣持であきらめと忍從とで、辛うじて彼女達の生活を維持して來たのである。

最近に到つて婦人の自覺はやゝ鮮明となつて來た。彼女達は、その夫婦生活が表面的のものであつて、內面的には、夫婦生活の基調から甚だしく隔たつて居ることに自覺しはじめた。新聞紙上に大騷ぎされて居る貞操蹂躙よりも、もつと悲慘な暴行が彼女達の內面生活に於て、殆んど平氣で行はれて居ることを考へる時に、彼女達は此の結婚生活に對して、深刻な不滿を痛切に感ずるのである。然るに現時の社會樣式に於ては、婦人達に生活能力を與へて居ない。夫の手より離れることは、彼女達の餓死を意味するのである。彼女達は、彼等の力量と本能との餘りに甚だしい懸隔のために、極めて曖昧不徹底の地位に居るのである。卽ち生活の保證は夫に負はせ乍ら本能の滿足は他にこれを求むるの餘儀ない行動に出るのである。此は實に忌はしき、卑しむべき男女關係の破綻ではあるが、事の成り行きとしては、止むを得ない現象である。此の惡現象を矯正する唯一の方法は、婦人が、

その自覺と共に、生活能力の確立に努力することにある。婦人がこれまで進んで來れば、男子にも或る反省と覺醒とが必然的に起つて來て、玆にはじめて兩性關係の正しい調節が、今日よりも遙かに合理的になつて來るのである。さうでなければ、貞操蹂躙とか、貞操破棄の忌はしい現象は社會に絶えることはないのである。

最近婦人の讀書傾向

最近、婦人に讀書の傾向が際立つて旺盛になつたことは喜ぶべき現象である。米國の如きは「趣味を維持するのは婦人である」と言はれて居る位で、男子はたゞ、手から口にパンを運ぶ、それだけに精力の多分を費消し盡してゐて、趣味の維持を擧げて悉く婦人の手に委ねてゐる。劇の如きも、男子は常に婦人によつて、劇の筋書、觀照に就いての注意の如きを敎へられてゐる。

婦人の知識欲は、婦人の欲求のうちの一つの大なる欲求であつて、私達は最近著しく目立つて來た婦人の讀書の傾向を喜び、且つその伸長を希ふものであるが、現今の日本婦人が果して如何なる種類の讀書傾向にあるかを考察する時、遺憾にたへない事實を發見する。

例へば、現今の婦人に最も多く愛讀されてゐる各種婦人雜誌に就いて見るに、その內容極めて輕薄にして、たゞ暇つぶしの爲めにのみ讀むべき記事が滿載され、貧弱、空疎、見るに耐へない種類の記事が誌面の大部分を塞いで居る。此の事實から考へれば、私達は現今日本婦人の讀書に對する態度に可成りの不滿を感ずる。

婦人のみに限らないが、現代のヨーロッパの思想は、必ず一度は、自然主義といふ大きな潮流の洗禮を受けて來て居るので、現代世界に於ける新文化創造にあたつては、これが偉大なる基底となつて居る。實に現代の科學的設計を徹底せしめたものは、自然主義の思想であつたのである。

自然主義の主潮は現に日本にも存在し、嘗ても存在してゐたのであるが、日本がこの主潮を乘り越すことの、他のヨーロッパ諸國に比して餘りに急速であつたが爲めに、自然主義の思潮が却つて、もとのローマン主義や、センチメンタリズムに逆行した。此の傾向は婦人に於て特に著しく、自然主義を濾過した現代ヨーロッパの思想に正しき理解を缺如して居るのが殊更に目立つて見える。歐洲の唯物主義の思想はその根柢に於て常に精神的思想に潜在することを考察もせずに、只その裏面の流れのみを淺薄に受け入れて、男子はこれを物質主義に解し、婦人はこれを享樂主義と獨り極めにしてゐる。故に現時の讀書傾向が、この誤られたる時流に迎合して、極めて曖昧となり、自己を内省し、自らを築くことに全然空虚の傾向を示し、たゞ周圍の人々の見聞や、人の噂のみによつて、生の懈怠を慰むる傾向になつて居る。故に現代人殊に婦人は、現代の思潮をもつと靜かに正しく凝視めて、正しい理解の下に實人生の文化生活を確立してほしい。又婦人達の立脚地を安固に築きあげる主もなる要素としても、より正確なる知識を有つ必要があると思ふ。

暴力團體の暴力行使に就いて

現代の生活内部に、相反する思想が對する時、民衆意志はこれ等の思想の綜合調和をはかることに努力する、そしてその綜合調和が成り立ち得ない時に、一つの思想は他の思想を破壞撲滅する爲めに、あらゆる努力を費す。玆に、暴力團體の發生があり、その橫行がある。

現日本の生活内容を分野する相反する幾多の思想は、これを綜合調和することは、本質的に不可能であつて、其處に幾多の暴力團體が發生し、相鬪爭することは、蓋し必然の現象であらう。

然るに日本現下の暴力團體が、その目的に於て、その構成要素に於て、極めて不鮮明且つ曖昧であることは、

極めて遺憾である。抑〻かくの如き暴力團體の非行を刺戟したものは、或る時代の政府當局者である。政府が思想運動に全然無理解にして、これを危險視するの餘り暴力的力により防止せんとする思想力への誤算に基因して居る。卽ち政府は、彼等の所謂危險思想を鎭壓するに、團體力を必要とするの急なるの餘り、いかゞはしき要素を取りあげて、暗に暴力を是認して、社會不安を鎭めんとしたのである。此の暴力團體は、政府の政策的見地より成立するが故に、團體それ自身の意志は極めて不鮮明であり、その熱情は極めて不純である。已に團體に內部よりの目的なく、純正なる熱情なき結果は、社會安定の效果を收め得ず、却つて社會の不安を增大する惡結果を示して居る。此の惡結果に對する責任は確かに當時の政府當局者が負ふべきである。

已に一方に時代の社會相を謬見して起つた是等の暴力團體があり、それに對して他の思想團體が防備の必要あるは當然のことで、此の狀勢が、思想運動を驅つて、次第に社會の表面よりかくれて、密謀的形をとるに到らしめ、祕密的結社の傾向を大ならしむるに到つた。

此の事實は、日本の思想運動の爲めに悲しむ可きことであるが、此の狀態をもとにかへすことは、當分不可能のことである。

暴力對暴力の現象は、概念的には勿論惡いことであるに違ひないが、當時の社會の實狀より考察する時は、或は止むを得ないことであらう。然し、社會は暴力による暴力の爲めにする人々に支配されてはならない筈であるが、暴力の行使が已に止むを得ないことだとすれば、それは正しい內部の目的に立脚した、純正の熱情を有する團體によつて行使されることが、現在の惡しき狀態を廓淸する方法である。

（一九二三年六月、「女性改造」所載）

行き詰れるブルジョア

一

在來の倫理學では、自分自身を向上させることはとりもなほさず、又社會を向上させることであるとして、專一に自己修養の必要を說いて來た。英國の倫理學などではセルフ・ヘルプ卽ち「自助」と云ふことが隨分强く叫ばれて居つたものである。然し現代の此の混亂し錯雜した社會を考へて見るに、自己を向上させること或は又自己の革新が直にそのまゝ社會に反應して行くであらうか。

全く現代ほど、人類が自己を强く見つめて居る時代はあるまい。現代ほど、個人主義の盛んになつた時代はあるまい。多くの人間はたゞ自己を中心として、社會とは殆んど別々に生活を營まんとして居るのである。人々は如何に自己を社會に調和させせんが爲め、卽ちかく迄に遠くかけはなれてしまつた社會と自己の此の別々の生活の爲めに惱み續けて居ることだらう。

であるから、自己生活の革新を斷行し得た者は、たゞそれのみに止まらずもう一歩進んで、社會生活の革新に努力しなければならない。獨りよがり、所謂獨善主義では、その折角の革新が何の役にも立たないことになるのである。

二

純然たる私有財產制度の今日は、從つてブルジョア跋扈の時代である。生存の權利は萬人一樣に與へられて居るはずなのに、生活の安定といふことは恐ろしくその平衡を失つて居る。社會は不安であり頽廢しきつて居る。而して×××のどよめきがある。社會に幅をきかして居るブルジョアはいつも獨善主義をとつて來た。自分さへよければと云ふ感情が執拗に彼等の心を占領して居た。此の風潮は一般社會にも漲つて來た、否、漲つて居る。世の中の所謂修養などは矢張り此のブルジョアの生活にあてはまるやうに出來たもので、獨善主義から越えては行かなかつた。

それは例へば自己の行爲が絕對に社會に影響しないものであり、又「帝力我に何かあらん」と云はしめた支那太古の堯帝のやうな御代であつたなら獨善主義も或は可能かも知れない。が、かうした時代は遙かに遠く過ぎ去つてしまつて居る。故に若し世の中に精神修養といふものがあるとしたら、それはたゞ自己と社會の接觸面を凝視する、そこから營まれて行くべきものではないかと思ふ。

三

現代社會生活の最大缺陷は私有財產制度から發して居るものであるまいか。私有財產は所有本能の暴露である。動物的な所有本能は原始時代の社會から旣にその芽をふき、たうとう人類をして今日の如き悲慘な狀態に陷るの止むなきに至らしめた。

社會の一方には遊んで然も贅澤をして居る者があるし、又一方には働いても働いても、なほ日常の衣食住にすら事缺いて居る者のあるのは、凡て所有本能から芽ざした私有財產制の結果に外ならないのである。

現代の此の不合理な狀態から脫するには、たゞ何よりも先に、不合理の原因となつて居るところの私有財產を

放棄することである。ブルジョアの凡てが現在社會組織の缺陷に眼ざめて、彼等が所有する財産の全部を投げ出すことである。かくて社會から私有財産が取り去られた時、その社會は如何なる狀態になるであらうか。それに就いて、今二つの場合を考へることが出來る。一つはマルクスによつて說かれたやうに、凡ての財産を國家の所有に歸してしまふことである。而して、他のもう一つはクロポトキンが主張したやうに、無政府主義の社會を組織して、財産はその社會の共有物とすることにある。此の私有財産撤廢に際してとるべき二種の方法のうちで、その可否を論ずることはとにかく、此處まで來て、漸く社會は今の狀態から一步を進み得たと云ふものである。

四

クロポトキンやマルクス等の社會改造の理想が、日本にも何時か實現されるであらうかと云ふことは、只今のところ明言し難いことである。けれどもブルジョアの中に育つて來た私に、「現代に於てブルジョアは希望を持たない」と云ふことだけは云ひ得る。ブルジョアの前途は暗黑である。然しこれに反してプロレタリアには希望があり光明がある（彼等の前途にも亦理想がないかも知れない）。けれども、彼等は此の社會をどうにかしてその暗黑面を切りぬけて行きさへすれば、又何とかしさへすれば、いゝと云ふ希望を繫ぎ得るのである。だがブルジョアにはこれが出來ない。ブルジョアの前途には現狀維持かさもなければ自滅の外はないのである。

經濟的に全く行きつまつた此の現在の社會は、それでは誰の手によつて改革されるであらうか。私は勿論それはブルジョアではないと思ふ。又知識階級でもなければ勞働運動の指導者でもないに違ひない。社會の所謂最下級には汗みどろになつて息をもつけずに働いて居る純粹の勞働者がある。彼等の間から迸り出た眞の生活苦の叫

びこそ、最も厖大な力を持つて居るものではないかと考へられる。而して今後の社會に若し改革があるものとすれば、それはたゞ此の純粹の勞働者によるものではないであらうか。

五

若し社會に革命が起る場合、私達は同時に火事場泥坊のあることを勘定に入れておく必要がある。革命は一時社會を顚覆し攪亂してしまふであらう。が、その混沌に落ちた虛に乘じてどんな弊害が出て來るかも知れないと云ふことを覺悟して居なければならぬ。僅か二三の弊害が起つたからと云つて、慌てゝ又革命以前の社會に復活せしめようとするのは、餘りにも卑怯なやり方である。のみならず、一つの大きな理想を以て企てられた革命が裏切られるばかりか、革命に伴ふ此の弊害以上更に多大な因襲的な弊害を、永久に自滅の底迄も引きずつて行くことになるのである。

とにかく今後此の社會が如何やうに變化して行くかは、今のところ私には何とも云ふことが出來ない。が、然し行き詰りの狀態にあることだけは確實である、それが急激な革命によるか、或はよりよき方法をもつて漸次に改造されて行くものであるか、どちらも計り難い。

若しも人類の文化がもつと〳〵向上するものであつたら、縱令急激革命が起つたとしても、その革命の中から不純な分子を取り去つて、次第によりよき社會へと進ませて行くであらう。又これに反して、今の狀態が人類文化の最高の頂點であり、而して社會は退化しかけて居るものであつたら、如何なる方法をもつて、その革新向上に努力しても、その效は薄いであらう。

人類がもつと向上するものであるか、或は退化するものであるか、それは自然の思召しであつて、故意に人力

をもつてしたところで如何ともなし得ないものである。

六

社會は男女共存することによつて保たれて行くものである。が、此の社會生活を最も圓滿に發達させるには、女子又は男子は何をしなければならぬであらう。それに就いて、私は先づ第一番に、女自身が男子と同等の自由を獲得することにあると思ふ。自由は獲得するものであつて決して天降りするものではないのである。

今男子と女子との間には色々な方面に、様々の境界線を取り去らなければならない。在來の慣例であるとか、又アプリオリ等の言葉をふりかざして女子を監禁しようとすることは、それはたゞ女子の損害に止まらずして、直ちに男子の損害であるのだ。

現代文化はその大部分を男子の手によつて築き上げられたものであつたが、今後の社會に於ては女子も亦男子と同様に遠慮なく活動しなければならない。男子と女子の間にしつかりとした平均がとれてからこそ、文化生活はその意義を躍如させるものである。(談話筆記)

(一九二三年七月、「文化生活」所載)

〔附録〕雜誌の問に答へて

嘗てない多作をした年

私は過去八年間白樺誌上で感想や創作を發表して來ました。發表した數と量とは情けない程貧弱なものでありましたが、公衆の評壇からは全く無視され度外視されてゐました。それが、どういふ風の吹きまはしか、今年になつて、急に兎や角云はれ出しました。多分公衆の眼に觸れやすい色々な文藝雜誌が私の作物を買ふやうになつたからでせう。

私はある意味では隨分逼（せま）られるやうなはめになつて、今年の四月に新公論に「死とその前後」を發表してから私には嘗てない程の多作をしました。これといつて感想を書かしていたゞく程の事はありません。それは善惡共に作物が語つてゐると思ひます。唯私は自分の生活の改造が益〻緊逼して來てゐる事を感ずるのです。然し當分私はその心持だけに苦しんでゐねばなりますまい。然し時は來ます。必ず來ます。その時に私の作物はもつと讀者の心に喰ひ入る事が出來るのを私は知つてゐます。他人はそれを待つてゐないでも、私は自信を以て待つてゐます。

或る雜誌の編輯者は、私としては今が油の乘つた最中だから、油の切れない中にどし〳〵書かなくつてはいけないと云つてくれました。然し此位の油の乘り方では私は滿足しない積りです。

私の作物はどう考へても廣い需用を受け得べき性質のものではありません。來年あたりになつたら私の所謂評

判も下火になると思つてゐます。その代り少數の讀者は私を捨てない事を私は知つてゐます。私はその人達に向つて書きます。だから私はゆく／＼は「武郎著作集」のみで私のものは發表したいと思つてゐます。數を賣らなければならない商賣雜誌に迷惑をかけない爲めにはさうするのが一番いゝ事だと思つてゐますから。

（一九一七年十二月、「新潮」所載）

心が變化しつゝある

純粹に創作といふ形のものでは、本年は徳田、田山兩氏祝賀記念小說集に「卑怯者」といふ小說を一つ書いたゞけです。その外一つ長いものを企てましたが全然失敗に歸しました。「卑怯者」については別にいふべきものを持ちません。然し何か私の心の中が今變化して行きつゝあるやうに思ひます。本當に創作するやうな氣持が近い中に來ることですか來ないことですか、それすら自分にははつきりしてゐません。　（一九二〇年十二月、「新潮」所載）

僅かに二篇だけ

小說としては「自官舍」、戲曲としては「御柱」、この二篇があるだけです。これほどに自分の創作慾が退縮したことを恥づる、その外に申すやうなことはありません。但し胸の中のものが無くなつた譯ではないのですから執筆に氣乘りのする時機が近い未來に來ないものでもないと思つてはゐます。自分に絕望などは全くしてゐません。

（一九二一年十二月、「新潮」所載）

讀者と直接の關係

取り立てゝ申上げるやうなことはありません。世評は槪して惡かつたやうです。私の作品が評壇から遠ざかつて、讀者と直接の間係を結ぶやうな傾向に進みつゝあるのを私としては喜んでゐます。

（一九二二年十二月、「新潮」所載）

私の創作の實際

想の纒め方――創作の題材は有り餘る程あると思ふ。書く人さへ出來てゐれば、何處からでもそれを拾ふ事が出來る。想の纒め方は、まづ書かうとする事の大體を定めておいて、その人物の性格に從つて書いて行く。その性格の發展に從つて、場面は現はれて來る。私は多くの場合、かうして不用意に作を進める。

よく書ける時――夜がいゝ。これは夏冬に關係しない。時には鷄の聲を聞く頃まで書いてゐる。晝間ならば暗い光の射す時がいゝ。そして、外で書く。自分の家では周りの人が氣を揉んで、どの位書けたらう、最う皆書けたらうかと思つて哭れる、何時もぶら〳〵した長い時間がある。

書く速度――時には二三枚しか書けない。氣がのれば一晩に二三十枚も書ける。

文章に苦心する時――作中の人物なり、情景なりにすつかり入り込めない時最も苦心する。そんな時にはうつちやらかして置く、そして氣分がよくなるのを待つ。しかし、一度筆を下すと、大抵終ひまでは續く。

題の附け方――大抵書き上げた後、全體の感じを出し得るやうなものを附ける。私は餘り之に重きを置かない。

句讀點の打ち方――句讀點の切り方にも、假名遣にもまだ、私は迷はされてゐる。自分ではつきりした意見をもつてゐない。これと云つて特色もない。たゞ、普通の約束に從つてゐる。

（一九一七年十月、「文章俱樂部」所載）

鹿兒島の白い道

——夏の旅其の他の感想——

旅行した所では鹿兒島。其きび〳〵した暑さ、白い道、櫻島の遠望、夜八時過ぎからの涼風、南國的な生活の有様。旅行したい所では瑞西。高所の湖水、雪の山、新しい牛乳、素朴な男女及び子供。

（一九一八年八月、「新潮」所載）

輕薄な賣名漢

——ダンヌチヨ氏來朝の風聞に對して——

若し伊太利から飛行機で日本まで飛んで來るのが、今日の斯界の經驗上容易な事であるのなら、ダ氏は短い時間で出來る旅行を企てられたまでに過ぎないと思ひますし、非常に難事で生死を賭してかゝらねばならぬ程の企てゞあるのなら、ダ氏は自分の天分に對して何等の愼しみをも置いてゐない輕薄な賣名漢だと思ひます。

（一九一九年十月、「新潮」所載）

○

一人の男の一生に、若し滿足な婦人からの滿足な愛が得られなかつたら、他の點に於てその人が如何に幸運であらうとも、畢竟不運と云はなければならない。戀愛の成就を人生の輕い事實に過ぎないと見る人々は、ほんたうの生の要求を知らない人か、その要求を滿す力を何等かの點で持ち合はさない人の負け惜しみに過ぎないと云

つてもいゝだらう。

（一九二〇年九月、「中央文學」所載）

あつた方が好い

——月評是非の問題に就いて——

月評はあつた方が賑かでいゝと思ひます。たゞ、今のところ昔批評を書いた人——例へば和辻氏だとか阿部氏だとかゞ沈默してゐるのは寂しいやうに思はれます。

今の月評のなかでも、殊に廣津和郎氏のが面白いと思ひます。

（一九二二年一月、「新潮」所載）

ノーベル賞とタゴール

餘り輕佻な文壇の推賞と煽動とに反感を催してタゴールの作品及び氏に對する評論は一字も讀まずに今日まで過して來ました。こんな事が私の無知をjustifyする理由にならない位は知つてゐます。然しノーベル賞を得る前の氏が隱れ、得た後の氏が現はれると云ふやうな事實は確かに不愉快な事の一つです。私はもつと靜かな心でこの人を味識する日の來る事を待ち望むものゝ一人です。（發表時及びその誌名不明）

愛の圓味をもつたナターシヤ

——文藝作品中に現はれた私の最も好きな女性——

トルストイの「戰爭と平和」の中のナターシヤのやうな女が好きです。幾人かの男の手から男の手へ移つて行くのだが、しかもそれにも拘らず、ちつとも彼女の愛といふものは損はれてゐない。それは大概の女は男を對象物としてゐるに反して、ナターシヤは自分の愛を中心として、自分の愛をしつかりと自分の中に摑んでゐて、その愛に誘はれて來る男はみんな拒まずといつた風で、その代り自分から男が逃げ去らうとそれを一向氣にもしないといふ所に、一寸他の女に見られない面白味が彼女の中に見出される。それがいつまでも彼女の愛を損はず、圓味を持たせ、泉の如く生々と可愛らしく湛へさせてゐるのであらう。さうした彼女だからこそ一倍と男の心持を誘ひ、又讀者の私共にまでも、あゝした我儘な生活をしてるにも拘らず、それが彼女であれば惡るいことゝもまた、憎む心にもなれないのであらう。約婚の男が出征の間際に他の男と戀に落ちるなんて、これが他の女であつたら屹度私達は心から憎んだかも知れないが、それがナターシヤに於ては、寧ろ彼女のあどけなさに魅せられて了ふ。私はナターシヤのやうな女がほんたうに好きだ。（發表時及びその誌名不明）

私が女に生れたら

第一に自立自活の出來るだけの道を講じます。これは現在にあつて、私のやうに一人の平凡な女に取つて（私が女になつたとして）容易なことではないとしても、全く已むを得ないことです。それによつて、私は自分の存在を確保するばかりでなく、自由を確保したいと思ひます。これだけの準備が出來なければ男性には對さないつもりです。愛しないでゐられない男性が現はれたら、而してその男の人も私を愛してくれてゐたら、喜び勇んで結婚します。然し現在行はれてゐるやうな徑路を取つて結婚するのはいやです。結婚の問題は詮じつめたところ、當事者同志の問題ですから、私は自由結婚によらうと思ひます。自由結婚とは結婚によつて自由の取り去られる

結婚でないのは勿論です。かゝる結合によつて破綻が起らうとも、さうでない結婚によつて起り來たる破綻を彌縫してゐるよりはよいことだと信じます。(發表時及びその誌名不明)

文章を學ぶ青年に與ふる「座右銘」

自分で見て自分で考へろ。
落第點を取るとも誓つてうそを書くな。
他人の文體を取入れるな。
文章を作るな、文章を生め謹しみ愼しめ。

(一九一八年四月、「中央文學」所載)

○

自分といふものと不分不離な仕事を見出す事
而して謙遜な心持ちでその仕事に沒頭する事。

(一九一九年六月、「秀才文壇」所載)

教育者に與ふる言葉

師弟關係の民衆化を心懸く可き事、即ち師はえらいもの弟子はえらくないものといふ僻見を捨つべき事。

(一九二一年五月、「教育時論」所載)

作家の愛讀書と影響された書籍

愛讀の書　ホヰットマン
影響を享けた書　ホヰットマン、聖書、トルストイ。思想上で、クロポトキン、カーライル、ベルグソン。
（發表時及びその誌名不明）

○

一、聖書。二、トルストイ諸作。三、クロポトキン諸作。四、ホヰットマン詩集。五、ベルグソン「時間と意志の自由と」
一、よりは愛を
二、よりは人の心を
三、よりは正しき生活を
四、よりは性格の力を
五、よりはよき考へ方を學びました。（同上）

○

一、毎週金曜日を面會日ときめました。
一、お互ひに時間と仕事とを嚴守すること。（同上）

——第七卷了——

昭和四年五月十五日印刷
昭和四年六月五日發行

非賣品

監輯者　有島生馬
　　　　里見弴
發行者　佐藤義亮
印刷所　富士印刷株式會社
製本所　共同印刷製本部

發行所　東京市牛込區矢來町
（振替東京七九七七〇）
新潮社
電話牛込・八〇六番・八〇八番
八〇五番・八〇七番・八〇九番